









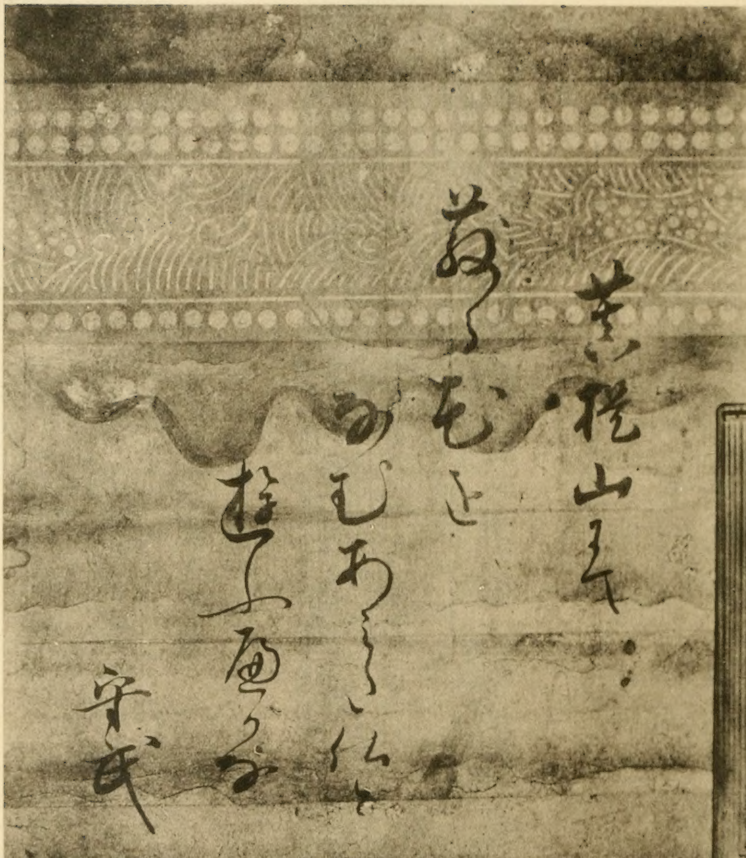


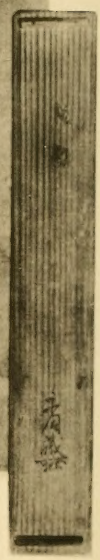
貞門俳諧集

装幀　津田青楓

守武眞蹟

（北田彦三郎氏藏）





宗因舊藏箱書

菩提山にて

散る花をなむあみた佛とゆふべかな

守武

宗鑑短册

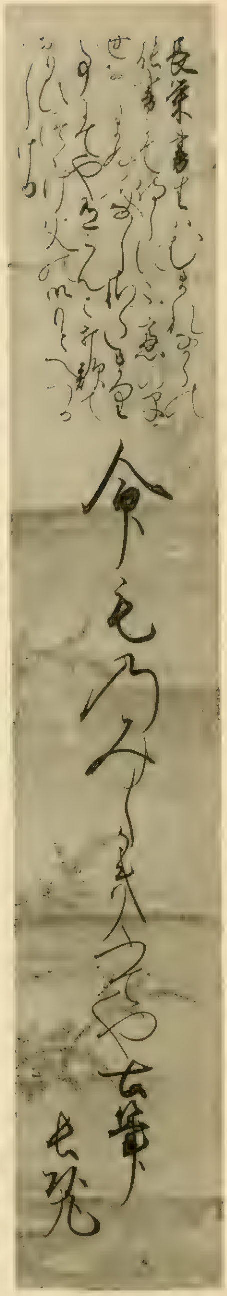
（武藤一郎氏藏）



思ふ人のふかさあさゝを匂ひもて
かたわきけらし梅の春風

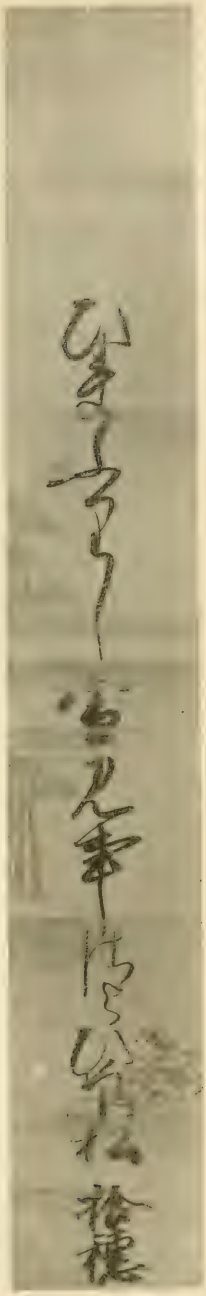
宗　鑑

貞徳短冊　（武藤一郎氏藏）



命毛のみじかきふでや土筆　長頭丸

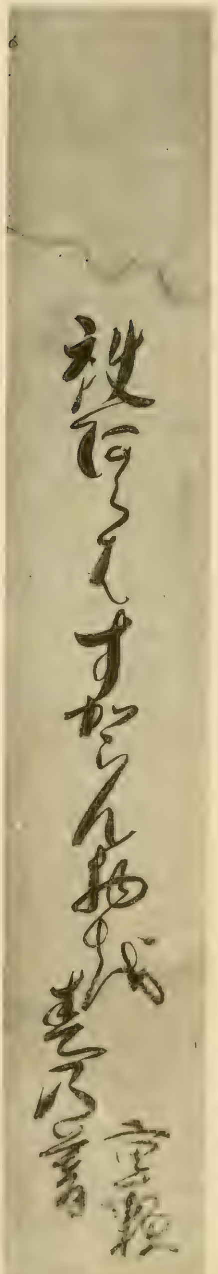
季吟短冊　（同　）



ひれふりし雪見事さよひめ小松　拾穗

重頼短册

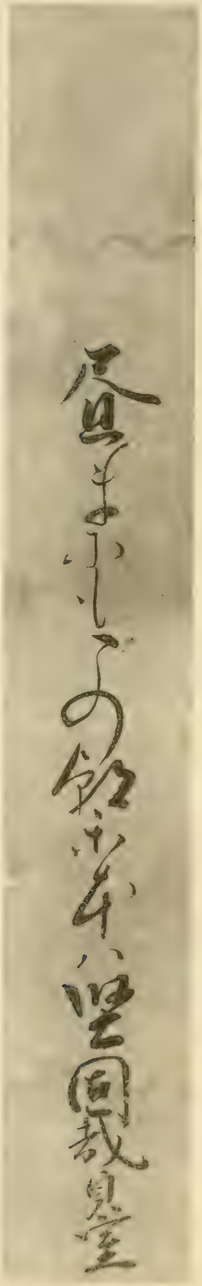
（武藤一郎氏藏）



袂あらばすがらん物を春の暮　　重頼

貞室短册

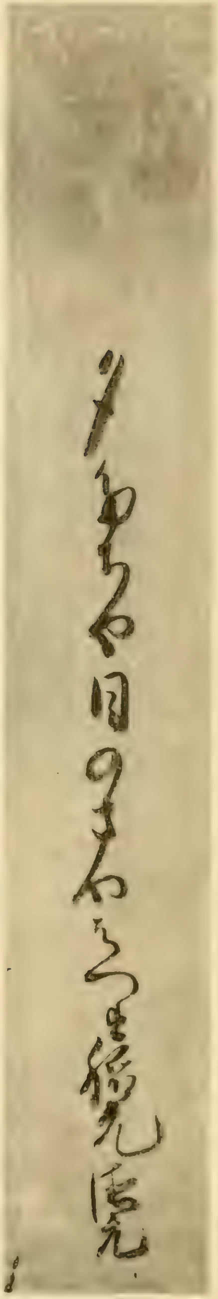
（同）



達まにもさの朝かほは堅固哉　　貞室

徳元短册

（武藤一郎氏藏）



夕たちや目のさやはつす稲光

徳元

高政短册

（同）



手箒にいさことゝはん肩の雪

高政

解　題

誹諧之連歌獨吟千句

慶安五年板　　横本一冊

古い連歌の一ト枝をたま〳〵新しい土に挿して見た。それが自然に若い芽を吹いて、すく〳〵伸びて、新俳諧の發生となつた。守武がこの『獨吟千句』に成功して俳諧の權輿となつたのは、それと同じような偶然の力であつた。伊勢の神官荒木田七家の一、薗田氏に生れた守武は、若く連歌に趣味を持つて、明暦四年の宗祇著「新筑波集」には兄守晨と共に入選してゐる。それ以後宗祇に、或は宗長に、連歌の合點を乞ひ、享祿三年、はじめて俳諧百韻を試作したが、時の人に對して感激をあたへる程のものではなかつた。重徳編の『誹諧獨吟集』に載するので其の全篇を知り得る。天文九年、かねての念願により、みづから籤を引き、その望む二の籤を得てよろこび、俳諧千句を試むる時も、もし一の籤であつたら連歌とするつもりであつたから、『獨吟千句』を以て守武が連歌に反抗して俳諧運動を起したと見る説は妥當でない。たゞ俳諧千句の式目の存在せざるため、宗祇の「三嶋千句」に追加二折あるに準據し、卷中のさし合ひ・去嫌を連歌のそれよりゆるめて、多少の按排をなしたのが、偶然俳諧式目の制定者とされる事になつたのである。その賦物の形を取つてゐるのを見ても、全然連歌の約束を無視したものでない事が明瞭である。賦物とは「何毛第三」とある何を「花よりも鼻にありけるにほひかな」の鼻に取つて、これを「鼻毛」とあしらふが如きをいふのである。本文は川西和露氏所藏の慶安板により、宇治山田市に居住する世木氏公氏の傳來せる守武自筆本に就いて對校して置いた

手寫本を以て校合し、自筆本との異同を本文の傍に註記したのである。

新撰犬筑波　大本一冊

連歌の席の後には人々の附けあぐむような難句が提出されて、互ひに機智を爭つてこれを附けこなす事が、だんだん流行して行つた。その難句の附合の巧みなものを抄錄して、連歌を筑波の道と稱するところから『新撰犬筑波』と題したものが本書である。撰者は晩年山崎の關戸院のほとりに閑居し、油筒を賣つて渡世したといはれる足利氏の浪人宗鑑といふのが通說である。『宗長手記』に一休の舊庵である薪の酬恩庵で越年のとき「田樂の墻嗆のつゐで誹諧たび〳〵に」とある句中に『犬筑波』の前句が尠からず見え、その會には宗鑑も一坐してゐるので、本文の俳諧を悉く宗鑑の作とするのは甚だしい誤解である。現に貞德の『淀川』にも「下手の所作なるを宗鑑爰に被レ入事如何がなれ共、定て共時代の權門の人の句なれば威におそれて入たるべし」といひ、又「撰者何とて引なをして入ざる」とあるのでその間の消息を知り得よう。その撰集の年に就いても通說は「宗祇十三回忌に」の發句より、永正十一年に假定してゐるが、これは酬恩庵の越年俳諧がそれより十年後の大永三年十二月であるによつて全く成立しない。柳亭種彥の『犬筑波異本』の考證に露沾公舊藏の同書に「行年七十五宗鑑在判」とあるので、いよ〳〵永正以後の撰である事がたしかめられる。但し宗鑑の歿年には天文十二年說と同二十二年說が兩立するので、享年の八十九から逆算しても正確な年代を定め難い。天文十二年說によれば享祿四年の撰、同二十二年說を取れば天文十八年、守武の『獨吟千句』と同時になる。孰れにしても大永以後の撰なる事は疑ひないであらう。本文は竹冷文庫所藏の古活字本、大・中・小の三書を借覽し、かつて校正して置いたものに據つたのである。

新増犬筑波　油糟・淀河

寛永廿年板　　横本二冊

歌人古典註釋家として知られた松永貞徳が、新興の誹諧文學に長頭丸としての技倆と、そして俳諧思想を披瀝した書である。『油糟』は宗鑑の『犬筑波』の前句を借りて、新しき趣向の立てやう及び其の取なし方を示した新附句を收め、『淀川』は『犬筑波』の附句に對し、批評と註解とを兼て、更に作法上より或は同意となり、用付となるを戒め、句中に「無言」を指摘し、一句の理と正體なきものを難じたので、前者は貞徳の創作篇、後者はその評論篇とも見る可き内容を備へてゐる。通說は『淀河』・『油糟』の前後にて兩書單行本の如く取扱ふが、板本の柱を見るに『油糟』にはたゞ「新」とのみあつて、しぶや紀州といふ俳人の懇望にて、誹諧式目の歌十首を添へ、その前に「正味をば山崎宗の拔句してつぐとならぬ油かすかな」の狂歌を以て題號を『あぶらかす』と呼ぶ可きを記した外に奥附なく、「淀川」には立標題に「新増犬筑波集淀川トモ云」とあり、柱に「新下」としてその下篇なる事をあきらかにし、「山崎のそばをとをりて行末は淀にいづれば、此本は淀川と名付侍」といふ跋、並に出板書肆の奥附を附してある。仍つて本集は『新増犬筑波』の外題にて兩書を合し、通說とは反對に『油糟』を前に置き『淀川』を後に配する事としたのである。内容の價値から評すれば『油糟』に現はれた貞德の附句は『犬筑波』の卑野なく、同じく俗趣味ながら表現の文學的に洗錬され、同一の前句に數十句の附句悉く變化ある點に讀者を惹附けるが、『淀河』に於て貞德の懷抱する俳諧思想、殊に貞門の俳諧を流行せしめた修辭法を簡潔に說いてある點が、俳諧の發達を見る上に、より多くの歷史的重要さを持つて居るが如く思はれる。兩書とも川西和露氏の藏本によつて校合したのである。

紅梅千句

明暦元年板　横本一冊

もし人あつて貞德と共の一門の俳諧をいたづらに緣語の梯子をかけて、言葉の葛藤のみによつて、俳諧の世界を展開する無内容な遊戲本位なるを難ずるならば、それを拒否するの不合理なるはいふまでもないが、初期・中期の單純なる附句――『油糟』の場合の如きを見て、藝術味の多分な連句は全く創造の力なきものと酷評するならば此の『紅梅千句』を例にあげて、一言辯解しても好いと思ふ。『紅梅千句』は貞德晩年の捌きで、大體の約束は後年出板した『御傘』に準じたもので、さし合ひ・さり嫌ひの頗る面倒な點もあらうが、既に機智のみの世界でなく、平面描寫もあれば、また感情の直接な表現もあつて、特にその中の或る附句間の交渉を吟味すれば、談林派よりは遙かに幽玄味をたゝへてゐる事に氣附くであらう。季吟の跋によると、貞德の年百才になん〳〵として「あさ糸のながき日ねもす、くれ竹の夜ふくるまで、身じろきだにしたまはず」一回百韻一卷として十度の會に、ねんごろなる捌きを以て成就した事が記してある。貞門の直統であつた立圃・重賴は互ひに勢力爭ひのため、その門下に落ち着いて居られず、師弟の間も疎隔した時代に、友仙の主催により、貞德師弟八人の打解けた氣分が、卷中を通じて或る統一を保つて表現されてゐる。『御傘』・『新增犬筑波』と共に貞門の三部書として、俳諧書史に重要な位置をしめて居るのも理由のない事でない。寶曆三年、貞門の系統を稱せる貞屋らに依つて、『後紅梅千句』が興行され、別に『紅梅千句』その者の覆刻も行はれたが、本集には明曆板の原本により、校合も出來るかぎり嚴密を期した。

鷹筑波

寛永十九年板　横本五冊

俳諧師といへば點業がその日常の仕事で、隨つて點料による收入を生活の主体としてゐた。「てんちんとろといふぞ可笑しき」の貞德の狂詠も思ひ合はされる。貞德の一生に批點を施した卷々は蓋し尠からぬ數にのぼるであらう。その中の秀逸を抄記し置き、部立を立てゝ編纂する考へであつたらしいが、老年に至つて懶きまゝ、西武に命じて清書板行させたのが此の『鷹筑波』である。寛永十五年五月の跋文に「みそとせのあなたより丸に見せ合られし」とあるのを遡れば慶長十一年になるので、貞德に師事した人々の作は大概見えてゐる。その中には太閤秀吉の發句、

春の日やひなかのしゆくの霞酒

及びその附合など廿八句をかゝげ、これは「忝も太閤御所の尊作也。丸が小耳にはさみ」置いたのを手錄した旨添書きしてあるが、利休や玄旨法印や貞德を指導した連歌師紹巴の作なども收めてある。外題は「鈴にふる物にはあらず鷹筑波とり見ん人よそらしばしすな」の狂歌で知らるゝ通り、『犬筑波』の犬より緣語を求めて鷹の字を配したのである。題簽は變体假名にて五冊孰れも別樣式の書風で、た・か・つ・く・ば・の五卷にかき分け、丹表紙の古雅な仕立である。本文は寛永板から直接覆刻したが、數枚の落丁を補ふため石田元季氏が藤井紫影博士の藏本から影寫したものを參照校訂した。大部の書なので行間を極度に詰めて組んだので、幾分見苦しいところもあらうが、限られた頁の內に按排するには、全く止むを得ない事として諒とせられたい。

玉海集　明暦二年板　小菊本　七冊

貞門の發句を類題したものは令德の『崑山集』と貞室の『玉海集』を以つて双璧とし、孰れも貞德の豫選句を主位に置いてあるので、正式は「崑山を前集とし、玉海を後集とせり」と姉妹篇の如く稱してゐる。『崑山集』は貞德の生前

慶安四年に開板されたが、『玉海集』は承應二年師の遷化したため挫折して、それより四年の後に貞室の補訂に依つて出板されたのである。全七卷の中、四卷は四季の發句でその各々の卷には分類目錄を擧げ、卷頭には「御せいじんの君に來てあふや千代の春　貞德」を掲ゐ、「先師合點」として貞德の選句を先づ載せ、次に「愚判」として貞室の選句を配し、作者の肩書に一々國別及び本姓を記す如き煩雜な編輯法を取つてゐる。二卷は付句を上下に分け、同じく先師點と愚判の區別をなし、發句の作者ならざる新規の名も出てゐる。最後の一卷は作者名寄と句數を錄したもので、作者名を國別に記し、その下に發句・付句の數を書き入れてある。作者六百五十八人、發句數は貳千六百廿餘句、付句數は五百八十餘句に達して、尨然たる大部冊をなして居る。發句の着想といひ、その緣語の取り方といひ、同一の手法を反覆するのみで全く單調にして、これを讀了するには大なる忍耐力を要する代りに、貞門の發句の特色と傾向は『玉海集』一部によつて確實に把握し得るであらう。『鷹筑波』と同然にぎり〳〵に詰めて見たが百三十頁以上に達したので、寛文七年貞室の續刊した『玉海集追加』七冊も現存するが、迚も本書に收容する望みがなかつた。貞門の高弟立圃・重賴は師門を勘當されたので一句も載つて居ない。重賴と論爭した正式に序を托したのも裏面に相當の事情があつたことであらう。

山之井　慶安九年板　横本五冊

俳諧の作法上連歌よりの傳統的約束を永久に負擔したものは、その形式と季題に關する二條件とである。特に發句は季感に作者の主觀の集注さるゝ說の有無によらず、季題を逸する事を決してゆるさない事が、一種の信仰となつて俳人間に守られて來たのであつた。師傳の繼承を唯一のものとしてゐた貞門の徒が、季題の解說書を要求し、それを座右

必携の書としたのは當然過る事實であつた。古典の註釋家として貞德を淩いだ北村季吟が、『山之井』を編纂して季題に對する正しき解釋を與へたのは實に好適な任務であつたと云はねばならない。俳諧に取扱はれる季題の重なるものを四季に大別し、季毎に重要な題を標準に、その異稱、類似の題等を下記し、更にその季題の内容を詳しく解說して、連句の附け方にそれを利用するに就いての心得を述べ、發句の作例を列記してあるが、無署名の作は季吟の句に限らず、人口に膾炙するものをも採つて居るので注意を要する。全五卷の中の四卷を季題の解釋にあてゝ、別に一卷は季吟が正月より十二月に至る一年の發句を、その月々の日附にて錄し、「年中日々之發句」の立みだしを置いてある。跋で見ると貞德より促されて發表する事とし、その添削を受けたもので季吟發句集と看做してよい體裁をなしてゐる。『山之井』の開板後、季吟はその增補を志して『增山井』二卷の改訂板を出し、寛文七年には諸家の發句・付句五千三十五句を收めた『續山井』七冊を、その子湖春に命じて編輯開板してゐる。本集には『山之井』のみを收めてその他の二書は全然これを省く事とした。

誹諧初學抄

寛永十八年板　　横本一冊

勅撰の連歌式目に對して、一私人がみだりに俳諧の新式目を立てるのは、あの時代として憚られた事は無理でない。漢和の連歌に準じて默契的に約束が行はれたので、守武を式目の制定者とするのも事實上よりの推定であつて、守武にそんな式目の解說書がある筈はない。『初學抄』の著者德元が「むさしあぶみさすがにかけて頼み奉る君命」によつて、俳諧作法の一般を說明した本書にも、「式目は終に侍らぬといへば」と主命を辭退したが、遂に拒みかねて「其趣ばかり」を記述したと稱してゐる。德元は齋藤氏、岐阜の織田家に仕へたが、石田に黨して關ヶ原にやぶれて後、

江戸に來つて浪々の身を凌ぐため剃髮して俳諧師となつたのである。貞門とは別派ながら、貞德の晩年その添削を乞ふたのは、貞門の勢力を背景としなければ、俳諧師としての渡世に困難な事情があつたからであらう。『初學抄』は江戸で開板された俳書の嚆矢と稱されてゐる。俳諧に五つの德がある事をたゝへ、前句の言葉にすがり、事件にたよる素朴な附け方より進んで、こゝろ附、すなはち前句の意味によつて附句の趣向を案ず可きを說き、誹言として俗語を重要視するとしても、卑しい傾城ことばなどを取り入れて、新奇を事とするのを陋としてゐる。「四季の詞」に季題を解釋し、「戀の詞」に伊勢、源氏の情話の女主人公のこと、支那の妖婦傳の如きに涉つてゐる以外「好色のおとこ」の項目に『竹取物語』の內容を詳述して、蛇足の觀をなしてゐるのが、それが却つてその時代の俳人のよろこぶ處ともなつたであらう。

俳諧之註

寬永十九年板　大本一冊

著者腐俳子は松江重賴の別號である。その銳角的な才氣のため貞門作者の間に不和をかもし、貞門の別働派として談林への過渡期に新らしい流行体を以つて、世間的人氣を背負つてゐた。本書はその母妙喜尼の廿五回忌に獨吟百韵を手向けた際、初學の人より句每の註解を望まれて起稿したので、具體的に、附け方に苦心せるところ、或は窮餘の策として無理挊へに附けたるところを告白してあつて、本文よりは註解の方に多くの興味と價値とを持つてゐる。前句の緣語にすがつて後句を開展する貞門の作法に據つてゐるが、「俳諧は取成し付を宗とすべし。連哥のいきは本意ならざる也」とあるので、當時前句を巧みに取なして附句の技倆を見せようとした傾向が判然する。追善の俳諧ではあり、また重賴の中期の作なので、後年の如く奇拔の附け方をのみ覘はず、概して素直に、地味に、おだやかに一卷を運ん

で居るし、その註解も粗雜でないから理解し易い。本文は遠藤蓼花氏の舊藏本により、猶、穎山梓月氏の藏書を借覽して一通り對照したが、校正を急いだので、思はざる手落ちあらん事をおそれてゐる。

歌仙そろへ　寛文六年板　横本一冊

歌仙式の俳諧は連句の一樣式であつて、三十六歌仙の名を句毎に詠入れて一卷としたものから起つて、遂には歌仙の名を省略してたゞ三十六句でさへあればよいとされ、百韵よりは時間を要せずして運びも早く、制禁もまた寛大なため、歌仙即連句の如く思はれる事になつた。撰者山岡元隣は季吟の門人で、序文にその略解を試み、裏の八句目を月秋の出所とし、名殘の裏に月あつても苦しからずといふ說は、近代の歌仙式とは相違して、その源流に近い約束である事を思はせる。維舟・宗因・季吟のごとき別傾向に進む可き作者が、同一の調子を揃へてゐるのなども歷史的に見て興味のない事はない。元隣の或は鳥を、或は蟲を、或は獸を『古今集』の物の名の体にて、三十六句中に詠み込んでゐるのは、遊戯に過ぎないが作者の苦心は充分に察してよい。「日本國盡俳諧」も頗る骨の折れたもので、「是より異國の部」にチラダ・ルスンもめづらしく、エゾとマツマへを別箇の國に扱ひ、しかもそれが異國の一つに擧げられてゐるのは可笑しい。

惣本寺俳諧中庸姿　延寶六年板　中本一冊

大阪に吹き起つた談林の旋風は京・江戸に飛んで、群小の俳人を恐怖させ、多くの改宗者を出したが、大阪には阿蘭陀西鶴があつて外題學者の惟中とこもごも荒れまはり、京には半傳連社の高政が西鶴・惟中とは別箇の行動を取つ

て、いよ〳〵談林俳諧を吹き煽つてゐた。高政の百韻一卷の外、後に桃靑の新風に呼應した春澄もその帷幄の一人として、遠くは尾花澤の淸風までが高政好みの獨吟を詠じてゐるが、その悉くが擧句に珍重の二字を詠み入れ、「惣而擧句珍重の春」などゝ涼しさうな顏を撫でゝゐる。高政は菅野谷氏、西鶴の大矢數の敵手紀子の『大矢數』千八百韻の後ろ楯をして、後年西鶴に睨まれたが、當時惣本寺を構へて大阪方に對抗的に運動したのも、西鶴等とそりの合はなかつた結果であらう。『ふたつ盃』に「珍重〳〵珍重〳〵の」擧句に「春」の季なきを難じたので、「新刊して春といふ字を後に入れたるとなん」とあるから、本集の底本としたものはその「春」の字を添へた再刻本であるらしいが、本文には大差あるまい。

誹諧破邪顯正

延寶七年板　中本　一冊

高政の半傳連社の跋扈を見て、貞門系統の隨流が第一に扼腕して、彼の著『中庸姿』を難詰した。隨流は中島氏、西武の一派で、京に松月庵を構へてゐたが、『破邪顯正』を著作して高政の獨吟を一句〳〵にこづき廻し、骨に徹するやうな沈痛な批言を以て、さん〴〵にこき下してゐるが、感情一偏の漫罵に過ぎないと思はるゝ個所もあつて、論理的な記述ではない。田舍出の俳人が新在家のあたりに小宿を取り、二三の俳諧仲間と談林派の棚下しから『中庸姿』を話題に持ち出し、宗因が高政のために「末茂れ守武流の惣本寺」の放埒な云ひ捨を咎めて、獨吟の非難に入る書き振りで因循な貞門俳人として覇氣もあり、小手先きも利いてゐる才人であつたらしい。「いまだ天命のつきぬ先に惣本寺を打破り、誹檀林を燒捨、天道に降參せよ」などゝ、きび〳〵してよく筆も廻つてゐる。高政の附句「丙午晝のちぎりも絕ぬべし」に對し「丙午のをんな、夫をかむものにあらず、諸白髮に成迄そひ行人多し」とあるのは、丙午の妄

說の行はれて、一方にはその迷信を打破しようとする者もあつた當時の民間風俗が、その中に現はれてゐて甚だ面白く讀まれる。

誹諧破邪顯正返答　延寶八年板　中本一冊

高政は怒つて隨流に向つて喰つてかゝる可きで、此の喧嘩は大阪の惟中が買つて出て一本槍を入れる事になつた。その返答は師宗因を口ぎたなく罵られたのを辯解するためで、高政に對しては隨流の難詰を道理ある事として、より以上の非難を浴せてゐる。惟中は大阪の人、談林中の衒學者であるが、高政には何かふくむ處があつたらしく、その惣本寺の額を打つた不遜をしきりに責め立てゝ、宗因の連哥の老巧者であり、「是ほど俳諧盛んなれど」賣名的に「一卷のものを開板せず」、人格の高潔なる點をほめ上げ、松島の法心坊の眼に一丁字なくして入宋し、佛鑑の許に九年面壁の苦行を積めること、宗因を林和靖の氣象に比せる等、外顯學者らしき學問癖をその論中に閃めかしてゐる。最後に惟中自身の獨吟一卷を添へてあるが、高政のそれに劣らざる異風異体の作である。

誹諧賴政　延寶八年板　中本一冊

互ひにあら探しや、あげ足を取つてばかりゐたのでは、論爭にもあき〳〵して來る。何かな一ト趣向をと案じ出したものが此の『賴政』である。全篇の脚色は謠曲の『賴政』と同一で、ワキ詞、道行より節付のごま點まで、そつくり其のまゝ取つてある。喧嘩もかうなれば藝術的の色彩を加へて來る。作者は明記してないが梅翁門人の能文家であらう。返答の一、『熊坂』は未見の書なので明瞭には知り難いが、貞門系統から出た反駁書であらう。『賴政』の原本

は川西和露氏の所藏で、活字に飜刻するには、複雜なごま點を正確に施し難いため、氏の許諾を得て全文を凸版として原文の味ひを保存する事としたのである。謠曲家の說によると、節付は全く觀世流で、しかも此の節通り實際に謳謠し得るさうである。蓋し俳書中の珍本で容易に接手されない一つであらう。

ふたつ盃　　延寶八年板　　中本一冊

局外者から見れば血眼になつての喧嘩ほど面白い見ものはなからう。そこで奇拔な趣向を考へて兩者を茶化しにかゝつたのが『ふたつ盃』である。難陳よりはむしろ記述の体裁の新奇を覘ふ事になつて、かうした乍恐言上の如き訴狀の形式を案出したのである。流隨寺方から高政の不埒を個條書きにして、邪俳をすゝめるの罪や大神宮を紙屑買にたとへたる不敬事件などを持ち出し、その訴狀の裁決によつて「非简や庄兵衛まで難レ有奉レ存候」は全く茶番である。その返答書には又惣本寺の號は世間よりのいひならはし、帋屑買は衆生濟度の方便であるなどゝ、理窟をこねさせて、高政庵よりさし出した風に書き卸してある。高政の獨吟に對する批評は貞門・談林兩派のいづれにも偏頗の見を寄せず、公平な態度で論じてゐるが、最後に兩派の和解をすゝめて「さらば二つ盃目出たひ〳〵、連座のめん〳〵一盃お過シ被成よ」で落ちを取つてゐる。

誹諧さるとりもち　　延寶八年板　　中本一冊

高政は沈默して答へないのに、惟中のおせつかいな憎まれ口を含んで、隨流の方では『破邪顯正返答』の附錄に添へた惟中の獨吟に、新しい寄手をさし向けて、『中庸姿』同樣な一句〳〵の攻擊をはじめた。惟中の衒學癖に對して、

その先手を打つ手段として、こと〳〵しい支那流の故事熟語を引用し、惟中の用字法の疎忽で、その本義に徹せざるを難じたので、附合の巧拙よりは此の方の非難が彼に取つて、急所を突いたつもりであつたらう『さるとりもち』の外題は獵師が猿群を見て、黐をその身に塗るまねをして、迂愚な猿のそれを眞似ね、もちのために黏されて自由をうしなつたところを、獵師の生捕にした『華嚴經』の譬喩譚に依つて命名したのである。原本は藤井紫影博士の所藏であつて、題箋も表紙も完全して、あだかも刷下しの新本に接するが如き美本である。筆者の隨有軒木端坊は隨流の弟子らしいが、文章は要所〳〵を押へて巧みに書けてゐる。

俳諧綾卷　延寶八年板　中本一冊

爭論に直接の關係はないが、談林風にはあまり快からざる貞門の一老俳が、匿名にて隨流・惟中の兩說に依怙するところなく、一通り兩說を充分吟味した上で、公平な裁決を與へようとして著作したのであるらしい。『破邪顯正』幷に『返答』の本文を引いて、別項に評判として、兩說の當否を檢して、冷靜な判斷を下してゐるが、邪俳々々と口癖のように談林派を壓へて、やゝもすればその反感を買ふところもあつて、妥當な見解を持したものとはいはれない。けれど評者はあくまで嚴正中立の態度を取るつもりで、高政のごとき無法の云ひ捨を外道として「それに批言してそしる人又外道也」と兩成敗の捌きを與へてゐる。『綾卷』の外題は「扨も打たり〳〵、當風邪俳に批言をうち、其に又返答をうつ。今又評判して非難をうつ、三つを互に打たれば是綾卷とや申さん」とあるので領かれるであらう。

此の貞門・談林の論爭書には重頼の筆といふ『熊坂』及び『源氏供養』『あつかひ草』『行司板』の數書が出板されたが、不幸にしていまだ偶目の折がないので、論爭書全部を網羅するのは後日を期する事として、以上諸書

の覆刻を許された諸家の好意を感謝したい。因みに貞徳の『御傘』立圃の『はなひ草』は收容の餘地がないので見合せ、重頼の『小夜中山』は原本の第四卷が二冊重複し卷數の不揃ゐ發見したゝめ、『俳諧之註』を以てこれに換へたのである。（勝峰晋風）

日本俳書大系 第六巻 貞門俳諧集 目次

筆蹟

守武——色紙　宗鑑・貞徳・季吟・重頼・貞室・徳元・高政——短冊

誹諧之連歌 獨吟千句

守武

誹諧之連歌獨吟千句

守武

第一

とひ梅やかろ〱しくも神の春
われも〱のからすうくひす
のとかなる風ふくろうに山見えて
めもとすさまし月のこるかけ
あさかほの花のしけくやしほるらん
これてうほう(重寶)の松のつゆけさ
むらさめの跡につなけるむま(馬)のつの(角)
かたつふりかと夕くれのそら
なにやらんふみつぶしたるおとはして
くいつくほとにおもほゆるみち 初案(くちこ)
こすゑよりきてこそほゆれ犬櫻 初案(ほえもやせまし)
さるまなこにて花をみるころ
さほ(佐保)ひめやあはれうち出さけふらん
人はさら〱かすかのゝはる
さゝらをやわかむらさきのすり衣
そてうちしほれとくはしようきやう
ゆふ時雨おやかう〱のくもゐ(雲井)にて
みねのあらしのゑんごふくこゑ
たきのいとふんこのをもやたえ〱に 初案(ふんからのたの)
いかにふたつのこゝろほそかる
こぞ(去年)うみし子やふる里にのこるらん
七夜といふもいまのことなり
五日より六日になるはほともなし
かものけいはにそてはぬれけり
しやうきさすのゝみや人に雨ふりて
をしてふく(吹)なりもりのこがらし
下はちるなりはひらくやなかむらん
しら〱しくそよそにしらるゝ
くろちくの筆にてかける文もうし
うのけほとたにこゝろありてよ
かゝり火にいつ見えらるゝよはならて

おくびようさうなみね(峯)のたいしやう
しらはたをふるいたてられなびけられ
雪にせかきはいましはしまて
せちふんやてらにもものをいはふらん
かはらのおに(鬼)にはそとへとひやうち
まめおとこうちなかめつゝこゑ〳〵に
十三夜とや月をいふらん
よめいりのそらふく風に霧はれて
しかのねちかきつゝらくしはこ
奉公のひまもあれかし秋のやま
女はう(房)たちをとはのこひつか
しのふるや花のみやこにはけぬらん
かはさくら戸にそてなぬらしそ
春さめのふれは筆さへかさ(笠)をきて
しらさぎ(鷺)いかにさひしからまし
にほへともたれ(誰)かくとやなかるらん
はなさへまれになれるこのころ 宮頭(畠さへまれに)
のそかるゝともありしをいのちにて
つかれはしすな山かけのいほ
ひけ僧とくじらはいつくかはるらん
とにもかくにもあふらなりけり
すへるなといひたにあへすすへりきて
人なとさのみふじやうなるらん
ちぎり(契)しを物にたとへはことしたけ
こと〳〵しかるなつの夕くれ
口ほんにほとゝきすなくこゑ(聲)はして
たうのみかど(門)とやくゐななるらん
やうきひのほゝほと〳〵とうちたゝき
あさねをおこすほうらひのしま
くすりにていたつらものをなをさはや
あさましくこそとくもかさなれ
初案(人はたゞ)
人は猶ゆめまほろしにつゐすゝき
いしの火にてそたゝあふるへき
うかれつゝすゞり(硯)水にやぬらすらん
くはいしもいらすものおもふくれ
きみこすはひとりやこよひふす(賦)くたり

ならざさりけることのしようしさ
けふの日もやう〳〵なれやいかゝせん
八つは七つのみちのやすらひ
はしみれは三川のさはにかすたらて
ふたむら山もあはれたりけり
くれはとりやのいふけとやおもふらん
宮この雨にすゝまさるのみ
ものゝふのおとは(音羽)のかたにたちよりて
くそくをみれはたきのしらいと
月となみこゝをはれとや夕あらし
お花かもとはおもなおもはゆ
うつらなとゝを山鳥にかはるらん
ぬかれやするの野へのかたらひ
けふにあふ子日のまつけかすかにて
きらゝとみゆる春のゆふくれ
かりかねや(雁金やあつきを)あつきをさしてかへるらん
はけたるたち(太刀)のつはめなくころ
あをやきのいときまきてもうちわらい

かく〳〵なれや道のへのすゐ
たれとなく地藏をとなへたひ(旅)たちて
ほそなかきこそあはれなりけれ
ほの〳〵と見しよりこひをしもし(文字)にて
め(目)のわつらひはことのはもなし
とを鴫のかいさうとてやな(途)くるらん
松のはこしにしやうしするころ
夕つくひ百日はかりうつろひて
にか〳〵しくもさひしかりけり
しはの庵なとかきはたをのみつらん
ひえなんともしづはしらすよ
をたまき(卷)をあふりては又くりかへし
はらのいたきもやすきはた物
きりはたり長命丸やあはすらん
ひやうしをうちて見るはむらさき

猫何　第二

あをやきのまゆかくきしのひたいかな

　こほりうちとけよするたしなみ
水鳥のけさせちことにうかひきて
　みゝにもいらぬうくひすのこゑ
大なる(大きなる)春のかういいかゝせん
　こかたなぞとてあさくおもふな
いかなりし日もうちをかすつかはれて
　引出ものもやほのかならまし
むこいり(入)のみちのほとりの花すゝき
　とくりをもたせ秋風そふく
月かけはたか(誰)こものめをゝくるらん
　なのりをしてもかとなたてそ
あさもよひ木の丸殿のまろ〳〵と
　たち花なりぬちきりもやせん
いとけなき(初案(いとけなけ))人のかほこそまもらるれ
　ひたいにゆふはちはやふるかみ
あまりにもおきなの爲ほしまへゝきて
　うしろを見ればさびわたりけり
とぎもせぬやりをやとものかつくらん
　あふらはなきか山さくらかり
しろ〳〵とには烏おほき花にきて
　けあはせよとておもひぬる春
かすみつゝかけるさうし(双紙)やゆかむらん
　人しれさらは名をもなかさし
ひつこめと川風さむみ日は暮て
　つきん大きに千とりなくこゑ
雪たまりかきなてかきやはらふらん
　けつりはすとも爪ななきりそ
ほともなくけふはひつしのひのきいた
　こくうさうにはまけもこもれり
くもんちやまへかんなにてくりぬらん
　あふなき事もしらぬみちなり
おさないやかみ(髪)かたかれとたむけ(手向)まし
　はいかゝりてはうたをよみけり
ふちの花さけるは定家かつらにて
　西行さくらうつろへるころ
さもあらはあらなん春の十五日

くるはせにけるころは正月
みとりこやもちいもおやもあまからん
　大きなりけりちいさかりけり
ふしのねはとうちんかうをふもとにて
　おもしろくたゝこゝろほそかれ
けん物にみなのちの世やねかふらん
　なむあみかさ(笠)をきぬ人もなし
しのふにはおもてもさらにむけたれや(眞讀(むけされや))
　たゝみもかなのむかしなりけり
一でう(條)も見えぬはふるきみやこにて(初案(ふるきむかしにて))
　下からかみへかこつみち(道)のへ
しう殿のねやすほとをや秋の暮
　しくれてくるそ露かたまるそ
あり明の月はいかにもひら(くカ)くして
　かうやひしりのきたるかさゝき
はしわたるなりはしほなく打なかめ
　花さく山にのとはかはかし
みよしのゝちやのむのかりゝかへるらん
　すきのまなれと春のふる里
こひ草はみえすなにやらむらくに
　おもひきれともきられさりけり
なみたにはかたな(刀)のはまてこほれきて
　いたいけなるはおそろしきころ
ひめ(姫)ゆりのなとおに(鬼)ゆりになりぬらん
　には(庭)こそあらめつみなつくりそ
古てらは何のわけなくうちみえて
　つゝみはあれとしらぬ大小
さるかくはいつをつこもとおもふらん
　まくりをなかめこよみをはみす
さつしよ(雜書)はこ(箱)くすりはこ共なりはてゝ
　やまとにはあらぬらう(老)そうのみち
たうのはとのつえをつきてや通らん
　雨くらくとさ月月おち
せい(西)らうのうち(内そこカ)そことなくすゝみきて
　ものくるひこそあまた見えぬれ
百まんやすみた川らをわたるらん

　くろくもあらぬ山うはのいろ
口ひるにもとより袖はあかくして
　あつきかゆ(かい)をやうちこほすらん
霜月の廿四日とて風をあらみ
　たうこ日にも雪はふりけり
さむ(寒)けれは物しりかほのたひ(旅)ならて
　けふのみちやはむな(むね)そりなまし
あすか川ふちはせむしの夕わたり
　ふまんとおもふかはつなくこゐ
山ふきの花そめ衣かきあけて
　もゝさくころはもゝも見えつゝ
せいわうほ(西王母)いかはかりかはかゆからん
　ゆをもあひさる秋はきにけり
三か月もたらいもわるゝ夕にて
　ひしやもんたうは露のよもぎふ
花さかりきのふかけふはきり／＼す
　ときうつる(時)なりいかほともなけ
やことなきすかたとてうちかたふきて
　ひとりをうなのうた(哥)をよむこゑ
山さとやさひしかるらん中つかさ
　しつまりたまへみねの松かせ
花にいま月と年とか出あひて
　かすみのうちはさけのこゑひなり
一度もぬるむ水なみのませはや
　二みのうらをかへるくちなわ
くひ玉をまきゐの松やのこるらん
　あられうちちりしゆしうする比

何毛　第三

花よりも鼻にありけるにほひかな
　月はおほろにふくるいのしゝ
春の夜のゆめやさなからうしならん
　けさのあさけはきにかゝるなり
はしいた(板)にいたかねなれはかさなりて
　こゝろのまゝのすゝめならすや
十こくやさけ(酒)をはたちものこすらん

かすは五さうをやうしやう（養性）のため
　まへは四つうしろはひとつやくをみよ
なたのしほやのしやく八のあな
　あしかきにかゝるうり（瓜）さねほのみえて
すゝろにはらのとくとしれかし
　我おもふ人や何をもあかさらん
山のちやのこようみのさかなよ
　はまくりの秋はこすゑになるをみて
したかと月にさらいたすくれ　宸翰（さしいたす）
　ひやゝかに何をのまんもいさしらす　初案（何をのまんとおもふらん）
ころもかへしてくすりせんしよ
　春すきて夏めにけさやなりぬらん
たゝれにけりなうの花のかけ
　玉川やすりこすらるゝなかれにて　初案（すりこす日にもみたれきて）
たかのゝおくはなをかうやすみ
　いつかさてそのあかつきの白からん
あらくとこそをくりかねぬれ
　一筆に御こひ（戀）しやとかきすてゝ
ひなの長ちにその若こたち
　手ならひはなと天さかる物ならん
あかりなんとやあかりなんとや
　はりをにくり事するは山の影　原註（くるかとイ）
にきりこふしはうき大はんにや
　なこよふに六百貫やまけぬらん
千のかすさへあれはありけり　初案（あれはあれけり）
　いねかてのよ半のせうふう寒く＼／て
し（皺）はつくれともかゝまりそする
　茶ひようにはとうはか竹やなりぬらん
花の會とてつくすからもの
　さくらさくやとはさんしようこしようにて
春よりこふをなかめさらめや
　帯をいまとかん事（從）こそうれしけれ
かきたえのちは中もよきころ
　一もんにひとりもかゆきかたはなし
かさのなをるは平家なりけり
　おさないになはらこかうやのあすらん

ねよといへともねすそしつはら
あはれ(哀)にもまくら(枕)のさきはちよつととて
きほうしまても夢のうきはし
あちきなやつれていつくになかるらん
風もなきたりしかとをれなみ
いんきんも舟のうちにはむようにて
たひ人はたゝうたいなりけり
みやこをはいさしら雲のくたり月
やかてまいらん秋かせそふく
佛をはつくりもあへす露見えて
す(墨)みそめころもすそはいかにそ
寺よりも馬をかへとやつけ(告)ぬらん
人は何とておあししやうくわん
ちいさくてうすくてけつくあなあきて
ほめところなくなるやそのまゝ
のうをたゝすへきもあしのたゝは社
とうろのおとゝゑひすなりけり
しほかまのさくらたいをやわりならん

はたらくほとの花のめいほく
かすめともしようんしらるゝ道のへに
おもてのきすもつかぬたひ人
山たちのほうつきやりはさひはてゝ
いとゝみしかくおもひあこかれ
かよひちやなか〳〵しくもにほふらん
たちはなてらもかわち(河内)なりけり
正月のかうしくりけのいこま(伊駒)山
ふもとのさとへせちすゆるころ
へいしをは野への小てふにつゝませて
ゆめ〳〵あたにあらししやうくはん
月みてやときはのさとへかゝるらん
よしとも殿ににたる(似)秋かせ
やみ〳〵とうたれにけるをきぬたにて
おそろしきには何かこらえん
むくひこそいかにもいたき物ならめ
めくりもあへすはやはちくなり
いとけなき人はくるま(車)のしゝのさき

ゆくもゆかれぬ道はころ〳〵
ゐのこゝそあらめ犬こもおこりきて
いける身なれはくはほうあらはや
大きなる耳とてさのみかこつなよ
うさぎとみるはたうりなりけり
月いてゝたぬきやなみをはしるらん
くすりもいらぬ秋のゆふくれ
おき(荻)はらや風のはやる(寝覚(間ヘザマ))もしつまりて
もとあらのこはきしようき大しん
あはれにもむらさきすみゐ(墨絵)かきくらし
まとにせめてはなるないりあひ
かいふくや(初楽 はるふくや)みなみのうらにきこゆらん
とくせいやりのたつるふたらく
おもしろやめのしやう(性)まてもつよくとて
あへのゝはらはきはたのみなり
こかねなと松むしほともみえさらん
おやにかうある秋かせのころ
月の夜にたかれてぬれはにほひきて
こしのあたりそふしをあらする
人のたゝさすへき物は竹かたな
おくへうならは千代もへぬへし

姉何 第四

うくひすのむすめかなかぬほとゝきす
むめう(梅)(卯)の花にそだちきにけり
山さとのさのみはいかてにほふらん
みやこいてゝやにあは(似合)さるへき
旅ころもつまにせんかた十二三
あひしやう文のとつてもかな
おんやうにすて(捨)られぬるも人にて
うつりかはれはさるとこそなれ
花の春もみちの秋のもゝのさね
よまれもやらすうたてかりけり
玉つさをなとなか〳〵とつゝくらん
まいらせゆやりゝや
そなたへも又こなたへもいひ〳〵に

かみすちほともちかはさりけり
くしひきはさんををく(置)にもたゝならて
名をはなに(何)ともさためさるころ
秋かせやたゝ入道とふきぬらん
こよひの月はくまさかもなし
かんたうをうつかときけはからころも
めはなをつゝむことのはかなさ
ひ佛とてひするにたれかまいるらん
けさあさもよひもよほしならへ
きのくに(紀國)やいろはもしるくみえわたり(渡)
ちりぬるをわかふきあけ(吹上)のはま
雪になく千鳥とやらかかすかにて
竹もまふたもおほひぬる門
ことのはに心ひらかはよからまし
かきぬるも人よみぬるも人
さとうへとこせのもとより文のきて
ほろりとめよりなみたおちけり
そうこそ(付)はうつほつくるもしゆしやう(殊勝)なれ

なむからたなうとらのかはとや
あら〳〵と風もうそふく松かけに
ちやはひかれすよすみよしのさと
たかさこ(高砂)のうはかふところしめりきて
むかしもいまもしつくなりけり
のこはんとなをめいしんやおもふらん
めをわつらへるけふのさるかく
こうはいとの(殿)こうはいさんになりもせて
花そめころもさらはにほふな
山ふきにたてなん名こそしようしなれ
うちのわたりにはりは見えけり
はしひめ(橋姫)はあねかこうちのいもとにて
水あふるなといさめぬるこゑ 初瀬(ことはの末)
はたかにやならんとはかりおもふらん
小そてもおひもみなおろさまし
さしけるはさめさやまきのかたなにて
こまかにくときみやこちのすゑ
くりことや五條あたりの物ならん

夕かほふくへふくへ夕かほ
には門ゝくゐなくゐなはにはとりに
なにとかさためひよ〱のこゑ
よこふゑ(笛)やたてにふけともならさらん
もしわるゝかとおもふ夜の月
あかつきの秋の嵐のうちあてゝ
露こゝろえぬなかめするなり
なか(き)ゝらすさらは山のは丸からて
みすみになるはくるゝ日のかけ
うつろふかとおもふ花のいろこかた
そこにしや(蛇)のすむきしの山ふき
かはつには何とてつのゝなかるらん
ちゝのためにはこゝろおるゝか
しやうふんはうけとりぬるもうらみにて
くすはふ岡の山田一たん
秋風にたれたのしくもなるこなは
へんさいてんに月のさやけさ
かそふれはこよひは十五とうしにて
としなみしろくきやう初築(きやうたよみつゝ)をこそよめ
もしも人とらすはいかにふせの海
たゝかへれとそおもふゑつ(越)ちう(中)
旅ころもたちのこしたるぬのをみて
なみたのこへのつて(傳)そあるへき
うき世とてこひにすきこときかしたゝ
しやくろなりけりいのちなりけり
かゝみときさ夜の中山けふ(今日)こえて
あつまのかたにいそくよめいり
吉日やいてゝもくるゝかけならん
のめはかんろの水のすゝしさ
わかてうもしけ(茂)りへたつる柳かけ
かせうちふきてなきみわらひみ
からすとてからくおもはん物ならす
あまさきなれとあまくあらはや
ともすれはくいつくことをとりとにて
あふきににたるもちいなりけり
あちきなや何ゆへいたうこかすらん

むすめをつるゝけふのふなみち
眞蹟（松せいは）松風はきのありつねかゆふへにて
花のちるをやつらゆきもみん
よしの山くたるそしるきやよやよひ（彌生）
かすみにしのふ宿のむり〳〵
原註（レイ）戀せんと何もいはすやなりぬらん
（御祓）みそきはらをすくるゑけそう
わとうより外はこゆへき道ならて 原註（物イ）
車なるかなまなこなるかな
しの月や夕とゝろきに入ぬらん
西はるかなる一はんのころ
あつまちのはてとおもへと碁を打て
四てうにかくるさのゝふなはし
（勸進）くはんちんや月日もとをくなりぬらん
へうしもふるくなるほうかちやう

竹何（第）五

（繪）ゑあはせは十二のほねのあふきかな
ほたるともし火かきもかきたて
玉くしけまたかたふたは明やらて
こすゑなかむるなりはいたひけ
花ふさをちふさなりとやおもふらん
むねうちかすみ行かたそなき
年こゆるときはしれともいけとられ
しけひら貝をふかれぬるなり
（風呂）ふろに入せんしゆ（誦）のまへのかゆくして
かれたる木をもたゝたけやたけ
みるになをこほるすかたはうるさきに
のくるものかすはくもはかれす
人になとかうやくきつねつきぬらん
風ひくといひ犬なりといひ
日のもとにいこくのゑひすはなをひて
はる〳〵きつゝむねつふすなり
ふところのみやけのしゆくしいかゝせん
（孫）まこ子みえたる道のかへるさ 初祭（里のかへるさ）
夕されは野へのてうほうつたへはや（重寶）
さねもりなれやふか草のさと

ひんひけのいろはすみそめ(墨染)櫻にて
すゝりはこ(箱)をや花のたまくら
何とてか春にはかとのなかるらん
世をおさめぬるこゝろうつくし
むらさきの色にはんれいさそはれて
こうなりなすひちきりてやみん
碁をうたはしやうしさせんのことのは(言葉)に
ひれありけるそをき(置)ところなき
さ夜ひめのふとるや月にみえぬらん
ちから(力)をいたすほしあひのかけ
すまふをは草の露よりなをとりて 眞蹟(折とりこ
先一はん(番)に秋かせそふく
きのふかもうへしをかへの田しろ殿
かろ〳〵しくも山ほとゝきす
夏ころもいかにもうすくおりたてゝ
春はつまとのことくなりけり
けふはゞや花もきりゝとをしひらき 眞蹟(今日はゝや)
いつまてにきりつむるわらひて

かうかひは人にやるへき物ならて
よしさもあらはあれなあかゝね
はしらへもとりつきぬへき道のへに
やとるなりけりすへるなりけり
へうたんをみれは山からなまつにて
うちわられてはよみちのみとか
百首にやはうとりそふる中ならん
うきこひ(戀)草のねまてほり川
きるといふともいはぬは宮こ人
たひ(旅)とたち(太刀)のゆくゑしられす
朝ほらけおさ舟とをくこきいてゝ
あま(海士)のたつるは波とはたもの
にしきにはにしいかはかりまかふらん
それもからものこれもから物
目きゝこそ大かたならぬみやこなれ
まち(町)へいつるはいかめしくみゆ
たつな(手綱)をはかゝすはかまはほころひて
はれかましきをいふもいつまて

日はひるになるをかりはにおとろきぬ
　十らう殿そしほゝた(しほた)ゝるゝ
けふは又とらやくしとやおもふらん
　ほとけも人をくはれなはうし
こくらく(極樂)はにしへかたふく口もし(文字)にて
　すゝしき(涼)月をてならひにせん
そたてゝはのうをつけんのなてしこに
　やまとに一の名をもあけはや
おもはすもはち(恥)かくらくのはつせにて
　この山てらはしようしにもなし
松たてるみね(峯)のあらしのふく佛
　のとかにいつかうけもとるへき
あさな〳〵て(手)をむなしうしかすみきて
　春のあはれやこしにつけまし
花は風さるはうつほの世中に
　月にむら雲にはとりにきつ
あかつきの秋しくれ(時雨)かなあはれかな
　夜なか(長)なりとておめきあひけり

物かたりするはさかすときかすにて
　大事はさてももらすへきかは
能(は)たゝ口のうちにもありとしれ
　したつゝみをやうちならすらん
たかうへ(謡上)もちやのこといへはたのしみて
　天かたひへ(天下泰平)ハこくとあんにん
いつまてか梅のさねにはまかはまし
　人のこゝろをかみくたかはや
おもひ入しのふの山のおくはにて
　秋かせふけはいろつきにけり
またよひの月やてらされかねぬらん
　とゝろ〳〵の雨はとをさし
なる神にかき帯一ゑ(重)かさなりて
　とひぬる雲もしふくりにけり
あしたつをふひんとてなを袖ぬれぬ
　ゆみ(弓)をいつゝもきみにみせはや
わかこひ(我戀)や十三そくにあまるらん
　うかれこゝろにたひもたまらし

あし(足)を空になすはかりにゝこらへかね
　神代もさこそきるゝあかゝり
大はらやうくひをしほの山見えて
　みねにすみやく日はたけのへら
さきありとむなおいあふれ年の暮
　春はほとなきころのつはなみ
鳥はふるす花はねふとにかへり(歸)きて
　山のおくなるもゝの大きさ

唐何　第六

かささきやけふ久かたの雨の川
　はしふきわたす秋かせもかな
杉いたはのこり柳はうつろひて
　けき(行)てとはゝや山さとのなり
雪はたゝ何とふるともたまるまし
　ぬふてふかさもさきは(原註(かイ))ときれり
はなそけや(鼻かけや)世を鶯とおもふらん
　花にわするな人は一しん

山ふき(吹)のさけはせんはうはしまりて
　かしましきかな春の古てら
すみそめ(墨染)によ所にわひぬる色をしれ
　しろかねさいく水もむすはす
口ぬきより先山の井をほりもせて
　日かけはあつきしゝ二ひきつれ
とこなつの花にもんしゆ(文殊)のたちならひ
　妙にりこんにりこんならすよ
ほけきやうやおほえすまして忌(忘)るらん
　くうのみち(道)よりほかはなきかや
たれをかもしる人にせんさかなにて
　けつりものにはたこさこのまつ(松)
しやうしんつきやうはいかにとふく風に
　山ふしにもやことしならまし
正月の一日のゆふ(夕)にとひをみて
　からすにつゝ(初案似ても)たのもしき春
里とをくふうふねに行夕かすみ
　子をはいつくにをか(岡)のへのまつ

いささらははらむ山田をなてゝみん
　ころも(衣)ゝもたすうつともなし
ぬす人にあひぬるほうす(坊主)恭をとめて
　ものさひしくもしまぬなりけり
あさちふに風のひきたる門の薬
　なとかはかいをあはせさりける(初案(あはせさりけん))
ひとりつゝあはれ(哀)たもつやいなやにて
　大ゆみ(弓)いるはもとのことなり
世をおさめたみ(民)のおとなやなかむらん
　かまとのけふりたつはおもしろ
しなのなるあさま(淺間)のたけはうつほにて
　すかのあら野ゝくまやはくらん
草まくら(初案(かなしくも))おそろし風のふくこゑ(聲)に
　ぬる(原註(くイ))ゝもあらすあつくもあらす
よきほとにさけやわかして出すらん
　かすみのうちにこうは入けり
人かけに春の駒ともおとろきて
　しのひ〳〵に花をさすころ

(眞蹟(みぬことは))みぬことにみたき物にもあるなれや
　おに(鬼)はととはゝいひてきかせん
目大きは口はひろくてしやくまきて
　やせたる人のことはたゝかい
ひゆるなとくもてかくなわかけとめよ
　いつれはあふる八はしのみつ
ふろ(風呂)に人いり(入)てはあかをかきつはた
　みやこほとりのたしなみの色
つのくにのさそ〳〵にほひわたるらん
　ぬのひき(布引)よりもおつるそらたき
一すちにすくなりけるを雲ゐにて
　きみはぬくともおほしめされし
いまさらになとほうけんのさやつまり
　及はすなから油ぬらはや
ひさかたの天津乙女の鼻のさき
　たゝきりとこそおもひやらるれ
玉てはこ(箱)さゝまくほしくおもふ世に
　ふるきさうしはいつちさためん

むくらおふ(生)るやとはからとちやまと(大和)ゝち
かけさはらすはふたつならめや
天もく(目)のあたりにつのをふりたてゝ
蚰は人をのみ人は茶をのみ
いけにへのあたりにするやしとならん
くわんたいなりとけんくは出にき
きれ〳〵に成ぬる事のあはれにて
むさしをさすとみゆるなりけり
へんけいやはちの有ともしらさらん
うそをもふかすけなけなるころ
そゝろにはなるもはる〳〵たち(太刀)はきて
天神さこそつらきみちのく
月なみやすゑの松山こえぬらん
あたしこゝろをもちにけるかな
よはひをもさつけぬるとてゆたんすな
川をわたれは鶴とたうかめ(龜)
白かるも見えてあか(赤)ゝるしたはらに
いつれてそめ(手染)のいとのへそのを
ころもをやいま(今)むまるゝにきせぬらん
花のあたりのなりはこひたり
たれ(誰)となく一たひ(度)えめはもゝ千鳥
ひまのみ見えてはかすみ(霞)のやま(山)
やうしをやかみをやけつりす(捨)てぬらん
何もたまらすとんせいのゝち
物きれの五郎入道ときたてゝ
月にかけんもやす(安)きしらなみ
わかやとはたゝりうくうの秋のくれ
豊玉ひめや萩のしたつゆ
うのはふ(吹)き荻ふく風もしつまりて
はらのくすりときくをたつねよ
國〳〵をかゝへてかけやまいるらん
きひのかす〳〵みゆるたんしやく
十こくとたゝのりといま(今)行あひて
くはんちんちやうをよみ人しらす
ちやう〳〵ときこえてとまる事もなし
かねやうつらんはくちうつらん

初案(あた有は)
うりぬるはしやう(正體)たいなしのかたなにて
初案(さけをに結ぶ戀の一筆)
おや重代の秋の夕くれ

何力　第七

にしき(錦)かとあかめにほそき小萩哉
　もみちおりたくふるやみのころ
大かみにかへまくほしき鹿なきて
　さこそは月のやとる水かき
のひあかり見れともみえぬあしもとに
　くひのあたりのくるゝ山かけ
草かりやのとふえ(笛)ふきてかへるらん
　つほところをもおもふこゝろか
花一木せいかうさんにさき(咲)そめて
　たうとのとり(鳥)のさへつれるこゑ
をしへつゝ七草なつなうちわらい
　あはれなりけりしつか(賤)おはのこ
山さと(里)にいとことうしやをくるらん
　たにんよりなをものそさひしき
しくれ(時雨)ふるこゑとを〳〵におとろきて
　まき(槇)のしたは(葉)につみつくるころ
ちこくへはうちくもりてやおちぬらん
　よはひのするゑそときみかくへき
こそよりもとしはこしかゝみにて
　いつまてつえをつかんとすらん
岸のみか山もをなかき里とをみ
　きつねにたるをのゝかよひち
小まちこふ四位の少將たぬきにて
　もゝ夜もおなし丸ね丸やき
きやうをするかたはやかてや家つくり
　なか〳〵し日にくるしはんしやう(番匠)
花のかけいくたひ(度)水をのみならん
　春も身にしみゆひをおるなり
ふか草に連哥のしよしんあつまりて
　いさやふしみのたけ(竹)くらへせん
わらふにもはらた(腹)ゝぬこそしやうず(上手)たれ
　さるもくすしをするとみえけり

水にすむ月とみやく(脈)とをとり〱に
　波すさましくなにおとりけん
川らとはいへといし(石)なこなき物を
　たかこむすめの身をこほらかす
のとかなるつゝらのふたの朝ほらけ
　うちくもりにてはる(春)のとをやま
すゝり(硯)まてわかむらさきのまと(窓)のまへ
　くろかるいろはありやなしやと
すみやきのものはいかにもかすかにて
　ふくりをみれは大はらのさと
世をいとふ人ははり先おもひたて
　ぬはんきけんもせぬこけころも
わひぬるやとにもかくにもにかるらん
　きこくまてにはたのしからめや
せんしてものまは大こくゐひすにて
　おもしろきことききくもよしあし
さるかくのかすやこよみにしらるらん
　くはんせこん春こんかうふにち
かならすもたきゝのころはたむけして
　夏にこゝろのなとかむかれぬ
かはなからうり(瓜)をし人のあかなくに
　夕かほまてもつくるなりけり
よの中はなからのはしとふくへにて
　さんしやうとにむせわたらはや
かうふりのすものかたりのつれ〱に
　くやしき事はけんふくにあり
うらしまやはこわう(箱王)殿を明ぬらん
　むかしかいまにいたるまてこひ(戀)
すきまなくあらさるをたゝみちにして
　よろひの袖にこてもみえけり
ものゝふやへいをぬるにもすゝむらん
　せめぬる事はなにをきらはす
枕よりあとよりこいとふなかきて
　ゆめ(夢)のうきはし又はまなはし
世をわたるみちやつゝくもしまさらん
　めおといさかいたゝかへるこゑ(聲)

夕まくれかうかうそ眞讀(からのかうそ)は物ならす
　國と〻〱とさこそきこえぬ
あはちかたかよふ千とりのみゝこにて
　幾夜ねさめをすまのせき(關)しやう
あかつきのもしほとかやかみたれあひ
　こなたかなたをやかんとそする
あしひきの山やかつけをささそふらん
　ひろへる事はいつわすれめや
みちのへのかたな(刀)をみれはあふひにて
　なつ(夏)きにけりとはふもみえけり原註(かすかすイ)
ほとゝきすなと一本もなかさらん
　もとのことをはきゝたくもなし
いまやうかよしと原註(てイ)そおもひあはせきて
　うちなかむれはみくさにほへり
わがやとのきゝやうかるかやをみなへし
　まかきの菊の花なさき(咲)そ
あまり月しら〱として人こひし
　たつねゆくこそとぶ(飛)はかりなれ
花よりもこなたのこみそたまり水
　春にあはすは身をやなけまし
大かたにすゝきはらはんものならて
　あかにむもるゝみな月のかけ
土用にやみゝのあか初案(耳のあか)なもほらさらん
　やめぬるまゝにつゝく八せん
いつとなく物しりかほはひもやらす
　うるしにたるそうのかたこと
南無やくしぬりくはう如來となへきて
　あはれくすりもいらしとそおもふ
あちきなくちいさかりけるかうはこ(香箱)に
　目にみえぬなりめをかけぬなり
こかねをは鬼ももたすやなりぬらん
　あたちかはらのくろつかの大刀

霜何　第八

なのりてやそも〱こよひ秋の月
　あふみふんはりはち(はつ)かりのころ

くつは虫ゆるす手綱やなかるらん
　そよやおちこちかけまはりつゝ
竹よりもなをつれなきはひさのふし
　この(木)はうちちるころのやきいし
神無月きしやうのさたや時雨らん
　ものゝうするはやさしくもなし
月花にうかれしや(宿)とへはい入て
　人の目にこそ春のくちなは
かへるをやへんさいてんののみぬらん
　うたをはさらによまぬえのしま
都にもはやるはかさ(笠)のしゆうくにて
　雨はふりつゝつまるともなし
うちしめりさたまらぬ社あなならめ 初案(心なれ)
　ふとくあらすやほそくあらすや
さらは人雨あしなからこいならて
　もすそかきあけつく〳〵とみる
はるかにも行へきやわにおほゆらん
　いそくとならはおちぬへきくら
いかにせんあんけつたうの一はし
　水うちなかれなくはかりなり
あしたつやみ(耳)ゝのあたりを過さらん
　ゆ(弓)みもちなからこひんはつかし
くはけつとはいへとはけつになりはてゝ
　みやこいつれは山たちにあふ
門て(出)していはふやいは 眞蹟(いっく) ゝさりけらし
　目出(た)けれともなみたおちけり
君か代ははなけぬくへき物ならて
　なか(永)いきするは手にそしらるゝ
玉のをや十いろはたいろひろくらん
　心ほそくもをしさけにけり
あすしらぬひうちふくろをたの今世に
　口のうちにもいるは山ふし
かねをたにつくれは人ははくろにて
　いかはかりかはわかくなるらん
かゝみにてみよや〳〵のはてもなし
　むさし野よりもなを大ひたい

秋風にけ(毛)はなけれともなかめして
ありあけの月ののこるあさほら
せいしかと夜さむ眞蹟(夜かせ)の窓ををしひらき
西へきぬるはころもをもきす
人はいつあつまからけになりぬらん
たひ(旅)にいてゝのかはこからうと
宮ここそ用心すへき物ならめ
にあはさりけりゆみのをふくろ
のふしみに人のは(母)ゝこの出られて
大わたほうしふるはれにけり
初案(こまかにて)こまかにとひようしや(病者)や藥おもふらん
まさこ(眞砂)にたてる松のふくりやう
哥をこそよみてこゝろも丸からめ
筆はなきかやものゝふのみち
宇治川をわたすする墨ゆゑんにて
いろこき袖やきせんなるらん
おられてはくんしゆの中のさくら花
春の日くらしをされぬるのみ

霞たつころもこわう(二王)はまきれめや
何とてほとけしゆしやうなるかけ
いんやうの神もありけるともし火に
さこそは文をかけるなりひら
すいはらの二條のきさき(后)こひそめて
かさなりぬるをとかにさゝるな初案(さすたら)
初案(さほにてはつるともさらにおもほえす)つりさほは何をつるともおもほえす
かやのうちにはなをやとふらん
いとゝたにかほのあかゝる人なれや
眞蹟(ほうさす、)ほうさきのみかへにさへもうし
なみた(涙)こそはれやかになき物ならめ
今日もとはれすこゝろもう〳〵
ことのはをいひちかゆるはうしにゝて
柳はみとり花はくろ(てこ)なる
木のめにはいつるもいつるよしあらす
さきほの〳〵と寒かへるころ
いつくへもくつと入へき春の風
はらあてをせよとしのくれ(暮)かた

うつみ火のはいたてのみはかひもなし
　雪のうちにやきつていつらん
里とをきあを(青葉)はの竹の一かつき
　笛はいふにもをよはさりけり
あつもりのしや(尺)く八いかにふきぬらん
　あそひのみちはうすくならすよ
子ともみな(皆)かたひらきるとおもはゝや
　ひえ〳〵としてむれたちにけり
りうなうやおきのかもめのさしつらん
　しほのうはひか又はそこひか
あしのやのひしくるほとに成もうし
　しくれふるとも雪はふるとも
年の暮せにもつ人のとのはに
　ふくかせまてもうちひらめなり
おのこかとかきあけみれは姫小松
　こゝろはやみにこゝろはやにゝ
春の夜にかうやくなくはいかゝせん
　月はおほろに人のはれ(腫)もの

花にたゝかくすはちらし薬にて
　くりかへしてやかみにつゝまん
いひしめて又いひしめてほの〳〵と
　しのゝめあくる(明)きやうにんのけさ
ね(念)んふ(佛)つやひかしの空の物ならん
　さるはさゝらをするかなりけり
うつの山うつはたぬきのつゝみにて
　こせにはけたるつたのした道

京何　第九

こほらねと水ひきとつるくわいし(懷紙)かな
　きりよりほそき冬の日のかけ
ほろ〳〵とも(もみにおもみの)みちにもみのちるをみて
　たんしやくかくにひはなひきそ
いとゝたにさとうまかひの杖つきの
　しやうるりかたれともし火のもと
こよひはや時はうし若ふけはてゝ
　よはひにおほろ月にひかみ(耳)ゝ

鶯のこゑやふたつにきこゆらん
　花のこすゑのほうほひよとり
ひたすらにしやうことしるはいかなれや
　あかきいろこそとくと見へぬれ
しやくまきてのむへき物はくろ(黒)くすり
　しやうしやうまいや目までまふらん
あふなくもうち(打)わたしたるはしかゝり
　月にこゝろをしかとさためよ
秋の風ふき(吹)てけなけにおくひように
　かちくりあれはにけくりもあり
食ろうのふたは何ゆへあけつらん
　るす(留守)にをき(置)しは小ちこならすや
さひしくもさそ思ふとの引出もの
　かみ(紙)一てうにあふき一ほん
ちはやふるおきなをいさやのこはまし
　いくたひとなくはなはたらりら
くるゝまてつまりぬるこそかなしけれ
　はこ(箱)のふたとはなりもならすも

かたえさすおほの浦はのなしちにて
　いも山にいらす月はとをやま
長き夜はいくねさめ(覚)せんねつきせん
　火によくあふれまへようしろよ
雪の暮女若衆のたつねきて
　なりひら(平)ひまやなく侍らん
こひ(戀)ちにもかすみこめ(籠)たる里のまへ
　春もそとはのたつもり(森)のかけ
わかなつむいく田の小野ゝこまちにて
　まてしはしとはうはかことのは
わらはへのいつるや雪の朝ほらけ
　かのこまたらよかのこおとりよ
夏かりにいられぬるこそいたからめ
　かゆさもなをる夕くれの空
入あひの目はきかねにやなりぬらん
　なをありかたくきこえきにけり
あくはたゝこゝろのうちにうちすてゝ
　けんたいつまてしやうしなるらん

昨日けふあすも爲ひらの梅ほうし
のといたけれと名をやあけまし
耳はさもあらはと人やしらるらん
六十はかりをくるなりけり
日の影も永〳〵しきをけんし(源氏)にて
山とりのおの春の小かゝみ
花はいくかとをたてゝか見えぬらん
さくらかもとのせいめいかはん
ぬれ〳〵も蘇民將來くち(朽)やらて
波のそこにもい爲つくるなり
人はたゝはんしやう(番匠)かいやたのむらん
ひたのあたりはしろ(白)くみえけり
そめのこすしかまのかちのはかま(袴)にて
さのみにはよしたしなましとや　初案(さのみには又)
さらぬたにうきおもかけをつゝけられ　初案(つゝけかね)
ひたいよほうよ又はをとかひ
世中にけぬきのなくはいかゝせん
これ第一のれうしなりけり

千句はやはしまりぬれと人はこて
くせとて何もおもしろからす
それはまいこれはあまくやきこゆらん
たゝのまんちうさたうまんちう
少人のいにしへいまのひとりこと
いつかほうしのうかひ出まし
まふくるも又まふくるもあま小舟
うけかたきこそにんしんとしれ
いつまてもくすしやしちをきぬらん
やふのすみまておもひやりにき
わひとをするはいなかのあさ夕に
みやこのかたへ手をすりにけり
いもにこひ(戀)文かく墨はみしかくて
一すんはかりありといはゝや
さくら花なと光陰をしらさらん
春こそちろり地ろりなりけれ
あかつきのめうしやう(明星)かすみもれ出て
しろきからすかとふといふ人

いか斗さき(鷺)はくろくも見えぬらん
　きとくあらはす松のひともと
ふたつ(二)にはならすもかなといのる世に
　七日に中はわれそめにけり
うしの子のあしやたなはた(七夕)爪ならん
　月にさけてもしつ(鴫)を見ましや
眞顛(木のほりさみへて)木のほりとのほるこすゑはうつろひて
　さかさまなるはこひ(戀)ちなりけり
いくたひも君かかたへはよはゝるらん
　たのむのかりをむしる春あき
おやの日もそら(空)おほれしてなかめして
　いたはしといふ身こそおほけれ
ほとけ(佛)にもたむくる物は花しやくろ
　柳さくらの寺はあちきな
春はたゝ僧とひくにをこきませて
　夏はいつくにくしてゆく(行)そら
ほとゝきすなくはなんたやこほるらん
　夜はまたくらうさこそひまなき
はゝくはんはさいくをつれてしのはれて
　小かたなにてやつくりやま(山)ふし

墨何　第十

から笠やたゝえかゝみのけさの雪
　こほりもいくへあつかみ(た)のころ
あしつゝのうすきを月ややふるらん
　鹿かとはかりつのゝあかつき
ね覺する秋のまくらのかたつふり
　露のふかさよあしのはやさよ
村雨もまたひぬおりをまけてきて
　さかもりになる山のへのさと(里)
あか人はこ歌にさへやしらるらん
　うそをいふかとおもひこそすれ
うくひすのあかきかありとつけられて
　はねにや花のちりかゝるらん
矢いつれまれなる物とさはらめや
　いくたひとなくのこふゆきひら(行平)

もしほより猶たれぬるやあとならん
松のおほさよはまのおほさよ
山里と人はいへとも碁にかちて
みやこいてゝもさからさりけり
進上とたよりの文やをくるらん
しやうくはんをこそしてみるへけれ
雪まなきこころはたれ(誰)にもきらはれて
家ことにいるはるのさむ(寒)けさ
いま(今)いくかありてか花はちひらき
あつきをはいはしたとへし
夏の日のかけにたしなむほとみえて
こかねつくりの夕たちのそら
すゝ(涼)むとてしのふに何のおしからん
かと(門)のうちへはひとりましませ
ふくの神ひんほう神をつれられて
なと大こくをかたらはさらん
きのえ(甲)子にふりつる事よ雨の暮
うつ手こそけにさやかなりけれ

たいこには月けの駒やはきつらん
慈悲をかくすははかなかりけり
あらけなくわんおん(觀音)いろふ人見えて
十八日のまつ(松)かせのこゑ
すゝ(涼)しとやふんこの國にくたるらん
わつらひならぬたひは夏なり
花むけをほたる(螢)はかりもをくりきて
なさけのあるはひかりこそすれ
たつぬるは心みんとやおとすらん
いのちはよしやあしのなこりに
まははやと思ふこゝろかなにはかた(難波)
さるもゑほしをきちのとを山
おりにふれひつしはひさまつくとみて
ほとけさへたにこひをめさるゝ
夕暮のそらうちなかめなきふとう(不動)
火花ちらすやかなしかるらん
あひひき(引)に引は小櫻おとしにて
春とは見れとこはくこそあれ

松にさく(咲)藤くちらとやよりぬらん
　波にいるかはやすむこゝろか
大臣は舟はたをたゝ枕にて
　ねいるなりけりねいる也けり
木ほふをやけふ(今日)の弓やにつくすらん
　はけしくつよく風のふくにも
よき中は北のかたにもあるそかし
　みなみを見れはわかおとこ山
あちきなくかさふか〱ときの國や
　すゝきとのとはたれ(誰)かいはまし
名をつかは鯛三郎やます五郎
　かたなにはたゝほうちやうをさせ
ふをいふはをしくつろけてよき物を
　月よむ哥やのとつまるらん
しふかきのもとの人丸秋ふけて
　あかしといへとあからまぬなり
ほのくらく物やはらかに波のうへ
　そてぬらせとやてつきいむらん

こひ草は天なん星になりはてゝ
　おもひをもせよけきやうをもせよ
名をあけん事は何にもきしらめや
　ねすみの世なるいくさなりけり
ねこほねのあふ(扇)きをいるは八嶋にて
　つみにもあたる松のしたみち
わきてたとみやこをとをみおちぬらん
　いつみ(泉)へゆきてまりをけるころ
たれかきるしのたのもりのくす(葛)はかま
　秋のけしきやいとゝいんきん
山のはにかしこまり入月見えて
　よしわすれんのけさのおなさけ
さのみなといろこのみとはいはるらん
　れいもせられぬさいこ中しやう
手にすへて行はましろのたかあした
　雪はうちゝりあふなかりけり
袖返すさむ(寒)きこしけのたゝならて
　日にてられつゝまひをこそまへ

しらひやうし黒ひやうしにや成ぬらん
しつかゝたひはつゝくともなし
かり衣かいたうくたりやふれあひ
かた野ゝはらははせうなりけり
秋風にきんやの里やはれぬらん
わか身ひとつはもとのねこふとそ
月やあらぬ春やむ(昔)かしの針ならぬ
つくとしならはかすまかさはや
花の比つまれむしられいかゝせん
すみれましりの野へのほうひけ
ひはりなくこゝろに大ちこ(兒)うちいてゝ
れうしならすやいつち飛まし
はしまても刀ぬくとや見えぬらん
みたれやきはのうちのしはふね(柴舟)

追加

梅そめはこぬ春まねくたもとかな
ひらり／＼の雪よあふきよ

あらし吹けふのまい人と([illegible])ひつれて
をみのころもにつる(鶴)のけころも
くらゐこそ空にしらるれ時なとよ　初案(のとかなるくらい也けり)
日なかきころはしいとやいはん
花さかはつけんもむま(馬)はねりつへし
つかひはきたりうしにくらをけ
したをたれねふりにけりな戀の道
たま／＼あふはあつ／＼として
ひやむきになをうとんけやまさるらん
きり(桐)のはかなくなれる冬されは
火をけ(桶)ともみえぬ斗にこかれきて
又あふなきは露のいのちそ
しやうりやうやとらふすのへに通らん
くれ竹のはのうらほんのころ
念佛はふしをあらせて申せたゝ
すみたかはらはくすりなりけり
みやこ鳥はしとあしとかあか([illegible])たにて
たひにしあれはうつくしきのみ

そことなく手にもとられすかけす(捨)てぬ
　ななをふらめくや夜のかつらき
山ふしのこしにつけたる朝ほらけ
　いかなるかたへとをる文はこ
さいくとはいへともしらぬきりのさき
　さひはつるにもりこんなれかし
しんほちはいふ事きかす寺ふりて
　まかはんにやはらへ庭のしら雪
かんきんやそゝろさむくておとさまし
　ほしにあたるはとし大やく
卄五になりぬる人のまと(的)をいて
　この月すゑはゆかみすちらす
松よりも杉かよしとや思ふらん
　よ川にたてるしかの明神
大とものくろぬし(主)色の鵜をすへて
　たきゝ(薪)にあゆをとりやそへまし
水ぬるむ出家こゝろよまてしはし
　しつたいしのすくる春の野
ひはりけ(毛)のこんてい駒に打のりて
　花のすかたをほめぬもそなき
面影やなを此里にはやるらん
　うらはをみれはほうもはれけり
(初案「海士のすむ」)あまのかるもにすむのみか虫くひは
　日も夕なきにまちなひやせん
山風のはけしくきふくならひきて
　はつせのてらにするはほうこう
殿はらやもろこしまてもきこゆらん
　にしきにまさるけふ(今日)のこはかま
もゝたちをとりてこきやうへかへりさて
　天文九年しくれふるころ

右の誹諧は、そのかみとくきん千句立願ありけれと、うちまきれ、又は成かたく過しけるも、そらおそろしく、いかゝはせんのあまりに、鬮をとるべきに、一ならばもとより、二ならははいかいのあらましことにて、あはれ二

をりよとねんじ(念)ければ二をりぬ。ありかたさかきりなく、大かた、千句は三日なれは、これ、わつかに二日にもたらざらんに、おもひの外になかひき(永)、夜るはねさめかちにもよほし、かのえさるには二百いんにて、五日につゝりぬ。其折節にや有けん、周桂かたへこの道の式目いまたみす。みやこにはいかんと大かたのむねたつねしかは、かゝる式目は予こそさたむへけれ。さためよ。それを用へきのされたる返事くたりあはせ、さらはこのたひ斗心にまかせん。所にいひならはせる俗言、わたくしひれたることゝとは(詞)、一向はうほつ、うつゝなき事のみなれと、あまたのうちなれは、うすくこく打ませけり。さてはいかいとて、みたりにし、わらはせんと斗はいかん、花實をそなへ風りうにして、しかも一句たゝしく、さて、おかしくあらんやうに、世〳〵の好士のをしへなり。この千句はそれをもとちめす、とくみたしたき初一念斗に、春秋二句むすひたる所も有ぬへし。されとも正風、誰人の耳にも入ましきに、いさゝかもきこえん、はからさるさいはいならん哉。そのうへ、ぶつこつ(ぶんこつ)妙句なきにしもあらす。又さしあひも時によるへきにや。しいてなをさんも、しうしんいかゝなり。しかるにはいかい何にてもなきあとなし事と、このまさるかたのことくさなれと、何か又世中共ならん哉。本連哥に露かはるへからす。大事ならんか。兼栽このみにてこゝろものひ、たねん(他念)なきとて、長座にはかならすもよほし、庭鳥かうつほになると夢をみせ、むこいりに一はしをわたり、宗碩は文かよはしの自讃に、入あひのかねをこしにさし、宗かんよりたひ〳〵發句なとくたし侍り。近くは宗牧一二座わすれかたく、それらをたよりにておもひよる事しかなり。追加五十いんおほけれと、祇公三嶋にて千句一折をおもひいつる物ならし。さてこらいまれなるとくきん千句成就、松の葉の正木のかつら目出や侍らん。

守武千句終

右守武以二自筆正本一寫歴校合畢

慶安五年孟夏良辰

野田彌兵衛開之

（校訂者曰、大正十一年三月廿七・八兩日、宇治山田市世木氏公氏所藏守武眞蹟本により校合せるものにて、初案とあるは眞蹟本に墨消しとなり居るを本句の傍に當時抄記し置けるなり。まぎれ易き假名に漢字をあてたる個所亦同じ。）

新撰犬筑波

宗鑑

新撰犬筑波集

春部

かすみのころもすそはぬれけり
さを姫のはるたちながらしとをして

あなうれしやなもちいはふ比
梅が香のまづはなへいるはるたちて

うそをふき〳〵(ふく〳〵)はなをこそおれ
軒端なるはちのすはひの(に)むめさきて

碁ばんのうへに春はきにけり
うぐひすの巣ごもりといふつくり物

あなうつゝなやはなをちらすな
もたせたる梅がへにたゝざれおとこ

ほうしかへりとひとやみるらん
この梅はさねおひにてはなきものを

しうとのためのわかななりけり
澤水につかりてあらふよめがはぎ

ゆきまになりぬさけさやのたけ
はるのゝやところ〳〵をこかすらん

あつといひてやたちしざる覧
あさがすみ春のあらしにあてられて

ところのおとなはなを見るころ
我ほどのものはあらじとかすませて

こやつきのふかはゝのあきかぜ
こざくらの花のほうしをうちかつぎ

ながめられつるはなはちりけり
立かすむさとはふけやのやしきにて

霞よりひとはねはぬる月もりて
らんといふ字にかへるかりがね

こゝろのうちのやさしさはるさ
筆ゆひのすきがてに見るかばざくら

おほなぎなたにはるかぜぞふく
べんけいもけふや火花をちらすらん

もつともとこそひとはみるらめ

へたのかく花といふ字のゆふまぐれ
　さくらがもとにねたる十こく
春のよのゆめのうきはしすゝめして
　ひさうのはなのえだをこそおれ
よびよせてつぶりはる風わがむすこ
　これぞまことのえんのうばそく
たちいでゝちやをつみ玉ふ八のみや
　春のゝにいんぎむ(ん)講のはじまりて
まづつく〱しはかまをぞきる
　ふけかしかぜのふかであれかし
花見にといそぐをふねにほをあ(か)げて
　ゆめのうち(うちにめ)にはいたくある(こそあれ)らし
花にぬることふはあめにたゝかれて
　おしやおもしろ春のさるがく
はなをかぜちりやたらりとふきたてゝ
　やまひある子はよなきをぞする
かぜふけばみ山のはなもちりけにて
　たまをつりをのあをやぎのいと
はるかぜにふらめきわたる松ふぐり
　はなよめごぜもよそのひとかは
青柳のいとこどうしがちぎりして
　はなをおるかと見ゆるはるのゝ
つゝじさくした草わらび手をあげて
　わが身ひとつはもとの身でなし
月やあらぬ春やむかはのぬけはてゝ
　しらけをつたふしづくとく〱
水とりのおのはのこほり今朝とけて
　はるどにいろはのもじの一くだり
やまけふこえてかへるかりがね
　春のきとくにおちやのぬるさよ
むめすぐるわがとがのおの花ざかり
　あつたらみかんくさらかしぬる
正月のちやの子にことをかきばかり

發句

正月六日

なべて世にたゝくはあすのくひな哉

正月七日かうしんに

たゝけとてねぬよにあたる七日かな

わかなさいふ下女、しかられければ

つまれては又たゝかるゝわかなかな
つむおなごそのなをとふ(とへは)もわかな哉

ころも河ちかきところにて

べんけいもたつやかすみのころも河
梅づけはうぐひすのみのさかなかな

春さむきさし

にが〳〵しいつまで嵐ふきのたう

二月十五夜(日夜)嵐はげしければ

はる風に釋迦むり〳〵の軒端かな
き(え)へにけりこれが(ぞ)まことの雪ほとけ
けふ日よしつちのと開けかきわらび
さうほくのうへなる花やふけんだう
くゝりにていざみにゆかん犬ざくら
おる人のすねにかみつく(け)いぬ櫻
花よりもだんごとたれか岩つゝじ
かへるなよ山はとり〳〵もちつゝじ
藤こぶははなみるひとのちやの子哉

新撰犬筑波集

夏部

しやが子に似てこうもいれかし
たう龜のかひこのなかのほとゝぎす

なのるべくむばこゝぞちばどの
月にほしはれゆくそらのほとゝぎす

おや子ながらぞ賀茂へまいれる
たのもしをとりの日にあふ祭して

五でふわたりにたてるあまごぜ
夕がほのはなのほうしをうちかつぎ

山ほとゝぎすあなになく聲
なつの夜の空をきつねにばかされて

けんじの君にもるにごりざけ

ゆふがほのやどの亭主のいであひて
　勸進ひじりときちえくはず
腰に指ひしやくのしるはまたにへて（そこはまたぬけ）
　あらぬところに火をともしけり
いかにしてほたるのしりは光るらん
　地ざうかしらのいひをくはゞや
只まいれたてひやしるのからたせん
　うり（ふり）をもひやすさるさはのいけ
夏の日にゆく〳〵あせをかきつばた
　を（お）んなもぐそくきるとこそきけ
姫ゆりのともくさずりにはなおちて
　あまりあつさにかゞみこそすれ
なつ河の瀬だえ（へ）にゐびのひれふして
　あかつきどにたゝくへうたん
山がらのかごにくゐ（ひ）なをいれかへて
　おり〳〵人にぬかるゝはうし
竹の子のとなりのにはへねをさして
　はたけなかにておうしなきけり
うりづるの下にふしたるうはころし
　こまちもあまになりてかたらへ
花の色はうつりにけりなむめぼうし
　おもふほどこそくらはれにけれ（けり）
よもすがらやぶれ蚊蝿のうちにねて

發句

なかばこそたゞを（お）し鳥よほとゝぎす
ぶつだんに本尊かけたかほとゝぎす
竹の子のふときもおやのめぐみかな
さかふるは大みやうだけの子ども哉
卯月きてねぶとになくやほけ（け）とゝぎす
かさ松はさつきのあめのごようかな
ゆふがほの花はふくべのたむけかな
　六月一日さむければ
ひむろもりこゞへしぬべきことし哉
くちたゝくくゐ（ひ）なにならへ時鳥

新撰犬筑波集

秋　部

すい〳〵かぜのおきにふくこゑ
なく虫もむかばやぬけてよはるらん
　かまくらやまにあぶらをぞぬる
よりとものまたる丶月やきしむらん
　十わうだうにあきかぜぞふく
じやうはりの鏡に似たる月いで丶
　ひろうに見ゆるあきのゆふぐれ
手ばかりは六すんばかり月いで丶
　くものはらにもつくるかうやく
月ほしはみなはれもの丶たぐひにて
　こ丶ろをつけて見よあきのかぜ
雲きりはあるかほんらいなきものか
　かうやひじりのやどをかる聲
おほきなるかさきて月もふくる夜に
　むまにのりたるひとまるを見よ
ほの〳〵とあかしのうらは月毛にて
　くものころもをたれかにぐ覧
いつよりもこよひの月はあかはだか
　かぶり〳〵のあきのゆふぐれ
たなばたや舟まちかねておよぐらん
　いひたきやうに夕ぐれのそら
三日月をゆみかあるひはつりばりか
　しりのいたさにひだるさは(こ)ます
あはれにもこざるに栗をむきかねて
　みつほしになるさけのさかづき
七夕も子をまふけてやい(わ)はふらむ
　おもしろさうにあきかぜぞふく
打さはすへたさるがくのまくずはら
　さらのはたにはたゞあきのかぜ
露さむきふはのせきやの板おしき
　さしなるぜにゝあきかぜぞふく
二三十四五十ほどむしなきて
　どこともいはずちぎりこそすれ
ひさうする庭のくさばなこひめごぜ

おほそれながら（おそれながらも）いれてこそみれ

あしあらふたらひの水に月さして
　うへにかた〳〵したにかた〳〵

三日月の水にうつろふかげ見えて
　いへ（ゑ）はつくれどやぶれやすさよ

さゝがにのばせをに糸をよりかけて
　口なしにきばの有こそ不思議なれ

きくのはなとてみゝ（の）もあらばや
　さゝやく人にあきのゆふぐれ

なにごともみなきく月の耳ひろげ

發句

七夕はよもさはあらじすはりぼし

しぶ色にそむるはかきのもみぢかな

　田に虫のおほくつきけるさし

大わうの國もおそれぬ田むしかな

　月の夜、栗うちなごしてあそびて

山の端に月はいでぐりむく夜かな

かさをきば（きゝば）あめにもいでよ夜半の月

ひめまつのしたばや露のそめふぐり
　さるのしりこがらしらぬもみぢかな
草も木も秋はかはるのいろはかな

新撰犬筑波集

冬部

　ひくふしてみぬ冬のよの月
ゆふしぐれはれまぞぬげよかうや笠
　子どもやおもふまゝにくるはん
なま木にて刋（けづ）るこたつの火はつよし
　月日のしたにわれはねにけり
こよみにて破れをつゞるふるぶすま
　一寸二すんにかゞむ冬の夜
番匠のかねのごとくに身はひえ（へ）て
　ばくちうちこそさむげなりけれ
七つぶのさいみかたびらふゆもきて
　ひたひのしはすよりあふをみよ

行としをうばやおうぢのわするらん
　そでもはふきもゆきによごれて
わが宿にはくすゝはなをしのごひ
　さむさにさるは身をやもむらん
岩をほりたるひのさきをきりにして
　ふりよくみゆるみや人のそで
千早振かみぎぬばかりかさね(冬も)きて

發句

しらやまのかみの本地や雪ほとけ
寒くとも火になあたりそゆきほとけ
　津の國すいだのつゝみを行きて
風さむし濁酒(じよくしゆ)なりともすいたかな
かぜさむしやぶれしやうじの神無月
すゝれたをはたをかまんもかみな月
あつ火をばけに子にかくるこたつかな
すゞ口をふるやはかみいき夜かぐら
いづもへの留主もれ宿の福のかみ
しも風にふるひおとすやまつふぐり
かくふるにいづくへとてか雪ほとけ
　庭に五葉の松あるところにて
つもれはやゆきのごようの庭のまつ
ちやや(茶屋)のやねもるやあられの瀧子哉
山寺のしんぼちかひもちいのこかな
　宗祇十三回忌に(そうぎ十三年ついぜんに)
地獄へはおちぬこのはのゆふべかな

新撰犬筑波集

戀部

　しほはかりにてうくる一ばい
さしむかふ若衆のみめはわろけれど
　つくし人こそそらごとをいへ
箱ざきのまつとはきけどよせもせず
　やぶをくゞりて夜ばひをぞする
鳥のなのしとゝしめてやちぎるらむ
　(を)おんやうのかみのせとの戀しさ
六害(六かひ)の水くむおな子みめよくて

藤わかどのとなをまうすなり
みめもよく形(すがた)もよきがはなたれて
にんげんばんじいつはれるなか
さいおうが馬からせてはとひもこず
たまくらにてやきゝわたる覧
よめ入のさ夜ふけがたのほとゝぎす
なみだぞ河のうへにながるゝ
をよびなき人にこゝろをかけつくり
つめくそほどもおもはれぬなか
うたてさをかぞへて(は)指もおれ(うち)つべし
うへはあくめの見ゆるわが中
戀はたゞはだかがたなのごとくにて
を(お)よばぬこひをするぞおかしき
われよりもおほ若衆にだきつきて
うちはあかくてそとはまつくろ
しらねどもをんなのもてる物に似て
こひはゆみおれ矢こそつきぬれ
八幡ぞおもふといふにつれなくて
たうのばうずのこひをするころ
玉づさやしきみのはなにさしつらん
ひとのなさけやあなにあるらん
玉づさをこよひねずみにひかれけり
くびをのべたるあけぼのゝそら
きぬ〴〵におほ若衆のくちすいて
びやうぶごしなる戀はとゞかず
きくやいかにつかひ〳〵のうらみ事(ものおもひ)
ほんには(お)人のかよふたまづさ
むかしよりその文月のこひのみち
いのちしらずとよしいはゞいへ
君ゆへにじんきよせんこそ望みなれ
めう(お)とながらやよるをまつらん
まことにはまだうちとけぬ中なをり
あなをのぞけるおやをもちけり
契る夜をおとなげなくもさまたげて
東路のたがむすめとかちぎるらん
あふさかやまをこゆるはりかた

新撰犬筑波集

雜　部

公家と武士(ぶけ)とはふたはしら(かしら)なり
たてゐぼしえんより下へおりへ(ゑ)ぼし
四こくはうみのなかにこそあれ
こぎいだす舟にたはらを八ッ一つみて
さてもきとくと見ゆるたま水
河なみにふぐりのわれのながれきて
山に十年(千ヵ)うみにせんねん
ふぐりまでうしほにうつるみねの松
まつふぐりとや人はいふ覽
住よしのきしによりたるたこをみて
ふぐりのあたりよくぞあらはん
むかしより玉みがゝざれば光りなし
ふぐりをしめてきいめかせけり
松の木のこずゑにかゝ(く)るはねつるべ

ばくちうちこそつみはふかけれ
七つぶのさいのかわ(は)らにりんゐして
おやのゆづりのたちぞさびたる
のごふべき紙を手にもちなくばかり
(イ本、此の附句、前句と前後し居れり)
ちごのとく(とくたう)どにあへるかみそり
山ほうしこそ後家いりをすれ
なぎなたを野太刀のさやに指こみ(め)て
うけだちになることぞかなしき
重代のものをもしちにを(お)きそめて
これやまつせの大師(大じ)なる覽
うゐあなをあくる人こそたうとけれ
ひとりとさかをにぐるならちご
はんにやじ(寺)の文珠四郎が太刀ぬきて
つかのうちよりよみがへるこゑ
物のけは太刀をつかふににげさりて
寶をば身にあまるほど持にけり
こがねづくりの太刀のそらさや
をひつかん〳〵とやおもふらん

かうやひじりのあとのやりもち
　足がるにこんにやくうりの行逢て
やりのさきにてさしみせらるゝ
　ひとをつきたるつみ(とが)はのがれじ
あはれにもこゆるかやりのしでの山
　ほとけもけんくわするとこそきけ
釋迦はやりみだは利けんを拔もちて
　うはへくすりをさせるたゞれ目
いかばかりこゝろにしみておもふ覽
　水のそこにも碁をやうつらん
さゝがにの岩のはざまにこうたてゝ
　一筋に阿彌陀の光たのむなり
ちやわんのはたのすみぞめの袖
　阿彌陀はみづのそこにこそあれ
なむといふ聲の內より身をなげて
　わう(ふ)じやうにんはいかになりけん(なるらん)
らいがう(ふ)のあみだは雲をふみはづし
　むさしをさしてとんでこそゆけ

べんけいがつぶりも(や)はちや恐(の)ざ覽(ねらふらん)
　客人やさしあひありて歸るらん
そう(ふ)しやどころにかくるはちの巢
　やくしほとけやうそをふくらん
よね山へ八てうどのゝまいられて
　とんぼうに似たる虫とぶすまの浦
とふ人あらばあぶとこたへよ
　しまがくれゆくひとをこそきれ
ほの〳〵とあかしりざやの太刀拔て
　あぶなく見ゆるあづまぢのすゑ
うちわたすさのゝ舟ばしあなありて
　にが〳〵しくもたうとかりけり
みな人のまいるやふきのたうくやう
　かさをもたねばちやへこそよれ
いとゞだにくふべきもちに雨ふりて
　はこはしりにぞ見ゆるいしやま
觀音もこよひは慈悲やたれぬらん
　坂のもの內野のちやに腰かけて

しんきくはんすのつるやめされん
　あはづのはらのちやこそにがけれ
かねひらやこがしをのみて歸る覽（イ本、此の附句、前句と前後し居れり）
　あちへむけんけこちへむけんけ
小兒（ちご）にやからの心經をしゆらん
　山のおくにはなにわらふ覽
たに川（河に）のこいしながれてころ〳〵と
　かつけやみ口ばかりこそ達者なれ
いるやいでゆのやまとことの葉
　あふみさるがくのふぞへたなる
水うみのおきなおもてはしほもなし
　かみばかりこそたうとかりけれ
さいしきしほとけのはくは皆はげて
　とても死ないかでか腹を切ざらん（め）
たゞまつくろになれるいりまめ
　さくらがもとにおほきめしうど
所司代のおもてはまりのかゝりにて
　ゐ（い）んをむすべる手こそくさけれ

にんにくの衣をきたるごまのだん
　振舞はぬ眞言宗のゆふまぐれ
にぎりこぶしはゐんかあらぬか
　なにといへどもふるまひもせず
すげもなく（なくも）庭のかさまつつたちて
　あまりけぶりのたつぞかなしき
たかきやに上りて見ればやけまはり
　あきかぜふけばなをる血のみち
よられつる野もせの草やくろくすり
　六十三はうしろにぞなる
高野にはしちくをを（お）ひのあしにして
　とをたてぬればあかくこそなれ
きんしんの九つまではちもたらで（す）
　毛のあるなきはさぐりてぞしる
弟子もたぬ坊主はかみをじぞりして
　毛のあるものはさせぬなりけり
ひつしきに高野ひじりは紙をして
　いまは念佛のちうけんぞかし

しやうこをばたち持樣にひつさげて
　三笠のやまをたつるせいもん
天のはらふるさけのめとせめられて
　おほさかづきをこのむ山ぶし
かつらきやみねに五ど入七どいり
　とんせいしたるものゝふのはて
安うりちや立るざたうにやとはれて
　ふくもふかれで(す)するもすられず
われ笛のさらはさゝらになりもせで
山ぶしのかひわれすゞのを(か)はきれて
すゞり水うみにほこりのたまりきて
　ますにぞ似たるこのかゞみやま
あめの魚いざたちよりてみてゆかん
　きりたくもありきりたくもなし
ぬす人をとらへてみればわが子なり
さやかなる月をかくせるはなのえだ
こゝろよきまと矢のすこし長きをば
　まつかぜにてやくびをしむらん

たかさごのおのへのつらに花さして
　いか樣に地藏菩薩でおはします
戸をたてゝをくみちのつぢ(じ)だう
　二三百くはんくひつやしけり
筆ゆひのやどの客人かさなりて
　あのみやでど(た)うこのみやでど(た)う
のりつけぬ馬にかんぬしのけぞりて
　よくこそなをせうたのこしを(お)れ
西行は醫道のかたもこゝろ得て
　おくばをかみてはらをたてけり
やきごめにすべきかたきをうち損じ
　すでに我腹をきらんとしたりけり
けふさめづかのかたなをぞさす
　むかひの山におほきゝつね火
けだ物のしそくもたぬはなきものを
　つかをにぎればぬめりこそすれ
拔て見るみはなまず(つ)おのかたなにて
　つかのあたりにあなはうそ〳〵

尺八をかたなのわきにさしそへて
　雲のうへにもゆやわかすらん
くはんすをば自在天までつりあげて
　こゝろほそくもときつくるらん
庭とりが（の）うつほ（を）になるとゆめにみて
　しのぶとすれどこゑのたかさよ
かすがのゝ若むらさきのすりこばち（ころも）
　やくしのまへでつゝをこそふれ
みあかしのあぶらやみなに成ぬ覧
　いかにへのこのかなし（くろし）かるらん
ともにはやおやはうたるゝ舟いくさ
　わらんべのえんにてくるふ薬師堂
もてあそびぬるるりのつぼ〳〵
　あらはらだちやみつにこそなれ
うはなりのを（お）とゝしの子を今年見て
　此ほどは屛風の内の住居して
うちはらはるゝしみのあはれさ
　あながちなりとひとやわらはん

まふくろも又まふくろもをなごにて
　かつぎよせたる城のほりぎは
たけ山のふもとにつゞくゑほしがた
　あしさしこめていざこゝにねん
つの國のなにはくはずとまりぶね
　またまたう（ふ）とになりはすまさず
うちやみてのちもこはるゝばくち錢
　かくれがにだに錢をいれけり
新しきくはんすのふたをあつらへて
　さのみ物をばくはじとぞおもふ
こねずみを（お）しつぶしても何かせん
　さむ（ん）せうの目にも涙やこぼるらん
おやはくゝりにかゝるこねずみ
　わろさする頭につちをあてがひて
ねごろほうしの坊のむねあけ
　さる兒（ちご）とみるよりやがて木に上り
いぬのやうなるほうしきたれば
　われもわれたりつきもつきたり

牛の子のつめのさきまでおやに似て
　こほりのうへはゆくもゆかれず
新關に旅人なやむ津のくに路
　おれずまがらずとをらざりけり
ためし物矢じりもやじりさねもさね
　人をばくはでひとにくはるゝ
つみためてあへ物になるお(を)にあざみ
　お(を)にとはいへど手をぞうしなふ
一くちにくふべきたこをぬすまれて
　かへすがへすもものをたまはれ(る)
ひさうする曲をしへんまひのそで
　坊のさんせうのめをぞつませそ
いとゞだにぬたしやうたうと聞物を
　小町もあまになりてかたらへ
花のいろはうつりにけりな梅ぼうし
　や(わ)はたのやまをおがむあま御前
今こそあれ我もむかしはおとこして
　うなぎだゆふぞまひをまひける

宇治まるのすしにする(なる)ほど人みえて
　くはぬいひこそひけにつきけれ
すし桶のふたをあくればなまづにて
　ときをしりてやつりをたるらん
どうとうつ太こうばうのゆふまぐれ
　はやしのかげにだんぎをぞする
このみくふさるひき知識ひとり居て
　天狗にもなれるかはねの生(生いてこ)ぬらむ
くらまのてらにふるきすりこぎ
　けふもくるゝ(くれぬ)とかへるばんしやう
山寺のいりあひの鐘をこしにさし
　かうや六十那智は八十
權現や大しのまへのはつお錢
　都よりかひの國へはほど遠し
おいそぎあれや日はたけだどの
　むねんながらもうれしかりけり
さりかぬるおひめ(老女)を人にぬすまれて
　はり手向よとゆめに見えけり

はれ物のつぶれぬさきに身まかりて
なき人やつりたれぬらんわたり河
ほころびや經かたびらにありぬ覽
たゝみさし道具まつ間にとんしして
　ころものうへにはかまをぞきる
人はみな腰よりしもを(た)すてかねて
　のどのかはきはたゞふじのやま
田子の浦に打出てみればちややもなし
　番匠のとんせいしたるなりをみよ
さいづちあたまそりぞわびぬる
ひたひにのこるてうのさかやき
　さうし一でううせはてにけり
わかへやにとき〳〵物の(か)ちがひだな
　とりもとりたりさてもせきもり
あふさかの山のなりなるおほひたひ
　にぎりほそめてつッといればや
はぢや壺の口のせばきにおほぶくろ
ふつかゑひにはかみもあがらず

ついたちのいはひをあまりし過して
　けッけをやする伊勢講のぜに
道者ぶねさながらさんをおき津なみ
　うばそくうばひきやうへまいれ(ほ)り
法をきくふたつのみゝのひく〳〵に
　ようじんわろきおびくにのてら
まつの風(まつかぜに)小袖のつまをふきかへし
　を(お)んやうし輿に乘てや歸るらん
さきへひかせてとをるむまの日
　下手さるがくぞ(の)にしきゞ(た)にする
きりはたりちやうと遶ふを拍子にて
　地をくゞりてぞてんへのぼれる
うぐろもち黑燒になるゆふけぶり
　くちのまはりをなにゝたとへん
髭なしがこぎゆくふねのあさぼらけ
　大日やはだしになりてはしる覽
こんがうかひ(い)にいづるあさいち
　たうとくもありたうとくもなし

とぶ鳥をいのりおとしてくはれけり
　ざぜんの僧ぞたふとさうなる
魚くひしくゝひのはねをふとんにて
　まへや／＼とえ（ゑ）ぐちにぞいふ
世の中をいとふまでこそかたつぶり
　さびしくもありさびしくもなし
世をそむく（いとふ）しばのいほりに錢もちて
　きしのかげにてなにをいふ（わらふ）覽
すみよしのうらにながるゝ繩のきれ
　ほとけの弟子のこもるがやぢ（し）やう
あのくたら三百よきをひきぐして
　やまの大しぞ河にながるゝ
行水に字かくは筆のあともなし
　いびきのを（お）とぞたかくきこゆる
となりにはとうしみうりの宿かりて
　ふくりとしたるあらましのすゑ
世の中をすてられればこそむまのまら
　つちのなかにもしはぶきのを（お）と

入定の大しや（は）かぜをひきぬらん
　さいしやうどのぞはやわざをする
門わきの堀をひらりとゝびこえて
　おもしろく橋をかけたるすきの庭
ちやの湯のおけのかつらきのかみ
　いまぞたうときおなりなりける（り）
はくはげて本の木になるふるほとけ
　ほとけのまへでせす（マヽ）りをぞかく
けんとみてしたくぞおもふ文珠しり
　高野の大しなのみのこれり
くふかひのしるのかぶらを分にして
　夏の日や五條のうへに照すらん
かんぺう（ひやう）になるゆふがほのやど
　ぎやうじやは弓をもちていでけり
とぶ鳥のいのれどおちぬそらをみて
　ほし月夜にぞようじんをする
もたせたるかまくら山のさやはづし
　たづなもかゝぬたかさごのうら

しほ風にふらめきわたるまつふぐり
　聞ばたゞ地獄のさたも錢なれや
たてやまりやうを守護ぞおさむる
　わらんべの呼はる聲におどろきて
(い)はぬるやさいのかはらけのこま
　日本のものゝくちのひろさよ
だいたうをこがしにしてや飲ぬ覧
　いりたくもありいりたくもなし
貧僧のすこしもちたるまめのたね
　わらへばわらふなけばなくなり
子を思ふもりの巣(からすご)がらすたかを見て
　子をおもふゆへつちにふしけり
おこせどもふかくねいりの芋がしら
　さびしきものと人はしりぬる
夕ぐれにうるしのおけに腰かけて
　すきの衆あづまの旅におもむきて
たづぬやすりちやつぼのいしぶみ(や)
　音にきく猫のみゝとはこれならん(こそ)

へたのかきたるとらのいきを(ほ)ひ
　あつたらとらの毛こそはげたれ
さのみなどそがの十郎ひねる覧
　中間なりのしたるたゞみね
絲すてふわが名はまだきたちもちて
　山ぶしのくるあし音や高からん
くきはなれたるえんのうばそく
　ふどうのけんやさびみがくらん
一にぎりくりからすなを手にもちて
　ふどうのはらはふくれたりけり
をんたらやたかんまん地うを取食て
　十郎どのゝ忌日なるべし
おほいそのとら屋ゝとよむ經だらに
　七世のまごにたとひあふとも
浦しまがはこをしさしてたゝれめや
　かくもかゝれぬあまのはしだて
うらしまが後のかたみにはこをして
　よるはめされてひるはめされず

かつらきの神の(ゐ)さいくの岩はしや
　にぎられんものかは太く(ふ)たくましや
かたなのつかにかくる(かゝる)さめむま
　土佐までもくだりこそすれ京の者
こはきんたり(ち)のちやうすがめどの
　大はんにやはらみ女のきたうなり(して)
たきやう卷第さんのひもとけ
　あはれや(に)しゝはいづちゆく覽
老ぬればほねかはにこそなりにけれ(り)
　太布(たふ)にてかざるけふのにしきゞ
てのごひは懸ながらこそくちにけれ
　づきんをだにもいまはかづかず
ともかう(ふ)もせしむかしこそ戀しけれ
　おぼろ月夜にわたるかうもり
照もせずくもりもやらずすにむせて
　いしのとりゐのまんまへにあり
極樂をとをしとたれかおもふらん
　みつのさかひのみちの世はしさ

ながらえ(へ)やはしに陣とり鬪ありて
　勸進ひじりさんぐうぞする
ひしやくのすゑ長野が舘をよそにみて
　つゐにはわたす大はんにやきやう
おふ(ほ)せたる六百貫をせめられて
　今朝のおしるのとりはものかは
いつ食もあかぬはかれのなますにて
　からきはひとのいのちなりけり
三せうのふよりやまひやおこるらむ
　口をすふとてつかればしすな
人によりやりお(を)とがひのあるものを
　あまりさむさにかぜをいれけり
しづのめがあたりのかきをおり燒て
　ふくろはふたつそらにふら〳〵
大こくとほていは鶏(とひ)につかまれて
　人にはあらで人でこそあれ
うすがみに入といふ字をうらにみて
　へそのあたりをつきほせり(ほせるなり)けり

なま柴をこがまのしたにおりくべて
　ゑひぬるときのじゆくしくさゝよ
のまざれど(ほ)しぶかきが(いろ)ほの上戸衆
　あ(わ)はするごにひちめきぞする
かみそりのどだいのしたにたまり水
　かしらぬらしてつッと(いれ)いりけり
みのをきてかさきぬ人のあまやどり
　是非共に又も來らばうちやせん
うどんたらい(ひ)でかへすきやくじん
　ほとけにふッと毛こそお(はこ)へけれ
道つ(じ)ちのそとばにうしの身をすりて
　ほとけをふんでたすかりぞする
たに河にまはるかたなきそと(まろき)ばばし
　い(ろ)るりのあたりふねぞはしれる
すゝきたくそのお(を)き中にほのみえて
　ほとけをのみてとぎやくにぞする
極樂のたのもしさけの二日ゑひ
　水のそこなるいしははれもの

うみわたるろかひは舟のをしぐすり
　水(うみ)のなかにも智者はありけり
あしの葉にのりしだるまの影見えて
　あぶなくもありめでたくもあり
むこいりの夕べにわたるひとつばし
　ゐるも居られずたつもたゝれず
はぬけ鳥つるなきゆみにおどろきて
　棊うち双六しやうぎさす(をそさす)なり
濱みればきほひをくれのこまくらべ
　十七八はおにゝこそなれ
さゝぎづるかはらの棟(のき)にはひかゝり
　つくたびごとにしるはじく〳〵
山でらのかねのしもくはなま木にて
　みづのそこにも武士はありけり
つりばりにかゝりてあがるかぶと貝
　神もがいきをするとこそきけ
さんわ(ふ)うのあたまのうへは(や)ひ(ゑ)えの山
　ゆみのつるこそほゝけたりけれ

このみこのまへしどけなく口よせて
　高野より天王寺にぞつきにける
大師太子はおなじかながき
　さてもうつくしばくちうちなり
皇帝はききあらそひせうぶして
　しりをかゝへてはしりこそすれ
としよりの五里あるみちを一里きて
　こがねつくりをうるやにやくそう
歸るさのこじりを見ればまつきにて
　思へ共しづの身なればしのびわび
さがみかたなのあくめおほさよ
　ほとけもゝのをを(お)ひたまふかな
嵯峨の釋迦しやくせんだんと聞柄(ときは)に
　さとばなれにてはがれこそすれ
草むらのなかにすてを(お)くうしのほね
　あらおそろしとやくるなりけり
かたきにはいかなるいてのあるやらん
　ゆるりとゐてはまたかしこまる

みな人のまとはに(へ)いつるなりを見よ(こ)
　かしらもひげもぬれわたりけり
雨ふりにいものはたけやおこすらん
　よぶかよばぬかこゝろもとなさ
さりともと思ふとなりのわんのを(お)と
　ひとまるのうたのあぢのむまさよ
あしびきの山どりのしるたれもくへ
　あふみのうみぞひえてわたれる
養生にしかからさけのしるをくへ
　しやうじのさいにまじる不精進
雉やきをよく〳〵みればたうふにて
　つみをおもへばおこなひもせず
くめばひるあか井の水にうほ(を)すみて
　てらの新發意へりをこそきれ
手にあまる大なぎなたをふるたくみ
　仕付なき人は灌子のふためきて
これやちやお(を)けのそこつなるらん
　しりのあなよりけぶりたつなり(らん)

さしよする火ふきの竹のふしこけて
　せんたくせんをあんじこそすれ
なれぬればころもの虫もかはゆくて
　あやしやさてもたれにかりぎぬ
この小袖人のかたよりくれはとり
　哀世をわたりかねたる手さるがく
をひめのふちのはしのくはんじん
　下手さるがくに似たるばけ物
拍子にもあは(わ)ぬたぬきのはらつゞみ
　あとなるものよしばしとゞまれ
ふたりともわたればしづむ橋ばしら
　わかきもこしのかゞみこそすれ
ゐびのこのむまれつきより親に似て
　ねんぶつま(甲)ふし雨にぬれけり
たのみたるなむあみ笠はやぶれつゝ
　ひとをもぬらしわれもぬれけり
あめふりにたがひの禮にかさぬぎて
　むことりもなしよめとりもなし
かなごよみおほくのことをかきもらし
　にぎりこぶしにちかきこつぶり
新發意が二わ(ふ)うのかたにとびあがり
　福を持れんかをも久すべきなり
いのれやいのれ辨才天神

追加

（校訂者曰、犬筑波の古活字本に大、中、小、の三本あり。こゝに覆刻せるは其の大本にして、その中に洩れて中、小の二本にあるもの廿八句を追加として左に揭ぐ。詳しくは解題を見らるべし。）

　おきんとすればひきぞとゞむる
みどり子のけさしもそでのうへにねて
　かたにかるくてもちやかねけん
つりがねをちやうちんうりにことづけて
　よし野ほうしはやまか(らカ)うとなり
とこなけるちごのさかなにくずだんご
　はつかあまりは人のおわせず
このほどはとふか〳〵とおもひしに
　思ふまゝにはいはれざりけり

山びとのたき木にはなをおりそへて
　にが〴〵しくもおかしかりけり
我がおやのしぬるときにもへをこきて
　わが身ながらもたつとかりけり
目にほとけかしらに神をいたゞきて
　みぎもひだりもさいはもらさず
人ごとにもちたるものはひざのさら
　手をにぎりてはあびらうんけん
かぎわらびなまにへなるはこしめきて
　はなのしたにも松むしのなく
くちひげをちんちりりんとひねりたて
　一二〳〵と文字ぞみえける
ゆきふりにはかけあしだをはきつれて
　をひであれかし〳〵
あねの子のうまるゝごとにおなごにて
　はなしたゞ聞てわらはぬ人もなし
めにしばられしなはのわび事
　れんがのかへさあめにぬれけり

からかさのさしあひありてかしもせず

新増犬筑波

油糟・淀河

貞徳

あぶらかす

長頭丸

春

霞の衣すそはぬれけり
天人やあまくだるらし春の海
大ふくを座敷うちへやこぼすらし
春立てふむ雪汁やあがるらん
碁盤のうへに春はきにけり
宵のとしの舞は三番能二番
力持するや霞の袖まくり
いなば堂やくし参りは長閑にて
歌合十首過れば四方拜
あな嬉しやな餅いはふ比
不食せし時分は去年の寒ざらし
去年まではなかりし錢をつたぎそめ
鳥さしが先うぐひすを指初て
武家かたにけふは具足の着初して
しうとの爲の若ななりけり
母かたをつがする春のゐぼしぎに
うそなふき〱花なこそみれ
盛なる梅散たりと笛の曲
阮籍が朧月夜に立出て
雪まになりぬさけさやの竹
青柳や楊枝にせむと尋らん
こころのおさな花をみる比
池の房春の山邊へよび寄て
くらま山あさるは春のわらべ共
大長刀に春風ぞふく
鶯のほそはぎ誰かねらふらん
景清はくがの霞に立あがり
夏またで野邊の香薷や茂るらん
ちやうはんが身には瘟病取つかで
武者ぶりもしづかは花の姿にて
尤こそ人はみるらめ

若衆の御所望に折花の枝
ねはむざう鳥獸も皆なきて
子をおもふ燒のゝ雉子燒死て
義理能は群集をしたる永日に
　祕藏の花の枝なこそおれ
鳴からす巣をかけさすな作り庭
くらべんとあらそふ友の玉椿
我一と卯月八日の手向して
茶湯者が春の始のはれの客
正月の餅で泣子をすかしかね
　春の野にいんぎむかうの始りて
腰かゞめつゝ若菜をぞつむ
みれば馬からおるゝ朝鷹
禮をするかやあぐる蕨手
聞すへ鳥に息たてぬ人
公家や子日に出給らん
　吹かし風のふかであれかし
夏すゞむ林下に春は花咲て

咲花を立かくす雲のつらにくや
寒歸る比は友なき風呂のうち
春道にきざみて出るたばこ賣
　夢の中にもいたくこそあれ
花ゆへに旅ねの尻をぬすまれて
あたゝむる針に氣がつき息出て
源氏供養はだしで舞や花の下
花に風きつきをみるも憂世にて
ねごき人たゝきておこす花の枝
　おしや面白春の申樂
いく度も祭のあらば興福寺
　玉なつり緒の青柳の絲
干をけば鞠共みえず霞日に
大つぶな露をちらせる川浪に
　尻毛なつたふ雫さく〳〵
春雨にひつしきぬらす小から笠
あたゝかな涙や念者こぼすらん
小便をしさして雉やとらるらん

あつたらみかんくさらかしぬる
丸壺の引茶もいらず花散て
東風に舟京着遅き肥後國

夏

山郭公穴になくなり
竹の筒で天をみるまも夏の月
五月雨の雲まは月のまろさにて
五條あたりにたてる尼御前
涼みけりこれ惟光が母なれや
つめられておどりまはれど永驛
生栗をごりめかさむも今一里
三星になる酒の盃
八的をいつしか秌の日は暮て
ひとつふたつ白菊さけば花見して
友は二人かぶとの祝ひ千秋屋
さしなる錢に秌風ぞふく
やさしくも草花や賣て歸るらん

旅籠するあしの丸屋に腰懸て
ごこともいはず契りこそすれ
うかれめがうか〱出る月の夜に
ふるまへとあばるゝ友に秋茄子
文の紐とく間をそしと身にしめて
月夜にはやもめ烏が行あひて
さをしかは見つけ次第や妻ならん
おほそれながら入てこそみれ
こきり子を主のおとりに請取て
ゆびむさき我等が役の酒のかん
田をかればたうとき僧のお勸進
お佛にうすき手向のまめのしほ
しめたきは月にお兒のふところ手
おかたみの扇は袖ぞ置どころ
秋の日の御成にいそぐ風呂かけん
はださむみ親のはじきをかりよせて
戸は秋の宮に盜人先はしり
みきにせむとをしの米の濁酒

まつすぐな夏野の草に日がさして

　曉どにたゝくへうたん

山桝つみねぶらじと待時鳥

夏の夜は宵にのみほす酒乞て

　おり〳〵人にぬかるゝはうし

我とのごへ夏は汗かく腰刀

腰にさす扇うしなふ夢の中

　おもふほどこそくらはれにけれ

牛馬の通路近き麥畠

夜な〳〵にせんかたもなきのみ虱

尋れば鼠の穴へ引あふぎ

目にみえぬ狐のかよふ瓜畠

大勢の祭客人は上戸にて

秋

　すい〳〵風の荻にふく聲

垣共をくゞりて烋やきにけらし

初秋におつるこのみは甘からで

くる烋といへど目にみた人もなし

秋の野に膏藥賣や宿るらん

おもしろき濱邊の月に茶を立て

　十王堂に烋風ぞふく

捨てをく古筆やなる蛬

六はらの月や昔をおもふらん

ふげんざうきばに成てや落ぬらん

地獄まで盆は涼く成ぬらん

　雲のはしにもつくるかうやく

烋風の刀のさやを吹あげて

七夕のへそをや今宵合すらん

あかゞりやちぎれ〳〵に渡るらん

　高野ひじりの宿をかる聲

日中に紀の川霧が立くらみ

　馬にのりたる人丸をみよ

ひる舟の燒るにかくる秋の水

旅中は月景清がむすめにて

　雲の衣を誰かはぐらん

入月やひえの山よりおちん坊
天人もつねは渡らぬ銀川
　いひたきやうに夕暮の空
七夕のあふをみつけた人もなし
秋の歌。さびしき躰が得物にて
鷺鴉なりもみわけぬ霧おもて
とてもこぬ人にあいそも月出て
髪ながき人をうらやむおどり衆
おそしとてそしるやしらぬ月の罰
くすみてもいなづまの世と理屈者
色〻の虫にも人が名を付て
口ごもる病の霧や晴ぬらん
免こふや算用しらぬいなば殿
　尻のいたさにひだるさぞます
木の實をもえとらず岩に腰懸て
永夜をまづしき僧とだきあひて
栗柿も痔もちは毒と養性し
扇かふ人の行衛や御影堂

はすの糸で袈裟やをらふと思ふらん
　源氏の君にもるにごり酒
鐵黒のやどでそさうな祭して
ゑぼしやがいはふと柴や茂るらん
　勸進聖ささはえくはす
祭過る大津坂本の二日醉
俊乘坊夏は腹をや下すらん
　あらぬ所に火をともしけり
春はみないなせてをいて遲櫻
獵きかぬ時は鹿子も近付で
茂る野や狐が爲の里ならん
鵜づかひの共幽靈や出ぬらん
五月雨もかまはず咲は躑躅にて
　地藏がしらの飯をくはゞや
夏やせのはらみ女は口わろし
がき共がさいの川原に涼みして
　瓜をもひやす猿澤の池
婇またで采女が靈や祭るらん

夏の夜の月になら酒ふる舞て
　女も具足きるさこそきけ
卯花をこのみし人は留守にして
祇園會の舟は神宮(功)皇后で
　あまり暑さにかゞみこそすれ
若竹をさゝくにせむと火を置て
夏の日もくずの小鮒のにせこどり
　うへにかた〳〵下にかた〳〵
二階にも宿かり行てうつ衣
大錫を野山の月に分のみて
霧まよりちよつといすかの嘴みえて
紅葉ゝを踏じと人のあしりこき
相撲取二王のやうな手もとして
　家は作れどやぶれ安さよ
穐山のあらしぞきつき市の場
番匠のはだ寒さうな麻衣
あたらしき窓の障子に秋の風
雨露に田を守ものは難ぎして
しゝどもは飼置事やならざらん
　くちなしにきばの有こそふしぎなに
霧まに城の堀やのりこす

冬

　子共やおもふまゝに狂はん
繼橋をひろくかけたる雪打に
手習をさせむ双紙の神無月
ふたするは布袋の居まのいろりにて
老猫はいろりのはたに眠るて
　月日の下に我はねにけり
立判のさむげなゝりは嫌にて
うらやましやね有やどの冬籠り
寒き夜は明よといふ字腹に書
としこしに天子の旗を夢にみて
寒ければ佐夜の山邊に逗留し
冬山の穴にそだつる猪子ども
大雪にふりこめらるゝ三輪が崎

一寸二寸にかゝむ冬のよ
ぬかえびが下にみえたる朝氷
わらしべ一灸こそおろせかんの前
雪の中も鍛冶やは鎹を拵て
ふる雪に尺とりむしや穴まどひ
雪分て盗人はいる緣の下
とし暮て腰のいたみやまさるらん
さわらびが年の明日を待かねて
我がねぬるいろり璺はみじかくて
ばく地打こそさむげ成けれ
嶋の名の八丈ばかり雪ふりて
ひたひのしはすよりあふなみよ
しん氣やみ藥くひする雪の中
百歳をくらせと祝ふいんの子に
佛名の僧達の眉はすせうにて
さむきとしとが人おほき燒しるし
いたさうにあすの春待ゑぼしきて
雪打に目の用心を誰もして

寒風にあてられ痛む岸の草
鉢卷に雪のちりめんひつしめて
高砂の能の面のすゝはきて
袷も帷も雪にゝごれり
をく炭のこはいを風が吹立て
寒山をさむさうにかく繪は古こ
冬がるゝしゆろ引たをす泥の上
年の行斑女がなりはあはれにて
天氣わろき師走の雲に置入て
としくるゝ伴のみやつこ不便して
高砂の能の日あれてひえの山
冬むきに出ていなばの園隣
みだてなくかるゝ薄や玉かづら
不力にみゆる宮人の袷
めしをさへくはでや米を神ゝ樂
あらよねに霰やはきて備らむ
霜雪にみとしろ小田やくさるらん
參錢もいかにたまらん神無月

武家方になびく天下の年の暮
布施をとる法の師馳のにぎめきて
短冊も涙しぐれて打くもり
さむさにや千はやふるふてたてるらん
落葉の錦の戸帳賣に出て
ろうさうのきぬを師走にはりやりて

戀

藪をくゞりてよばひなぞする
梅が香を袖にたひたとおほせかし
女かと狐にまよふ座頭の坊
つくし人こそ僞ないへ
御せい文かきて給はれもじの關
紫のかのこの小袖をくれかし
しぬるとておやすや生の松ふぐり
みやす所ぬすみてのせし松浦舟
栞はかゞみの神をちかふべし
かはらじと愛染川が末たえて
かしこくも都へのぼる玉かづら
見ずはいやさよ姫よりもよき女
來てみんとあふの松原あひもせず
陰陽の頭のせゞの戀しさ
君ともとあひし畠の土御門
門立も辻風ふけばならずして
人間萬事いつはれる中
我君の正直さにも打こみて
忍路は名をかへ又はさまをかへ
懇に我目にみずば文やるな
とつくりときけば立名は無名にて
いづくへかうられて君のおはすらん
かんざしは御無用さかんさゝめ言
替らじとさらば誓紙を下されよ
たから物いづれもかへすかぐや姫
氣つらはぬすがほをみたらいかならん
鼻ばかり大なるとて賴なよ
內證でとしをいくつと聞まほし

侘かねる先へくれずばなびくなよ
お佛と君を額し墓なきよ
　涙ぞ川のうへにながるゝ
しめゆるあかたみの鼓だひてねて
かさゝぎの橋さへもたぬ我あふ瀬
さなしかも戀ゆへにこそはかるらめ
立ならびぬる夜は踏皮をぬぎかへて
糸巻の袴をみるもいとしくて
ほしきせか男のきものしめくゝし
君がせきだ枕にせんと取てきて
瓜むけと仰られしも嬉しくて
地をくゞりゆく笋もうらやまし
下されしみかむはくはず秘藏して
類風が心の中もいたはしや
待夜半は宇治の橋姫拙者にて
　つめくそほどもおもはれぬ中
御垢にとまいればいれぬ風呂の中
お楊枝の先でなり共つかれたや

　そへばあゝめらみゆる我心
あか落ぬ洗小袖のうらみわび
もえやすき胸はわらびのたゝにゝて
あふ事は涙をやむる薬にて
ひとりぬる夜はゑのころの音に鳴て
りんきするつらは蛇よりもおそろしや
　及ばぬ戀をするぞおかしき
玉むしの双紙ににたる我がおもひ
殿ほしといふは七になる子にて
文章を竹の先にし付やりて
二階へとよばひに行ばはし引て
老が身もさながら枕物ぐるひ
のみの息も天へあがると打なげき
やる文も中でとむるやしらざらん
金銀をつくしてこそは近づかめ
我が心なにとなやます繪女房
せめて手をだせと云度高もがり
程近きあたりの姫は氣にいらで

百年の腎の藥をこしらへて
しんだらば別の妻をばよびもせで
いく度もきたなき哥を讀やりて
　内はあかくて外はまつくろ
閨のほかげ忍びてのぞく闇のよに
泣あかす我目に血こそよりにけれ
妄執がよるは機をるにしき塚
玉づさにそへて夜光の玉もがな
よるひかる玉もの前をあそばして
　戀は弓おれ矢こそ盡ぬれ
つまゆへに自害もえせぬ城の内
棟上にやかたくづれて君もこず
かゞしがや杭はてられて身はやせぬ
李陵にもおとるか聟に身はならで
　だうの坊主の戀なする比
獨ねてうめくや鳩に似たるらん
みめのよき後家や旦那に出來ぬらん
門前の子が若衆に生立て
お經かくふりして文や書ぬらん
剃刀でつめやはなして送らん
　人の情や穴に有らん
音信も錢をやらねば絶はてゝ
尺八をふかばあはんとあひづして
蟻としらでありと契りし夢の中
偕老と契るはふかき中にして
かはゆしと云しを耳に聞置て
かな山のまぶと申かほれ心
お爲なら井どへ成共落いらん
なぐさみは形見のお笛吹ならし
いきてよも口をすはずばいられめや
關守も築地のくづれ用捨して
　くびなのべたる曙の空
屛風ごしのぞきて惜む衣ゝに
一夜寢はきらるべしとの兼言に
お目はゝやさめたもしらず跡にねて
別路に鷄共がなくを見て

衣ゝを手飼の鶴が不審して
若衆どちせいくらべする別ぢに
きぬ〳〵の涙に月をみうしなひ
あふのひて別の歌や案ずらん
おきて別れゆかんとするに腰ぬけて
君をおひいなんと巾別さま
屏風ごしなる戀はさゝかず
逢てこそ恨ははれぬ小上臈
穴なくば障子をやぶり文をやれ
くどけ共わけきこえぬや咳氣聲
これ持が袖に女の立すがり
君はまだひるなあそびをあそばして
盆にも人の送る玉章
生て世におはすと聞ばうれしくて
胸の中は常におどるとかこつらん
御意に入はうれしかるべき香合や
鯖よりもしたゝるしとやおぼすらん
聖靈にまぎれて通ふ道もなし

命しらずさよしいはゞいへ
毒なりとねぶれとあらばねぶるべし
戀の身は只長いきをねがふべし
男くふ人と聞共そひはてん
かよひぢはよな〳〵堀へ飛こみて
御意ならば虎伏野べも通ふべし
せい文も君さへおちはやぶるべし
横目ある若衆につんと打こみて
鬼のある所成共忍ぶべし
遠のゝ虫吹よせて參らせん
こん神の方もよろこぶ後家入に
御法度の若衆狂ひも我はして
火の中へ君が入なば飛こまん
めなさながらや夜な待らん
かたわもの互にしらず契をき
片糸のこなたかなたで出あひて
奉公人月に六さいの契にて
身にしれば不便や月に鳴烏

戀路には三輪の神さへ御迷惑
七夕のけふを我等はうらやみて
夢ならで參あふべき隙もなし
しのぶ身はたゞ盗人にとならず
いむと云と庚申はよきかごにて
夕めしに腎の藥の汁をして
こをんぞに一日香をたきしめて
　逢坂山をこゆるはりかた
鎌倉の御所比丘尼かやなつかしや
戀の文入て旅だつ具足びつ
つるかけか山科邊に妻もちて
露けしや殿もたぬ身はさねかづら

雜

　公家と武家とは二かしら也
國司へも守護へも瓜をまいらせて
八幡はよき氏神でおはします
なべ取をかぶとのわきにかざり付
治めぬる御代は弓矢や和哥の道
承久の兵亂はうき世のためし
　四國は海の中にこそあれ
亥におろし卯に引上るいかり繩
九州の指圖は京に地つゞきて
舟にてややせたる猿をのぼすらん
　松ふぐりとや人は云らん
傾城の門立といふなぞ有て
むめる子をよく〳〵聞ば女子にて
　ふぐりのあたりよくぞあらはん
料理者に蛸の包丁打まかせ
大風に大浪かゝる末の山
よこねこそうみちが出てなをりけれ
寸白のさがるにきくや水藥
霜風にすへし灸のくさくして
　ふぐりをしめてきいめかせけり
法花宗はいつち勝劣中わろし
ほしきせか松の下枝にかけ繩し

寸白やおこればきつき物ならん
めにまくるめおといさかひみぐるしや
るあひしる物にはならぬ相撲取
のごふべき紙を手に持泣ばかり
たゞれていたむ子が鼻のした
血どめ薬やこぼすこめらう
しなんとやおもふこの秘結やみ
すみたふれにやまけて腹たつ
墨つく〱皃をしらぬ平仲
不すをねぶりしまねの狂言
こぼす茶椀やわるゝ小ゝ性
山法師こそ後家入をすれ
てゝのなき兒を憐む風情にて
うけ太刀になる事ぞ悲き
ちやうはんが判官殿をあなどりて
これや末世の大師なるらん
名もいはず入定をこそしたりけれ
ひとりさ坂をにぐるなら兒

誰人かがごうぜいしてをどすらん
塚の内よりよみがへる聲
小刀ですくひのますゐくろ薬
氣付にやなれる小鹿の袋角
はつる迄隅田川原の能をみて
十王の一筆とると夢にみて
寶をば身にあまる程持にけり
蚫のかいのたまの大さ
骨から皮へづる馬のつの
ほうらいの嶋の鬼も死べし
うら山しきはむねの學文
親に孝ある猩ゝのわき
をひつかん〱さや思ふらん
がくもんをよくするおとゝ弟子
かぶとのしころとれる景清
つま心むる鷹のはねふり
年まさりなる妻をよぶ人
鴨(マヽ)たつ跡へ網かたげゆく

人なつきたる事は遁れじ
放れ行ことゝいの牛を取つなげ
清盛が名ごぞ浪とたつ經の嶋
ぬしのある女にさはる指の先
土師氏を下さるゝこそ賢けれ
　そばへ藥なさせる爛目
鷹匠のまゝにや鷹のならさらん
　水の底にも碁なや打けん
よほうなる池へお星のうつろひて
紺かきが大豆つむ舟を乘沈め
斧のえがくさりてあがる濱ばたに
　阿彌陀は水の底にこそあれ
夕日も紫雲も海にうつろひて
うぶに入人はせなかに笠おひて
人の夢に弘誓の舟が打かへり
有難や無間地獄の火が消て
天王寺鳥井の西へ日の入て
　往生人はいかになるらん

掴かと火車が來れば皆逃て
來迎の彌陀とみえしは狸にて
きのふはや四十九日のしあげして
蛸に似た入道出て引導し
　武さしなさして飛てこそ行
大天狗さがみ坊でやおはすらん
乘馬もよき鐙でやいさむらん
　客人やさし合有さ歸らん
一禮しつゝ亭主句を出す
他やの日數をまつはうかれめ
まつりの座敷ひろ〳〵とみる
　鳴かくれ行人なこそきれ
流罪せしうへに猫とが顯れて
なん年か船頭殿のつかひもの
海賊があかしの浦に有やらむ
　あぶなくみゆる東路の末
親しらず子しらずといふ浪打て
草なぎてたすかり給ふやまと尊

沉かと浮嶋が原地震して
今も猶佐野の舟橋穴ありて
韜晦のふし木の中に隱居て
客僧が安達が原に宿かりて
今とてもせつ生石は近づくな
川渡しあれ共水の大井河
頼朝へ中五郎がうらみ言
春榮が今はの時の赦免状
業平の人の娘をかどはかし
鎌倉のお寺の坊に美女有て
　にが〳〵敷もたうさかりけり
こそぐると笑給はじ此二王
ところのみ堀くふ僧の山ごもり
　笠をもたねば茶やへこそよれ
賣はらふ松茸うりが餅くひて
會下僧や帷のよそではがるらん
はづかしき人や祇園へ參るらん
暑日は野べにのむべき水もなし
　粟津の原の茶こそにがけれ
桃くひし口は後まであまくして
　おちへむけんはこちゝむけんけ
やはらかならつこの皮をたてゝみて
中言をいふやぢごくの種ならん
　山のおくには何笑らむ
古き繪は虎溪のはしかみも分ず
まつかひにみゆるあけびが口あきて
柴かりがしらぬ草びら取くひて
海ならでおこぜはなしと聞物を
世をいとふ宿に布袋をかけ置て
梟はちかくにみえぬなら烏
　あふみ申樂能ぞ下手なる
越前の幸若ほめぬ人もなし
　神ばかりこそたうとかりけれ
道心をおこしがてらは切すつな
末の世ははうりも禰宜も物しらで
うるせきは屋札にそへて御音信

迚しなばいかでか腹を切ざらん
江戸せめにあふ武士のていうす
宗盛公のむねのよはさよ
　櫻が本におほきめしうご
酒にゑひ山まはりをやころすらん
ごぜ座頭花みる人にさそはれて
かすめつゝ禁野の鳥や取ぬらん
　印をむすべる手こそくさけれ
不たしなみな高野聖の若衆ずき
大日にふんをしかくる塔のはと
　何さいへども振舞もせず
福ひろふ人はいよ〳〵しはくして
めでたしと祝ふにしんてさがり蜘
　あまり煙のたつぞ悲しき
氣のつかぬ口腫の物の大やいと
分入てもどりかねたる淺間やま
しゆうの香ぬすみてとむる我袖に
ひえてうき頭かう今又熱氣して

塩がまの景よき浦に月出て
　六十三はうしろにぞある
宮嶋の廻廊とをく船出して
ちりけすへ二つき四日めけふ愈て
　戸をたてぬればあかくこそあれ
よもすがらひらきてむかふ持佛堂
旅人の宿かる時分月出て
葦よりや螢きてゐる門の内
風いらぬ蔵の内より火が出て
いなせぬをめいわくしたる皃の色
乘物にのする上戸の醉出て
燈をいく度風がけしつらん
おなべする宿に夜光の玉も哉
　毛の有なきはさぐりてぞしる
書さしの双帋尋るくらがりに
うみ月になれば子むませよびよせて
いろ〳〵の桃えらびくふ座頭の坊
日の暮に蓼つむ女子かしこくて

同じやうなしきれは闇にはきちがへ
　今は二佛の中間ぞかし
我庵の右と左に寺ありて
はなの上に黒眼ほどあざ出來て
　三笠の山をたつる誓文
一期たゞしゝくふまひと思ひ切
　大盃をこのむ山ぶし
いとまごひ急ぐとがしが關送り
　吹もふかれずするもすられず
啼虫もふけの中なる小萩原
あかはまだあれどたゝねばあがゐぶろ
火急なるこうひの藥あらくして
ほこりにや埋れはてたる古板木
つきつけやたばこ法度のつよくして
やねもなく玉やが内は不便して
うす帶にしかも蘊さへおほくして
手を合せ佗言すれど酒しるて
　舛にぞ似たる此かゞみ山

湖を田地になしておさめばや
年へぬる身の貞つきはかど立て
とぶ鷹は東近江をまつ直に
　きりたくも有切度もなし
戒の師もみるに心のみだれ髪
誂るあたひたかばる石ほとけ
煩惱をおこすへのこも我身にて
茶うすやの上手はにくきつらがまへ
かひ所かくには爪もたからにて
壁わざは何つき息つきあぢ有て
風爐のすき評判するはひさくにて
ぜん／＼にすくなくならの蘭奢待
ふだいにしならねば主もめをかけず
始ての質の置やうまだしらで
双六の後のさいめのいかならむ
碁の四町かくる所はむづかしや
見事なる帶も下緒も長過て
脉よはき人の瘧の落かねて

ともすれば當とぞいふ九字の罰
さま〴〵に心のくるふ戀の道
あしき客まじる茶壺の口惜や
雨風をふせぐ軒口うつたうし
冬寒く夏は涼き廣ざしき
執心をしてこそ君も音づるれ
いかさまに地藏はさつでおはします
繩かけながらみえぬめしうど
見めよき僧のもてる錫杖
親なき子ども憐る人
尊氏公はたゞ人でなし
誰か冥途のとがをたすけん
二三百貫くひつやしけり
いもがしらいか程うまくおもふらん
半分は鼠すにする大般若
あの宮でたう此宮でたう
神をみな佛と人の信仰し
若葉をたてんと祈る神〻に

よくこそなせ歌のこしおれ
當世のおどりしほらし立姿
おくばなかみて腹な立けり
つなぎをく猿をば誰かなぶるらん
いなゝけるむまやの口にまぐさなし
むかいの山におほき狐火
蘭菊も前栽あれて咲亂れ
つかなにぎればぬめりこそすれ
つけていふ筆のふのりやなだるらん
塚のあたりに穴はうそ〳〵
如意寶珠有とやうかつ如意嶽
錐の先で目くぎぬけよとつきほせり
狼やしびと尋てまはるらん
古筆の中をみたれば虫はみて
いく田にはいくらの狐有やらん
輪ちがひの紋や包丁の燒しるし
雲の上にも湯やわかすらん
金銀でいつけたやうな月日星

けぶりぬるあそこそ地獄あその山
麓より炭木をはこぶ嶺の坊
すきの道しろしめしけり御公家衆
七夕はねらずばをらじ機のいと
あたゝかな春の雨水いけ立て
ほつこりと洗ふたやうな月の貌
べにやではかはぬあまらが紅粉の色
　心ぼそくや時つくるらん
から糸のまむすびといふなぞかけて
高籠にたて籠しは無人にて
　しのぶさすれど聲の高さよ
しんの闇にいづくへ行ぞ郭公
待ぶせの中にまじはるいびきかき
朝鷹の鈴にさしたるこがぬけて
雁門をとをればばいやふゝむらん
首途をいはへとふつとなかれけり
手あやまち隣よりはや知そめて
清盛が忌中もいはぬさかもりに

めをとぬる小家いぶせきへや隣
盗人は馬をひかまた船頭か
しらべぬる小督の琴の夜が更て
　薬師の前でつゝなこそふれ
順禮も双六うつやいなばだう
蛭かへとむさうやみつる目の病
こがしもつ湯入屋おほく有馬山
　いかにへのこの悲しかるらん
しも風にこらへてすゆる大やいと
生ながらいてぬる蛸の下たきて
蟷螂の家ある柴を折焼て
敵の子も女子は命たすかりて
　童のえんにて狂ふ薬師堂
むしけやなをるけふの振舞
　あら腹立やみつにこそなれ
蜂どもが秘藏の花のしべすひて
ひざと手と輪をくむやうに老ほうし
此ほどは屏風の内の住居して

はやる繪書は宿へもどさず
心氣はれねば月もながめず
ふるきひゐなぞほうりださるゝ
はづる心のつくや娌いり
さぬきの國の涌の舟どめ
　あながちなりさ人や笑はん
時宜しつけばひ取かうに打忘れ
そとにある藏の四方に窓有て
喫かはくおりしもすひ茶飲過し
　まだまたうごになりはすまさず
物をうる詞にまじるなまり聲
ちやうはんが子孫と聞ば誰をかん
　さのみ物をばくはじさぞ思ふ
はなのきく鷹犬なれど年よりて
出來あひのけぬきをやすく買取て
酒のゐひ無病なれ共やせこけて
慰にたゞ土佐駒をかふてのれ
かくせ共きな〳〵するや戀心

喪ある人あすはよばるゝ哀さよ
脾胃の脉あるが中にもかひなくて
　山桝のめにも泪やこぼすらん
ともにゐもどす橋のわかれ路
くらまの谷でほゆるうぐひす
　さる兒さみゐよりやがて木に上り
花のえだ折かくるたんざく
なつかでにぐる籠の飼鳥
　われもわれたりつぎもつきたり
かはらけを酌のつよきに上過て
迦羅共は髮すぢよりもほそくして
一本の枝の柘榴の種がはり
惡錢もつなげる上はよくみえて
勝負見えぬ相撲に息はきれかゝり
ゆひめおほし損ぜし舟の綱手縄
鉾のしん木長きはほそき竹でして
三日月に四日の月の影も似て
瓢簞をあたまの鉢のかげにして

ひざの皿いたみもあらぬ疵薬
おれずまがらずさならざりけり
きせるあらふ鯨のひげのみじかくて
爰になし南蠻人の釼のかね
いかにせんあつたら針の先ちびて
關山のわき道ふさぐ椙の木に
たくましき棟木も末はつぎ柱
人なばくはで人にくはるゝ
ゆびおりて物語する右馬頭
犬馬もかはゆや長き籠拔に
客ずきのよそへありくや嫌ふらん
順禮のめしにまじれる蚤虱
鬼さはいへど手をぞ失ふ
あさるなや相撲を取もよかるらん
我山の蕨のたぐひみなやけて
盃をはじむる人がしかられて
黒塚にとまる客僧逃去て
辻切に肩おとさるゝやくおとし
返々もゝのをたまはれ
端書も親にあまへたこし文に
かくやみもひだるくおもふ腹の内
乞食のこと葉をきけば哀にて
やはたの山をおがむ尼御前
東より賴朝以後も世をもちて
うなぎ太夫ぞ舞をまひける
たんとうつせたの河浪巴なくて
浪風も樂や奏する竹生島
くはぬいゐこそひげに付けれ
にごり酒のめるめんつやむさからん
山谷が繪像ぞおつるぶくの上
時なしりてや釣をたるらん
お惠比須は塩のみちひに馳とて
天狗にもなれるか羽の生ぬらん
人にまみゆる宮かたの靈
かひわるとびのさても大さ
けふもくれぬとかへる番匠

天よりも落るやうなる瀧をみて
　都より甲斐の國へは程遠し
關でむかふる望月の駒
　無念ながらも嬉しかりけり
古歌に似てまけに成ぬる哥合
年よると御陣の跡に殘されて
みどり子が我にだかれつささうして
物くるゝ大名は我が下人すぢ
金の上へころばされずばひろはめや
　針手向よさ夢にみえけり
おやの代に星の祭やすぎつらん
後生でも持病の虫やおこるらん
方角や弘誓の舟にしれざらん
手間にやならんと姫がおもひ死
聖靈は蓮より菱やこのむらん
　衣の上にはかまをぞきる
あま人が紺かきや又いたすらん
霞たつすその〻岡の土筆

しんぼちを又男にやなしぬらん
　のどのかはきはたゞ富士の山
がきの苦患淺間の嶽は麓にて
日でりして塩水ばかり田子の浦
堀かねのいにしへきくも笑止にて
熱氣してぬる武藏野の腹の中
武さしのや人馬汗する合戰に
　番匠の遁世したる成をみよ
柴の菴もよきかこひやう
みだの御國の指圖をや持
修理の守にはいつはなれけん
　さうし一帖うせはてにけり
有さうにおもふ源氏の雲隱れ
　取もさりたりさても關守
須磨のうらや沙ほど鼠捨置て
しのひうとかうづかは皆ぬけはてゝ
相撲こそ坂東一の上手なれ
秋かぜか殘さぬ不破の板びさし

杉むらに一つもみえぬ蜘の家
山ぶしの頸かけをくはとがしにて
年越に一番鳥を先聞て
にぎりほそめてつつと入けり
こは飯や籠の烏にかひぬらん
蜜道の療治をみれば功者にて
そこのうみすひ膏薬やこれならん
饅頭や人のみぬまの盗ぐひ
かきくどく文や文箱にあまるらん
魚のはらふくらかさんのわらなれや
つなげるは先のほどけた錢の繩
あか土でふさぎにけらし鼠穴
二日醉にはかみもあがらず
とゝさまの増水かゝるいかのぼり
結解なするやいせかうの錢
分てとるあみ笠のねは不同にて
うばそくうばい經へまいれり
北野こそ佛法このむ社なれ
どこ聞もゐなかの嫂はきにあはで
用心わろき御比丘尼の寺
付やすき火桶のそばのむしり綿
盗するかぢやに鎰を誂て
盗人が入江のつしとどしめきて
鼠こそ糊けをこのめつぎ小袖
錢かねもたまる熊野の勸進に
陰陽師うしに乘てや歸るらん
大酒になるとのゝ地祭
夏はらへして風をこそひけ
下手申樂のこのむ錦木
高札はたてながらこそ朽にけれ
地なくゞりてぞ天へのぼれる
毎日の月日はおなじ月日にて
根ざしさへ遠き千尋の笋で
とぶらへば阿鼻の罪人雲にのり
雨が水みづが雨共なりかはり
大日やはだしに成て走覽

はなれし牛を誰もどひたぞ
　たうさくも有たうさくもなし
其まゝの佛とみしは天狗にて
枕繪を羅漢の奥に書そへて
いのりつる雨がひでりに降過し
ふる〳〵とおもひし花はたびら雪
おそろしき大虵と神は顯て
どうよくに人につかるゝ石佛
　まへや〳〵さ江口にぞいふ
孔雀づかひしゝあてやよく覺らん
狩野殿が幸若大夫振舞て
　さびしくもありさびしくもなし
唐崎の松は四方へはびこりて
大風が秋の夕に吹出て
獨ぼうし思ひあひつゝ寄合て
火たきやが燒いでにけり宮所
とにかくに須磨は市中の隱家にて
そろ〳〵と隣が出來る草の庵

玉礀の繪にけつこうな表紙して
松風も京と山とは別〳〵で
　岸の陰にて何ないふらん
一かたにつき合たるかいつぶり
唐船の中へつうじを招よせ
海賊をたくむと聞し浦の者
口あひた人を繪にかく渡し舟
　佛の弟子のこもる迦耶城
あはれなは淨飯王の崩御にて
　山の大師ぞ川にながるゝ
杉のあらし賀茂までちらす古そとば
あのくたらの歌に感涙とゞまらで
　いびきの音ぞたかく聞ゆる
谷底の伏猪が嶺へ床かへて
しんだかとおもへば死なぬ酒の醉
心がけなきわか者の番所
　土の中にもしはぶきの音
大つぼを冬の夜番が引かぶり

風ひくと四方の壁をぬりこめて
年よりや夜寒に衣打ぬらん
かねほりが穴へ入てやひえぬらん
痰氣なる人や竈湯へ入ぬらん
から井へはおつれど姥が死やらで
生姜酒のみて瓦やつくるらん
　さい相殿ぞはやわざなする
ひかへぬる袖も引切身を投て
篁は哥も詩作も達者にて
　おもしろく橋をかけたるすきの庭
手水鉢にや池をもちうる
勝手の床にかける宇治川
二階で山の景やみすらん
　今ぞたうときおなり成ける
雷神の日でりの雲にごろめきて
たなもとにつかはれし身を引上て
只迦如來むかしを聞ば凡夫にて
　高野の大し名のみ殘れり

門〻の額もやけゝり大内裏
傳教はしる人さへや稀ならん
紀の國の玉川讀し哥しらで
　夏の日や五條の上にてらすらん
ひゞわれにけりしら川の橋
后といへどかたびらをめす
清水ばかり夕立のころ
身にまくかやをぬける俊成
五月雨あがりいとゞあばらや
　たんなもかゝぬ高砂の浦
はりま灘打わる舟をのがれきて
住よしの神はお神でおはします
海賊がなるをの沖ではきむくり
物ぐるひ尾上のかねに迯てきて
　頭巾をだにも今はかづかず
はて〳〵は坊主の夜ばひ顯て
おもくなる咳氣とみゆる綿ぼうし
せいをだす茶引ばうずが熱氣して

夜も晝も不斷達磨を禮拜し
おこしたるあを道心やくやむらん
　日本のものゝ口の廣さよ
君か代とかの字を付て讀哥に
しほらしき唐の丸壺一手にて
唐人は詩ばかり作り歌よまで
異國には刀疵にやおぢぬらん
もろこしは大學匠も卑下をして
蛇になるはからにもあらじ道成寺
　いり度も有入たくもなし
案のほか鼠戸錢のたかくして
よき風呂ははれなる人に付あひて
よくきけば死ぬるをいそぐ無常かう
若衆の脇ざし落す淵の底
きくといひたゝると中有馬のゆ
鑓とめはならいたれ共未練にて
耻しきしうとの門の前わたり
我か寺のよくしんふかき奉加帳

撰集にいださんほどの哥もたで
常にすまばひだるさう成山のおく
大峯はたうとけれ共難所にて
惡口も逢坂迄はかへりきて
　笑へばわらふ泣ばなく也
みどり子の鏡の影をふしんして
時〱に病證かはる中風やみ
よく似たりへつらふ人と狂言し
あひぼれも逢と別はまゝならで
いかなればあふむは人のまねするぞ
あはれなは虫氣なる子の乳母にて
木玉にもおぢぬ山家の子共ども
聖人や他人も我とおぼすらん
死ぬるものあれば座する人有て
　さびしき物さ人はしりぬる
さそふ共むざとはいらじ山の奥
雨の中樽と肴をゝくられて
須磨の浦近き配所に定りて

むかしより植ばえそへぬ志賀の松
莚しきおけ〳〵といふやもめずみ
數奇の道など結構に成つらん
秋くれどまだ啼鹿のさたもなし
音せねど遠寺の鐘を繪に書て
ちる花に入逢の古歌を詠吟し
くはを云に分限のほどが顯て
　中間なりのしたる忠峯
松ともしみ橋のもとにつくばひて
耳にさかふ歌をばなどかよまざらん
　子を思ふ故に土に臥けり
愛らしくみえぬる物はつばめの巣
蚊にくはれ夜すがら蕪の番をして
諒闇は先帝の恩や送らん
　土佐までも下こそすれ京の者
内裏ぶしんにいるやざいもく
みやす所の衣とみえけり
淀山崎を日記にやかく
りこうな駒にのりてもどれり
　わらはべのよばゝる聲に驚て
御迎に出る大塔のみや
ねたる狂人くるひ出けり
印地のあたり飛鳥もなし
　七世の孫にたとひあふ共
知人がなくば古郷も何かせむ
　山ぶしのくる足音やたかゝらん
口を覺しつゝ狂ふ病人
木の葉かはら〳〵葛城の道
關の人ゝきもをけすなり
　音にきく猫の耳さは是やらん
ふくろの臭をはじめてぞみる
ねずなきすれば氣を付る人
　あつたら虎の毛こそはげたれ
大名のあをりに沉をたきもせで
藥師堂繪馬に礫打かけて
造物の猫といへ共老果て

うばらくろや千里の藪に多からん
　けさのお汁の鳥は物かは
大名の鷹野がへりの能嬢嫌
　口なすふとてつかればしすな
遠国へかうやく賣がおもひ立
知音ある人共しらず薪より
針立がねたむもひるやしらざらん
　あまり寒さに風な入けり
ふいがうでおこりの薬煎じ立
　臍のあたりなつきほせりけり
物ぬひが緒をうむ者とざれ相て
麝香にはまぜ物有とうたがひて
誠かや我としなれし三輪のかみ
いかにして楊枝ばかりで腹きらん
くやしやな苦しや物をくひ過て
　酔ぬる時のじゆくしくさゝよ
ねいらせて髪をそりたる狂言に
　不動の劔やさびみがくらん
此ほどは悪魔がおほくはいかうし
圓行が所労此比をこたりて
　十良殿の忌日成べし
兄弟が九人うちつれ寺参り
　かくもかゝれぬ天の橋立
乗物にむかふ風吹與謝の海
　夜はめされて晝にめされず
俗躰にまぎれて御ざる墨衣
　にざられん物かやたゞは置まじや
落てある錢ひろひかねつゝ
万法の話をさとりかけつゝ
調半とふもつらき碁がたき
ゐころさんにも氣にあはぬ弓
杖にて捨よくさきくちなは
よく巻なをせこの太刀の束
軸のわろさよにくき筆ゆひ
火きしやうとれといふはくせもの
よごれたはしをしうにあてがふ

非公事を我にたのむ禮錢
しるこの餅は箸そへてだせ
　大般若はらみ女のきたうして
地藏のまへの僧は六人
　哀にしゝはいづち行らん
はりながら絹を佗人盜れて
十六になる子を人がかどはかし
まけかたの馬はかひなし中將碁
弟子ばかりむなしき坊に泣てゐて
礎がのこるばかりの文珠堂
春日野は片端よりも火を付て
　太ふにてかざるけふの錦木
みちのくへ來て戀するやいせの者
　石の鳥居のまんまへに有り
討死をしたる親子が筆の跡
　三のさかひの道のせはしさ
色〻の役こそ出來れ難波舟
蜂原は皆人毎にうそ吹て

琴詩酒の友は互にあらそひて
大雪のふらぬ先にとこしの園
むかしより熊野參詣絶ずして
ゆかぬやうに誰もたしなめ渡川
明暮にめぐらせらるゝ日月星
油斷して知べき物か醫易曆
小折敷にめし汁菜をすへ双べ
御こしともふるや祇園の祭禮に
上中下品さだめするはや口に
ちやく〳〵と正五九月の連歌して
妄執ぞのけてつけかし求塚
禮のある鳩はちいさき木の枝に
孔子老子尺迦の末流いさかひて
　つゐには渡す大般若經
み子がいのりならぬあふひの上の靈
　袋はふたつ空にぶら〳〵
木のほりを諍ひするや犬へのこ
かけがうをせどゝ門とにかけ置て

茶にしても壺にや入ぬくこうこき
敵味方弓や社檀にかけぬらん
松桂の風にたまらぬめうと鳥
　人にはあらで人にこそあれ
俊寛にあふ蟻王が嶋くだり
佛とは只慈悲心の名なるらん
猿の皮はぎたをみればむごらしや
木像も繪像も物をいふばかり
大嶺の禪鬼と聞ばおそろしや
化たるを誰か狐とおもふべき
畜生も情の恩や知ぬらん
物をよくいふやあふむの鳥の聲
　あはする度にひちめきぞする
鷄が哀はらをやくだすらん
たき物や藥に密の過ぬらん
すさわらやまだこね土にたらざらん
油あせたりぬる手でや拜らん
そくゐをし團やそくふ相撲の場

われ物をつぐに漆を付過て
どじやう汁塩うすきまは生てゐて
　かしらぬらしてつゝさ入けり
かづきする蜑や小櫛をほをるらん
芋あらふ人もや水をあびぬらん
あら皮は指につばつけ打つゞみ
しとをする人やゐこしに上ぬらん
水牛は水の底をやくゞるらん
鳰鳥がうすき氷をつゝき割
水うつやあくるま急ぐろ地口に
にへ湯をもいとはずかくる城の中
　是非共に又も來らば打やせん
鉄砲なくてかへすぬす人
つゞみを望むふかき執しん
我とあひ碁は一度にてしる
こちの道具を望む取賣
殘る在所ものけ四海なみ
まけしばくちぞ無念成ける

礫にをぢむ花ちらす鳥
面に似せたき人の貞ばせ
敵もつ身は大事ならずや
とし月かけて望む灌頂
火つけの札の主を付だせ
とり入てをく額をみたがる
見世の下緒をほめて行人
いはゐぞいふ節分の大豆
礫とりをく秋のくれがた
なれて別るゝ地やのさげつち
あかぬはくやをいづる奉公
當春ひらきのこすやま畑
杖こしらへてまつはなれ犬
雪をつくねて休む里の子
かるたの友ぞみねば戀しき
まけてもさらにこりぬ双六
　佛にふつさ毛こそおへけれ
祇王には六はら殿のなへはてゝ

おしろいもかふるやゝかぬつゆの内
説法をするとみえしは狐にて
しゆせう成坊主や俗にかへるらん
　いろりのあたり舟ぞはしれる
色紙窓に一葉を風が吹入て
　佛なのみて吐逆にぞする
くひつけぬ目はり鮓にむねわろし
　水の底なるいしははれ物
蛭おほく河の瀬中にくひ付て
　水の中にも知者は有けり
人さへもえよまぬ哥をよむかへる
よの魚に教化をするやたんきはう
八さいの龍女ははやくうかまれて
海底の月にしづみし李謫仙
樂天が船より海へかほ出して
卦のかたち誰かかくらん龜の甲
　あぶなくもありめでたくも有
うゐの子をうみ月になる我娘

百歳にあまる祖父のわづらいて
かみなりのはためく空に年越て
松浦舟かどでをいはふ唐渡り
守久が命のきはの夢の告
けふうつやたかきやかたの棟のつち
蜘舞の芝居で金や拾らん
口こはき馬に乘たる都いり
見舞ぬる宿の隣の火事消て
中直りかへさひよろめく酒の醉
大剛のものと組つゝ頸とりて
正月はありく町ゝ玉うちて
おもふほどくだして熱氣さめにけり
嫂とりの水かけあひをし過して
新宅の三階四階みせられて
　居もいられず立もたゝれず
大名の太刀に手をかけしかられて
門の口いかにもせばくひきくして
物の具も座敷もやくる陣前に

おもふ人さそへる旅を親とめて
見あきたる能に痒や切ぬらん
鏡かひ絹かふかねやたらざらん
葛城の道で行者の病伏て
　碁打双六將棋なぞさす
なり物はならぬあたりに日待して
圓山に花みぬ人の花見して
　十七八はおにゝこそなれ
貲布襦へや立待居待月參
もめんばかまきたる若衆の紅葉がり
　つくたびごとにしるはじく／＼
堀をうめ屋敷の石やすへぬらん
主どのゝおはなのしげき袖朽て
あらおもや露深草のうづら網
わらはべは字指と袖を目に當て
日よりわろき堤のふしん出來かねて
柊原目をかゝへてや通るらん
手の内に瘡や有らん鑓つかひ

若竹を杖にはなどか切つらん
柚の針はたゞうみかさの薬にて
　水の底にも武士は有けり
煎ずるや干姜等の熱のもの
うをの名を何ぞとゝへば鱸にて
檀の浦おほく平家の身を投て
しやちほこはいかなる魚もをぢぬらん
大名か内のものもつ大くじら
旗どもの浪にうつろふやかた舟
犬もつのうらみをなすも折をえて
うきしづみくゞりて渡すうぢ川に
　神も咳氣をするとこそ聞
しら雪やつみてかぶれる八幡山
　弓の絃こそほゝけたりけれ
たう綿をいく度となく打つらん
松やにや清水坂にながるらん
鼠もや愛染堂にあれぬらん
爲朝はつめの先さへ長からむ

和琴をばもたで引やう習らん
　かうやより天王寺にぞ付にける
のこぎりにもやかゆる剃刀
鳥居のがくをおがむたうとさ
とんぜい者もや習ふ樂人
　しりをかゝへてはしりこそすれ
わか衆にならむ兒とや盜むらん
文珠をや先のけ中寺の火事
水さしのもるや座敷で見付らん
たなもとでもゆるをけすや火吹竹
穴のある袋に米や入ぬらん
　金つくりなうるや客僧
木佛や畵像は寺へ寄進して
　おもへどもしづの身なれば忍び侘
をだまきづれはやると返さん
王さまにさへとやかくやひめ
貧いとはぬはいたりたる人
　佛も物なおひ給ふなり

石たうのうしろの枯木よこたはり
なき事もお經に有と言なして
誓文をたてたる人も往生す
　里ばなれにてはがれこそすれ
秘藏してそだてよ庭の山桝の木
芝草も山のおくほど茂そひ
一人二人青野が原はとをるなよ
　あらおそろしさやくろ成けり
後の世の地獄はいかに淺間山
我ながら鬼とやならん胸の中
くちばみの形をのこす五八さう
雪道を何と分こしすねならん
哀なり今や落らん敵の城
武さしのに何を盗人こもるらん
立さらぬ雉子はひよこ憐て
杉むらの中に天狗や住ぬらん
繪にかける感陽宮の世の亂
鉄砲の藥やくらに有つらん

いかばかり大雷の落つらん
わろきをもよしの漆の人心
あま夜にはなまくさしてふ古戰場
いづかたも日でりの年の畠物
　ゆるりさゐては又かしこまる
しけくすなおまへ奉公の宿は入
數寄さしき入て品あるあへしらへ
引こめどつるにはもとのぶし奉公
廣かりし物見の庭も入こみて
義經も晝は下人にもてなして
長老が鐘のたゝらへ見まはれて
しほらしや羊の子共乳を呑て
長法事廻向するまで聽聞衆
御劔をや御殿をおりて給覽
客人やかへるとすれど絶ざらん
いむぎんな病者が人にみまはれて
主從者まねするひとり狂言に
時ゝを忘れずむかふ佛前に

引こむとおもへば殿の出御して
若き衆あそぶ所へ親が來て
　かしらも髮もぬれ渡りけり
なまいりにしたるゑびをばいり置せ
獅子やぎうさても書たる油畫に
いま取がまづはあたらし鯛鱠
　よぶかよばぬか心もとなさ
年よれば氣にこそかゝれ鳩の聲
しらぬ人誰共いはぬ小手まねき
見せにやる使かへらぬ渡し舟
としたくろ子共は娵をほしがりて
たか匠もみえぬはいづちそらすらん
我むすめほしきと人の云捨て
主殿の手をうつ音がほのかにて
　人丸の哥の味のうまさよ
ほの〴〵とあかく成たる柿むきて
　しやうじの汁にまじる不精進
あらたなは金のみたけの罰利生

　寺の新發意へりなこそきれ
剃刀を屛風の内へもて入て
　仕付なき人は鑵子のふためきて
茶碗わりたる皃のおかしさ
耻をかきつゝはいる隱家
　尻の穴より煙たつなり
富士はたゞなべうつぶけた成にして
ぬけ道の有をやしらぬ狸がり
灸をや筒でをさへてすへぬらん
鼠もやかまどのおくに住ぬらん
そさうにやふせごの小袖きせつらん
名はしらずあかきちいさき虫ありて
くひあひて術なさう成みぞいたち
無沙汰にや風呂の掃治をいたすらん
うつぶけて疵ある壺を洗ひほし
　洗濯せんを案じこそすれ
よめり前ひめ子のきやふに血が付て
老が身はおとこやもめと成初て

あしもとのよき姫ごぜがけぢよに出て
打つゞき日よりはわるきしはすにて
朝夕のおなりに手足ひゞきれて
奉公人宿に薪やもたざらん
　あやしやさても誑にかりきぬ
そのまゝの公家に化たる古狐
ふべん成能の太夫が能をして
　下手申樂にゝたる化物
ひつこめと石うつ穴の晝狐
　跡なるものよしばしとゞまれ
若死の家といはれて何かせん
西行の哥をよまれし柳陰
大名に近づきよるは誰ならん
ひとりづゝ錢を取ぬる鼠戸に
合戰の先手は我等請とりて
一こゑでいにしはにくや郭公
只二人いさかふは我あつかはん
質なくてやるあきなひも初對面

福共がかやうにへらば何とせん
一たびに二子むまればわろからん
俄にし腹の下るに草伏て
おもしろやかへりこくらか春の鴈
春もくれ花もちれるはにが〳〵し
はやくたつに諸公事御免の市の札
水ひする藥やながれ安からん
箕にてひるよねもやぬかに交らん
よむ經に導師やけいを打ぬらん
瀨ぶみする川の半に淵有て
あしき道車一兩打くだき
　わかきも腰のかゞみこそすれ
慇懃な家にそだちし人をみよ
上らう屋局のくちやひきからん
みめのよき妻もつ人は腎盡て
北國の人夫は物をおひなれて
しぬるまでよきは上手の鞠姿
須磨人か櫻に物をよせかけて

念佛申雨にぬれけり

百萬が狂ひありくや三輪が崎

破れたる草の庵はやねなくて

東風かぜやたゞ西方へ吹ぬらん

戀じには人を最後と泣なみだ

殺生取もなしよめ取もなし

出家の子法師や尼になしぬらん

わるき日と誰もしるらしやらめしゆく

十月の間は神のお留主にて

にぎりこぶしにちかきこつぶり

しな玉もおとなの日へは入やらで

にじからを蝸牛や親とおもふらん

罪なおもへばおこなひもせず

女房とねたる坊主は朗るして

須磨の浦へ源氏は我と引こみて

親の日は所司代殿も慈悲心

うばそくがおつる精進に打ふてゝ

おきんさすれば引ぞとゞむる

下よりもりくつをいふやかち相撲

はく下にぬりしにかはやつよからん

木枕のわれめにかゝる亂がみ

小莚にやひとの皮がとぢ付て

醉ざめに又しゐらるゝ宿の酒

門をふさぎ聞ぬていにて聞琴に

人音を忍び車に聞すまし

御禮をよく申せとの猿つかひ

盜人をころばして猶ひかへ繩

一揆とも分別者には隨ひて

糸にてやためぬる庭の木ゝの枝

片荷かろくて持やかぬらむ

道ばたの石を人夫が取拾ひ

一道も一道さます戀ごゝろ

あき樽の口へはつむる水ばかり

吉野ほうしは山がうさなり

おちし時さぞ判官の御めいわく

はきちらす花こそうわう座王堂

　廿日あまりは人も音せず
ありとふかとなしとみえたる今参
月末の月をば誰か待もみん
八幡山役事参りに賑ひて
群集ある牡丹の花や散ぬらん
をのれのみだんごくはんと籠るて
正月の具足の餅のくひ迯に
白川の關路も京も大雪に
一の谷あがりし管絃を最後にて
　おもふまゝにはいはれざりけり
諍ひも理はもちながら内のもの
何事も道の奥意はさとりにて
遺物は臨終ならで書ておけ
いかにして古歌は上手に讀つらん
逢時も君が目もとにはぢらひて
秋の夜もあふや一入鳥啼て
媒にたのみし人はどもりにて
年のよる親の腎虚に子のいけん
そこからの貧者に物をかし置て
身にも又とがある人の訴訟事
耻かしき人にむかしの身のざんげ
いしやにあふ舌のなへたる中風病
このみある筆に今よき毛が無て
御禮の奏者は物をほしがりて
問人の近き命期を勘て
わろき子の陰の行儀を親とひて
むづかしき連歌の前句請取て
さはるにもいたき茨を垣にして
桶の輪の竹の性も悪からん
生姜手にとる箱の緒のみじかくて
かぶりふる兒の頭に瘡出來て
みづからの昆布の塩しむ爪はらみ
水引はうつくしけれどつよからで
我ながらほてくらふしき身の譽
おとろふる我身の先祖人とひて
いたはしき人の横目に付られて

りんきする人の若衆に打ほれて
まだなれぬ人に無心の重利て
御道具の疵をみだせと仰にて
戀しくば只念比に文をやれ
談義坊主聲はよけれど齒が拔て
物しりに妙のあぢはひ人とひて
雪道の使は誰もこゞえはて
京へ行人にあふみぢ雪吹して
公事相手よき證文を持て出て
宗論に敵を國主の御崇敬
書付てあれ共直にみぬむかし
俄なる御能のかいこは大事にて
水うてどなまじめりなる蕨繩
風のふくおりしもやねのやまと吹
威勢する人のかけ言御尋に
こけらくずに鋸くずや交らん
聞ども又みる事はてまいらで
内に誰がござるもしらぬ箔ごし

我むすこなまほめ也と無興して
雇てはつかふな人の内の者
物いはふ人に無常をすゝめそめ
鬱憤のあれば涙に先むせび
なく病がいくさの下知に顯て
傳へこし家の系圖を失て
咳氣げな折しも交る十炷香
名をかゝぬ貴人の前の哥の判
ほれぬれば内の者さへしたがはで
君が代の御數は濱の眞砂にて
恩しらぬものとやならん耻かしや
鴈またの矢先のかぶとあつかれや

我身ながらもたうさくぞ有

法花經を聞ば佛の御子にて
今の代の智識といふはむす子にて
狂言に黄衣きけさかけて出て
此あいだお日さまお月夢にみて
擧手擧足皆是眞言の印なれや

むづかしき髪と鬚とを皆そりて
神國の帝都にしかも生れ來て
天下さま御慈悲ふかき代に合て
上さまは正觀音とふし拜み
見し人は皆しにし世に生殘り
かたのごとく無病に親の生置て
過かぬる人も有世に金持て
信心をとれば取ほど富貴して
ちくるいに生れたり共何とせん
極樂に生れたやうな醉の中
うたよめば兎口がうその心ちして
人おほく參る千部の經よみて
三光をいつもかうべにいたゞきて
出て入息は阿吽のふたつにて
彌陀釋迦といふも則心にて
うごかさぬ心はやがて不動にて
俗書よむ同じてまにて經よみて
　にが〱數もおかしかりけり

人中でころぶ女子の前だして
打くすみ二王のまねの狂言し
ところくふお兒の腹の虫啼て
ふきの葉をかづきて猿の一躍
閻魔王ほれたといへばわにゝれて
座敷にて霜はらたるゝ人をみて
へちくはんの茶湯にわるき茶を立て
名を取し人が勝負に打まけて
りこういふ人がばなかで耻かきて
狐つき行者の行義顯して
親子ゐるざしきでざれた咄して
　右も左もさいはもらさず
歌合古事古哥引てつめひらき
たてつけよ障子の内の茶のかつて
ばくち打皆後手に引しばり
　手を握りてはあびらうんけん
驚風のふるひをやすくまじなひて
　花の下にもまつむしの聲

縁はしらきはまで秋の野と成て
　一二〳〵ともじぞみえける
おりはうつさいに将棋の馬をして
次第ある札の帋もや薄からん
うり物によきとわろきの札付て
高名を軍場よりも注進し
のむ次第しるや薬の包み紙
橋ごとに札を打たる法性寺
三と客誰もえ聞ぬ十炷香
入人の次第名にしる有馬の湯
しのぶ摺の衣きし人の御鬮取
かさねをく本の小口にしるしして
　はなし只きゝて笑はぬ人もなし
さて〳〵くさき鉄炮の音
むかし無住がかく沙石集
舞楽の所作をみたき狂言
藝をまんずる悪名ぞたつ
俳諧に名をのこす宗鑑

　連歌のかへさ雨にぬれけり
すせうさに涙とまらぬ北野殿
　福をもち連歌をも又すべきなり
めでたきむさうさい〳〵ぞみる
正味をば山崎衆の抜句して
　つくことならぬ油かすかな
　この集をば、あぶらかすとぞ號べからむ。
誹諧は式目ぞなき大方は
　わかんのごく甚きらふべし
わかんには季恋述懐旅同字
　連歌のごくしかるべき哉
誹諧は右の五色をしなべて
　七句をば五句ごくは三句ぞ
名所国神祇尺教恋無常

述懐懷舊おもてにぞせぬ

水邊や又山類の躰用は
　連歌のごとくもちゆべき也

鬼女虎狼の千句もの
　面にもすれど一座一句ぞ

新式の一座一句は二句すべし
　二句の物をば三句有べし

三句ある物は四あり四句の物
　面をかへて五つあるべし

新式にうらと面を嫌ふ物
　はいかいにては七句去べし

連歌にはせぬものゝ名や古事詞
　けやけき分は一座一句ぞ

れへ給へ共みづからなどが。なすべき事にあらず。そのかみ病衰にて思ひもよらぬ事と申きり侍るに。さらば大方のおもむきばかりを申せとて秋田良春を使にていなびがたく所望ありしに則其返事に書付ける。それも私にはあらず先達の被レ用し分を思ひ出て十首の哥につらね侍物ならし。

しぶや紀忍は父の常安より此道の好士にてたび〳〵参會せしに。つねに誹諧に式目なき事をう

新増犬筑波集　淀川トモ號

山崎の宗鑑の集られし犬筑波にしそへたれば新増とはいふ。犬とは犬櫻犬蓼と云がごとし。筑波とは連歌を云。人皇十一代景行天皇の御子日本武尊のにいはりのつくばを過ていくよかねぬと上句をあそばしし例にて連歌は始ゆへなり。近代二條の關白殿筑波集とていにしへよき句をあつめたる書あるに對して文明の比宗祇あつめられし連歌を新筑波と號。されば誹諧を犬連歌といふ心に宗鑑が題するか又筑波と云は木のしげき山の惣名なり。又常陸國の名所にもあり。それは天照大神此山にて紫の筑琴を引給ふに鹿嶋の浦波雲にのり飛のぼり此嶺に着たるより筑波山と號云々。

春

碁盤のうへに春はきにけり
鶯のすごもりといふつくりもの

此句。今ならば作物といふ字入べからず。これは同意になる也。其比も連歌師れき〲にて。かやうの吟味はあるべきに。この撰者さほどの事をわきまへざる人にはあらざるべし。予なしはかるに其時は連誹のための狂言なれば。用付同意も指合もわざとせむさくせず。一二句にてさよみになしてあそびしさみえたり。いかに此集にあればとて。當時は不可レ用之又此名句ともに一句つゝ只今愚句を付そふる事。人の嘲を招く事ながら三句目の行やうを。初心の覺悟に。せさせんため。なまずき成事ながら。かきくはへ侍る。

まづはにせたり雪の梅がえ
是は檜物師が臺いものによくにせて。つくりたる作花さなり

霞の衣すそはぬれけり
さほ姫の春立ながら尿をして

おほぶくやのみ過す神達
さほひめも。かみなればかくのごとく付侍る

あなうれしやな餅いはふ比

梅が香のまづ鼻へ入春立て
日口あかれぬ谷のあさ東風
目と口とをば。ふさぎたるゆへに鼻へ入なり
しうとのためのわかな成けり
澤水につかりて洗よめがはぎ
しそめし脚布をよごす春の野
よごしたる脚布はよめが洗也しうとによめ。むこなど今は付べからず
うそをふき〳〵花をこそみれ
軒端なる蜂のすはひに梅咲て
うぐひすこゑしもらふほいたう
ほいたうもらふ僧の軒に立て鶯の聲したるなり蜂を鉢にとりなすなり
雪まになりぬさけさやの竹
春のゝやところ〳〵をこがすらん
あさたか人のする酒のかん
やけのは酒のかんにてこがしやうかはる故に同じ火のうはさなれどくろしからず
所のおとな花を見るころ
我ほどの人はあらじとかすませて
こばしこくらをするうたひ初
うたひのこゑなかすきすゑなり
尤とこそ人は見るらん
下手のかく花と云字を夕ま暮
日もなが〳〵したんざくの段
ゆやの短尺の段に哥なかく仕舞あれば如此
ひさうの花の枝をこそ折
引よせてつぶり春風我がむすこ
しらみみるまねする壬生の猿
これは壬生の狂言みれば合點ゆかぬなり
春の野にゐんぎんかうの始りて
まづつく〳〵しはかまをぞきる
五つ子が太鼓をことし習うち
つく〳〵と云しもじは太こたうつ師匠に取成なり五つの年にて袴きすれば也
吹かし風のふかであれかし
花見にといそぐを舟にほを上て
とこ世の櫻さくか鴈ども

鰹なほかけ舟にたとへたる哥あればなり

夢の内にもいたくこそあれ
花にぬることてふは雨にたゝかれて
ぬるゝつゞみかたんぽゝの露
おしやおもしろ春の中楽
花を風ちりやたらりと吹たてゝ
松の雫もみなさがりふぢ

だらりとさがりたるなり

玉をつり緒の青柳の糸
春風にぶらめき渡る松ふぐり
永日門にたてる傾城

傾城の門立といふなぞはまつふぐりさゝくゆへなり

尻げをつたふ雫とく〳〵
水鳥の尾の羽の氷今朝とけて
春日に樹よりおるゝ庭鳥

これは鴨寒じて水に入鶏寒して木にのぼるといふ事をもつて付たる也

あつたらんみかんくさらかしぬる
正月の茶子にとをかきはかり
よをうぢよりも送る年玉

宇治の丸柿名物なり

夏

山ほとゝぎすあなになく蜂
夏の夜の空を狐にばかされて
五月やみにもやねありく人

狂人やれを走ありく躰なり

五條あたりにたてる尼御前
夕良のはなのぼうしを打かづき
汁のみをくひおどる夏の日

ひさごの汁くひて踊者なり

げんじの君にもるにごり酒
夕良の宿の亭主の出合て
炭とり〳〵にけすやあつき日

夕良は炭斗なり。火事を亭主出合けすていなり

勸進聖齋はえくはず

腰にさすひさくの汁はまだにえて
　あけやすきよの能は猩々
振舞の汁つにえぬさきに夏の夜能明たるなり
　あらぬ所に火をともしけり
　いかにして螢の尻はひかるらん
　むかし〳〵をかたる夏の夜
むかし〳〵かたるに。さるのしりまつかいなと云事也
　地藏かしらの飯をくはゞや
　たゞまいれたでひや汁のからだせん
　琴のしようがであそぶ夏の日
ことのしやうがにからだせむの地藏が戀にこしをそらいたと云事有
　瓜をもひやす猿澤のいけ
　夏の日に行〳〵あせを杜若
ひやすに此句あつき心なれば今は同意也
　たびの衣をかゆる業平
伊勢物語のこゝろなり
　女も具足きるところそ聞
　姫ゆりのとも草ずりに花落て
今は具足に草ずり用付也
　しほらしきみのなれる瓜つる
ひめゆりひめ瓜。ともの草のすると付たり
　餘あつさにかゞみこそすれ
　夏川のせさきに海老のひれふして
　ざこのたぐひや殘す鵜つかひ
　あかつき事にたゝくひようたん
　山がらの籠にくゐなを入かへて
　かぶら程なるこのなまくるみ
くゐなを蕪とこりなすなり。
　おり〳〵人にぬかるゝはうし
　竹の子の隣の庭へ根をさして
　大木になるこれのあを梅
笋のある隣へ青梅根をさすと付たり
　おもふ程こそくらはれにけり
前句一句の理なし今は是を嫌也
　夜もすがらやぶれ蚊帳の內にねて
　貧家の猫は夏もさむがる

前句は人のねたるを、猫がねるにとりなすなり

秋

すい／＼風の萩にふく聲
鳴むしもむかはやぬけてよはるらん
かたき丸薬身にしめてつむ

腹のむしにとりなすなり。丸薬かたくてつむ人の。はな損ずる也

十王だうに秋風ぞふく
淨はりの鏡に似たる月出て
夜露にぬるゝ此法華釜

茶釜に情張といふ釜なば法花がまと異名あり

雲の原にもつくるかうやく
月星は皆はれものゝたぐひにて
まくも色よく染し千葉殿

前のはれものなはゞがましきにとりなす月に星は千葉殿誰も知たる事也

高野ひじりの宿をかる聲
大なる笠きて月も更るよに
とりのこすらしけふの松茸

月夜に松茸の見えたる躰なり

馬にのりたる人丸をみよ
ほの／＼とあかしの浦よ月毛にて
おかべの宿へ祝言のあき

源氏の大将月毛の駒にてあかしの岡べかよひ給し事なり

雲の衣を誰かはぐらん
いつよりも今夜の月はあかはだか
相撲のにはのまだあつき秋
いひ度やうに夕暮の空
三ケ月を弓かあるひは鉤か
とをるのきりをうたふ長きよ
しりのいたさにひだるさぞます
あはれにも小猿は栗をなきかねて
八里はよはき山の秋かぜ

九里目に山風のつよくてむかひかねたるよしなり

みつぼしに成さけの盃
七夕も子をまふけてやいはふらん

矢聲はせねどいる月の弓
子のむまれたる時は弓を射事あり
さしなる錢に秋風ぞ吹
二卅四五十ほどむし鳴て
此付句用付なり
公家も色めき分る野のみや
榊の巻の躰なり
どこ共いはずちぎりこそすれ
ひさうする庭の草花小姫御前
小姫ごぜが絹をおるまねするによりて庭の薄を祕藏する也
すゝきの糸で絹を織まね
おほそれながら入てこそみれ
足あらふたらいの水に月さして
むまやのやねをまくる秋風
馬だらいさ付なり
うへにかた〲下にかた〲
此前句一句の正躰なし作りものなり
三ケ月の水にうつろふ影みえて
此三日月の句無レ誹言

すさまじきほどみがく鈎
三ケ月をば鈎針にたとえたるなりみがくにてみづはつくべし
家はつくれど破やすさよ
さゝがにのばせをに糸をより懸て
せこまつ化女は露と消つゝ
芭蕉の女となりたる事也くものふるまひにて付。
口なしにきばの有こそふしぎなれ
菊の花とて耳もあらばや
重陽に醉て何いふ獨言
九月九日にて菊を付獨言いへど菊にも耳なければきく人なしと
也

冬

子共やおもふまゝにくるはん
なま木にてけづるこたつの火はつよし
かりやをたつる冬の山中
山中のかりそめにたつるいゑなればなまきなるべし
月日の下に我はねにけり
暦にてやぶれをつゞる古衾

冬ふしまよりいづるはいたう
三嶋こよみさなり古ふすまはほいたうの僧にて付なり
一寸二寸にかゞむ冬のよ
番匠のかねのごとくに身はひえて
此句同意なり前句の心さむき事て
さいづち頭老てゆく年
老人の身はひゆるものなり
ばくち打こそさむけ成けれ
七つぶのさいみ帷冬もきて
ころもでさばをとる大師講
飯のさばなば七粒さるものとて天台大師霜月廿四日の大師講なり
ひたいのしはすよりあふをみよ
行年をうばやおほぢの忘るらん
こんはるはせよ高砂ののふ
来春は吉ふさ金春な秀句にするなり
袖も箒も雪によごれり
我宿にはくすゝはなをほしのごひ
はゝきにはくの字さしあひ也

ちり紙うりのなりのさむさよ
ちり紙にてはなた付るなり
無刀にみゆる宮人の袖
ちはやぶるかみきぬ斗冬もきて
すあしで庭火焼うたふ也
かみきぬばかりきてあしにはものもはかぬふしなり

戀

藪をくゞりてよばひをぞする
鳥の名のしとゝしめてや契らん
狩にともなひいづる若衆
つくし人こそいつはりをいへ
此句誹言なし
はこ崎のまつとはいへどよせもせず
いふさ云字前句にあり
我身たゞよふおきの唐船
はこ崎へは唐舟つくなりよせもせずにたゞよふ舟さ付たり
陰陽のかみのせどのこひしさ

　六害の水くむ女子みめよくて
　せんたくさする中の一とく
一徳六害と付なり。せんたくすれば水をくむ也中は夫婦の中なり
　人間万事いつはれる中
　塞翁が馬がらせてはとひもこず
　よろこびあれや口すひし程
是は式三番にあふさいあふよろこびあれや此所と云詞をとり付なり
此句無レ誹言。
　泪ぞ川のうへにながるゝ
　及なき人に心をかけつくり
　頼申さんはせの観音
はせは戀をいのる所なり又長谷はかけつくりと云ゝ
　爪くそ程もおもはれぬ中
　うたてさをかぞへば指もおれつべし
　しんだいどくの碁にまくるのみ
ごをば指にてかぞふる物なり
　そへばあく目のみゆる我中
　戀はたゞはだか刀のごとくにて
　もみ杉原はのごふにぞよき
　砥石のうへゝをしつけにけり
　およばぬ戀をするぞおかしき
　我よりも大若衆にだき付て
　年はゆかねどしれた傾城
若衆に遊女がだきつく也
　内はあかくてそとはまつくろ
此句無レ正躰作物なるべし
　しらね共女のもてる物に似て
　分限な家も入聟はせじ
女の家もてるにしなして付たり
　戀は弓おれ箭こそつきぬれ
　八まんぞ思ふと云につれなくて
　數のぢごくのもゆるむねの火
八万地ごくととりなすなり
　堂の坊主の戀をする比
　玉づさをしきみの花に結そへて

あたご参りに袖やひかまし
一句は小哥にて仕立たり。

人の情やあなに有らん
玉章を今宵鼠にひかれけり

えだにあふらやぬりし花さま
たまづさはかならず草木のえだにつくるものなり

くびをのべたる明ぼのゝ空
きぬ〴〵に大若衆の口すひて

痔のかうやくも形見にやせん
屛風ごしなる戀はとゞかず

聞やいかにつがひ〴〵のうらみごと
びやうぶにつがひと付る事用付也今は嫌べし

哥合にぞかこつけてよぶ
哥合はいくつがひさ定むるもの也

盆にも人の送るたまづさ
昔よりその文月の戀の道
たまづさに文同意なり今は不ㇾ可ㇾ付

きのふの御禊神や受ざる
昨日は六月晦日なり業平の戀せじの哥にて付なり

命しらずとよしいはゞいへ
君ゆへに腎虚せむこそ望なれ

しほちやのわけも下されよかし
塩茶は腎の毒と醫書にあり

きのへねならば猶きつゝねよ
甲子の夜はさいあいせぬ事也

めをとながらやよるを待らん
誠にはまだ打とけぬ中なをり

くどきしのみはゆるすまおとこ
まをとこに眞實には女のさけざりしゆへに本のおとこが中なをるとなり

相坂山をこゆるはりかた
東路のたがむすめとか契らん
此句も用付めきたり前句をこれに付たらば可ㇾ然なりと可ㇾ知よはき付やうつよき付やうこれらにて吟味有べし

どこにても名のたちし業平
伊勢物語に人のくにゝても猶かゝる事なんやますさ侍ゆへなり

雑

公家と武家とは二かしら也
立ゐぼし縁より下へ折ゐぼし
鈴鹿のおにか城やいづらん
鈴鹿の山の鬼の名を立ゐぼしといふなり城を出時縁より下ゐ躰なり
四國は海の中にこそあれ
漕いだす舟に俵を八つつみて
蜘手に物やおもふ商人
くもの手八つあるゆへなり
松ふぐりとや人はいふらん
住よしの岸によりたる蛸をみて
薬師やつみにくるわすれ草
蛸に薬師を付住よしの岸は忘草にて付なり
ふぐりのあたりよくぞあらはん
昔より玉みがゝざれば光なし

古き御經の軸のわるさよ
玉軸と付たり
ふぐりをしめてきいめかせけり
松の木のこずゑにかゝるはねつるべ
ふぢ咲おくを田地にやなす
はねつるべは田にて付たり松にかゝるは藤にて付也
ばくち打こそ罪は深けれ
七つぶのさいの河原に輪廻して
のますまひもののわろき丸藥
拭べきかみを手に持泣ばかり
おやのゆづりの太刀ぞさびたる
ものゝふの道をつがじと出家して
武家の子が出家するにより重代の太刀をさばすなり
山ほうしこそ後家入をすれ
長刀を野太刀のさやにさしこみて
ろかいにとをかく舟いくさ
長刀を野太刀のさやにさしこみてろかいに用るなり
うけ太刀になる事ぞかなしき

重代の物をも質に置そめて
くはでをられぬしよく後撰集
廿一代の内。續後撰集は。十代めにあたるなり。續を食に作なす也

これや末世の大師なるらん
うゐ穴をあくる人こそたうとけれ
三途の川でとらむ手の先
女の死たるに始にねそめたる男三途川を手を引わたすと佛說也

ひらりと坂をにぐるなら兒
般若寺の文殊四郎が太刀拔て
はらみたいのりするも智惠也
般若をはらみたにてあんしらう文殊は智惠付合なり。祈に太刀ハ遣なり

塚の内よりよみがへるこゝろ
ものゝけは太刀をつかふに迯去て
犬に用心するは猿ひき
物の怪を毛物にして犬と付る猿引は太刀ながとたなの付合迯去は犬なり

財をば身にあまる程持にけり
金作の太刀のそらさや
さねもりの太夫がせいやたかゝらん
眞盛のうたひに金作の太刀をはきこうたふ能の太刀を太夫がせいに合て俄に長く空さやを拵し躰なり

おひつかむ〳〵とやおもふらん
高野ひじりの跡の鑓もち
人のおかたとるものわたす京の町
小哥にかうや聖人のおかたさゐさあり罪科人を京のまちわたすにはけいごあるなり跡の鑓もちこれなり

人をつきたる事はのがれじ
あわれにもこゆるかやりのしでの山
あけぬる聲はたゞ時のとり
時の鳥は郭公なり此鳥にてしでの山は付なり時の聲をあぐるにて鑓は付るなり

そばへ薬をさせる爛目
いかばかり心にしみておもふらん
用付なり

ちごの咄につける尻もち

兒を心にしみて思ふさなりはなしのしむ時はしりもちつく物なり

水の底にも碁をや打らん
　さゝがにの岩のはざまにこう立て

碁にこうも今は用付なり

わがせこが來てとらむだう龜
　あみだは水の底にこそあれ

わがせこはわが男也そさなり姫の哥の詞にてあへしらう也

南無といふ聲の内より身を投て
　泣なげゝ共どくでしなれぬ

ごくさいふにて南無をなむろさ付なり身をなぐるは泣なげく時身を地になぐる也

往生人はいかになるらん
　來向のあみだは雲をふみはづし

あけろの山の大風のころ
　あげろの山は。みだ來向のちよくろといへり

むさしを指て飛でこそ行
　辨慶がつぶりも蜂やしらざらん

にせ山伏のがうのはるかぜ
　さがしが舘などに山伏のくびながうにかけてなくさ舞におり蜂は吳子胥が古事よりくびに付合也

客人や指合ありて歸るらん
　奏者所にかくる蜂の巣

いけてをく座敷の花はしべもなし
　蜂は一切の花のしべなすいさりてみつにするものなり

とんばうに似たる虫飛須磨のうら
　問人あらばあぶとこたへよ

僧みえず經の聲する春の寺
　䖸の聲は經よむに似たるものなり

嶋かくれ行人をこそきれ
　ほの〴〵とあかしりさやの太刀拔て

人をきるさいふに太刀ぬくさは今は付べからず

紅葉がりてふ能の見事さ
　赤にくれなゐべに秋の野山の色紅葉などは。同意に成てつけぬ事也。五色いづれも前句により用捨あるぎながら。かやうの前句に。此能の名などはすこしも同意にあらずたさへば青さ云に綠などは同意なり露草藍などは付てくるしからずそれも染さいふ詞色と云字など入て靑やうにしたてゆへばわろし赤さ申に月

のおかき夜の明てあかきなど云には朱丹べに紅葉等も不レ苦よく／＼可レ有レ分別

あぶなくみゆる東路の末
打渡すさのゝ舟橋あな有て

鼠となるやその忍びづま
人の靈のねずみとなる事例多あるゆへなり

にが／＼敷もたうとかりけり
皆人のまいるやふきの塔供養

たばこ法度の春の山でら
當世ふきのたうなたばこの代にのむ故なり逢二着僧一房一歎冬花といふ詩もあり

笠をもたねば茶やへこそよれ
いとゝだにくふべき餅に雨降て
此前句一盃雨の心あり其上雨に蓑笠同意なるべし

地かたまりけりつきうすの音
世俗に雨降て地かたまるといふ事あり餅は臼にてつくなり

あはづの原の茶こそにがけれ
兼平やこがしをのみて歸るらん

鐵腹外道一宇へぞよる
此外道は鉄なひろげて。腹にあてたり。一宇は寺なり。こがしのありさうなる所なり

あちへむけんけこちへむけんけ
小兒にやからの心經をしゆらん

天台山にともすきつね火
狐火なみては心經をよむなりわらんべのする事なり

山の奥には何わらふらん
谷川にこいし流てころ／＼と
ころびておつな柹の末
かけてにはの付やうこれなりころ／＼と。ころびてさかけたる也

近江申樂能ぞ下手なる
湖のおきなおもてはしほもなし

藥師如來は念比なじん
功初に尺尊來て白鬚明神に。叡山の地を望たまふに。ゆるさぬ處へ。藥師如來來て。ゆるされし古事なり

神ばかりこそたうとかりけり
採色し佛のはくは皆はげて
なんねん先に立し古寺

とてもしなばいかで腹をきらざらん

只まつくろになれる煎大豆

節分のよはの嵐に火は消て

大豆のくろくなるを闇にとりなすなり

櫻が本に多きめしうと

所司代の面てはまりのかゝりにて

すなをはこぶは京のまち中

印をむすべる手こそくさけれ

にんにくの衣をきたるごまの檀

はだかに成て相撲とるころ

是は惟喬。惟仁の世あらそひの時。相撲の祈を叡山と。東寺にてせられし事なり

何といへ共振舞もせず

すげもなく庭の笠松つゝ立て

青梅くさるこのさつき雨

すげなきを酢氣なきと取なすなり青梅くさりたらばすいけはあるまじきなり

あまり煙の立ぞかなしき

高きやに上りてみれば燒にけり

むかしのかはら苔もぬめらず

古代のかはらはよくやけたるによりてとしへても苔むさぬよしなり

六十三はうしろにぞある

高野にはしちくを篗の足にして

呂律を分て箱をとふ聲

紫竹を糸竹に取なす也

戸を立ぬればあかくこそなれ

銀針の九つまではちもたらず

ひつじの刻になをる腫もの

晝の午の時は九つなり午の後はひつじなり

毛のあるないはさぐりてぞしる

弟子もたぬ坊主はかみをじぞりして

留守居もをかず數寄に出らん

庵主の自ぞりしてすきにいづるなり

毛の有物はさせぬ成けり

ひつしきに高野聖は紙をして

せぬにして同字なり今は付べからず

墨にかへてやしぶつかふらん
高野墨と付ゝり澁紙と付也

今は二佛の中間ぞかし
征鼓をば太刀持やうに提て
世は捨ぬれど喧嘩すきなり
心たけき道心者の躰なり

三笠の山をたつるせい文
天の原古酒のめとせめられて
藥で時宗子をおろすなり
天の原を尼の腹になす也。藥なば酒でのむゆへなり

大さかづきをこのむ山伏
かづらきや嶺に五度入三度入
八年みしを花もわするな
五ど三どは八のかずなり

吹もふかれずするもすられず
此句一句の儀なし作物也今はかやうの前句なば不レ用事也
われ笛のさらばさゝらに成もせで
おれたる琴ぞ三味線によき
琴はおれても三味線になるわれ笛はさゝらにならぬと付なしたるなり

吹もふかれずゝ――
山伏の貝われじゆずのをば切て
たゝりおそろし魔の所行かや

吹もふかれずゝ――
硯水海にほこりのたまりきて
まどのあたりや壁こぼつらん
かべつちをこぼつてはほこり立ものなり

ますにぞ似たる此竈山
あめの魚いざ立寄てみてゆかん
梁をもしろひ五月雨の中
鯇の魚を雨中の魚とりなすなり

切たくもあり切たくもなし
盜人をとらへてみれば我が子也
隣のやぶの竹はおられず
笋ぬす人をとらへたれば隣のをばとらず我も笋をとるなり
切たくもあり切たくもなし

さやかなる月をかくせる花の枝

此句無レ誹言

おきてはためく春の村鳥

花にねたる村鳥の羽にて月をかくすとなり

切たくも〻――

心よき的矢のすこしながきをば

是は狂哥の上句のやうにてとまらずいかに此集にあればさて今は不レ可レ用

にげこそのびねにくき梶原

梶原が最後的場の邊と東鑑に有之歟

いかさまに地藏井でおはします

戸を立てをく道の辻堂

とうろさへなき油火を吹風に

燈が風にけさじと戸を立る也

二三百貫くひつやしけり

筆ゆいの宿の客人かさなりて

咲かば櫻かはもえはがず

花見の客あるゆへに筆匠も此さくらの椛をゑはがぬなり

あの宮でだう此みやでだう

乘つけぬ馬に神主のけぞりて

やぶさめをよくるるはまれ也

やぶさめ神前にて稀にあるゆへのりつけぬと心を付たり

よくこそなをせ哥のこしおれ

西行は醫道の方も心得て

櫻が本にうふる草木

西行櫻と付たり醫者は草木をうへておくものなり

おくばをかみて腹を立けり

やきこめにすべきかたきを打損じ

ふたんれんなる城の水ぜめ

水ぜめ不丹錬にて敵を打損じたるなり火にてせむべき物をと悔なり

むかひの山に多ききつね火

獸のしそくもたぬはなき物を

身をかろむるはあやし仙藥

淮南王の古事なり

つかをにぎればぬめりこそすれ

抜て見る身はなまづをの刀にて

前句刀のつかとて同意也嫌レ之。

こしらへんとや思ふかまほこ
蒲鉾は鯰にてするなり刀は包丁にとりなすなり
つかのあたりに穴はうそ〳〵
尺八を刀のわきにさしそへて
此前句のつかは塚なるによりて刀よし
心をそらばなをもらくあみ
尺八は楽あみにて付なり刀をになさぬは心をそらぬ故なり
雲の上にもゆやわかすらん
鑵子をば自在天迄つり上て
湯をわかすといふに鍋釜のたぐひ付べからず同意とて今はせぬなりうへにあぐる同字歟あぐるは心ひとしきによりて二句可レ去なり
とこは菅家のぼくせきぞかし
菅丞相は観自在天の化身也
心ぼそくや時つくるらん
鶏のうつぼに成と夢をみて
関やのとうろぼしやはいぬき
鶏は関にて付。うつぼは張抜夢はほしさ思ひの夢なり
忍ぶとすれど聲の高さよ

春日野のわか紫のすりこ鉢
雪まの鳥をかふ餌ごしらへ
すり餌をこしらゆるなり
薬師の前で筒をこそふれ
御あかしの油やみなに成ぬらん
油のあるとは鼠もありしと也
鼠さへ今すまぬ古みや
いかにへのこの悲しかるらん
ともにはや親はうたるゝ将軍
館にてしのぶ佐藤兄弟
次信忠信が子共の事なり
わらはべの縁にてくるふ薬師堂
もてあそびぬる瑠璃のつぼ〳〵
こま鳥を女御更衣の求かね
るりを小鳥になすなりつぼ〳〵は局にとりなすなり
あら腹立やみつにこそなれ
うはなりのおとゝしの子を今年みて
やらおとなしやむらさきの上

あかしの姫宮の事なり
　此程に屛風の内の住ゐして
　打はらはるゝしみのあはれさ
醍醐味の只一こそまとなれ
五味法文に四味は麁法醍醐味がすぐれたるといふ事なり
　あながちなりと人やわらはん
まうくるも又まうくるも女子にて
琉球國はらくなあきなひ
あきなひにてまうくると付たり琉球は女の男をすごす國といへり
　まだまたうどに成はすまさず
打やみて後もこはるゝばくち錢
碁會の汁やはたご成らん
ばくち汁と付たり
　さのみ物をばくはじとぞ思ふ
小鼠を推つぶしても何かせん
藏のさうじをするそくいべら
をしつぶすはそくいゐにて付也

山桝の目にも泪やこぼすらん
親にはくゝりにかゝるこねずみ
あぶらげの匂ひやこのむ古狐
鼠のあぶらげにて狐をつる也
さる兒とみるよりやがて木に上り
犬のやうなる法し來れば
此句のつくりむかしやうなり今はすべからず。
とく法のたうとささむるわる口に
つれ〲草にこの古事あり
われもわれたりつぎもつぎたり
牛の子の爪の先まで親に似て
ふみころされなやよかたつぶり
○牛の子にふまるな庭のかたつぶり角ありとても身をなたのみ
そと天神の御哥となむ
折ずまがらずとをらざりけり
ためし物矢じりも矢尻さねもさね
なすのゝ狐女ならずや
玉もの前を犬追物にてためし射なり
人をばくはで人にくはるゝ

摘ためてあへ物に成鬼あざみ
胡桝はなきか春の野遊び
あざみにこせうとてさし合也

おにとはいへど手をぞ失ふ
一口にくうべき蛸をぬすまれて
鬼に一口用付也

はりさきの餌をそさうにやさす
蛸つるはりなり蛸に餌をぬすまるゝなり餌を念を入さしたらば一口にくふべき蛸を無念にして蛸にさられたるさ付也

かへすがへすもものをたまはれ
ひさうする曲をしゆる舞の袖

あがりたがるやおるゝ天人
羽衣の能の心なり

やはたの山を拜尼御前
今こそあれ我も昔は男して

手なれし刀いとまにぞやる
男して昔おさこだてしたる時の刀を今女のいさまにいだす也

うなぎ大夫ぞ舞をまひける
宇治丸の鮓になる程人みえて

みやこのたつみいみぞすくなき
人多さに飯がすくなき也

くはぬ飯こそひげに付けれ
鮓桶のふたをあくれば鯰にて

はたごや過る竹生嶋人
竹生嶋の使者なまづなれば又くはではたごや過るなり

時を知てや釣をたるらん
とうと打たいこうぼうの夕ま暮

さびしくぞ成殷のよのあと
周の文王太公望出て殷の紂王を打し事なり

天狗にもなれるか猿の生ぬらん
くらまの寺に古きすりこぎ

皮はぎてつかへばいらぬ山桝みそ
すりこぎでみそ付なり

今日もくれぬと歸る番匠
山寺の入相のかねをこしにさし
むかしはいかいにて一句の理なし今は不レ用

扇にかける能因がうた
花やちるらんの哥なり。こしにさすは扇なり

都よりかいの國へは程とをし
おいそぎあれや日も武田殿

ふしんばを今日わり菱のひしめきて
わりひしは武田のもんなり

無念ながらもうれしかりけり
去かぬる老めを人にぬすまれて

手かけとらくにそふよしも哉
前句をうけてすぐにいひつづけたり是付やうの一躰なり

針手向よと夢にみえけり
腫ものゝつぶれぬ先に身罷て

くはで共まゝをけるなまゝめ
日腫物出くる人にはなまゝめをくはせて心みる事あり

針手向ゝ ――
無人や釣たれぬらん渡川

こう成名とげこの世つくせり
功成名遂て身退は云云て范蠡が舟にのりて五湖入行也

針手向ゝ ――
ほころびや經帷子に有つらん

鼠くひをも賣るなか布
經かたびらは布にて書とみえり

針手向ゝ ――
疊さし道具まつまに頓死して

いかにひへけん板敷のうへ
疊をさすまにひへしゝたり

衣の上にはかまをぞきる
人は皆腰より下を捨かねて
例の用付なり

我はこまたをとられてぞかつ
相撲をとろに小股をとられてかまはずしてかつとなり

のどのかはきはたゞふじの山
田子の浦に打出みれば茶やもなし

藤咲かげや上の御とまり
上様御茶やなり藤咲田子浦は北國也爰に御茶やはみえぬか若御とまりあらば此はなの陰たるべしと付也

番匠のとんせいしたる成をみよ
さいづちあたまそりぞ佗ぬる

相撲の手後へころびやすさうで

かしらにつられてころびさうなる相撲の手なり

番匠ゝ―――

ひたひに殘るてうのさかやき

半にせぬ武篇の數のひたかぶと

てうのを重半いてうにとりなすなり

雙紙一帖うせはてにけり

我へやに時〳〵物のちがひ棚

御鬮のあはぬゑびす大黒

ゑびす棚大黒だななり

取も取たりさても關守

相坂の山の成なる大ひたひ

まつ白にみゆる望月の駒

額白の馬なり

にぎりほそめてつつと入けり

は茶つぼの口のせばきに大袋

帋いろ〳〵に切そくひをす

或茶つぼの口をはり或かみ袋をこしらゆる躰なり

二日酔にはかみもあがらず

朔日の祝をあまりし過て

御符も後はきかぬこしぬけ

つゐたつことりなすなり

結解をやする伊せかうの錢

道者舟さながら算を沖つなみ

何やらとなへむかふ大かぜ

道者が舟中にて風波をゑじなふなり

うばそくうばい經へまいれり

法を聞二のみゝのびく〳〵に

どち隣にもせんだくの音

法を糊に取なし二方のみゝを兩隣になすなり

用心わろき比丘尼の寺

松風に小袖のつまを吹かへし

此一句哥の上句にてさまらずまつかぜのさあるをかきちがへたるか

しほくむしまひ夜さむさう也

まつ風を能の名にとりなすなり

陰陽師こしに乘てや歸るらん

先へ引せてとをるむまの口

鷹犬は武家の參りかいなり山

さきへ引するないぬにとりなすたり

へた巾樂のこのむ錦木

切はたりちやうとちがふを拍子にて

のがれぞいづるやみのよの太刀

兵法にやみのよの太刀とておりと云〻

地をくゞりてぞ天へのぼれる

土龍くろ燒になる夕煙

はたけの上にたつかはら町

畠はうぐろもちの住所なり

大日やはだしに成てはしるらん

こんがうかいにいづるあさ市

晝數寄にあふや矢はぎが宿の邊

○玄みがくすなを嵐が吹ちらし催馬樂にあり金剛じやう沙の名なり市は山市晴嵐とあれば嵐にてあへしらひ侍

たうとくも有たうとくもなし

飛鳥を祈おとしてくはれけり

あすかの寺の僧やばけもの

とぶとりのあすかと申まくら言葉なり

まへや〳〵と江口にぞいふ

世の中をいとふ迄こそかたつぶり

びんばつそられ出仕やめらる

式目に片方の鬢髪を剃除することあり

さびしくもありさびしくも無

よをいとふ柴のいほりに錢持て

みこのはてとは珠數でしらるゝ

みこ錢とて大なる鳥目珠數にあり

岸のかげにて何をいふらん

住吉のうらにながるゝ繩の切

みしめ吹きる松の大風

みしめなはと付たり

佛の弟子のこもるがや城

あのくたら三百余騎を引ぐして

雪の汁めす木曾の落くち

鱈なば雪と云なり兼平參りあひて木曾殿又三百余騎になるなり

山の大しぞ川にながるゝ

行水に字かくは筆の跡もなし

泪に帋もぬめるたんざく

前句に慈覺を立入たるを三句目にはすてゝ字畫とりなす義ばかりを請て付る也

土の中にもじはぶきの音

入定の大師や風を引ぬらん

衣きせよと夢にみえけり

平家ものがたりにあい

宰相どのぞはやわざをする

門わきの堀をひらりと飛越て

犬ほえぬればきつねにげけり

狐が堀を飛越たり

面白く橋をかけたる數寄の庭

茶の湯の桶のかづらきの神

此前句のすきは。ものずきなるといふ心なれば茶湯と付たり今は數寄といへば茶湯の事にきこゆるまゝ茶湯とは付べからず

いけ花のいけやうしらぬおもはゆや

をもはゆやにてかつらきの神をあへしらふなり

今ぞたうとき御成なりける

はくはげて本の木に成古佛

前句のなりは人の形なり。ないけるは。てにをは也付句の成字也さし合と思べからず

しばし柳や化し觀音

楊柳觀音なりもとの木と云に付たり

佛の前でせんずりをかく

よもすがらしたくぞ思ふ文珠しり

唐獅子をみる細工者の夢

したきはさいくなり

高野の大師名のみ殘れり

くふかいの汁の蕪をわけにして

空海をかくしても高野の大師には付過侍當時は同意に成也

地黄園をやのめる養性

ぢわうに大こん蕪とし合也

夏の日や五條の上にてらすらん

かんぴようになる夕貞の宿

炭斗のなりのわかきは人かはで

すみとりひようたんと付たり

たんなもかゝぬ高砂の浦

しほ風にふらめき渡る松ふぐり

たんなをかくにふぐり當時付べからず同意に成なり手綱と云は別也

　ちいさき蛸は何に似たるぞ

たこのふぐりなり

　頭巾をだにも今はかづかず

　ともかうもせし昔こそ戀しけれ

　ぐな〳〵ほうしのちは身すくむ

なへたるくびはともかうもなるなり

　日本のもの〻口のひろさよ

　たいたうをこがしにしてや呑ぬらん

　つ〻の内こそあかくみえけれ

たいたう米はあかき物なり。

　入度もあり入度もなし

是前句つくり事なるべしそのかみ七句付の前句にみえつかくれつ〳〵とあるを一句の正躰きこへざるよし人〻申せしを祇公の曰是は戀句なるべし不レ苦とて各付らる。されば前句にも一句の理きこへぬをば當時は誹諧なり共可レ用捨

　貧僧のすこし持たる大豆の種

　御經よまずばいかに瘡かき

まめ瘡なり。經の功力にや多いできぬとなり

　笑へばわらふなけばなく也

　子を思ふ森の巣鴉たかを見て

此句無レ誹言わろき連歌也連哥にしても其心不レ新いかんとなれば老葉にわらふ内にもまことありけりと云句に宗祇。とぶたかはみえぬしげみの山かくれと云名句ありそれをぬすみて下手の所作なるを宗鑑翁に被レ入事如何ゞなれ共定て其時代の權門の人の句なれば威におそれて入たるべし惣別連哥めきたる句は誹諧にはこのまぬ事としるべし

　ゆや權現に祈誓するらし

からすが心にめいはく成とき熊野をたのむべしとなり。

　さびしき物と人はしりぬる

　夕ぐれにうるしの桶に腰かけて

　夜はつゞみやならふ蒔繪や

つゞみ桶なり。

　ちうげんなりのしたる忠岑

　戀すてふ我名はまだき太刀持て

此木哥忠岑が哥にあらず

　おもひそめにし禮をいはばや

太刀折帋の禮なり

　子を思ふゆへ土にふしけり

　おこせ共ふかくね入の芋頭

　草臥つゝや雜煮たくらん

いもがしら雜煮にて付也

　土佐迄も下こそすれ京のもの

　こはぎむだりのちやうすかめ殿

　孝養のために數寄をし花入て

茶うすと瓶とにとりなす也

　わらはべのよばゝる聲に驚て

　はぬるやさいのかはらけの駒

　春草の多きや桂西の岡

　七世の孫にたとひあふ共

　うら嶋がはこをしさしてたゝれめや

　丹後紬の入物ぞなき

うら嶋丹後の國なり匣を箱にとりなすなり

　山伏のくる足音や高からん

　釘はなれたるえんのうばそく

　神木のくさるも多きかづらきに

神木には釘を打故なり

　音に聞猫の耳とは是やらん

　下手の書たる虎のいきほひ

　やぶ薬師瘧の文字をおぼめきて

とらの字とおこりと云字似たり

　あつたら虎の毛こそはげたれ

　さのみなど曾我の十郎ひねるらん

毛にひねるいまは用付也

　舞ははてゝもたつる銀針

曾我は舞ひねるは針にて付

　今朝のお汁の鳥は物かは

此句てにはわろし何成共今一色いわればかくはとめぬもの也

　いづくにもあかぬはかれのなますにて

　これなる皿はほむる人なし

彼是と云詞あれば是と取なすなりされはなます皿と付合也

　口をすふとてつかればしすな

人によりやり顚のあるものを
打て賣ぬる面のみじかさ
能の面みじかければ顚ながき人には不レ似合物なり
あまりさむさに風を入けり
しづのめがあたりの垣を折燒て
右兩句無レ誹言
曠野山につとふ長陣
しづが垣を陣衆が折たく也
へそのあたりをつきほせりけり
生柴を小釜の下へ折くべて
かた山里の風呂のわるさよ
風呂のふすぶる躰なり
醉ぬる時のじゆくしくさゝよ
のまざればしぶ柿色の上戸衆
これは同意なり醉に酒のうはさ付べからず
白茶斗をこのむたうせい
茶上戸と云名目あり
不動のけんやさびみがくらん
一にぎりくりからすなを手に持て
小猿の印地やまと濱はた
すなは濱のまさごなり。くりからは栗のからなり山の土産也
十郎殿の忌日なるべし
大礒のとらや尼と云經陀羅尼
鎌倉かけて下るぜむぞう
禪僧の經だらにになれば禪の字したしけれど佛經は禪に不レ限よ
むなれば。かほごには不レ苦なり
かくもかゝれず天のはし立
うら嶋が後の形見にはこをして
とりてをくらしふるき鈎
鈎にはこをしてさつておく也。
夜はめされて晝はめされず
かづらきの神も細工のはし柱
盆のとうろは雪のふるてい
雪かづらきと付たり。
にぎられん物かや只は置まじや
刀の柄にかくるさめ馬
ぶしのまねあさ花田成すき心
さめ馬なものゝさむるにとりなす心なり。

　大般若はらみ女の祈禱して
　　たきやう巻第三のひもとく
此前句雑句なれば別に付やうはあるまじけれど。今ははらむに三のひもとく。用付になる也。又他經と云も何經とありてこそ。申さるべけれ。又大般若などいふに經と付る事同意に成也
　　都出若紫のかう尺し
たきやうを他郷に取成也。源氏物語も玄は巻本也
　あわれにしゝはいづち行らん
　　老ぬれば骨皮とこそ成にけれ
　さらぬ別やおしむ龍虎
骨は龍骨皮は虎の皮とて世にとゞまるものなり。老ぬればさらぬ別と本哥の詞にすがる也
　　たふにてかざるけふの錦木
　手拭はかけながらこそ朽にけれ
　　古き數寄やに殘る石鉢
むかしは茶湯に手拭をかけおくと云る
　　石の鳥井のまん前に有
此一句寺の前と云心にては侍るらめど云たらずして句にならず
　　極樂をとをしと誰か思ふらん
　ふしだいはやくとれる頼母子
極樂たのもしなり
　　三のさかひの道のせはしさ
　ながらへや橋に賃取關すへて
　　荷物ゆきかふせたや相坂
津國のながらを近江のながらになす也橋をもまた關をも相坂にとりかゆるなり
　　つるには渡す大般若經
　おほせたる六百くはんをせめられて
六百貫に大般若經はよし是に用付なり
　　ねは一倍になるいもがしら
つれ〳〵草にこれあり
　　袋は二つ宝にぶら〳〵
　大黒と布袋は肩につかまれて
同字別吟なれ共春日にはるひとはかはりて布袋に。ふくろは付がたかるべし此類多しよく吟味して可レ有レ用捨事なり
　　鼠の匂ひ魚のかやする
布袋は魚をふくろへ入のやり次第なげこみてをさくはれし僧なり

人にはあらで人にこそあれ
薄紙に入と云字をうらにみて
ふだの書付まくるかねばこ
かね箱には何貫目入とかく也書付同意めきたれ共はるべきのがれある故不ㇾ苦
あはする度にひちめきぞする
かみそりの砥だいの下なたまり水
かんるいたへぬ人のほつ心
發心者のかみそるを戒和尙のかんずるなり
頭ぬらしてつつと入けり
みのをきて笠きぬ人の雨やどり
一樹のかけに神やますらん
雨やどりするものゝ笠をぬぐにて神社やあると知るなり
ぜひ共に又も來らば打やせん
うどんたらひてかへす客人
日野殿や御内の者を御せつかん
ひのうどんと付たり
佛にふつと毛こそ生けれ
道ばたのそとばに牛の身をすりて

なさけやありし死た草かり
牛がもとの牧童をしたふ躰也
いろりのあたり舟ぞはしれる
すゝきたくそのおき中にほのみえて
あつたらいねをませし草かり
前句の薄のほを稲のほに付なすなり
佛をのみて吐逆にぞする
極樂のたのもし酒の二日醉
最後の御供一夜のびけり
侍などの切腹一夜のびたるなり
水の底なる石ははれもの
海渡るろかひは舟のをし藥
小哥開までものいはぬ人
押ㇾ瘂にとりなすなり。小哥きかぬさきは。物いはぬ人を。なしかと思ひしとなり
水の中にも知者は有けり
葦のはに乘し達磨の影みえて
筏もやなきてんぢくの道
筏なきゆへに。あしのはにのるかとなり。ふれと付度ゆへ共前

句に舟のこゝろあるゆへいかだと付也少もしたしきはわろし

あぶなくも有目出度も有
鉢入の夕べに渡る一ばし

座頭の手引先へやる中
座頭の一はしと云名目あり

居もいられず立もたゝれず
射ぬけ鳥弛なき弓に驚て
重々の哥に付弦なき弓に月なり

玉江の水につつと三ケ月
碁打双六將棊をぞさす

濱をみよきほひをくれの駒くらべ
是用付なりさりながら此句は不レ苦ぎあり可レ有レ工夫此理不レ辨間可レ知レ未レ到二此道一

つるに都へいれる尊氏
たゝら濱の合戰なり

十七八はおにゝこそなれ
小角豆つる瓦の軒にはひかゝり

かけひの露やねぶるいもむし
はひかゝるはいもむしなり

つく度ごとに汁はじく〳〵
山寺のかねのしもくは生木にて

門守が成をみればなた頭
なまきになたと云事あり

水の底にも武士は有けり
釣にかゝりて上るかぶと貝

すだれあむ緒や藻くづ成らん
簾のつりばり也

神も咳氣をするとこそ聞
山王のあたまの上はひえの山

慮外にみゆる猿が立ばり
猿が山王の上に尿をする也

弓の弦こそほどけたりけれ
此みこの前しどけなく口よせて

まいれる酒やこぼす惟喬
これたかの御子と取なす也

高野より天王寺にぞ付にける
大師太子はおなじかながき

文選や文句の點をやはらげて

文選は梁の昭明太子。文句は天台大師の所作なり。かんなは點にて付。前の弘法大師を。天台としかへ侍

　尻をかゝへてはしりこそすれ

　年よりの五り有道を一里きて

はしると云に年寄不ㇾ似合歟主命などゝ可ㇾ然をいぶかしき事なり

　石山参りやすむ日のをか

京より日の岡まで一里石山迄五里あるとなり

　金作をうるやきやく僧

　歸るさのこじりをみればまつきにて

これ用付也。此時代迄さもこそあるらめ。今は甚嫌ㇾ之

　わつばのつけるてんの引敷

こじりは小尻とさりなしわつばと付黄色はてんのかわの色なり

　思へ共しづの身なれば忍び侘

此前句誹言なし

　さがみ刀のあく目おほさよ

　かね打てやすくいとまを伊豆の國

刀にかねうつはくるしからずかね打に刀とは付ずと云々

　佛も物をおひたまふ也

　さがの尺迦しやくせむだんと聞からに

此前句は作りたるとみえたり又聞からにとは哥の上の句のやうにてきまりがたし

　くせ舞やがてはつる百万

百万いうたひにあり

　里ばなれにてはがれこそすれ

　草村の中に捨置牛の皮

　野寺の太こぬすみそこなふ

時のたいこは牛の皮なり

　あらおそろしとやくるなりけり

　かたきにはいかなる射手の有やらん

　頸につらゝのさがらぬもなし

射手を寒氣のいづろにとりなすなり

　ゆるりとゐては又かしこまる

　皆人の的ばへ出るなりをみよ

　名あるおとゞの春の大饗

賭弓のかへりあるじの事也

　頭もひげもぬれ渡りけり

雨降にいもの畠やおこすらん
さえねど人のあそぶ名月
いも名月なり
よぶかよばぬか心もとなさ
さり共と思ふ隣のわんの音
我門過る宇治丸のすし
むかしより宇治のすしわんさはれてうるなり
人丸の哥のあぢのむまさよ
あし引の山鳥のしる誰もくへ
とがり矢で名をあげし振舞
頼政の鵺射し矢も似たる事也
しやうじの汁にまじる無精進
雉やきをよく／＼みればとうふにて
ふしん立ほどまつしろなしほ
雉やきは焼しほ付る故也
寺のしんぼちへりをこそきれ
手にあまる大長刀をふるたゝみ
此前句のへりはなんのへり共しらず。もしたゝみの事ならばこの付やう同意なり

宿かへさまにけんくはをやする
宿かへの道具共ないふなり前句難儀なるたにみゆるし給べし
しつけなき人はくはんすのふためきて
これや茶桶のそこつ成らん
名水の在所をしへず汲にやり
水くみに念ないれずやりしとなり
尻の穴よりけぶり立也
さしよする火吹の竹のよをこめて
とくる客に釜ぞたぎらぬ
客の夜こみをしたるなり
せむだくせんをあんじこそすれ
なれぬれば衣の虫もかはゆくて
せどに鳴せみ雨や待らん
我せどになれたる蟬なりせみの衣といへば虱なせみになす也
あやしやさても誰にかりきぬ
これ無ㇾ誹言
此小袖人のかたよりくれはとり
所望せられて観世こそまへ
観世は元来伊賀國服部氏なりくれはとさり同事也

下手申樂に似たるばけもの
へ
拍子にもあはぬ狸のはらづゝみ

さびた古寺かねは音せず
かれもつかす太鼓もうたぬ古寺に狸がすむ躰なり

跡なる物よしばしとゞまれ

二人共わたればしづむ浮橋に

邪婬をかすな夢の世の中
二人は邪婬にて付ゆめのうきはしなり

若も腰のかゞみこそすれ

海老の子の生つきより親に似て

のぞきてぞみる八橋の下
ゐびすくひ川と云狂言にあり

念佛申雨にぬれけり

頼たる南無あみ笠は破はて

伊勢牢人やかくれなからん
いせあみ笠と付たり

聟取もなしよめ取もなし

かな暦おほくの事を書もらし
暦になき事此書に多し

世にひろめばや箟篕と云物

にぎり小ぶしに近きこつぶり

新發意が二王の肩に飛上り

鳥の巣やある西門の内
小法師が鳥の巣を取に上る也

罪を思へばおこなひもせず
無レ誹言

汲は晝あか井の水に魚住て
無レ誹言上ゝの連哥なり

やはたの坊の庭の涼しさ
八幡山に赤井坊とあり

おきんとすれば引ぞとゞむる
無レ誹言

みどり子のけさしも袖の上にねて
無レ誹言上ゝの連哥なり

すゝきをたきやあかすおほたけ
袮はすゝきなりおほたけは子共のする事なり

片荷かろくて持やかねけん

つり鐘をちやうちん賣に言傳て
　漁翁が針やあぐる山寺
つりがねを鈎にとりなす挑燈うり山寺へ行べし
　よしの法師は山がうと也
　いかなれば兒の肴にくずだんご
大豆の粉かゝりむさき長絹
まめのこにてくず團子はくう也
無ㇾ誹言
　廿日あまりは人音もせず
　此程はとふかく／＼と思ひしに
布施をやり置僧も死けり
亡者のふせをやりおき弔かとおもひしに其僧も死なれたとなり
無ㇾ誹言
　思ふまゝにはいはれざりけり
山人の薪に花を折添て
無ㇾ誹言上ミの連哥なり
　忠度なれやかすむ幽靈
忠度の能の出立の躰なり

　にが／＼敷もおかしかりけり
我おやの死る時にもへをこきて
いかに誹諧なればとて父母に恥を與ふは道にあらず儒道は云に及ばず佛道にも不孝はいましめたまふぞかしその上此五文字ならでも人の臨終ににが／＼敷からぬ事やあるべき撰者。何とて引なをして入ざる。和哥は云にたらず連歌はいかいみな人の。教誡のはしとなるやうに。こゝろへざるは何の名譽ありても無ㇾ詮事なりと可ㇾ知人のおやのと。せめてありたらば。此句よりも猶。付心もまさるべし。我おやならばいかでかおかしかるべき。それをおかしと思ふ事の。心あるものは人の子にてはあるまじ。畜生にもおとりたるものなり。かやうのこころよく／＼吟味なくば後の嘲をまねて。はいかいせぬ人よりをとりなるべし。
よく／＼ぎんみあるべし云々
　後ゝねこのとるは小いたち
おやいたちもねこにとられしとなり
　我身ながらもたうとくぞ有
目の佛頭にかみをいたゞきて
　千手堂には夜叉も有けり
千手千眼はくはんおんなり。かみをいたゞくは夜叉なり
　右も左もさいはもらさず

人ごとに持たる物はひざのさら
みつはくみたる老の參會
みつはくむとは人のひざをいだきたるさまなり
手をにぎりてはあびらうんけん
かぎわらび生にえ成はこじめきて
ぬるむばかりの能登釜の水
能登わらびと付たり
無レ誹言
花の下にもまつむしのこゑ
口鬚をちんちりりんと捻たて
はりをまんずる其おとこぶり
自慢のものはひげをひねり上るなり
一二一二と文字ぞみえける
雪ふりにはかけあしだゝはきつれて
座頭のよばひはやる冬のよ
座頭の房のよばひあしだはかふつえつかふと云事あり
おいであれかしおいであれかし
姉の子の生るゝ度に女子にて
重代の太刀誰にわたさん

女子に太刀渡しがたし。
咄たゞ聞てわらはぬ人もなし
めにしばられし繩の侘言
有馬山湯坪で脚布やぬすむらん
有馬の湯女が湯入なかしやゝしばるとなり。
連哥のかへさ雨にぬれけり
から笠のさし合有てかしもせず
當時用付なり雨に笠と付べからず。
米つけてうや客を松茸
かしもせずな米なかしたに。とりなすなり。
福を持連哥をも又すべき也
いのれやいのれ辨財天神
いつく嶋いつか我が身の安樂寺
嚴嶋は辨財天。天神は安樂寺にて付侍なり云々

右宗鑑の犬筑波の名句共ながら今の初心是を手本とせば當時きらふ事をしり給まじきゆへに同意用付無レ誹言句共に判の詞を付侍少もそしる事は侍らず時代のかはる故也上手の位は今の代に及者あるべからず句躰こせらず殊勝筆に盡がたし此次につかぬ句共を無理に付て三句目のやりやうの心持か若輩にしらしむ計也。山崎のそばをとをりて行末は海にいづれば此本は淀川と名付侍一笑。

長頭丸

寛永廿初巻

二條寺町
野田彌兵衛開板

紅梅千句

貞徳

紅梅千句

第一　梅

紅梅やかの銀公のからころも　長頭麿
翠の帳と見ゆる青柳　友仙
堤つく春の日ゝ記かきつけて　正章
よむや河邊の道ゆきの哥　季吟
船頭にその名をとへば都鳥　安静
かりは鴈にてばつととぶ跡　可頼
月の色も赤き田面に鎌をいれ　政信
鑓で霧間をさがす盗人　長久
むさし野や領する殿のさきそなへ　友仙
ゆかりを輿でよびぞむかふる　長頭丸
氏なふてお手かゝりしがなき跡に　季吟
にくみたつるはいかにわらはべ　正章
髪あつき程は虱もわくものを　可頼
さのみつゞりの洗濯はせじ　安静
乞食の居たるあたりは水遠み　長頭丸
小野小町が胸やせくらむ　政信
洲濱てふ琴のいとしき中きれて　正章
月になみだは大豆あめとふる　友仙
哀れにもやせこけ猿は冷じな　安静
みだれにし世や天寶の秋　季吟
咲華は見もせで錢をつなぎため　政信
初瀨より出て勸進の春　長頭丸
長閑にも千部の經をおもひ立　友仙
長者の家をつけるゆゝしさ　可頼
市もりが壁の柱の根はくちて　長頭丸
まんざう公事に交る地の論　正章
からの騎に新羅の絹を盗みかへ　季吟
ばはんどうしもこゝろゆるさず　長頭丸
嗜みてをく石火矢のたまぐすり　正章
いくらもたつる城のほりばた　政信

普請には上よりお茶を下されて　長頭丸
　歩をつかひまた手水つかへり　安静
天道よかたせてたまへ此將棊　可頼
　立あひつゝもうてる小つゞみ　友仙
更行る月に躍のはじまりて　政信
　燈籠(トウロ)をかゝげそふる盂蘭盆　季吟
身にしめて參りのつどふ地藏堂　安静
　目をやむとやはやる世中　長頭丸
じねんごの付ぬる竹の若ばへに　季吟
　かこふ外面はあしき日あたり　正章
月の物のあいだはそばへおよりあるな　長頭丸
　君をなやます靈はおそろし　友仙
ともすればわつと泣(ナキ)いるよひ〱に　正章
　とめたきはたゞ辻ぎりぞかし　長頭丸
たく風呂の加減のよきは上の町　政信
　遠ひ八瀬まで霧は分まひ　季吟
あしよはに出る月毛の駒はうし　友仙
　臆(ヲク)病(ベウ)風も秋もたつ陣　可頼
侍は華紅葉より名をおしめ　長頭丸
　哥道をこのむ賀茂のなにがし　安静
方丈をたてゝ外山に引こもり　季吟
　維摩(ユイマ)經をやしづ〱とよむ　長頭丸
繪賛ある掛物にしも打むかひ　可頼
　正客ぶりの挨拶(アイサツ)はよき　正章
春はじめくふ大魚やむまからん　長頭丸
　さかれるこまの來る臺どころ　政信
彌生にも庭の杜(牡)丹はかれ果て　安静
　さくらや花の王とみゆらん　季吟
長〱と裾(キヨ)をひくやうな雲霞　正章
　補(ホ)藥(ヤク)になれるとふ鳥もがな　友仙
飛鳥井に宿りはすれどぶあしらひ　政信
　鞠の祕曲ををしへたまはれ　長頭丸
月弓の藝は影ほどおほえたり　友仙
　穐や八わたへのぞむ聟入　正章
おもふ人のふりもおとらず女良花　長頭丸
　さうし見るにもうら見こそそへ　可頼

しのべともいとつれなしや西の對　季吟
外へかくれてましまさぬきみ　安静
せめてたゞ樒をつんでたてまつれ　政信
愛宕参りに何ももたざる　長頭丸
清瀧の河水出たと聞及び　正章
蕐散にしも下す筏士　友仙
きざみぬる牛房の汁やたゝるらん　安静
引いり月にふせる眠藏　正章
露ときえし熊坂が跡も哀れなり　長頭丸
色づくころは見えぬ山蟻　季吟
うつほ木を吹たふしぬる花の風　正章
舟はながれて霞む海上　政信
世中を觀じのとむる詩の心　可頼
かしこきゆへにかしきとやいふ　長頭丸
鈍漢と見かぎられぬる情なや　季吟
あたゝめ出せと酒はまいらす　友仙
いかなれば月の御遊に興もなき　政信
霧の籬が嶋ぞくゑぬる　正章

松の木もさそひてかへる初しほに　長頭丸
弦葉もすきと波のうき草　季吟
朝敵は流しつかはす遠津國　正章
身のなる果はあはれなりつね　政信
冬までも殘れる柿はちいさくて　友仙
日しろは踏ぬ園の雪霜　正章
よごさじと鹿子の小袖すそをとり　安静
しゝたれおにていそぐたはれ女　季吟
十六の年より人の戀しのび　政信
五百羅漢の繪こそなりたて　長頭丸
此ごろは群集をするや東福寺　安静
華には誰も氣のうき藏主　友仙
うらゝかな兒や若衆と船にのり　可頼
水のけぶりも霞む宇治香　季吟
拾遺をやおぐしすまして讀ぬらん　正章
かの忠岑がはじくかんふり　安静

長頭丸　廿　友仙　十三　正章　十七
季吟　十五　安静　十二　可頼　九

政信 十三 長久 一

第二 蝶

身がろ氣にまふ羽づかひやてうひえん　季吟
御遊のひかり照そへる春　長頭丸
月までも初子の松を引あひて　友仙
みなをとらじとゆふ玉箒　安靜
降雪の道すぢ作る在〱に　可頼
かくれはなひぞ殿の鷹狩　政信
よのつねに稀な唐犬さきにたて　正章
かねてばはむの用心ぞする　長久
ひんがしにむかひてかくる遠目がね　長頭丸
巣はうぐひすかあの高き枝　季吟
ゆひざしをしてをしへぬる梅の花　安靜
こそより物をよむ難波寺　友仙

伶人やまた八歳に成ぬらん　政信
世々の聞えは在原の姓　可頼
岩もとの神と跡たれおはしまし　季吟
禰宜のしゝするかしはぎの陰　正章
白張のすそをかゝぐる注連の内　友仙
になふ屛風の月のさし縄　長頭丸
身にしめてさする嫂入はよるの物　可頼
あたゝかに寢る露の手枕　安靜
かんこりとたてゝ待ぬる花の宿　正章
垣ほにくはつと植しやまぶき　政信
非手殿の子孫と躰を霞せて　長頭丸
身をやかはづにそへ哥の吟　季吟
日照する時分は雨を戀の道　安靜
仙のいほりをとへる見めよし　正章
鼬もや久米の山へとのぼるらん　政信
溝〱ぞある岩橋の末　友仙
泉水の流れはつゞく千町田に　季吟
小鮒まじりの土鰌すくへり　可頼

ほそ長き笊籬(イカキ)をひとつ手に持て　正章
ひけらかすこそはつ大角豆(サヽゲ)なれ　長頭丸
所がらなら茶を月の夜振廻　友仙
春日盃にや露そゝぐらん　正章
聖靈は皆藤原と廻向して　長頭丸
受領の鍛冶の家ぞ久しき　安静
煤(スヽ)けたる稲荷の牛王(ゴワウ)をしかさね　正章
狐はくるとわざはなすまじ　政信
犬のなくあたりに近き鳥の鳥屋　可頼
燒(ヤキ)めしもありこめつぶもあり　長頭丸
籠り人(ド)の歸りし跡の神社　安静
夢想のひらきたのみ置けり　季吟
無念にし後にはならん胸のうち　長頭丸
弓を惜むにあらぬよしつね　友仙
とゞむるは神子にほれたる殿ぞかし　政信
山の端にげよしのぶ夜の月　正章
妻こひてころされん鹿はかはゆやな　友仙
夢野の例は絶じ秋ぞ　長頭丸

此春は花見攝津(セツ)にいざゆかん　季吟
霞む海邊は景よきときく　可頼
長閑なる澳(ヲキ)にくじらが塩ふきて　長頭丸
磯によりたる鰯いかほど　友仙
節分のまうけやすらん笘屋形　正章
あし手まめにと首途(カドデ)いはへり　安静
まつかいになれも醉(ヱイ)たる猿まはし　可頼
長ひかたなもよくつめてさせ　正章
けつまづきころびもやせん小いし原　友仙
廬路(ロヂ)のちかくの鞠はむつかし　季吟
桃(モヽ)の木は松がえよりも葉しげりて　正章
尾上の奥へはいる念珠(ジュズ)ひき　長頭丸
高砂やこのうらかたで渡る世に　季吟
出る獵船のこひにこがるゝ　政信
海童(カイドウ)が淸きをんなを月に見て　長頭丸
たまのやうなるなみだたる秋　可頼
草にをく露ときえしを哀(アハレ)がり　安静
とらへてはなつ暮の螢火　季吟

學びぬる文をすつきと讀はたし　政信
桂をおれる人は果報者　正章
まん中をはさむ若鮎おほきくて　長頭丸
うきしづみぬる春の羽ぶるひ　友仙
摘る菜をあらふ澤邊にをしひたし　季吟
晩の用意をするや増水　長頭丸
膈やみもてあそびぬる秋の月　正章
露もあたらぬ鉄炮の的　可頼
との外堺の濱は霧ふかし　友仙
淡路のしまの山はどこもと　安靜
さかほこで花の世界もさがし出　長頭丸
すまぬ霞も天の氣ならん　正章
のどやかにけふの軍をやめよかし　政信
何にかへるのなきちからわざ　長頭丸
仙びとはうたで碁盤をさし上て　安靜
かの忠信がまねや柴刈　季吟
邊土より内裏普請に立まじり　可頼
なまるはおかし石をひく哥　友仙
双六の手をもしめあふ戯れに　正章
たがひにうひつうかれ女の袖　安靜
三嶋江や舟道遙の數おほみ　季吟
よしのかれ葉をたく酒のかん　可頼
なまにては雀のたぐひくはれめや　長頭丸
哀れ小猫の痩て煩ふ　政信
月更て火をばたえさぬ釜の下　友仙
秋の夜食の菜は柚味噌か　正章
くらまぎれきざみてをける栗しやうが　季吟
及物をもつや僧正が谷　長頭丸
白山にし天狗は空を飛かけり　安靜
ところせきにもみたる田樂　可頼
やはらかな日吉の神輿せり立て　正章
粟の御供はこんもりともる　季吟
祈禱をば花やかにしも四國がた　友仙
としよりはや所領給はる　政信

季吟 十五　長頭丸 十八　友仙 十四
安靜 十二　可頼 十二　政信 十一

正章 十七　長久 一

第三 花

佐保姫のそだつや花の窓の内　正章
　ひなを愛する軒のうぐひす　季吟
春のすゑ天下に名ある郭公　長頭丸
　おぼろの月に秀哥よむ人　可頼
咲梅を立て見居てみ見給ひて　政信
　簓の能の仕舞おもしろ　友仙
所作にかふ蠶も夏に飼終り　安静
　田舍ながらも荷葉をやたく　長久
近江でも今て品よき袖ならし　季吟
　見よや源氏の武者のかけぶり　正章
納受をも正八幡の繪馬にて　可頼
　嬉しさうなる鳩のいきほひ　長頭丸
人影もなければあるゝ大豆畠　友仙
　名月の夜におほき盗賊　政信
心して進べ寳の市の棚　正章
　法をひろむる手だてをしへん　安静
似あひ〳〵勸進坊主弟子とりて　長頭丸
　いかいちひさいひしやくかず〳〵　季吟
その外はやる酒やとしろしめせ　政信
　備後おもてを質つめてをく　可頼
所から舟のとも迄かざりたて　安静
　歩若黨やいさむ出陣　友仙
持もきるもかろき番鑓番具足　季吟
　五月五日もやゝくれにけり　正章
百草の殘りおほきも取殘し　可頼
　今の世までも忍ぶ神農　長頭丸
七賢と謡ひし節にあぢありて　友仙
　園の眞竹を笛にこそきれ　政信
草苅やあれたる御所へはいるらし　長頭丸
　ふるき築地の見ゆるかの岡　安静

から堀につゞく野澤の水清み　正章
捨て手あらふ誰が後の物　長頭丸
から〳〵とおかしげもなき笑ひ聲　政信
きらふ胡椒もなむる挨拶　季吟
打出る溫飩を月の夜振舞　安靜
いしとかねとにあふ日野の怺　可頼
佛たちに後の彼岸に絹きせて　長頭丸
おほきな蛇のいるは塚穴　正章
皇居をば作らせらるゝ折にふれ　季吟
いまは田となる福原の京　友仙
むこ山に付しやよめがけはひ料　正章
たしなめおほきかねのふしの木　政信
此しゆらは太鼓なくては引れまじ　可頼
帝釋天とひゞく神鳴　長頭丸
夕立こそ寶の瓶の水ならめ　友仙
日照うらなふはつ秋の比　安靜
三ヶ月のなりとの外かたぶきて　長頭丸
緒や身にしめぬ高砂の面　正章
をのが子に山田を讓る花の春　安靜
鮒は矢橋のうらゝにぞゆく　季吟
かすませて舟を諍ふ狂言に　友仙
給醉たりとおもふ梶原　長頭丸
護摩の火を灰汁たくやうにくゆらかし　正章
紅粉屋をせしも今は油屋　安靜
最上より山崎邊へ引こして　政信
赤松せむる奥の弓とり　可頼
なまりぬる聲で篝やとがむらん　季吟
御領地に來てなぜ鵜舟さす　正章
懺悔するや身延の僧に立向ひ　長頭丸
輪珠數をふつときる麓寺　友仙
急ぎつゝ蕪を齋の調菜に　安靜
鯨のほねや魚としらざる　季吟
せよやけふ伊勢路の月になれこまひ　可頼
穗たちてゆく參宮の供　正章
いやしきが國阿を拜む袖の露　長頭丸
垢離をかきぬるよし水の水　政信

蘆をかり荒薦にしもこしらへて　友仙
羽ぬけの鴨や塩鳥にする　長頭丸
虫氣なりとうめける日のうちすけみ　季吟
書箱のちりをはらふ晩學　可頼
長老とならぬをかこつ七夕に　正章
月に戀するあまのかはゆさ　安靜
物おもへば夜なべの扇打置て　長頭丸
名ほどはたゝぬ風呂釜の蓋　正章
いかなれば情にいらざる夏の數奇　政信
四月にはとくなけほとゝぎす　季吟
緣あらば又も參りてみねの花　可頼
寺のお兒に忍びぬる春　友仙
けさう文手習紙に卷そへて　正章
ほこらかさんとおもふ左義長　長頭丸
人〳〵は神泉苑へこぞりより　安靜
牛頭天王の御供そなふる　政信
萱葺の蘇民が庵を打はらひ　季吟
ふかしや深し秋の田の露　可頼

百人一首長き夜比に聞そめて　長頭丸
二條の家に生れ月影　正章
でつかりとかさね疊にをしなをり　友仙
そくるで畫間張れる挑燈　安靜
時どりもまたぬはうふり哀れなり　正章
とし經ぬるかはたかひ子の親王　季吟
手占にも錢をとるを功いりて　長頭丸
目をくらまかすあのばくちうち　友仙
双六のさい〳〵ふりやかはるらん　政信
萬葉の躰催馬樂の躰　季吟
高砂の松かぜにまがふ琴の聲　友仙
寸白もなくか華のちるころ　長頭丸
麴やが手飼の虎のさかり出　可頼
味噌煮る跡のあたゝかな灰　正章
いつよりもねの日はとに照まさり　安靜
三寸やすごせる大黑のかほ　友仙

正章　十七　季吟　十四　長丸　十八
可頼　十二　政信　十一　友仙　十四

安静十三　長久一

第四　郭公

なれもせんにしば〳〵名のれ子規の聲　安静

さくは閑所の庭の卯花　正章

明六つの鐘つくねんと端居して　可頼

今や遅しとまつ番がはり　政信

出來さんとおもふ末座の順の舞　友仙

大兒よりも小兒りゝしき　季吟

鉢のうちに植る櫻やえらぶらん　長頭丸

月夜に戻る春の山ぶみ　長久

晩景の雪に朝應すへあげて　正章

交野のはらはひえてへり候　安静

霍亂やせん行幸の供のもの　政信

こしらへてもつ典藥のかみ　可頼

新しき丹波布かの笠ぶくろ　季吟

首途の馬をおひの坂こえ　友仙

山伏の旅宿は山のあなたにて　安静

富樫が酒をいそぎてぞやる　長頭丸

岡の名のかざする菊の枝をおり　可頼

受領となるを祝ふ重陽　正章

鏡やは此秋小袖着はじめて　友仙

月に分限のますあづま人　政信

こがねばなゝさけるやほんの花の春　正章

眞鍮とみるやまぶきのいろ　季吟

躰阿彌がせし黄鶸は啼つべし　長頭丸

縫路のさうし問る時守寺　可頼

古き連歌きけどこゝろは亂れそひ　政信

まよふはきつや筑波山こえ　長頭丸

蹴あげしてまつ毛をぬらすみなの川　季吟

鞠の祕事をしかたる道づれ　安静

庖丁はかしこまりてぞをしゆべき　長頭丸

戴け鶴が岡の重寶　友仙

蓬來にあはまほしきは龜が谷　可頼
　人麿がおもふ父のさかづき　正章
一合の舟出に名殘おしまれて　安靜
　文のみにやる手の裏のよね　季吟
雀かふ君にこゝろを月の穐　正章
　かの少納言袖の露けき　長頭丸
雨過る小豆島に分いりて　季吟
　溝きり流す美濃の百姓　政信
門口の水を井のせきがはら　友仙
　咳氣に氣味やわろき寒垢離　可頼
月待に寢つゝ解怠を霜夜にて　長頭丸
　鈴なりやめばひゞくつりがね　正章
吹かぜの治る時をしるとけい　安靜
　波の渚を出す唐船　季吟
孝行な子共のこゝろあはれなり　政信
　末世はしらぬ釋迦の恩德　長頭丸
嵯峨までは程し遠くとおはしませ　正章
　かつらのあゆをとんはおもしろ　友仙

散花の河瀬にまじる柳鮠　可頼
　堤の芝にあつる春かぜ　正章
永日に普請の符が印地して　長頭丸
　内裏のうちに大かたさぬぐ　政信
謀さも業よし判ア卿　季吟
　田舍ばかりの乘物は卑下　長頭丸
麥飯の汁の海雲をあたゝめて　正章
　泉郎人までも祝ふとし越　友仙
尼公たち参る五條の天神に　安靜
　靱をかけゝり珠數をかけゝり　季吟
さすらへの宿に干葉も見苦しや　長頭丸
　兵津の里はいつの知行所　正章
とのほか繁昌をする佐ゝ木殿　政信
　ねもふんばつた鐙いくかけ　可頼
鳫金も月の弓杖つきて名のれ　正章
　骨たくましくかつ相撲とり　友仙
下にをきてうてる扇もやれやらで　季吟
　猿をまはせる品の上手さ　正章

しらうとの能をば所望あそばさす　長頭丸
　嘉例はづさぬ奈良の神わざ　安静
諸白の三木をたふ／＼下されて　友仙
　地黄を情にいれてせいする　可頼
おさなきや虫氣に成て病ぬらん　政信
　たゞ二齒だにうところにぞある　季吟
心してはきこそはせめ此あしだ　安静
　座頭の夜ばひ耻やかゝまし　長頭丸
はや口にくどけど君が聞いれず　正章
　しつとりとかきをくれ玉章　友仙
とはぬ日は月花よりも恃にて　長頭丸
　さかれる猫はころびうつなり　政信
蝶／＼のとまる垣根や朽ぬらん　可頼
　菜畑のあたり濕氣ふかしも　安静
賤の女もみるに煩悩おこり出　季吟
　小田卷の名の臍もなつかし　長頭丸
もすそよりあまる麝香の匂ひきて　友仙
　耳だれ痛む子やだいてぬる　正章

から國は皆瓔珞を身にかざり　政信
　あやし此土に來ます御佛　季吟
欽明の時は久しきむかしにて　長頭丸
　太刀のなかごにはどき金精つく　可頼
牢人となれば武道もたしなまず　安静
　町若衆にあなどられけり　長頭丸
月の比は袴のひだの數もとへ　正章
　烋の夜食の茶どこのめり　友仙
芋よりもゑぐわろげなるおばゝ達　可頼
　憔悴の身のはしか苦しや　安静
埋れ井に湯をわかすべき樣もなし　長頭丸
　へつひもそこねはつる大なる　季吟
末社には鹿嶋の神をいはゝばや　正章
　花やかに運をひらく兵法　友仙
春の霜置渡したる下坯の橋　安静
　ぬぎて長閑になをす鞠沓　政信

安静 十三　正章 十七　可頼 十二
政信 十二　友仙 十二　季吟 十四

長頭丸　十八　長久　一

第五　廬橘

みんづりと見ゆる若木やはたち花　可頼
五月雨ふるき松は何歳　長頭丸
眞鶴を涼しき庭に飼置て　政信
仙人やすむ池の中嶋　友仙
一へんの霞たな引岩はしに　安静
うす紙ほどな春の朝霜　正章
びいどろの障子に玉兎冴還り　季吟
火ともしの火や更てきゆらん　長久
暮るより蛾といふむしのおほく出　長頭丸
床し眉目よき人の俤　可頼
戀風や鈎簾吹あぐる御所車　友仙
薫物かほる見物の場　政信
すいふろの湯でも濃茶やたてぬらん　正章
眠のきざす乗懸のうへ　安静
大船は漕も自由に行やらで　可頼
せんかた波のひたす敦盛　季吟
吹出すに水際のたつ葉の笛　政信
難波の烌をのこすつりがね　長頭丸
ほんのりと帝都の月の明はなれ　安静
まいる格子は露にしめれり　友仙
神木の華もさくじつ雨はれて　季吟
かへるや春のまつり客人　正章
汁にしたし霞の中の鴈の聲　長頭丸
軒の燕は飛次第なり　可頼
災難もなくてくらせる家のかぜ　友仙
近き火事もこなたへは來ず　季吟
草薙の劔の徳はあなたうと　正章
治れる世の民はゆふふく　政信
高き屋の哥のこゝろは身にしゆんで　可頼
月にいよ〳〵狂亂の袖　長頭丸

見入るは冷じかりし甚狐　季吟
　蓋せでをけるあかの食つぎ　安静
彌生こそなまあたゝかな節供なれ　政信
　聞き過たる桃の花房　正章
やせかしけしぼみて果し梅園に　長頭丸
　音いろをしかと出さぬうぐひす　友仙
賢人の氣にいる時や稀ならん　正章
　すみたるさゝを常に手づくり　長頭丸
むかしより上備で見ゆる須磨のうら　安静
　公家の目かけの海士の子の末　季吟
ねぢけざる藤原氏はおなつかし　友仙
　たてたる堂の前の杉むら　可頼
僧達も天狗をみれば遠かくれ　長頭丸
　上の醍醐にせざる行ひ　政信
蒸竹のよ捨し袖もふしなやみ　季吟
　色づく蓼のみそ〳〵となる　正章
背戸の月みてやおもひを下をなご　可頼
　躍に出さぬうら盆の宿　長頭丸
花染の五尺の布やおしむらん　政信
　春袋をし舞たてもせず　安静
井に入る屠蘇白散を打わすれ　長頭丸
　さて〳〵酒に飢し脾の臓　季吟
あひさうもなきは厩の別當にて　正章
　猿まはしをばよせず追出す　友仙
狂言に弓射るまねもおそろしや　安静
　芝居にはたゞ幔幕をうて　正章
覆面もとりて紅葉をながめまし　季吟
　耳遠ければいらぬ鹿の音　長頭丸
穐山を作れる詩こそ上手めけ　友仙
　明州河にうつる月影　政信
仲麿が別れ惜むに小夜更て　正章
　ふつとさめたる夢をうらなふ　可頼
松といふ文字もつらし戀の道　長頭丸
　尾上のかねでうそをつく君　安静
物やらざつんと契りは初瀬山　可頼
　見れば右近を馳走する躰　長頭丸

まつ黄なる小袖を今ははやらかし　政信
善導大師まなぶ新發意　正章
うは氣にてのぼりだてしておちさひな　長頭丸
とると子安の甲斐も候まひ　季吟
老の坂で見初し聟はあた人ぞ　正章
誰にかくれん重代の太刀　友仙
ふるびたる住居をみればよし有て　安靜
玉の泉の景氣冷じ　可頼
水晶のやうな岩根の露霜に　季吟
辨才天の宮ゐもる月　正章
くちなははよるもかくれぬ華の春　友仙
かへるの聲は絕し淺澤　政信
しつほりと降ッ霞めかし小田の雨　可頼
かれさうになる薄むら〳〵　長頭丸
冬むきも垣根をせゝる土龍　正章
穴に鼠の牙あるはいる　季吟
夜に成て畠の畔は通るまじ　政信
人かと月に見ゆる人形　安靜

楠はてだてかい婿身にしめて　長頭丸
初しほにしもおろす御座舟　友仙
うつ波の急がせたまふ所知入に　季吟
なんぞをんなのうらみごといふ　長頭丸
祈れども叶はぬうしの時まいり　友仙
無實北野を分かへる袖　正章
當座をもはらみ句といふ連歌して　安靜
麥秋めづる時宗の大德　季吟
麵類や麩をおほく煮る道場に　正章
佛法はなを繁昌の比　可頼
大唐の珍品や爰に渡るらん　安靜
から風にしもまじるつちかぜ　政信
ちる花をよごすほこりは山椒の粉　長頭丸
ひろげてぞある蝶なりなかみ　季吟
箱の緒の蜻蛉むすび永き日に　可頼
御帳臺にもなく物のほん　友仙

可頼十二　長頭丸十八　政信十一
友仙十三　安靜十二　正章十六

季吟 十五　長久 一

第六　雁

薄霧の空行鴈やじゞみ文字　政信
はげし色繪と嶺の落葉　友仙
ふる屏風いく秋かぜに撫られて　長頭丸
衣桁のきぬの露もしはなき　季吟
月影もさすがに見ゆる部屋の內　安靜
つなぎても寐ぬそばの鷹師　可賴
野等猫の足跡しるき雪降に　正章
ちく〳〵めをや出す天蓼　長久
霞ます精進の指身奇麗さよ　友仙
かざる書院のうちは長閑し　政信
堅かりし硯の海のいてとけて　季吟
商船出す波の高嶋　長頭丸
ほく〳〵とかちのゝ原は行つくし　可賴
手折て供にもたせぬる萩　安靜
大名も心がくらし玉祭　長頭丸
燈籠もうつる月しろの堀　正章
崇めをく鎭守の前はかみさびて　政信
石上かやふるき太刀の身　季吟
跡つぐは內山伏の末ならし　正章
勸進帳の紙やたらざる　友仙
折つめて見えぬ高祖の華ごゝろ　安靜
かへる古鄕の哥ぞ春めく　長頭丸
はんがりと啼を雲にうちあふぎ　季吟
無慙や鷲の爬むみどり子　可賴
深山の人倫絶た松の陰　長頭丸
岩根の水のきよき發心　正章
氷掻て貪欲垢や落すらん　友仙
たゞかのまどひ止ぬ物しり　長頭丸
おもひあるも四十の內のとぞかし　可賴
賀にかこつけてをくる玉章　安靜

きくまひと餘所の悋氣に臂をはり　正章
そゞろひく矢はむかふ妻敵　政信
今迄もいふ鎌倉の權五郎　長頭丸
兄の最後を勵する時　友仙
梅の實のなるまじなひや月の暮　政信
墜栗の雨を請てかへるさ　季吟
郭公なんとしてかは聲きかん　安靜
死出の山邊は便宜もぞなき　長頭丸
ねたや扠人とつれだつ三途河　季吟
乘かゝりつゝつめる尻馬　可頼
將棊をしさすをかとに戯れて　友仙
切燈臺の影の中飲　正章
建水のやうなる物を引そはめ　長頭丸
門〱ありき餬ふ乞食　政信
盂蘭盆やかの岸になる程はなし　正章
後生こゝろのいつか月の夜　長頭丸
御佛の身にしめおもふ娑婆世界　可頼
をしへはかはる儒道神道　季吟

注連のうちは禮儀たゞしき花の春　政信
謠初にもうてる小鼓　安靜
永日にいとし若衆の舞稽古　長頭丸
袖の涙や拭ひ板じき　正章
塩竈にいつかと讀を感じ入　季吟
むかしをおもひ見る浦の景　友仙
あれかしと濃茶を願ふ船の中　安靜
料理の魚の味噌や過ぬる　長頭丸
閉目よりさけてあやなき杉の箱　正章
餘所へはやらで我もち扇　政信
ふるされし班女がこゝろ哀れなり　長頭丸
百の媚もや虫くひしと　季吟
月をめで老つる袖は齒もぬけて　可頼
露忘らず申す念佛　長頭丸
ひつこもる二上山の庵のうち　友仙
ひきゝ屏風の越中のもの　正章
湖の浪を枕に聞あきて　長頭丸
丸太舟にし明し暮しつ　季吟

營みに情を出せる嵯峨の邊　政信
愛宕まふでのしげき此比　長頭丸
なべて世に火をおそれぬ人もなし　安靜
よく改めよ足の踏あひ　正章
似たるゆへ紛れやすきは土旗籠　長頭丸
飼置ぬるはどれもしら鷺　可頼
直段をもよき名香はかまはずや　友仙
花車なる人の有得なる体　安靜
三階や二階の上の月みして　正章
はるれば笠もいらぬ霧あめ　長頭丸
露置し花にさゝはる松はほれ　季吟
春のおまへにすむ鶴の箸　正章
蠟燭の光惜まぬ阿彌陀堂　可頼
夜會の數寄に擧る風爐釜　政信
十德の袖を涼しく搔合せ　正章
寒山の繪は二幅一對　季吟
柄杓いらぬ錫に溫藥入置て　長頭丸
逢夜は胥も强かれとおもふ　正章
惻隱のこゝろの程に打こみて　安靜
見てこそ人は靡け戀の詩　可頼
器量よき五山そだちのお若僧　友仙
跡を誹めてあかる衆拂　長頭丸
やう〳〵に冬至の日もやさがるらん　政信
庭の梅花にうつる月影　長頭丸
龍腦をこぼすや春のゆふまぐれ　季吟
なをしそこなひかすむ目藥　政信
いるものゝなき綱の手はすぐにひけ　長頭丸
菅井黨にはならぬ奉公　安靜
あづまえびすこしや扶持をあたふらん　季吟
公家は衰ふ元亨のすゑ　正章
哥書よりは釋書をせんにもてあそび　可頼
どこがどこまでのりぞ弘まる　政信
花〳〵し化狄が作る舟の道　友仙
長閑に出たつ曲舞の袖　安靜

政信十三　友仙十二　長頭丸廿一
季吟十四　安靜十二　可頼十一

正章十六　長久一

第七　月

ひわり戸の透間かぞへや月の弓　季吟
　鑓のさきより鋒る秋風　正章
冬近み頤頭巾こしらへて　安静
　旅だつ馬に乗懸の上　政信
海草や濱邊の人の宮笥物　可頼
　塩干よりしも戻る三ヶの日　友仙
みなみれと京にまされる春もなし　長頭丸
　押かざせる袖のけだかさ　長久
手折じな餅躑躅てふ華の條　正章
　釋迦の産湯も參らせぬやつ　季吟
白堕落な坊主の身持つらにくや　政信
　愛敬のある尼公にこやか　安静
はなすゝる矢嶋の合戰聞たがり　友仙
　戀の煙とよんだるはなに　可頼
待宵でなきにも侍從薫らしつ　季吟
　明石の上へけふの御尋　長頭丸
麓より山頭かけて紅葉狩　安静
　鬼をうたんのこゝろ冷じ　正章
月もくらき艮角のまもり札　可頼
　元三大師拝む夕ぐれ　政信
五の卷を今ひらく法の花の春　長頭丸
　雪とをんなのきえし弔ひ　友仙
霞む涙玉にぬけるかいとおしや　正章
　ひくにあやめのねゝしてもみん　季吟
賴政がおもひ入たる戀ごゝろ　政信
　連る哥の義理の深さよ　安静
筑波山越しは神と成たまふ　友仙
　大ゆふだちと嶺のいかづち　可頼
來てはほろり法論味噌をうる親の墓　季吟
　破籠のめしに汁やなからん　長頭丸

辨當なとをきらへる野遊にて　安静
獨うと〳〵月を見ありく　友仙
盆なれどやすき夜發は誰かはん　長頭丸
よごれた脚布もして躍らばや　正章
禪寺の得度を祝ふさかもりに　可頼
まねもならぬよ律宗の法　政信
槇尾の山はとりわきうそさびし　正章
ありかねど虵は人ぞおそるゝ　長頭丸
くふまじや珍しくとも雜喉の鮨　友仙
卒度ばかりも辛き蓼の穗　季吟
舍利弗の利根はきくも身にしみて　長頭丸
かぞへられまひふる秋の雨　安静
二千里の外も曇るか月の暮　政信
紀の路の濱をゆき戻る袖　正章
かたをなみ僻言ならばみても何　季吟
蘆邊の田鶴と下手の地謠　長頭丸
白鷺を書たがへたるあふぎもて　正章
ならひのおかし百性の禮　可頼

とし毎に出す藁やの花のもと　安静
注連かざりする床の三つ物　友仙
白散をねれとや御諚有けらし　長頭丸
嫁せざる姫の歩みそろ〳〵　正章
戀慕ゆへ伊勢の住居を立出て　政信
いそらがこゝろ皇后に見ゆ　長頭丸
舟鉾やめでたき例にひきぬらん　可頼
千とせの數かともす挑燈　季吟
つりがねのかね懸松は枝たれて　友仙
大雪ふれる一の谷あひ　安静
影廣し平安城のけふの月　長頭丸
博士にとはん秋のふると　可頼
敵をいかにうちものならし冷じや　季吟
薄の穗かげかゞむ落武者　長頭丸
袖は露目にはうろ〳〵泪にて　正章
所存の外におしむ別路　政信
出替りの比は細かにつかはれて　長頭丸
聞よくぞなる寒のこはいろ　正章

熱痰に氷砂糖やふさふらん　可頼
ぜんさいおほくくへどたゝらぬ　長頭丸
正月は具足の祝ひよろこびて　友仙
身は害せぬや立しとしの矢　季吟
幾春かをくれる賀茂の社人ども　安静
糺河原に見ゆる狼　正章
鮎つかむこゝろにも似ぬ衣きて　長頭丸
門徒のよめる文月のもと　可頼
山科や烁の時正の夕ぐれに　正章
霧間にたつる宮の雪隠　長頭丸
花の比行幸の御殿こしらへて　政信
桐の紋ある幕を春の日　友仙
鳳凰もかくは成まひ蝶の舞　季吟
獅笛よりはうぐひすの笛　正章
尋ぬとも谷には見えじ古あしだ　長頭丸
金剛山といへる山の名　安静
良将のたて籠りたる城がまへ　正章
石垣につむ岩のおほきさ　季吟

米船のどんどゝいれる湊口　政信
難波のともしらで繁昌　可頼
よむふりは祈禱の札と推をして　友仙
病者の門へ参る山ぶし　長頭丸
習ひあるは葵上の脇ならめ　政信
むすべるさまも花車な薬玉　正章
影に猶五月の節は名残おし　季吟
いつまたすべき礫うちあひ　安静
廣庭につくねし雪もなくなりて　友仙
清少納言あきれたる躰　季吟
行成のきやうこつけなる物出して　長頭丸
皮肉のはれた手習ひぞする　政信
板木にしおこす源氏のうつくしさ　安静
みるりと見ゆるうし若の影　友仙
鞍馬寺や霞の海に花の浪　正章
すむ魚の名も山椒のかわ　可頼

季吟十四　正章十七　安静十二
政信十二　可頼十二　友仙十三

長頭丸　十九　長久　一

第八　菊

その色のしろひや北の叟草　安静
新酒をのみて長いきぞせん　長頭丸
珠の名の三五の月にしくはなし　正章
夜すがらむしの戀くどく虫　季吟
露をけどちとも靡かぬをみなへし　友仙
そへ木をしたかしげる刈萱　政信
湯たぎるは涼み所の茶屋ならし　可頼
不定ながらもお成をぞまつ　長久
電すると迯こむ穢多がもと　長頭丸
河原邊には化物やすむ　安静
ふる跡におとゞの執のとゞまりて　季吟
さても見事や井手のやまぶき　正章

僧房も長閑なりける寺の前　政信
薪の能の桟敷とり〳〵　可頼
納豆を提重箱に組いれて　正章
柚べしにはたゞ手をかけもせぬ　友仙
夕暮の月の鼠は出るもよし　安静
堯の代の日のからす冷じ　長頭丸
秌の雨もたがへざりける知死期にて　可頼
塩がゝりする船ぞ笘ふく　季吟
鮑とる嶋根にちるや花の浪　友仙
遠國にきく沖の春かぜ　正章
院の行衛かすみのそことしれがたみ　長頭丸
誰か手形を盗みとるらし　政信
乘鞍をいれてあけをく藏のくち　季吟
武家の内をし見るもひやゝか　可頼
町かたに居つかん秋の水奉公　安静
月の夜比ははやる錢湯　友仙
こせ瘡も晝は人目を耻らひて　正章
子持むしろを引捨る朝　長頭丸

いつよりか付そめにけん脇ぐるひ　政信
守宮のしるしはけたるぞうき　季吟
けぢ／＼が留主する部やに這まはり　長頭丸
腰ぬけおとなさし引をいふ　正章
酔つぶれなど盃の御挨拶　友仙
彌生三日のふねの荒波　安静
蛤もふまれぬ春の堺うら　季吟
去年の落葉の鋒る舳の松　長頭丸
瓜種をまかん垣杭ゆひわたし　可頼
かよふ狐に用心ぞする　友仙
一めんに氷とぢたる諏訪の海　正章
風のけぶりやすき間あら寒　季吟
古宮を守る社人の肩すくみ　安静
出來し太子のつよき御威勢　政信
まけさうに成ても強き中將棊　友仙
日の本復も月待のかけ　可頼
秋霧にいつ立別れ因幡堂　長頭丸
なみだ露けき袖の香水　正章

花のかほぼのみしほをもつとめ銀　季吟
（校訂者曰原本「ほ」ノ字ノ右ニヲト振假名あり。）
長閑に戀慕せよ志賀の人　長頭丸
うつかりと待日ながらの山道に　正章
清水がもとのあくび數／＼　安静
氷もや何とさませど落ざらん　長頭丸
一揆のこもる城の責口　政信
山坂を馬に乗人稀にして　可頼
籠のおほきは十津川の邊　友仙
ふためきてときにし帯を忘れ置　季吟
源氏をおどす頭の中將　長頭丸
おほみきや給る八幡の神の前　正章
厄にあたりし年やいはへる　可頼
緣付はすめる十九のわかをんな　安静
あすの團子もちぎりをく袖　季吟
御手洗の參りやおほき照月に　長頭丸
森の木間を落る涼かぜ　正章
夕立の露は鉾の玉に似て　季吟
鉄炮の音にまがふ神鳴　長頭丸

唐船や鬼界が嶋に着ぬらん　正章
糸巻物にかゆる材木　友仙
きよめねば蜘の巣となる大工小屋　長頭丸
左官がすまふ壁はあたらし　安靜
秦氏の壺の口切近づきて　可頼
衣ぬぎく〻三の間の水　長頭丸
うへ〳〵のよろこび月の行ひに　政信
のきぬる靈はいや〳〵のもの　季吟
學問もまづしくしては成がたみ　安靜
關東までは數百里ぞある　正章
月花の公安もつくる實朝に　長頭丸
去年よりは猶さかふ二條家　可頼
大ふくはせばきかこひの內いはひ　正章
入部の道でむかへぬる春　長頭丸
御座舟に醉つゝ物をはきちらし　季吟
せちだ草履のおほき濱ばた　安靜
琉球に宿かす法は珍しや　友仙
むしろをしひてひける三味線　政信
連歌師にわるくいはるゝ座頭の坊　長頭丸
宮司が妻に夜這するらし　正章
かたゝ燈籠けしてもきえぬおもひにて　可頼
後は鼬に鳩ぞとらるゝ　長頭丸
杖でせゝる溝のつちもやねばからん　安靜
きれたる痰を捨し老婆　季吟
風の氣も月になをれば達者にて　政信
夜も長旅に漕出すふね　可頼
御厩や秋の祈禱の猿まはし　正章
小鷹の犬は引のけてをけ　長頭丸
紙はかみ張子は別のやり所　可頼
娵入の折にしたる買もの　政信
かたさがりありとや直す新枕　季吟
亂し髮にもたける名香　友仙
姿たを花のやうなる風呂あがり　安靜
哥舞妓太夫にいだきつく春　正章

安靜十三　長頭丸廿　正章十七
季吟十五　友仙十一　政信十

可頼　十三　長久　一

第九　雪

白虎か竹の林のまだら雪　友仙
霰の玉をなぐる雲龍　正章
ちよぼ〳〵と穴ある淵のうすらひに　長頭丸
はすの根をとる人のあやうさ　政信
足もとの菱のとがりを踏たてな　季吟
月なき比によする域貴　安静
穐の日の恭會に黑の手が出來て　可頼
身にしめてかく和哥の墨付　長久
夕露のそゝぐ梶の葉をし拭ひ　正章
汗水たらしおほうするなり　友仙
物のけは土用のうちにさしおこり　政信
ほしたる脚布やたゞるかゆがり　長頭丸

きぬ〳〵にうつる虱もかたみにて　安静
麝香にしめる人香なつかし　季吟
折〳〵に祕藏いあふぎもてあそび　友仙
よくこそすくへ河狩のあみ　可頼
惡行を捨て陀佛と名を付て　長頭丸
穐の彼岸に跳る道場　正章
あまのはらへらぬ茶の子のもち月夜　季吟
砂糖のやうな濱の露霜　安静
おもしろき色は花よりやくしほに　可頼
融のおとゞこゝろのどけき　政信
日も永き詠哥やしのぶ文字餘り　正章
息もつぎあへずおもふ軒口　長頭丸
音にきくあやめの前を戀こがれ　安静
かつみたがるは淺からぬ中　季吟
二の町によき玉章はをかれめや　長頭丸
烏瓜をも出せ市の棚　友仙
いつよりも月住よしはにぎやかに　政信
春の景にもます秋の海　可頼

櫻のり喰くらべじな紅葉鮒　季吟
志賀山寺を出るあふみ業　正章
鉢ひらき餬ふやお手の中ばかり　友仙
とらへた碁いしあたまへぞあぐ　長頭丸
那智の濱にさし付し舟の梶枕　正章
不圖夢さます瀧波のをと　安靜
あまだりやとの外なるよるの雨　可頼
書院のさきの苔の朝露　政信
槿花をやきりて亭主の生つらん　長頭丸
咄すは秋の一日の友　季吟
月までも百韵連哥み て叅て　友仙
粥のお中のさぞなすくらし　正章
火どよといへばあたりを懸まはり　安靜
馬のやまひやはやなをるらん　長頭丸
逢坂や八坂で鯖をほどこして　正章
乞食あはれむ能登の國人　可頼
辻堂は釜の價でたてつゞけ　長頭丸
地藏ぼさつに茶をぞ手向る　安靜

華は猶つめやさいのかわらはとも　季吟
梅津の邊におほき春草　長頭丸
のんどりと神垣ひろき宮どころ　可頼
御燈も殘る月の明がた　正章
方丈に秋の螢のきえかへり　長頭丸
式部がおもひ露よなみだよ　友仙
いつか又逢ん宰府へ生別れ　正章
讒奏をせし事はうらめし　政信
いとあしき后のこゝろよく成て　安靜
祈禱にくろくかはる白髪　季吟
眞盛にまけめや守る摩利支天　友仙
大原の鍛冶の銘のきり物　正章
科あるをいかでたすけて置ぬべき　政信
わろきやつめとしらばたゞされ　長頭丸
あだめくはうなぎのやうにぬめり歩き　季吟
三嶋暦か書くどく文　可頼
年始より京をばおもひ伊豆の國　長頭丸
雜煮をいはふさすらへの袖　安靜

よろこぶやとりてむすべる春の海　正章
落ひたもある釣針の糸　季吟
余念なく蹴る御簾の戸の鞠遊び　政信
手飼の猫やざれまはりぬる　正章
何ぼんも咲みだれたるふかみ草　友仙
沈香亭やさぞ匂ふらむ　長頭丸
家鳩の軒端につれをさそひきて　季吟
八幡宮の秋の廣前　政信
戴ける三木のさかづき影ほして　可頼
お禮を申かへる重陽　友仙
能果てかたにかくるや華衣　長頭丸
岩をかすみがつゝむ奈良坂　安靜
物よしの住家ゆるがぬ春の風　正章
鍾馗をかきてをくや有得者　長頭丸
樂寢にはおそはれまじや小夜枕　政信
胸にある手をのけてのびする　季吟
乳のみ子がおもくて腰やいたむらん　長頭丸
守り袋はいかにおほきな　友仙

そらざやをしたる刀もみじかくて　安靜
喧嘩なかばにかい逃てゆく　可頼
ひとつしゝばひあふ獵師えもとらず　季吟
秋のは山やよその領内　正章
卓散に出る松茸はうらやまし　友仙
露に濕氣のふかき道ばた　政信
おりたつと月に見えたる馬の鞭　可頼
小督がしのぶ宿やしれけん　長頭丸
細き升つかふおとこと名の立て　正章
なる度ごとにこはき神鳴　政信
碓に鬼がふむかやおびたゞし　長頭丸
なべて節分にくふはばくはん　安靜
農人もするかやさしき方違へ　可頼
中河邉にみゆる蓑笠　季吟
蓬萊と嶋ふたつつく庭の華　友仙
熱田を親子勸請の春　長頭丸

友仙 十三　正章 十六　長頭丸 廿
政信 十二　季吟 十四　安靜 十二

可頼　十二　長久　一

第十　歳暮

下戸なりとひとつ歳暮の霰酒　　正章
例よりも猶いはふ餅突　　友仙
恵比須講といふ其日をゐのこにて　　季吟
生れあひしや商人の家　　可頼
弓取の弦棐ならぬはふつゝかに　　安静
驚鹿にひたとまとふ夕がほ　　政信
月赤き邊土の住居かこひなし　　長頭丸
身にしめ京は用心をする　　長久
露分る福原おちの道すがら　　友仙
庭中にもる元日の雨　　正章
鶯は梅の華笠しやんときよ　　可頼
糸柳こそしみたれにけれ　　季吟
河よけのわくにもたまる春の雪　　政信
水にうつろふ月はおもしろ　　安静
猿猴の手も長き夜にのべかゞめ　　正章
上と下との木實ぬすめり　　長頭丸
賀茂山やたゞすの森のあふれ者　　友仙
貴布禰へ來ても神は拜まず　　正章
鬼のすむいはやの前を迯かへり　　季吟
奉公やむるよりみつのうち　　可頼
蜂のすふ花のあたりは掃除すな　　長頭丸
春まだ芋の莖は稀なる　　安静
いはらしか去年や漬ざる糠の物　　正章
にえたる湯をばいかでさまさん　　政信
風呂はたゞよくたつをこそもてはやせ　　季吟
なをり銀けりおほきこしぬけ　　長頭丸
施行ひく所はとにせきあひて　　可頼
脇ばさみつゝ隱すあざまる　　正章
母や子のかほの出來物耻ぬらん　　安静
火を遠のくる緣付の夜半　　友仙

逢事はかさねてといひ他屋に寐て　長頭丸
　ゐたかくさしやひろますくせり　季吟
尻窄てたてる若衆の高養齒　正章
　澁柿くふた跡やむさかる　長頭丸
月影に出す水梨の寄麗さよ　友仙
　更るもしらぬ秋の納涼　可頼
おもふどちしく毛氈の色ごのみ　政信
　唐人はみななむる腎藥　長頭丸
黒くふとき髪はまきんに透とをり　正章
　法躰なれば燕尾かづけり　安静
隠れなし年のよりたる皷うち　長頭丸
　めし出されてのぼる玉殿　季吟
雲中の化生射させんとばかりに　友仙
　祈念祈禱は盡しつくしつ　長頭丸
佗言ぞ今はこゝろとおなびきやれ　季吟
　二女狂ひもあるならひかし　友仙
なをるべしみぎり左りの眼玉　長頭丸
　折烏帽子きて参るよしみね　季吟
月花の詠を少将たてまつり　友仙
　佐保姫君やいます帳臺　正章
結講な霞のころも懸双べ　安静
　冬はうそさむさうな香久山　長頭丸
眞榊に霜八どまで置かさね　正章
　さよ更渡る神前の橋　友仙
宇治川の月に成まで氷搔て　季吟
　炼も詰るやうへの御茶つぼ　安静
同朋が霧分のぼる嶺の寺　長頭丸
　長刀をもち拂ふ山草　正章
庭は清めたけど亭主のぶあしらひ　友仙
　せちだにやいとすへし盧地口　季吟
腰かけてたばこやふけるきり居敷　正章
　湯入すくなき時ぞらくなる　長頭丸
のぼりぬる糸巻物に利の有て　安静
　繁昌しける長崎の町　友仙
戸ざゝざる世ぞ下の關かみの關　季吟
　主も從者もたゞ見する能　正章

本草や抱へしくすしらざらん　長頭丸
たんすをもつも指ぞしびるゝ　季吟
晝食を遠き所へはこばせて　政信
今山荘の普請するなり　長頭丸
正眞か似せか小倉の色紙形　正章
薄を書し繪こそふすほれ　安静
不斷香を燒ぬる秋の佛前に　友仙
月くらき比ひかる燈明　政信
龍王のあがるとぞきく與謝の海　長頭丸
車の紋かたつ波の紋　正章
垂布を華のみやこにかけかざり　政信
鰐口みゆるとし德の前　季吟
ほう引のわらはべおどす元興じ　長頭丸
たはぶれどもいやよみめわろ　政信
けさう文ほしひかといふ御田植に　友仙
いとしさやたゞ夏の天山　安静
おもはずもあのよで聞か郭公　正章
杜子美といふも今は名ばかり　長頭丸

近比は賀の祝ひする音もせず　季吟
底だめみれど鳥目はなし　正章
殊外つかはれものゝ無興づら　政信
よめやいはれぬ悋氣いはるゝ　季吟
茄をもちぎれる事やにくむらん　安静
かたわのあれば二夜とも寐ず　長頭丸
半月の空に名のたつめたなばた　季吟
律にしらぶる琵琶や玉琴　正章
公家衆の秋に參れる槇の尾に　長頭丸
車の簾あぐる山坂　安静
四方の景を御覧ぜんとの仰せにて　友仙
數ある亭の作事いそげり　政信
毎日の人歩もたゞは雇はれず　安静
入部といへばいさみよろこぶ　季吟
花の袖に大鷹小鷹居させて　正章
臺にならべし紙は年玉　友仙

正章十九　友仙十五　季吟十七
可頼五　安静十三　政信十

長頭丸 廿　長久 一

追加

鶴の巢か門松にかくるかざり藁(ワラ)　　友仙
　蓑龜(ミノガメ)の尾に似たる齒朶の葉　　季吟
六角ないはほある野の雪きえて　　長頭丸
　まんまるにさし出る日の影　　安靜
かぞふればけふ十五夜の月の暈　　可頼
　長〳〵しきは秋の舟待　　政信
冷じや高塩によする海うなぎ　　正章
　鯨(クジラ)をとむる浦の繁昌(ハンジャウ)　　長久

右ちゞの誹諧連哥は、なにがし友仙先生ため有て催し給へる也。ためとは何のためぞ。花咲の老翁は此道の長にいませば、あめのしたのかみ中下部まで其風をあふぎ、その流れをくむ事、いしかめの龍にすがり、うしばへの驥につけるがごとし。休甫・德元のともがら、卜養・望一など遠きさかひをこえて、添削をまかせ合点をこひねがへり。しかあれどもゝとせにさのみはたらずといふべくもあらぬよはひなれば、會などにも國に杖つきて出給ふ事かたくて、其みづからの句をきく事まれなりき。さればもといひ捨給へる言の葉のわづかに落ちれるをきゝつたへては、かはきにしづくを得たる心ちせり。友仙先生もはるかに此風流をしたひて、おぼしきまゝにきゝてはらふくらさんとのためとかや。其席につらなりし二三子のよろこび、又なににかたぐひ侍らん。さる老の坂いたくのぼれる齢ながら、あさ糸のながき日ねもす、くれ竹の夜ふくるまでも、身じろぎをだにしたまはず。十度の會のほどに、人の句ざまのよしあし、さえありてさだめきこえつゝ、たゞ露ばかりの事も、一ことのしたに茯神となり、三

たびきゝては琥珀と成て、げにそこびかりもさしぬべし。中比、立圃・重頼のたぐひ久しく此おきなの門下に遊ぶといへど、終にかくしたしきみちびきにあへるといふことをきかず。此われとち嘆何のさいはい有て、今此時にあひ侍しかくたのしきよろこびをしるしとゞめて、今の世の人にもひけらかし、のちみんすきものにもけなりがらせんとて、高弟正章のぬし清書せしむるにそへて、承應何のとしみなづきその日、そんでふそれ氏季吟、聊其おもむきを此こゝにかきつけぬ。又この清書にいたりて、くやめるところ〳〵もあれど、あとさきのさはりをおもひて、さながら見過すことゝもこそ、さはいへど彼としのつもりのなせるわざよと、みん人おもひなしねといへり。

明暦元年乙未五月吉日

敦賀屋久兵衛開板

鷹筑波（たかつくば）

た・か・つ・く・は 五巻

西武撰

鷹築（三九）波集　巻第一

本勝寺　日能

春たつといふばかりにやかざり繩
唐土にもたつるや門ににほん松
經中のわう宿梅やほう法華
板はんになりてもひらく櫻哉
詩に哥をよみつぎたいの櫻哉
なん千里行まを虎のをそ櫻
畠にてほし瓜となす日でり哉
尾のかへにこゑをやながふ引うづら
ちゝくはいと啼は子がひのうづら哉
かれこゑにきれ筆やなるきり／＼す
きり／＼すなき事してやかべそせう
木の葉さへうそを月夜の時雨哉
ひとりかもねんとをしにやかり衾
冬されの誠になれるさむさ哉

みのやにて

かくれみのやかくれがさきて雪の宿
春咲にひやく早梅ぞ雪の中
　今輛東から君が代のはる
年とくをまづいはふなるにし肴
　あまたのほしをかぞへてぞみる
節分に年と性とのあらはれて
　花のふゞきに鼻つまりけり
春さむみしがの山ごえしはがれて
　きをもあけはをうたふこゑ／＼
庭鳥の居たるあたりに蝶のねて
　ゆる／＼と心もしたる春の比
花見小袖のうへのさげ帯
　むなふくれして大はらのさと
西行が哥あんじつの花のもと
　當世へむかぬむかしの人ごゝろ
春宵一刻あたい高直
　たなよりも二三尺程さがり藤
春の日あしをさげすめる暮
　夜學をするや野はづれの寺
花も火をともす灯臺草の本
　おゆるしあらば衣がへせん
盗人を卯月の初しばりなは
　あせ水になる見物のには
のりおはるけい馬を川に引入て
　あせはたる共しばしこらへよ
いとゞしくてる日もあつきやいとして
　折ふしわるくちがふ鷹かい
みせにだす扇のねをやしらざらん

あら名殘おし歸るさの道
祇園會のほこや五條にまはるらん
ふしたくさんにまへるまひ〳〵
手にかざす扇のほねや馬のむち
いち夜とまりに身をぞくるしむ
あしよはき人のいらざる富士參り
夜るはきもせでひるばかりなり
蚊やの手によきかたびらをかけをきて
とをたくみに色をよくする
かゞやくやまはり灯籠のすはうがみ
めの玉まつるそこはかのまへ
水むけの萩に山桝をおり添て
うたひぬるをうなの哥はつよからで
中おどりにし賴むしんぼち
むかふおろせば見ちがへにけり
月くらふなれる東の窓すだれ
雀ねた軒ばの竹はかたぶきて
勸學院のにし窓の月
かつしきに心を付るやさしさよ
まめをぬすむもめい月のため
てだてをかゆる僧のかしこさ
をしてみつたゝひてみたる月の門
靑かりし葉も色付にけり
とろゝ汁の後にじゆくしを口の中
いかなれば心ふり袖ねに啼て
もらへどださぬかごの鈴むし
つくり病に德もこそあれ
やせ菊をそだてあげての花盛
つかふてうづはかなくさき水
にごり江におとすいろはを取上て
文字さんだんをよりてこそ聞
肩衣のもんと參りは霜月に
四ふしもなへて物もいはれず
雪おれの竹をはらへばしんくなり
三條だいのはやる此ごろ
西殿のたかのあそばすまねをして
きられぬ中をおもひきつたり
君ならで誰にかやらん梅の枝
けふこずばいやあすはいや〳〵
三度までかぶりふり袖引とめて
わが心から人ににくまる
十八になるまでえにしいやがりて
ふしをもとめてうちたゝく音
竹杖を月の夜まはり聞とがめ
戀のおこりも指法のみち
君さまのねつきさむれば如來はた

出てふたゝびたちかへるまじ
形見にとのこしをきたるあせのごひ
君がくる夜はさだまりもせず
しんきやと思へばうらみわくのいと
かほにすみつけ出る君さま
ふるなべをかづくちくまの神まつり
よりそふにあく目みえてやきらふらん
ねりすごしたる衣〳〵の袖
くもでに物をおもひきりたし
灯臺の本にてかけるうらみ文
あせのごくに袖ぬらしけり
りんげんのおもき仰に戀やめて
哥によく〳〵ふかき執しん
戀故にかづらとなるや定家卿
似合た中と契るうれしさ
ふうふ居て餅賣宿の釜のふた
のこる所はあらぬかけもの
つくろひを誰みつくべき此茶入
しゝまいは大和の國にありつきて
見てもみあかぬ三輪の杉たち
みればはた一筋しろう雲立て
帝尺修羅のたゝかひやある
ゐんさきに川のながれを請とめて
たびやゆかけのおはきしち藏
是程に涼しき座敷よもあらじ
しつたどうしのけふのつきあひ
庭のすみにて啼こゑぞする
子をだいてゐんよりしたへおちの人
かほをあらへばなをもみめよき
こひ〳〵とよばれて出る水いたち
花の本にししくあらむしろ
とがめけりそこにふす何人連歌
きらしさうにて物をきらさず
分別の有がかゝれるあつかひに
杉のまろたをかけはしのすゐ
用なくばきその山家のすべり道
蚊のあるうちははなされもせず
はれ物をいかにと友のとひかへり
西にむかひてをがむ度〳〵
夕日からあすの朝日をまつら衆
奥州の衣川でやぬらすらん
にやけにすくなの高館の御所
打わりておし此山桝つほ
せつかんに弟子のあたまをはり過て
いたづら者と人やいふらん
帶にさへせばき衣のたちはづし

曲なしな夢と思への浮契り
我をねさせてつく餅のをと
坊主の能はたゞ堂のばん
朝長のせんぼう太皷夜る打て
ふりさへよくばそはんとぞ思ふ
面にはうすむしくしに茶せんがみ
いらぬさしでゝとがをおひぬる
われつぼの荷共しらずにたすけもち
衛門はいつも殿居もる役
赤染のしやうぞくきたるみすの前
半俗なりと人笑なり
大王に生るゝむくひしりもせで
川にはまれどぬれぬうれしさ
水のたるやうなる太刀のさや袋
賀茂の川原で氣をぞうしなふ
水をもて長明丸やのますらん
とびこぐらする寺の新發意
ならび居て急ぎくりたる大はんにや
ふしくれだつは例の哥口
尺八のたけぬを人やわらふらん
色このみにぞ心うつせる
あまごぜむ無用のべにをあきなひて
いへばいはるゝとの葉のすゑ
木の枝にのこぎりくづをかきまぜて
我はもと𦬇の行に身をなして
米を作りしのう人のはて
花のすがたぞしほにこぼるゝ
梅づけのつぼころばかすそもじさま
晝のやすみをしばしする駒
朝よりもさせ共はてぬ中將碁
けふの植田はむらのつきあひ
こつといの牛はなちかふ廣き野に
思ひまはせば皆おなじ事
打たゝけいくつ有てもぶしやうこま
ふしやう〳〵もおがむ御佛
參詣はいづくよりかはきたい房
百千万のくやみこそあれ
作りぬる罪にひかれん那由他刧
三昧に住する人のかしこさよ
たくみに作るはか守が家
色まつくろに殘るそとば木
辨慶が爰やはてたる跡ならん
盆にさへなといであはぬ中
ゆかしさにまいるや君がはか所
なま年よれど氣はうきざうす
せんぼうにおどり太皷を打まぜて

をやにしかられ迷惑やする
尼がほに付たるべにをかいぬぐひ
妙なりけりと見ゆるてくゞつ
寺のうば米入袋事かきて
文字さんだんをよりてこそきけ
肩衣のかたき宗旨は門徒にて
南無尺迦むりをいはじとぞ思ふ
諸佛皆舌を有頂に付上て
かしらもしりもわかれざりけり
獅子にのる文殊やふるび果つらん
くせはあまたにあるとこそきけ
頼みけり南無千躰の觀世音
心の外になどもとむるや別の法
花嚴經 そよみばかりをせよけごん經
毎日あがる大王のぜん
阿含鹿野園 御佛も苦勞を鹿の身となりて
公事のけんだんたい〳〵に聞
方等經 をかしぬる大なる科をしりもせで
般若經 かきたつる千枝のひかりかゞやいて
文字あきらかに見ゆる卒都婆木

西方のやうすをきけばおびたゞし
法花經 一山句までつめる法華經
寳所ちかきにありとしらずや
化城寳所 草臥をやすめんための中やどり
つゞれ衣のうらをだに見ず
衣内繫珠 身のうちの玉もえしらぬ酒の醉
三界火宅 など三界を宅とたのみし
終に子は羊鹿牛車に法の道
くはんとすれど鬼もおそれず
涅槃經 後の世をおもふ半偈に身を捨て
生死の大事のこすとはなし
涅槃經 をはりぬる法にふのりをときそへて

妙滿寺成就院 日如

身も沙門御座れ毘沙門けふの春
ころもけさ春きて布施や數珠つなぎ
鷄日を長閑に告る八聲かな
けふくるや花山にかへす年の年
遍照のはなのほうしか花頂山
うばそくがうばひて折や姥櫻

涼しさにまづひざをくむ網代かな
　十九歳になる僧身まかられしさき
涼しくも火宅を十九出家かな
　飼たる犬の死しな人な葬樣にして
　かく
犬死はさせじ一夏の佛事哉
月形やせなかにて見る衣川
ぬか星もみへぬ月夜や米の飯
祈禱にて打事なかれかみな月
　頭痛の人の祈念にまかりし時
雪の花もけさはにほふや香爐峯
　さきがけは打ちされこかひもなし
かぶとにさすもよはきやり梅
　折紙の文字のかすみもにほひきて
太刀にそへてやをくる梅がえ
　門をいてすみるや柑子の花盛
惡事千里にはれよ五月雨
　ならぬそせうをいたす百姓
運上のくたもの共の年ぎりに
　ゆびさす月のかけはぎんがり
はげあたま修多羅の敎を身にしめて
　佛にもよしとあしきや有ぬらん
とし〳〵かはるほしまつりせり

　春はとく〳〵お目にかゝらん
雪霜の氷るかはしらや石地藏
　つみにつみをも作るかなしさ
主命は親の日とても鷹野して
　あつぱれ見事若衆のふり
傾城のかぶきをほむる芝居にて
　むしろひつぱりなまづをさゆる
よごさじとかくる繪馬や辨財天
　ほの〴〵と御あかしともす神の前
繪ははげにけり人丸の影
　哥數は千首ばかりもあつまりて
くはんをんだうにおほき順禮
　繪馬はかみにかゝぬものかも
十王のいづくにあるも木作りに
　功德はいづれ法花念佛
吉利支丹ころばんとての談合に
　尾もひれもぴんとはねたる魚をみて
むねのかはらはしやちほことしる
　つりがねをせたからげしてあげけらし
龍宮よりもかへるひでさと
　海のそこにも佛こそあれ
うづきつゝやむ目のつよき黑眼
　ふすいねもありたついねも有

八せんのひよりやかねてしれぬらん
　禁中はみな日出度しとざゞめきて
矢聲と共にぬえをいおとす
　かちたるものぞ後はまけける
白米のさうばは日々にさがりきて
　いらぬ事にぞほねを折ける
撰集にのぞめと哥やわるからん
　すきの程こそやさしかりけれ
弓取の身のなるはての哥を見て
　わらはれもせぬうはなりのはなしにて
ね色もわるき老のひちりき
　つる葉のするゐもわれはなつかし
こん本の生れはみのゝまくはにて
　あぶなきわにの口をのがれた
かつ事はかたゞのものゝ對決に
　わけのきこへぬ事をきかする
唐人と日本の人のつうじして
　いまつかふものも年號からげにて
いか程もつた寛永の錢
　これより一句ニ付句卅五句同
　すぢりもぢれる心むつかし
野馬臺をよみしは蜘のいをとめて
庭の木はたゞすぐなるを見てもよし
綾のはた紋のつけやうはつにみて
さいめろん地の割算は上手にて
一順の前句は松に藤のはな
みな人のならぬ思案や蟻通し
かくなはにする山崎の油菓子
しうとめにそふよめごぜの物語
わづらひて久敷いはぬかみかしら
しのぶるにたがうちきせたすり衣
こと道をゆけや鞍馬の七まがり
奉公はなるまい主の言葉つき
庭のまくず野分のあとにさうぢして
謀判はならぬすがたにすへおきて
ふつとでゝかほにかゝれる蜘のいゐ
はひありくへびみて出し藪の内
わが妻の醉さへすればおよらひて
うみをきしをゝば子共が引さばき
折本の經の長きに風ふれて
あつかひはやぶらん敵のしかけにて
しばりやうみるになるまいなはたらし
木のまたにそれたる鷹のへをとめて
ぶすきなはつゞみのしらべかけ捨て
ほとほるか子はむさくさをいひ出て
あやつりをからくる智惠や天下一

曲筆は大かた人やきらふらん
釋義にはそむく儀勢の所化有て
ゆへしらぬみだれ板木の御本尊
あけをろしろくろのわるきつるべなは
たすきよりたゞはさみをけ經の紐
遁世の由來をきけばめにあきて
脉躰はとりわけかたき病者にて
猫づなを引だしかねたえんのした
曲まりは時ゞちつとみたもよし
世の末は賢なる人もまれなれや

常良 仝翁

寛永や十八公の門の春
きによつてとけ鶯のほう法花經
梅ばちや花のりんうつ雨の音
置露とくんで落るや花軍
くゝたちに一つ飛蝶や片目貫
かりがねや無てんに歸る文字の關
芍藥のてきやくなれや鐵線花
露はらひみんしう菊のつほのうち
珠數玉のふさかやそばの糸薄
三ケ月の出るや舟のへの字なり
月は今宵きるなたからの市めがさ
しよくするやかたはらこけたもち月夜
くもつたり雨夜の月や古鏡
時雨にや紅葉せしめのうるしの木
白色やけに根本の雪佛
枝に葉に雪をぬるでや白うるし
道のはたにあらはれみゆるかたつぶり
琉球人の上るこのころ
世を渡る人も餅やのわざはらし
いきたるものゝ命とりさし

事成院 爲山

九重の山やとをめの一かすみ
立秋の露はらひかや荻のころ
酒のまぬ鷹師も今朝しらふ哉

板原三郎兵衞 宗朋

立歸る年はとへほに春日哉
若水は老をいづくへはねつるべ
をどしぬる具足にてきやかゞみ餅
出る日のさかむかひかやにしさかな
廻文 いかしなはきしやあやしきはなしかひ
櫻田やさほ姫ごぜのけはひでん
蒔繪やにて
ふん〳〵と花のにほひやたかまきゑ
はゝ木ゝかありのみに咲なしの花

いりたりやつり舟にさへあか椿
ちり殘る太山櫻や未進かり
きもんかやロをとぢたる藤の門
夕にはしす共蚊なり夏のむし
あをさしのよき錢となる麥も哉
ほぞつくは二なりなれや小姫瓜
夕立は國光ならしらいの音
矢といひてなげしすまふやうつほ公
霧のぼる木の間や松のけぶり出し
ちよつとうく露やかいでの水ぶくれ
明のこる月のねずみや穴まどひ
かげぼしやみこし入道山の月
ほしおほき弓はり月やめつた的
屋ねよりやあられころ／＼こけらふき
　花やかにみえにけらしな三番三
鶯やひはこから飛梅
　尺八か一よきりなるこぞとし
春はたれしも心らく阿彌
　二度春にあふぞめでたき
花よめがはなのやうなる子をうみて
　夜晝の十二度はなけ時のとり
たいこうつぎの庭の花もり
　かたみをのこす春の戰場

かすみその書ぬる文もかなかぶと
　なかごまでたゞしき刀うつにきて
瓜さねなりの牢人のかほ
　取あけてぞ立よ庭の小梅のみ
竹にかず／＼出來る夏ふし
　のぼりにも染つけにけん菊の紋
この秋京へさらうりに行
　なり次第なる秋のさぶらひ
露ほども殘す年貢をなすびたね
　秋になすかとさんをきてみる
かりがねやりをくはへつゝ渡るらん
　よをいとふ姿か月のかげぼうし
かしこきちゑのまはり燈籠
　はいたかの丸はしに身はくたびれて
月にあぶなきいよの谷川
　しるのみぞこくなれなびく中
邊士には月の夜比にざこねして
　僞のかずたつるせいもん
雪の中のぼせをの女だいてねて
　秋のよばひのはやるぜん寺
つゝめ共達磨のあしのほに出て
　戀の道こそすき／＼にあれ
若衆の口を共まゝすい茶にて

つゝみぬる心のばけもあらはれて
　文にきつねのすむあなかしこ
くらがりながらうたの一ふし
　だいてねてそろ〱はだをさぐりたい
こじりとがめのけんくは出來たり
　若衆のりんきや酒のゑひ心ち
かねうちなくてぬめる人かは
　おはぐろを付ぬもかづくうなぎわた
かたゝふたよとさぞ契るらん
　文はこのみはいたづらに名の立て
きる物はちぎるしるしのためにして
　こゆびを中につゝむ玉章
さて〱君のそこ心よし
　おけのわの水もゝらさずだいてねて
おもはぬふりはけしほどもなし
　雨の夜のつれ〲ちはをゆひかのこ
えんなれば手ばうながらもいとしくて
　むこ殿に引かね光の太刀
よき知音もちにけらしなさつまがた
　つきて道をや送るばうの津
鏡にしむかふしらがにをどろきて
　樽のねり酒にほひめづらし
かたく番衆のすはるさすらへ
　くろがねの棒やならべてをきの國
ひんなる人も身はきれいなり
　はぶたへによく似かみこをしやんときて
いつかふたりが枕ならべん
　をひばらをきるべきよしに契り置
しくとなくこそあはれなりけれ
　おやかたの十三年のめぐり來て
かみこばかりを重きる海士
　お比丘尼の身も淸水にこもりゐて
みねこすくものさていかひ事
　本國は遠山伏のたびごろも
後生願ひとみゆるたび人
　つけたりしこしなる錢も珠數つなぎ

大田多兵衛　定時

さほ姫の手飼成らし虎の年
道しりて來る春や老の午の年
立歸る古巣はいづく酉の年
民の竈けぶりこくらかさぎつ長
南枝よりひらけど梅は北野哉
咲花の守護神なれや梅の宮
ふけ田なるかはづの哥やぬめりふし
鶯で哥書をやとづるいと柳
殘りなくつみほろほすや佛の座

日向でもみたとや語るいせ椿
春の季や見する野山をやきしるし
水きはや立て見事な花の波
風なくば諸公事御免ぞ家櫻
塩がまの花をのぞくはちか目哉
夏かけてひらくや藤の門たかひ
霞ぬぐ山もやこけのころもがへ
螢火のくらゐつめなる朝日哉
竹も子に拂ふあつ火か飛螢
草枕ならべて見ばや美人草
瓜にさへつめあるこまの渡り哉

廻文

水無月をやどせる瀬戸やおきつ波
長き物に月はまかれな雲の帶
船頭やおほき山路に月の舟
武藏野でみる三ケ月や鐙なり
うす雲もうき十四夜の月見哉
淵と瀬にうつる月みよふたかは日
入人の身もやあからむ柘榴風呂
みな神に手向のぬさか紅葉鮒
天も地にとぢつく月の氷哉
かいつぶりふすや氷のはり枕
とぢまめか氷の上の玉あられ

落やらぬ継木の雪や餅そくい
　幾春か哥よむ雲の上
たえやらぬ世は久かたのあま蛙
　たちきたるくゝし小袖のあたらしや
廿二のとしいはふ正月
　梅の木かけて君とかりふし
別れ猶うぐひす袖を引とめて
　ぬりにしかべの土をねやせり
でんがくの味噌ぞながるゝいろりはた
　こくうにかけりまはるけだもの
みね〳〵をてらせる月のうさぎにて
　終に本望とぐる宗近
ひろがりしやねも軒よりふきよせて
　螢にまぎれともすきつね火
夜學をや稲荷の神のかんずらん
　さがみの國でおほえをぞとる
一ぢんに駒のあしがらかけちらし
　ま一もんじにかくるいきほひ
日のさやもはづす刀は備前もの
　はらへどのかぬはいはたゝさん
わづらへる馬の尾さきのみじかくて
　四天王もや御くはんみつらん
精進をあけぬる木曾の内の者

八千代こめむとたらすいつはり
目のはたにぬりし涙の玉つばき
　たつ名や春のむらさきのうへ
霞する硯もかたき契りにて
　　　　　　　　　　　　野　網
手折んはむりやり梅のかきやぶり
ちくと咲花はねずみか廿日草
夏菊はしもにをかれぬ色香哉
咲比や約束かたき石の竹
赤人とみん山の邊のもみぢ哉
盃やさすが岩木にあられ酒
　　　　　　　清水長兵衛　重正
たからかに衣うちでの小槌哉
　　　　　　　澁谷新四郎　安明
元日にさくはあら玉椿かな
氷とけ水ぎは立やけふの春
棹姫のめなこむすびか糸柳
下緒かやしとゝ目につきや糸柳
廻文
きなやわかにしきや岸に川柳
さかぬまやたていこのまふ家櫻
をのづからきじ焼となるやけ野哉
我と花のちるはびんほうゆるぎ哉

　藤の花をみて　廻文
なか皆はのどかな門の花見哉
まつかいな尻は猿澤の螢かな
から衣せんたく蟬の小川がな
あつけをやはらふ長刀香薷散
まつくろの芋名月やみつちやづら
まちて居るに出くすねするや月の弓
むこ山の引出物かや霧の月
曾我菊の兄弟なれや梅の花
石の邊で甚打は碪かな
姫松はけにぞは白き今朝の雪
　あくればやがてくるゝとはり
元日に先年玉やうけぬらん
〔長頭丸の壽像をかゝせ。千たび百たび。いなみ給けれ共。さし月かけて所望せしに。ねがはくば。我後の世は風となりて。月をばはらし。花はちらさじしと。書付給しかば。嬉敷てこれに軸つけて。みづからもてのぼり。みせ侍りしに。何共物はいはで。大いきをつきて影みてぞ猶ながいきな月と花。と有しかば。そのまゝ付ける。
かすむ山路にやすむてつかい

わかわかひとのおほき世の中
ふる樋とやぶれ車のあつまりて
一そくとびをするやあかつき
孫晨はわらの中よりふつと出て
浮にうひたる人ぞおかしき
瓢箪をかたけながらも船に乗
見ぬ世の事を物語する
座頭の坊ひたと平家や習ふらん
瀧の音は絶てん〱の世の中に
名こそながれて聞太鼓うち
あひたいに人あはでこがるゝ
戀やみとやがてなるとの船の中

澁谷新四郎内　勘十良
大海を手にてせつくの塩干哉

寺地九郎右衛門　俊屋
年玉をつかんでくるや辰の年
くゝたちはしづがつくりし物哉
ぬなはにてゆふや小池のかきつばた
本尊かけよ九夏三ぶく郭公
丸き葉は色も青地のはちす哉
水に移る栗名月やひやし物

銀清
ちをしめて扇や風のかくれ里

中山忠右衛門　榮治
年の矢のたつ巻わらか大かざり
けぢ〱にどこねぶられてよめがはけ
酒ひてや霞の海のさくら鯛

追善
身を土にうづむや苔の衣更

嶋谷市兵衛　一次
物まうと引聲似たりうしの年
はだゝきは音あらたかのすゞな哉
姫松の笠のしめ緒やさがり藤
あつき日は三かはにあせやかきつばた
あざやかな月にそふたを刈田哉
むねはおどれどなぐさみもなし
大喧嘩出來れるや盆のころ
たんと筏のふしみゆるころ
錢かねをふくをの〱の夢の中
わが名はまだきたてる入むこ
戀すてふこぬか三合やもたざらん

藪部七左衛門　爲晴
或寺にて
梅もいま異香くんじゆや寺の庭

大西與右衛門　長次
風の手も山はかはるのいろはかな

はれがましくもまじはれる袖
月見には哥の會をやはじめけん
　たび人どのをみれば大こく
兩替のあとにさがれる袋もち
　風にまかせてかけおちぞする
ねたみあるあひての家に火付ふた
　堺　中盛政
水鳥のね床に敷や石だゝみ
　足代庄兵衛　賀和
みもいらでしゝのつかぬはやせ田哉
　ことのばらをぞつるゝ大名
竹の子の御汁にまじるほしいはし
　いたゞきぬるはふくろなりけり
みじかきは夏の野をゆく鹿の角
　ときのこゑほどふく風呂の中
しかけぬる茶の湯もにゆる精進食
　草臥て往來もえせぬ坂の上
駒引よせていまはこれのり
　かりにも鬼のすだくためいき
むぐらおひてかへるせ中やおもからん
　黛やはやくろ〴〵と付ぬらん
ぬりたてつゝもたくはへつつい
　今はよぶともどらじとおもふ

まけぬればなごの勝負もやめにけり
　今こそはしれ針のおんとく
いづくとか岩波高き舟とけい
　うき身にはたゞ多き罪科
貧ゆへにさい〲腹も辰の時
　日本と唐土をそへて我まゝに
自由自在の哥や詩作り
　牛か馬かと人のあらそひ
大日を觀音堂にすへ置て
　香山勾當　增一
望月やきねのぬかつくもみぢ山
　便一
　やくやとうふのみもこがれつゝ
來ぬ人をまつの下なる茶屋のかゝ
　あたゝかさにやとくるらうそく
佛だんのかたちぞ殘る雪佛
　牧他左衛門　忠次
雲の袖にかくすやちはの文月夜
鴈がねのつばさの文や質の札
　田中九兵衛　充繼
おほふくは今朝ふる雪の白茶哉
咲花は紅梅散か目のくすり
陰にやどりみるや一樹の花の緣

ゆふひかけさすは朱鞘か夏木だち
鬼ゆりにくひつかれてやはかたゆり
まり出しは寶いものこの茶入かな
數〳〵のつばさや五はの四十陵
　どつとわらひてたち去にけり
せきにでゝすねにとりつくまけずまふ
　ながくみじかく物おもふなり
戀やみにしなん命をとりなをし
　はる〴〵行はいやな東路
から衣きつくも旅にわづらひて
　又も伊勢にはあはじとぞ思ふ
くだけしは二見の浦の貝のから
　今はそなたはいくつにやなる
手なをりのうはさをかたる碁の會に
　川をしかけてみるつくり庭
鼓うち先かしこまる新宅に
　あまりねもなき今のあらそひ
境目のしるしはちかひさし木にて
　今参りなを御意にそむくな
ともかうも頭巾はせめてゆるせかし
　月にしも風つよく吹難波がた
夜半もながらの火事の用心
　とんづはぬるをけいにこそすれ
みだれ碁をあそばす人は下手こなし
　ね物がたりにのどかはくなり
大酒の醉さめかいの宿過て
　かうしにもかけたる石の數多み
さがりし見せをあくるうしもち

平野惣兵衛之以

つぎ木にし咲や柑子の花の兄
うた袋づだ袋かやあま蛙
うつろふはにせ紫か牡(杜)若
かりがねや北國道の遣錢
　桐をも植し梅かきのうち
鶯はひいほうはうと鳴出て
　水うみの水をふくべに取こみて
むかしながらの山がらやかふ

為一

風やもぐさ花のちりげを末の春
撫子をそだつる露のちぐさ哉
　朝ゆふ所作にするや川狩
しゝむじな狐も月にはきけらし

知元

吉野川井せきのかごや花筐
摘ぬ葉も名殘の霜に白茶哉
夜晝に十二度はなけ時の鳥

わなかけて首をくゝしの鹿の子哉
夕顔の花や源氏のはたの色
谷川のながす紅葉や水尅火
双六か一葉にきほふ秋の風
　浮世は牛の小車でそろ
禁中の花や見捨て隱岐の國
　きせしゐほしに念や入けん
花の春能にし聲をからす丸
　山にそろ〱かゝるくろ雲
かぎ蕨折殘してや戻るらん
　勅を背て讀哥の作
忠度の跡を吊ふ花の春
　乳のたらぬゆへに子共のせはやきて
破れしかやに蚊や入にけん
　手を曳逢ていざやぬめらふ
夕負の棚に生添山のいも
　靜なる時分に關やひきぬらん
思ひのまゝにうちかち相撲
　つんと晦(暇)をいだす女房
愛憎も月の夜ひとつおならして
　袖に何やらいれて望月
いやしきかぬすむ將碁の駒むかへ
　さてもにたんか心おそろし

細布やまおとこにまできせぬらん
　空眠りする猫ぞありける
とゝかゝの夜るのたはぶれきゝつけて
　大和言葉をきやしやにつかへり
撫子の花を樣へや送るらん
　余所目はいかにぬめる若僧
兒達へまいらせぬるはねり木にて
　ひとり行君に氣遣いかばかり
人喰犬のおほき別路
　思ひしらせん讒言の意趣
魂のこるや口にふくみ狀
　たてゝ似合ぬ此屏風何
町人の能矢數〱たしなみて
　爰ぞ最後と思ひきり石
双六やくじれ一六うちぬらん
　煖めて酌酒盛やあかざらむ
鳥の玉子のかへりえぬ客
　長旅をして歸る丹波路
少將の科を御赦免なりけらし
　痛はしや名も高倉の物語り
出しぬかれつゝ買る馬道具
　かしらも共におもきうち肩
大きなる魚をひれまで荷ひきて

わらはべのすかすもきかずやにいそて
みるもあぶなき松の木上り
　慈悲の心を持自然居士
藪醫者は賤にも藥能くれて
　うらゝかになす追善や親のため
果報ゆゝしき房崎の臣
　かけ取集め上る商人
田舍でや祕藏の壺をわりぬらん
　つぶりに油ぬりしおもかげ
伏見なる地藏にかくる願滿て
　たゝき牛房を出す寺方
宗論に負てや耻をかきぬらん
　　　　　　　　五宮九左衛門　正之
ゆびはぢくまはす扇やかざ車
かたむけて聞や礁のしころうち
圓山の雪はしろみの鏡かな
　　　　　　　　足代七兵衛　山勝
すがほでも梅よき花のかたち哉
千里一はねやならべて歸る鴈
　いつもひえぬるいし山の寺
夜るは猶ひるもむらさきしきぶすま
　まくらならべていざふたりねん
いつかさて口をすひちやうこうけいに
　すひつきたいと思ふくちもと
水に住ひるはならぬぞ夜さ御座れ
　ぼち〳〵と誰がいふらん閨の内
班女が小袖かのこにぞする
　賣捨くやむかたなわきざし
牢人をしたれ共また代に出て
　掛物の繪をや上手に書ぬらん
われてはおしきそめ付の鉢
　ね覺の床のとこも寒さよ
かんたんのまくられたるは尻かしら
　物すごの身と人やみるらん
よろ〳〵としたる姿は八瀨法師
　海から山へのぼりこそすれ
舟頭の多くみゆるや船の中
　風にわた〳〵ふるひこそすれ
よしもりや俄におこりやみぬらん
　　　　　　　　濱野左兵衛　不竹
門松やにほん一度に辰の年
あら玉の年たちかすむまなこ哉
鷹をいつすへしこぶしの花の枝
さかぬ間はふたしてをくやつぼすみれ
手向には妙法蓮花つゝじ哉
ほす汗は身のかはよりの出水哉

一ふりはたまりやいたさぬ雪女
　うたふ小うたのふしはおもしろ
尺八の一よもあけて鳥のこゑ
　かくせど人のしるかたはなり
くもる夜もおがみ申すぞ三ケの月
　はやくぞなをる禰宜の寸白
野々宮の森のこがらしすり付て
　手やよごれけんならの京すみ
むかし男うる〳〵數も鍋さけて
　色こそみえね顏はやつるゝ
春の夜のやみわづらひは思ひにて
　けのなひ物をかはらけといふ
その比はうねめの年や十二三
　我が身さへ我まゝならぬうらめしや
かゆきところへ手はゆかず候
　めでたやな鳥井を立てつちの音
むかひてかねをかくるてんびん
　客人や思ひの外にのびつらん
ふできなれ共いたすうんどん
　客僧の前に袋をぶらさけて
是や無縁の慈悲をたれみそ
　又あひともにたつる誓文
はうばいのこんの袷やうせつらん
　穴のまはりをさぐりこそすれ
座頭もや錢のよしあしえらぶらん
　いねの數をもしれる百性
薪をばうしとらの日にかりじまひ
　こくすりは命なりける物ならし
一ぱいもらふさ湯の中山

一葉子

犬と猿の中立なれや酉の年
殘る雪や今朝けしかくる犬年
去年は戌跡にゐるなをる今年哉
さほ姫のめどや蓍の卦牛の年
きやらよりは十早梅の匂ひ哉
散花の雪ころばしかふし柳
花に雨は親子いさかひ雫哉
お文よむ人やと葉の花かしこ
雲か波かお月か雪か志賀の花
卯花の比はらうさい闇もなし
子のすゑの世に殘す句のたけも哉
夏の夜はねぬにあけちが天下哉
地藏とやなる空蟬のからだせん
寄合てしゆせん連(蓮)花のはなみ哉
露の世としのた玉はく小篠哉
秋風に將碁たをしか駒つなぎ

知恵の鏡くもるは運の月夜哉
くらげもや骨にあふきか海の月
桑の木は四十八字のいろは哉
蔦そめて松の色さへ朱ぐれ哉
ふり落す葉は一二三四ぐれ哉
水こほる筧や銀の竹ながし
降雪も杉なりにつむや三わの山
　孔子のいさめなにもたちばな
朝聞はゆふべに死とほとゝぎす
　春立は龍の都もちかふして
かすみのうみのつりがねの聲
　引残たる塩のあちこち
月はひとつ影は二見の大網に
　三千年のよはひめでたや
北州の松には鶴の子を生て
　さしづのごく瓜をひくなり
三味線の駒のわたりに普請して
　春と冬とのゆきの打合
白鷺は北と東に飛違ひ
　碁磐碁石のみゆる水底
四角なる池をや星の照すらん
　十四十五や戀のしはじめ
上るりのうゐあなあくる牛若子
　ま男をみる夢のうきはし
たづぬれど枕刀もなみだ川

村田惣左衛門　頼次

手酒にせよしやう〳〵菊の花の露
　雨はふらねど木はたくさん
もり山に涙かたしきねゝをして
　つれなくうつゝほねはかり金
物思ふ我かも戀のおもにもち
　ひへ入もしらずうき世のわるくるひ
こたつのそばでちぎるまおとこ
　おもしろく六條へんに立けぶり
ほせるたうふはふじのやまほど

栗田　玄康

ふり賣はかふねも高き鈴な哉
仁和寺の山の霞や眉作り
虎の皮のおほひか霞む鞍馬山
鶯にへをやさし木の糸柳
夜も明て見よ浦嶋が箱柳
さえかへり蕨や土にぬきいれ手
摘歸れ入相の鐘をつく〳〵し
春風は庭前の木やきりか八
牡丹花にねむる小蝶も夢庵哉
春の部の末にはいかに欵冬花

見事さは言語道だんのつゝじ哉

いつちたゞ羽の舞のみの小蝶哉

菖蒲刀みじかきを軒にさすが哉

大臣もみるやふさゝき藤の花

いろはとや夏ちりぬるをわか楓

あらがねの土より出や鉄線花

夕だちやふりてきたるにあはだ口

よしなかで大將をせよ木曾踊

出てから矢庭に入な月の弓

水と空の月はぎんかり二つ哉

たてよこにはたおりもなくいとゞ哉

夜寒には砧うつ手もおひえ哉

時雨てや紅葉せしめのうるしの木

よこにかよひなけあるさたなはま千鳥

餘の國もふればしもつけとなすの哉

かばならで氷やとづる櫻川

　たつてはいなじ鳥はなくとも

鶯もなつけばかごの口あけて

　哥の心をはやくのみこむ

鶯の黑燒入る粉ぐすりに

　かしましく鳴事はちがいき

蟬の聲聞はいすかの端居にて

折〳〵の御出をあふぐ扇哉

先まいりてや禮を夕顔

　山をも見ずにはしりふためく

祇園繪の渡らぬ先に喧嘩して

　百になつても月みおもしろ

瓢箪の垣ほに鑓を立ならべ

　秋にうさぎのはしるおく山

ゆひぬるを先一筆はかき紅葉

　砧をばたゞころ〳〵と打あかし

十市の里で笑ふ月の夜

　狐色にも皆そめ小袖

蘭菊の花〳〵しくも出たちて

　川ばたで相撲のせきをとりげにて

夕べの波に鴨のいれくび

　うはさをいひてかのこゆひけり

比叡山富士もまだらにふる雪に

　をれが心をしる人ぞなき

伯牙絃をたつても居ても物思ひ

　千里をもはしるは虎の足ならし

紀のぢの濱をかよふ十郎

　風をも入ず不足いふ中

手枕に先紙帳をやつり心

　さられて出る番匠の家

妹と脊の中の緣もやつきがんな

もてる扇で庭鳥をうつ
戀すると班女も名にや立田山
冬野ゝ千鳥なくもえしらず
つんぼさへいもがり行はふくる夜に
さく欺冬にほうへんをする
人なみに哥合にやゐての里
しきしたゝみのかたびくな躰
山莊も半造作な小倉山
涙ながらにみる讃岐がた
あはれにも書は屏風かうらかなし
末まで文を奇麗にぞかく
いかばかり許由が耳の穴かしこ
たかきひきゞも松風の聲
上野より行平こゝに須磨の浦
たゞ鶴龜は山にこそあれ
丁令も毛寳か繪もかくれ家に
八文字にやふめる足もと
錢二つたゝらの中へ先入て
鹿相に花をいくる相撲衆
こよろぎのいそがしふりの數奇をして
あちらにもまつこちらにもまつ
唐崎をとほればみのゝ御山にて
あやつりの最中やたゞ過ぬらん
芝居の内は日もくれはとり
姥さへ聞も傳ふ兼平
せんじ茶のあはづがはらに閑居して
へだてぬ中に水をさしけり
取はなつ廣間の茶釜たぎるらし
よるはさい〳〵打やあさぎぬ
双六に木曽のかけはしかけをして
霰にはおもきかろきはよもあらじ
かた一つにているかずの釜
しろりくろりとみゆる川づら
亂碁や船あそびして打ぬらん
あくればやがてくるゝとはり
我門へかねをし親の持て來て
ほうづきやくちびるでしも吹ぬらん
蠟燭の火をしめすちやうちん
やさしながらも又無道なり
山だちやこしにうつぼをさげぬらん
永居はおそれありとこそきけ
折すてよ貴人の前の高楊枝
何事をいへどえしらぬから言葉
山桝くふてむするあはれさ
次第〳〵につまる世の中
たばこをばのめどさらへぬきせる竹

老ぬれば中將姫のうき住居
　さらぬ別は蓮のいとおし
ふせやあるとて待し此僧
佛事をばたゞはゝ木ゝの爲にして

伊勢村忠三郎　良次

つみたゝき入るは樒のわかな哉
野あそびや實此世から佛の座
手折てや行盜人のかは御
かね付の楊枝はこれぞふし御
風にちる花はこけらか家櫻
春雨に花や作事の家ざくら
葉のなりも色も青地のはちす哉
尾と聲はくはるとちがふた鶉哉
海にふるや數もまんこか玉あられ

鶏冠井清右衛門　良次

わらび手はあはゝをするか山の口
になふ棒やてんびんのさほ小金瓜
なりひらし井筒にうつる月のかほ
水もばけ氷となるや狐川
山口のあくちか白きはたれ雪
　縄張の地形に月の影移り
姝の夕部に蜘舞をせり
　聲ばかり聞眞砂ぢの邊
跡はなきか鵺のかよへる宮所
　しりよりもたゞ虫ぞ出ける
手枕のひぢに付たるかるた札
　鬼のかたちは誰もこはがる
なまいでなあざみの青葉やはらかで
　かみなりのなるに天氣の上る空
いかのぼりこそ風にふかるれ
　奇麗にも海老をや臺にすへぬらん
伊勢のけいきを讀し短冊
　さらをたゞわりぬる顔はせうしにて
ころぶわらべのひざは血だらけ
　此程の普請の有し坪の内
茶のへりぬるとせんさくぞする
　今朝こそ寺に棟上はある
たまはりしお齋や虫にあたるらん

鶏冠井　良次母

月に雨そひふりわろしいもせ山
　渡しぬるかねをや筆の付おとし
ふくまてふしをこぼすはんざう
　ふくみかねするとはしほらし
おもしろく口しやみせんやならしけん

松山庄兵衛　俊可

八千代をや庭でへんくはか玉椿

巡り〳〵みるは山姥櫻かな
雪ふれば杉原しくや三わの山
　こぬ人をまつらの里の夕食に
燒やいわしの身もこがれつゝ
　新川平左衛門　方淑
三か月やひたひにやどるほし甲
　宮木善左衛門　孝庸
年號をからぐるとてやかざりなわ
見事さにあこぎにみるや伊勢椿
熟したるあぢはまんぢうのあんず哉
藤のふさは松のこだちのさげを哉
芍藥や根よりも花は氣の藥
暑さにも間日のあれかし土用中
むすびよるに汗はながれぬ清水哉
一葉の舟の帆柱や川柳
一日の榮くはつと開く槿花哉
月の顔のこせる雲やほらかぶり
水にちかき樓臺や月の舟屋形
　時〳〵見まふ景清の友
鶯を籠にいれつゝ外にをき
　見ればぢごくの繪こそありけれ
鬼の面を屛風のそばにかけ置て
ざしきを能の樂やにざする

　一荷に持やこの田子のうら
駿河路をとをる辨當はさみ箱
　春のものとてあそぶ人ゝ
おきもせずねもせで夜半にする囃
　こうたうものと誰もいふらん
官途をばたび〳〵しどの座頭にて
　見物の場はひつしとつまりけり
貴き智者のとけるもんぼう
　しやうりやうふれうと笛を吹なり
淸經はとぶらはれつゝ出られて
　身にしめてするま男のむすこにて
いかばかりかはかほる大將
　川上助太夫　友正
鳴神のひゞきは雲のはやし哉
　安井了忠
ちりうせば花の跡とへ梅法師
手にもつや見る目かぐはな梅の枝
引とめんゐいや彌生のけふの暮
一かしらかぶれ甲のまくわがた

鷹築波集　巻第二

尹平

花いくさ梅甲わる木だちかな
きそ躍かけ橋は波のつゞみ哉
むら時雨分て片假名のいろは哉
　北野の茶やにて
南無自在天よりふるやあられ釜
綿に似てつめたき雪はぬきて哉
ゆるり火は春のくるまのわ炭かな
　身をつくばかりあつき東ぢ
夏の日にすりはり山をこえかゝり
　はいよりつゝもうでをしめけり
つたかづらへいの上まで茂りあひ
　雨にすこしもぬれぬかり人
やかた尾の鷹をこうしやの身にそへて
　梅もたて置かまもかけをく
難波がた芦屋にはいるやりつかひ
　うしと見し只紙こ戀しも
ながらへばまたすりきらん我手前
　鉄炮もうつ波もうつなり
濱いくさひろいてきばや甲貝

　とにもかくにもうち死ぞする
ならざかや此手もあしき下手の碁に
　心は君による〱床し
梓弓引いとしなもよきすがた
　紅葉のにしき買ん市たち
此度はぬかも取あへず馬飼て
　いかなるか是庭前に鞠をけて
ちりをはくじゆや松の下かげ
　鹿の角のとがり言葉のまじはりに
連哥をすれば蜂のさしあひ
　おもひ合てひたなきになく
おさなじみ手ふれし貝を取出て

堀田惣兵衛　一徳

枝折て坊主になすなちご櫻
　在所近き川瀬行かふ春の袖
年玉もなき百性(姓)のれい
　家につたはるものはよしみつ
彌陀の緣起きけば本田が事ばかり
　卅二さうを哥によみけり
一所のこる順禮觀音に
　清水やうしろさまにも首を次
四條川原でまはす人形
　人にすぐれしすり切ぞうき

かみゆひは下手なりけりな名の立て
　鳥井の前に居るかねたゝき
てんびんのあくまもあらぬ両替や

伊勢村九兵衛　之次

鶯の来鳴や月日ほしか梅
竪横へ枝やり梅や十文字
佛の座つむや九品の蓮臺の
よめがはぎおふるあらたやけはひ田
足あとはおき文なれや歸る鴈
春日野にたてる霞やなら油煙
時過て咲や後段のもちつゝじ
蜀江の錦をきるやもみぢ餅
紅葉せぬ間は青漆やぬるでの木
藤ばかまけふきてみるや五つ時

河邊伴　入

芹〳〵といふ根しらがのもとる哉
山口はかねつけくりやむしくひば
水くゞるからくれなゐか紅葉鮒

鷄冠井善四郎　良　忠

めでたいの言葉やふゑんけふの春
みる人もゑいたうめくや望月夜

小原源右衛門　守　次

咲花や谷ふところのかけふくろ

鑓水は苗代おとす先手かな
はらふだは露の玉ごやしの薄

竹本傳右衛門　友　房

やうじ木に切てよろこぶ柳哉
こゑせぬやをのが繪にた時鳥
我と身をやくたいもなき螢哉
見事さは筆にもつきじ文月夜
川づらに紅葉ちらすや腹たつた
　なき人の日はくる〳〵とめぐり来て
車とけいを殘しをくやど
　はちとさらをやみなくだくらん
つぶてをばあたまとひざへ打懸て
　すぐなるはさほを渡した道ならし
とんで行衛のみえぬかりがね

津田久　甫

目の上を雨のうつにやこぶ柳

奥村彌右衛門　直　保

しゆろの毛にとまる螢や帚星

西川源兵衛　重　元

落くるはいくさみだれや雨の足
しやがの葉がにた物からすあふき哉

作右衛門　利　貞

年の矢のけふよりも立そめば哉

あら玉はうしのかしらの今年哉
かりまたや見すてゝいぬる花うつぼ
きりつぼのおちやは末摘花香哉
のむお茶はよくたち花のむかし哉
ありと星とおもふべきかはの螢哉
したでみれば普天の月もそつと哉
入し月はまんぢうに似てあん夜哉
やよ鴈やはうちやうてよきはやし物
夕霧に雲井の鴈ぞ北のかた
老て雪の髮は正直のかうべ哉
　くもあまたありらくも又あり
天筆を連哥の内へ書入て
髮ながく色のしろきは都人
柳の水をあぶるあさゆふ
　なまくさけなる西の大寺
青柳の糸よりはかりほしたらへ
　老ては身さへはさへよはれる
橘のむかしをこふるうばおうば
　臺所には鍋のかず〳〵
筑摩にや祭客人つどふらし
　すつきりとみがき立たる顏にして
むくの葉ごしに月は出けり
　哥の道には入かたひかは

月影もまたのこつたる淺香山
　山もみもせぬこの霧の海
鹿をおふれうしにそゆる大硯
　誠より僞のみの世間にて
時雨の以後は雪の芭蕉葉
　葛城山ににた作り庭
生垣の正木も今は散そめて
　寒さいとはでよむや大學
口〳〵にあらたにひゞやきれぬらん
　汲てしれ物いひかぬる我が戀
どもりの水にうつる箸鷹
　荏生てあれたる宿の節分に
かりにも鬼をうつ大豆男
　伏見の人にきるゝあかゞり
冬もはやくれ竹でするそくいべら
　夢にも人を見たくこそあれ
駿河なるうつの山程戀しくて
　おぼろ月夜にふたりねにけり
しく物もなきかや戀のちは莚
　とまりぬるねやで我名はしれにけり
たゞ焼物のみつけたる文
　たゞ傾城にあふ坂のやま
局まではいかゝりけるさねかづら

十ぜんの位も日なばあらためて
燕口なる桃のかや〳〵
お茶をたゝ自由自在に立ゐほし
鑵子のくはんゐあかる公家衆
青葉分つゝ山へ入けり
笛竹の世のとんちやくを打捨て
ねもはもなふてよききぶりなり
立そふてみればすぐなる杉丸太
こだちをみれば二王三郎
樓門の木陰の宮はゐびすにて
いはねの松の枝やより棒
人をたゞやましななならばとをすまひ
ゆづり葉や春のはじめに持ぬらん
御井のみづからよむは庭訓
君の御幸に群集する袖
跡よりもゐいや〳〵とをしほ山
星のひかりて行は奥州
甲着てしのぶの緒をやしめぬらん
我世の中にあらぬ殺生
鳥を手でしめぢかはらのさしもぐさ
くちなし染の小袖又めす
山吹の風引そふる折にして
なにはしらねどきつきあらそひ
かたつぶり我つの國をとるらなよ
あふてとひしも皆わすれ草
住よしの岸より見ゆるうらやさん
ふかひ根をよみはつくさじ
眞葛はふ濱の眞砂にゐ戸ほりて
たそといへども門をたゝける
賈嶋こそ古則のかたも心がけ

渡邊喜太良　吉勝

佐保姫はちゝたる春の日め子哉
文月の入屋鼠の穴賢
はた〳〵とおれ霜のたて露のぬき
白雪は源氏の旗か八幡やま
立別れ君しらすなる躰なれや
國出ていなばどちへ行平
みかどのばんをするや弓取
蕎麥畑に鳥おどろかし立置て
ひだるきゆへにやせ渡る袖
ほいたうの僧はよ川へ行戻り

上田與太夫　吉勝

さゞん花は九重ならでひとへ哉
あたゝかになれよろこぶ須まの浦
ふる雪ひらのとくる心中
かはらけをめぐらす旅のうちをくり

まつる間もなき尊靈の棚
　晦日はらひつとめすませり
三ケ月をまたん以前に物いみて
　産のひぼこそとけかねにけれ
法花經は二の卷までや讀つらん
　すきと師走をのばすそめ物
眞盛のひげは俄にわかやぎて
　桶かはどうを着る具足下
にげかゝり井どへ落武者哀さよ
　かうがいなをしすげる小刀
あら行のうで香たきやありくらん
　舞し扇のふりのわるさよ
打つかふ矢嶋の磯の浪高み
　人の名はいかいに
　頓而御ちんの有ときく松
古具足あかく主膳のぬり直し
　忍ぶ伊織の内へよせやらぬ
盗人のはやるに門彌きつからん
　見たもなきうそ吹かほはさん三郎
月のよ風呂にあかを角すけ
　　　　　渡邊道職
寒き日もみすきに立や三輪の市
たつた一聲望みこそすれ

見ぬ人の鵆の花入みたがりて
　ほの〴〵明に筆をこそもて
山のつらかすみの眉や作るらん
　夜更てもきく心ちよきすりこ鉢
はしりの上をゆく郭公
　今をはじめの雪はめいわく
旅衣きた國とをる寒き日に
　おかたのへやのむさきいさかひ
ちりとだにおもはで取を古疊
　あかはだかにもみゆるあかつき
有明の空とをいひ人はぎて
　浪士は波まにうひつかくれつ
舟よりも謡の本やおとすらん
　侘ぬるはたゞ帋に紙きぬ
清水をくみつゝ菓子の茶湯して
　われさき〳〵のあさがほはみす
あみ笠の高き聲きくゆやの能
　みたれ錢たまる隣はにぎはひて
いるいらぬ人二芝るあり
　　　　　石井清兵衛　正雪
しらむよやねうし寅卯の花盛
秋草ともじにもかくや萩が花
　　　　　多左衛門　一正

佐保姫を年子に生むか天原
一花ひらく梅やえ香爐寺の庭
花に風とうとしづまれ蝶の舞
寫し繪をにせてちらざる花も哉
大淀のまつといわれな伊勢櫻

ある武家にて發句所望に鐵炮のざうかんのゑをみて

鉄砲のつゝじや花のたねが嶋
春も夏に季かゆる雲の衣哉
こひよこひ我中空の郭公
なでしこにあつ火やはらひとぶ螢

若衆と野遊にさそはれ廻文發句に

中もしむ草花は咲虫もかな
笠めすはまいらんためか餅月夜
すね萩は紫たびかはなの紐
秋は色かへて黄糸の柳かな
會我菊の色五郎ぜゝ花盛
木像のならぶか木ゝの雪佛
　扇ながしは屛風のみかは
五月雨や平等院の芝の上
　身にあまるなさけの程を忌めや
いとしき君とねたる大よき

良庵

すゞ玉はみな水晶やけさの露
木のはにもこいあるゆへや紅葉鮒

田原市右衛門　忠政

みづからとむすぶや露のこふ柳
玉松のはさきの霜やみがきすな
あぢよきはくふかひあるや東寺瓜

岡本仁意　胤及

青柳のこだちにかけよつばめの巣
空にしらぬ木のつら雪や櫻花
葉はこけら花のさくじか家櫻
何疋も野にをりきけりねり雲雀
螢火は風薫る夜の團炭哉
氣の毒やひさう石竹むり所望
祇園會や鉾も林のかねの聲
篩米かひらくはちすの花の露
はがくれの露やうば玉からす瓜
色や火焔妻戸の前の花石榴
舟玉か一葉の上の秋のつゆ
柏木もちゝと秋風の落葉哉
雲のはてくろふなりけり望月夜
秋咲や四季三番の翁草
誰にきせん我が庵に打麻衣
かべに鳴音やすさはらをきり〴〵す

白雲は月弓でうつ木綿哉

小門清兵衛　高清

むつき過春はいざるや夏木立
　家の大事を雨面にかく
せと門に火の用心の札立て
　見ゆるやうにて見えぬ成けり
ひたものに下手の碁打の手を案じ

宗珠

こ梅にははやめ薬か春のあめ

蔵田總兵衛　友勝

雨にそふ風は纐纈か見ざくら
懐紙にも名残の花やをそ櫻
すそ野なる螢はふじのやひと哉
もえ出る野や早蕨の手あやまち
　玉づさにふりやなすびを結び添
からのもの程しみしわが中
　とがあれば兄弟ながらさすらへて
あはれ行平なにとなりひら
　やぶれたるかみこの上にけさをかけ
清水さかでずんときられた
おしやをし三年さげしこきんちやく
　火は消さうであぶなかりけり
一橋わたればきつねちゐ〳〵と
　心からこそまはれとをみち
ぬす人や車に乗て渡るらん
　子をあはれみて名をばあげけり
梶原が二度のかけこそ手がらなれ
　へそをかくひてにぐる草かり
をだまきをかまにやかけてぬすむらん
　とにかくに思ひえきらぬ戀の路
後家になりてもおしむくろかみ

西崎正右衛門　實安

角くむやとよあし原に辰の年

津田如春

花にますとおもんぱかるぞ米柳
はな盛江口の君や普賢像
屁原がはなたれまはる藤かつら
くもりなばいのれほろおんほむの月

伊勢村又右衛門　重次

五音よく鳴やはひふへ郭公
日月は手にもにぎるやしゆら扇
折をえて夏も城殿の扇哉
文月を詠めぬ人やあきめくら
紅葉がりするはこれもち月夜哉
かこ耳にかはねといるやむしのこゑ
きてみればきもかるさんぞ藤袴

時雨にやまけて色よくぬるてのき
ともかくも風に隨ふ柳かな
すねた木ぶりの花は梅がえ
　くはつくはとほめくあらかねの土
火花をもちらして打や刀かぢ
　はれかましきは齋の御座敷
なぞ／＼を案じ入たる月の夜に
　夜ぬけにぬけし人はおそろし
月にしもみつけにけりなろくろ首
　見捨らるとはしら浪に袖ぬれて
思へば腹のたつた山みち
　すつきりと掃ちぎりたる御庭にて
ふるきざうりをすつる猿樂
　にた／＼山のかずの多さよ
みかの原むらり／＼と雲わきて
　五つに成て世をぞ取ぬる
たゞしくも行ふ仁義禮智信
　おだ／＼道を通る草かり
かの岡の塒をや主と頼むらん

坂本吉右衞門　重次

年なみをうさぎもけふやはしりそめ
若はへはまた十八か鬼あざみ
我と髮にとむる沉箱柳哉
雪を荷に持てやでくるこぶ柳
あわ雪の消て水には鳴門哉
花の數や千顆万顆の玉椿
見ての後おるはあこぎぞ伊勢櫻
花みればおんざの初や遅櫻
夏の月のかみをまなぶは霜夜哉
鶯の子ならきやうよめ時の鳥
名にしおふ菊酒はかゞめいよかな

廻文

　つり舟に夏菊の咲たるをみて
さくなぎをしらなみならし翁草
名月のをどめかけふの十六夜
ちりぬるはうゐのおくやまのいろは哉
冬道やあしからひゆるふじの雪
　唐をきくに花香の心ざし
春の茶の湯の客まつらがた

廻文

　米つきつちにてもちつくをみて
よきつちもゐいとうといへもち月夜
　百になつてもおどりこそすれ
ひようたんのかきほにとまる村雀
　いく夜ね覺を須磨のばんしう
淡路潟かよふ盜人ちどりあし

おもひにくぎのねをかへしぬる
君とわが中はかなつちろむをして
恨はつきぬ君の言の葉
どこもとへおもひの種を眞葛原
きりつほの内に夕顔さかりにて
五條あたりの茶の湯かず〱
海と山ともへだてなひかは
近江路の土でやついたふじの嵩
夏の夜も道にはなせば凉しくて
かもなくふかもなきは聖人
君のする小便田子を腰につけ
江口のさとへかよふ百性
一時ばかりかいをふきけり
山伏は馬とうしとに乘かへて
見渡せば扇拍子でうたふらん
鶏おほくかふ御影堂

北尾五郎右衛門　重次

惡事千里を行虎の時
さすらふと夢に藥師のつけを得て
碁將棋や双六を打神樂堂
天の岩戸を出る御日待

藤谷長古　貞好

茶の子にや増盆山の餠つゝじ
こりかくか水にも月の赤はだか
たから物にも今ぞ逢坂
福をたゞ大津打手のこづちにて

丸岡信安

亥のとしの元日に

冬のいのこぞだちてくるやけふの春
尤ぞうみの中より立のとし
四方に春きたぞみなみよ西東
さけ〱とねがふ上戸の花見哉
雨に出よ竹の子笠で數の内
笛竹をさかり葉となす雪吹哉
物あらそひの哥はつゞかず
ならべ行中にはや舟はしりぬけ
見るや暦の中の吉日
奉公にいづの三嶋の小袖きて

關久兵衛　一仍

行秋のきぶるしなれや藤ばかま

九郎兵衛　永次

年明て今朝みる霜や置ふるし

生駒にて

雲かすみ引かへなれや生駒山

三右衛門　重之

時や今みぞれあられの酒冬至

津田紹二

題 文

花のきかむすびわびすむかきのなは

葉はなひか風をかめ〳〵犬櫻

杖つきの長閑に匂へ姥櫻

題 文

たが見るな月をやおきつなるみがた

鈴重左衛門 諸西

撫子のかみのかたきや石の竹

正立院沙彌 立眞

螢とぶ池のぬなはゝ火縄哉

富士ほどのもち雪かはばたかね哉

北嶋清右衛門 屋俊

氣藥にきくやくはつこうしやうきさん

野々口庄兵衛 正壽

五月雨の空は毎日子の日哉

石根に風の番する月もがな

紅葉する三笠の山や朱唐笠

小笠原次郎右衛門 時之

うへてみん其足の餅にさねも哉

なふ時や人手をにぎる蕨縄

秋も咲彼岸ざくらの花も哉

枝や慈悲内外にたるゝいせ櫻

はねもがな供して聞む郭公

花よりもだんごで見たや廿日草

猫つなげ牡丹に移る日の鼠

はかた酒の肴にもせよねりひばり

山〳〵は文月いるゝふばこ哉

釋迦の嶽のしゝは十六羅漢哉

曇りぬる月はさん〳〵九月哉

ひばしあれとすみとりは鳴聲もなし

富士や雪さむさ迄似てひえの山

よききもあしきも二王なりけり

主ひくわんさせる刀や周防物

さとりて見ればからき世の中

すひ筒に酒入てをくぜん坊主

手はしな〳〵におほくみえけり

けぢ〳〵にむかでやつれてありくらん

ながされ人のまた物おもひ

しちにをく男をきりにうけもせで

裏きる姿哀なりけり

四のはかま一のやゝれてなかるらん

寒さこらゆる心かしこし

おこりをばふるへど吞ぬ切藥

僞りなれどまことにぞなる

面白作は源氏ものがたり

軒口ちかくの平家武者

ふる雨に雫とく〳〵むねもりて
　秋の田のかりそめふしにおちに出て
我衣手はしとにぬれけり
　後の親かや扨もつれなし
尺迦は過待にみろくは出もせで

森本又右衛門　三徳

あかき夜や猿の尾ほども夏の月
椿原に油をしする目白かな
竹馬に乘や小篠の轡むし
すみきりてまん丸なれや長月夜
　みそかにもおぼしめすたよ此紅葉
※はほさつと誰も夕つゆ
　大しやうの出させ給ふ旅の道
身を山ぶしにまねぶ判官

潮屋彦左衛門　貞順

しらがゝやわたほうしかやうば櫻

武田右馬亮　信相

あづまよりけふくる春や鹿嶋立
門口の上髭なれや大かざり
月の前にさし出る雲やあまのじやこ
梅が枝はをのが暦の算木哉
風の手になでつけ髪の柳哉
池水や柳のかみのびんたらい

御福かや鞍馬の山のかぎわらび
世界をや酒壺となす朝かすみ
軍場の時の聲かやなく蛙
大風のたゝるや古き家さくら
家櫻風を免許の札もがな
こらへ袋きれてやひらくをそ櫻
天國の小長刀かや三ケの月
横雲や弓張月のにぎり皮
飛鴈や影すぐな文字ゆがみ文字
をのづから皮肉骨ある鴈字かな
老木さぞ若木さへ愚にかへり花
佛舍利か樒の上の玉あられ

岡又右衛門　幸治

犬の子に目なかけそ申の年始
まよひ子かをくれてひとり歸る鴈
夏きてや一夜檢校衣がへ
竹垣のよに出たるやにくまれ子
文月やひらいてぞみるへいぢもん
　此春の櫻もえみずはてにけり
かごに入たは梅のうぐひす
　徒にあちらこちらの手引して
きりちがへたるのこぎりの音

黑田源左衛門　正平

来る年の午つなぎかや門の松
椿ばちや鶯袖のもん所
若草はたき物となる焼野哉
とび石はつばめになるや雨の中
花をみてふくむやゑみの眉黛
八重に咲花や蜘手の糸櫻
木おりなる人になみせそをそ櫻
藤をみて尾る山路やつゞらおり
藤こぶのすひかうやくか松のやに
つぼみたる花は團子か卅日草
白露は竹の子共のよだれ哉
くたびれてなへこしとなる田うへ哉
我とちるは木へんに風の楓哉
夕立はちりいへなれややぶれやね
八ばちをうちて踊れや十六夜
待月の發句の文字や十七夜
世をいとふ奏か月のかげ法師
風の心ちよくなる人の宿にて
熱氣をやはらひて風の神無月
辻風のさむさもしらぬ頭巾哉
もゝしきは公卿の上の肴かな
つらさへ角にみえける蚫哉
氷をばくさびにさすか霜柱

うつくしき花は小家の軒端にて
柳のいとの猿やたれ衣
八つかさねたるたはら長き日
堤つく春やひるにも過ぬらん
おとる手本の扨もはやさよ
秋風をひきたる脉や取ぬらん
櫻川はやす手品のあしからん
あたゝかにせよ鯛の濱やき
子をだきてあぶなさうなる竹の橋
此程はひたとばくちに打まけて
ちりげをすゆるてやふるひけん
ぬりしうるしのひざる汁椀
此程ひたとはやるかみそり
いそぎぬる表具やのりのこはからん
御夢想やかたじけなしと思ふらん
御前へめして酒をもり久
かりねの袖のうらみつりかね
をろかなる魂や蛻身となりぬらん
付供も大津へ隣のおなりにて
道のほとりの人をゝひわけ
我石に我と中手や置ぬらん
おこれば扨もいたきりんびやう
かなたこなたにはやる山たち

なんぼうか有すみかまの夕煙
　身まかる時の出立帷子
よめごぜの顏をやふかくかくすらん
　夜にけにしたる此はしり者
すばりぬる若衆の痔やおこるらん
　かはらやの內に門出の聲高み
さられてうらむゐたの女房
　行平の前に盃すへ置て
豐後刀をむこひきでもの
　二道かくる人のさいかく
ちはなからさせるむさしは上手にて
　音にのみ聞し名所にかり枕
さとりをひらく世は五十ねん

室彥八郎　久友

葉落てや霜のしらがのうば柳
雪やけか煙たなびく富士の山
　花をやがてみむと源氏の催しに
長閑になれば心ちよしとも
　柴の中にもまじる靑柳
川岸に日もなが〳〵と垣をして
　是第一の狼籍の人
桐つぼの內の落花や手折らん
　たび〳〵にまいり申は親のまへ
御墓所にたえぬ念佛
　唐の達磨は土に身をうづみ
刀わき指朽るまさむね
　おどしつゝ心の程やためすらん
具足にむかひうてる鉄炮
　口わるくいふ事こそはうたてけれ
袋からたゞ米はこぼるゝ
　子は淺ましやしらぬほうおん
三界をあはれみたまふ釋迦牟尼佛
　淚にぬらす文とそりかみ
ふしやう〳〵坊主に成し門徒衆

國府寺次良助　政次

春やけに日足ながとのうしの年
草も木も春ははいでのことし哉
たばこにやのみてけぶりをふきのたう
遲ざくらあとから一の花み哉

雅直

色よきは朝日をとるや玉椿
氣力なきはしだれ柳の落葉哉
姬松の白き姿や雪をんな

鈴彌兵衛　正好

深草の院とやいはんすべりひう
細ゝかけてとらぬたのもし

軒くちに每年見ゆる雀のす
　かれこれ物をおもふ秋の夜
盆の比姫と若衆をおどらせて
　さばきかみする禮の取次
知人にはじめてなるやすまふのば
　夜打をみればはつちやこはさよ
歳越に鬼のいやがる大豆いりて
　面白や北野社のかすむ暮
初の連歌に出來し鞠の句
　耳かしましきをひ出しの鐘
一季をり限になればきう乞て
　稲葉の色を待は百性
御藥師へ代官殿や參るらん

北島彌兵衛　正員

鴛鴦のふすましやうじはをし繪哉
　野原にはむかし男のやすらひて
うるかもふりの花の見物
　何れの所にぢんをひかへん
わがのつた馬は本來無一物
　つゝいづゝ五つ六つ子の戀をせし
しどさへ今はおへにけらしな
　うらはの人は有馬にぞ入
難波がたみじかきあしのかつけやみ

舟橋平左衛門　可勝

紫野萩やあしかは鷹が峯
　二道かくる事ぞあぶなき
はうか師の行もどりたる繩の上
　上より日をも出すさくら木
さい筒を双六ばんにころばして
　廿二と聞おどろきにけり
六ゆびを手足にもちし生付

高橋庄三郎　一利

立花や三月しんにきりかやつ
年のをと春のかしらやいひあはせ
　はかまのすそはされてすたれり
取あけてみる者もなきわらはうき
　花より外によのものはなし
もろ共にあはれすりきるかたべにや
　はだ身にそふるとぎのほしさよ
鼻かみに入れし鏡やふりぬらん

志水仲宅

くさつたれと身はよしいかな櫻鯛
人間の種でなよ竹の子共哉
化狄より作者はさきか月の舟
時雨ては今も染殿くきさき哉

鷄冠井九郎右衛門　良德

手の蛸も出るや吉書の筆の海
春ながの年の頭や福祿壽
かつらきや人橋かくるはな盛
ね入はなの園や萠黄の蚊やの内
釋迦の御さびたかけふの御身のごひ
藤浪の巴へかまがるつるのさき
坪の内の月や螢の火けしぶた
空に光りいぬる螢やかぐや姫
祇園會や二服一對京つしま
聲のあやあくめもなひぞねり雲雀

發句帳に入候へ共名代なく候故

姫瓜の實をまくつるや後紐
蓮のめしすゆる禮ぎやさばせかい
羽返しはしぎよきことりつかひ哉
かげきよき雲間の月や籠破
刀代は宿かる賃かこやの池
山科の草木や露のあかね染
みそ秋のちりたや風の手すりこき
寒けたつ燵の時雨やふる狸
白雪やたゞ富士炭でさと夕煙
山口の雪はしとぎかした紅葉
　鶯や二階の上に聲すらん
庭の松笠梅のはながさ

　此春殊に馬ぞいきほふ
群集するいなり參りの花の袖
　日影指棒の邊は和日にて
ともすあぶらの匂ふ春の夜
　腰かはりとて春にへだつる
庭鳥の雛子の玉子をわりかねて
　雫間に塔をつむのはてなさ
ちる花の木陰に蟻のあつまりて
　晴天氣よし十日のあめ
立よりしやすらひ花の陰出て
　かはんとや空音も高き郭公
植木のさうばたち花のやど
　御堂も見えずたゞさくら花
春からも木傘かけたと鳥鳴て
　眞言のこだちなれども目はつぶれ
鷹尾の山でする青山桝
　百夜にもたらでしするはふびんにて
油火による夏中のむし
　はらへをもすれ共のかゝ次もどり
めしの上にやはいまはるらん
　醉ては人に十そんぞする
ねぢ相てはね指おらす舞扇
　庭鳥やかねや太鼓もなりぬらん

色〳〵鉾の渡る祇園會
ぐはらめかす車にのする夏の月
時いたりけり祇園會の鉾
七本竹をみるや北嵯峨
ほねを三踊り扇を引さきて
ぬすみくらひの犬のはをもけ
蓼だにも好みし虫に茂りかね
はらみたりとぞいふは小薄
秋の何の連歌をはやく付つらし
井のもとを掘身あぶなくたすかりて
日でりの小田のをしねくふなり
すかして月をみるは物ずき
ともしぬる影長夜の石燈籠
隔がねは川瀬はなれず一つがひ
人のうしろのほねは冷じ
八つ斗月影は只ひかめきて
浪間の蜻の手もや長き夜
ふつちりと實の入大豆や多からん
足のいたみは露の石ふみ
二十の鳥のあたへ千金
蔦とよむ一字を問ふおんをしれ
織きぬ機を釣直すそこで
すゝむしもはき仕舞ぬる古寺に
三わくむ時分もかよふいもせにて
もはやおけやといへる二道
すり薄（笛の）小袖をみては物思ひ
妻のためとてぬへる打敷
なまくさげにもみゆる寺かた
佛前にいかにすへ置あまゝざこ
日々にかさなりよい御調物
まれなるかはらみて今ぞつはり比
爰にかしこに二しむ多しも
孝養は余所のなげきのそばにて
たいらの京のよくも時めく
僧達は宗盛へ只あつまりて
はし立の中や眞實おがむらん
饗膳すへて光る佛前
鳥の名聞て出家立よる
御經をはじめむと打鴨のかね
卅六を二つにぞわる
一双の屏風に哥仙をしならべ
谷ふかくしも落るから獅子
梯てぼたんの目貫取はづし
左や右のかしらをぞかく
色〳〵にそらへを繪師に好むらし
十四になりし人のりこんさ

石一つ殘る双六打かちて
　かたかりきいしのあたりは堀かねて
道をかへつゝ行うごろもち
　くさり入つゝよこねなをらず
ころびさうな松のかたへに添木して
　源氏の沙汰はよくきかまほし
君のとを夢にや見てむ靜ごぜ
　珍敷皷所望の催しに
わうはくはつの身にちよくし立
よきこそは小町か哥のふりならめ
　跡さきれてつゞく鵙がね
おさあひの昆布をや持て遊ぶらん
　おもしろくみゆる神樂の躰なれや
三輪のきりをし立舞へるめり
　俄道心おこすものゝふ
あわれにも思ふむくわんの太夫にて
　いたみて柳つかぬ夏の日
汗かきてうきはうちまたかうやくに
　利根者や死べかりしを生ずらん
打名人のひまも碁座らぬ
　色くろきまゝ子はうしとへだてられ
ねりそこなへる葛餅は何
　出かわりの比にやはやく成ぬらん
さらへすませる非のもとの水
　つげ故に絶し神わざ取立て
あつぱれくしの道具きれいや
　住とてもいやな熊野の浦ならし
牛王に血判このむいひごと
　うらかへりぬる馬乘の武者
手の内をかるたの札やぬけぬらん
　色のうすさや此一分判
古かりし哥書の奥がききえぬらし
　闕をたゞ破るぶりやくは冷じみ
はし〳〵せむる露のみだれ碁
　穴よりもひばかりやたゞ出ぬらん
茶酌の節を鼠くひ折
　思ふやうになき流されの身はしむき
せなかのあかも落ぬ行水
　六十巻を讀は天台
源氏こそじちむ和尚もすきならめ
　廿斗にみとれてぞいる
叡山をたとへにしける富士の嶽
　見るに女のおほくよりけり
姦とよめる文字をふしんして
　名人の琴〳〵敷や引ぬらん
長きしの字の筆勢はよし

久敷もなる奈良楽のねぶとにて
春日の禰宜の笛の上手さ
初もとゆひを千年と言
おれかゝる小松の枝に添木して
都合したりし竹のそく數
虎の詩の韵はひやうにやあらざらん
やはらかにあちらこちらへ打なびき
らつこの皮の毛品もぞよき
飯がいを身にしめとれば戀覺て
兒のわりくふうきかきのさね
へそのあたりをさぐりこそすれ
じやかうを題て當座の哥ならん
色〳〵の神わざ御ざる宮所
内裏方には屏風こしはり
形見とて殘す扇もいとしさよ
宇治で其名をたづねよりまさ
立横に算の次第やしりぬらん
くらき戸ざしもさつと明けり
珍敷文字の丼讀すまし
今渡りてふ錢ぞ請取
鯛こそ物にあらぬ指あひ
俳諧に用の句作あしからじ
そろ〳〵とへりかちになるすきの先
鼠のくいてうきたてゐほし
たかひ空にやなる神の音
棟上の御へいを風の吹わたり
やきかしらをやたゝく餅をり
ふべんなる鍛冶にも釘を賣そめて
戀しきふりでせゝるはり口
ほころびをはぢらひけりな續小袖

内海長右衛門　久重

鶯の聲はめうないすゝめ哉
庭に今朝あつまる蝶や夢合

豐國の花をみて

白雲かいやとよ國の花ざかり
川ごしに火渡しをする螢哉
夏によのみじかさは蚊のまつげ哉
せむだんはあしたにしても二ば哉
ゆふがほも眉をひそむる日でり哉
よきかなや影もぜんざいもち月夜
感涙も肝に名月の光かな
杯にみる月やこがねの丸ぬかし
鷹の羽の薄や小田の鳥おどし
あまきりて降來る雪や白砂糖
をし鴨のめをとや池のいひ名付
田舎人こそいとさもしけれ

折とりてあくまで花を打かたげ
　ばつと一度に手を打けらし
皆人のおどりに扇もたずして
　ひしやくふりてもよらぬ勸進
あつき日に能の芝居に水打て
　若猫のをのが尾をくふ菊の本
秋の胡蝶やとんでいぬらん
　藥俳諧
　小倉の霧に袖やしほ〳〵
露はたゞ尾花が末にみつた俤
　くすりはいかい
　いとかたうやくそくしても木もせひで
うつたるかねのばちやあたらん
　はらたちけれど腹たゝぬなり
うはなりをとらへてみればいもとにて
　くすりはいかい
　茅もまたかんじつめたるやねの上
あけうとすれどあけられぬ窓
　にくけれど又かはゆかりけり
昨日までかたきもけふは味方にて
　口のはたなるひげのむさゝよ
海老ざこをちいさき壺に入置て
和久彌右衛門　成世

朝清めちらすな花のしべはうき
刀二つにならはぬはなし田子の浦
井口
卯の花のよろいにそふや夏木立
加信利次良兵衛　宗次
君が代に春たつたりや慮外者
あるはなしと取はしな玉まつり哉
井上意專　利重
花もさとり開か春の梅ほうし
桑村次郎兵衛　之敦
いもがしらあらはれしとや絹かづき
いて風に窓をとぢたるやぐら哉
手ならひにかきやることひの文とば
小野の君へと此よよとさかな
あしにははかでいそぐたび人
さいそくはかはやがたなにかり枕
辻喜左衛門　吉廣
正直のかうべはげてや神無月
雲林院住人星野市郎兵衛　重次
見し花や今もありはらのうりん院
數〳〵掛て置はいたがね
橋けたは釘かすがいで打つけに
つきだされたる寐屋の釣もの

後夜時に鐘撞の坊主目は醒て
　花をふむにも心ありけり
からうすで香をばたくに哥よみて
　　　蔦七右衛門　宗次
けさがけてひらけるぞ寶もくれんげ
　　　庄加
うたひまふもてうしにつくるあげは哉
火にあたり心ゆるりやくの木すみ
　古筆勘兵衛　一村
花ぬいにさす鑓梅の長え哉
隙きぬと目に物いする一葉哉
　數を十六ならす足ふみ
大道へをとしこそすれ落定錢
　杜鵑松と云名木をみて　同　一村
名にも似ずなかでまつの木時鳥
　二結寺の花だいて
をしめ〱桑さんこじの花盛

鷹築波集　巻第三

　　　馬淵重治
年の緒をいくやかざれの餅ごくい
住の江の浪のつよみや鼓ばやし
　子のさし
明てけふ詩をこゝろねのとしみ哉
尾をはねて鳴は共音や鶯ん
吹あぐる花や春風たうり天
ぬひてしもみればのだちのつぼみ哉
花鳥の春の名殘や鳴ねいり
ねなほりそさかぬにうごろもちつゝじ
夏切の壷のかほりや蓮花王
聲なくてほへとびかかるいなご哉
夕立は雲のはぎれのこぼれかな
染つけて花野や移す桔梗皿
あま雲になるやしるこの望月夜
松茸の匂ひをかぐのひらき哉
山よりもにほ照や猶紅葉鮒
散殘る木末は嫁のはては哉
　空おそろしく夢もむすばず
鶉とまる花の木末にとりほえて

春鶏もうたふさかもり
和田殿やかすみの關におはすらん
　彼岸にいつも草木をぞとる
はなさらのかなけをすきとみがきたて
　すりきるたびに年はよりけり
斧を針に今はなすびの色付て
　玉たばこをやふけるなるらん
うづらめが浦嶋迄もとびうつり
　なまめきたてを月にする袖
女郎花と尾花と夜るは亂合
　露ふくる今夜の夢にむねさはぎ
獵師や忍ぶ鹿のふしとこ
　あだくらべしてにかはとく袖
朝がほのゐのぐに通ふいなびかり
　永き夜に車をつつとやりならべ
御幸の砌かこふくれたけ
　さくり〳〵もさすとまりぶね
海士人の入江の將碁くれはてゝ
　まこじやくしとてけいづ言なり
重盛を忠盛たてし天下
　しほにし事をかくとみえたり
名にたてる河原院も浦さびて
　いかに仕業のかはる海山

疱瘡の色さま〳〵に出けらし
　佛前をおく物ふかくふしおがみ
初瀬参りの袖の殊勝さ

川崎源太　靜壽

かきぞめをするすみやけふ馬の年
萬事よき春や塞翁が馬の年
舞蝶に花をだしぬる草木哉
木のはしのやうにいはるな梅ほうし
花ぞ散すへやこはくの玉椿
春くれどめもはなもなきくち木哉

　床の花を

是ぞまれにみる一がんのかめの花
杉やきと名にこそたてれ櫻鯛
神ぞ〳〵日本一の伊勢ざくら
小ざくらの散うく水にあわゝ哉
春鳴やけがの高名郭公
義之〳〵と身を石すりや瀬ゝの鮎
ひくの山のあらそひするや祇園會
夏さりてくるやいとまの文月夜
只一樹もつや多生のゐんざ柿
高砂でみる三ヶ月のおもて哉
秋と冬としろものかへや月と雪
うつゝなの丸が心やけふの月

やとめ〳〵いるともしばし月の弓
月の影をそぎは鷗やふらう門
遠き月を能見ちのくのちか日哉
まかりづるは此あたりにすむ月よ哉
あしもとのあかひ時たてかもの鳥
ごくにたゝねといとおしの人
悪敷茶を柳のもとでくれぬらん
春の始に門のしるさよ
庭訓の往来の道雪きえて
ながくみじかくなるは春秋
月と花神代のうたさだまらで
きゝまほしきは人のわづらひ
郭公なきつるかたに灸すへて
とんでをごらぬ名をぞ殘せる
はすのみや是ぞ君子の花のたね
もれ出る月に見るはやりのみ
烁風にたな引雲のたえまがち
月は落たり難波江の海
烏鳴霜天にみつのはまをみて
どこもみぢをした秋の山
此邊は鳥羽のあたりと夕時雨
おなじねにうるもめんほそ布
がんも鳩も持やみちのくこつま人
かみは唯あるものか又なきものか
かしらまで見ぬ此やすら殿
櫻さくかたてかもしやかいぬらん
遠山鳥のおうへさまたち
つらきものなれ只こひの道
野ゝ宮の曲舞うたふ昔が聲
壁によりそひ上臈をまつ
しづが身の思ひをいつかきり〳〵す
あしにまとひて君をとゞめし
是非共と口をばちよつとすいかつら
池のはたで水くさき事ゃいひぬらん
氣にあわぬとて妻をさるさは
あかぬ別におこす道心
まつよひの更行かねを打たゝき
ゑくぼしほらしまれにあふ君
うどんげのはなそけ顔にうちほれて
さむき日は猶たしなまぬ身や
わか衆を唯もすばりと夕時雨
ひげくひそらしけふのよろこび
子をうみし人になまづの汁すへて
名所にせめて居るひんな人
らくやうの一けんせばき家づくり
都の釘をいざやかはまし

くりはらやあねがこうじに作事して
　横ばかり唯見ゆる此しま
いろ〳〵のかにもやたんといそのはた
　森のあたりに大風ぞふく
波あらくくじらつく舟打かへり
　つうじかねたる口は唐人
詩作りの大便つまるしぶり腹
　鞠をじまんにける瀧のそば
我よをばけふかあすか井殿やらん
　知なきものをぞ人はわらへる
いくさ場で手がらもせねばてもおはで
　あつかひ頼むしよしや寺の坊
あたまをばはりまの者と喧嘩して
　久敷成ぬわがきみの國
ふてんの下卒度のはまのはまびさし
　ひかりものなりあらおそろしや
たれしかるきんかあたまをふりまわし
　烏むれ居る家のけつこう
どこまでもつゝむやあやの小路殿
　こしにひつさげうちたをしぬる
いんゐうをかけし屏風に行あたり
　たうとやといひて御堂に參りつゝ
ふだらくせんをまくやをの〳〵
　ともにあわれむなき人のあと
ともし火をそむけてむかふ南無阿みだ
　おなかしこやな今時の人
一かう衆よむやおふみのおくばかり　春庵

櫻よりいかでか跡にさがりふち

なくといふ文字は無の字か時鳥　針醫好琢

ぜん棚のかざりの繩や七五三

大ふくにむかふひしやくの爲方かな

ねいらぬはめはり柳のさし木哉

くち草の霜にたゞれの葉ぐき哉

夏ならでかたびら雪の地白哉
　ふぐりいたゞきめでたがるなり
正月の禮者のくゞるかどの松
　谷深くひとくらやたゞ燒ぬらん
土の戸ひよつと出るさわらび
　正直になきはこつまの市ならん
上戸のよめが下戸のふりする
　氣遣がほにきたうをぞする
人くらふ馬の前なる猿つかひ

北村久左衛門　正長

天と非はちがへど影やおなじ月

雪消えてもなみやあかの水　紀日明
だいてねてはらつゞみ打たんは哉
　橋本宗晋
揚州や住の江でみる松の雪
月かくすいんぐはやつもる山の雪
　濤政
和哥の浦のかすみて書や短冊め
女房の知恵やすゝつむはなのさき
夜廻りの月や世界の月行事
大きなる山もかくすや霧の印
落葉までかゝる時雨や二重染
　かゞみ居てこそ春にあひけれ
きびしくもおりかけがきの梅の花
　日ゞにそろ〳〵あたゝかになる
あかがりはいづくをさして歸るらん
　ちろり〳〵とあゆむ道の邊
ひだるさのませば目ほしの花散て
　簀をとりてはびいくりとする
念を入ゆふたる筆は天下一
　長〳〵と夜噺きゝたすかし侘
山鳥のおち出来りの秋
　露のまも油断ばしすな舟の上

一大事ぞとねがふ神楽
　つえをちからにたのむ年寄
雪隠のくれこねぐらや竹のさき
　恩田一雪
蛍火を[illegible]や湖[illegible]かまのまへ
天の戸の[illegible]るより降みぞれ哉
　河瀬甚兵衛良[illegible]
とりはゝや立て今朝こそ戌の年
さほのさきの鈴なふるまふ吉書哉
竹自在天へもとゞけ今年生
月に雲千里はれゆけとらの時
山ぶしのぬさの紅葉や羽ぐろ染
　さのみまてしかりたまふなてあひま
御めんけへはなの一ゑだ
　霞のうちにまふ水車
長刀をふる枝の花に鳥啼て
　むし〳〵あいの間の戸のうち
花ちよくつかんかうじのむろにして
　筆あかのぬけぬはこえてみぐるしみ
あらはで土のつく〳〵しかも
　あかゑほしみばかふるともなし
いかさまに所望申さうときん柿
　月の夜道にはふかたつぶり

露の命きえずすて子はけなげにて
　みの元日といはふ若年
一夜明てひたひのしはすのぶる世に
　露にぬれてたてるや君が軒の下
うや錦木の色もくちなん
　あき人はあらやうかましこくそ
かた地にぬりてをけるそろばん
　がひきのこゝろは誰も聞しる
一ふしは是非〳〵所望申べし
　あたふくすりの手だてめづらし
鉄炮のひでんをゆるす卷物に
　竹のかこひはくさりかたぶく
つりがまの自在天じやうはそさうにて
　我がとがなればゆひぶんもなし
ぬす人をもらひうけつゝかみそりて
　いざやこゝろをしつかひ申さん
よみははや覺るまゝの經だらに

吉右衛門　正常

姑の笑ひ草かやよめがはけ
柿の本の螢も哥のひじり哉

宗玄　義的

われも〳〵まけじと咲や花軍

今井善右衛門　正直

弓はりの月や入日の鼠とり
　花をさすゆへに天下に名を上て
ゑびらの梅はちらぬ末代

駒井　貞盛

鶯の哥は天下の試筆哉
春風にきれぬや藤のしなへうち

藤谷三右衛門　貞頼

實盛がしらひげ洗ふ芋がしら
年〳〵に大豆算用や節分の夜
　車の上に花ぞかざれる
祇園會の菊すへほこを引出て
　立も又またたつものもあかい面
せいくらべする猿のをかしさ
　日本のかねのきるゝ事なし
唐人の買て下るや奈良刀
　身のつまりぬる事ぞかなしき
重代の刀はさやにさび付て
　ひだりにもたゞ生れ付けり

石川三郎兵衛　正次

源の家のゑぼしやおらすらん
よべはねて今朝うしおきの今年哉
　神無月にはあたごあれけり
ゐのしゝは爰やかしこへきた時雨

塚口九郎兵衛　重和

若水をくむ季しや酉のはねつるべ
まへ胡蝶をのれが夢の橋がゝり
浪風にしなへらつこの樫
花ざかりそれたかとべばよしの山
呑せぬやはら立花の小嶋酒
いかづちの音は身のけもよだち哉
出ぬ時はこれぞ弓おれ矢は月夜
出すは耳ひくべき月の兎哉
夕日にやひかる源氏の紅葉の賀
しぐれしはたがまとぞやうそ寒さ
つれだちて飛やかい〳〵友千鳥
親子ながらも春の旅だち
いつか花の都へはまたのぼりはし
我身ひとりかけふのさむさは
つぎやあらぬはるやむかしのはり小袖
夏も土用も一時にくる
けさや人のむにんにくの衣がへ
春は群集をなすたえま寺
さあごされわらびの餅をねり供養
秋風に因果やつれてめぐるらん
散こそうしの小車のはな
かたきものにぞほねを折ぬる

夜うちこそがあふぎの繪にも書けらし
きのどくや取目すくなき夏の畠
これやなま木になたたまめのつる
あふぎを捨てなにをたづねん
秋の比とき〳〵ものがみえぬ堂
かりのやどりをめさるよりとも
世の中をいとうのむすめみめよくて
をよびなき后をもたゞ戀の道
いつのなんどきおもひそめどの
老せぬ門におどりもよほす
太鼓をば長生殿と打ならし
よはりはてたるあきの病人
さりともと思ふ心もむしのいき
とかくたがれの身こそつらけれ
重代の刀のしちをうけもせで
四條五條にけぶりこそたて
たばこのむ老若男女きせると火
いまの苦勞はらくの種なり
判官はをごる平家をたひらげて
あくまをばはらひこそすれお念佛
さすかいなにやじゆずをつまぐる

宗右衛門　利正

辛巳ノ年

何のかのとみいはひするや今朝の春
咲て後はあくたとなるやちり椿
萌いづる野邊は地獄か鬼あざみ
ひつちぎり植てもつくや餅つゝじ
花も入お茶もたつたりふろの數寄
鮎みての後はくいたき心かな
夏もよきかたびらきぬやはぢさらし
夏の月はさらしな山にてりふ哉
鬼百合のさかぬはあほうらせつ哉
こそりみる月は長刀か三ヶの空
餅雪もげにとぢつくやうす氷
　哥よみかねてにぐる山みち
猿丸がみるうちになく犬櫻
　聲山たてゝいさかひをする
跡先をあらそひ渡る祇園の會
　ありとはいへど目にはみられず
はやるとて座頭も鞠や習らん
　おいにほれたる事ぞおかしき
きりやうよき男はあねのむすこにて
　たがひに手をばしめつゆるめつ
小鼓とあらそひて打大鼓

宇治作右衛門　友治

　ためすかめ花を見る夜の朧月
櫻のえだの寢鳥さしさほ
　ふなばたへ引よせ首や取つらん
さも鵜つかひのいさみたる躰
　十六の秋にし富士に行暮て
月にらかんのかげ三保のうみ
　參宮の下向ひゝ敷まくの内
錢望月の駒にのりかけ
　君とおきふししげきよな〳〵
川竹のながれをたつる女にて
　枕をもならべてちはやめさるらん
口をすいちやうこうけいの中
　さつま路に都の人の行暮て
木の下かげを舟にたゞのり
　すはやかたきとさはぐ船中
ひつくはへ矢をいきりすやこはからん
　かねをこしらへ質やへぞゆく
心ざす別時の布施はいかばかり

平井甚兵衛　乃忠

蚊の聲をかみなりにきく紙帳哉
　なまめくをすりこぎゝ持たゝかまし
牛房のにやう工夫こそすれ

生浦丹介　信歪

日よりよかれ今とび梅の花盛
いけ花は人にさゝるゝ蓮かな
まん丸な月はまむきの兎かな
紙なれば是こそちはや古衾
足ばかり空に飛けり雪の鷺
　屏風のあちらうちかすむ也
きり岸をへだつる花の詠して
　ならへるは今を始の仕付かた
扇手にとりうたへたかさご
　かつけやみ相坂山の露分て
志賀から竹を身にしめてつく
　からきめを見るうさよつらさよ
こぼれぬるお顔のしほに戀こがれ
　念を入つゝ引御注連繩
科ふかきめしうどぞとてからめとり
　鯨ぞ波の上に見えぬる
物さしを鳴の小袖に添置て
　望は誰もかくる參内
夏殷周の時にあはぬを恨にて
　すぼめてかたをさすのをかしさ
大風にからかさの柄を持わびて
　ねみだれ髪をいつに忘れふ
猿澤のいけんに中はたえはてゝ
　あえりつよふはせめそやせ馬
日ゝにたゞ黒木めさいと貢ありき

熊内與市郎　當信

みる花や目ぐすり入のさくら貝
三ぷくの夏切あやし大茶つぼ
古筆やじねんに聲のきれ〴〵す
獨活とたゝくは雪のふる〴〵な哉
　ふる皮袴春はきにけり
二本の杉なの中の土筆
　さつ〴〵の聲をうたふ酒盛
相生の松茸の汁ふるまはれ
　あふ坂の關路こゆれば草臥て
腰や引らんもち月の駒
　その賢人も風や引らん
たくはんにあそぶ屈原はなたれて
　またはんさくにみゆる山寺
ちごたちの詩の短尺を書のこし
　木曾殿はかたわなるをち召つれて
いぐちの次良山がよりいづ

足代太左衞門　直房

冬はほだ夏は螢のひさう哉
晝出て夜は三ケ月やいるまやう
僞のなき世うで押はじまりて

時雨のちんのへいやゆがめる
足のたゝぬはからき大ざけ
さんせうもこけいを出し折なれや
兎にも角にも南無あみだぶつ
刀やと材木やとは世を捨て

駒井貞繼

一聲やあたひ千きん金衣鳥
初陽毎朝暮鶯聲もがな

花見にえまからざりし翌日、行し人のかたるを聞て

見るよりもまさる言葉の花し哉
引初て蜘手角繩春霞
行春の跡にぎはしか遲櫻
はいまとふつるはくち繩いちご哉
地の底をまはり番かや水の月
尾もなくてしり聲長きうづら哉
水かねか露かこたへよ鏡草
色鳥もはじめの老や四十から
山うばの山やぬり桶雪のわた
軒口にさがるつらゝや繩すだれ

山田彌右衛門　玄公

水蕗の針にてぬふや浪の紋
一聲は一座一句かほとゝぎす

螢火のふすほうはよき蚊遣哉
初なれど二度びつくりや虫くらひ
とゝもみよ庭にかゞやくもち月夜
飛かゝるほしろのわなや糸薄
二文字うしの角文字や柿いろ葉
算をみだし渡るや五羽の四十雀
口ひらきなけあかさたな濱千鳥

山本與七郎　正則

花をふんでおなじくおしむ日足哉
まく種やおゐて二度兒櫻
軒をふく呉竹の葉の茂り哉
しぶ紙子もみづる柿の葉色哉
いかさまに爰には花のありやせむ
霞のきえて見えぬ麻のゐん
君臣の道をもしらぬあはれさよ
下手のくすしの人をころせり
おもふやうになきはうき世の習にて
心にもにぬ君がつらくせ
跡のはぐるもいはぬ仲人
むしくしをけはひすましてあふ夜半に
ひとへにおもひまいらする中
かたびらをきたる姿に打ほれて
うそとおもへどしたはれにけり

うくちさへ見えぬ三年のうきちぎり

太田次郎右衛門　伊伯

川音に口はさめぬかやふし柳
火をふるや貧者の家にとぶ螢
色付や奈良づけ瓜の春日山
越後のみ天にも月の白うさぎ
　打つれ鹿のありく里〳〵
諸越の孔子の弟子は御供して
　京の親類たりにこそなれ
羽二重をかたのつきほともらひけり
　やすらひて三年もいる幕のかげ
清水まいりする坂むかひ

石原喜兵衛　利昌

火とぼすはをのが椿のあぶら哉
寒菊の露やそのまゝあられ酒
　ねずなきしつゝ呼出す春
小雀に爲をかふかごの口あけて
　追掛人を散〳〵にうつ
辨慶が通るあたりの關の前
　座敷にはさいつさゝれつ酒呑て
名残おしげにみゆるたかたち
ぢう代の刀を余所へうりけらし

田井正則

逢た時笠をぬげかしもち月夜

松井五兵衛　一滴

氷消てひげをあらふは鯰かな
來ぬは夏のきちかひなれや時鳥
はくたみの踊團扇か盆の月
上としたは海はらからか水の月
龍宮へうばひし玉か海の月
月はよき三界藏のたから哉
飛鷺の雪にはかくれみの毛哉
　受領をしては余念なかりき
法花經ぞ十六ぼんの花咲て
　若き時こそ心うかるれ
戀も色に出て見物須磨の花
　うたふ諷のふしは振舞
鳥に起て見事にかきし花鰹
　戀ゆへにこそ身はほそりけれ
若衆の花の刀をとぎ過し
　うらめしや顔にかゝりし亂髪
月にかまふと切は青柳
　ほこりを拂ふ古き上下
見物は花の都の繪圖なれや
　四方はくらき五月雨の比
螢火をともす座敷の角〳〵に

　鳥を追てぞ草臥にける
夏の日の暮がたの蚊にめいわくし
　冷じげにも出す薮力
相撲には十七八や勝ぬらん
　よるも晝もしゝに心や入ぬらん
月影請てさす中將碁
　引べき馬にひかれこそすれ
大雪に道の十方を失ひて
　戀こそむねの煙とはなれ
忍べるか呑したばこの付さしに
　ちは文や富士の山ほど書ぬらん
戀に心はうきしまがはら
　ふりもふつたるふりのよき袖
若衆の茶湯をちやくりちやと出して
　三度までこそ腹をたてけれ
一昨日も昨日も今日もいつはりて
　ほんなうのみちはおもひも切がたし
犬と成ても門に忍ばん
　後ゝ末代とするちは狂ひ
汲酒は二十五度まで付さしに
　玉章の内に作字書入て
あかぬいとまにやるは田畠
集るは色とり〴〵の坪の内

小鷹の詰茶いくらたしなむ
　ながれを立る袖のしんきさ
蠟燭の火は川風にとぼりかね
　さい〳〵にたゝかれぬるはづかしや
世を憚らで朝寢する門
　水を呑ける事ぞおかしき
川浪に鵜のまねをする烏にて
　手にもてる扇をなげや捨ぬらん
魚のかゝらぬこのやぶれ網
　琴を聞てぞ命延ける
七尺の屏風をずむと踊越
　永き思ひはちとも叶はず
点取の連歌の作やわろからん
　なまぐさ坊主人ぞわらへる
かくしてやあのゝ鱈汁くひぬらん
　天上したる龍のありさま
卯の刻の後や内裏の政
　顏をしかめてするはまんぞく
かゆ瘡や思ひのまゝにたでぬらん
　足にまかせて走り行けり
帆かけ舟難波入江を心がけ
　見苦しき刀を出してはづかしや
力の文字を書ぞそこなふ

そこなはで幾年もてるはけならめ
世にきこえたるはり付の下手
からかさを物數寄にしも拵て
赤ゐほしきつゝとくは説經
佛こそ人をたすくれたゞ拜め
燒白粉を身すぎにはして
藤田傳十郎　直清
置露はほえみそはぎの泪哉
冬は梅雪の下にやかくれ笠
又兵衛　政定
去年も今年もちぎりこそすれ
節分のよひから付て今朝の餅
しやうじの内に鳴聲ぞする
つぎのぶがはてたる躰の物語
津田次郎兵衛　屋勝
面白やよふしもなゆる竹の雪
南枝からならば梅〳〵こむめ哉
夕〳〵をのがくらふは蚊しよくかな
安井忠兵衛　正親
春の季をもち入ながら雜煮哉
花の雲やひけらかすみの薄化粧
作置し哥書や詞の花島
楊枝木にしてはよろこぶ柳哉

つく〳〵しある野の岩は鎚下哉
こぬをまつ我ざうつとり郭公
けづりかけの中のたしか鰹節
しな〳〵のちやせん髮でや木曾躍
柄鏡か月影を汲水柄杓
ひえのなき人のほにでるにきび哉
おもしろき月見ぬ人やあきめくら
春夏や秋くれ冬はしきぶすま
時ならぬ春の躍は珍しや
柳もうかぶ遊行念佛
そよと春邊に匂ひぬる袖
いにしへのおならの京の八重櫻
月のひかりは所きらはず
長き夜や出物はれものいたむらん
數寄者と四方に夕付の鳥
龍田山紅葉にまがふ赤ゐほし
流れてまたと水はもどらず
高位より下されて呑きくの酒
人しれぬまにいなうもどらう
戀すてふ我名はまだき太刀のつか
佛も人の妻におなりやる
清盛のむかしをきけば色好み
すはんといへば口をよせけり

かうやくをねり〳〵みこの袖引て
　おそろしきよりさびしさぞうき
俊寛は鬼界が嶋に住かねて
　こゝろせくなりかしらうつなり
でかさんと身をもみだしの大皷
　井筒のうへになまいはし見ゆ
桐の木のかげでなますやあへぬらん
　女とも見えず男なりひら
かねつけしむかし侍いまめかし
　よき追風に舟はしらかす
小皷にまがふはきしの波の音
　たてば〳〵のをしへたつとき
名を得たる祖師や屏風に書ぬらん
　折敷をばしつかいしゆぬりぬ
ねころ法師はさぞな成佛
　ないつ笑ふつまじはりの袖
それ〳〵のうきを語れる中風病
　さい〳〵穴をせゝりこそすれ
つきせぬや双六打の耳のあか
　ちらとまみへし鈎簾の俤
柏木のゐもんつくろふ鞠の庭

多兵衛　吉數

小車の花に螢はくさ火哉

夕立て晴きる月や丸してむ
朝顔に日まけをさすな桔梗笠
塩ひくも滿るも月の鼠哉
　春か秋かと見ゆる禁中
左義長をはやしたてたる大躍

南部清右衛門　定之

汁の子にあはする妻やよめがはぎ
捨そへをくるところの髭籠哉
野や硯すみれにまじる土の筆
花筐手にかけ香のにほひ哉
山は花海ぞ實生の櫻鯛
魚躍る傘鉾となる荷葉哉
夕だちやぬくるほどふるさやの山
色にそまで心づよしな松ふぐり
三日月や晝出てよるはいるまやう
鳥の聲もこきやこうようぞ立田山
西樓に落てむされな空の月
月の夜はしびりをきらせ雲の脚
月の顔木下やみらみつちや哉
海中にてるや珊瑚の月の色
池水のおも草もなし月の顔
魚も木にのぼるたとへか紅葉鮒
刈稲は殿のおまゝの御調哉

猿も木から落るたとへの木葉かな
わざはひは霜からをかす草木哉
つむ雪も實これたかし小野の里
初雪や富妻那もまかんした簾
寝みだれ髪に肝ぞつぶるゝ
さ夜嵐庭の柳を吹たをし
觀音にかけ祈るわが戀
楊柳の風になびける姿みて
めいしよによせてよむ戀の哥
わすれずよ紅梅散のうつり香に
掛字のまへで哥ぞ吟ずる
床にさす花瓶に蟬やとまるらん

朗詠之詩俳諧

曲を生す手の裏たゆき舞
品玉か嫩き柳の風の露
をし合にけり玉鉾の道
祇園會にすしうり共のまじはりて
鱗も成佛するのをしへにて
實蓮の葉にのするさしさば
よもすがらねがふ榮花の物語
さか月の影に顔も赤染
はなれ／＼になる旅の空
里とをみ俄時雨のふる搭子

雲やこけら風のしらくる月鉋
さしづは空にながき夜普請
氣はてん／＼にうつる振舞
五十にて買しずいきを汁にして
まめなる人の出入はよし
鬼は外福は内にといはふ夜に
際もなく只乘にのる舟の上
さつまくだりに身こそやつるれ
君が方にとこゝろいそがし
三吉野のたのもしに行年の暮
かつにのりなはばちやあたらん
長刀をつかふにあふは太鼓打
杖つきまはるけふのくたびれ
山姥のかけりの太鼓下手なれや
おどつたりはねたりして遊ぶらん
いきたる魚を入盆の中
備前の住居伽だにもなし
流さるゝ身はさび刀ばかりにて
もしほ火の光りは水にゆらめきて
目をやまはさん網にのる魚
あらかしましや須磨の高波
松風のうたひのきりのはげしくて
すぐてはたゝぬ世の中ぞかし

商人の屏風にしのをしつらいて
　隙なくみあけ見おろす身のかゝり
しみて數そふまりのくれかた
　ぶらり〳〵と日を送りけり
乘てゆく馬のはらかい旅の道
　此比は法師の形義あしくして
木のはしたなく人にいはるゝ
　世をばひつきりはいるかくれ家
七賢は心ゆるりの茶の湯して
　塚のあたりに相撲とり見ゆ
かうがいに川津股野やほりぬらん
　たゞへう〳〵とうつ浪の音
鼓にも犬の皮をやかけぬらん
　年にまれの君ささるべきもよほしに
さかなにとるや天の川魚
　あはれなりけり殊勝なりけり
女院は小原の奧の御住居
　和泉川にて身やひえにけん
けふ共に式部は三日のはらいたみ
　打つゞきえあはぬからに身をつくし
なにはわたりに聞下手つゞみ
　あらしらけやとわらひこそすれ
そしるをもしらぬ戀路の朝歸

　横笛にこそこゝろみだるれ
瀧口や戀ゆへ世をも捨ぬらん
　ちぎりし跡にのこるきる物
つゝみたる形見をみれば小指にて
　さつたさらぬといふ聲ぞする
觀音にわかれの事や祈るらん
　舟よばふなり魚もとむなり
淀ごいとなりにし妹は川向ひ
　酒はたゞよいの程こそをかしけれ
さらばといひてかへるなかうど
　おもひよらずのこぼれ幸
ちらとみし目もとのしほの身にしみて
　露程も九ゝにもれたる算はなし
子をまうけたり重陽の比
　日本國を一枚とせり
神佛起請に書し紙の中
　佛のために尼となるてふ
世をすつる妓王はさがの住居にて
　たち〳〵も名殘をしやと書くどき
經かたびらの布のあらまし
　つみあるもすくひ給はんをしへにて
扨も釋氏のつよき御慈悲
　岡田三右衛門　永田
年もたつと言ふらしけり天下

嫁事はへたになれ〳〵獅子苗
白川といふはありけり京田舎
淀を夜舟にくだる乗あひ
君にあはひのかひはなかりき
玉躰をさこそは爰に隠岐の國
國々までも一まいとなる
日の本の繪圖を書たる紙の内
穴へはいるもこはき蚫
女房のしとをする共むさとすな
思ひおもへば氣も謙な身や
逢見ねどなまきに名たつ花の君
解かとかぬかなんと下帶
花聟を取も互にをさなくて
ほろ〳〵涙雨よあられよ
胸も背もいたやの内の襟

鍛冶利安

咲花の比はおもしろ坂の上
日も長哥をよみし是則
ふじのすそ野に多き牛馬
もらふてやになふさしづのたごの浦
ながされ人ぞうきおもひする
ぎやう水のあつきせなかはひりぬきて
わきざしやぬくにあぶなやうるさしや

また下手さうな章門の針
茶にも色〳〵ある宇治の里
加賀染や江戸染すゝぐ橋の下
百性もりくつにこいむ鍬のかた
野陣(陣)の甲出來てうれしき
たくみたす日貫ゝたりきさま〳〵に
さしも心のつよき景清に
心づくしや寺住の兒
案じてもよまれぬ經のもじの關
こねずみにくはるゝ露のひるねして
とらずにをきし今朝の落ふり
古塚のあたりにむしの鳴つれて
をこる寸白は太刀をさすかた
主ある袖をひけばふりしやり
かりている弓の力やつよからん

正章

散のこる花や錦のたちはづし

丸さ雨吟し侍し時

涼しさのかたまりなれやよはの月

八月十五夜粟津右近にて當座

けふといふ興をさますや月の雨

雪の朝往還の人なみて

月影やかたげて通るかさの雪

鷹築波集　卷第四

澤崎善右衞門　茂昭

鶯のはねだいもくの唱哉
おられても又花いけの蓮哉
音高きはよくにやふける鶉餅
　石山寺の春のとぶらひ
藤のはな紫しきみつみそへて
　あせもながるゝ水もながるゝ
夕立はせめ行馬のせを分て
　おそろしき御前に不斷つくばひて
人くひさうな神のこまいぬ
　人間の苦は八つとみえけり
天神の連歌のおもていかばかり
　ちいさき舟にあしぞ入ぬる
湯あらひの馬はとねりになれ〳〵て
　細工仕初に日をえらぶなり
千本ある中にまれなるさゝく竹
　みなれぬ魚のうかぶ水うみ
さゞ波や志賀の干鮭を舟につみ
　油斷もあらずうしろみの人
供のものに似せてつれたる忍び妻
　寺のふすまの新くなる
びく〳〵に優婆そくいみをしけらし
　お寺參りのひきもちぎらず
かねの緒やほそくみえてもつよからん

野村治左衞門　季貞

東風にふるい筆かや土筆
折らせじと制札かたし石の竹
天下へさすは長柄か月の笠
行をする日數や四十八たゝき

梶左兵衞　康寅

僧正もおるやくらまのかぎわらび

吉忠

寒さにやをのれと足のひつかゞみ
　かみやはうけむ筆はむつかし
日數へてやこはきおしるの土筆

大誹諧に

　賣ものおほくかざる市まつ
十三夜月すみよしのにぎはひに

同

　むしろをも敷かへもんの番きつし
あたらしき家もとめたる躰
　八十になる年ははづかし
那知邊にさもこそ戀のはやるらめ

森六兵衛　一能

根箱の谷をうなるから風
小田原をせをふもおもく病付て
龜わり山に水はあらずや
沼田へとおりて餌をはむ鶴のはし
一筋に親の敵をこゝろがけ
虎に弓矢をもつてむかへり
海士どもは月の夜しほに汲よはり
あはれ松風いとしむらさめ
なふこれは老にほれてやちは狂ひ
高野の山におほき若衆
蓮こもたゝきてわめく露涙
煤掃暮に死んでのけたり

勝乘

三年こゝに須磨の浦人
桃と栗數をうへ野の里の春
永日に手水の水やあけざらん
春にふさがるたつのくちとる
九日の小袖染るくれなゐる
朝長の月に白害やめさるらん
かほのけしきぞかはる女房
目覺つゝ太刀をこれもちぬき合
すさのかげむのあしき赤つち
塩もなきさしみをもるやかはらけに
海にしづめの石つけし比
硯をばいかでとゞけむみどり丸
月に一しほとらぞ戀しき
卯の時の別を今もおもひ草

重規

かりがねはいかにとをくへ歸りてん
霞をそめてかくへくの文字
こひはうたてきものでこそあれ
ざれとはわらふをしほにやめよかし
いぬる共やがてもどれと戀すてふ
我が名はまだきたつ旅のしゆく
つまはづれをもたしなまぬてい
君を待よごのをさへちぎれはて

いかり市郎右衛門　直繩

世をう治川にうかぶたう龜
我が庵は都のたつのまき上て
よしあしに付ても君にしかられて
難波入めになれる女房
にが〳〵しきはからきよの中
竹のつゝに入し山椒の風引て
子をおろしたる跡のわるさよ
家のいもとろゝ汁には成かねて

　橋立のくやうに人の群集して

せがきのめしはほうかいのため

但馬出石

花たれてみに似ぬ栗のきりやう哉

打もせで火花や出る石の竹

秋は鴈の留守しに行か飛螢

黑星や烏にあたる玉霰

ひかりだす月こそ露の玉みがき

藤谷彌七郎　貞勝

月はくわら雲はおけさか釋迦のたけ

　ちくしやうなれど花をやる也

見たまへと狀を添たる犬櫻

　京よりとなる身の程ぞ憂

奔走はさしてせざりしおもと鯛

　とられて腹を立るさけ物

釣針の指餌を魚のくひにけて

　かねをつくればいとしさぞ增

けつこうな刀をくれしゐほし親

　かんがへてしる四十二の役

三返も哥の下の句講師して

　里には市ぞ並びたつたる

野の字をやいかにも眞に書ぬらん

　かぶりくひたる四あしの物

昔人うてる碁ばんはところにて

　身のうちは是佛なるらし

刀なる不動の梵字の大かくて

　拾王をたどらいはいぞする

寺かたの門に五たび立かへり

安井正親

　こぬかまじりにけぶる空たき

そさうにも髪をあらひし風呂あがり

小林市郎右衛門　宗俊

　大黑の繪やあり〳〵とうつすらし

正眞かとぞおもふまめいた

　千秋樂と祝ふ御夢想

盛久は露の命をたすかりて

柴山久右衛門　與杜

　いかひ音してとふもうるさし

忍び來る人のさはりや番太良

平野太郎右衛門　之友

見る人も花にほれけり姥櫻

慮外なり雲のあしにてふみ月夜

土山喜左衛門　盛成

目にかけて見る紅葉ゝやしゆてんひん

よき聲と口にかゝるや轡むし

木に餅のなるとやいはん松の雪

尙良

秋の野べ商人衆を友なひて
よく聞分る虫の音くらゐ
盆の比姫と若菜をおどらせて
文に添やるほしやはちまき

田中喜兵衛　重雅

雲を花とまがふはひがん櫻かな
しほがまのまへやひたきのうば櫻
荒行かのぼりて下る瀧の月

太田長右衛門　一尹

そろ〳〵と野ばなれへ出る猫の音
山からこくるあし付の盆
ひらきすほむる鳥〳〵の羽ね
じやうかぎのしつらひやよくたくむらし
きやうこつけにもよむや八くわん
千疋の錢二百疋たらずして
かまどの前をためすがめみる
うつほにや入置矢のゆがむらし
いとなみにちいさき木共堀りて
目貫を見れば山人の躰
かへせ〳〵と言子どもども
物の本よみ習ふとて眠るらし
天にのぼるとみし龍頭
さうれいのはたを煙になし果て
もんじゆゆへにし命たすかる
賣くふは能かねもとの小刀に

藤谷彌右衛門　貞則

天よりくだる神もこそあれ
左義長にもやす吉書はかつこげて
三つにて足のたつは子の宿
いろりぶた取てごくやすへぬらん
十六に成袖のやさしさ
八ばちを二度迄うてる子共達
まつ白くしも見ゆる山なり
大ぼろは源氏のかたのしるしにて
足の木たるしやれかうべみよ
難波江にからばかり有甲貝

秋田一庵　硯也

五月雨の空の氣色やふるこよみ
しゆろのはのそよぎや露の玉はゝき

守秀

おもき罪科に涙はらゝ子
夢にみしさいの河原は宴にて

松山忠俊

こゝろむる筆や兎の今朝の春
ちれば咲花はおきあがり辛夷草

春きくはやゝなつかしや時鳥
稻妻に火渡ししてや行螢
小男鹿をあじかとなすや霧の海
　腹はたてどもおかしかりけり
こはざれをいふ〳〵人がこそぐりて
瀬戸金兵衛　茂次
鶯の羽風や花を味方うら
夜梅ぞとはかてしる花のあなかしこ
波のもんみづからおるや花あやめ
とらへてはくらすかのこやかり衣
灯籠の火こそ夜光の玉まつり
橋本長八　泰屋
見あかめやせんざいふ共おきな草
　かくるゝは人をしのぶのすりをして
奥ふかでけるまりをみちのく
茨木勘右衛門　宗祐
鞍馬の花をみて
高〳〵と峯に咲もや天狗花
彈正といふ禰宜の所にて
さはるなよ彈正殿の花の庭
置露やひたとはゞきへ水仙花
藤谷甚三良　貞利
しら浪がとうの火でよるの螢哉

むね綿か山懷の今朝の雪
　三ねんの秌の月日をくらしかね
なれ〳〵と實を思ふ栗の木
　殊にさむしと言や大國
みちのおくは五十四こほり張つめて
九良右衛門　頼久
ほの〴〵と月やあかしのひとまるみ
川崎源左衛門　友直
夕立やたゞ一ふりのさやの山
　名ばかり殘るゆやの舊跡
權現をかく誓言もいつはりに
今井權兵衛　重繼
若竹や十七八く藪ちから
まろく赤し是ぞついしゆの盆の月
やねふきの家にて
紅梅のはやき軒ばや冬のくれ
葛原　重政
けさはにんにくの十八土用かな
廻文
田は月か野邊はさはべのかきつばた
女郎花むせるや栗のもち月夜
雪をれの竹のこしのせ藪くすし
齋藤平右衛門　直之

笠なする所にて遁友
ながえ笠長閑なかどのちかへ哉
きりくべて焼なうなぎの糀櫻
山頭の躑躅やかもの赤がしら
人丸の硯と成やきりの海
月も人も十五は花の盛かな
ふちもかまはずうきはしり者
かしましゝいろりの炭火おこり出
流す卒都婆のかずあまたなり
小町にも手を打けりな大鼓
馬乘こそは多みえけれ
袖なしの道服のせをあけ過て
はなしてよきはあい口のもの
つかまくな家の目貫の小脇指
とふにはかせの實すくなし
せうみやうのふしのゆりこそひみつなれ

小門清兵衛　高清
鬼の目の光か月の大江やま

大豆名月に
大豆からと月を飛出すみ山哉
しゆざやかや朴の木まとふ蔦紅葉

木法寺　實繼
だんごより花といふべし廿日草
瓜色に秋やぼく〳〵あを御

田中　玄以
賀茂山をつゝむつゝじやだん袋
佐保の漅にてうきおとし文
まづしきがからうすの音草臥ぬ
唐と日本の物ぞたちよる
ねりぎぬやさやを色〳〵次小袖

浦井勘右衛門　吉泰
大豆ならで日のさやはづす月見哉
藁にふる雪や紺かき白袴

村山治左衛門　重俊
日本おりの錦は柳櫻哉
文月はあつさをさつたいとま哉
日本にすぎた富士のまきがり
三ぼんのからかさみればまくのもん

石川傳左衛門　如云
鶯のたゞ一聲は短哥哉
むろならで花のつきたる柑子哉
車座にてやうたふ聲〳〵
もめん糸よるの庭鳥打はふき
あせのごくずいきの涙こぼれ落
あはれりんけむいでゝくふいも　勝之

柹の比捨子をみて
うみおとし捨ぬるはたがこねり柿
衣笠三右衛門 重友
おさな名でいつもさぶらふわかゑびす
はらからが鷹にいにけり二ひきづれ
螢火をかさはきつねの尾花かな
比や今みぞれあられの酒冬至
あまり翁のさばすさびしさ
只一つ鮎を肴のきくのさけ
目貫にせいをいれしほり物
景清がかたちを作るどこのばう
追善當座に
ひえいざん通明坊 秀海
つかの間にたつはそとばか霜柱
たま／＼に數百八をくりかへし
五十四でうの源氏二度よむ
人をたゞだます心やまめ男
ねやすく馬をかふて飼けり
伊勢四郎兵衛 政盛
正眞の菩薩はこれぞ米柳
千里とび毛をふるふ鷹やとらまだら
今出川七右衛門 正重
霞汲壺せんさいやにほふらん
はなよりもまづちぎる梅づけ
木村惣兵衛 宗久
寺にするは南無の菜なれや珠數かぶら
ばつと花ちりながれ行川
かうじうり春風いとふ橋の上
沖吹風のいかにきつかる
たゝらをもよき日になればふみたてゝ
あさな夕なに見るや日本紀
神前の鳥井のそばに住なれて
住かねて憂身ぞ見にくかる
折紙のいてう出しのさび刀
かしらふたつぞ行あたりける
掛鯛の繩をもつよくしめぬらし
あたまの上を飛やとり／＼
先陣もあしうさうぞや橋軍
ぐづ／＼してや尾花引袖
おそくしもがんせき越るあし毛馬
小野澤 安信
山口の雪はしとぎか下紅葉
舟よりさつとおろさるゝ人
祇園會の鉾渡りすむ暮がたに
せなかに腹はかへられもせず
降雪をおひても鳥は餌をひろい

奥と端との論は山へあり
　おの字をばどれをかゝむとうたがひて
かさなれる山の邊には口みえて
　嘲とよめる文字をえよまず
山川有右衛門　長元
野原出てやむつきの末にはふこ草
月の爲雲井路わるき雨夜かな
人の日にとりもち月のひかり哉
大名や兵庫あたりにつきぬらん
かみをわけつゝ出立ゆふくん
松繪利庵
ざる籠や花かごとなる櫻鯛
鴻鳥のじやう宿なれや家櫻
火花ちらすいく五月雨や飛螢
もまひ〳〵ばくちのさいかおどり樂
西へ行月はあみだのひかりかな
かる田にはとなりのなるこひいき哉
林次郎右衛門　利勝
らうさいのたねをや植るをそ櫻
うつしゑや雨露の恩でもなしの花
だいたうのなへを日本に植田哉
暮て行冬の形見やをきごたつ
　唐と日本のさかひまちかし
門松をたつるとなりにふきはへて
　いつもおまへに來てやつくばう
床の花誰さすまたの枝ならん
　打そんじぬる木曾の麻衣
はなやかなおどり大鼓のばちおれて
　身をつかひてもつかひたらばや
かゆがりにてのいきつかぬ我せなか
　せんなき事に悋嗇をぞする
病とてむさとわらへる中風やみ
　中に立たる人はいなもの
賣もせず買共みえぬ市のたな
　ともすればくすの木事や出けらし
退屈もなく作る御座船
　きとくとすけるやさかたの道
明暮に座頭のよめる大和哥
　聞耳たつるつき鐘の音
山寺のひじ待かぬる學文所
　親をおもふはまれな事也
佛説も聞入がたき衆生にて
　かけて來つれどなきなはりぬる
貧僧やけさのくやうにはづるらん
　成次第なる人の世の中
すし賣の錢を入置竹の筒

妙覺寺　知足

する墨といふ馬の毛で試筆哉
　六十斗うたれこそすれ
一町の田の面けんちの折にふれ
　夜打する身のてがらしるしも
曉の時の太鼓は拍子きゝ
　龍こそ海に入ならひなれ
しりからや硯の墨をすりけらし
　女のそばにおさあひぞ有
妙の字を作る心やふかゝらし
　かしらに火をやいたときにけん
佛前に立置鶴は見事にて
　廿八までよむ數をきけ
法花經の品〱や皆おほゆらん

佐々木三郎兵衛　俊次

姥ざくら花や百年もつくもがみ
花は火縄うつてつぱうのつゝじ哉

重時

　善悪に二道かけてつよき人
させるむさしを手づめにぞする
　まさる知行も又川のはた
宇治勢田の戰に手がら仕り
　少將や思ひの淵にしづむらん

御座をもながす我が涙川

伊藤太左衛門　貞玄

大ふくをわかすや富貴自在釜
　鎌倉山にはやるいつはり
やみの夜をなづけつたゆる星月夜
　淡雪に扠もしうたるおとりにて
冬しらくぼにつくるたんはん
　異國の軍しるし置なり
見せにだすからいむしろ御座疊

五良兵衛　正明

　目のうちにある佛ちいさし
花籠にいくるつぼみはふげんざう
　龜の腹をもわりて見る也
かしこきはおさあひなれと世にほめて
　すいこみにける油かはらけ
寢さまゝでたばこをすける人心

村山吉左衛門　俊安

いちはならとりかへにうれ傷茶
春風にきをくれしてやをそ櫻
われと我が身をひけらかす螢哉
秋の夜もくわいとふけたる鶉哉
さほに成羽衣ほすか天津鴈
鹿かりか十六さびた染はの矢

きて見さひいく野もしらぬ蘭
鞠落て數のうらみや葛袴
下戸衆も菊酒とてやすひやうひ
はながみに香をおり入る小菊哉
大上戸見てもあかぬやもち月夜
紅葉ゝに匂ひもがなと楓の木
神〳〵の留守や見舞に北時雨
池すにははり番となる氷かな
地震のときはたれも迷惑
　憂鳴とゆり若殿や思ふらん
古船に乗船頭は犬にて
　つきせぬ物はあかとぼんなう

鹿嶋長兵衛　賀屋

あつき日は雲の原なるやいと哉
谷そこは落る木のはの地獄かな
冬ねるは皆かんたんの枕かな
　座なみるからぶげんしやとしる
つき山にかねもちつゝじ植置て
　さし相いひてはぢかきつばた
三かはより汗をやいだすへた連歌
　此秋に御所のおなりを申請
掃地をしたる柿の木の花
悪事千里へもれんおそろし

ぬすみてもあらはれやせん虎の皮
　無常の風のさそふかとみる
煩はたまはるお茶のしよくたゝり
　口まねをしてきられこそすれ
さいなんにあふむの鳥の年の人
　遊行上人にしへおくだり
押て行舟は柳の浦づたひ
　佛の別れかなしかりけり
口の玉のつぶれし昔おもひだし
　君ならずしてたれかいだかむ
くらべこしふり分髪のおちの人
　みかへり〳〵おがむ内陣
殊勝なはやうくわん堂の佛にて

修三

来てみるや大はら卷の糸櫻
扇にや折句の哥を杜若

貞田九郎兵衛　政之

鑓梅はやりをとがひか花の顔
氣力もやあればぞ力こぶ櫻
たまらぬはながもぎほしの花の露
をそく咲は鞍馬にやをとるきりん草
白川へおるゝ水鷄やいしたゝき
夏の夜は半弓なれや月の弓

とく花の紐やおのが緒鳥甲
類船か一やうにちる川柳、
茶湯をやけふ盆たての玉祭
伊勢の海の月の御舟や御しん艘
うへ人やくらゐにのぼるつかさめし
三ケ月や是天上の弓始

八月十六日八幡へ參詣して

跡の祭するや臨時の放生會
聲なふて空行鷺や太平雪
　竹馬に乘ぬる事をのうにして
はやしたてつゝうたふ百萬
　あたゝかな日は狂ふわらんべ
濱弓を一入下手やけづるらん
　妻もろ共にふせりこそすれ
武藏野のはらのいたきはいかゞせん

中村虎助　長以

咲わけの梅はふた子か花の兄
山海の珍物なれやさくら鯛
魚とめて凪をばもらせあふぎあみ
辻切にふるや夕だちのみすぢ町
ひようたむのをじめかつるの露の玉
夜嵐にあたる鷄頭花やみだれ鳥
みぞれふる紅葉や酒にかいじらけ

くわほう待やね祭の月のしろ鼠

原口次左衞門　吉信

黑柿の念珠つなぎにやあまほうし

平兵衞　可成

　顏の躰こそいとゞながき夜
出るから月毛見事な越後馬
　かしらをたゝき人のよろこぶ
料理もや出來たりけん鱠なます

松古

行つくす花にや梅のす十程

貞得

　神もばちをばはやくあてぬる
夕立のふればいかづちよろこびて
　水をたづぬる大佛の邊
をこなひの牛王をするや二月堂

無寸

廻文

たうへうたふたつやつたふたうへうた

玉次

まみ梅も花の眞にや立つてと
らんじやたいにほひや花に春日山
をのがいろあを道心かあまがへる
烋は身をおくり火となす螢哉

山の端や大豆名月のいりかはら
やまけをもふこえてみるはいろは哉

井上意専　利重

今日よりは花さき通せ牛の年

藤懸四郎五郎　直安

長閑にあつかふ君がはれ物
花染の小袖にいきをふきかけて
布きれや天の川原にさらすらん
片のごとくにいたすきやうけん

藤木久兵衛　重屋

御ゑびすの草木にもやさくら鯛
くはつと吹風にけ合や鶏頭花
さね盛のさかりやなが非翁草
香かたかし花も實もある菊の酒
曾我といふ花のをとゝよ御らうぜよ
大ひえにおびゆる雪のよ川哉
難波あたりで虫やふくらん
紀の海につつたちみゆる烼の虹

重好

わくせきと身をよりふるや糸柳
十八夜待やお月にさゝげばな

森木六左衛門　末重

犬蓼のほえ出るしら葉口もなし

望月藤兵衛　重供

咲[illegible]て匂ふや梅が香しき立
枝に残る雪やおしろいの箱柳
鳴鹿は妻こうようの木陰かな
置霜にいためる菊やすばる星
霜げぞといひふらすもや中つもり
大佛につくれ富士のねの雪佛
丁かねは曲に重寶の物なれや
遠き目あてもあたる鉄炮
春の夜の夢にや息のきれぬらん
かひなくはづす君が手まくら

廻国沙彌　道念

とらへてはくらすかのこやかりころも

瀧野　道二

長閑にもいなりにおがむ方哉
みじかき物もながくこそなれ
いか斗そらさやの有小脇指

大河孫三郎　勝貞

おやより先に出るおかしき
若竹のそだてばちゝとはゝみえて
山にも物をほしやしぬらん
ゆかたをもかくるさほ鹿聲はして

渡邊　重吉

風よりや涼しさ六ぶしぶうちは
勝次
はいかゝる螢は尻にいけひかな
時雨にもぼくくるは木の葉天狗哉

鷹居治左衛門　親孝
しゝにのれる文殊の知恵やふかみ草

高井勘左衛門　利忠
吹は枝も風折ゑぼし櫻哉
吹おろすかぜはやすりか鉄線花
ぬれ鷺のたてゝる邊や菊の淵
板屋川百重はりする氷哉

山口彌三右衛門　正朝
花を風もみ落すかやきりがやつ
ひきく引霞や山の腰屏風
鶯とおなじ宗旨か郭公
手にすへてえり茶や一羽鷹の爪
芋の子も月見のはれかきぬかつぎ
まめに月みるや今宵の猿眼
月かくす木葉や天狗鞍馬山
　あらおそろしと公家のいさかひ
腰にさす刀はかふりをとしにて
　したゞ見事な木佛ぞ有
卒都婆をばへいの柱にかきまぜて

澤野仁右衛門　重弘
鑓梅の花や一けうとがりがさ
ぬる蝶の目の煩惱かいぬ櫻
神子の舞するやこてふのいせ櫻
花やはらむ大原山の雲の帶
犬櫻匂ひはつなけはなばしら
我と花の匂ひをやかぐ普賢象
花の霄は神樂の鈴かいせ櫻
朝日には東方咲や國の桃
　八瀬にてかまふろをみて
かまふろの茶の湯坊主かやせほうし
やれ木鶏鳴程たゝけ郭公
花にあらき雨やものゝけ葵草
石竹のちり敷庭やいしだゝみ
風の神のおはらひなれや扇子箱
つるにつかば堀とれ金まくは瓜
つぼみひとつ出るや一角仙翁花
露と月團のもんかこ玉たう
月はからの鏡かくはしはたうの芋
蔦紅葉壁のうで木やまき柱
木の葉猿は木てん童子か大江山
藪に降や竹鉄炮の玉あられ
御室さまに咲や青山枇杷の花

冬梅をみて
鍵梅にまぎれ道とか雪のはな　治右衛門　玄忠
ながかたなふる五月雨のやきば哉
夕立は水のたりぬるつるぎかな
　ひた物に暑さぞまさる人つどひ
風呂の奥へとをしやられぬる　本田又四郎　行常
　十五日亥の子なりければ
満丸な月はもちろん亥の子かな
　わが身ひとつの果のあやしさ
月やあらぬあられぬわざのばくち打　末吉太郎兵衛　増重
　盆
初は越四十一おどれ手うら盃
　元和九年冬
富士山を雪ころばしにするが哉
瀧の水やしら糸しむる一氷
　柳に藤に心つくしつ
永き日につゞらとこりと組立て
　先今見事後はおそろし
姫百合の又鬼ゆりに成やせむ
くもれよとあひそも月の西の空
うづかひならぶかつら川邊
　もみぢの川のながるゝはうし
水上に鹿をいくつもはぎぬらん
　これを一種の平家なりけり
いもが子をたゞもりとれの言の葉に
すね〳〵しきやゆがみまつすぐ
ちんばあしかたしすりこぎ又しやくし
　道をまがひのしなの路の末
藤六も下六も忘るしうの宿
　熨斗に出すおてかけ
ゆう筆に何一筆啓せしむ
　うたへやうたへうた片うつら
やき餅をくひて手拍子しらびやうし
　いそぐ夜道にくもる月星
千葉殿のかろき文箱は日の木にて
　君がさしきにありてなしもの
戀故に人の借錢おふの浦
　衣をはるの日よりもぞよき
かこひすむあまのかく山とび鳴て
　半天にたつゆふぎりのさき
ほそくふとき三輪の杉ばり陰高み
　商はいちばいばいになりぬらん
たうじんなれや物よしなれや

　切ころされし跡のあはれさ
かたきをもうつべき子をばもたずして
　はたらきは三人まへのかうのもの
べんたういそげさいはなくとも
　湯の山のみやげをみればさびにけり
やうじにさせる鮎のしらほし
　涙ほろ／＼ともし火の本
やゝこおどり夜の更までならすらん
　やせこけておも荷にしづむ涙川
お伊勢まいりの歩にさゝれぬる
　はりたてらるゝ腹たてらるゝ
あたらしきしやうじの内のうはなりに
　耳あつしうすきは人のなさけ也
莚のへりをうらみてぞぬる
　はづさじと心にとるや知恵の弓
口をよせぬる御子いかしこさ
　ぶしやうにもありかしこふもあり
朝ねしてはこをたれたる文殊しり
　御歸陣(陣)なればはしる者有
大峯のぜんきの子孫足はやみ
　鏡みすればなくばかりなり
いつのまにみつわぐむなる親のこし
　杖をつかねばたつもたゝれず
年よれば小便するも圓のゝ字
　うらかたのあへきよばるゝ爰かしこ
共名を得たるふなかたぞかし
　雪かあらぬか白きもちばな
氣は春のかすめる日本あつきなや

鷹築波集　第五

春の日やひなかのしゆくの霞酒
　王昭君幾度となくひらくらん
わかしゆふるまひ多きかず〳〵
　ものみ見物おほきこの春
しづまれる國の御法度すみやかに
　關の戸さゝず人もゑらまず
御遷宮伊勢の神垣あらたさよ
　人なふすべそ何かとがある
我とのゝ二女くるひをめされつゝ
　捨られし身は心うやつら
ながさるゝ質のしちくさ古ければ
　筏くたしぞうるもうられず
湊にはおもひの外の四國木に
　雲はたどかなたこなたへむら〳〵に
海づらうねる船はなんそう
　立うかれ君に心やつくすらん
そらたき多き門の透〳〵
　打よせぬるは余呉の立波
瀧川や柴田が行へみえわかで
　立田の里の花そてこさく

春霞雲の村きえ面白や
　しほやあまたのみほの松原
はしり舟名所〳〵を打過て
　あはたゞしくも入は三ケ月
はりゆみのやつぎはやなる秋の夜に
　筈をはなしてかりにこそゆけ
山人はしかのかくれ家追出し
　あがりては又五月雨の空
雲間よりはた〳〵神のむちのかけ
　柴田うちさなへ植とる卯月哉
五月雨にをつる瀧川が首
　色よき菊のあおはひの春
仙人やまがきの露をねぶるらん
　なに罪をつかまつりたか忠兵衛
死もしにたり佐久間一類
　あらめでた何も人は息災に
いはふとばゝ正月のあさ
　蓬萊に備のやしわ子うみ置て
ちやせんを多くみやげにぞかふ
　さびしくも淺はてたり村薄
明石のなだの人丸のつか
小舟さし嶋かくれ行跡もなし
　供をもつれず袖ぬらす人

客僧のさすからかさのえもりして
　しまをながすは瀧川ぞかし
修理もなく柴田つきこむ堤内
　あら玉の年の御禮は嘉例にて
むかへとれるはゑびす大黒
　呉竹や消のこる雪に打なびき
けぶりも雲もかすむたる村
ひたものに民の竈は賑ひて

　右廿八句は添も　太閤御所の尊作也丸が小耳にはさみ思出し其代の人多も殘りたまはればなをこのゝちこの御句も知人あらじと恐ながら書付侍る

天滿森　山己法橋
うるし色に似せてぬるでの紅葉哉
　小袖の上のなみだかず〳〵
恨わびねにける人によりかゝり
　ふるひ〳〵もさぐりてぞみる
よきかんに中風の藥あたゝめて
　さて〳〵折の中のひろさよ
跡先をしゞめてかくか懐帋つら
　唐の代の其賢人の出あひて
舟にのりたる住吉の神
　をごりきはむる玉だれの内

みめよきにほれたる國は傾て

　此由己は相國寺仁如和尚の下にて丸が父と同學せられし彼後まで如レ兄弟有し丸を子に養たきと申され　大閤御所の御前の執筆など仕しも皆此人の引級也其世にかくれなき大才の人哥道達者にて幽齋由己とよばれ給ひし事今のやうにぞ侍る

　ある時千句滿じ酒宴の時。丸が父永種子共の双居と云句に燕を付たる句一座の金玉なりとてそこにありける熟柿を多つゝみて紹巴法橋へ　じゆくしこそ子共の中のみやげなれと狂言をたびければ。酒にゑひしゆか歸さの袖と付て袂に入侍しに

ぬぎすつる衣のたなをまくらにて　さ

　照高院道澄和尚と法橋昌叱と出し合せて興ありしと云ゝこれらの事は此集へ入べき事ならね共末の世にはしる人彌あらじ名句のきえうせ侍らん事もかなしくてかきつられ侍る

利休居士　宗易
鶯も笠きていでよはなの雪
天王寺屋　宗及
　御座敷はれき〳〵とある右左
哥合こそはじまりにけれ

貞のあかさぞ思ひやらるゝ

紹巴

木の間よりほのかに猿の尻をみて

大閤御所唐入なあそばす時大坂天満の森由己法橋がもとにて長岡玄旨法印に誹諧の發句と被レ仰ける時庭前の垣の枳殻な見ていちはやく

からたちはやがて共まゝきこく哉

是等は雑の發句也雑の發句常はせぬ事也習ある事云ゝ

高砂の尾上の城の普請して

松の本にぞ人夫あつまる

夕皃の地子に催促つけられて

五條あたりに多きあき家

六彌太が身の堪忍やならざらん

岡邊をさしてはしりこそすれ

山桝や胡桝を入てすりこばち

からり／＼とからめきぞする

茶湯者が月に涙やこぼすらん

ほろりくはんすの秋の夕暮

玄旨法印の被成御句共は犬うつわらんべ迄知たる事なれば中／＼爰にしるさずこれら皆前句な云はてぬにに付給たる句也丸なごがやうに久案給し事一度も無レ之中にも諸人おどろくばかり早あそばされしは伏見にて前田興次良仍生と云人再ゝ編の比までしなくれ給て抑是は何と云べきと前句にさりあはず申されければ玄旨法印。能いわき名のるよりはや打忘れとあそばし侍るかやうの事千たび百度とかぎらずありし事なればひとり存出して泣ばかりにて侍べきい名匠の御跡ならひ取事もならず和哥の道い至し事は上代にも不レ耻末代にも有がたき御事なれどあしき時代御出世ありて人共高き事をしらず無念の事也と常に烏丸の亞相もの給なげかせ給まさしく定家卿の再來とみへたり

今朝むかふ東鑑のもちる哉

これは一とせ江戸より烏丸亞相公あそばされしとて御文のはしに書のぼせ給句なり

むさし野にけさ一杯のかすみ哉

これはあるやむごなき御方江戸にて元日にあそばされけるとぞ云ゝ

おそく咲ははぢけや梅の花ばしら

あづまへの馬のはなむけに發句一つとありしかば京の紅葉かへるひがしの錦哉と申ければ

龍慶法印

月をふところにみやけ野の原
奥西彌兵衛 勝成
ちら〳〵とふりをもしろや雪女
奥西市左衛門 義茂
かちまけのらちをあけたる競馬哉
蓮のはや能聖靈のたばこ盆 闘屋
西へ行つかひに月のおあしかな 充重
夕ぐれになれば螢のひの出て
三田 淨久
あら玉をいたゞきくるやうしの年
しらほしとなるや日でりの川のあゆ
山高ふして水の遠ひに
もへいづるわらびを折て手をやくな
みれは金銀眞砂地の庭
春風の梨花山吹をふきちらし
かすむ林にしとゝめぞつく
咲かゝる藤をさげをの木立にて
浦山敷も遊ぶきみかな
かくばかり隙ありがたき世の中に
是閑

一葉づゝ氣力やおつる姥柳
荒川道淸 正吉
つく〳〵し摘うり世をもすぎな哉
櫻鯛いれて詠めんよしの鉢
螢火になぐるつぶてや火打石
こま鳥にはまるな野邊の轡虫
村田入會愿 松庵
内裏にもせつしやうあるかしゝいでん
高津市右衛門 正康
あみ笠のふかき思ひの茶つぼかは
月におどりをしがらきのさと
こつとかりけり空の月星
ちば殿や樹有以テ露にぬれ
かさぬるや破れかみこに紙頭巾
不辨するがの安部川に住
金銀の座敷の窓をつきあけて
みえかぬる目も將棊をぞさす
わる口は何御湯たての後
しぶちやをば振舞人の址なれや
寒に入日を待えたりけん
ひたせめにせむる程よし駒の足
一陽軒 有只

三月は實紐とかぬ花もなし　傳師大藏
かなめの木花さえ實にあふぎ哉　竹田善甫
七くさの數かたばこをふくわかし　寶護寺龜竹
　さすがにひろき一家一門
むさしのゝ柴を錢にも商ひて　明願還跡
うらが身の年寄かへる朝かな
神通で咲時しるや日蓮華
鬼ゆりにかまれた跡かはかたゆり
妙法蓮げきやうははすねくすし哉
哥のさまよはきは小町おどり哉
あさぎぬや振袖にしてきそおどり
枝をひかばちりりんてんや枇杷の花
　皷をや心のまゝにあふるらん
いろりのはたに居ます判官
　世の取沙汰もかつてしら菊
まがきより外へは出ぬ禁足に
　あらおそろしと骨ぞみえける
破たるしやうじのそとの光りもの
　大地をわつて入とこそみれ
まさかりをあてよりわきへ打はづし
　もつて出籠や外面にをきつ淡
兵庫の浦のあはれつきしま
　上下ともにいかゞこそすれ
掛置し杓子は水にうつろひて
　つよく頭痛の起る此ごろ
八專も土用にも今入こみに
　二八月には浪ぞ高かる
春は藤秋はをばなのひらめひて
　牛を馬にぞのりかへにける
武家にてゝ知行給る御百性
　笠も重荷につらき山みち
今越る阿彌陀が峯は難所にて
　太刀はやさふにはづすめのすや
下山して武家をつぐべき兒なれや
　取置し扇團を又ひろげ
まく二はりの紋をうつせり
　思ひのまゝにとるは口錢
國を治め本意達る陶朱公
　嬉しくもありかなしくもあり
主の子に我子のかてるせきずまふ
　寅よりさきにかけ出にけり
夜がよなかたがのりうしの一さんぞ

むかしにかはる今のなりふり
いかにして鈴には疵を付ぬらん
　心はおなじ唐と日本と
青苔をこけの衣とよみかへて
　身のさまも替るしらがをいたゞきて
あらはれいづる能はやま姥
　圖星をやたゞして針を立ぬらん
唐土へ舟をなし渡すなり
　石は皆あそこに爰に引ちらし
上手のうてるをくれすごろく
　御簾の内よりのぞく海づら
風なきに出塩をつくるやかた船
　祝ぞろ春の初のおよろこび
あら玉のやうな子をまふけたり
　十七の冬より帋こきそめてし
ときはごぜんの參る清水
　三七日にみつる立願
參らする二十一社の神の御湯
余はしらず先たうときは華嚴經
　爲にはならじ今の振舞
神の留守に鈴參らする御子の袖
　廿四五日すそをぬらしつ
露分て參やあたご北野どの
　よむ經も心にそまぬうかれ戀
たたんあだ名を何としが寺
　唐にもまさる日本なりけり
箱崎のあけくれ贈る妻子ども
　はらはたて共うれしかりけり
難産のひもときみれば又むすめ
　おいをかむはも落ぶれて見苦しや
高野聖をおどすむくいぬ
　かたきをつよくねらふ客僧
罪を切知惠のつるぎをとぎたてゝ

尾崎仁右衞門　永良

新春は堯の御代つぐ佳例かな
鶯と蝶とは歌舞のはさつ哉
山寺にならはぬ經か蟬の聲
撿校のすゞみにくむや一夜酒
降雨は草紙あらひか文月夜
見る人を又見物か月の笠
竹葉にそへをかくるやあられ酒
年の内に咲紅梅や寒のべに

野村九郎兵衞　不染

ふみて行人はあしだのはなを哉
のりに入しわかめや成てあまが崎
つくづくと植ならぶるや餅つゝじ

ふかづめをとるや卯月のあか楓
けふは競馬しから京者の見物哉
軒の妻やかくるあやめの長かもじ
軒の妻もしやうぶ刀やさしも草
夕立はふるみか雲をおこし物
どろやうみかいつぶりにも蓮根哉

晝明月を所望有しに

くるゝなら十五やくはんもち月夜

杜若をみて人〻哥よみ給し時

萩の時にせむらさきか杜若
八雲立国に諸國を時雨哉
手に入てもみぞたてぬる紙子哉

福西小左衛門　成定

雪あられ雨の用意か三笠山
　さしてもみよや此きぬのたけ
のぼり棹思ひの外にながくして
　川と川とのほそひ中垣
見事さは鼓の筒の蒔繪にて

渡邊吉兵衛　氏重

午年元日

あなめでた雪や今年の白ねづみ

牛の年元日

九牛が一万年のはじめかな

貞頼息六歳　長丸

こくうにや人のみたがる雪の花

湯淺甚右衛門　常友

九ゝだちをうるや八十市の棚
連歌しやふだんつき添花の本
まるくちにとらばやいかいもちつゝじ
はながみにつゝめばどれもかぎ茶哉
影清き月みぬやつはめくら哉
　ふるひ〳〵も忍びこそゆけ
よい中をふりへだつるか袖の雪
　雪にも色のこひうすひある
かさねきる袖のべに染むら〳〵に

岡八郎兵衛　重孝

雨のうつたんぼゝや野のはら皷
浪のしはに螢や火のし衣河
奈良漬の塩か重ふるかすが山

堀部八郎右衛門　三保

　月くらき夜はかはる詩取
身にしめる右近左近の番所
　月そひ影をたのむ西陳(陣)
高麗もなびく限りの鑓の先
　うり塩は何とあらんと案じられ
習ひをしらでいらぬ奈良漬

木下善兵衛　重忠

遊行とはいかに水ぎやう川柳
膏薬はかはのつゝみの柳かな
くた〳〵なやり句を中月見かな
長月は十三くはちの今宵哉
菊の花はげにゑんめいの薬哉
　きつとしかまの年頭の禮
大ふくの茶や四所に立ぬらん
　うすはたにもる春の谷水
つくもちやとくる氷に似たるらん
けふ正月といはふ六月
　君とねごろのおしき短夜
たかんなをぬくは粉川の寺ならし
　幾夜みても八幡月は面白や
放生會にはござれ毎年

紀　淺田

　諷はいかい
吹風がにげて軒ばの梅も哉

端長兵衛　定主

廻文
たつたるはたつたやたつた春たつた
せ高きはによろさぎ長のすがた哉
佐保姫の九花の帳か八重一重

ふたをして鶯出すな箱柳
鶯の親子とまるや父子柳
春毎に若やぐや不老ふし柳
花の前にまはひで居るや無蝶法
飛蝶の羽やさながら舞扇
親はないかまふはいたいけな小蝶哉
篝火でせよや薪の神事能
はやせ猶太鼓の音のつく〳〵し
廻り花にさすや名におふうづ櫻
風に散は蛭に塩がまのさくら哉
わかめをやつけて廻せるかた男浪
見えかぬる若めは海のそこひ哉
火櫻にまじるやあぶり餅つゝじ
春と夏や隣あはせの衣がへ
夏は水きれ廻りたる井口哉
月鉾の出るは山のあはひ哉
暑き夜の星はあせほか天の原
咲かゝる撫子だくかゆりの花
夏は屏風たゝみて開く扇哉
妙なふりするは題目おどり哉
橋ならで哥をかくるや木曾踊
中に廻る女やともへ木曾踊
立鳥は飛魚なれや霧の海

風にくるふ蘭菊は狐つかれ哉
長者かやおほくくべ置池田炭　平澤宗温

雪のあした
雪に鷺鳴ておちつくからす哉
　玉の井の深く藝能あらそひて
さうしあらへばかすみながるゝ
　數々のこそくを愛すへやのすみ
ざしきのまりはたかくけられぬ
遠山忠兵衛　正直
あけて見な出る日のめのはづれ雲
行ながら口に念也や鉢たゝき
野田彌兵衛　重春
さつまわん花ぬりはたゞのり地哉
風の口とぢよ表紙の糸櫻
うへはんは枯たるがよき櫻かな
　四月の比爪はらみいたむを泣子なみて
つまはらみうむはこゆびの卯月哉
螢火の我れとわが尻痔やき哉
りふじんに花ばし折な美人草
花もさとり開くがんひの達磨哉
月をむこにとるか鼠の引出物

さんご寺は紅葉の山の尾どめ哉
かしましやかふてふけ物はうづら哉
萩の花ほた餅の名ぞみぐるし野
富士川の波の皷もたかねかな
野口仁左衛門　頼永
鶯やかはづの師にも蝉の哥
ひのはかまきるや螢も兵部卿
なかこあれと瓜のつるぎに鍔もなし
木々の枝は蟬のころもの衣桁哉

廻文
けさのむがじまんぞむまし寒の酒
今日のみは條りねんない歳暮哉
服部喜三郎　定清

元日
氣晴ては風新春の朝日哉
髪と見る柳は川のしりげ哉
はき捨な庭のおもてのちり椿
花入の口べにさすやあかつばき
雨の手につむ二本の杉菜哉
よりてみよ花にくづなき糸櫻
花くれぬ人や畜生いぬ櫻
あつき日のくげんや拂ふ修羅扇
なりふりも小町おどりや物ぐるひ

杯の夜は月の兎の耳そろか
仙人の世界か菊のつほの内
との葉はきのつら雪のながめ哉
大雲寺 教譽
耳のはたで鳴蚊にならへ時鳥
井狩吉右衛門 忠次
かたるなさけにまじるすねこと
樣々のちはのあまりにふみこくら
腰かけて蟬の鳴音や聞ぬらん
足たるくしもありく年寄
岡本宗隆
松風の地謡するか荻の聲
屋原自入 正依
東西と春のしづむる朝かな
寄來るは又としの緒のへそめ哉
東路に鳴うぐひすやゑびす哥
富士山を根引にしたるかすみ哉
霞ぬる木々の目もとや立くらみ
はやく咲はけに雨露たえぬ花心
水草に火ばなさかする螢かな
青梅は匂ひの玉のすかりかな
手が入ばあしも入たき泉かな
おやのかたきの首あらふらし

實盛の謡をそがにまぎらかし
ゆるしたまへとおがむ觀音
順禮も鞠に心やかけぬらん
望月八右衛門 重方
木によつて魚や求ん柳はへ
花の皃と目まぜをするは柳哉
ねをきかや風に目をするふし柳
咲花や先一に梅庭ざくら
見てよだれながすや牛の玉椿
ぬれ手にてあは雪つかむ蕨かな
雪ほとけ消てのあとや土佛
鷹にあふてほろをみだすは雉子哉
咲花を見捨ていかでいにたがり
風の手でつばなかすみの衣かな
かりがねや霞のきぬのさほのだい
花の色のうつるや小町姥櫻
花はひとへこしは二重か姥ざくら
花の名は天地雨露の紫苑哉
山吹のつほみは抄（マヽ）金ぶくろ哉
春はせめてはないきもがな子規
折べきとおもふや藤のたなごゝろ
右左まはりてみるや藤ともゑ
藤つるや暮行春のおしみ綱

今日は花手おれわさくれ春の暮
一月を一夜になすやさ月やみ
親竹の子をおもふ比やさ月闇
かるかやの青道心は夏野かな
露の玉の冠いたゞくむくげ哉
花の口の露やほうづき小姫ゆり
夕だちのはれて曇ややきなをし
数多く飛行鳫や千字文
月と日のねずみや出入穴師山
三笠山に出し月かもならうちは
三か月はつり針なれやさほの山
仙人もまよはんしろきはぎの花
紅葉ゝは赤しりかひか伊駒山
紅葉ゝにおほふはさたのかぎり哉
霜ふりは鴻とやいはん羽買山
雪はこれ天からふつたほとけ哉
としふるは白姥ならし雪をんな
雪つもる木ゝぞしらはのやはた山
年やはた地其名はお富士雪女

三宅又兵衛　直吉

撫子を愛する雨のをやみかな
夏の虫にあらでひえ入霜夜哉

中村四郎兵衛　四永

ともずりはよその衣やはぎの花

峯川藤兵衛　重供

しんあれば年徳もありけふの春
まつすぐな立枝は梅のす鑓かな
野にそだち葉根有故か鶯菜
揚枝にしつかへばく木槲哉
花盛見せぬはきしまかすみ哉
鷹に聲のけんをとらるゝ雉子哉
しとゝめにつくやきけ絹の糸櫻
六尺かふくは五尺のしやうぶ哉
一ほんは位のたかきむくげかな
夏の夜は鳴ぬるちやほのあした哉
雲の手でたゝむは月の扇哉
むさし野はたゞ廣袖の尾花哉
お夏さま跡に扇や置みやげ
悪き音はげにふけ物のうづら哉
三ケ月に十を越たる光かな
散跡の木ゝは杯かやふるしぐれ
柴垣の雪や其まゝたばね綿
幾年もまだふり袖か雪女
さかりばは横笛なれや雪の竹
たつた一葉なくほとゝぎす
夏山に鶴がきたかと夕月夜

月に鑄そこなふ山寺の鐘
冷じく兒はけさんでたゝみうち
月もはや入杉原を賣ぬらん
子は出かゝるこのもみぢ鮒
秋の野に有かむかしの寶物
月にみゆるはかくれみのむし
花やかな女姿や替るらん
幾年をらん百年の姥
商人も家の普請の用意して
目貫の目利有徳になる
ほまれをも取人はたゞ親のそん
いく野の哥のさまはおもしろ

西村次右衛門　重直

はきて又我とちりする柳かな
やれかへせにくしきたなし花の風
ちりやたらりだう／＼たらり花の瀧

陳市女

江戸にて身まかる時
爰は穢土今ぞ淨土へ雲佛

竹田善甫女兒

欵冬の衣きたるに古の玉かづらか
さ人のたはぶれしに
黄色なは佛とおほせ女郎花

東海茂左衛門　正頼

まがれるやかまやり梅の花のさき
春毎の開帳なれや普賢象
山のこしや帯紐をとく花の雨
あらよねとなるや小米の花の雨
散花に雨はよはみの靈氣哉
出合ほど立よ聲山郭公
なけやなけあめやさめたれ郭公
花の紐とく石竹やいしの帶
一よ／＼せ竹ものぶる子共哉
文月は類筆おほし水の面
誰もかもいつきかしづくや餅月よ
月も木に成とみえけり露の玉
老と成ははじめか月を見あげしは
花いけにいるや身なけし女良花
色葉をやいざる子共はにじりかき
ふりまじる霰みぞれや合酒
枝も葉も何もかもなし雪の花
水もたまらぬ古井戸の内
傳はりし茶碗の底はひゞわれて
なすびに虫はつくとみえけり
くろみぬるおさあひの齒はうつろにて
次第にかたみふるく成たり

石に切地水火風の文字消て

長頭丸重陽に却老の哥を詠給ければ前栽の櫻にかへり花咲たりさてこそぶき給ける言下に　西武

歸り花や彌生めいたり菊の酒

長頭丸

小蝶の夢も千年の秋

月夜よし夜よしと鶴が舞出て

瀧野藤右衛門　正盛

なんりやうのうらみは餘ふかくして

又むらさきの上に別るゝ

佛につげよ道心の程

六原の便りもとむる祇王祇女

物まねをしてや酒盛めさるらん

あふむの鳥を臺にすへけり

ふしをもとめて何うらむらん

錢銀をくれ竹ならばなびかまし

川北平左衛門　吉次

蜘の家やかけ作りする川柳

猫の子のざるゝ小蝶や鼠舞

飛かゝる小蝶や蜘の家のもん

日の本の花のあるじかいせ櫻

かきくもりすかひてみるや文月よ

秋の野の錦の嚢や丸づくし

下戸上戸めすや餅雪霰酒

よぶもはづかしけふの客人

幾度もさられむすめの聟ひろめ

入道のもつ小刀やほそからん

佛師をしてやいく世へまむし

奥田作右衛門　清政

蓑虫の花笠きるや梅の枝

雪消て咲紅梅や色なをし

引つゝむ霞や梅の笠ぶくろ

菩提もと植木か春の梅ほうし

木に竹をつげるためしか藪椿

吉村六兵衛　元風

鑓梅は闇も月夜の香ひ哉

匂ひをば鑰鑓梅のはなみ哉

池に田に又野にすまふかはづ哉

伊奘諾やいざなみ居みん伊勢櫻

詠てやゑびす顔する櫻鯛

優曇花や海中にしも櫻鯛

春の風のきるをはらはぬ木立哉

春風や吹はな笛のかばざくら

春の野の鳥は食する蜘蛛かな

吉野葛の根は山ぞ花の風

あくならで色をみてさせ花の枝
九重や實一八の花ざかり
松ならで十八やきみのさゝげ物
見事やとかえ手をうつの山路哉
猿猴が移月とる水ひしやく
千はやぶる雪にきてよきかみこ哉
よる〳〵淀に月みをやせん
山城の美豆野の里に芋ほりて

中井次兵衛　正直

讃哥の品もをうなか尼蛙
永雨に花の口もや大あくび
疵や有と毛を吹風か犬櫻
海棠を眠藏にする小蝶哉
雲や引木青葉は新茶茶磨山
口たゝく水鷄やいづれあまのさこ
撫子のまもりのすゞか露の玉
稻妻に出すやいとまの文月夜
山の口に入文月やふくみ狀
川柳散や蛙のいくさぶね
秋風や遊行柳の御かみそり
弓張の月にや雲はやぶれ的
雲の手は弓張月のゆかけ哉
楊弓か雀の森の三ケの月

猩ゝの菊には蝶やさかな舞
雲の足は百足か月の鞍馬山
三ケ月のたはみ給ふや勢至腰
白露はをのが玉子か鷄頭華
秋風よさゝらにするな石の竹
紅葉する阿彌陀が峯や光明朱
軒口も楊枝くはゆるつらゝ哉

高瀬太郎兵衛　梅盛

朧月はながるゝ年の光かな
　我身世に唯をちぶるゝ也
花の色はうつるいたづらくるひにて
　業種はいかい
　行幸の近づくは胸のしやくせきし
をぐら山部の道はくし仁
　むまをかしこにつなぎ大わう
れいしつゝ通るは神の宮の前
　うばひ取山の紅葉ゝおり捨て
酔たが上に酒のかんせう
　たゞ大海の底はみえぬる
引た茶を指すくひ出す茶入にて
　今日からかぶきいざやいたさん
をそなはる門の普請に取付て
木枕を波枕ともおもひなせ

みなと紙にてはれるねどころ
姫路三郎兵衛　自治
富士山はいつもしらふの高根哉
栢原道喜
見も聞もせず物もいはれず
あしがなへおとがいまでも引かぶり
藤崎小左衛門　屋次
なかで名や只とる山の郭公
久保田太郎兵衛　太勝
つき分の椿の花やにほん一
川野忠四郎　之成
一籠をうるやたかねのうぐひすな
湖屋彦左衛門　貞順
ふるやねを風のへぎ行しぐれ哉
宮川三郎右衛門　長之
石竹にとまる蛍やいし灯籠
樋之口九兵衛　正貞
八月十五夜雨のふりければ
雨や今宵まんずる月のはなはちき
村山治右衛門　重俊
父なふてはゝあるいもの子共哉
鷹島居治左衛門　親孝
笠松のしめをかしたの糸すゝき
伊藤太左衛門　貞玄
うらみてこぼす泪はら〳〵
腰張の反古はたきが筆の跡
重好
おい〳〵といふ聲ばかりきく
たねじやもの二子を夢によろこびて
山崎五郎兵衛　友重
えしらぬを六七度まで願の鐘
四十二にてやはぢをかくらん
下村喜太良　正杜
ころひぞかゝる十四夜の月
左義長の火花をちらす朝嵐
小木彦左衛門　重信
たどうはなりの物すごきつら
暮かゝる鐘つき堂の鬼がはら
高橋庄三郎　一利
おもはぬ人のけふの祝言
鳥の子のとをつゝとをに樽をへて
高瀬彌三右衛門　正代
ふらり〳〵とねぶる永日
きんちやくのもんに胡蝶をぬひ付て
岡村五良太夫　義樹
夕だちのきれ〴〵たまらぬ堤哉

夕立をふり納るや箱根やま　尼ケ七左衛門　長政

火の上でとけぬはかまのあられ哉　勸(觀)世彦右衛門　宗拶
をこらねばいろりのふちや鞍馬炭

亡父が知己なればむかしの戀しさにふと思出て入侍る

けふからや入かんなべのみぞれ酒　勸世庄右衛門　重俊
ぜうになるや雪より白し炭かしら

卯の歳の元日に宋吉道節發句に

當年は木鶯をのくる柳哉　ケ庵　言當
只二つそふ鳥のさへづり　末吉增重息　道節
春立といふや晉(普)天のしたのさき
若水をくみ入る桶の和國哉
若ゑびす鯛のうろこやふくの神

牛の年うしの元日

年と日のうしは車のわだち哉
數の子は皆年つよか今朝の春
年玉に夏をもてくる扇哉
夜の雨やきのふの冬と二年ぶり

増水をくふはしたかのすゞな哉

なの字七つ入て　廻文

菜かなづなひくを猶くひ薺哉
鶯の初音は經の序品かな
春の山のかしらの雪はじそり哉
しなだるゝ柳はほそき目もと哉
髪は柳まりは坊主のあたま哉
木の目までみえぬは谷のそこひ哉
こまかにも出るさんせうのこのめ哉
西の宮の神木なれや櫻鯛

本國寺へ糸櫻見にまかりて

誰もめうと來るや蓮の糸櫻
花に風ふかぬは吉野しづか哉
散つくすおはりまでみん伊勢櫻
犬ならで人もかぎ茶やたかのつめ

や文字一つにて　廻文

長座敷今朝過す酒屋雉子肴
夜なける蛙は哥をねごと哉
野邊にふす牛は筆褐かつく〳〵し
猫よりも鼠をつなげ廿日草
しやくやくにいむは鐵氣か花の風
卯花になくやしら聲時鳥
雨耳に一聲は入れほとゝぎす

三公にかへじ一聲郭公
あたごにて聞やとびなき時鳥
田の中の土をうごかす早苗哉
生れ性のよきはま竹の子共哉
鬼の目の涙かゆりの花の露
あみならで肴に鮎やひきだすし
ふたまたの竹は螢の火ばし哉
春日山の蟬の衣やならさらし
質にをかぬ屛風も扇ながし哉
朝霧のふかき歌かなほの〴〵と
おもひ出てなくや先目の玉まつり
きつければむねもおどるやたばこ盆
露は葛の下葉にてくうだんこ哉
丸き月はひんがし山のかぶら哉
夜晝のわちがいと成月日かな
月のかほの色のわろいやしよくたたり
相撲取たのみやかくる力かみ
まけはせで紅葉かつちるうるし哉
在郷のまはりの木ゝや村紅葉
詠いりし日やたけとりの翁草
ほり出すに人や水さしのいもがしら
鈴鴨やあはせぬ先もたかの鳥
日の目みぬ深谷は氷座頭哉

田子の浦のやきしほなれや富士の雪
雪ふりいあゐがさなれや富士の山
あは雪やつみてきびしくひえの山
年の内に出るや古今のくはんとう花

田中五郎右衛門　滿

陽春の詩の韻ふむや東文字

千村彦左衛門　重樹

卯の花の垣も鎧か節縫目
あたらしうする世々の物數寄
あを〳〵と青やしいやをふきかへて
日々にそくふは源氏成けり
なれぬればあかかり足も花の縁
やゝひえ渡り痛やり疵
秋風やおとがいよりも引ぬらん
大江山いく野の里の骨なます
蓼穂をばさむあまのはしだて
籠に添つゝをく料紙箱
狩人や靈昭女にも馴ぬらん
難波のうらみいはでほうこう
塩汲や述懷こゝろみだれかみ
つかさめしをやまいるはしはみ
さま〴〵に數のもゝ鳴料理して
星のひかりにかゝむ盜人

武藏野やみちくるものゝ甲着て
三界よりも廣きつき切れ
四つ五つひとつに入る笠ふくろ
鬼一口よひざさらのはた
大江山いく野の里の骨なます
とにもかくにも依怙をゆふ人
なら坂や通る筆屋の非公事して
仕置與一とゆふあさり殿
因端もゆたかもかりの甲斐源氏
禪僧かそもけだ物かそも
本來はいかにも古き狸皮

中村　宗玄

春過て夏きにけりなすゞめの子
埋火にあたるやゆふのまとゐ哉
むめてたもれの伏見屋の水
あぶなきは小幡あたりの井のもとに

可理

二千里のほか井に入る望月夜
雪の中のばせをではなし初時雨

中村喜兵衛　實信

火花ちらす宇治の螢や宮いくさ

中井清次郎　道保

廻文
もとのなはかわりけり我はなのとも
しりの火でゐどころみする螢哉
氏なふて乘小車や花の露
わくら葉はしらけの中の紅葉哉
だんごよりまさるといふや萩の花

寺田傳右衛門　好宜

こしやねに菖蒲刀やさしもぐさ
よあひのびん仙家の竹の子共哉
山のいもおひて二度ぬかこ哉

加世井市之亟　屋信

つかはるゝ扇や夏の一季をり
月城に籠る人數かほしかぶと

和田多兵衛　宗達

年越て後春立ける日
佐保姫のふた子の兄かけふの春
隱ゝ彌戀慕の章
ふところに女のひほや結ぶらん
盲祭ニ杖與ヘ袋
のゝ字をもしらぬは高野ひじりにて

須賀勝左衛門　幸親

梢をばうつぶきてみる柳かな
日本も唐もこがねはたからにて

詩や哥かけるしきしてい引
　おもたくあるかもつたんは布
大なるつぼの袋やぬいぬらん
　とゞろ〳〵とをどるあかつき
なる神のまねして太こ打けらし
　　　　　　　　　　小川道印
隣つから隱居若代の壁ゐてゝ
　親もほろ〳〵子までほろ〳〵
　　　　　　　日賀田次郎左衛門　守成
天原くだすふる酒みぞれかな
眉迄や一夜白髪山の雪
　　　　　　　　熊木猪兵衛　惟平
雪のうへの雨や春くるふれながし
　今日も振舞明日も振舞
月の比旅立人の天氣みて
　いつもより殘りし雪の多くして
たけはどのよき小袖きる也
　塩の指引大事とぞ見る
振舞や料理の加減めさるらん
　長のかつらをもてるおちやなひ
桶ゆいはふだんこがしやのみぬらん
　城の用心是もとはり
打まわすくろの碁せいはよはくして
　しどろもどろに成辻かため
下手にしもいはするかみの氣にあはず
こがなしといへど紫る木ずゑ哉
　　　　　　　　逢田瀨兵衛　友勝
大地からかつぎ上るや霜ばしら
　　　　　　　　正行寺　正長
　あしくするけぬきやいとど狂ふらん
ころしかねたる庭鳥はなに
　　　　　　　　中嶋内藏亟　貞義
正月やめでたいをつる惠美子棚
きえずには有がたひかな雪佛
孝行と名に橘のみやけかな
草の葉の露や螢のひとり玉
月影にふる夕立は夜うちかな
水にさえたべ醉たるか千鳥足
たら〳〵と朽木によだれたるひ哉
風の手やをしもむ珠數の玉霰
日本もや雪のあしたは唐の土
一ゐんの池のこほりや大かゞみ
樋の口のこほりや銀の竹ながし
ふりくだる霰はしやりか雪佛
二日ふるかたびら雪やひとかさね
茶の花の紐をほどくや風ふくろ

　そのごくなくものぞいりぬる
くれがたき夏の日くらし長病
　見ぞ口にはく姫のかすはけ
ふきあそぶもゝほうづきやにがからん
　誰か此世にわづらひのなき
朝露はきえのこりても有馬の湯
　六條にたゞあき風ぞふく
露ほどもなまひのたうふ買もせで
なが〳〵しくも鶴のなけ首
ひようたんは風にふら〳〵なりさがり
　身もちもむさき大原の人
たや口かすとまればやがて子と成て
　うらみは海のそこらんそきみ
すゞり水かするまで書くどき文
　うしろめたなき僧のかんるい
あちらむくしゝこま犬にふしんして
　ふまれてなりと美女の御みあし
戀路にはえんの下にもかくれゐて
　世上にはさらぬわかれのなくも哉
いちことといのる人のよめいり
　むさし野をみてきもつぶす也
下戸の前へ大さかづきや出すらん
君のおまへのあしきしほあひ

つまるこそ土へんの文字の一字なれ
　笑やかしこで尻つめるなり
たが桶のもりをとゞむるかづらゆひ
　小尻とかめのせんさくぞする
おさあいにあてるむつきをぬすまれて
　雲の上なるさうださはがし
國のたゞみだれに出るはふきほし
　神のをしきをいたゞきにける
うがゐして顔も手足もあらいよね
　あなかしこくもとなる分別
ありは腰に糸つきながらはい出て
　おもひ長門にをこるものゝけ
かざり立いのるはごまのだんの浦
　此芍藥をなにゝかはせん
火の中へくばりし定木とり上て
　これは道理よあれは日の岡
所司代や公事人共に粟田口
　打わるふねの數もしられず
かうのものに青うり白うり買集め
さけの春日の町やにぎあふ
　からき命をたすかりぞする
山桝のめしとられしもいひわけて
　むくふ牛王のばちはたちまち

こうせんの小便なめしうき思ひ
　もろこしの舟の吟味もゆるくして
しほ水かゝる刀わきざし
　人ゝやわが身の上をそしるらん
ひたものはなをひる刀かぢ
　くろ髪にあぶらをつくる夕まぐれ
反古のしそく火をともすなり
　曲がりの遊路はこゝろおもしろや
さかもりひさをうたふ一曲
　はしたなく爰かしこよりいひ立て
あつまりつもる貫のぜになは
　人しれぬ我かよひ路に番すへて
よひ／＼ごに打も碁將棊
　むねはきや／＼ひえの山かげ
たび人や波のなんぎに近江舟
　塚のまへをばそろ／＼とをる
太刀かたなふまぬ様にと用捨して
　妻にはなるゝ事ぞうたてき
きるものもねあたゝまればおきかねて
　まづとらまへてあたま幡摩(播磨)路
わり事をしかまのかちの子共ども
　ふるきゑぼしのあたらしく成
わらべ名を今日此ごろやかへぬらん
　うれしひもかなしひ時もなきくらし
まさる知行は打じにのあと
　わかれをしらぬ相ぼれの床
いつまでもだき付てゐる姥おうぢ
　障子ほねはなれ／＼にくちくさり
佐藤が死がひみるつかのまへ
　たつとかりし出家も籠に入ぬらん
犬とかのをの寺のあくきやう
　福のいり来る事ぞうれしき
よくほるはめん／＼たてのこい茶にし
　小松ながらもふぐりさげけり
重盛はおとこめひたる氣分にて
　すきくはの柄も長きよびこゑ
船頭は農人にてやありつらん
　堤をひたすなみはたぶ／＼
小袋をあらふたらゐの水多み
　四條五條にほこりこそたて
ばたくさとすきや疊の面がへ
　輿をもよほす人の口まね
見物もおほきあふむのはなし飼
　たび／＼に下る遊士の身にしみて
百性や秋はらをわづらふ

養泉寺　守榮

門前に市なすものや藤のたな
蘆を取露や琥珀の玉箒
朝顔も土より出し日みずかな
草つとに月もかたむく夜露哉
山しろに似ぬ黒谷や雪とすみ

大槻久左衞門　爲氏

いたとりの折たをみればすたち哉

よき團にあしき繪の有をみて

あかへたの月ぞまろゐのかき團

中江茂兵衞　正盛

いもの子のうぶやしなひか望月夜

長井四郎左衞門　正宣

風呂の炭はだかちやはんや置合
春はけふ御太刀にそふや午の年
かうのたきのながれもたぎる茶湯哉
雪やけかやいとかけぶるふじの山
雪おれは政道ならぬさくら哉

改明

琴よりも先引はふり袖
花の比愛岩(宕)へ参るつくし者
しのんで出るならの町なみ
泪ながら月を見笠の緒をしめて
打まはす幕は見なれぬ紋なれや

先もとほめて舌をまきがり
狩場でとぎやくあら恥かしや
悲しきは片野のはらの虫氣にて
ひつそりとなりをしづむるだんのうら
月見に着やしまのをりもの
我身ひとつはをすにをされず
月やあらぬはれやむかしの水へのこ
はげしかれとやほゆる聲〴〵
うかりける人を初瀨の山の犬
今日九重に正躰もなし
いにしへの奈良諸白に給醉て
夢もさめけり興もさめけり
駿河なる宇津の山犬ほへ出て
躍催す志賀のから崎
佐ゝ波やひらの山猿あつまりて
仕付の作法無理にをしゆる
山猿をとらへ置つゝ打たゝき
小哥ぶしにも中念佛
尺八のみじかきよをば打捨て

重利

鶯の跡とりの子かほとゝぎす
暑き時分の能はおかしし
早苗とる小田の腹筋切もくさ

車やはいつか桶やに成替り
海老をばうらで鮓や賣らん
春は泪であかす中將
あばらやに月やあらぬとたふれふし
短命の人をしば〳〵忘かね
右近めしつゝ恨語れり
論語讀ずも齡ひ六十
經をのみ專にする高野山
古郷忘れぬ木曾の出陳(陣)
麻衣に赤地の錦重着て
類ひあらじとおもふ瓢簞
短命の人をしば〳〵忘かね
名乘もあへずせきむせてけり
朝倉や木の丸山桝からふして

岡村又藏 氏次

小車の露や見まはるまなこ玉
盃になりうてやふりうな皷鉢

岸田孫左衛門 重利

けつまつけふむははなけの野原哉
植ば花おほくつけかし餅つゝじ
梅の雨に待とすひせよ時鳥

富森七左衛門 政屋

賽盛がぜうに成たる炭がしら
花の下へよきかんきくの酒もがな

淨見寺 御知

あけて又春は朔日しやうじかな
ころもきてはつとひらくや梅ほうし
飛梅や自在天より北野どの
水にもまれやせたかほねと川柳

さゝげと烏瓜と同じ垣根にはえたるをみて

あらそひをするやさゝげとからす瓜 之重

芳節といふ人將碁をすきてよひの年より元日迄さしけるをみて

春も象戯させいほうせつ丑の年

三月の比の雪のふりければ

春の雪や遠山みするはな眞壺
石佛やうらくさぐるつらゝ哉
あかくこそなれ四方八方
火をとほすきりこの灯籠張立て

仁喜久右衛門 盛能

名殘はくれにまた有といふ
何として連哥のはかのゆかざらん
あだめくは三十迄をかぎりにて
一字たらずによむやまと哥

大和田又三良 氏滿

鶯も尺八ふくか谷わたり
ねぶれ草木の薬子の今朝の雨　西武

山本九郎左衛門

元日未の日なれば
年越の夢も王たりひつじの日
ついたちやもろこし迄も指春日
鶯の哥や書そめ鳥のあと
めうとかや芋のか見んと年男
かい餅か明てみたれば酉の年
石な子のそだちやいはほ千代の春
門松の二木やみぞのはしがゝり
だいにのせをくる七種の若な哉

正月八日の立春に
さを姫は貴妃かやうかの春がすみ
左義長のもえ立時はわらびかな
目をだすな柊の下の鬼あざみ
初聲や連歌の發句百千鳥
佛の座すへんとやねや蕗のたう
仙人やてうあひこうじて天蛙
ふちかたや河瀬におろす米柳
枝たれよ五柳せんぢやうの箱柳
さほ姫のかく戀草や土の筆
我とほをなづるわらびの手くせ哉
さわらべの手ならひ筆かつくぐし
火櫻やこのむ木さきのわらひがほ
兒櫻ならぶや文殊ふげんざう
東山これも御物かさくら花
床にさす花やたゝ見の糸櫻
もらひてのあとやあけすけほけの花

三月三日
けふひらけもゝとせの姥柳樽

三月閏年に
二有は貲もひとての彌生哉
春や弓知恵の彌生の蓬餅
中人がなるはやよひのほどもなし
まつかいに咲は花火のつゝじ哉
春駒にあせびは諸悪まくさ哉
たかの爪のあを菜をえるや雉子のはね
藤つるもまひてあそぶや松の枝
商か梛へはあがりさがりふぢ
何をけふへんてつもなき衣がへ
鳳凰が聲は堯なり郭公
郭公口のでとなくは朝音かな

人のてつばうにて打たる時鳥をみて
一聲やまつごの一句郭公

かほよ花ちればはなかけつばた哉
螢火はわがるゝどころのおかしかな
消てなるや夜るの螢火晝のはい

遠州の内ニさまりて

火をするや螢の中も不和の鬪
甲のほり立るやたんこ越の武者
五月雨や早苗のはらむこめの親
若竹の連哥や八句七句さり
若竹の心かけ樋や軒のつま
影いづれ一寸法師夏の月
燒筆やほくして下繪栗かの子
石竹のつほみといふや玉かしは
撫子のちりげはあつき日かげかな
花やいしやう碁を打せみの石の竹
何宗ぞから衣きたせみの經
百もかけはんぢよが桃を扇の繪
花ならで實の桃もるやひざのさら
さやなりのする家も立る蚊やり哉
身からでたさびか夕立のにごり水
つるやわなからす瓜にも尻くゝり
葉はちれどこぬ鳳凰や御見かぎり

七月閏年ニ

二あるや雨門跡の御文月
七せきをあけてもどすな鳥の聲
舟歌もかぢのはにかけ天の川
朝がほやいろも心もあさはなだ
ぶり〳〵や昨日のやうで玉まつり
麻からはつえか目くらの玉祭
送り火や山のあたまのぼんのくぼ

八朔

ついたちをけふは白露の祝儀哉
せんひきかひようたんからの駒むかへ
名月はついたちからの中五哉
かゞ見にも芋名月のいもしかな
此烋やいも名月の芋がしら
もち月のくもるこんやゝかちん染

名月ニ雨ふれば

雨雲はこしきのいげか望月夜
月の笠帋にて張かうちくもり

丸屋にて

すみきつた月は光まん丸や
思ひ念のこらん月の廿日かな
肴とてすゞなりになれふとう酒
草蓮鶏が床のおりてかな
鹿をさして馬と云なり中將棊
味噌萩のならふは汁か女郎花

耳取てかむとやいはん菊の花
少将もかよはん花や百夜草
かべ下地いつかきそめの筆つ虫
いかづちで打はた雲の衣かな
くゝと栗くうは九月の九日哉

妙満寺成就院にて

日蓮の御光か月も十三夜
出てはれよまめ名月の雲のあし
かねもちのあたゝかさうにゐの子哉
花ならぬ紅葉もちれば千葉哉
なみうてば碁とや申さん濱千鳥
舟軍くがにやまくの千鳥足
鵲の橋くるなれや霜ばしら
さいまつやあすはたてみん川の松

西武書生にあつらへつく。他門の人の爲ならねば、あやまり有ともなじり給事なかれ。

鈴にふる物にはあらず鷹筑波
とり見ん人よそらしばしすな

犬よりも物しらぬ身のあつむれば
ゐたかつくばと人ぞいふべき

よき犬のさぐりにつけて取あつめ
かりに名づくるたかつくばかな

寛永十五年五月廿五日　長頭丸

みそとせあなたより丸に見せ合られしはいかい共をとりあつめみれば、今の人のくちにある作に似たるもあれど、かへりてこれが先なれば、等類とて捨がたし。部立をわかたば又年月を送らんと、鬮取に次第をさだむ。もとみし句どものみえぬもあれど、國ところをしらねばせんかたなし。身つかれ心ほれぬれば手づからもえゝらまず。

寛永十九初秋

二條寺町
野田彌兵衛開板

玉海集

七巻

貞室

のけにそりてあふぐに、いよ〳〵たかきやまとうたのをこりは、紀貫之が古今和歌集序に筆をふるひて、かきをきたれども其傳授をうけず、血脈をつがざるもの丶手に落べしや、中にも六義をたどすにいたりては、金言を丸のべにしたるかうがいの、むくさにわかれん事は、えあるまじきとなりとぞかける、おほいなる事をしるべし。其雜躰のひとつに誹諧哥あり。此体は有がなかに、心をうる事かたきものなりとぞ、京極黄門も書をき給へるとかや。何ぞたやすからん。和哥のしなかれこれわかれて連歌あり。又誹諧の連哥あり。上古のうた連哥は大むね誹諧に同じ。なんのわいだめかあらん。由來久しけれども誹諧は、たゞすけるもの丶くちさきらをもてあそびて、ひとへにたはぶれど丶おもへるにや。又、誹諧になまうみなるにや。大ねぶとのはれわざとして、をしたてつかふまつる事もなかりしに、近來世上にはやりて、京もゐなかも、上臈も下らうも、春の花のあした、秋のゆふべの月あひにも、誹諧をえせざればふるだ丶みのへりまくれして、座敷のちりをひねるばかりにぞなれりける。かく世人のいぎたなかりし眠をさまさせて、誹諧のみちにふたゝび喚起したるは誰ぞや。其根ざしは松永氏、逍遊軒貞徳翁と云人あり。元龜二年辛未に生る。華洛に跡をとゞむる事久しく、市に隱たるの逸士也。もろ〳〵の藝苑にあそび、あるひはうみがきのもとのさねをひろひ、或は山邊のいか栗をむきて、いはほの床の苔むしろ、しき嶋のみちに名ある事、世に其隱なければ爰にしるさず。風月の才にとめるのあまり、誹諧の連哥にふけり、滑稽のことをこのめり。うたといひ誹諧といひ、貞徳の門にいるもの其かずをしらず。翁、平生の著述すくなからず、今又爰かしこより雌黄のくちもらひたる發句の秀逸を、えらびあつめて長く世につたへんとす。名づけて崑山集・玉海集といふ。崑山を前集とし、玉海を後集とせり。前集は既、慶安四年仲秋に其功成ぬ。後集は難波えのもくづにまぶれたる誹諧のたま、ひろひあつめむとするなかば、俄に病にかゝりて承應二年癸巳十一月中の五日、いまだそなはらずして終りをとれり。其齢のたかき事は、始

終の年月にしるといへども、惜むべし誹諧の風灯一時にきえて、此みちのひかりをうしなへる事を。にが竹の世こそりてにが〳〵しくぞなげきあへる。陸平原が子、書つくりていまだならず、其終にのぞみて書のならざるうらみをのこせるに似たり。しかれども此集は其たぐひにはあらざるべし。門弟子に貞室生と云あり。幼少より學にこゝろざし、人となりて誹諧のみちをふみそめてより心をはげます事、大はだぬぎてかた時もうむ事なし。人はじめはおどろきてほむ。中比はねたみてわらふ。いよ〳〵心のたねをはかり出すに、ます〳〵かたくして石龜の功をほせり。發句を吐ては銀針を俗耳にひねり、文章を裁しては金篦凡眼のうはひをきる。和語のみならむや。誹諧徳式をあらはす。其文又奇也。師につかふる事廿六年、一事もその心にたがはず、陳后山が他の師にかへず、曾南豐がために、妾薄命の言葉をあらはせるにもまされり。師も又其こゝろざしをよみして、誹諧の家督をゆづれり。とも麹ょしき作者おほき中に、其楚をかれる第一の人となれり。師の遺言をうけて玉海集の撰をつぐ、仲長統が昌言を董襲撰次し、桓譚か新論を班固がなすに同じ。其流のうるほへる事、器の水をうつして絶ざるがごとく、師資のけぢめをみず。先にあつめられし發句付句九百八十、後にえらべる所すべて三千貳百余句、つるにそなはりて崑山・玉海の二集、春の夜の夢をさませる、とこの山おろちの首尾あひとゝのほりて、明暦二年丙申の孟春梓にちりばめて世にひろめむとす。又よろこばしからずや。室ははやくやつがれがにごり酒のうましのともがきなり。此集のなれるときに、是が序つくらん事をこふ。其よしみなきにしも非ず、誹諧にたづさはりて翁の扉をたゝきしも室がよすがなれば、かれ是につきてしたしみありといへども、さすが崑山の光を千尋のそこまでかゞやかせる玉海に、ちよかいなるこぶ柳のひぢをのべんも、なにとしやうがのはじかみ手をさへて、珊瑚珠にきずつけむもあやなけれど、辭するにいとまなくして、聊其心ざしをのぶるも、まとはのぶとき大やしまの浪しづかに、風おさまれるときにあへるをたのしむ此誹諧をもてあそばむ人は、左には文のあまりのちからをまし、右にはものゝふ

のたけき心をもなぐさむる言葉の種なすびともなれかしとぞ。

明暦二のとし、彌生の廿日あまり

ふたつの日

池田氏正式謹序

玉海集　巻第一

玉海集題目録

春部

春　郭公　永日　三月盡
雜　春

立春　是より先師合點

御せいしんの君に來てあふや千代の春　逍遥軒明心居士　貞徳
治れる氣や凛とたつ御代の春　和州郡山池田氏　正式
天の德も地の理にたつやけふの春　馬淵　宗畔
治るや貫きみのよき御代の春　敦賀犬井氏　重次

ある御方にて屠蘇を給りて

君か代やいはふ屠蘇白三ケ日　播州姫路武田氏　三吉
めてたくめてたかりけり三ケ日　正章子十歳　元次
かきそめの眞行草や三ケ日　攝州大坂上村氏　重員
かきそめや蒙恬筆の和合樂　清水喜三郎　政光
鶴の巣か門松にかくるかさり藁　有馬氏意安　壽白
門松は見るもめてたき丁固哉　攝州大坂井岡氏　喜之
姫松の門にうみ出すとし哉　正章子十三歳　元次
門にたつる松はこんはる大夫かな　秋田常福院　尊爲
門松やさなから對の花の春　寺町寂光寺　黍圓

舊冬十九日に立春侍ける年の元日に

鷄鼓こそいらさるとしの花の春　攝州大坂佐藤氏　榮甫
四方にたつや天地同根花の春　長崎野澤氏　玄茂
我も人もえみやふくめる花の春　攝州大坂井岡氏　行正
正くはつと口もひらくや花の春　播州姫路村山氏　風子
正月はたれももち丸長者かな　敦賀犬井氏　重次
いはふ餅は幸菱よけふのはる　薩州　快温
先もつてめてたき物は雜煮かな　攝州井尻住　玄孝
着ていはへ名に大ふくの茶の小袖　薩州鹿兒嶋　大山氏
めくり來るとしは大ふくの茶磨哉　京大佛青木氏　常址
かけ鯛のひれいはうるや若惠比須　津田治兵衛　友正
あけて今朝廿五絃のとしかな　秋葉八兵衛　利當
元日の朝につるゝや四方の春　政次
あらたまや光る源氏の御代の春　西田三郎左衛門　元知
あら玉や大黑の持如意寶珠　攝州大坂武野氏　俊興
去年の雪あらたまつたる今年哉　南都生嶋石見　行惠

雪ふりければ

ちはやふる雪は御幣か神の春　京五條辻氏　喜春

播州へまかりし時福とまりといふ

所に越年して

かざり繩はりまの宿や福とまり　播州大坂伊勢村　之次
かざりわらはけに大もんのはかま哉　播州大坂山崎屋　友直

寺中の祝義に

寺かたやくりになふたるかざり繩　播州上牧　文索

子の年の元日に

佐保姫を待上﨟かよめかきみ　中川氏　吉雲
佐保姫や京わらんへの哥の母　加州大橋氏　可理
舟に乗つて來るやさほ姫浦の春　播州大坂　如貞
年德に鶯の音や太祝詞　京清水氏　言聽
年明ていねをあけけり秋津國　播州上牧　元寄

春たつ日

くみそめよ若水のとのみのいはひ　京木間氏　友信
わか水はくめとうかまぬ趣向かな　播州大坂秋葉氏　利當

春たつ日

百首にもけふや卷頭太郎月　京清水氏　言聽
藥子は惣領なれや太郎月　播州姫路　愛重
ふつきしてめてたいの卦のむ月哉　京福井氏　宗重
たまの年や寶の藏をひらき大豆　京寺町豊田氏　元重
年玉や四方にいたゝく日のおあし　紀州粉河住　無分

年もたちかへるいみつのあした哉　有馬氏意安　壽白
地福圓万歳樂ややとのはる　播州大坂　貞因

年頭に人のもとへ茶筅をつかはすとて

一ふしに千代の春ふる茶せんかな　作者不知
御成門は大名竹のかざりかな　有馬氏意安　壽白

立春 付若水 愚判

君か代は久しかれとのゝ弓初め　梶山吉左衛門　保友
酒も名にあふやひしりの御代の春　一守

神祇官にまふでゝ

神主も酌ていはふや屠蘇のしやけ　京油小路藤井氏　惠佐
にし肴いはふてくむや八重霞　秀朝

ふるさしに立春ありければ

去年今年けに諸白のかすみ哉　京苻類屋茂兵衛　政信
春來ると吉例に引霞かな　井上彦兵衛　利昌
あら玉は是も名しゆかはるかすみ　武州江戸住　正賀
あら玉は地福皆圓まんしゆかな　京七條茨木氏　宗興

玉津嶋のおほんかみに所願のとはへりて

拜め德あら玉津嶋神のはる　紀州和哥山日方氏　貞長

神の春や心に叶ふ諸くはん日　勢州桑名住　良利

ひらき初る暦やきひつ神の春　攝州大坂住　好道

かさりな蓑のことくしたるをみて

歳徳も腰蓑めすかかさりはら　攝州大坂井岡氏母　榮春

十五歳になり侍るとし

七五三やかさりはらはかとしの春　播州曾禰村菅原氏　貞繼

家のうち賑ふはかさり童部哉　惠佐

かさり藁も穂長やいはふあきの方　野崎氏　元易

つとよりもほたはらかさる年始哉　尾州　之也

春たつとよにしらするやかさり竹　紀州和哥山野村氏　玉心

世中はさゝていはふやかさり竹　正成

春をけふたくりよせけりかさり繩　攝州上牧之住　文索

年の緒とは是をいふへしかさり繩　播州姫路武田氏　三吉

としの緒やいく七廻り千代の春　熊野石倉氏　一入

めのわらはのをふきせしをみて

お歯黒の筆や試むる佐保姫御　土佐之住　燕石

書初といはんもはつかしい哥かな　攝州湯山住　重暦

四方に梅先歳旦の詩哥かな　攝州大坂平野や　永雪

から墨てけふしきしまに吉書哉　東六條下村氏　方角

年徳の神の牛王は吉書かな　播州姫路垣内氏　之富

雨ふりける年の元日に

年徳は身をうるほすや今朝の雨　泉州堺寺本氏　一守

わかやくといふは年徳のしるしかな　和州郡山都筑氏　直成

わかえひす移す料紙やふくのかみ　播州姫路　幾重

神代にはさそ御顔の若惠比須　京油小路岡村氏　吉次

神たいをあらはしつるや若惠比須　内田氏　平吉

白紙にうつすをいかに若ゑひす　川北平左衛門　吉次

春の日に色つやもよしあかゑひす　伊田長左衛門　可弁

よむや是哥のたいこくわか惠比須　備前石原氏　正成

大黒の開帳なれや藏ひらき　播州曾禰寺菅原氏　貞竹

熱田にて

日本第三ケ日いはへ神の春　尾州熱田小嶋氏　吉季

一は是二を生するや三ケ日　備前神林氏　貞次

はつ夢のよき哥占や三ケ日　京姉小路兒山氏　隈光

はきたつる破魔矢もみつの羽しめ哉　小松原梅要子　時明

としの矢はけふより祝ひ染羽哉　東六條伊藤氏　祐孝

身は馬上にきるは鎧のえ方かな　和州郡山梶氏　勝重

年玉はとれからきてもえ方哉　播州三木　可慶

とし玉は古風をあふく扇かな　徳憲
とし徳のかみもらいある試筆哉　山本善兵衛 善入
埋木も若やきたつや花の春　池田佐伯八兵衛妻
ぬくるなといはふはかためや老の春　和州郡山池田氏 正式
松竹のはかためするや門のくち　播州姫路村山氏 風子
門の松とし經たるこそめでたけれ　大澤清七八歳 生敬
門といふ字なりに似たりかさり松　岩井市良左衛門 常久
門松は先年よりの嘉例かな　玄毫
門松は陰陽二季のさかいかな　紀州熊野良任坊 如蕭
門松もかさゆるきせぬ朝かな　和州郡山池田氏 正式
名に立や是も山城の葛野の松　惠佐

元日に雨ふりければ

門松も大木となれ今朝の雨　荷類屋茂兵衛 政信

立春霞を

春はひかし空よりたつやうそ霞　葛野九郎兵衛 定之
しふ茶さへけふ立春の花香哉　和州郡山 定幸
大ふくの茶物かたりや老の春　勢州桑名味岡氏 俊治

江戸にて

大ふくをけふたてそむる江戸茶かな　四條園多田氏 正安
大ふくの茶堂せよかし梅法師　川北平左衛門 吉次
梅ほしや大ふくの茶のすき道具　京河口市左衛門 保成
祝へ春もたちはな柑子何や種　京平尾氏 幸以

王春といふ事を

三文字にたつ一天の春日かな　青地氏 可頼
よへは除夜天下日待そ今朝の春　小川 直興
春の日や天の戸明て御によろり　播州三木五百藏 茂下

元日立春なりし年

年と春とたつ天の戸やめしあはる　和州郡山池田氏 正式
天の戸や明て一枚御代のはせ　泉州堺之住 貞成
春はたち人はつくはふ禮者かな　播州大坂大平氏 伯貞
春はたち我はすはるやかゝみもち　紀州和歌山日方氏 貞長

午のとしにいたりて

むまの年にくふや轡のかゝみ餅　園枝惣左衛門 直旨
龍田山よはにこえたるむまの年　和州龍田之住 草栖
草も木もあをりとみるや午の年　京五條副田氏 光舟
来る午のとしをみこしる馬醫花哉　越前福井三階 竹雪
としはむまのつのれや春の賓物　星州石田氏 正興

午のとしの元日に

春の日やけふから年も午の顔　宮川三郎右衛門　長之

けふよりやよきによきある午の年　京野丶口氏　正壽

けふよろつよたれや流す丑の年　桑名之住　直慶

うしのとし立春おそかりければ

うしにかけてくるまや遲き花の春　因幡多田氏　正安

年徳の神や天神うしのとし　喜多氏　直能

くる春や東天光のとりのとし　紀州熊野覺了坊　圓惠

來る年のうの羽てやねや福の神　播州姫路垣内氏　交云

ひそみしも陽氣を得てや辰の年　和州郡山正式内庭　玄利

青龍か東から春もたつのとし　紀州和哥山日方氏　貞長

ひつしの年

未明よりぐるとしはけにも未かな　武州江戸源姓　吉言

庭訓も蓬萊も春のはしめ哉　京高橋氏　元信

山家立春に

山家にも若水をくむいは井かな　紀州和哥山日方氏　貞長

すみやかな若水くむや御代の春　攝州大坂早淵氏　定里

目出たきはすくろくな代のさいしよ哉　丹波氷上郡玉卷　重成

あくるよりしのゝ目出度としかな　濃州大田氏　吉久

あふた古年にまさるは懷た今年哉　加友

子なまふけけるあくる年

年ひとつませはまされることし哉　京姉小路兒山氏　光屋

初春に男子なまふけて彌太郎と名

つけてかしつきける人のもとにて

當座

あらたまのやうな子の名や太郎月　澤田氏　求友

春立日佐保姫と太郎月に女夫かな

と云あへるを聞て

佐保姫のせうとなるへし太郎月　尾州　有也

おさゝし生れしちこのうたひを一

聲うたふを聞て

みとり子も老松か根やうたひそめ　東六條上山氏　信光

うたひ初に聲をたてけり松はやし　江戸源姓高木氏　眞義

相しれる人ひかし殿といふ後達を

かたらひければ

年おとこつれたつ春やひかし殿　西田三郎左衛門　元知

しはすこしわかけにそ見えし年男　大河内　吉之

丙申のとしの元日に雪降ければ

雪に猶としそましらわひしらか　和州郡山池田氏　正式

鶯もことし志學の初音かな　正式子十五歳　玉親

元日に暦を見てよみ侍りて

開きみる暦は椎かかのえかな　丹波福知山横山氏　吉治

三方もてなしからやにし肴　荻野　安靜

え方さるとりの間にあたりけるとし

え方よりたつや猿とりの花の春　同

卯の年卯の元日に

稀な年や日もうとんけの花の春　季吟

屠蘇の酒はあら玉垂の小甌哉　同

あを山や今朝せいたいの春の色　貞室

御代長く守るや國つかみの春　同

てんなかくちひぬは筆の吉書哉　同

書初もまなやかすみの立すかた　同

拾穗庵季吟子誹諧の書をかきてみつからに題號をこはれしほとに山の井と名付てつかはし侍るに頓てその竟宴の會をもよほされける發句

山の井のあかもぬけたる試筆哉　同

鏡餅にそふるも内侍野老かな　同

むかへるやよね一御料のかゝ見餅　同

佐保姫もおりやらしめかさる宿の春　同

あらたまりあたゝまりたる春日哉　同

寅の年の元日卯日に當りける心を

年月日寅卯にたつはかれいかな　同

十二支の枝にやひらくとしの花　同

いにし年先師長頭麿より誹諧の道ゆつり葉の名をえしを人けなき身のかさり藁ともおもひなし侍る心を

接とめてけふそめいほくの花の春　同

毬打胡鬼板　先師點

ふりくもふりさけみるや玉の塵　京青地市良右衛門　可頼

はねつくははこいたひけな子共哉　攝州大坂久兵衛　滿永

愚判

はこならてはこ板やつく鳥の羽　河州植松住　忠政

はこ板の繪樣榮花やゝとの春　江州大津久住氏　季政

破魔弓の矢にはくるもや千鳥の羽　攝州大坂彦三郎　常知

氷樣付腹赤　愚判

民の徳やあつきに歸する氷樣　河州清水氏　春宵

あまのはらか鰤魼よりや鱒の魚　一充

腹赤ならて威光もますや御代の春　奥田治兵衛 政之

子日 先師點

春は野に人〻子日のあそひかな　牛田長右衛門 光行

愚判 姫松や是も子日のあそひもの　貞因

松ならて灯心もひく子日かな　尾州伊藤氏 一和

四日に子日ありし心を

正月の子のこもみつか一日かな　正如

脇おれし子日の哥やいさり松　季吟

空はれて錢もほすへき子日哉　貞室

盛阿彌といふ人子をまふけたる祝ひの會に

風やゆふるねゝこ子日の姫小松　同

うはなりか若菜もたゝく手すりこき　荷類屋茂兵衛 政信

若菜 付芹 併座 先師點

ゑくなつむあたりやこその芋畠　和州郡山池田氏 正式

敷津高津難波てつむやみつは芹　播州大坂伊勢村 之次

ふり袖にすゝ菜もつむや三番三　正章子十二歳 元次

雪汁の中にみゆるは若菜かな　丹波福知山一井氏 重治

來る春をまつしるのみや鶯菜　武州江戸 玄砂

籠なるや竹に生るゝうくひすな　紀州粉川 無分

摘とりて手にすへあくるたかな哉　和州郡山都筑氏 云成

獨菜をたつねてやみん佛の坐　播州姫路三木 知重

王生は地藏しゆしやかにもつめ佛坐　寂光寺 泰圓

佛の坐露や氷りて立すくみ　作者不知

ほとほり氣さすや日影の佛の坐　貞典

愚判 置露や氷れる淚うくひす菜　播州大坂梶山氏 保友

綿のやうな雪消てつむ若菜哉　勢州桑名住 良利

本分の田地にあるや佛の坐　播州餝磨脇氏 清長

ゆつるをとゝしやり〳〵といふ佛の坐　播州大坂井岡氏 喜之

木鐘かきりいたたゝく佛の坐　江州大津高橋氏 正信

佛の座さいしく筆やつく〳〵し　江州大津中村氏 重連

佛の坐生する野邊や嵐毘園　土佐住 燕石

佛の坐摘手も十のれんけかな　五余部半左衛門 勝房

つむ指や彌陀の印形ほとけの坐　播州大坂福嶋氏 得和

野の霜はやくおしろいか佛の坐　惠佐

追善に

道廣き野は極樂や佛の坐　横田 重次

悲母の遠忌に

葉は花の臺にのほれ佛の坐　貞室

こもよみこ餅煮んとつむ若菜哉　同

調せしや若菜のおみゝかんの君　同

七種をはやし初てや七ひやうし　同

七種の數にとりはやせうくひすな　同

隣つからたゝきあひたる若な哉　同

地の底の雪引出すねせりかな　同

懸想文　先師點

けさう文うるおとこの色〻のことを
いふをきゝて

けさう文うるや辯舌太郎月　播州姫路武田氏　三吉

左義長　付亦粥　先師點　具判

左義長の空にもほこら霞かな　京平尾氏　幸以

幾春もあかぬかゆいはふ節會哉　宮川三郎右衛門　長之

踏哥節會

十六日の夜雪降ければ

雪や此よおとこたうかのかつけ綿　中嶋内藏亟　貞室

具足餅

うは帶か具足の餅の注連かざり　播州大坂大佛師　貞晨

霞　先師點

梅の木に衣きせたるかすみかな　丹波福知山山田氏　壽淸

朱引とやいはんかすみの中の虹　利之

雲の上に裾を引やうな霞哉　具判　播州大坂佐藤氏　惠佐

庭前へ山引よするかすみかな　荷類屋茂兵衛　榮甫

山も今朝ほう〳〵眉かうすかすみ　政信

八瀨山は餓鬼引するや春かすみ　德窓

たてまはす戸隱山のかすみかな　可全

あれは花の香とりの衣かうすかすみ　但州生野中嶋氏　安永

薄霞のしめか山のこしかはり　濃州　塵哉

もゝ引かかすみのかゝる雲のあし　尾州　有也

風さそふ霞の衣やうはたるみ　南都住　保好

南都一見の時

大佛に斗帳をかくるかすみかな　播州湯山之住　三章

唐網かもろこしか原の朝かすみ　備州安倉氏　章輔

雨の日の霞や酒のくろつくり　貞室

紀州神藏山にてかすみのはれまよ
り南海のほとりなきをみて

日ほんのみなみはらしつ春かすみ　同

鶯　先師點

貴布禰にて鳴鶯や旋頭哥　播州姫路相野氏　安友

餅梅に飛うくひすやきなこ鳥　京大佛川橋氏　息女

雨後のうくひすを

鶯の聲やなかめのはれの哥　江戸住阿形氏　祖秀

竹に生れ鳴うくひすや笙の笛　江州草津住　重道

飛梅かあをち風まて匂ひとり　京西田三郎左衛門　元知

はたかなる人さへあるを金衣鳥　同

金衣朝暮御經の聲や高間寺　薩州鹿兒嶋大坂氏 重政
うくひすは如々の境智のさとり哉　寺町寂光寺 泰圓
うくひすも衣やはる日のりのこゑ　越後柏崎之住 杣都
ひなひぬやうくひすのよむ哥のさま　徳窓

鶯 異判

鶯や妙を得てよむ哥のさま　同
うくひすの哥はたけあるはやし哉　阿州撫養有田氏 正吉
うくひすの囀るそのや哥林苑　播州姫路若田氏 春宵
梅の宮になくうくひすや神樂哥　播州姫路 吉長
梅ちりてうくひすかこや花かたみ　京大宮鈴木氏 幾重
うくひすかなけは笑ふや花のかほ　尾州 氏長
やりむめにつくはかなくか金衣鳥　濃州竹ヶ鼻大田氏 有也
軒に飛やへん〳〵たる木金衣鳥　備中吉岡氏 吉久
うくひすは梅の暦の博士かな　濃州山端氏 信元
よむ哥もかはつ鶯やとんた作　攝州大坂之住 塵哉
哥しきは鶯にかふすりゑかな　東海茂左衛門 常知
うくひすは奇妙なとりそはねと聲　沙門 正頼
うくひすの笛や藤内太郎月　靜山
うくひすや飛梅になかは筑紫琴　惠佐
うくひすの笛やひうやら日やうら〳〵　同
うくひすやさなからむめのみや雀　貞室

獨吟千句第一に
うくひすも三くはうの御代を初音哉　同

梅 先師點

ある人の所望にて疊字の誹諧獨吟に百句せし時
花匂ふ梅は無双のこすゑかな　宗祇法師
この花のさくや仁徳天わうし　攝州大坂住 貞因

父の遠忌追善に獨吟千句し侍し巻頭に
難波津の花や手向の哥の父　攝州大坂之住 友直
難波寺の手習子かや花の兒　京五條杉本氏 永定
みめのよき貞もつ花の小梅哉　攝州池田佐伯氏 正弘妻
花の香や鎌倉中をむめかゝつ　薩州鹿兒嶋 兼次
花の露や數年つもりて梅津河　京西田三郎左衛門 元知
咲花の先たちなれや梅の坊　同
火ともすは學んためか窓の梅　攝州大坂之住 壽清
梅散てすもとりをする花見哉　周防小川瀬兵衛 喜伯

山崎宗鑑法師の舊跡見にまかりけるに庭に梅の咲て侍りければ

すき物はきくをあやかれ梅の花　季吟
こやむかしすいこ天皇の綸旨梅　攝州大坂之住 如貞
綸旨梅さすもくはんある花瓶哉　播州姫路三木 泰圓
月〳〵に咲鐺梅のはなもかな　知重
鐺梅に手をつかれなよ春の風　攝州大坂片山氏 秋月
天神のうちまきなれやこほれ梅　丹波福知(山)一井氏 元重
北野の宮司万句とてすゝめければ
梅はほし人はたんたくる北野かな　和州郡山池田氏 正式
愚判 梅か香はひつたと匂ふはるへかな　前妙心寺大淵和尚 玄弘
春風やひきても匂ふ梅のはな　尾州名護屋 兼豫
愛するや人の人たるひとへむめ　紀州和哥山日方氏 貞長
とひ梅は心つくしのはなみかな　備州岡山松本氏 胤廊
花〳〵の元祖成へし梅法師　京平尾小兵衛 幸以
花もりや北野の社僧梅ほうし　河州植松ノ住 延之
北のかたは女子か南枝は花の兄　肥前國住 如白
聾もせて笑ふは瘂かはなの兄　紀州熊野林氏 良通
紅梅はまたしき程こそおかしけれ
さいふ人にむかひて
咲てあに興なからすやむめの花　勢州桑名伊藤氏 良利

野と山の花のあにきや腹かはり　知圓
鐺梅や釋迦牟尼佛の手向草　宜満
鐺ふすま作るやむめのはな軍　徳窓
つほむ間はこや袋鐺むめの花　尾州住 之也
文をこのむ木の母は是孟母かな　勢州南部氏 兼次
錦かとみるは蜀江はいくわかな　攝州大坂住 永享
紅梅のちるや仙家の庭のゆき　江州大津石田氏 元永
闇の夜は鼻を目となすや梅の花　播州木長寺 貞隆
仙洞の御庭を地下の人にも見せさせ給ひし時
北面の見侍ひけんまとのむめ　季吟
いさおしみ侍るわらへのもかさになやまされける比まさなおかし侍るさいふをいかなるとにやさきけは目のふたかりけるを母のむつかるなるへし
あけてみよ貞かゝりよき窓の梅　惠佐
母かたのあとやつき木の花の兄　同
若僧か花のかほよき梅ほうし　同

さくと散梅の暦や節かはり　同

軒にさく匂ひけたかや梅のはな　惠佐子十歳　久松

女院御所にさふらふめる人のもと
にて

さくころや天氣よろしき綸旨梅　貞室

藤原貞因山城大掾になりしよろこ
びの會に

春王の時えてさくや綸旨梅　同

軒口に蠟茶やふくむ梅の花　同

拾穗菴李吟子前栽にをなこ竹の陰
より梅の花のみえけるを

をなこ竹の陰の梅か香や不男傳　同

からすきといふ農具を花入にして
黄なる梅を入られし人のもとにて
當座

いけぬるは犂ほしかむめのはな　同

和漢のさえありし人のもとにて

こゝろふかし好文木のはなの窓　同

正月廿五日小野氏貞武の亭にて當
座

聖廟や弓鑓むめのまもり神　同

神垣の梅のにほひや護身香　同

鑓梅の枝や劍さきのあまつ星　同

聖廟七百五十年忌に

照ほしか梅さく陰の万燈會　同

梅のはなさかりに

かいてみよ何の香もなき梅の花　同

春氷　奥判

日の目にやかきけすやうにうす氷　攝州大坂住　如貞

風の手や氷のひまの水なふり　梅盛

冬ははる春又とくるこほりかな　攝州大坂五郎兵衛　未元

とけかぬる氷や春のひまつくし　惠佐

餘寒　先師點

鎌倉さゝめか谷にて

よかんしてのむやさゝめか八つ七つ　江戸阿形氏　祖秀

花もまた埋火をする餘寒かな　紀州粉川大伴氏　定義

奥判

年の明て寒しや風のかん袋　口斗

冴還り衣よつ五つむつきかな　幸田氏平三郎　正舍

さえかへるかいこをあたゝめ鳥哉　梅盛

初午　奥判

雪の降侍けるに

はつ午の雪や神馬の四手の紙　樋口長左衛門正信妾

佛別　先師點

藥袋かゝるやひゝりしやら双樹　播州姫路内山氏　一イ

二月十五日八尊の入に

けふ入はしや八せんとねはん哉　紀州粉川　守治

愚判

佛弟子もおきつ涅槃の歎哉　京住山本氏　善入

弟子達や釋迦无二無懣の御別　徳悳

愚癡なれと別れや歎くねはんとく　備州岡山小松原氏　時明

夢の世としらせん爲のねはん哉　泉州堺之住畑山氏　女利

色わろし御入めつきかかな佛　紀州和哥山日方氏　貞長

春雪　先師點

ふるけれととしは初そ春の雪　丹州福知山平出氏　直重

二月の雪とけておつるや衣川　攝州大坂之住　之次

山のこしや帶ひほとくる春の雪　清水政光母

雪や枝に殘る椿のあふら綿　播州姫路垣内氏　之富

春も雪をいたゝきやひえの山法師　西田三郎左衛門　元知

雪の山も鬼一口の春日かな　泉州堺之住　貢友

雪佛とかれたまふやのりの水　紀州粉河大伴氏　定義

愚判

富士山やたか殘し置雪の種　荷類屋茂兵衛　政信

結句是は雪やきをする日脚哉　那智山良任坊　如海

光陰の矢狹間あけたる雪ま哉　勢州南部氏　兼次

山ふみしける比雪のいまたのこりけれは

春道やなかれもあへぬ古年の雪　備州岡山松本氏　風庭

雪汁を煮るか朝日に水けふり　武州江戸住　秀長

雨てとく雪もや春の草くすり　和州郡山菅氏内　重澄

雨のあし雪けて流せまりこ河　三郎兵衛　正成

水となる間はとけしなし谷の雪　惠佐

軒の雪や盜人雨のとり殘し　貞室

春になりて必すあふへきこちさりし少年のさも侍らすさなけく人にかはりて

打とけぬ雪や深谷の底こゝろ　同

春雨　愚判

花の父母はけに春雨のうみこ哉　靑地氏　常可

春雨や四方の霞のしほり汁　可頼

春雨や花にこまかなこゝろつけ　安靜

春雨や花待人のこゝろしり　貞室

ため池は柳の糸のをこけ哉　攝州大坂井岡氏　常久

柳　先師點

駒つなく柳や馬頭くはんせおん　攝州大坂木村氏　重順

觀音の御つしになれや箱柳　羽州秋田常福院　尊爲

糸柳青〻せいしほきつかな　木村太郎衛門　重順
青柳のこたちやいはゝうす綠　大坂山城大掾　貞因
神木や是いちとのゝやなきかみ　播州大坂井岡氏　行正
なのか枝かうかいにさせ柳かみ　江州大津伊藤氏　三丸
柳かみのはねもとゆひか三日の月　季吟
柳かみにそへたき花の香もし哉　播州姬路武田氏　三吉
愚判 見よやみんいつも月夜に米柳　德窓
貧家にや植てなくさむ米柳　攝州大坂寺田氏　喬疾
ます物も是にはいかてこめやなぎ　勢州桑名住　方成
泥水の濁やすますたま柳　播州姬路垣内氏　之富
蚫柳といふやとはりりうのこゑ　江州大津福田氏　光纖

柳に札を付てゆくをみて

札つけて送るは遊行柳かな　播州姬路長濱氏　白笑
氣力なしやよるひるとなくふし柳　丹州佐治氏　正重
根ほれてや波のまくらにふし柳　□州赤坂内藤氏　賴香

參宮せし時櫛田川にて

青柳の髮はあけすや櫛田川　兒山三郎兵衛　環光
枝たれて風にやふらりかは柳　丹波福知山乾氏　政通
糸引や水のあやつり河柳　藤井吉□衛門　秀朝
風をとつて置いれ物か箱柳　□澤甚右衛門　茂
蔽陰の柳はたけのかもしかな　曾我氏　俊則
川すそをはくほとなかし柳かみ　泉州堺□礒氏　德窓
花瓶には立髮となる柳かな　越前福井山川氏　武
冬や坊主春や還俗柳かみ　無樂
雪の中ははくまとみるや柳かみ　惠佐
柳髮にそゝける露やきやうりせん　貞室
下風にましりあかりの柳かな　同

(ヵ)信の小路に家居して住ける人のもとにて

青柳は風伯神のさかきかな　同
松蘿綠 先師點 いさり松も春は立たるみとりかな　泉州堺之住　友重

目をやむ人のもとにて

木目 先師點 木の目まて四方を見春の氣色哉　泉州堺成就寺　玉缺
椿 先師點 花を雨やあらふて落るあか椿　播州三木氏　知重
見ても〳〵見あかぬやよく赤椿　膳所松平門彌　三守
見る人のしやうねもいるや玉椿　伊丹山村氏　盛定

沓冠に

つきをけは木に早咲の花見哉　泉州堺三宅氏　嘉雅

愚判 三かいに咲や眼裡のちり椿　徳窓

雨や灰汁あらふ椿のはな衣　同

庭の椿になくな聞て

鶯の經や染紙伊勢つはき　妙蓮本就院 知春

ひの袴きるや燒野の土筆　薩州鹿兒島 大山氏

土筆 先師點

名をはかくたかゆひそめし土の筆　丹州福知山山田氏 利之

はふこ草のうけ狀かくや土の筆　同

天筆と一對なれや土のふて　丹州福知山乾氏 政通

野あそひに出て

くるゝをもいさしらぬ日のつく〳〵し　播州大坂之住 休甫

愚判 墨ふくむ筆か燒野のつく〳〵し　丹波福知山横山氏 吉治

しなふるやしほたれはかまつく〳〵し　江州大津西村氏 吉勝

おほくつむ人は欲けやつく〳〵し　和州龍田之住 草栖

みしかきはくゝり袴かつく〳〵し　京之住 貞室

蕨 先師點

雨の手てかたみにつめるわらひかな　長崎野澤甚右衛門 三秋

わらひ手をとれるは脉の內野哉　播州姫路垣內氏 玄茂

姫山の蕨はしつか手かけかな　播州姫路脇氏 交云

折人の腰やゐひしやうかき蕨　清長

しらあへか岡邊の雪の下わらひ　泰圓

愚判 山をやくは蕨をはやす手たてかな　尾州之住 之也

おる人に手をさけさするわらひかな　播州三木氏 勝政

盜人といはまに手出すわらひかな　肥前國住 如自

春雨を灰汁にたれたるわらひ哉　播州大坂 恒貞

山姫の耳搔なれやかきわらひ　山本善兵衛 善入

早蕨や深谷の雪にふところ手　貞室

花

花遲かりし比田舍わたらひして雨中に

よしやふれ麥はあしくと花の雨

是は細河幽齋法印玄旨公の御作なり竹馬狂吟抄にあり

先師點 とけしなや春待かぬる花の紐　五條杉本長兵衛 永定

花は火をまたともさすやくらま山　播州池田佐伯氏 万春

ひをともす花吹けすな夜半の風　播州姫路武田氏 正次

凪そ笑止千万木のはなさかり　播州姫路垣內氏 三吉

春風はいやとて花の香ふり哉　播州書寫山 交云

花の良にうつり木ならぬ人もなし　五條高橋氏 葡典

花の良はつほみてのちやひらおもて　播州姫路垣內氏 元信

八潮の山は箸に日はなの盛かな　播州池田佐伯氏 交云

あの山や身さいはいある花のえん　正次

山の頭しらみわたれる花見哉　長崎野澤氏　茂
咲てより明くれなゐの花みかな　越後柏崎市川氏　一九
年中の詩氣は春の花見かな　攝州大坂住　貞因

舟岡山にて

人こそる舟岡山の花見かな　影山七郎左衛門　文明
千本の念佛は花見かてらかな　攝州大坂上村氏　重貞
馬とゝめみよ清水のはな車　淸水光政　母
戀〱て花の瀧にやのほり坂　播州姫路垣内氏　交云

犬上にて

いつも花いけてをけかし床の山　同

或寺の花見にまかりて

佛前や雨さへたゝく花のりん　竹村八左衛門　正重

はなに風鈴の付たりしを

ふけは花もちりりんとなる風鈴哉　大坂之住　如貞

一万句の時

花の種を蒔や一万くせんさい　攝州大坂佐藤氏　榮甫
花袋こやぬるてふのとのゐもの　予吟
藪きはの華ぬす人やたけ〱し　田村甚九郎　重晴

東山豐國にて

零落のはなは羽柴のたくひかな　蝠才
豐國の花は木の下の詠かな　有馬氏意安　高白
木たちあるゆへか花いくさやの山　播州姫路　幾重
藏王ませはよしのも花の都哉　播州姫路武田氏　三吉
たゝのふかおつるよしのゝ花いくさ　伊勢五郎兵衛　成吉

むかしの發句

散花をおつかけてゆくあらし哉

是は黄門定家卿の御作と申傳へ侍る

爲判

咲ぬまやいくせのおもひ花の波　京五條山田氏　正盛
さかぬまや目塞ひてみる去年の花　三忠
去年みたる花に二ねんを接木哉　永利
といつまひつ咲ぬうへいふや花の紐　京平尾氏　幸以
火をともす花をみるもやとろ〱め　大坂澁谷氏十三歳　長藏丸
つほむ花のかほやいたいけな木幡山　播州姫路　幾重
につこりとわらはへそもつ花の枝　紀州和哥山日方氏　貞長
ちこたちの花見も花のさかり哉　攝州大坂武井氏　守知
袖をつらね哥をつらぬる花見哉　加州　正種
つれ立ていくはなもゆく花見哉　攝州大坂甚太郎　貞正
おりき神や取つく四方の花見衆　春宵

十死てふ日も遠くゆく花見かな　同

火をともす花や萬燈はつせ寺　徳窓

花の時分誰も芳野や戀の山　攝州大坂之住 爲宣

みよしのゝ花入なれや御舟山　攝州大坂梶山氏 保友

かめにいけたる花のうつろへると
て侘あへるを聞て

しほるゝはいけてやころす床の花　攝州大坂城主馬 不存

徳利のきたるかめに花をさしたる
をみて

しんあれは花かめとなる徳利かな　紀州和哥山 淨近

無刀にてもきとる花の木立哉　東海氏 正頼

清水の花のこたちやせんしゆるん　京堀川木間氏 命清

笑の中の刀は花の木たちかな　泉州堺寺本氏 一守

山の腹かゝへて花やわらひかほ　曾我七郎兵衛 俊則

布袋あめ雨にそ花は笑かほ　宮川三郎右衛門 長之

花〱のかほや似てにぬ人の貞　敦賀野澤氏 永吉

はる雨はおち行花のうつて哉　川北八郎兵衛 一景

雨は親火ともす花はしそくかな　丹後 衆

連哥師のもとにててにをはのをな
さいひて

花見ぬをおはんぬになす雨も哉　勢州桑名住 良利

ちらすなよ木を抱てなく花の雨　泉州堺住 貞成

慈悲かあたと縁にはなるや花の雨　敦賀野澤氏 永吉

雨は父咲て匂ふやはなの香ゝ　播州姫路 幾重

花の縁をむすふの神や雨の宮　薩州鹿児嶋 大山氏

雨中落花さいふをな

雪に湯をかくのとしや花の雨　青地氏 可頼

いてつくや嵐に殘るはなのゆき　俊之

石上にて

富士はまたいそのかみゆよ花の雪　播州姫路須澤氏 是誰

常陸帶と目にや筑波の花の雲　勢州桑名住 直慶

花はめに道のはたなるいはらかな　勢州松坂竹内氏 良信

茨をやさかも木にせん花いくさ　京七條茨木氏 小興

さきてより風に花ちるいくさ哉　和州郡山郡筑氏 直成

ちとふくや毒の試み花の風　池野氏 重久

しほるゝは風の心ちかはなのかほ　攝州大坂土橋氏 一重

にか〱し黄蘗や誘ふはなの風　勢州松坂 三忠

柳にもやらせませかし花のかせ　伊田長左衛門 可辨

花の比は出雲へ御座れ風の神　江戸之住渡邊氏　照繁
是や花の蘆にましはるかせの神　播州姫路須澤氏　是誰
三春のやくひやうなれや花の風　紀州和哥山野村氏　玉心
吹風にへんなき花見虱かな　尾州熱田住　和俊

仙洞御垣の花のちりける時

盞をせよはこやの山の花の風　河地又兵衛　正量
花の香をふいちやうするや山おろし　京七條茨木氏　宗興
風に帳は盗人に縄やはるの花　六條上山氏　正光
しはるなよ花盗人をくらま山　德窓
くらま山は寺門多門の花見哉　沙門　靜山

醍醐にて行樹院僧正發句せよとの
たまひければ

花のえんは源氏ならねと弟五哉　中川氏　喜雲
華のもとによりともくむや源氏酒　尾州池田氏　ノ身
花にくむはつほ前栽かけんし酒　土佐住　燕石
霞をもくめはや花のあからかほ　宮川三郎右衛門　長之

ある寺にて酒をたうへて

花にくむは上戸ほたいや下戸衆生　濃州竹ヶ鼻大田　可政
花にのみかへさやわすれたるの酒　勢州桑名住　良利
野も山も彌生は花やさけの種　宗旨
懐紙にも折〳〵みるや四方の花　中川氏　喜雲
花に行心の馬に埒もなし　德窓
さひし人めとくやと山の花さかり　勢州桑名住　良利

ひとり花見にまかりて

食籠ももたて目ほしの花見哉　正哲
ちりてんと三味線栽の花見かな　攝州大坂住　不存

あひしれる人大津に侍るそのもと
へまかりしに三井寺よりもてこし
さて見事なる花をかめにさしてみ
せられければ

三井の花は大津うちての詠かな　進藤理右衛門　世耻

大原山にて

大原や氣をさんせんの花こゝろ　戸嶋治右衛門　良俊

かつらき山の麓に泊りて

花に一夜ぬるや葛城たかまくら　和州郡山池田氏　正式
夢にたにみんとや人の寐入花　敦賀野澤氏　永吉
誰も來て留主は楽しぬ花見哉　敦賀犬井氏　重次

在京の時四條にて

花の春四條に入てみやこかな　紀州和哥山日方氏　貞長

都に侍りける時

辻立に四方の花みる都かな　三忠

春一季田舍も花のみやこかな　紀州和哥山池野氏　淨近

春みちのつらき花見のかへさ哉　但州生野長野氏　桑秀

薫れるは伽羅の油かはなの露　戸嶋治右衛門　良俊

池水は花のえつけのかゝ見かな　竹内茂左衛門　正成

花笠のあるに付てや花の紐　紀州池野氏　淨近

赤うらは花のかすみのころも哉　京六條上山氏　政時

花見にまかりしにかへりて哥はなきかさゝはれて

見ての宮笥語ると葉の花もなし　阿州内田氏　正信

鶯やこれもぬふてふはなふくろ　苻類屋茂兵衛　政信

立さらて花の輪廻の小鳥かな　泉州河合氏　宗勝

花ちらす童部は風の子ともかな　肥前國之住　如自

羅山にて

花を手に此山風やわしつかみ　季吟

風に回と散や短命花さかり　時明

しらまほし前世の業を花と風　勢州松坂林井氏　昌友

西かせのちらすや花のなみ阿彌陀　勢州桑名大橋氏　林義

月次に誹諧をもよほし侍る人のもとにて

人おほくよるや月なみ花の波　攝州大坂梶山氏　保友

よはきものや春の都にとる雪月花　加友

落ちるや瀬こらへもなき花の瀧　德窓

花の顔をたゝける雨や親氣なし　惠佐

吹立てちらすや花のあらしんき　同

ませかきは是や竹たは花いくさ　同

妙心寺のはなのもとに尼公あまた酒なさたうへけるをみて

花を見にまいるやあまも妙心寺　安靜

人ならぬ花も都のよし香哉　同

山松のひゝきや花の雪おこし　貞室

千句第二に

花の香やねてみる袖にとまりかけ　同

哥のなきや花みる時の物おもひ　同

豐國の花にいたうやつしてまかりしにかしこの幕の内にしれる人な

るへし大勢酒のみて聲よき人小哥
いみしうたへるほとにしのひて
つかはす

そちの小歌こちの花見の肴哉　同

おなし比竹の火とりに香たき次てな
くりけるその盃にかきつく

はいのほりひとり花みるやまち哉　同

越中高岡正知なと花見に行て

散花やさなから越の雪なたれ　同

おなし人在京の時

さかせんと枝や石動花のかせ　同

花待侍る比人のもとにて錦なおほ
う栽ぬふをみて末吉道節といふ人
發句せよといへりしほとに

さかぬ間はほんの錦を花見かな　同

金龍寺にて

花は白く松杉の色やこんなりし　同

小しほの花見に行て

口こもれをしほの花にかせのこゑ　同

有馬氏の何かし千句もよほし給ひ
ける時第三

佐保姫のそたつや花の窓の内　同

建仁寺方丈の庭の花若木にて侍り
しかいくほとなく立のひて花咲け
るほとにかの開山の御事思ひいて
ゝ

花の木もせいたかくなる御寺哉　同

いきふれ侍るおりふしうちわたり
行かふ人のもとにまかりて門の外
に立てせうそこしけるその庭の花
の木たかうみえけれは

ちらぬ間は踏合ゆるせ花の雪　同

初瀬の花見にまかりし時東海氏正
頼のぬし其外相しれる人侍りて御
堂の舞臺に物しかせ月あかきよも
すから酒たうへて

かくらくな花見はあらし初瀬山　同

よしの山にてこちたき花盛に心さ
られて何もえいはて

哥口やうつむよしのゝはなの雪　同

よしのゝ花に日をかされて

花の雪に逗留をする山路かな　同

三芳野や右往左往の花見かな　同
（マヽ）

芳野の花にあこかれ行しに山口の櫻に散すきゝ風の手さへうしなひけれと愛染寶塔の雲井布引なといふ花はまた盛成しなうち詠めて青根か嶺（みね）によちのほるにはるかの谷の花の木すゑはあしのしたに侍る心ちするほとに

雲をふんてありく高根の花見哉　同

花に風やよしのうるしに蟹の足　同

今の内裏造らせたまふへきおほせを永井氏の何某はらからかき國の守にて承りて急かせらるゝおりふし人の爲にまかりしとありしに此御すりのことゆへ有ましき發句せよといはれて當座に申ける

大内や御造榮花のはなの春　同

夢中に高野山にて

月もぬけ雨夜のはなに高野笠　丹州福知山乾氏 直政

櫻
先師點

天地とひらけやそめしいせさくら　京五條杉本氏 永定

花の木立寶劍ならし伊勢さくら

伏見墨染にて

ふしみならときわけ染よ糸櫻　大佛清水政光母

落日に花ふる彼岸さくらかな　攝州大坂佛師 壽清

櫻田の溝行水やよしの川　攝州大坂木村氏 重順

きり加八のくるしみならし花の風　攝州大坂井岡氏 喜之

けしかくるや雨の火櫻いぬ櫻　泉州堺田原氏 勝明

枝はすねおゐ火櫻のさかりかな　京甚兵衛 重吉

火櫻やいくるつほみも備前やき　播州姫路幸田氏 泰圓

春雨や烏帽子さくらの名付親　正舍

左右へおらるゝゑほしさくら哉　伯州倉吉荒尾氏 直久

錢ならて虎の尾の花やあな見事　播州三田住 重香

花垣は竹に虎の尾のさくらかな　貞因

くらま川の水の花もやうつ櫻　貞因弟 貞富

蝶鳥や花に舞いるうつさくら　芥川住田淵氏 辨賢

花の名もあけろの山や姥さくら　武田次郎三郎 定信

花香よきはせんしちやすくか姥櫻　京中嶋四郎兵衛　宜還

老をかなはくきにも咲や姥さくら　松室右兵衛　寸枝

しほむ花の顔はしはかや姥さくら　泉州堺住惠藤氏　正宜

雲や霞たてこつみたる家さくら　京五條杉本氏　永定

亭のやれをふきける人をみて

たかきやねにのほりてみるや家櫻　播州大坂住　滿永

花守はふしん奉行か家さくら　同

雨に花さくれういかに家さくら　同

垂木はなや是も並木の家櫻　丹州福知山横山氏　吉治

鳥は餌をやさかしするか家櫻　播州大坂住　本吉

小倉山に咲は定家さくらかな　播州姫路武田氏　三吉

鯨鯢もすまん塩竈の花の浪　清水氏　言聴

塩竈のしほめる花やにかわらひ　京野々口市郎右衛門　親善

京に田舎ある塩かまの花見かな　西田三郎左衛門　元知

種々薩埵の花に増るや普賢象　同

いけをくも普賢象見ゝの花瓶哉　寂光寺　泰圓

立ならふ花や楊貴妃ふけんさう　味岡久五郎　正佐

北山石不動の堂前に四木の櫻あり

遲速を

櫻

愚判

花も不同しやかりや文珠普賢象　播州大坂井關氏　幅才

坪の内おほふや普賢象牙盞　播州姫路武田氏　政友

散花をふめるは普賢さうり哉　三吉

遲くさくはうしとやいはん普賢象　播州伊丹山村氏　盛定

遲櫻ひらく雲井や後花園　田村氏甚九郎　重晴

おりとめや花の錦の遲さくら　寂光寺　泰圓

さかぬ間をまつやくひかせの遲櫻　井岡六右衛門　常久

山寺の庭にやおそうさくら花　越後柏崎内山氏　武英

折句沓冠櫻の花

盛なかくらくに花見の春も哉　江戸住阿彤氏　祖秀

六つに成侍るさし糸櫻のもとにて

糸櫻柳に似たる木すゑかな　生敬

植侍りける糸さくらの年きりなし
て花遲かりければ

さけ人のおもはくもあり糸さくら　齊藤吉右衛門　定良

吹かせもゆるかせになれ糸櫻　望月　正武

糸櫻胡蝶の爲のまひはかな　藤田喜兵衛　俊通

寺の庭に植けるをみて

善根もうへぬる彼岸さくらかな　春宵

犬櫻の木陰にて

花もかなとそおもほゆるいぬ櫻　但州中嶋氏　三忠
熊谷やこしらふ見ゆる花のかほ　攝州大坂梶山氏　安永
むさし野てのめ熊谷の花見酒　保友
着かへなしや一重さくらのはな衣　東洞院平山氏　心月
さくら木や彌かうへをくよしの山　江戸住齋藤氏　重久
咲て景たにとなるや山さくら　勢州桑名孫右衛門　良利
櫻田にあせをたてたる並木かな　尾州池田氏　ノ身

くらかり峠のあなた生駒山のさくら見に行て

さくらかり峠こえてや伊駒山　河州清水氏　春宵
花も薫り鹿おるやならの八重櫻　藤田九兵衛　正久
ところ〳〵さくはとちめるかは櫻　尾州　有也
下伏に目をこそとつれかはさくら　勢州桑名住　良利
火櫻やもえたつやうな花のいろ　江州今津石崎氏　可隆
はこひ見んあしひさくらの花盛　濃州大田氏　可繁
火櫻のかつ咲山や遠かゝり　宮川三郎右衛門　長之
楊貴妃の花をやくひる蛛の糸　德窓
やうきひにましこの前か伊勢櫻　四條田中與兵衛　正伯

井の上の盛のはなやきりかやつ　田中與吉郎　重章
花守やさなからさくら町奉行　武州江戸渡邊氏　照繁
太山櫻見る友なれやかけ法師　攝州大坂與三兵衛　得和
はやさきははしめの老か姥さくら　賀州金澤之住　因元
子共ともいつも忘れぬうは櫻　惠佐子十歲　久松

姥か小哥うたふを聞て

みんつりと氣も若やくや姥櫻　攝州池田佐伯正次　女八歲
露や花の良にしるある姥櫻　春宵

類おほき尼公の庭の櫻をみて

老て人に用ひらるゝや姥さくら　江州大津若林氏　吉信
おい〳〵にさけかし花の姥さくら　備州松村太郎兵衛　幸增
にこ尼公えみぬる華やうはさくら　丹波里井住　退步
木をんなもあれはある世を姥櫻　尾州ノ住池田氏　ノ身
姥櫻見るか茶を煮る松の風　德窓
まふ蝶は鶴の孫かやうはさくら　京六條山中氏　道可
我とわか花の賀やする姥さくら　武州江戸昌雲軒　春清
孫なふて朽やはてなん姥さくら　播州三木賀古氏　秀長
ともせみん花のひ祖父姥さくら　播州姫路垣内氏　交云
春は花見にまいらうやいせさくら　唯女

三輪に詣でける時伊勢が古哥をおもひ出て

三輪山でいかに待みん伊勢さくら　京七條茨木氏 宗興

戀しくはとふても來ませいせ櫻　攝津大坂ノ住 友直

さくときけは跳もて來たそいせ櫻　京東洞院山本氏 善入

花の色の赤染をなと伊勢さくら　攝州大坂梶山氏 保友

友達あまた花見に行けるにいさまなくて

ぬけてなりとまいりてみたやいせ櫻　河原町木屋又右衛門 富重

是はみよ高階氏もいせさくら　武州江戸渡邊氏 照槃

八重櫻またしき比清水に參けるにかつ咲たる一木のもとに人おほかりければ

人たちは女の鬼か伊勢さくら　京五條富尾氏 重隆

花の名もたかまかはらやいせ櫻　辻氏 喜春

花の波もたつや川崎いせさくら　京齋藤氏 宗安

主あるや是も神の木いせ櫻　攝州大坂中村氏 友雪

參宮の時

枝國にさくや神國いせさくら　兒山三郎兵衛 隈光

神力でしはしなちりそ伊勢櫻　丹波左治ノ住 （原本作者名缺）

おしみてもおしみけりちるいせ櫻　紀州和哥山日方氏 貞長

神の綱もきれてちりけりいせ櫻　泉州堺ノ住 貞成

小さくらやおそはれてちるさよ嵐　德憲

小櫻の花の露もやおほつふね　五條吉田新兵衛 可成

花もおやにあふかや雨にさくら川　攝州伊丹山村氏 盛定

酒もりもしむ塩竈の花見哉　攝州大坂之住 龍和

塩かまさかはさくらを生てある所にて

しほかまにこけつく色かかは櫻　青地市郎右衛門 可顯

涌まけてちるや塩かまの花の波　阿州内田彌次兵衛 正信

塩かまの散はうねりか花の波　紀州那知山覺了坊 圓惠

塩竈の花に籬のしまつかな　井尻清五郎 惠幸

貰豢か狀添てやる家さくら　杉岡小兵衛 信貫

さく時分先さしつせよ家さくら　攝州大坂之住 本也

木の道のたくみは雨よ家さくら　泉州堺寺本氏 一守

咲つゝく花は長やか家さくら　紀伊和哥山日方氏 貞長

家さくらたてならへるや雲霄木　安靜

天水をうけてや開く家さくら　攝州大坂井岡氏 行正

つたはりて何代もさけ家さくら　紀州和哥山ノ住 景乘
代々の假名を繼や家さくら　江州今津中井氏 長次
木間なる月やかゝみの家櫻　越州江守久右衛門 隆展
往も來もみるやたんくはの家櫻　徳窓
今は月の鼠すめかし家さくら　同
旅立けるに庭のさくらの盛りなるをみて
留守あけな風さそふとも家櫻　春宵
花散す風は奇政か家さくら　徳窓
ちり時や雨もたまらぬ家さくら　川北平左衛門 吉次
とうつきをかくるや嵐家さくら　播州大坂住 好道
あらしにや五條あたりの家櫻　勢州松坂林井氏 呂友
ならの八重さくらをかたつほさりにて見侍て
京て見はいく重まさらん八重櫻　和州郡山今泉氏 吉保
花は人の氣をたすくるや普賢象　播州姫路稲津氏 重安
播州書寫にて
ねいり花にみるやかしこき普賢象　播州姫路垣内氏 交云
佐保姫の守りほそんか普賢象　勢州桑名水谷氏 長呂

直き木にまかれるはなか普賢象　下村利兵衛 可全
蟻まきや花の木の毒普賢象　京六條山中氏 重吉
誰も〳〵はなのさきみる普賢象　道可
遲くさく花は彌勒かふけんさう　五條大濱氏 元春
通盛のいくさか花もおそさくら　勢州桑名孫右衛門 良利
くすみても終に笑ふやおそさくら　肥州福知山玄性坊 道諄
彼岸さくらわきて七日や花盛　惠佐
河邊の家にいせさくらい咲たるをみて
伊勢さくらうつすや花の雲津河　同
雨に花のちるを見て
さくら田の水損ならしはなの雨　同
花垣はわくかたゝりか糸さくら　貞室
風の口にありや櫻の糸きり齒　同
糸さくらみたすは風のてつゝかな　同
ちるなちらは我等か鬢も糸櫻　同
はやくとくやきりか八つき子花の紐　同
山ふみし侍る比いもせ山より便につきてみやこへいひおこせ侍る發

句を今みれは連哥のしほくちたる
やうにこそ侍れ

つれたちて見はやいもせの山櫻　同

悲母妙喜禪尼の墓所のさくらいた
みけるを植かゆるとて

佛性はありやなしやのいぬさくら　同

ひさつきもめせひさくらの花の庭　同

青地氏可賴にて隣家の花をみて

是はやねの谷越にみるや家櫻　同

散透る嶺のさくらや雲ちきれ　同

櫻鯛　付櫻貝　先師點

魚の棚はよし野の市かさくら鯛　播州姫路幸田氏　正舍

花の波のうしほ煮そよき櫻鯛　薩州鹿兒嶋武林氏　守泉

浪の花やよせつきにせん櫻鯛　攝州大坂之住　如貞

あたにくふな年に稀なる櫻たい　播州姫路武田氏　三吉

口をつほみ口をひらくや櫻かい　攝州大坂　當心

切くへてよしや火鉢のさくら鯛　惠佐

櫻鯛　付櫻貝　櫻海苔　愚判

さくら鯛出す座敷や哥の會　小川平七　元安

えひす歌の春の部なれや櫻鯛　賀州金澤篠田氏　明忠

三月はうしほも花やさくらたい　備前船木勘兵衞　清讃

魚と水と中よきや雨に櫻鯛　播州姫路　幾重

岩木と云浦邊にてさくら鯛とるを
みて

引網のいはもとによるやさくら鯛　因州多田傳八郎　正安

綱の目や花のしからみさくら鯛　阿州内田彌次兵衞　正信

塩竈にいつか來釣むさくら鯛　加友

さくら鯛おろすは花のかたみかな　武州江戸平野氏　古肯

佐保姫やおほひてあそふさくら貝　江州大津早崎氏　重安

白波の花のつほみかさくらかい　播州姫路高井氏　元利

かけ波にひろひかたしやさくら貝　貞室

讃州志渡にまかりて

さくら貝の玉もとりみん新珠嶋　備州吉岡七郎右衞門　信元

あまのかるや須磨の若木の櫻苔　勢州桑名荒木氏　方成

岩に花さくとやいはん櫻のり　江戸神田左兵衞　貞賴

苗代　付耕田　愚判

苗代に蒔やかへるのうたのたね　德窓

なはしろを燒こめにするひてり哉　備州吉岡七郎右衞門　了貞

人形はなはしろまもるてたてかな　五條大濱氏　元春

たかやすは象とや見まし特うし　勢州桑名住　良利

襷かけて田すきかへすや身のたすけ　同

日ひ〱にかへすも民のあら田かな　和州郡山梶金平　安静

角組芦 異判
つのくむや心の鬼のあし后　越後柏崎蓮華坊　勝重

桃 付上巳
盃の台につき木やもゝの華　京住平尾小兵衛　一顕

もゝもゝといふほとくあや桃の酒　播州管摩津　幸以

蓬餅 異判
うつほ草もつきん蓬の彌生哉　泉州堺水野氏　意順

蓬餅や永き日もしを忘れ草　廣

食前やあさのおなかのよもき餅　摂州三田住　等白

餅ならで是もみの日のはらひかな　江戸昌雲軒　重香

異判
酌をとる人や花もい桃のさけ　内田氏　吉清

つく音やくはつたり菱の蓬餅　京山本平兵衛　平吉

桃柳蓬と三ケの節供かな　吉入

牡丹ならて花の王持や園の桃　京河原町與兵衛　玉佑

うへかへたるもゝの花運なりければ

横根いたみひらきかぬるや桃の花　惠佐

ひるなをとする姫桃の節供かな　一條烏丸喜兵衛　宗方

南の司障宗の桃をみて

姫桃やしよほとぬれたるよひの雨　貞室

同し根か劒の花と桃の酒　同

梅は酢に成ける物を桃のさけ　同

三日の節會に貞徳老人のもとにまかりしにけふの發句やあるさ宣はせしかさ頃さはるとありてえ申さゝりしさいふにいたふけしきあしかりければ當座につかうまつりける

口にむはらふくむや三日の桃の酒　同

春めくや文字も春く蓬もち　同

鷄合 異判
散みかたとりあはするやときのこゑ　和州郡山　中井左太夫　定幸

雲雀 異判
ほのこならてあかる燒野の雲雀哉　京高瀬太郎兵衛　慶

日はしを雲にかけぬる雲雀かな　江戸住昌雲軒　盛

春鷹 異判
こふしまて聞すへとりや鷹つかひ　摂州生野住寺田氏　春清

巣鷹とりて又すへいるゝこふし哉　伯州倉吉住荒尾氏　重

春鳥 付巣
雀ゆへ子持となるや軒のつま　江州草津住　直久

異判
蛤のかいを洲にうかむ雀かな　五條副田仁右衛門　重道

山頭に鳥や巣をくふ釋迦の眉　光朋

すかくるやおなまのいかの鷲鳥　摂州大坂之住　之次

櫻木になくうその音や吉野琴　摂州湯山住　三草

燕

こたからを入るつはくらは土藏かな　戸嶋治右衞門　良俊

盆山の鳥形なるをみて

つはくらがなるや子安の玉かしは　播州姫路國府寺　貞室

歸雁　先師點

花見ぬやきたなしといへと歸るかり　播州餝磨津古川氏　政次

たちかへるかりや北面雲のうへ　辻氏　友定

かりもよほし越路へ何とかへんなん　濃州竹ヶ鼻太田氏　忠勝

愚判　曉の歸鴈やつらをみたれ鳥　吉久

みたるゝはしとろ戻りそ春の鴈　紀州和哥山日方氏　貞長

花やかな春に恥てや歸るかり　京大宮鈴木氏　長

かへりさまは實かんてうた羽つくろひ　貞因

北むきも忌すや歸るかりまくら　京四條田中與兵衞　正伯

忘れぬやもときた方にかへる鴈　但馬生野長野氏　柔秀

三月は桃尻にてやかへるかり　田中氏　可雪

蛙の聲を牛天に聞て

苗代に住やくはへてかへるかり　貞室

そめいろも北はきかんの山路哉　同

子ゆへにや燒野のきしのこかれしに　丹州小嶋氏　定次

雉子

愚判　やかぬ野や子も堅固なる雉子の聲　備前三木七太夫　忠之

親のけんをかりて社なけ雉子の聲　德窓

蝶　先師點

花の香を鼻てかくらかまふ胡蝶　攝州大坂井岡氏　吉之

うやまふも老木のかけの胡蝶哉　京五條高橋氏　元信

芳草の夢も見るへき胡蝶かな　攝州大坂ノ住　友直

愚判　花に雨露のおんかの舞やまふ胡蝶　京五條杉本氏　永定

舞さかる胡蝶や乙女花のくも　油小路藤井氏　秀朝

花さけは絕す胡蝶の見舞哉　但州生野住中嶋氏　安永

火をともす花に胡蝶や舞燈籠　京大宮鈴木氏　方角

花に聲ありてやはやす蝶の舞　氏長

ほさつかよかふ菜の花に舞胡蝶　尾州名古屋住　兼勝

綏りとやひもとく花にぬる胡蝶　河内住淸水氏　春宵

舞蝶の曲もや花の波かへし　攝州大坂ノ住　好道

藤の陰の胡蝶の舞はかつら哉　攝州大坂ノ住　常知

松陰の胡蝶や藤のつるのまひ　曾我氏　俊則

雪に似たる富士野の蝶や駿河舞　薩州鹿兒嶋　大山氏

うつの山夢にも蝶やするか舞　德窓

ぬるてふや花のはやしの居曲舞　京堤左太右衞門　重政

尉とのか色まつくろな蝶のまひ　敦賀野澤氏　永吉

有馬氏壽白初興行の千句第二に

身かろけにまふ羽つかひや蝶ひえん　季吟

虛久か夢みて後に蝶のまひ　小松原梅要子　明
てふ〳〵や眠りてねふる花の露　攝州大坂之住　時成
たはふれて花の口すふ胡蝶かな　伊賀上野松木氏　滿友
木の目をも花をも吸は胡蝶哉　尾州山上　未次
蝶ゝのうき寢や花の浪まくら　紀州和哥山日方氏　政
なれも霞くみ過してやぬる胡蝶　京大宮鈴木氏　貞長
蝶鳥の舞の衣裳やはなころも　惠　氏長

野邊近く家居せし人のもとにて

蝶は舞雀はをとる春野かな　貞　佐
篠にとふ蝶や竹枝の舞の曲　同　室
蝶鳥や霞のうちはさかなまひ　同

蛙
先師點

浪まくら蛙の哥は夢想かな　丹州福知山田寺氏　久頼
池になみ居啼や蛙の哥の會　攝州大坂武野三五郎　俊興
たけ高き哥はよますやひくかへる　攝州大坂木村氏　重順
鳴聲は蛙も雨やこひのうた　播州姫路幸田　正舍
哥をよみ哥によまるゝ蛙哉　丹波福知山關氏　萬球

四判　嵯峨芹川にて

みゆきあらは哥やよむへき芹蛙　攝州大坂安福氏　秀之
蚪といふ文字さへやうたの韵　尾州大山ノ住山覺院　卜需

六田河にて

哥の六義たゝすむつ田のかはつ哉　播州姫路垣內氏　之富
歌て渡る世はおもひ出のかはつ哉　攝州大坂九兵衛　貞武
哥よむは田のくろぬしのかはつ哉　□州竹□島太田氏　可政
一たんの田ゐ井のうちよたく蛙　紀州□山池田氏　正式
吞れては蛇の胃のうちの蛙かな　河內住清水氏　正青
蓮池のかはつの哥はれんかかな　□州名古屋山岸氏　巳安
水口を歌口になすかはつかな　播州餝磨津脇氏　清長
水邊や常にかはつのうたのたひ　□田治兵衛　貞之
かけはしの下の蛙や木曾かせん　尾州住清水氏　□卜
哥は披講軍はひかぬかはつかな　播州姫路渡邊氏　正貞

東山黑谷鐵か池といふ所にかはつのおほくあるを見て

軍するよろひか池のかはつかな　兒□□島兵衛　光
軍法や佛法となすあまかへる　尾州□田加藤氏　□市
くちなはや珠の守護神あま蛙　□井□太郎　一重
禪尼かや松の下なるあまかへる　丹波□井住　山步
蛇にあふやうきをみるめのあま蛙　□州□硯市兵衛　一武

庭の松にあま蛙の居るを見て

松陰にけふりやかつくあまかへる 勢州桑名之住 方成

水の煙たつや塩やくあまかへる 播州名鹽屋伊藤氏 一和

二條烏丸のほとりにてむかしいあ
ま公のをおもひ出て

神歌もよめ少將の井のかはつ 惠佐

近江路を通りし時木戸といふ所に
て

軍する大手か城戸になくかはつ 同

河邊に別業ある人のもよほしけれ
は

水上やかはつの祭るいくさ神 貞室

神樂哥かはつもうたへ河やしろ 同

春駒 先師點

くろひ出るはけに物のけそ春の駒 越後柏崎住 釉都

かたのをとほり侍りて

春駒のゆくやかた野の少將棊 季吟

異判 若草はけに春駒のたすけかな 戸嶋治右衛門 良俊

茶摘 先師點

鷹の爪もとる日をえらふ茶摘哉 長崎ノ住野澤氏 玄茂

異判 手につみてみよりの薬茶や鷹の爪 但州生野住中嶋氏 安永

菫 先師點

松かけに咲は硯のすみれかな 攝州大坂ノ住 如貞

異判 朝戸出にめやかけかねのつほ菫 [illegible]州之住 之也

鎌倉に侍る入[illegible]の為に山[illegible]の亭
洛にのほりて上られけるその便に
つきて云つかはし侍る

もろこしか原や西湖のつほすみれ 攝州平野土橋氏 一重

並に咲は糸を引てや壺すみれ 江戸大傳馬 秀長

雨やうつて目なる碁盤のすみれ草 辻村 愚玉

春草 先師點

地神よりもはゆるかうかゝふきのたう 小谷甚太郎 久惠

地よりの出る多寶もかくやふきのたう 泰圓

山もとをたつねて三輪の杉菜哉 紀州廣瀬又五郎 時秀

林にはなくてかなはしつゝみくさ 泉州堺住 定宣

かたちにて摘てをくるやつゝみ草 播州姫路住垣内 交云

たんほゝやうたて其まゝをきつゝみ 攝州大坂井岡氏昧 榮春

古や今も丹波はおにところ 京柏屋庄左衛門 眞友

浪の平の太刀といはゝやつはなの穂 攝州上牧宮松氏 元寄

異判 野遊ひに雪まの若草たゝみ侍るさ
て

それとしりつめるや緑藻よあかはき 勢州桑名大橋氏 林義

若草と見るやとはりよめかはき 紀州和哥山日方氏 貞長

よめかはきのお伽にたつやはうこ草　丹波佐治之住　正重
次第〳〵春野やはやすつゝみ草　同播住多田氏　正安
おちかたの野邊のあさみや隱形鬼　江州大津伊藤氏　三丸
莇つむ子の名や鬼にかなほうし　攝州三田之住　重香

金錢花な題にて發句せよといへり
しほさに

金錢花ちるやそのまゝみたけ錢　阿州撫養有田氏　正吉

人の庭の金錢花をみて

百あまりさけやめを出す金錢花　江州大津秋岡氏　滿法
いたとりは杣山人のみやけかな　攝州大坂ノ住　友以

けまん草な題にて

けまん草生ぬるかたや蓮臺野　稻田甚左衛門　信顯

やんごとなき御方にて

公家衆のお庭にさくや白ちやうけ　喜多　直能

野遊びにいさなはれし其かたに小
とのはらといふ香をいさゝくてう
して出されけるを何ぞなとたづね
しにいさやその名もえいはしさい
へは

春月　先師點

小臌原ら若むらさきのゆかり哉　但州生野長野氏　秀

愚判　花の波におほろておすか月の舟　京五條藤田九郎兵衛　正久

春の比友たち打つれ須磨浦にいたりて

すまてこんや詠めあかさい朧月　和州郡山矢野氏　重貞
月の[illegible]にあみ縫きするかすみ哉　惠佐

躑躅　先師點

禪寺にて

そも山花なんぞ答へて岩つゝし　丹州福知山奥一郎　一勝
華さけはさまもよしや岩つゝし　周防國岩國小西氏　幸茂
ふる雨もつけてくへとや餅つゝし　越後高崎[illegible]　一顯
あれ見よと指やさしさほもちつゝし　伯州倉吉住荒尾氏　直久

愚判　ゐるしかつてみるは岩間のつゝしかな　攝州上牧ノ住　文索

不動坂のつゝじをみて

不動坂に火焔や出す岩つゝし　江戸藤原惟[illegible]羽太氏　正明
したゝれるつゝしの露や羊の乳　泉州堺[illegible]氏　貞室
なかぬ棚もまもりて見たし藤の棚　柏惣五郎　定宜
咲かゝるあまのこぬれや藤のた[illegible]　丹州福知山田寺氏　永貞
お[illegible]につきそひまとふお藤哉　久頼

藤　先師點

藤浪て洗ふは松のふくりかな　丹州福知山ノ住　道味

遲く咲たる藤をみて

惣なみにもれて跡にやさかり藤　播州姫路三木氏　知重

異判　藤の房永きは春のこゝろかな　大坂篠十兵衛十二歳　治矩

藤つほの花にかゝやく日の出かな　尾州名護屋住　ノ身

藤は松に花にかゝるや人こゝろ　徳窓

身なけにやかゝる松かえかふちの花　重利

重藤かまゆみにかゝる藤のつる　播州姫路[illegible]澤氏　是誰

藤の丸や散ぬるあとはつるのまる　但州生野寺田氏　豊重

木曾殿の花もしなれや藤ともへ　播州姫路高井氏　己利

咲ふちを皆見さふらへ三笠山　播州大坂住　好道

藤の森にてふちをみて

誰もきて三木くめ藤の森の花　播州腹見村善兵衛　頼重

波ならはさかれやさかれ藤の棚　江州草津住　重道

たてふさく藤に霞は戸棚かな　山田茂兵衛　正盛

光堂の藤を人のおりて行けれは

戸をたてゝおらせぬ藤の棚もかな　兒山三郎兵衛　隠光

かめに藤をいけたるを見て

花瓶の耳にやうらくやさかり藤　貞典

見あくれはこゝろありてやさかり藤　京大宮鈴木氏　氏長

柳の木陰に藤の咲けるをみて

さく藤や柳の髪のかつら帶　惠佐

やんことなき御かたにて御庭の藤を
みて

床のみか總棚かさる藤かつら　貞室

八藤を御家の紋にせさせたまへる
その門下を祝し奉ると侍りし比藤
の發句申せと宣はせしほとに

やつ藤の御もんかほれる盛かな　同

藤のたなやみてくむ人の肴棚　同

欵冬

先師點　やまふきの衣は黄金の肌着かな　季吟

山吹はこかね作りのたち枝かな　攝州大坂住　之次

異判　山吹や人の目たつるのこきり葉　熊野石倉氏　一入

金の間か欵冬かこふ花のには　攝州大坂住　行直

花軍せはやまふきやおんな武者　國枝惣右衛門　直旨

別業に咲侍し山吹を人のこひける
その使に云ける

やまふきはもらかしかねの使かな　貞室

やまふきやはえあふ露の玉かつら　同

海棠 異判

かいたうのつほめる花は丸雍かな　但州生野寺田氏　重豐

梨花 先師點

こかなしの接木は花の養子かな　武田次郎三郎　定信

異判

風の手や持たぬなしの花の枝　敦賀住野澤氏　永吉

杏子 異判

からおりかからゝ手折る花の袖　京堀川横田九右衛門　道重

木蓮花 先師點

しへは茶せん花は天目れんけ哉　攝州大坂ノ住　貞四

異判

物いはぬ花やもく〱もくれんけ　安靜

紫衣をめす尊者か花の目蓮花　攝州川口五兵衛　正利

風に花ちるやはねたいもくれんけ　播州姫路村山氏　風子

春郭公 先師點

春鳴は譁らしゆんなり郭公　正章子十歳　元次

口なしの枝にかけたかはとゝきす　攝州大坂ノ住　貞四

もはやちとなきやれほとゝき木の春　紀州和歌山日方氏　嘉清

異判

鵑に春不如歸と告よほとゝきす　貞長

しせんふそにきゝや古巣の郭公　貞室

巣にとまるや鳥うくひす郭公　丹波福知山乾氏　政三

名乘あへ來るほとゝきす歸鴈　貞室

永日 先師點

きん丸な日や糸遊のへそのなり　泉州堺久左衛門　種廣

やり水にうつる春日はなかへかな　相氏　利定

永き日の物のくさゝはひるねかな　小田市左衛門　胤俊

異判

日の丸はのとけき春のしるしかな　攝州大坂楢山氏　保友

風や手長日はあし長よ春の空　春宵

尾をつくやちゝたる春の日の鼠　德窓

鶴鷺の足よりなかし日のからす　貞室

三月盡 異判

彌生の晦日に山ふみして

打霞ゐ山はかくれん暮春かな　宇治ノ住堀氏　正治

暮春花といふことを

ちりかへる花は木の根やかくれ里　和州郡山松下氏内　賞則

酒宴の座敷にて

飲くらせけふはつほ底の春かすみ　貞室

花や根にさらは〱の春のくれ　同

雜春 先師點

尼崎といふ所にて正月のかさりおろすをみて

軒の妻のかさりおろすや尼か崎　江戸之住岡形氏　重秀

むつきの末にかひたるもちゐなくふさて

かひるをくもるといふらんかゝみ餅　京橋日平兵衛　道知

餅花は柳か枝にさくらかな　攝州大坂ノ住　如貞

父の手馴し小鼓をみて

ちゝとかやなる小鼓の花かたみ　越前之住　良卿

花の繪はさいしきともにさかり哉　佛師　正勝
異判 よはねとも参るや囉囒太郎月　沙門　是友
しうとめは花よめこせのあらし哉　兒山三郎兵衛　隠光
ある人うつくしき繦子をあへなく
法師にしけるほとにその子のおも
ひ人のかたへかくいひてひそかに
つかはす
繦子にし着するやのりの花衣　稻田甚左衛門　信顯
花見小袖きつるゝも又花見かな　攝州大坂松尾氏　昌次
春の夜や夢もなくさむ寢いり花　山城東寺ノ住　定久
相煩ける人のたのみすくなく侍る
なと云おこせけるほとに
ちる比かこゝろの華にむなさはき　内田氏　平吉
詩にすける人やこゝろの花作り　江戸昌雲軒　春清
なまらぬはこと葉の花の都かな　江戸齋藤十郎左衛門　重久
くめはかほの色はしゆとなる霞哉　江戸富田三左衛門　基明
酒宴に一さしなさいはれてえ立あ
へすして
くめは人の氣も引たつる霞哉　宮川三郎右衛門　長之

旅よりかへりける人の幸き日に逢
しなさいふを聞て
山たちは霞のさかてもらひかな　京四條藤田氏　正久
旅店にて紅梅句といふ女の人をさ
ゝむるをみて
紅梅は旅人とむるにほひかな　因幡國多田氏　正安
海邊は魚も春なるさはらかな　越州福井ノ住伊藤氏　良卿
横木にやおされてなかぬかへるまた　杉岡小兵衛　信貫
穴を出る蛇はうねくる田面かな　紀州和哥山日方氏　貞長
花かたは櫻の筒の鼓かな　紀州池野氏　淨近
本願寺末寺にゐて松はやしをみ
て
一せいや風の手鼓松はやし　勢州富田堀氏　忠勝
海苔の名も佛や說し經の紐　晶月
釋迦はお身こなたはのこふ涙かな　宮川三郎右衛門　長之
人のもとにて肴てうするをみて
まないたは風になひかぬ柳かな　敦賀野瀨氏　定利
うつし繪の雪も消るや古屛風　東七條茨木氏　宗興
ある人手ほんのれうしに泥をもて

梅に鶯をかきたるをみて

ていをもてかくや其まゝ金衣鳥　江州大津住山本氏　正次

風の口もはるや長閑き花實つほ　京四條田中與兵衛　正伯

先師死去百ヶ日の追善に

飲食の百味にめくる春日かな　貞室

大崎仁左衛門永良と云人かな山の
さかへ侍るやうにとて誹諧もよせ
られしほとに

かな山やつる〳〵出る春日かな　同

三月三日住よしの塩干にそのほと
りの寺にて酒のみて

住よしやひしほも春の海さかな　同

雲にいるやくまぬ霞の鳥肴　同

玉海集　卷第二

玉海集類目録

夏之部

夏

衣更 先師點

和してきよし空色に染る夏衣　和州郡山梶金平 寿重
天人もきかへん雲のころもかな　播州姫路垣内氏 交云
酒に彌生過てうつきのかしら哉　武州江戸住 立砂

富士をみて

畧判
富士山の雪と雲とや白かさね　中川氏 喜雲
おひえもや綿ぬくとまるころもかへ　攝州大坂住 貞因
いにし春のかたみかはりかころもかへ　播州姫路垣内氏 交云
季かはれは身にもきかふる衣かな　加州大正持(寺)住 重次
きかへもたぬ身やたゝえりの薄衣　河内清水氏 春宵

住けるもの產前なやみしかさつゝかなく平產せしほさに

身やかろく成てよろこふ衣かへ　惠佐
君も臣も身をあはせめすや衣更　安静
春を夏にすいかへらるゝ衣かな　貞室
すりかへて着るや賣僧のかは衣　同
衣桁にはかいさまならて更衣哉　同
置かへん質さへけふはなつころも　同

餘花 先師點

春はせかせ夏や初花おそさくら　攝州大坂 當心

木のもとにさゝん殘花の酒宴哉　播州姫路 幾重

承應元年十月十日夢想に

盛過て尼ほと殘るや普賢象　熊野長嶋住石倉氏 一入
春日山は奈良紙青の茂り哉　播州姫路垣内惣兵衛
夏のきは老曾の森も若葉かな　泉州堺住 之富

新樹 畧判

山は雨のふるきをもつて新樹哉　泉州堺住 貞成
雨は花の親重代やなつ木立　濃州住 一守
日照雨にやき葉や付る夏木立　塵哉
夏木立あら見となる葉さき哉　江戸神田村垣氏 弘武
夏木立のふれは枝や打刀　徳窓
霜の劍とみん月影の夏木立　尼州 之也
園の桑や春子過ての夏木立　備前岡山 重房
楠の葉や正しけるたかまやま　備前安倉玄益 章輔
夏は毛をするかや庭の犬さくら　徳窓
花の後も又花色の青葉かな　惠佐

八瀬の山里に侍し時鬼の穴といふ石窟を見にのほりて

あをき葉や鬼かいはやの夏木立　貞室

杜若 先師點

三河にて舊友に逢て

昔男見かはしぬるやかほよはな　寺町寂光寺　素園

八橋の種さて植し杜若なわりなく
折て行人に對して

折とるやにくき八はしの杜若　伊丹利兵衛　満吉

澤やかにあらふやかほるかほよ花　播州三田ノ住松永氏　親次

句のかみにをくや八橋の杜若　和州郡山池田氏　正式

異判
三かはにさくやゆふかやかきつはた　備州松村大郎兵衛　幸看

にたりとやあや珍しきかきつはた　播州鳴見村善兵衛　綱重

しなふるや是も見てるをかきつはた　播州大坂ノ住　次以

床に富士の繪なかけて杜若ないけしな

富士にのほる姫若もかくやかほよ花　貞室

藝州廣嶋何檢校さかいふかもさにて

さいしやうの花そとおほせかきつはた　同

牡丹 先師點

日やけせぬ畠や花の王舍城　貞因

花の王領はいつくも土御門　薩州鹿児嶋大坂氏　政重

屏風草こすは始皇か花の王　薩州鹿児嶋　大山氏

富貴天に有やほたんの花の雨　同

花に蝶とひさかへるや富貴草　丹波福知山乾長介　政三

花に易とらはふつきの牡丹哉　西田三郎左衛門　元知

神農の角かつほめる富貴草　木村太郎右衛門　重順

作る詩もしゝのゐんふむほたん哉　薩州鹿児嶋森村氏　吉行

四五日のうちか盛か廿日くさ　丹州福知山一非氏　久重

異判
さかぬ間はまた春宮か花の王　紀州熊野那知山住　道諄

花の王もひらくそのかみは地神哉　伊藤氏　信徳

枝〱にほたんと咲や花のかす　播州姫路村山氏息女　辻十歳

をく露やおほとのあふら牡丹灯　和州郡山梶氏内早瀬氏　重隆

藩架垣をいふや鼻縄黑牡丹　和州郡山池田氏　正式

たそかれの花見はこれそはく牡丹　紀州和歌山日方氏　貞長

見事にもうちひらいたやはく牡丹　備州岡山志賀氏　俊安

庭の牡丹のかれ侍りしを

からしゝは植てあへなきほたんかな　播州姫路須澤氏　惠佐

花になかめあかぬや日夜朝牡丹　是誰

子なまふけたる宿に咲けるをみて

そたてぬる雨露や花のふう牡丹　播州姫路幸田氏　正舍

花瓶をも富貴になせる牡丹哉　播州大坂住　初其

猫も華をほめよ一聲富貴草　京德田太郎兵衛　茂貞

しゝかきもせよや牡丹の花さかり　尾州　之也

はつか草はこや白鼠ふつき草　同

及ひこしに牡丹をおるや猫せなか　江州大津西村氏　吉勝

牡丹おるや止ゝとせいする花の番　江州大津秋岡氏　滿法

親子ならてもらふや近き隣草　江州大津高橋氏　主信

牡丹花や是は連哥に名取草　大坂福嶋與三兵衛　得和

盛すきたる牡丹を見侍て

花の王も散て覇となる時節哉　越前福井之住　無樂

咲は可なり散ぬる時やふか見草　安靜

藤木惠佐有氣に入たる祝ひすさて
もよほされければ

芍藥 風判

榮ふるや福地の園の富貴草　貞室

寸陰もおしむ芍藥の花見哉　尾州住　有也

卯花 先師點

卯の花のちるは鎧のけきれ哉　秋田野代常福院　尊爲

雪汁か雨に流るゝ河うつ木　惠佐

臨淵子千句もよほされしうち

水は元におさむるか卯の花の雨　貞室

ある寺にて庭にさき侍るはこれ卯
木なみて

くれなゐの雪もましるや花卯木　同

灌佛 風判

胎内もけふや出產の釋迦佛　江戸齋藤下町左衛門　重久

けふはまや御產のひもを佛哉　東洞院平山氏　心月

葵付花**之葵** 先師點

みや人のかくるやきねにつるあふひ　季吟

草も行をするか夜る晝立あふひ　俊治

祭 風判

稻荷祭これもたうかの節會哉　德窓

毬花 先師點

子共の花をこふをおしみて

親てまり子てまりやらし花の枝　正哲

けちらすな是は毬花そ雨のあし　堺瀨尾松菴　慶也

郭公 先師點

京田舍待やほとゝきす万人　攝州大坂木村氏　重順

赤子ほと初聲あけよほとゝきす　京五條澤村氏　正義

聲をふりあけよほとゝきすゝか山　大坂井岡彌兵衛畊　榮春

ふりたてゝ在ゝになけほとゝきす　攝州高槻住　作木

耳のはたて聲のあやをれ郭公　攝州姫路三木氏　知重

許由とても耳はあらはし郭公　攝州大坂片山氏　秋月

耳のひくに聞や熊野の時鳥　播州書寫山　祐典

時鳥も女人の類か高野山　吉野住宇野氏　淨治

鳥羽戀塚にて

鳴て鳥羽は委へ戀塚郭公　京清水惣左衛門　宗珠

鳥羽にて

とんてなけ鳥羽て猶なけ郭公　中川仁右衛門　定
江浦になけ大江山ほとゝきす　清水四郎左衛門　重聴
一條邊にて
戻橋そ名のれ冥途の郭公　京清水七郎兵衛　一慶
地獄にて舌ぬかれたか菩歸叢鳥　京道□□□兵衛　知
箱根山のさし口で聞やあいくきら　播州姫路垣内氏　云
くきらなく木すゑや庭の桐かしら　同□氏　□
聲せぬは口にうつ木のくきら哉　播州姫路　□重
耳とほす聲や雛もみかなくきら　京五條大宮六兵衛　尚春
笠置にて名乘ほとゝきす山哉　攝州大坂井岡氏　元母
富士と高根あくるほとゝきすそ野哉　丹波福知山乾三介　榮春
鶯と聲のあうんかほとゝきす　伏見住坂本勘兵衛　政通
なけきかふなかさきかねそ郭公　京五條淺野氏　□旁
なかきわらへはくつ〳〵〳〵くつゝ鳥　播州姫路須澤氏　常平
我耳をくはてんになすか杳代鳥　五條杉本長兵衛　山誰
かんにたゆる音や張郎か杳代鳥　京　定
まりこの宿にて
あり〳〵となけよまりこの杳子鳥　播州姫路郭波氏　由古
きくやあふ樂翁か馬のくつて鳥　播州姫路内山正庵　一イ
のつて名のれむらさめ馬に郭公　丹波池野氏　重久
口なしの木性て有かほとゝきす　丹波福知山永價寺　休佐
音ちんになけや一樹のほとゝきす　武田野氏常福庵　□爲
月なるや居待立まち郭公　□後伯□　柚都
茶入から口にほとゝきすふた哉　井岡□兵衛　吉之
ふためきてきくやひところ郭公　丹波池野氏　重久
一聲はけにもとほしき初音かな　徳田太郎兵衛　茂貞
子規たへの枕の山に聲も哉　播州鎌磨津　□顧
有かたき聲もや善知子規の鳥　大坂井岡□兵衛母　榮春
法花宗の宿にて
ありかたき聲や南無妙郭公　井岡□兵衛　吉之
ほそんかけて繪時の鳥の聲ゝ哉　播州姫路　□重
佛師興行に
木像こ世にかくれなきほとゝきす　大坂北村休齋　宗清
郭公な籠にいれてうりける人の□
な聞て
生とられ名乘るほとゝき鈴木哉　井尻氏清五郎　惠幸
比叡山にて
山で聞や賞もの坊跡のしきの聲　寺町眞光寺　宗圓

あつたにて
すゝしめになけやあつたのほとゝきす　泉州堺阿知子氏 定宣
いなすといふ所にて
秋まてもいなすになけや郭公　中嶋氏西郎兵衛 宗朋
梅の雨に口をすふなせほとゝきす　清水四郎左衛門 言聡

郭公 愚判

冥途よりもはや出しやはれ郭公　正哲
物いまひしてもやなかぬほとゝきす　敦賀野瀬氏 定利
郭公なくとはいへときかぬかな　播州姫路村山氏娘 辻女
やせたるかまた聲もせぬ郭公
是は酒井氏い何某の娘の御作とそ
なひてこちへこひしゆかしや郭公　播州三木五百藏 之政
叶はさる戀をさせたやほとゝきす　紀州夕朝 靜眞
なかすんは蛙にしかしほとゝきす　泉州堺硯市兵衛 一武
をりも折鳴かし時も時の鳥　徳窓
厠ても初音聞たしほとゝきす　同
こをふせて聞たき物や郭公　武州江戸佐々木氏 信清
聞たさや耳のあなかち郭公　京平尾小兵衛 幸以
耳の比丘も常住たもて時の鳥　紀州熊野玄性坊 道諄
郭公遠音に得たや天耳通　大坂之住 貞因

伶倫か耳ほしや山ほとゝきす　京三條山本氏 善入
口のなき蟬におとるかほとゝきす　播州三木木長寺 通隆
門のうちに耳そはたてつ郭公　丹州福知山横山氏 吉英
鵑の聲を先きゝたしや郭公　兒山三郎兵衛 重光
夏は我等鵑とならはやほとゝきす　東六條下村氏 方角
三鳥の祕事はともあれ時鳥　播州大坂住 宣潜
鳴あかせ聲まつ夜半の郭公　東六條上山次郎右衛門 正光
ふるをまつもあまのとそや郭公　加友
待になかて興やさめたれほとゝきす　徳窓
心つよや待よはらするほとゝきす　河内清水氏 春宵
心うちにひた物うこけ郭公　和州郡山都筑式部 安成
氣つくしや聲松浦山ほとゝきす　備中吉岡七郎右衛門 信元
たのむそやないてくれ〳〵郭公　大坂早淵太兵衛 定里
旅にて身まかりし人の追善に
又と聲きかぬは老少不如歸かな　播州姫路平位氏 重利
聲せぬはつうくつなしよ郭公　荇類屋茂兵衛 政信
初音な聞侍るさ友人にかたりけれ
はむかし人は一聲に命をかけたる
さこそきけそこにはいかにやなさ

たはふれられしおりふし又啼て過
行ければ

又きくは命の徳そほとゝきす　參州赤坂吉田氏　正治

聲のたきはいか成文字そ郭公　勢州村瀨孫右衛門　忠次

水かねを誰かのませしほとゝきす　攝州大坂住　壽清

水色の雲井になくや土岐の鳥　京五條富尾氏　重隆

井閒喜之俄にもよほされし會に連
衆四人有ければ

なけこゝへ聞によつたり郭公　攝州大坂住　貞因

卯月廿七日父の遠忌に郭公を聞
て

先考の涙なそへそほとゝきす　京四條田中與兵衛　正伯

聲たかく空ひくうなけほとゝきす　京二條高瀨氏　[illegible]盛

聲を笠に着よ五月雨の郭公　京平尾小兵衛　幸以

五月雨降侍る日長頭丸の御もとへ
たつね行けるに哥の會半さてたい
めしたまはすおりふし郭公鳴けれ
はかく云てかへりぬ

哥人や口すさみたれほとゝきす　攝州大坂住　壽清

醍醐あたりにて雨に逢て

やれきなけ笠とり山のほとゝきす　備中吉岡氏　信元

遅うしにのつたる淀のほとゝきす　奥田甫閑　清政

曉方ほのかに聞て

己か聲からすほとなけほとゝきす　丹波福知山山内氏　土心

め鳥にもつゝかれてなけ時の鳥　河州[illegible]田氏　由種

みたれ鳥にによあか月の郭公　伊賀[illegible]尾兵衛　[illegible]信

曉になけや木尊宗鶏の聲　京山本善兵衛　[illegible]人

あかさるや君の御謎と時鳥　江州大津福田氏　[illegible]

千金衣てうにもかへし郭公　播州姫路武田氏　三吉

稲荷にて

けふもきつなけやまたこん郭公　京山本[illegible]兵衛　善入

化鳥なりといつまても來なけ杜鵑　攝州大坂井岡氏　[illegible]之

妙なるは天の鼓か時のとり　同崎多田傳八郎　正安

雲の上に啼ゆくや子規究竟天　勢州桑名味岡氏　俊治

啼わけてきかせよ五調子規の聲　播州姫路　井上氏

空になく調子や上むほとゝきす　攝州大坂武野氏　俊興

はやし立てなけやちやんきり子規の聲　播州姫路武田氏　三吉

親は哥子は作れるやしきの聲　德窓

うくひすはとり親なにしほとゝきす　同

山彦の玄孫もあれほとゝきす　勢州松坂竹内氏　良信

足の疵みし人に似よ郭公　野口甚兵衛　則重

雲路をやかくる龍馬の沓代鳥　京東七條茨木氏　宗興

卯華の雪沓もうれほとゝきす　同

幾聲も聞たらとけんこゝろかな　敦賀野澤氏　永吉

一聲は時の一字かほとゝきす　播磨傍暦久左衛門　清長

一聲はめなしとち〳〵ほとゝきす　加次

名のらぬはいまた無官か郭公　武州江戸住　正賀

名のれるは是やふんとり郭公　攝州大坂住　灌永

名をあけよ昔は猶あけよ郭公　藤井吉兵衛　富重

名欲にふけてなけ夜半の郭公　江州住　塞哉

月夜よしこはつきよゝし郭公　京四條田中氏　正伯

禪鞠か眠をさますほとゝきす　泉州堺大野氏　儇廣

釋迦にほそん聲や大佛郭公　京五條[illegible]兵衛　近式

本尊は笑ひほとけかほとゝきす　信州吉岡氏　信元

在京の時西寺町にまふてゝ

本尊と鳥鳴とをれ京朱雀　勢州桑名住　良利

鳥のさくの本尊は是か郭公　攝州大坂住　請清

本尊やかけてくるそんほとゝきす　丹波福知山横山氏　吉英

かけてよきは本尊ほとゝき籬かな　攝州大坂井岡氏　常久

とこよ花やほそんかけ所郭公　熊野長嶋石倉氏　一入

郭公聲は殊勝なほそんかな　惠佐子十歳　久松

聲は谷にひゝけほとゝきすせんしやう　惠佐

雲の旗さしあけてなのれ郭公　同

雲にのるはをのかほそんか郭公　同

ある寺にて

しきの聲するは法事か寺の場　同

親に別れ侍し又の年の卯月に

聞たしなあの世の便と郭公　同

たつみあかり鳴や宇治山郭公　安靜

なきしやへれわか執心のほとゝきす　季吟

祖母七週忌に

かけたとや弘誓の船のほとゝきす　同

九重に稀なや麥のほとゝきす　貞室

來啼ぬや舌きり雀ほとゝきす　同

いさゝらは耻しめてみんほとゝきす　同

郭公われそこいちやの寐覺かち　同

西村長治つまの死去をとふらひて
つまなしにむつかれ軒の時鳥　同
熊野那智の山にて
聲にあけよ瀧も三重ほとゝきす　同
八瀬の山家にて待侍けれとなかさりしかは
里の名のやせ子にならへ郭公　同
卯月初つかた祖父覺知菴うせたまひし時
命にやかへてきかれし時鳥　同
くすしのもとにて
雲のはらになくはほとゝきす寸白哉　同
大津にて
鳥なかふなけ鳰の海ほとゝきす　同
勢州山田竹内何太夫とか云かもとにてかしこのすき人夜會をもよほしけるほとに當座に
村たちやほとゝき杉の聞所　同
物集女といふ所にて
屡代こへ爰はもすめそ郭公　同
屡代こふ聲をしたうつ郭公　同
をのかかたなときすとなくはとけん哉　同
獨吟の千句のうち
なのらぬはしうねき靈か郭公　同
名のれ月の弓杖つきてほとゝきす　同
堺にて成安法しにつかはし侍る
浦聲もよしや難波の郭公　同
泉州堺に下りし時かの所の人〳〵名殘おしみとて道まておくりて發句せよと云れしに
所からなんはも來なけほとゝきす　同
大坂にて有馬氏のなにかしのもとへまかりて
名のれ名のしきつも近し時鳥　同

橰　先師點
雨にさくや龍のおこせる雲見草　武州江戸昌雲軒　春清
水まさの雲か橰のはなの露　内田氏　平吉

盧橘　先師點
立花を居なからにみる座敷哉　播州姫路那波氏　山古
橘をいるゝ花瓶やかうしくち　寂光寺　泰圓
異判　みんつりと見ゆる若木やはたち花　京地市郎右衛門　可頼

生花によしや床夏床世華　備州岡山清水氏　吉久
枕香を貴妃や殘してとこよ花　攝州大坂武野氏　俊佐
たち花やむかし男のこしの物　攝州大坂住　壽清
ある方さまのやきはわたしに
匂ひある阿倍たちはなや御はかせ　作者不知
橘はけにきつとした色香かな　同
ほろ／＼と降やかんしの花の雨　安静

百合草 愚判
花の名のゆりふた程な輪も哉　攝州大坂住　貞因
名にしおはゝ四時に花さけ車百合　泉州堺住　幸重
露の玉を花に栽けり車ゆり　和州龍田住　草栖
をしへられ知や指南の車百合　德窓
鬼百合の口から出たか半夏草　勢州桑名水谷氏　長昌
池の中嶋にゆりの咲たるをみて
ゆりの花うつろふ池や鬼か嶋　兒山三郎兵衛　隠光
鬼ゆりやほたる火とほすとうたいき　季吟

芥子 先師點
花の帽子みのりやしけるけし坊主　松室右兵衛　寸枝
けしの花の盛に垣やゆいかのこ　下御靈前豐田氏　元重
ふる雨や火をとほさせつ芥子の花　丹波住辻氏　正次
愚判　茶入の袋ぬふ人のもとにて
こまかなる手際やけしの花袋　安静
芥子のかや御息所のはなころも　貞室

螢 先師點
螢とふ道あきらけしひしりのよ　寺町寂光寺　泰圓
闇の夜は月の留主するほたる哉　丹州福知山乾氏　之政
畫出ぬは身の火けならん螢かな　丹州福知山乾長介　政三
色くろき螢は晝の日まけかな　南都生嶋石見　行惠
暑き時はけにもほたるの飛火哉　丹州福知山乾三介　政通
流螢を打は敵か武者あふき　堺成就寺　玉缺
螢火は吹行風の手燭かな　貞因
手にとれはひち尻もひかる螢哉　寂光寺　泰圓
紙につゝみ持螢火や手燈籠　同
蛛の巣にかゝる螢やあけ燈籠　正成
風かほりもゆるは池のほたるかな　廣寧
草むらもほむらももやす螢哉　攝州大坂井岡氏　喜之
居所ももゆる螢の火宅かな　丹州福知山乾氏　直政
京より四里有と云宇治の螢を見に
まかりて
螢見もしりの間そ京と宇治　高瀬太郎兵衛　梅盛
をのつから飛やほたるの火打山　丹波福知山乾氏　政通

尾州熱田柳寸長
星落て螢となるや火打石　竹端
播州備磨津
窓にとんてあかる螢や日高川　意顧
攝州伊丹山村氏
水に火をいくる螢やおきつ鳴　盛定
攝州大坂井岡氏
山の腰まはる螢やひたち帯　喜之
吹風や螢火ちらすたゝら濱　貞因
貞野々口市郎右衛門
螢火にやけぬは火鼠のかはせ哉　視善
攝州大坂住
火をともす螢やいはゝ油虫　如貞
奥田治兵衛
異判
くるゝ口のちやくともえ付螢哉　政之
攝州大坂
水をやく火こそゆへとふほたる　未元
江州大津高橋氏
水てもえてあさ日にきゆる螢哉　正信
川隈は螢のひとま所かな　三忠
但州生野長野氏
みなもとに光るきみよき螢哉　桑秀
播州姫路渡邊氏
てる火かや葵の上にとふほたる　正貞
泉州堺住
篠舟の火床はとまる螢かな　貞成
敦賀犬井氏
草の戸や夜は螢の光り堂　重次
攝州大坂稻田氏
ひるに螢河原の石のひかり哉　信顯
越前福井山川氏
神なりの火か日に消るとふ螢　無樂
播州姫路村山氏
木毎にはほしくたれとよ飛ほたる　時雨
京大安住與市郎
茶の木原にとまる螢は火焔哉　能貫

かいともしとう螢よへ五月やみ　良安
但州生野中嶋氏
火とぼしは壬生の小猿かとふ螢　永
攝州大坂住
みたりにや蜘の家まで飛螢　常雲
播州姫路垣内氏
見る人の日星の花か螢の火　安云
攝州大坂住
吹友か隈成らしとふほたる　重
攝州谷本田氏
そらとふも螢の飛行自在かな　吉久
攝州大坂果瀬氏
窓に來て戸尻も照す螢かな　里
播州姫路高井氏
胸ならて尻に火ともす螢かな　元利
泉州堺硯市兵衛
寒食の祭か月にとふほたる　一武
攝州伊丹岡嶋氏
水無月は陰虚火動のほたるかな　重紀
兒山三郎兵衛
螢火や月の蛙のなめくしり　光
伊田左衛門
瓢簞にとまる螢やすいふくへ　可竹
つれてとふはおもひあふたる螢哉　惠佐

ある古寺に一夜とまりて雨のふりけるに
雨にもゆる火か墓原に飛螢　同
うちまねく火はこち〳〵と飛螢　安静
さき草に飛し螢や精霊　同
螢火は硫黄やうなきあかし哉　貞室
湖水のほとりより螢を取よせて蚊

帳にはなちて
みつ海をかやにせきいるゝ螢哉　同
くれつかた螢に露なかふとて
火せゝりにつれ／＼ならぬほたるかな　同
箔細工をするかもとにて
螢火はたゝこけはくの砂子かな　同
勢州松坂淨家の寺にて夜會に
是も又半金色かとふほたる　同
螢火やひるのあつさのもえすさり　同
日盛は晝と夜半のほたるかな　同
月の前は尻やすほめてとふほたる　同
行脚のつゐてに伊勢國關地藏とい
ふ所にとまり侍りしに庭の橘の花
盛なりけれは
たちはなの香にせゝられてねぬ夜哉　宗長法師

蚊

先師點　蚊遣をははらふ棒振虫もなし　攝州大坂住　貞因
庚申の夜蚊に喰れけれは
巾ならて人も今宵は蚊の餌也　丹州福知山山内氏　士心
かをとむる蚊帳は匂ひ袋かな　播州姫路水野氏　正重
蚊はかやの乳にくゐついてよたき哉　播州飾磨住　意順
蝙蚊いや夏の句にするよると晝　攝州小濱住　副村
具判　夏の夜は蚊帳風月の友もかな　濃州竹ヶ鼻太田氏　可政
蚊にくはれ人はかくろふ紙帳かな　紀伊和哥山日方氏　貞長
かは人をさしすせそ人はかきくけこ　尾州　有也
春も霞夏も蚊すめる山家かな　攝州井上彥兵衛　利昌
夢路には關守となる蚤蚊かな　紀州那智山良任坊　如海
蚤と蚊は人のにくみを餌食かな　越前福井住秋山氏　方竹
連哥師の宿にて
蚤と蚊のさし合やつらにくの物　播州姫路國府寺　政次
くらい付にくさはいふもおろかかな　攝州湯山住　重曆
ひるならてよるも血をすう蚤蚊哉　尾州名護屋伊藤氏　一和
蚊柱にあなよる佗し蚤の音　丹州福知山橫山氏　吉英
夜普請か蚊柱たつるゑいや聲　江州大津高橋氏　正信
蚊柱も扇のさきてきやりかな　江州大津早崎氏　重安
人の身は蚊柱立る地きやうかな　下村利兵衛　康吉
蚊柱のふとみや見する虫門かね　江州大津山本氏　正次
蚊柱は聲かとらしきゆふへかな　播州姫路吉田氏　利重
蚊柱にくさりをいるゝ夜かせかな　江州大津福田氏　光繼

蚊雷にましる螢やいなひかり　薩州鹿兒嶋園田氏　重好
蚊の聲は盜人よせぬ夜番哉　惠佐
行人は我とくはるゝはたかかな　同
敷居ならてたつや蚊柱溝のはた　越後糸魚川杉本氏　義鄰
蚊柱にうつ墨繩か蜘の糸　安靜
郭公またて待けりやふれ蚊帳　貞室

夕涼に蚊帳をつらせて

蚊やは生絹風はすゝしきはしる哉　同

夏虫　先師點

あんとんはをのつと夏の虫籠哉　木村太郎右衛門　重順
火をけすや身をくふのみ蚊夏の虫　京清水牛兵衛　梅森

苦竹　先師點

春過て夏たけぬるや今年生　播州姬路垣内氏　交云
大藪を持しや竹の子德人　京平尾小兵衛　幸以
女竹の子持莚や藪たゝみ　播州大坂住　如貞
竹の子や誠の水子かはの内　播州大坂　當心
竹の子のあたまにわくや藪虱　播州有馬郡　三田住
竹の子もさゝらと成つしねんこし　播州大坂井岡氏　行正
竹の子やそたてゝかゝる老の杖　丹州福知山乾氏　之政
生そふは橋姬かやまと竹　武州江戸阿形氏　山秀

愚判

ふかやふのわかたけ長き詠かな　京堀川渡邊氏　宗吉

たけのこはけに藪毀の世繼かな　和州郡山多賀氏　一筍
おへ出て皮迄むけたけのこかな　紀州熊野覺丁坊　正哲
たけの子も皮てつゝんた生れかな　河内清水氏　圓惠
かはうすに生れつく子やをなこ竹　尾州　春宵
生出るまうそう竹はから子哉　播州大坂住　有也
あへ物は姥竹の子のよはひかな　紀州和哥山西尾氏　貞圓
ふしはあれとはゝなき竹の子共哉　播州姬路高井氏　重勝
せいたかやこんから竹のとし生　元利
竹の子は朒ぬるさゝの肴かな　播州大坂住　忠昌
竹のこはみなそしなれや東坡かゑ　尾州津嶋　季吟

実梅　愚判

花の兄のみはすけなりよ梅の味　備州吉岡氏　大橋氏
實は落てすけなき梅の木立哉　信元

早苗　愚判

横田川近き里に田をうふるをみて

若苗をとるやひんたの横田河　尾州熱田加藤氏　一甫
苗を植草をとりたる田の字哉　薩州鹿兒嶋　太山氏
昔人の口やしなへのうへ時分　播州伊丹山村氏　盛定
けふは人のあすは我身のうへ田哉　德窓
下ゝの子も寄て早苗やうへわらは　安靜

五月雨　先師點

からかさの下を晴間か五月あめ　武州江戸住　玄砂

難波女よかつけ袖笠梅の雨　小谷甚太郎 久惠

五月雨にもりいへとなる御たゝ哉　伯州荒尾氏 直久

いつの年より大水出けれは

五月雨の比はこ川や大井川　丹波福知山池野氏 重久

五月雨やふつてわいたる池の水　井岡彌兵衛 吉之

五月雨になかるゝ家や屋形船　水野又左衛門 賴貞

蚊柱は筏になかせ五月雨　丹州福知山佐井氏 紹秋

若竹のしける時分やさゝみたれ　季吟

點判 五月雨は只大黒の世界かな　德志

五月雨はつれ〳〵草の茂り哉　但州生野長野氏 季秀

五月雨は屋ねにも谷の流れ哉　播州姫路長濱氏 自笑

頭痛煩人の方へ云やりける

難波頭痛やめるは梅の雨氣哉　攝州湯山住 玉章

梅の雨にいかつちや神の惜　攝州大坂井岡氏 吉之

天の原地おろしするかさんみたれ　備州岡山淸水氏 吉久

五月雨やへん〳〵たらり軒の瀧　江州大津竹内氏 長則

さみたれや都の外も今出川　言聽

旅宿にて

五月雨や急かぬ旅のあしやすめ　惠佐

からつゆや水なき空の五月雨　安靜

五月雨降侍る日有氣に入たる饗せし時

たふ〳〵とうけもて酒のさんみたれ　貞室

千句獨吟せしに第五

五月雨の雲や墨のみし龍の息　同

競馬 先師點

賀茂にいつきかし月毛なる競馬哉　京倉森善藏 正久

こまかにやけふふる雨のあしそろへ　伊勢五郎兵衛 成吉

點判 行見るや心の馬のあしそろへ　德志

日芸やむまの時めくあし揃へ　京野口仁左衛門 [illegible]永

菖蒲 付徐 先師點

菖蒲刀是そいはるの引出物　京大濱氏 元休

草なれと菖蒲刀や夏木たち　播州姫路三木氏 知重

軒口にふくは音のよき菖蒲かな　京大佛吉木氏 常祉

大和ふきの軒の菖蒲やなら刀　薩州鹿兒嶋 大山氏

はたこ屋や軒のあやめも一夜妻　寺町寂光寺 奈圓

點判 士農工しやうふをふかぬ家もなし　紀州和哥山日方氏 貞長

菖蒲刀これや軒端の板つくり　京二條内海氏 常可

軒にさす菖蒲やのほりはしの本　安重

軒のつまはといかむすめかあやめ草　江州大津福田氏 光繼

めてた笹をもちゐて祝ふ粽かな　京五條樋口氏　正信
よへのあまり有や六日の菖蒲の酢　恵佐
引かへて蛙を人やのむ菖蒲さけ　安静
なかきなは蛇のふしたけかあやめ草　季吟
やねうらの鮑にもらに近きあやめ哉　貞室

妻子の有氣に入侍る祝ひに

さかつきにけふそあやめをうけ祭　同

あやめふきたるふきそふるをみて

あさあやめすくな衣もつ蓬かな　同

石竹、付撫子　先師點

硯水かしひん石竹の花の露　播州姫路住相野氏　友
撫子のもりかや露のお玉女郎　丹波福知山竹屋　安嘲
野原にも生撫子やお夏女郎　紀州根來住　重俊
なてしこは色うつくしきあかこ哉　丹州志賀梅垣氏　正次
撫子や父と母あるおもひくさ　京三條柏氏　永貞
撫子や中さはこれも大和姫　武州江戸阿彫氏　祖秀
撫子に大和舞する胡蝶かな　播州姫路垣内氏　友云
あたゝまる程居て見たや石の竹　荷瀬屋茂兵衛　政信
吗判
咲花やうろのおんしやく石の竹　播州姫路加用　重助
色〳〵に咲や大磯石のたけ　德窓

籠に生たるをみて

ゐせきなふて籠に入るや石の竹　京川原町衣右衛門　重富
そゝけるや美男石竹の花の塵　京山本善兵衛　入道
なてしこの花壇かこふも耳かな　攝州大坂住　木也
撫子も一滴の露のはしゐかた　泉州堺畑山氏　友利
床夏によき置物そ花の露　長崎野澤氏　主茂

夏草　先師點

かんひの花をみて

さく花の顔はようかんひれいかな　井岡刑兵衛　吉之
花にをく露は眼皮の目かね哉　本町寳光寺　秦圓

あちさいの花をほりたる日貫求て

掘出しの日貫の花やあち細工　攝州大坂井岡氏　常久
ひらき見るは文か恐ゝ金銀花　讃州鹿児島是枝氏　盛延
金銀花ちれはあくたになし地黄　良利
日につくや鉄線花より金錢花　木村太郎右衛門　重顯
雨乞をするか夏野の竜華　泉州堺　橋本氏

金寶珠さかいふ草花を見て

らんかむに立つくし見るきほし哉　攝州大坂井岡氏　吉之

夏の声を

あか鷹も夏のあしにはきれめかな　南山壽院　案昔

利根草は饂飩の汁のからみ哉　勝浦　正心

愚判　かにひのはなに狀そへてやるとて

文添てやるやかんひの花の枝　惠佐

雨や母丸かせうめるてつせん花　德窓

釣舟にいる鉄線やかないかり　攝州大坂井岡氏　喜之

鉄線や黃金よりもまさり草　貞因

風車といふ草花をみて

おさあひの慰草かかざくるま　江戶源姓淺羽氏　昌

一輪もかすおほくさけ金銀花　尾州　之也

酒代のみか酒にもいるゝ金銀花　武州江戶源姓　吉言

賢人や石竹と見ん金銀花　播州書寫山　祐典

岩藤といふ花を生たる所にて

岩藤にかたをならふる花もなし　京二條高瀨氏　梅盛

岩藤やうこかす風の手子つかひ　內田氏　平吉

庭に植しをさり花の散侍るを

ちり〳〵になるやくつれし躍花　安靜

茨の花をいけて置けるをみて

いつまでもいけて置たきうばら哉　越前福井住　吉昌

花のころは心にかゝるいばら哉　京三條西村氏　淨雲

水草　先師點　河ほねのいたむは水の筋氣かな　江戶岡形氏　祖秀

わり菱に何を染してや浪枕　播州姬路垣內氏　友云

愚判　かうほねやうへは泥よりみかは水　德窓

うつろふかやら水草のはなこゝろ　江戶富田三左衞門　基明

鹿子　先師點　かすか野やわか紫のそうかのこ　季吟

愚判　とむる矢のせんさくやなんの鹿子狩　德窓

夜なへするやともしの影の鹿子結　貞因

目あはすや火串によるの男鹿の子　貞室

獸狩　愚判　後世おもへ何けたものをかりの宿　勢州桑名伊藤氏　良利

柘榴花　愚判　あた花の咲はくう〳〵柘榴かな　丹州福知山乾氏　直政

先師點　愚判　見にかへて扱もみたしや花柘榴　備州岡山松村氏　幸增

九里了賢といふ人のもとより石竹と花柘をおくられし文の返事に

石竹とおなし根さしや花柘　貞室

枇杷實　先師點　檢校の凉みに引や枇杷の葉子　京五條大濱六兵衞　元春

氷室　愚判　けふまてもはり番したる氷室守　內田氏　平吉

老の齒はけふもとけしなし氷餠　貞室

卯月さつき過て氷室やみつきもの　同

はりつめて千とせもあれな氷室山　同

水鷄 愚判

みつかきにきゐる水鷄や神たゝき　清水氏　言聽
よゐの雨に又たゝかるゝくひなかな　貞室

蟬 先師點

露を呑て時雨にはくか蟬の聲　薩州鹿兒嶋　大山氏
聲さらになきやまぬ蟬や花原磬　季吟
柳にはくはんをん經かせみのこゑ　攝州大坂木村氏　重順

和州にて

多武の峯に來て鳴蟬やから衣　播州姫路垣内氏　交云

愚判

蛙蟬や時節不同の哥合　德窓
夏よむゝ題は時雨そせみの哥　江州大津高橋氏　正信
なれか鳴聲やこんほんせみとうか　播州三木五百藏　茂下
青葉かとみれは蟬おれる小枝哉　但州生野長野氏　柔秀
朝なくは齋くひ經か蟬の聲　敦賀野澤氏　永吉
いし河の音や自然と蟬のこゑ　兒玉三郎兵衞　貞利
蟬の聲きくや木のすゑ夏のすゑ　紀州和哥山日方氏　貞長
うつ蟬のもぬけはからたたをし哉　江州大津竹内氏　長則
をのか名のけいこやつのる蟬の哥　惠佐

夕立 先師點

水無月晦日に

結願かけふ夏はつるせみの經　同
雨乞と夕立はこかねかたなかな　京五條清水氏　宗珠
ねやをもる夕立はまくら刀哉　京五條清水氏　一雯
夕立はおにきり丸か大江山　丹州福知山上月氏　重正
夕立やあつさしのきの作り庭　播州姫路吉田氏　利重

遠方の夕立にいかつちのなりけれは

夕立をよ所にきく一文字かな　播州姫路國府寺　政次
夕立をやはらてうくるくつ屋哉　京山本善兵衞　善入
いそのかみふる夕立や御神体　季吟

愚判

ゆふたちの作は雲次の類かな　京大宮住與一郎　能貫
夕立やいくふり見ても出雲物　丹州福知山一井氏　元重
夜るふれる夕立はけにねたは哉　播州三木五百藏　茂下
夕立の折かみなりやうちくもり　播州三木五百藏　寛政
よそにのみふる夕立やかたてうち　播州姫路垣内氏　交云
夕立に風の手懸るや空喧嘩　加友
夕たちや四五六月の番の鍛冶　但州生野寺田氏　豐重

竹切の日夕立しけれは

夕立や竹切の神事鞍馬山　攝州大坂川口氏　正利
雨龍を切白雨やたつた山　備前安倉玄益　章輔
夕立に切おられしや月の弓　貞室

扇

扇より黄昏や汗のとめくすり　玄砂
先師點 書とたに繪やはしら地の扇哉　堺岡知子氏 定宜
兵法かつかふ扇のうらおもて　杉本氏 永定
金銀の扇は風のもとてかな　作者不知
暑さをや切拂ぬる武者扇　丹州福知山住 長吉
はつたりと手をも團扇の細工哉　播州姫路武田氏 一吉
愚判 折こみて風にひたとる扇かな　江州大津福田氏 光灌

あふきおる具に馬さいふ物侍るをみて
馬の耳に風あてゝおる扇哉　安静
あふきおるをんなや風の神のみこ　武州江戸齋藤氏 重久
あふき相撲とれるや風の神祭　薩州鹿兒嶋 大山氏
風の神のしるしの箱はあふき哉　京二條高瀬氏 梅盛

八幡へまふて侍し時
八骨の扇や風のかんたから　惠佐
山〳〵をたゝむ墨繪のあふき哉　泉州堺寺本氏 一守
香をとめてもつもえようの扇哉　武州江戸村垣氏 弘武
あふきこそ暑きひたいにかさゆるき　攝州大坂住 元与
扇さす腰や月篇に要の字　敦賀犬井氏 重次
腰の物にそふ折紙はあふき哉　江ハ邑良軒 春清
ひらいたはさなからきとのの扇哉　尾州住 吉也
入日より夕風まねけ舞扇　貞因
是もまたせゐは有けり修羅扇　攝州大坂住 好道
風と云文字のなりや唐團扇　貞因

まつりのねりものをみて
手にさけてねるはたか子そ奈良團扇　攝州大坂梶山氏 保友

夏月

先師點 涼しさの月と扇やうちはなか　高瀬氏 梅盛
中にあるかつらや月の扇の繪　寶寧
螢火をうちけす月の扇かな　播州姫路吉田氏 利重
夏もしもといふ葛城の月見哉　長崎野澤氏 玄茂
西東のみのひろかや夏の月　攝州大坂 當心
夏の夜や一馬場にかくる月毛かな　武州江戸大井氏 重成
愚判 見とれてはいつ秋としも夏の月　貞因
夏の月は尺にたらさるあふき哉　戸嶋氏 良俊
夏の夜は月や短哥の哥の題　川北平左衞門 吉次
夏は脚をかろめて行か月の船　惠佐
すみぬるは繪にかく月の扇かな　越前福井山川氏 無樂
涼風をいたすや月の弓ちから　貞室

あまの戸に尻さしもかな夏の月　同　貞

祇園會

先師點

祇園會やいまに〳〵手向山　攝州大坂住　寺町眞光寺　如貞

根から六ゐ薙鉾引や綱手繩　佛師　泰園

ゆらめきし鶏鉾やさけの醉　正勝

十四日はけにいつくしま祭かな　京倉森善藏　正久

吟判　たつとしや山に木のある祇園會　二條高瀬氏　梅盛

わらはへのはやし物して渡侍るみて

傘鉾の文字の小人も役者哉　田中氏　可雪

山も川になすや津嶋の祇園の會　尼州住　之也

舟鉾やよこ渡しする河の棚　兒玉三郎兵衞　貞利

舟鉾にめして七日のお旅かな　安靜

瓜　付小角

豆　先師點

ほんてんやいはゝこんていこまの爪　薩州鹿兒嶋　太山氏

なるほとかよきそ將棊の駒の爪　播州姫路平位氏　重利

かたさかりなる畠に植たるを見て

かたふきた地にてもまふは瀧畫　播州姫路武田氏　吉吉

吟判　大きにてやはらかなるや大和瓜　武州江戸山田氏　貞利

小姫瓜わきりて歸る朝かな　江州大津石田氏　元永

出雲の人のあいさつに

八重垣は稲田姫うり畠かな　播州姫路須津氏　道龍

夕顔

先師點

小宗もや花で夕かほのまき柱　小谷藤太郎　久惠

吟判　夕かほやけにくからぬ花のえみ　正賴

夕かほは十九土用のやつれかな　知閑

はしめて獨吟し侍し發句

ひようたんはしは〳〵垣の茂り哉　貞室

鵜川

吟判　つかふ鵜の喉より出るやあいうへを　尾州箕浦丹作　藤友

鵜つかひの喉をしめたる川夜哉　紀州和歌山日方氏　貞長

鵜は水に火にも入ぬる鞴かな　貞因

鮎

先師點

夏川や春と秋との鮎の魚　播州姫路　重□

吟判　水色の濁るも鮎のしわさ哉　作者不知

目には見て手にとられぬやかつら鮎　京二條高瀬氏　梅盛

とらぬ日は鮎につらるゝ河鳥かな　貞因

漕のるゝ身をやきあゆの料理哉　安靜

客人にあいきやうはよき〳〵かな哉　尾州住　有也

蓮

先師點

蓮より出るや佛の御手の糸　播州姫路垣内氏　交云

池のはたにおりてもみたや蓮の糸　京倉森善藏　正久

と〳〵しう匂ふは想夫蓮花哉　之次

雨風や御題妙法日蓮華　秋田野代當福院　伯□

武州池かみにて

池かみにかくや法蓮華筆　攝州豐嶋喜兵衛　當黑

池に波の文字をかくやれんけ筆　南部　坂氏

みつからやかきわけ出る蓮花筆　越後柏崎大須賀氏　一範

愚判　みよりさきに飛出る蓮の句哉　京油小路藤井氏　秀朝

葉にそゝく露やれんけの筆すゝき　東六條山田氏　古次

はすの糸てすくやちかひの阿彌陀佛　薩州鹿兒嶋　大山氏

糸引を蜘とはいはてはちすかな　惠佐

壬生の蓮見にまかりしに未さかさりければ

ひらかぬはこんとんみふの蓮かな　安靜

花と香と三たひ一度の蓮かな　貞室

暑氣　先師點

十界を四季にあてゝ發句し侍しに人間

八苦にもますは九夏の暑さ哉　季吟

愚判　名にしおふまなつはあつき日のけ哉　貞因

泉　先師點

みかの原わきにあるまひ泉哉　陸岡久五郎　正佐

愚判　哥もわくか和泉式部かむねのうち　和州郡山都筑氏　直成

いさらるは尻をひやさん泉かな　和州郡山池田氏　正式

立よりて扇をたゝむ清水かな　泉州府中河合氏　祐慶

ある山陰のいほりたつね入しにそのほとりに清き水流れ侍あるしの僧此水を便にこそ爰には住侍れなさいへるを聞て哀れにもよほされて

庵室もたよりに結ふしみつ哉　惠佐

納涼

東山遊興のかへさに祇園の御旅所に侍る榎木の陰に立やすらひて跡になくれし友人を待侍けるに紹巴法しま見えてしきたいして通りけるに申かけ侍る

涼しさに榎木もやらぬ木陰哉　二位法印　玄旨

先師點　鈴風にあつけは内侍所かな　下御靈之町豐田氏　元重

夏は人をすゝしめ給へ風の神　播州姫路垣内氏　交云

涼しさや壽命の藥いきの松　如貞

盆山の石を

涼しさやこてまねきする玉柏　季吟

愚判　瀬枕は見るさへ涼し波かしら　但州生野長野氏　桑秀

ある寺にて

香盤の涼風かほれ寺の場　京藤田氏 正久

祓

先師點 水無月のはらいは跡のまつり哉　桕 利定

巻頭 ゆふへにもあさの葉てするはらへ哉　勢州桑名伊藤氏 良利

災難や流してよそにみそき河　貞室

身やすかれ水無月みそかみそき河　同

雖夏

盛夏にもきえぬや扇富士の雪　辻氏 忠勝

先師點 あきらけし四五六月のしさう星　攝州山下氏 正次

中直しい座にて

和田になる中やよしもり一夜酒　攝州大坂木村氏 重順

篝火てするや鵜飼の夜の能　薩州鹿兒嶋 大山氏

うのまねかからすみつかふ筆の海　季吟

愚人夏の虫氣になるや無養生　江戸阿形氏 祖秀

大和にも織かたひらのきぬの哉　寺町宿光寺 泰圓

巻頭 とこなつと申さん花のみやこ哉　江戸安井庄之助 繁友

飛かゝれ魚釣針も蝿かしら　藤田九兵衛 正久

とられても石になるゝやすしの鮎　江戸神田左兵衛 貞賴

風もたまり魚もたまるや扇網　下村利兵衛 康吉

浪のあやは水鳥の子のうふき哉　播州姫路垣内氏 交云

生玉へ雨請見にまかりて

雨請や神に願みをかけ踊　貞囚

雲の嶺の天狗たをしか雷のころ　泉州岸和田住 良辰

拜てふ富士禪定や雪ほとけ　信憲

雪は下りよちりいほれるや富士詣　江戸斎藤氏 重久

風爐の茶のなつめもうるし細工哉　備州浄山氏 重房

人のなき跡の百ヶ日に

袖にをくや百日紅の花の露　貞室

玉海集 巻第三 秋部

玉海集題目録

秋部

初秋 愚判

から風もけふ立来るや秋津鳴　加友

秋来ぬとよに詫言や風の神　熊野石倉氏 一入

逢へすに来る時付の文月かな　同

秋はけふ貴札過分の文月かな　松本清右衛門 定久

風に身のいるは文月のしるし哉　貞室

初秋の露といふとな

きのふかきし汗やそのまゝ今朝の露　同

一葉 先師點

龍頭の舟は蚫柳の一葉かな　田村甚九郎 重晴

常盤といふ所より落髮なそろゆる

もの出るな聞て

柳髮や風のときはのおちひねり　西田三郎左衛門 元知

愚判

一葉の散みたるゝや舟いくさ　京寺町浦辻長七 一正

一葉のふねや柳か浦つたひ　但州生野尾崎氏 貞則

紀州の人の挨拶に

一葉はきの河よりの出舟かな　江州曾根村大岡氏 信可

むしくいは一葉の舟の破損かな　武州江戸長谷川氏 正重

井のもとや桐の一葉のおとし穴　伯州荒尾氏 直久

桐葉にさうめんなもれるな

ひや麥に秋しる桐の一葉かな　正章子十三歳 德窓

七夕 先師點

たなはたや渡るたまたま玉のはし　元次

七夕のちきるれんりや梶の枝　季吟
あんするや七日七夜のほしの哥　安静
こひあひてけふやうちよる河皷　同
たなはたに花奉るとて
七夕に立る花もや七つえた　寺町宜光寺　泰圓
ひくうしや織女のかせのいと車　中嶋内藏亟　貞晨
七夕にかす着る物や七かさね　伏見水木氏　清光
愚判 文月は星にものかす手かた哉　攝州大坂梶山氏　保友
たなはたへかした間やあまころも　武州江戸渡邊氏　照繁
たなはたの一ねんとをる契かな　越前福井伊藤氏　良郷
たなはたの別れを
あふ星や間むつとのいとまこひ　京三條山本氏　善入
さんろ殿かこれも牛牽お七夕　江州大津高橋氏　正信
なさけにし醉て管まくやお七夕　備中吉岡氏　信元
七夕の發句を衆日より仕りもて出て
たむくるや此はらみ句をめ七夕　中川氏　喜雲
錦をらは蜀女とそいはんめ七夕　紀州和哥山日方氏　貞長
かさゝきの橋姫や是めたなはた　惠佐
かさゝきのはね橋や渡す天の川　貞室
あまの河やかこてふほしの舟渡し　同
たなはたやいそき紅葉のはしりとひ　同
六月に閏の侍しとしの文月に
あまの河やとし一月遅渡り　同
たなはたはけにもきひたる手つま哉　同
たなはたのお酌にたつや酒のほし　同
しちなんかけかれはなしゃめたなはた　同
逢あふやいぬかひほしは初夜時分　同
後朝の心を
起てあたふたつのほしの別れ哉　同

秋蟬 先師點
よは〳〵し小町か哥か秋の蟬　中井氏　忠幸
愚判 うくひすに春の連哥や秋の蟬　伊賀國上野松木氏　友次
秋の山に鳴蟬の音やいろは哥　攝州湯山住　一章　攝州姫路三木氏　隆重

秋螢 先師點
文月にとへる螢は燕脚かな　尾州清水氏　獨卜
愚判 らつそくの火か蒲のほに燕螢　貞室
秋かせに逃尻みするほたるかな　敦賀野瀬氏　定利

焼扇
そつとするや扇臆病風の音　九郎兵衛
愚判 秋風の手てひつたゝむ扇哉　貞貫

折釘に風をかけをくあふき哉　敦賀野澤與兵衛　永吉

稲妻 先師點

稲妻や名つけは秋の田きり姫　江戸阿形氏　祖秀

愚判

田の曜は稲妻のかよふこひち哉　江州大津久住氏　季政

いなむしろ敷てまつらしいねの殿　江州大津福田氏　光織

荷飯 先師點

文月やめてたく炊くはすのめし　季吟

はすの葉には何のいひそやその嘉例　勢州桑名伊藤氏　良利

玉祭 付施餓鬼 先師點

佛もやうくる龍女かたままつり　西田三郎左衛門　元知

盆に靈供をそなへ侍るをみて

盆の内になき玉出す術もかな　江戸阿形氏　祖秀

天川に立はた雲や水施餓鬼　攝州大坂　貞因

か茂川にて水施餓鬼するをみて

經よむや蟬の小川の水施餓鬼　兒玉三郎兵衛　貞利

玉祭 付盆燈籠 愚判

法界にたむけや水の玉まつり　京山本氏　善入

なきをとふそ世にあり貝の玉祭　京三條西村氏　淨雲

さとりてやのりうるうしの玉まつり　建部六兵衛　光林

みそはきの露の雫やくほたまり

右の發句は攝津國上牧の住元寄といふ人夢想に見侍るとかや

虫の聲に來てみそ萩の花野哉　攝州大坂喜多村氏　宗清

みそはきやなきを東坡か玉祭　貞室

みそはきや娑婆せつかいの玉祭　同

いきて居ていつまてもせん玉祭　同

招魂の法界やけふたままつり　同

舟灯籠といふものを軒につり置たるを

うらほんや獵せぬ釣の舟燈籠　同

追善に盆のとうろをかゝけて

それと見よ過にし人の影燈籠　紀州和哥山住　則友

本願寺の灯籠を見に參て

ともさせて見るやお緣の舞灯籠　京烏丸二條　宗方

盆の夕つかた森の中より灯籠をおくるをみて

しけ森にあけ燈籠の大臣かな　尾州熱田加藤氏　一甫

踊 愚判

ふりも比も盆しやりとしたをとり哉　京平尾小兵衛　幸以

かけてまはるをとりの哥や廻文哥　賀州金澤篠田氏　明忠

大淀のうら盆なれや伊勢をとり　信徳

新發意もきらふか見えぬ伊勢躍　攝州大坂喜多村氏　宗清

生澤川の魚も題目をとりかな　中川氏　喜雲

相撲 先師點

つめよはくわるゝはうしかつき相撲　播州姫路垣内氏　交云

清水ほとあせをなかすや關相撲　攝州大坂之住　如貞
しらま弓とるや紀の路の關すまひ　同
山ふしもとるや安宅のせきすまひ　丹州福知山之住　尋意
知しらぬ手にもあふ坂や關相撲　攝州大坂住　方泰
つかみたをすすまふや四十八てんく　薩州鹿兒嶋　太山氏
愚判　いさかひのもとゝりとるな辻相撲　敦賀野澤氏　永吉
かうを取や人のかしらの辻すまひ　德窓
文月の夜半の相撲はひねり哉　尾州住　之也
夜相撲にとる手や月のかはつかけ　尾州住　有也
おくの手のいつせきを取相撲哉　攝州大坂五十嵐氏　昌利
そつとこかす相撲はなけのなさけ哉　泉州堺永野氏　賴廣
押手かつ手とるや弓絃のせき相撲　兒玉三郎兵衛　貞利

文月　先而點

秋といふ證文なれや文月夜　攝州大坂住　貞因
世界にし披露は誰か文月夜　丹波福知山乾氏　之攻
蔡倫か紙か霧間の文月夜　清水半兵衛　維素
下書か水にうつろふ文月夜　攝州大坂井岡氏　喜之
みとれてや空ふくるまの文月夜　紀州福知山玄性女　泰園
愚判　無筆なも拜見するや文月夜　道静
風に雲やはしり書する文月夜　林八兵衛　元辰
半月はおりかみなれや文月夜　播州姫路幸田氏　正舍
聲か何かそはに星ある文月夜　惠佐
文月や見る人／＼をあてところ　同

あひしりける人のつくしにてなく成にける比

文月やゆけともにしのかたひんき　季吟

かはゝの文鎭をみて

文鎭は文月にそふ蛙かな　攝州大坂澁谷氏　安明
黒雲や墨すりなかす文月夜　安靜

露

ふみ月の似せ物なれや水の月　敦賀野澤氏　永吉
愚判　あさ露は釋かぬとても木正成　紀州和哥山日方氏　貞長

父の七回忌あつまにて執行て

むさし野も我袖つきよ露なみた　正晉

中尾氏の人の母のうせしをとふらひて

はゝそちりて小袖にもろし露泪　京富小路俵俄氏　貞室

霧　先而點

雲きりは實盛秋の初かな　佐藤氏　貞女
すんふりと山もしつむや霧の海　甫
愚判　夕霧やそひく落葉のぬれ心　攝州大坂岡崎氏　一之

槿

槇の木は霧たちのほるはしこ哉　但州生野中嶋氏 安永

風の手もてかへほしにけり霧の海　丹州山内小林氏 重安

朝かほにたか露ひとついれほくろ

是は櫻井恭佐の句とかや承侍る

先師點 槿にまたぬ日かりは源氏かな　攝州大坂岡崎氏 一之

朝良や日かけにおちてかゝみ草　越後相崎 柚都

朝かほにちやくときせたや檜笠　丹州立原太田氏 古貞

愚判 朝かほのしほめるや日を見あけしは　京藤井吉左衛門 秀朝

朝かほや出額による老のなみ　攝州大坂住 政武

朝顔は目をさましたる花見かな　惠佐

朝かほや色も瑠璃君玉かつら　季吟

誹諧の友早世せしないたみて

朝かほにせんこす人の盛かな　貞室

荻

先師點 あふき荻にゆつるや風の聲かはり　佃太兵衛 倫良

愚判 はより出るやさしすせそしう荻の聲　尾州 有也

しはかるゝ下葉や荻の聲かはり　京藤井吉左衛門 秀朝

萩

愚判 ある御かたの山里に庭作らせ萩な色〳〵植て御一族うちつれて愛したまふその人にかはりて

まことも〻見よや我この小萩原　徳惠

荻萩や春の季ならは梅さくら　貞室

薄

先師點 世にかくれなきは薄のほまれ哉　丹州雲甸山内氏 旦麻

氣もみたれ見るにすゝきはほたし哉　高瀬太郎兵衛 梅盛

はらみつゝ出すは薄の發句かな　薩州鹿児嶋 太山氏

愚判 中くろになひけ新田の旗すゝき　小松原梅翠子 時明

鷹の羽の薄は瓶にさし葉かな　紀州和歌山目方氏 貞長

かゝみ草にそふ山鳥の尾花かな　播州姫路垣内氏 交云

すゝしめの袖は尾花か風の袖　丹州宮津住 秀宣

人の庭の岩のはさまより生出たるをみて

いは化して庭はひつしの尾花哉　貞室

女郎花

先師點 さけはとこの野も攝津野よ女良花　攝州大坂住 如貞

通力をうしなひや仙女郎花　中井氏 忠幸

ある女の五七日の追善に宜春大さこなさ五の卷の心なとよみ侍けるつゐでに變成男子といふ事を

女郎花變してなるやおとこ山　季吟

愚判 はうておれねよけに見ゆる女郎花　攝州大坂井岡氏母 紫春

ぬすみとるやまおとこ山の女良花　下村利兵衛　康吉
衆ならで蜘や糸引をみなへし　尾州之也内清水氏　獨卜
愛着のその根はかれし女郎花　梅盛
地獄谷の使にたつかをんなへし　勢州桑名伊藤氏　良利
咲かたや在郷ふかきをんなへし　徳窓
をみなへし手をるや破る邪婬戒　山林氏　重貞
女郎花ちまたに咲やみちのもの　備州安倉玄益　章輔
つらつえてみる助老花や庭の面　貞室

芭蕉

ある寺の玄関のほとりに植られしをみて
玄関の前にはよしや奏者草　池田氏　恵佐

蘭　先師點

蘭菊の露やつもりてきつね河　泉州堺硯氏　正次
異判　雨のあしいるゝやひらくふちはかま　一武
野にきてや手折さきおりふちはかま　摂州大坂岡崎氏　一之
匂ひいつれ紫らん白らんらんしやたいい　徳窓
夏は綠秋やきなる裳ふちはかま　和州郡山之矢野氏　重貞

鉢にうへしらにい咲侍るを人のもとへつかはすとて
おもひきりてしん覧するそふちはかま　和州郡山都筑氏　直成

仙翁花　先師點

せめて盛り百日はあれな仙翁花　播州姫路垣内氏　一云
折をいかること葉やあらゝ仙翁花　摂州三田之住　吉香

美人草　先師點

見事さは瑠璃をや野邊の美人草　丹州福知山山内氏　藤
繪にはともかくや昭君ひしん草　播州姫路　重
草苅の戀の重荷かひしん草　播州姫路吉井氏　利
惡風は花のかたきそ美人草　大傳清水氏　貞光母
異判　天のなせる麗質なれや美人草　播州姫路渡邊氏　貞
露をきて色やおもんする美人草　紀州和歌山日方氏　長

秋草　先師點

花見するほとやひま行駒つなき　武州江戸岡形氏　秀
とゝめはや秋のひま行駒つなき　京千日小兵衛　以
引馬野に手綱といはん駒つなき　丹州福知山乾氏　政通
北風に虫やいなゝく駒つなき　摂州大坂住　之次
露をあくる小車の花や水くるま　丹州福知山田寺氏　積
植て見よまこかはんより犬子草　摂州伊丹津松油氏　意順

雞頭花の盛なるに垣なつようゆひたりしを見侍て
ゆひまはす垣は闇路か雞頭花　丹州福知山乾氏　政通
異判　是も又相馬の紋かこまつなき　摂州姫路寺田氏　正舎

草かくれにはない咲たるをみて

かけはたゝ木の下なれや金剛草　播州大坂住　友以
小車の花や手折て人たまひ　相州[illegible]見氏　[illegible]鄕
枝なからほうつき吹や風の口　下村利兵衛　[illegible]吉

いはれんけの花なみて
石佛あるにつけてやいはれんけ　播州大坂住久兵衛　重休

やはつ草といふ物を植たる宿にて
よりてひくなまゆみの木の矢筈草　武州江戸住　秀長
露そゝけぬる蝶あしの折黄草　杉岡小兵衛　信貫

芦穗　先師點

芦の穗は達磨尊者の拂子哉　集圓

虫　愚判

かなきれる聲や時しも秋のむし　東海氏　正賴
聲をきく人にはむるや轡むし　播州三田住　無及
聲せぬははめたかわたのくつはむし　季吟

保友もとにて野虫といふ事を
耳しあれはきくこや野への無心亭　同

いとゝといふむしを聞て
寄合へは鳴音もふときいとゝかな　德窓
蟷螂の斧をかりてや木こり虫　丹州氷上玉巻　重成

鈴むしをめてける人のもとにて

むしの中て聲の王かや朕ちろり　濃州竹ヶ鼻太田氏　可政
虫の音や氣の毒ならぬ鶉ちろり　京五條[illegible]田氏　重隆
樟腦かむしのよはれる野邊の霜　江州草津木村氏　重道
露霜にかれうひんなや虫の聲　播州姫路住　求友
聲かるゝ虫はねひえを霜夜かな　山端　嗟哉
蟋蟀となかてや聲のかしかまし　惠佐
蟋といへは後や蟀ゝむしの聲　越前福井住　塞童

野遊ひの暮つかたひもしなりけれは
なくころやひゝくあたまのきり／＼す　備州松村氏　幸增
へついちかくなくやあなかまきり／＼す　德窓
根をほりてはむや木鼠きりき栗鼠　季吟
とてもしなは書置もせよふてつ虫　丹州福知山横山氏　吉英

物のかなしかりしゆふへに
そちは何をなけきの森のよるの蟬　貞室

隣家の人來ていくつあれはかかくかしかましくなくそなさいふを聞て
とをはかりかふてこそきけむしのこゑ　同

たちこゑやたゝ松むしの若みとり　同
鈴虫はわれとこゑはるゆふへかな　同

露をそゝきて

よはれるに露をかはゆやむしの聲　同

色鳥　先師點

たかなはに色鳥〳〵を野しめかな　攝州大坂井岡氏　行正
慰はいろ色鳥の啼音かな　攝州大坂住　正隆
異判　里に鳴みやまも聲は高根かな　徳窓
山から〻籠にいるゝもはなち鳥　濃州竹ヶ鼻太田氏　可政

鴫　先師點

姥鴫のやすむは小田の小町かな　丹州池野氏　重久
姥鴫のたちかねはつけ鴫の杖　播州姫路垣内氏　之富
姥鴫や名つけていはゝはぬけ鳥　武州江戸岡形氏　祖秀
異判　寐覺にはとく〳〵しきの羽をと哉　敦賀住　秀辰

鶉　先師點

深草の鶉籠くむ竹田かな　京之住　重吉
むこ山の鶉の聲やひきてもの　丹州志賀梅垣氏　正次
異判　夢にきくはうつら鶉のねみゝかな　季吟
深草はらくわいとふける鶉かな　周防岩國（泉本作者名缺）

秋鷹　異判

鳥とるや小鷹なれとも大つかみ　播州大坂蘭兵衛　吉之
おふてきて連雀をとる小鷹かな　攝州大坂住　正隆

鹿　先師點

不便さの何かはこれにしかの聲　攝州大坂住　貞因
山へふね上るやかいろしかの聲　丹州福知山乾氏　赤坂
鹿を追ふ獵師は山をみすき哉　播州姫路三木氏　知重
うしならて鹿に笛吹さんろかな　薩州鹿兒嶋大山氏
異判　又もなけきゝてかいらう鹿の聲　丹州上杉佐々氏　正茂
さみせんのさをしかや音もかいらうひ　季吟
さほ鹿やよきいね所いなむしろ　江州大津西村氏　吉勝
からるゝやしかの悪日不出行　敦賀野澤氏　永吉

諸葛文の懐舊の千句に

行せねとろくはらみつる妻鹿かな　季吟
おとろかぬ鹿はなれこに鳴子かな　和州郡山池田氏　正式

秋田　先師點

世上秋の物なりよしさて民のよろこひけるに

小田やかにてくるは稲のほまれ哉　高瀨太郎兵衛　梅盛

鳥羽にて

里ならて鳥羽田の稲やつくり道　同
ほをかたけ風にる眠る田つらかな　影山吉左衛門　文明
大風についといねたる田面かな　攝州大坂住　貞因
澤田守僧都や水にうき藁主　丹州福知山乾氏　政通
里の長田たはかるは是かまたかな　攝州三田住　重香

かゝし道もおと僧都との鹿田かな　攝州姫路國府寺

異判
烁の田はわらはか為のほさつかな　丹州上杉住ゝ氏　茂

馬に付るいねはくはんをんにさつ哉　尾州住　之也

山田にしゝの付たるを作るなきゝ
て

烁の田やしゝくほさつの佛供領　勢州富田照泉寺　守輕

かり田にも二ほさつあるゝわせおくて　川北平左衛門　吉次

情にいれてたもれと頼む僧都哉　阿州撫養内田氏　小信

いねころふ山田は鹿のふしとかな　攝州大坂住　昌成

山田てもみのりを守るそうつかな　攝州高槻住　正時

うちむれて落穂ひろふは田つら哉　但州生野中嶋氏　安永

たかれるやたかれるあとのむら雀　貞室

落鴈はしりたれ帶か山の腰　清水四郎左衛門　言聽

雁
先師點

三芳野のたのむはかりそ文つかひ　攝州大坂住　友直

伏見にて

金札か夕日かゝやく天津かり　攝州大坂住　如貞

字つくしか共數しらぬ天津鴈　武州江戸阿形氏　祖秀

籠に入は鳥飼やうの鴈字かな　泰圓

番ひ居る鴈や女文字男文字　武州江戸阿形氏　祖秀

芦原に落ぬるかりや錢の文字　攝州大坂住　貞因

異判
ふくみぬるあしは旅鴈の路錢哉　濃州竹ヶ鼻太田氏　政

掉になり川邊わたるやもかり舩　清水氏　吉聽

かりかねを射てとる時は矢文かな　尾州住　有也

鴈またの矢先や烁の眞たゝ中　可頗

行鴈や雲にしはらく入聲字　攝州伊丹岡嶋氏　重紀

双ひゐる鴈のすかたや分毫字　攝州大坂黒氏　元興

をく霜をふむは韻字か天津鴈　尾州犬山山覺院　卜需

そろへてやならふ鴈字の眷屬　惠佐

下手はふかく鴈のすかたはとの字哉　敦賀野瀬氏　定利

あし跡や平砂のかりのにしり書　攝州大坂住　正重

有馬氏壽白千句催したまひける第
六に

うす霧の空行かりやしゝみ文字　荷類屋茂兵衛　政信

鴈は文字おほふや霧のゐんふたき　季吟

月影に光りわたるやはくのおひ　同

月のいる雲は袋かあまつかり　京嘛田九兵衛　正久

雁瘡とかいふもの煩侍りて箱根か
ちなる比嘛て渡り侍を聞て

月

先師點

雁猪もかゆかりに秋やしりこむら　熊野長嶋石倉氏 一入

いつ見てもよいそや三ケの月の良　丹州篠山一井氏 重光

月迎寺夜雨寒にて

月の白、見せの川霧かたなくもり　紀州粉川住 分

雲やみの笠あす月の雨用意　泉州堺住 政

雨は天の上よりふるや月の暈　越後柏崎野崎氏 盈

天にすむ月の蛙やあまかへる　播州姫路三木氏 重

雲水につつんふり月の蛙かな　徳田太郎兵衛 貞

富貴天にありとや月の白鼠　長崎野澤氏 玄茂

くろ雲はかふるな月の白鼠　播州姫路 幾重

黒雲やさながら月の鼠の巣　同

黒雲は聲せぬ月夜鴉かな　播州姫内八十兵衛 安云

夜るを晝とうそを月夜の鳥哉　京大佛住 貞光

月の兎日のからすとや飛こくら　秋田野代守庵 尊傳

東に月出て日は西の山に落かゝりければ

月と日やよく金銀ににし東　清水友光 母

ある寺にて

ひかしやまの月や大圓京の秋　伊賀國上野住 一慶

淨家の寺にて

西方へのりえていつか月のふね　丹州篠山上月氏 貞

のりえなは月の御舟や[illegible]　清水半兵衛 春

台家の僧のもとにて

宗觀中をあらはす月の[illegible]かな　岡田三郎左衛門 知

みなそこの月は[illegible]見よかし　泉州堺住 貞

たゝら濱にて

たゝら濱にゐて見る月の鏡哉　一イ

船中の月見に

月はひとつみる目やふたつみつの濱　攝州大坂住 貞円

水の月や天上天下由井の濱　攝州大坂住 之[illegible]

月の輪のてらす禪定てん下哉　同

公家達はおなし雲井の月見哉　勢州津之住高濱氏 [illegible]貞

行平のあそんて見るや須磨の月　味岡久五郎 正佐

哥稽古の人のもとにて

よめやよめよむとの葉はよも月見　高濱太[illegible]兵衛 [illegible]盛

月に又白雲うくや玉にきず　紀州粉川住 [illegible]治

さまたけや月をまたくる雲の足　敦賀住犬井氏 [illegible]久

風に月は雲の帯とりはたかかな　[illegible]村上塚本氏 [illegible]

手に取て見たきのみそやさか月夜　丹州福知山乾氏　政通
日は入て鐘の月出す夕部かな　吉野住宇野氏　浄治
月影そ底から見事橘の水　丹州志賀住垣氏　忠次
海山を自由に行や月のふね　越後柏崎蓮藏坊　一顯
月の舟さす棹や竹自在天　攝州大坂住　之次
さほの川にさいて出るや月の船　丹州福知山一井氏　久重
江の邊につなひてほしや月の船　辻氏　忠直
ほを持や薄に移る月のふね　薩州鹿兒嶋澤田氏　米秀
月の舟あかのぬけたるひかりかな　紀州粉川大伴氏　定義
夜は長門月はあかまのひかり哉　攝州大坂住　壽清
秋の夜は長えの鐘の月見かな　紀州廣浦住　正心
半月はさし物なれやほし甲　丹州福知山一井氏　久勝
半月を出しにもちるよ甲山　播州姬路垣内氏　交云
目には見て手ににぎらぬや月の弓　播州飾磨津脇氏　清長
風ならで破窓を射るや月の弓　泉州堺住　勝安
屋の内てるなからみるや月の弓　攝州大坂住　滿永
まきあけて月待山やいよすたれ　薩州鹿兒嶋　太山氏
月の影くらまはたゝめ屏風坂　西田三郎左衛門　元知
海に月のうつるはゐにもかけすゝり　下御靈豐田氏　元重

さらしなの月うすの内もてりふ哉　薩州鹿兒嶋住　政重
たらいほとな月こそ出羽のゆとのさん　京橋本久兵衛　一好
解脱かや月も笠きの影ほうし　京望月又兵衛　正武
めくる月の影法師もやくるま僧　攝州大坂住　如貞
放下僧か弓はり月のかけほうし　京五條杉本氏　示定
月の夜は俗も出家かかけ法師　播州姬路　幾重
きせわたか白雲かゝる菊月夜　泉州堺住　清之
菊の座もてらせ甲の星月夜　藤田九兵衛　正久
見る人の口へいれかなもち月夜　越後柏崎住　杣都

茶屋といふ人のもとにて

たへてみん代ゝ茶やの望月夜　喜多氏　直能

忌の中に

ふく屋にて見るや最中の月のかほ　同

團扇の丸か今よひの月のゆき　正章子十四歳　元次

八月十五日湖水の月見のあるしかた有馬氏意安先生したまひて花火いくつも立給ひけれは

手ほたんたにしゝまろき月やひはの海　同

おなし夜湖上に近き名所を題にて

十五句の發句なせよとあるしの先
生正章なとにすゝめられけるに波
止土濃を

はしとのや大宮人の月見かな　同

おさあひのわらにて馬なさして遊
ひゐ侍るを見て

切わらの駒もいさむや月の秋　一好

阿部川にて

阿部川や秋もなかまろしけふの月　播州三木五百蔵　寛政

八月十五夜は庚申に雨降けれは

雨雲のさるをまつ夜の月見哉　攝州大坂住　木吉

病後に

よろこひは存めい月のなかめ哉　攝州大坂住　之次

兵庫にて

よめにこそ見るむこ山の名月女　播州姫路垣内氏　交云

閏かな今宵の月をもひとつき　梅盛

いも名月といふ心を

天の原やこよひの月のいも畠　攝州大坂梶山氏　保友

かつてんとうな月て見る今宵哉　交云

武江にて

むさし野の月みる比そ十六夜　京五條山田氏　正盛

月のよき瓜さねかほや十六夜　備州池田佐伯氏　正弘妻

月の良やふけてもわかし十八夜　梅盛

九月十三夜に

今宵又桂の花やさきの月　清水氏　吉聴

ちかはさる影そうの毛のさきの月　攝州大坂堤氏　元與

十三夜ふけて雨ふりけれは

ゆて汁か栗名月の夜の雨　江州大津早崎氏　正則

正章子元次いさけなかりし比しゝ
か谷といふ山里にて月影やたゝ金
色のしゝか谷といふ發句して見せ
におこせし詠草のおくに書つく

しゝか谷の月見る兒は文珠かな　貞徳

誹諧のこと付囑して點なさゆるし侍
し舊弟のため竟宴の會をもよほし
て

てんなかく千ひと挙るや秋の月　貞諦

月　付駒迎　愚判

天の道もまかるはいかに三ケの月　備州松村氏　幸増

乾坤の箱のとつてか三ケの月　備州岡山小松原氏 時明
天の戸のつりかすかひか三ケの月　杉岡小兵衛 信貫
三日月の弓と見ゆるや人たらし　江州岩脇九兵衛 正秀

九月三日に

三ケ月は大豆名月の二葉かな　宇治堀氏 宗治
兎ならはかたみゝならし三ケの月　京油小路藤井氏 秀朝
雲にほえぬけ物か月の白兎　季吟
ほそき月の今よひは廿日鼠哉　丹州福知山一井氏 重光
人をさへ引出す月の鼠かな　熊野石倉氏 一入
月の鼠くひさきたるか雲ちきれ　江州大津早崎氏 重安
稲につゞくはぬは月の鼠かな　紀州那智山住 道諄
あれねとも日さます月の鼠哉　紀州和哥山日方氏 貞長
いぬの方へゆかぬは月のうさきかな　越前福井住 無樂
いるかたは西をさし矢か月の弓　尾州名護屋住 貸勝
月弓のかけはおそれよゐのこ雲　紀州石倉氏 一入
なつと此秋の月夜やゆみと絃　加友
戰ひに握るや修羅は月の弓　徳窓
立つ居つみよ月弓のつる〳〵出　敦賀住 秀辰

有馬氏の何某興行の千句第七に

ひわり戸のすきまかぞへや月の弓　季吟
月と人と相住ならしやふれ家　徳窓
つきあけて月落にけり窓の内　備州吉岡氏 信元

作事小屋の井の邊の月をみて

宿れ月爰も作事の小屋の池　京東寺住 定久

城中にて

おもしろの詠めや月もすみ矢倉　攝州井尻住 玄孝
おも四六おもふ十日の月見かな　播州書寫山 祐典
見ことさは花と雪とて月夜かな　播州三木五百藏 寬政
ゆけに行や身にひつ月の影ほうし　池田氏 正次
すかたみや月のかゝみのかけほうし　俊之
月のうつる露や鏡とく栢榴粒　攝州大坂澁谷氏 安明
月の劍は世界をまもりかたな哉　江州大津秋岡氏 滿清
ひをなかふかけるは月の劍かな　徳窓
月の輪の藥さきにみゆる木立哉　但州土肥氏 義也
雲の上や月も桂の院の御所　俊秀
たれあるとおとこつきにはかつら哉　京高橋氏 元信
闇の夜は月やかつらのさとかへり　西田三郎左衛門 元知
月影のかつらを水にとり木かな　泉州堺硯氏 一武

水に影おろし初るや月の舟　奥田甫閑　徳忠
池水の波間の月やふなゆるき　攝州傍磨津松浦氏　清政
月の舟は世界に渡る光かな　攝州大坂住　亘順
此かいのあらは絶せし月のふね　攝州井見住　重次
さすかけはまつかいたれや月の舟　京東七條茨木氏　立孝
夜遊ひにかこつけて出るや月の船　京平尾小兵衛　宗宅
南北に湊はなきか月のふね　攝州大坂住　幸以
北斗をもたのまぬ月の御舟哉　武州江戸富田氏　友以
代待は運賃とるや月のふね　勢州桑名住　基明
水のおも荷つまてやしつむ月の舟　武州江戸住　良利
殘れるは月や朝日のむかひ舟　繁友

赤間か關にて

いるはうしあかまか關の月のふね　備州岡山小松原氏　時明
塩天にみちてや出る月のふね　備州岡山神崎氏　宣之
鵲の橋の下にや月のふね　備州岡山松本氏　且曉
十五夜や二艘もやひし月の舟　攝州大坂住　徳窓
たなひくや月のふなとめ霧の海　熊野石倉氏　路春
滿時に月しほもなきくもり哉　一入

藝州の人のもとにて

見る秋の月のかほもやいつくしま　勢州富田　重繼

池邊におほく人いゐて酒のみける
な

見物の人やなみゐる水の月　泉州府中　宗勝
蝕するは影のやまひか水の月　三河岡井住　無樂
まうきをもはらせる月や阿彌陀圓　紀州那智山住　言志
月の前に立はたかるな雲の脚　東六條上山氏　道諦
月を見ぬ人こそ無道しんの闇　信光

月あかき夜友人哥よみてみつから
にもそゝのかされしかさも遲りて

歌よめと人はせつきの今宵哉　國枝惣右衛門　直旨
月をめてよ年はよるともわかの友　肥前住　三忠
月夜よしと巻は夜よしの旅かな　如自

獨山家の月なみにまかりて

晨明やつれなふて忠峯の月　尾州熱田加藤氏　一市
ちいさまの杖月影はのゝしかな　澁谷氏某　長藏丸

なき人の二七日にあたれる日

月入てしたふ方もやにしむ日　勢州桑名住　良利

江州草津の宿にて

所から月しろあかる矢くらかな　藤木庄右衛門　正屋

雲霧や只月代の二重かへ　宮川三郎右衛門　長之

山寺におこなひすまして居ける人をとひ行て

孟秋の雲もはれたる月見かな　武州江戸堀田氏　蘆錐

職人盡しの繪に傳へきを見て書つく

月の雲もへけてのけかし安藝のくれ　進藤理左衛門　世耻

名馬を牽るかた書たる武者繪を見侍て

池つきのかけはする墨の雨夜哉　備州八木藤兵衛　頼眞

雨よりも先に笠めすお月かな　河内住　光義

更て月の暈きたりければ

見物を耻てやめせる月の暈　攝州大坂住　恒貞

三嶋にて

月さへもめすやみしまの眞菅笠　清水四郎左衛門　言聽

むさし野の月見ぬ人やふしうしん　濃州竹ヶ鼻太田氏　可政

信濃國にくたりしおりふし

ま夜中は寢覺の床の月見かな　賀州金澤篠田氏　昞忠

鼓瀧の月をみて

革のなりに丸し鼓か瀧の月　攝州三木五百藏　茂下

勢州朝くまのみやにて

朝熊の名にしる月の和國哉　青地市郎右衛門　可頼

一の谷にかたふく月やさかおとし　加州住　正種

玉造りの月を見て

月の影や小町かさかり玉つくり　攝州大坂喜多村氏　宗清

顏圓き月も東州の生れかな　河内清水氏　春宵

雲水や洗ひて淸き月のかほ　江州今津石崎氏　可隆

出ていらぬ綸言もかな月天子　伊藤助左衛門　信德

月にほれかけさへ見ゆる山のいも　越前福井伊藤氏　良郷

宵闇は雲のはらみか月とまり　薩州鹿兒嶋住　秀幸

はしめて子うむへき人のために心の中に祈ると侍て

天の原やすると出る子望月　宮川三郎右衛門　長之

影やけに身ふたつになる小望月　攝州古曾部住　吉和

八月十三夜の月見に客をえて又あくる夜に

過し夜のなさけの末やこ望月　勢州松坂竹內氏　良信

めくりあひて見しやさりにし子持月　尾州宮崎氏　友下

子もち月は闇にまよはぬ光かな　攝州大坂住　正隆

桂おとこあるかゆへにや子もち月　尾州犬山岡本氏　谷直

天は父といふにつけてや子持月　武州江戸神田氏　貞頼

丹州きれのみやにて

所からもち月見るやきねの宮　備州松村氏　幸増

鼠にやひかれて廻るもち月夜　丹波福知山横山氏　吉英

曇れはや自身と笠をもち月夜　備州岡本三十郎　吉辰

もち月や夜々にくひかく日のねすみ　徳窓

望月の駒やひやせるあまのかは　勢州富田蓮花寺　寸松

八月十五夜夜吉野にて

たいたうのよしのはよしや餅月夜　泉州堺寺本氏　一守

いさよひの月やきのふのもちのかけ　泉州堺住　成安

甲州へ參りし時

月も笠めすや名におふみのふやま　徳窓

月や今よひはゝかりなから和哥の友　阿州有田七左衛門　正吉

人をによろこふ月は三五かな　備州船木勘兵衛　清讃

いたう煩侍し子の不思儀に本腹しけるよろこひに

天にあるはうんめい月のひかりかな　恵佐

八月十五夜ある寺にて月見あかして

佛壇の須彌をめくるや寺の月　同

月の影も星のことしや草の露　同

いりかたの名月な

名を捨て月もや山に御隱遁　季吟

十三夜に

朋とみる月や二夜をへんつくり　同

十三夜の月いつの年よりさえけれは

曇りなきお月やふたよみよの秋　同

栗名月に

りちの聲は御名の物よけふの月　同

さやの山や大豆名月の出ところ　京四條梅田氏　正久

蕪よりいも名月やひかしやま　但州生野中嶋氏　安永

雨降けれは

あまのはらにおしこむ玉かけふの月　南都池尻氏　末信

雲に風や月に三五夜中のもの　京五條富尾氏　重隆

八月十五夜新在家にて

月見せん三五夜中の新在家　備州岡山志賀氏　俊安

東山にて月をみて

今よひ三五あすみん月やしゝか谷　和州郡山池田氏　正式

哥仙發句中務を

三五夜の月こそ炼の中つかさ　可頼

蝕十二分かけける時

月は三五かけてや三四十二ふん　攝州大坂谷輪氏　正因

あたら名に瑾の月夜のくもり哉　泉州堺住　成安

月花やかに出たりしを餘りめてく

つかへる人に云

あきれたるかほ月てみる今宵哉　和州郡山都筑式部　安成

めいけつや星をはしぬる目の薬　備後國住　任夕

からやまとこよひ月見を詩哥哉　伊賀上野松本氏　一以

名聞に月さへふける今よひかな　江戸昌雲軒　春清

月見よとおこすはいもか今よひ哉　長徳寺第三世　助信

名月や月中なから月かしら　荷類屋茂兵衛　政信

朔もさそな他方の月の秋と云句を

初めにて日次にせしに二日月を

日かへりはふつかの月の雲路かな　貞

尤(貞)丸な月もや風のふきねすみ　同

むかふ風はまきりて出るや月の舟　同

大江山にて月遅かりける夜

愛てちさとてらせ大江の山の月　同

出て月御名や四方にとりの刻　同

八月十五夜須磨浦の月見んと只獨

おもひ立侍りしによき舟にてまつ

十三夜の月をみて

うれしゝや名所の月を明後日　同

八月十三夜に雨いたくふりければ

名月の空もうしろめたくて

降へきかあさても扨も月の雨　同

雲堂居士にて

文机になれてや月も數万卷　同

濁江をすませる月や摩尼の玉　同

海邊の月影に小船さしありくは海

士人のいはしをとるにそ有ける

月のあけにむらさきうはふ網引哉　同

八月十四日旅の空にて月をみて

故郷はいかに待らんこよひ月　同

雁かねや今よひは月のみやすゝめ　同

小野ゝ月見に

花ならはけふやまさかりをのゝ月　同

名にたかき月の桂や七多羅樹　同

三界に根さすや月のかつらの木　同

てる月のかつらは四十おとこかな　同

十五日の雨に

願たてよけふ降月のあまかへる　同

けふは魚の名よしや月も空の海　同

名月といふ心を

ほめはやせ月も夕の口ひやうし　同

もちならは今よひの月やさんこへい　同

十五日夜月蝕に

天のはらや月はみつるを腹のむし　同

雨雲に德をかくすかけふの月　同

すきものより居て十五夜各十五句
の月の發句申侍し時

今よひそとしらて見事や𫝆の月　同

こよひたつきふりあふきまてさら濃　同

源もしか名も高あきら月のかほ　同

須磨の月見に趣し比むかし行平卿
の住たまひし所やいつこと尋侍
しける上野山福祥寺とは是なり
須磨寺なり此山の東の尾につゝき
松一村侍るを月見の松と名つけた
まひしなと人のをしへけるほとに

松にすめ月も三五夜中納言　同

関すへよ今よひ更行須磨の月　同

いさよひの月くもりけれは

いさよひの月は無明のさかけかな　同

光明寺といふ所にて

月もこよひ十三佛のひかりかな　同

雨後に

雨の後の栗名月やひろひもの　同

くもりける十三夜海邊にて

大豆盤のあな影ほさし今日の月　同

大豆の名の月にも歩の才もかな　同

更過るまて月見ありきて

十三夜山野にまよふ月見かな　同
貧しきは衣うつ間をきぬたかな　播州姫路水野氏　直重
かたぬきて打は衣をきぬたかな　泉州堺住　清之

碪　先師點

うてたてに打よこつちの碪かな　同
ねむけさす賤は衣をうゝつかな　播州大坂井岡氏　常久
夜寒にやさふらふ衣うつの宮　長崎野澤氏　玄茂
みつとも〈紋の碪や宇都の宮　播州姫路三木氏　知重

愚判

三拍子そろふ碪やしころうち　播州大坂住　友久
きぬうつは初鴈のわたり拍子哉　季吟
むらうちにいねふりをしる砧哉　貞室
山彦の音や砧のいれひやうし　同

九日節會

公家も下ゝもけふは菊亭の流哉　和州郡山池田氏　正式

愚判

異國にもわか重陽のいはひかな　播州傍磨津松浦氏　意順
もてはやす九日の菊や星まつり　播州大坂井岡氏　喜之

としいさわかき翁のもさにて追従に申侍る

九族もけふは九日のせちゑかな　紀州和哥山日方氏　貞長
祝ひつゝ酌さゝ栗の節供かな　泉州堺住　成安

九日のいはひに

仙人も命やつけるきくのさけ　大澤清七九歳　生敬
今朝のむや酒の匂ひもまさり草　濃州山崎氏　塵哉
誰もつめ菊に見いれぬ魔さり草　貞室
桃菖蒲よそに菊くむ節供哉　同

野子元次病中慶壽九月九日

百薬の重湯にくむや菊の酒　同

木門主よりおほせを侍て申上ける

お流れや千代を八重さく菊の水　同

菊　先師點

大内の御庭の菊さて人のみせければ

桐壺に作れる菊やけんし酒　播州大坂住　友直
菊の淵のぬしとやならん花作り　丹州福智山乾氏　之政
淵も瀬に呑ほさん菊の酒宴哉　泉州堺住久米田氏　忠重
つほむ口を杜康や菊の酒袋　播州豊嶋住　當黑
酒舟によする波かやきくの花　京二條高瀬氏　梅盛
とてものまはよへ／＼八重の菊の酒　播州姫路垣内氏　安云
五度三度めすや八重咲きくの酒　木村太郎右衛門　重順
つほ／＼てのめや猩ゝきくのさけ　播州姫路那波氏　由古

壺にいけは龜菊と名を遊女哉　薩州鹿兒嶋住　泰圓

曾我菊の淵もやとらか涙川　太山氏

犬坊かそかきくをうつ雨の音　池野氏　重久

赤色は火曜星かよきくの花　小谷甚太郎　久惠

猩々か猿のかほりか藩架の菊　荷瀨屋茂兵衛　政信

一めんに咲は碁石かほしみくさ　泉州堺淺井氏　正村

梅ならて菊の露にやほしくたり　丹州福知山山内氏　見藤

異判　菊は是いんいつとてもみとかな　但州生野土肥氏　義也

下戸も來て野見あかさるや菊の酒　城州伏見住久我氏　安永

久米といふは是そ仙家の菊の酒　但州生野中嶋氏　安永

酒しほか菊に置そふけさの霜　攝州大坂梶山氏　保友

白菊のふち案内な霜夜かな　攝州大坂住　友以

半井家の醫師のもとにて

なからゐをくめは藥や菊の水　葛野九郎兵衛　定之

星と見は菊水や是あまの河　攝州大坂武野氏　俊佐

星とみてほくとおらはや菊の花　河内清水氏　春宵

日に光ははれぬ星やきくの花　同

淵明の淵の字やこれ菊のふち　尾州之也内清水氏　獨卜

身を投てすく人やみる菊の淵　長嶋佐野氏　忠清

ませは塘たゝへし酒か菊の淵　德窓

杯の愁はらふ箒かきくのさけ　同

花桶はたゝ菊酒の手尊かな　平野之住土橋氏　一重

伏見の祭の後宴に行けるにあるし
おきなにすゝめられて

けふくむや不老ふしみと菊の酒　作者不知

猩々の菊も酒星のたくひかな　同

白菊の哥人も霜のみつねかな　攝州三田住　重香

としよりの歌にはさそな翁くさ　紀州和哥山日方氏　貞長

幾千代かしやう見やう居士の翁草　京平尾小兵衛　幸以

殘菊やかしらのかたるおきな草　但州生野中嶋氏　安永

ゆひそふる竹や釣竿おきな草　攝州大坂五十嵐氏　易利

面をぬひてもらひにかゝれ翁くさ　伊田長左衛門　可竹

ほしといふや人の籬のきくの花　一直

菊酒はすひけいらぬにほひかな　清水氏　言聽

色よ香よ是のみみたし菊の酒　攝州大坂大平氏　伯貞

あちはひはからや高麗きくの酒　安靜

窓の前にたかやかなる菊なうへたる宿にて

酒藏か窓より匂ふきくの花　惠佐
遊仙の枕香なれやきくの花　同
秋山の原田にさくは菊池かな　攝州伊丹岡嶋氏 豐常

名所のきくを

給過てふきあけにたつな菊の酒　貞室

醍醐行樹院にて九日に

菊酒もとり〳〵にくめ醍醐邊　同

といふ發句を當坐に申しければあるじの僧正是いにしへより月は珍重と當座に口ずさく宣はせしを又珍重ならずや此賢作をしらせんとて愚句の拙きを書付ぬ　又旅立侍る比

山路ては酒にともしき菊見哉　同
元來やほしと岩根の菊の花　同
からめける舟にいけてやほしみ草　同

おやに別れし人のもとに九月九日につかはし侍

さぞやけふ涙の河の菊なかし　同

九月十一日の夜元次うせ侍しその枕上にこのほとまて詠し菊の花のうつろひて侍りけるをみて

菊やその枕に殘るくすり酒　同

葛 付葛 先師點

うら枯の葛や信田のきつねいろ　泉州堺水野氏 賴廣
軍場かあらしにをふつまくすはら　季吟
赤壁やゆめにもみしをかへの蔦　同

色葉 先師點

手習にかく小野山のいろは哉　播州姫路垣内氏 交云
赤人の詠や木々のいろはうた　攝州豐嶋住 當黑
むら時雨染ぬる木ゝや色〳〵葉　井岡彌兵衛 喜之

東山赤山大明神にて

赤山は實も色つく木の葉かな　京中村虎助 長昌
秋のいろはみなちりぬるをわかれ哉　京倉森善藏 正久
ちりぬるをわかてとめたきいろは哉　丹州福知山住 長吉

無判

山は霧に筆法見えぬ色葉かな　泉州堺硯氏 一武
ひとつつゝ拾ふいろはやはなち書　德窓
黑もしにましるいろはやかんな付　同
蛛の家に懸るいろはやかなしはり　加友
かき置しいろはをたくやかな火箸　紀州粉河大伴氏 定義

山寺のしほちの灰の上に物かくを

みて

灰にかく色葉の筆やかな火箸　丹州福知山横山氏　吉英

發句までかなとめにするいろは哉　紀州廣瀬又五郎　清秀

名木紅葉　先師點

千金によもや楓のむらもみち　伏見坂本氏　正芳

楓の紅葉のちりがたにいろくろみ
侍るを見て

染て以后色をかへての木ゝも哉　同

色つくは露の玉子のかいてかな　播州姫路須澤氏　是誰

ちるはいつと指おりをする楓かな　丹波福智山乾氏　政通

風をもつて木に作りなす楓哉　攝州大坂住　忠昌

神風に拍手打や楓の木　德窓

おかはあかき三木天神か梅紅葉　小谷甚太郎　久惠

誰もみる梅のいろはやかな暦　江戸阿形氏　祖秀

紅葉するはさひ鑓梅の長枝哉　井岡彌兵衛　喜之

楢柴のはいろ見事や鷹尾山　有馬氏意安　壽白

點判

天神法樂に

この神の御哥のぬさや梅紅葉　京藤井吉左衛門　秀朝

紅梅に染なす山のもみちかな　生敬母　久女

母と紅葉見にまかりし時

おもしてみるもはゝその紅葉哉　攝州大坂井岡氏　喜之

かたかなといふへき櫨のいろは哉　紀州和歌山岡崎氏　忠雪

色葉をやまなんて時にならかしは　季吟

貴葉あるや木鶴に鬼の紅葉符　德窓

上京の比東山内か谷といふ所にて

草木もきはを見せけりしゝか谷　賀州金澤篠田氏　明忠

木ゝも色好むやむかしおとこ山　攝州湯山住　三章

もみちたかぬ林は飲酒かいてかな　濃州竹ヶ鼻大田氏　可政

ちみつるもよの木ゝよりやはや漆　貞室

ある御かた篳篥相傳したまひける
竟宴に

吹風のこはいろを松のもみち哉　同

紅葉　先師點

下紅葉容にうつすや天か紅粉　江州大津若林氏　[illegible]慶

葉なみもやそろふてあかき下紅葉　越後新潟吉井氏　吉信

虫のくふ山のおく葉やうすもみち　丹州福智山山田氏　正繼

霧とをす下葉はつんと紅葉哉　丹州福智山平出氏　利之

たいそれて見ゆるたかおの紅葉哉　播州姫路内山氏　直重

色に出る酒は紅葉の賀飲かな　一イ

秋來ては朱にましはらぬ木ゝもなし　木村氏　重順

異判
もみちには上田と名に龍田かな　阿州撫養内田氏　正信
籠鳥も雲より是やこいもみち　泉州堺硯氏　一武
木見に寄て思ひならひぬこひ紅葉　加友

追悼に

紅葉かつちり灰となるたきゝかな　同
燒色そこかるゝ釜の下もみち　泉州堺住　成安
紅葉ゝの霜はすわうに礬砂かな　加州住　正種
もみち葉や遠目に見てもかくれなゐ　攝州上牧住　文索
もみち葉にかせきわするゝ獵師哉　泉州堺住　貞成
折なとの札は紅葉のまもりかな　攝州大坂住　壽清
風の手はあか木の珠數やをし紅葉　播州姫路垣内氏　交云

こゝろやすき友達にいさなはれ龍田のもみち見にまかりて酒なさたうへて

神もゆるし給へ紅葉をたき祭　和州郡山梶金平　勝重

神前の紅葉な

かゝやくや紅葉のにし日神の前　荷類屋茂兵衛　政信
紅葉にやひんかし山もにしの色　尾州熱田寺井氏　和俊
もみちには蘇迷盧ならぬ山もなし　播州姫路須澤氏　足誰

枝川や月のかつらの下もみち　佐藤氏　榮甫
つほのうちに見ゆるや脇の下紅葉　尾州名護屋伊藤氏　一和

綾小路の宅にて

山は錦都は綾のこうしかな　青地市郎右衛門　可頓

書寫山にて

書うつす山は色繪かむらもみち　播州姫路村山氏　風子

白河關にて

白川や染て紅葉のにしき革　伊東又兵衛　則常
つらのかはゝ酒のしからむ紅葉哉　勢州松坂住　重友
もみち葉をかさすや下戸のさか恨　貞室

高雄の紅葉のかけにて酒あたゝめて

霜を火のたき付にする紅葉哉　同

紅葉鮒　先師點

龍田姫の贄にそなへよもみち鮒　紀州廣瀨氏　時秀
湖にうつるか紅葉ふな木やま　播州姫路垣内氏　交云
船岡の山の紅葉はいろこかな　攝州大坂木村氏　重順
染川を渡りし魚かもみちふな　江戸阿形氏　祖秀
血色とやいはん水底のもみち鮒　播州餝磨津住　意順
異判
御膳にも鮒やてうする紅葉の賀　桑名住　方成

燒ぬすきもこけいろなれや紅葉鮒　武州江戸之住　伊奈氏

もみち鮒はあたゝめ酒いさかな哉　尾州住　有也

茸　先師點

たけゝいひくちひらといへと木の子哉　播州姫路高井氏　元利

しるたけもいまた見えぬやこけ莚　播州上牧富松氏　元寄

天狗茸となるも木の葉の變化哉　播州姫路内山氏　一イ

しよくもつかこの葉をかふるねすみ茸　城州北村權三郎　季次

異判　ねすたけてうし侍る日おりしも甲子なれは

是やきのえ子より生する鼠茸　尾州熱田加藤氏　一甫

とる人や草の根をはむ鼠茸　江戸昌雲軒　春清

賴豪か比叡の山路のねすみ茸　五條松本氏　永定

榎茸なてうし侍る所にて

雨にひらきたつるや傘の榎木たけ　武州江戸住　秀長

夢てなし松茸生る山のはら　富尾彌二郎　重隆

松茸の笠や木の葉の雨用意　武州江戸富田氏　基明

北山御茸狩の御幸に秋毎に供奉したてまつりけるおりふし

秋ことの御幸松茸や幾千とせ　正量

木實　先師點

八朔に親のかたへ色々の木實などくるなみて

このみなをおやをたのもの節句哉　攝州大坂ノ住　高清

古木に年〳〵くるみのなりけれは

我見ても久しくなりぬ姫くるみ　播州姫路吉田氏　利重

口あきて人にくはるゝしやくろかな　攝州大坂井岡氏　行正

追善に

手向なんしやうしはなるゝさくろのみ　京樋口平兵衛　道知

四國猿のくらふやさぬき圓座柿　薩州鹿兒嶋住　太山氏

四こく程なれや讃岐の圓座柿　木村太郎右衛門　重順

折てくふ味やよしつね為ほしかき　薩州鹿兒嶋澤田氏　末秀

おちふるゝ木の實や親に合せ柿　播州姫路垣内氏　交云

落ふるゝ身となりつねや丹波栗　薩州鹿兒嶋武林氏　守泉

栗をゆてあくるも丹波いかき哉　木村大良右衛門　重順

猿手かきひねくりまはす木のみ哉　高瀨氏　梅盛

ひろはんと秋山姥や山めくり　播州三木五百藏　茂下

實の數や五百十六あらかんしゆ　南部隱戸氏　之利

取にゆく人もみちひけ佛手柑　紀州和哥山日方氏　貞長

異判　木のもとへ皆よりまさせ椎給ひ　播州備磨三木氏　可隆

寵愛やこうしてたゝるあまさくろ　攝州大坂井岡氏　吉之

袖にいるゝかうるいやむかし物語　德　窓

きつきの宮にて橘のなりたるをみて

雲州橘や植てきつきの御神木　但州生野住　正　長

ひえのやまにて

神かきもしゆくし色なり八王子　季　吟

この味にしく物もなし圓座柹　攝州上牧住　文　索

鈴かけて枝の鳥をへ頭巾かき　河州清水氏　春　宵

澁柹はみのいたつらになり木かな　泉州堺住　貞　成

無用なるくしたくはへやあまほうし　德　窓

花ならて雨にひらくや桔梗笠　三宅新太郎　嘉　雅

雜秋 先師點

敦賀にて

葡萄をも出すやつるかの市の棚　泰　園

なたまめは生木のためのつるき哉　佐藤氏　榮　甫

杯口のなすひ葉にある虫葉かな　江戸阿形氏　祖　秀

芋の子の絹はをのれか產衣かな　播州姬路　幾　重

大臣の知行ところや秬畠　薩州鹿児島是枝氏　盛　延

秋の夜の霜の袴やなかはかま　丹州福智山池野氏　重　久

茶の湯の會に友運かりけれは

りん〳〵と友まつむしの茶の湯哉　攝州大坂井岡氏　喜　之

道心のかるかやふきのいほりかな　竹生庄左衛門　雪　竹

かはねとも見る色鳥やすりゑの具　攝州上牧富[illegible]氏　元　寄

菊なゑかきし鏡臺を見て

そか菊はよききやうたいの蒔繪哉　五條市川氏　正　次

好林坊亭にて雁の繪のかけ物をみて當座

繪にかきし雁も座敷のとこよ哉　攝州大坂住　貞　因

油月の光りかくさぬくもてかな　同

四判

青大豆やとうふのうはか若さかり　前妙心寺大淵和尚　玄　弘

むかしほりし芋か垣根はあれ地かな　備後住　任　夕

鍋に身をこかすもいもの子ゆへかな　喜　之

はすいもの葉の露やふり舍利の玉　伊東又兵衛　則　常

法花の法談を聽聞して

ぬけ出てたうとき蓮の見のり哉　苻類屋茂兵衛　政　信

蓮のみはとんてをこらぬ君子かな　二　忠

色いつれそめとのゝ后龍田姫　和州郡山住　定　幸

秋このむ中宮なれや龍田姫　敦賀大井氏　重　次

產前の祈禱に日待する人のもとに

て

よろこひの聲菊月の日待かな　沙門　是友

まかてみる心の月や胸すたれ　春霄

毛や莵月ならてはしる筆の海　尾州下里氏　俊貞

人のかた見の羽はゝきをみて

羽箒は身まかりかねのかた見哉　播州姫路三木氏　藤近

床に布袋の繪をかけたるを

うらほんゑかくるもをとり布袋哉　播州大坂住　永雪

へうたんとなるは小家のふくへ哉　西田三郎左衛門　元知

念佛はたつ雲霧の劍かな　長徳寺秦譽上人　助信

玉海集　卷第四　冬部

玉海集第四目録

冬部

初冬

先師點　十月をこゑてしらする時雨かな　重利

紙きぬに澁をそゝけるさて

小春にもかきそめをする紙小哉　播州三木五百藏　寛政

十月ねまつりの時

小春にも祭るはきのえ子日哉　和州一言主　玄雄

胡麻狗に留守をさせてや神無月　和州今井今西氏　正盛

同判　鬼はかり籠るか塚の神無月　和州郡山池田氏　正式

落葉しく庭や掃部の神無月　備州吉岡氏　信元
貧家にや常住福の神無月　播州大坂井岡氏　喜之

朔のとふきに友人のもとへまいり
侍しに袴を忘れて

非禮をもけふはうけてよ神無月　惠佐
けふよりやいろ葉ちりぬるかんな月　貞室
しゆせんしにかみなひ山を時雨哉　播州大坂住　万春

時雨 先師點

あふ坂山にて

逢坂のしみつくほとの時雨かな　影山七左衛門　文明
はら／＼と成や時雨のふる紙小　丹波福智山山内氏　見藤

愚判

しくれする空はいやめな小春かな　播州姫路加用　重助
天にくちなふして何を夕時雨　秋田野代常福院　尊爲
伯陽をこふる泪かゆふしくれ　季吟
あふた時笠はぬかれぬ時雨かな　播州大坂住　忠昌
ふつて着物ぬく時雨にや一しほり　京平尾小兵衛　幸以
あらく吹風もと／＼しくれかな　武州江戸村垣氏　弘武
川風と水懸合をしくれかな　加友
松風の音にまきらはしくれかな　敦賀住彌兵衛　重識
山坂もころはてはしるしくれ哉　江州大津西村氏　吉勝

紅葉 愚判

神無月十六日惠日山東福寺にまふて丶

えんによりて紅葉見寺や開山忌　惠佐
風口にはめよ木の葉の猿くつわ　江戸阿形氏　祖秀

落葉 先師點

金閣寺にて

風に落葉將棊たをしそきんかくし　高瀬太郎兵衛　梅盛
木の葉ちらす嵐は天狗たをし哉　丹波福知山池野氏　重久

龍田と云ことをかくし題にて

腹のたつた河つらにちる紅葉哉　播州那波平兵衛　山吉

愚判

この葉ちるやねは疑はしくれかな　參州赤坂内藤氏　頼香

金龍寺にて

山寺の上葺したる落葉かな　播州古曾部寺本氏　吉和
風の息もる山口の落葉かな　妙蓮寺學室　知春
柏木の根もとはなれぬ落葉かな　泉州堺住　成安
過し夜の風を火にくふるおちは哉　三忠
吹さうな風は木の葉の雨氣哉　京平尾小兵衛　幸以
風の神や木葉天狗をつかはしめ　伊賀國上野松木氏　末友
天狗達の涙の雨は木の葉かな　德窓

人の母のうせし追悼に

葉はちりてさひしさうなる木立哉　江州江戸源姓　貞昌
落着はみな雨となる木葉かな　和州郡山梶氏　重
蜘の巣や木葉の雨の足まとひ　武州江戸昌雲軒　春清
玉をなす木のはの露や猿まなこ　尾州住　有也
風ふけは空に群るや木葉猿　播州大坂五十嵐氏　易利
もゆる火に木の葉の雨はあふら哉　東六條住　兼長
ふる雨や木葉ころものうはすゝき　惠佐

観世流の謡うたふ人のもとにて

色落か紅葉をちらす風の聲　貞室
空はれてちれる木葉やひてり雨　同

東海正賴子なうしなはれけるないたみて

冬かれはけにこかなしの落葉哉　同
露も今朝霜に僕鄕か劍かな　紀州和哥山日方氏　貞長

霜

先師點

有馬山にて

地獄谷を劍の山に霜夜かな　播州大坂住　貞因
霜のつるき屋根つきとをす寒さ哉　播州大坂井岡氏　喜之
そつと鶴にをいたか霜のはなかはら　辻氏　忠直

和田の御崎にて

霜風にわた〳〵ふるふみさき哉　清水氏　吉親
降て草のうすれは霜はほらやかな　丹州福智山山田氏　利之
雨のあしも霜はれになる月夜かな　泉州堺岡野子　定宜
霜は潤かしやつはりとなる昔衣　泰園
千草のかへり花かや野邊の霜　同
華表かや神の前なる霜はしら　播州姫路三木氏　知重
霜柱たてるや苔の髭やくら　泉州堺住　成安

愚判

うくろもちか地を持あくる霜柱　德窓
關山の根に柵ふるか霜はしら　葛野九郎兵衛　定之
身ふるひもたつ程寒し霜はしら　京五條杉本氏　永定
地こそ先いてつきたてれ霜はしら　惠佐
雪桁をわたさん爲か霜はしら　濃州竹ヶ鼻太田氏　可磐
口あしいれて破るや霜のあさ椿　伏見住　重治
いつみても霜の劍は拔身かな　丹波黒井住　退步
水のたるやうなは霜の劍かな　播州大坂住　貞正

要法寺日exc上人御興行和漢の才おはすよし聞えければ

哥や詩のよき材木そ霜はしら　貞室

老師病中に祈禱の會なともよほしけ

ろ時

老松や霜にかれせぬ千代の聲　同

長崎野澤氏　玄茂

寒草 先師點

そてなきと疑ふは冬の薄かな　松本氏　定久

異判 寒夜にも霜をし菊の薫り哉　武州江戸大學院　秀長

冬さくや乳くさのあまり弟草

貞德居士追善

かれゆけと匂ひや跡に翁草　攝州大坂住　貞因

水仙花 先師點

壺に入水仙やこれひちやう房　攝州大坂喜多村氏　宗清

水仙にみそれのかゝりけるを

金さんてみそれ酒をやすいせん花　苻類屋茂兵衛　政信

下葉もや花瓶の口をすいせん花　青地市郎右衛門　可頼

冬月 先師點

難波あたりにて

月雪やまた霜天にみつの景　木村太郎右衛門　重順

異判 寒くとも雲なかふりそ夜半の月　和州郡山今是氏　吉保

寒き夜もうるみこそせね月の貞　江戸呂雲軒　春清

月遲き夜

ふれやさとふらは月もそさえ時雨　攝州大坂土橋氏　一重

時雨はれてあまつさえけり空の月　惠佐

見さい〳〵さい鳥さえたもち月夜　薩州鹿兒嶋是枝氏　盛延

氷 先師點

水干の衣といはんこほりかな　木村太郎衛門　重順

談義坊主きるや氷のころも川　播州姫路　幾重

異判 しかま川やこれぞ氷のはりまかた　播州姫路三木氏　知重

むかし日本武のみと東夷をたいらけまし〳〵てのちかの劔をこめたまひつゝこれを草薙の明神とあかめ奉ると聞て順禮の時まふてゝつかうまつる

神劔かよるへの水のあつ氷　德窓

霜と氷雌雄ふたつの劔かな　大坂喜多村氏　宗清

屏風の細工をするをみて

さゆる夜の氷や風の袋はり　尾州住　之也

すいへんに皮はる波のこほりかな　熊野那智山覺了坊　圓惠

古川に水をたやすやあつこほり　武州江戸住　忠重

江戸下向之時

氷てや沓入もせぬまりこ河　攝州平野土橋氏　一重

宇治川の網代かたむる氷かな　同

川舟もはり出されぬこほりかな　惠佐

はりたもち波の氷のころもかな　春宥

水玉やひらりとのへてうすこほり　三忠

水神の宮にもかけよ氷面ー鏡　江州大津西村氏　吉勝

魚や餓鬼水をひとみる寒地獄　京寺町浦辻長七　一正

水桶も氷りて見れは氷桶かな　兒山孫左衛門　光屋

敲出し又茶を煮出す氷かな　貞室

玳瑁か落葉かうへのうすこほり　同

波のあやを板ひきにする氷かな　同

妻になくれし人のもとへつかはす

こほらぬは袖の泪のしほけかな　同

氷柱

愚判

松にさかるつらゝや藤のかへり花　武州江戸堀田氏　蘆錐

霜はしらさかさまにたつつらゝかな　播州大坂松尾氏　昌次

ひにあふてとくるつらゝやさほなまり　但州生野幸村氏　貞行

尾張衆より發句こひけるほとに

八棟に八劔たるゝつらゝかな　貞室

霰

先師點

寒山や降るはあられのたま箒　京五條住　宗親

屋根の谷にひゝくは木玉あられ哉　薩州鹿兒嶋住　太田氏

ふつとふりきたは團形なあられかな　辻氏　忠直

津輕の人に逢てそこの濱のとなさ尋て

白玉か何そとの濱にふるあられ　播州大坂豊嶋氏　[illegible]黒

愚判

つめたきを瑾とやいはん玉あられ　京山本善兵衛　普入

ちる雪はすり屑なれや玉あられ　高野山　泰雲

秋の露冬かためてや玉あられ　德窓

手の内てうするや衛の玉あられ　濃州山端氏　[illegible]哉

海に降はひきんか砂か玉あられ　敦賀大井氏　重次

漢竹は霰霙のさゝへかな　尾州住　[illegible]也

石山を崑山となすあられかな　播州姫路垣内氏　交云

先師一周忌の追善に

數とるや弟子等は數珠の玉霰　貞室

霙

寒空の雲を酒旗とみそれかな　同

雪

紹巴法橋にすゝめられて獨吟に誹諧百句せし時

四方に雪あけてくはるや風ふくろ　高野山木食　[illegible]仙上人

先師點

おもしろの花の都や今朝のゆき　攝州大坂[illegible]氏　利當

雪の中鷺はちろ〳〵見ゆるかな　攝州大坂住八歲　[illegible]勝

千句の内に

しろき虎か竹の林のまたら雪　有馬氏意安　壽白

村〳〵の雪けやまたら伊駒山　大坂井岡鷹兵衛母　葉春

ふるゆきは花鋮かさやの山　播州姫路垣内氏　交云

あは雪をふきあつる風になると哉　清水四郎左衛門　言聽

風の手てあは雪まくや波のうね　丹波福知山乾氏　政通

雪に猶白き木とみる柏かな　攝州大坂住　詩清

着笠かや見るにえならぬ雪の松　攝州大坂安福氏　秀之

雨天より日にさせ雪の花の笠　播州姫路　幾重

ほりぬるや竹の子笠て雪の中　攝州茨木樋口氏　重明

しのに物おもひ荷持や篠の雪　薩州鹿兒嶋森村氏　吉行

しら露とともに落花や雪霙　寺町寂光寺　泰圓

あめあられ雪をふらすや自在天　五條大濱六兵衛　元春

天人の花かこなれや竹のゆき　攝州豐嶋　當黑

雪にふしたる篁をみて

姥竹かたいてねゝする粉雪かな　丹波福智山乾氏　之政

おとこ山の原にもたまるこ雪哉　京五條杉本氏　永定

みちのくあねはのほとりにて

花の兄にまけしあねはの松の雪　薩州鹿兒嶋森村氏　吉行

ある武臣の門の松の雪を

ひたしろや御所の御もんの松の雪　薩州鹿兒嶋澤田氏　米秀

むつの花や二三のはさま最上綿　泉州堺久米田氏　忠重

老人の壽命を祝て

としつもる大すけや百むつのはな　攝州大坂井岡氏　喜之

武藏野に降てかくすかゆき女　小谷甚太郎　久惠

伊勢の國の鬼のそらとかゆき女　播州書寫山　祐典

釋迦の嶽の雪や壹丈五六しやく　京五條清水氏　宗珠

雪ほとけ作れ藥師の十二月　木村太郎右衛門　重順

侘人やかふるわらやのふすまゆき　播州姫路水野氏　正重

ふれやふれ是や燕姫か袖の雪　攝州伊丹岡嶋氏　豐光

雪の夜客をえて

折からや雪も夜光のたまの客　江戸阿彩氏　祖秀

踏人の枝おらせはやゆきのはな　播州姫路　幾重

黑判 降雪はさなからあまのはらやかな　東六條山中氏　道可

ひえ物のはらやも雪のしろさ哉　攝州大坂住　貞正

白くみゆる夜叉のかしらか椶櫚の雪　德窓

妙國寺の蘇鐵をみて

つもれかし玄冬蘇鉄庭の雪　泉州堺住　貞成

梁王のそのまゝなれや庭の雪　攝州大坂住　本也

いつかたへ飛石みえぬ庭のゆき　攝州大坂梶山氏　保友

見るか内にとりうしなふや雪の鷺　京四條田中與兵衛　正伯

はねにつくとりもち雪かすくみ鷺　京二條高瀬氏　梅盛

水の上にかたまる雪やこほり餅　攝州大坂中村氏　友雪

餅雪ははな見にあたる梢かな　沙門　是友

吹出すや粉雪にむする風の口　泉州堺住　一武

雪花をちらすはさむきあらし哉　少人　夢一

雪をはく箒は花のあらしかな　大淵和尚　玄弘

万木はみな雪花の枝葉かな　三忠

雪花や冬咲梅のはなの兄　勢州南部氏　奈次

雪花のちりつもりてや山の山　攝州利兵衛　正重

せくゝまりぬきあしに雪の山路哉　紀州高野山　悔焉

信州中くほにて雪の凸さいへる古語をおもひ出て

凹のたにや凸ゆきのやま　徳窓

花山にて

名ところは雪にもしるき花山かな　惠佐

江戸下向の時駿州江尻にて雪のふりけるに

因冬はいつくも雪の津守かな　安静

ふる雪にあつまからけの江尻かな　和州郡山都筑氏　直成

干潟の雪に生海鼠をひろひて

雪かゝる潟のなまこやしろねすみ　宮川三郎右衛門　正之

哥枕そへてよまはやふすまゆき　東六條伊東氏　吉孝

山ひめの雪道具ならし衾雪　江州大津冨田氏　光盛

鴛鴦のかはらにふるやふすま雪　季吟

上京の比嵯峨二尊院にまいりしに雪のいたう降けれはむかしのともおもひやられて

紅葉見の後も小倉のみ雪かな　紀州和哥山住　良辰

竹も木も腰をかゝむる深雪かな　尾州住　之也

姥竹やゆきいたゝきて二重腰　同

をのつから帷子雪やはなころも　同

雪と兼て雨にみさほの女竹哉　和州郡山多賀氏　一箱

庭のかんちくに雪をいさひておほゐしけるをみて

漢竹の養生なれやゆき覆　但州生野長野氏　季秀

篠やしら羽弓なりになる雪の竹　京二條藤井氏　秀朝

雪の竹は佛おこしの朝日かな　加友

竹内一葉子亭にて

竹の内の雪やよさかりはなさかり　同
天のとは聲も臭もなし雪の花　同
雪みちはありくもたくりほくり哉　同
むさと雪をふめるは鬼畜木履かな　濃州竹ヶ鼻太田氏　可政
笠はかろし沓はおもしろし雪の道　越前敦賀中村氏　正次
雪路をやるやさなからはなくるま　宮川三郎右衛門　長之
雪みちをやるは綿ひく車かな　貞室内堀小四郎　兼室
雪にのるそりは花見のくるまかな　惠佐

雪の日河邊を通りしにむつさかいふ魚をとりて行ける人をみて

水底もふるや魚の名のむつの花　同
垢つかて是はつめたし雪の綿　江戸昌雲軒　清春
雪の綿かつくは庭の女松かな　大澤清七ヵ歳　生敬
大淀の雪の女松や伊勢大輔　薩州鹿兒嶋是枝氏　快溫
雪の光り天女もかくやひめ小まつ　季吟
見ぬこひといふへきものや雪女　攝州大坂土橋氏　一重

雪打あひをするを見て

霜の楯はつかぬか雪のはな軍　勢州富田廣瀨氏　重繼
雨露の恩はこひねかはぬや雪の花　紀州那智山玄性坊　道諄

霰みそれこや又ゆきの花見酒　尾州住　有也

貞德居士三回忌に貞室亭にて

雪とふりし跡とふ友や三回忌　河地又兵衛　正量

雪のあした酒あたゝめて

朝酒はゆきの花見の小袖かな　貞室

獨吟千句のうち

かふりてやねさゝか上のふすま雪　同

祇園にて

雪は地にしろかねもしく祇園かな　同
尺にあまれ末野の雪のたかはかり　同

寐ひえしてしはく起侍る夜のひさりを

小便のかすもつもるやよるのゆき　同

承應貳年霜月十五日老師貞德終にかくれたまひて鳥羽實相寺の松陰に御からをおさめけるその夜雪聊うちゝりて月は袖の泪にくもりてかなしかりけるほさに

ふまし猶師の影うむる松の雪　同

先師三回忌に

雪になく満三歳やわかなみた　同

爪かくす物よ獵するたか弓かけ　熊野長嶋石倉氏　一入

鷹

愚判
是やまた猫にかゝら熊鷹の鶴　三忠

鴨も鴛もいけとりなれやはなし飼　高瀬五郎兵衛　梅盛

水鳥
先師點

をしの香や張良ならてなかれ足　播州大坂住　友直

引むすひしく鴛鴦のふすまかな　佐藤氏　榮甫

へら鷺てそくいひを鴛の衾哉　薩州鹿兒嶋住　太山氏

鮮の綾もはらひ錦の濱千鳥　備中吉岡氏　信元

濱千鳥跡や砂このちらし書　濃州山端氏　堅哉

多々羅濱といふ所にて

なれもふむや鑪鞴の濱の千鳥あし　播州姫路須澤氏　是誰

酔けるかさか塩風に千鳥あし　正頼

鉄炮にあたるなたねか鳴ちとり　薩州鹿兒嶋住　太山氏

櫓ひやうしか踏ぬる船のとも千鳥　播州姫路三木氏　知重

雪踏はしらひやうしかや友千鳥　播州姫路垣内氏　交云

愚判
芦かものそうもや波に浮藏主　東海氏　正頼

ふまるなよ名もあし鴨にかいつふり　但州生野中嶋氏　安永

をしとりの子飼はなれしふすま哉　丹波黒井住　退歩

與風になき行や和哥の浦衛　京堀川田中作助　正業

名におひし魚も飛かやはまち鳥　惠佐

一とひにとふや千里かはまちとり　熊野長嶋石倉氏　一入

虎ならて千里かはまや千鳥かけ　薩州鹿兒嶋是枝氏　雪廷

うみと水となれや中よき友千鳥　尾州住　有也

むれるゝやにたるをもつて友千鳥　徳憲

かんとりといはゝや鮨の友ちとり　播州大坂平野氏　永雪

せはしくもなくや心をいらちとり　梅盛

千句追加に

しはなくは千句ひやうしか友千鳥　貞室

攝津國河内兩國の人にましはりて
誹諧せし時追加に

都鳥もありやつのくに河内鳥　同

錦の濱といふ所にて

鳥たすき織や錦のはまちとり　同

埋火
先師點

山里はすみよかりけり圍爐裏の火　攝州伊丹岡嶋氏　重紀

徳大寺といふ所にて

炉に炭をお公家や後徳大寺殿　寺町真光寺　泰圓

まはり炭の火花やいはゝうつ櫻　木村太郎右衛門　重順

をくやひようたんから駒のくらま炭　同

おこり初る炭は火花のつほみ哉　攝州大坂住　貞因

愚判　ひえぬるに火得てよろこふ火燵哉　播州三木五百藏　勝政

炭とりやよせて繼尾のたかこたつ　但州生野寺田氏　豐重

主君なりける人の供奉して嵯峨野に出けるにいさ寒かりけれはあるやたたつねて火たかせあたりけるにねこたといふ物をとり出てしかせ侍し程に

うつみ火に近き灰毛の猫たかな　政明

手皷も冬は炮する火鉢かな　京藤田九兵衛　正久

けふりしは香をとめぬるや炭かしら　宗方

炭の粉はほろほろみそのいろり哉　中嶋內藏亟　貞晨

舟ならて炉にもいけたる火花かな　尾州有也內清水氏　獨卜

炭の火は消てもいふやをき火燵　攝州大坂住　正隆

きえて後は翁さひしや炭のせう　江州大津福田氏　光繼

せうになる炭や火桶のまとのゆき　五條富尾氏　重隆

埋ては火桶を春のとなりかな　三忠

たひて寐てつまをかさぬる火桶哉　惠佐

炭竈　先師點

冬はよきすみ所とて池田かな　攝州池田佐伯氏　正次

ふすほるや小町か貞も小野の炭　小谷甚太郎　久惠

愚判　やく炭や大原山のふところ火　和州郡山池田氏　正式

炭燒は只くろうなる家しよく哉　武州江戸佐ゝ木氏　信清

炭竈や山の腰氣のくすり風呂　兒玉三郎兵衛　貞利

冬梅　愚判

雪に肌あはせてさくや冬の梅　和州郡山今泉氏　吉保

年の內の梅の暦やいれ日記　京野口仁左衛門　賴永

衾　先師點

たゝのりてつくや薩摩のかみふすま　攝州大坂住　壽清

愚判　敷嶋に和くかみのふすまかな　泉州堺住　成安

こきえ死はなき名やおはん紙衾　三忠

紙の衾なつくらせて

四六にも作るや二十四きふすま　播州飾磨三木氏　可隆

いねかてなる寒夜に

侘人はけにふすまなき寒夜かな　攝州大坂谷輪氏　正因

神樂　愚判

加藤槃齋千句興行第十

とこやみやあかり障子の神ゝ樂　作者不知

御肴や酒殿うたふ神かくら　熊野長嶋若倉氏　一入

西の宮の神樂もあつま遊ひかな　攝州大坂住　正隆

鈴は夜もすからからなる神樂かな　紀州和哥山日方氏　貞長

湊田をはやすやきねか神樂領　尾州名護屋住 ノ身
稲おさめぬかつくやきねかさよ神樂　和州郡山今泉氏 吉保
宜禰は座につくやうすめの神ゝ樂　貞室

節分 先師點

節分の舟をしきねや御座の上　高瀬太郎兵衛 梅盛
節分のよる見る月やたからふね　下御靈之町豐田氏 元重
夜舟にてこすや節分の年の波　丹州福智山佐井氏 賴秋
節分に鬼かけか來る午の年　伊勢五郎兵衛 成吉
大豆くふも鬼一口よ節分の夜　播州姫路垣内氏 交云

愚判　節分の夜雨ふりければ
節分の鬼のなみたやよるの雨　宮川三郎右衛門 長之

五條の天神にまふて侍て
あも神の宮笥やきねにうけら餅　西田三郎左衛門 元知

女のわらはの竈に白朮をたけるをみて
若水をあすは汲へきをけらかな　加藤氏欒齋 臨淵

まめを一にきりに祝ひ侍るとて
一口は一としこしの祝かな　蝠才
せちふんのまめしけもなや年の數　惠佐
せちふんの氷ふうしよ御菩薩池　貞室

年内立春 先師點

春の月のあしをのはすや年の内　江戸岡野甚左衛門 紐秀
愚判　春の季を年の内へもかすみかな　攝州大坂大平氏 伯貞
年の内の春は餅花の盛かな　兒山三郎兵衛 隈光
立としのうちき姿かはるかすみ　貞室
としの内や名代にたつ春霞　同
梓弓春やたつとしの内かふと　同

巳のとしのくれに
むまをたてゝくる春や年の内またけ　同

雜冬

獨吟千句卷軸に
こほらねと水引とつる懷紙かな　勢州山田度會 守武

先師點　小春にかへり花をいけ侍て
釣舟にいけてあふなやかへり花　小谷甚太郎 久惠

屏風に書たる雪をみて
むつの花ひらく六枚屏風かな　東七條奕木氏 宗宅

舊友達の庭の柿に鳥のあつまりければ
冬までは下手の長をきの熟柿哉　防州岩國小西氏 幸茂
雪つめは棗さへ花さへ白茶かな　丹州福智山乾氏 政通

咲花の香に又煮茶の花香哉　攝州三田住　正勝
色も香も花咲比は白茶かな　丹州福智山住　正味
山田守し僧都も冬や捨坊主　池野氏　重久
東山の僧のさゝらか數珠かふら　攝州大坂住　貞因
風の手てもむやお寺の數珠蕪　攝州大坂井岡彌兵衛母　榮春
絹ならて皆もみうらのかみこかな　高瀬太郎兵衛　梅盛
白小袖是はこほりのころもかな　膳所之住松平門彌　三守
寒き夜はたれも一寸ほうしかな　越後柏崎蓮藏坊　一（カ）顋
のる馬の地道まてよしかんの内　敦賀中村古吉　正次
天寒の良藥なれやあられさけ　豐後森戸　道圓
目の玉もすはるほと醉やあられ酒　攝州大坂木村氏　重順

炉邊にて鹿をてうし侍るをみて

かをさしてむましといふや藥くひ　攝州上牧富松氏　元寄

冬郭公といふことを

佛名に本尊かけたしほとゝきす　播州書寫山　祐典
餅つきは心にかゝるやなききかな　攝州大坂住七歳　鍋女

是は餅花をおゝふ心にやおなしもち花も柳か枝にさかせたきと心にかけられけるおさなこゝろは哥仙の心にもかよふへし

雜冬　懸判

寒さをもしらぬは福のかみこかな　備州岡本氏　言辰

ぬくかれとこの身を守るかみこ哉　攝州大坂住　一清
冬つくや閑院殿のしやうしかみ　武州江戸淺羽氏　春宵
寒しとてえいねぬ賤はよきもなし　貞昌
茶を飲てねぬや夜居の鷹の爪　攝州大坂住　友直

親類の寄を得て

口切の客こそみよりたかのつめ　京二條藤井氏　秀朝

とし忘れの饗のありし時

若き衆にましるや老の年忘れ　勢州松坂竹内氏　良信
腹のしはにゆのしをかくるたんほ哉　下村利兵衛　康吉
寒る夜の寐酒はいたくたんほ哉　尾州津島服部氏　安重
酌袖に寒さやはらふ酒はゝき　勢州松坂竹内氏　良信
文字にさへゑいをしらすやみそれ酒　伊藤助左衛門　信徳
夜光る玉もしかめやあられさけ　季吟

寒こりの行人たふれ侍けるを

それにこりかくなこゝえてこけの行　同

あかつき鉢扣を聞て

はちたゝき口たゝき來るね覺哉　正哲

北まつりといふ題をとりて

車坂も加茂のめくりよ北まつり　廊葉長右衛門　常信

神躰は金剛夜叉か北まつり　馬淵氏 宗畔

長頭丸第三回忌に

霜月日たてるはほともなみたかな　攝州大坂梶山氏 保友

先師貞德居士の像をうつし侍て霜月十五日の忌日にかけ追善の會を催しける

霜月のかほに御影やいきうつし　攝州大坂澁谷氏 安明

きよゆきか作や霰の玉つくり　但州生野中嶋氏 安永

から風の吹も道理やかんのうち　武州江戸富田氏 基明

師にも親にも別れ侍りしとしのくれに世中よろつあちきなかりしかは

わらはまて歎きこり交るとし木哉　貞室

うくひすも冬は離別の柳かな　但州生野進藤氏 重光

冬の日はあるゝねすみのあるし哉　清水四郎左衛門 言聽

あかゝりは冬あされるやあしの浦　京四條旗軌氏 由治

ふしつけやかね付はへのより所　和州郡山池田氏 正式

つめたきは殊に冬さす將棊哉　攝州大坂住 盛行

ついてひゝく餅花は冬の接木哉　京齋藤氏 定良

人の御もとにて

人目みぬほとの葉もなき冬木哉　攝州大坂安福氏 秀之

蠟月は風にもきえぬひかりかな　敦賀野澤氏 永吉

ほしをみて悟るといふはくとんかな　宗仙寺和尚 虎福

らうかはし立てなかるゝ年のくれ　京清水四郎左衛門 言聽

歳暮 先師點

子のとしのくれに

なにぬねの冬そたちつて年の暮　木村太郎右衛門 重順

としのよるしはすをのはす間かな　紀州湯淺勝浦氏 正心

大晦日に霰ふりければ

一とせの打とめなれや玉あられ　泉州堺硯氏 一武

明る春は襖障子の一夜かな　西田三郎左衛門 元知

とし今よひこゆるや人の老の坂　因州鳥取住 催笑

長判 老たおやのかほを見おくる師走哉　正式子十五歳 正親

七月もなかれて早きしはすかな　大井次郎兵衛 重次

張やりし洗濯絹のしはすかな　同

つらのかはに老の浪よる師走かな　下村利兵衛 康吉

師走のつこもりに雪の降ければ

雪花は春待けふのつかひかな　大澤常夢女 六

午のとしの歳暮に

つめよるや将棊のむまのとしのくれ　越前福井山川氏　無樂

むまのとしはけふくれてゆくひつめ哉　青地市郎右衛門　可頼

くれてゆく年はしらかのもとひかな　伏見住　重治

はかなく過行月日を觀して

物ごとにあちきなやらふや年のくれ　勢州桑名伊藤氏　良利

月〳〵の日やまゝ子たてとしのくれ　播州喜多村氏　宗清

年波はけに早川のせいほかな　宮川三郎右衛門　長之

讃州にて

弓ならてなかるゝとしの八嶋かな　惠佐

行年のかくははつさぬ矢しり哉　同

はやく行としは天狗の矢取哉　京二條高瀬氏　梅盛

年そゆくひれやとなりの花の春　季吟

よらてとしすく通りする宿もかな　江州佐和山岩脇氏　正秀

追たつるとしや無常のせつきそろ　京樋口長左衛門　正信

行年の矢つきはやなる師走哉　貞室

としの矢も射かけてよするせいほ哉　同

行年のなかれ矢おはぬ人もなし　同

いそかしき習ひをうくる師走哉　同

おしますよ物をし老の年の暮　同

としはけふくるふしたけの日あし哉　同

除夜に

今よひうつ鬼とりひしく哥もかな　同

むかしはよかりし人の世に住わひける師走にとしとり物こひ侍る追從にや園の雪を分もてこしさて蘐香な手つからさけてみえけれは

侘人やから〳〵としもくれのをも　同

おへる物こほれてうろせきさしのくれに

借錢もきふくこはるゝしは酢かな　同

借錢の淵はうつまぬ氷かな　同

老の波もあらいそかしの師走哉　同

玉海集 付句　巻上

春之部

衣のたなの家に住侍りける時名所を句毎に
むすひて獨吟に百韻つらね侍りける發句

春たつは衣の棚のかすみかな　貞徳
あねか小路の針の永日　同
場の町や長閑に馬の血をとりて　同

紹巴法橋のしたまひし連歌の付句ともをこゝろさしふかき門弟書集めんといふを聞て我句を書抜侍らはあひかまへて打越の句より記してよ連歌はたゝ打越の心をはかりてこそ作者の難義も又粉骨もあらはれ侍れと申されしよし老師常に語たまひしと耳の底にとゝまり侍るまゝ此度の集には先師の句をおほうは打こしより記し侍るものなり壯年の比より九十にをよひたまふまて此道に長し給ひしかはそのほとの名句いかはかりおほかるへけれとはか〳〵しう書留る事なくて過しつるくやしさよ今此集にしるし侍るは大かた輕口にまかせてあさり給ひしをそこはかとなくおもひ出てとのみよしあしにもかゝはらて書付侍る

うくひすは唯夫歌の上手かな
躍つまふつすゝめ蝶ゝ　貞室
花見衣勸學院の園にきて　貞徳
しりなかく引わつらひしあかれとき
御階に釘のさきや出けむ　貞室
花やかな勅書ひらけは針の文字　貞徳
灯心をほそくして待春の夜に
殘雪あれはあかき廬踏入　同
から木瓜に山たちはなか咲そひて　同
のせた香爐の盃のわるさよ
正月のもちをいはふはめてたしや　同
去年はゆるさし歯そつよくなる　同
なさけをは具足の袖に波かはし
よくこそいはへ廿日正月　同
琴をきかはや太鼓かしまし

藪との丶をとりあそはす花の比　同
嶋さきに大な船やたてぬらん
遣唐使にも出來るかい瘡
煎大豆や花の策彦めしけらし　同
詠めたかるや大嶺の月
前鬼をも花の都へたまし來て　同
耳をあらふはされいなりけり

先師點
花入にしつほと水をうちそ丶き　和州郡山都筑氏 云成
梅のあたりは匂ひふん／＼
てんねんとこてふのとふは雪に似て　同
いとゆふにしもつれて立まふ
蝶ゝか柳さくらにとひうつり　濃州山端氏 蘆哉
花のもとたちつ丶もとる夕間暮
初連哥をはしまふ宗匠　同
鶯もなんほ寐くらやたつぬらん
うつし植けり庭の紅梅　同
まかきの梅にさいめあらそふ
難波人はくちに肱をはるの比　大坂木村氏 重順

風判
春の御調はいかに麁相な

洗はすにしたる腹赤の魚のすし　重利
おしあふ場のうき戀こ丶ろ
かたらへる月しろに花をちらされて　濃州山端氏 蘆哉
きくも下手けな圍碁のせんさく
入てまてさかぬ以前に山さくら　郡山池田氏 正式
天氣のとけきけふの八かう
官軍は花のにしきの旗さして　同
春日野に尾籠な物を捨てけり
若むらさきのすりこ木のおれ　同
花の波に小哥の聲もひ丶きそひ
藤咲陰にしめるさかもり　伊賀上野松木氏 未友
すね物と立双ひぬる笑ひかほ
松のそはなるはなはしほらし　熊野那智住 道諄
きらる丶をおしまぬものはよもあらし
秘藏におもふ庭のはなの枝　熊野那智山住 如海
幕さはの花にたはふれ舞をまひ
胡蝶飛かふはるの野あそひ　播州姫路垣内氏 交云
景はふしの雪よ花見は幕つくし
大さかつきのむさし野の春　高瀬太郎兵衛 梅盛

嶋さきに咲出る花はやらみと
辨才天氣のとかなるそら　攝州腹見村住　頼重

遠山の霞をやねの上にみて
かへるかりや書にまきるゝ　大坂梶山氏　保友

春にやしきをかへてすまはや
去年よりも濁出ぬる井戸の水　越前福井一山氏　文清

洗濯衣の紅粉けかすめり
去年よりも出し疱瘡のやみあかり　越前福井住　吉昌

心のとかにものをあんする
春の日のくるゝもしらす連哥して　播州吉田氏　勝政

立はたかるやはるの日のあし
小便はせねとも門の松ふくり　敦賀野瀬氏　定利

いそけ〳〵とをめく狂言
明日はちらんけふいさ行て壬生の花　東七條茨木氏　宗興

まかひな木の葉天狗とやなる
花にならふ杉のさえたの猿の尻　惠佐

出舟のさはりなきそめてたき
床にいくる花は御成の用意にて　符頓屋　政信

年と日と比翼の鳥かけふの春
さくは連理のむめのえた〳〵　青地氏　可頼

愚なるもうかふをしへありかた
詩の作に花ふらせんも師の御恩　同

人頼みしてかへすはるの田
かすめたる去年のさい目の佗言に　同

田うへのまねをする春の友
長閑にも常盤御前をもてなして　隈光

わらはへおはき宿そにきはふ
はこいたのゐみさかへつゝ打むかひ　季吟

ひめこせの花より外の伽もなし
はふこもたぬやつむはうこ草　同

作り捨たをふしんする柚
花鳥の巣は何人かなふるらん　正章子　元次

海老のそふや伊勢の御か花の鏡餅
としを經て今朝いはふかすのこ　貞室

正章母三十三回忌追善に

散し木母とふらへみそし彌陀佛
幾春口にほむる丁蘭　同

おりえて手ゝに餅花の春

躑躅さく山路たと〳〵分くらし　同
　万歳樂の小つゝみの音
うしろ付も翁かへりは長閑にて　同

夏之部

　尻ほそなほたるの影やすはるほし
瓶子の酒をのむ五月闇
くるゝまてうへし早苗の祝義して　貞徳
　冥途にて落す泪やしけからん
夏そつと世になくほとゝきす
油断して植田の比をすこすなよ　同
　阿部氏のなにかし郭公と名付て愛
　したまふめる茶つほを題して一折
　申へきよし所望せられけるほとに
名のれ名をあくへきつほそ郭公　貞徳
あへたちはなのにほふ前栽　同
清明かふうした松は枝ふりて　同
　つなきてかふも女猫成へし
法花寺の庭の牡丹の花さかり　同

涼しさのかたまりなれや夜半の月
　さいふ正章發句にて両吟せし脇句
一にきりあるゆふたちの雲　同
先師點
　更衣の里はあれてさひしき
卯月たつ日と八垣たにしまはさて　可頼
　見る〳〵も皆ゝ若き坊主にて
畠に青ひ芥子の實そある　紀州勝浦 正心
　茂る柳の苔はぬめ〳〵
道野邊の清水のうなきとらへ兼　濃州山端氏 蘆哉
　われぬれは今はた同し夏茶碗
身をつくしてものむ香薷散　中嶋内蔵亟 貞晨
愚列
　葉ふるや福地の園の富貴草
白鼠出る庭のなつかけ　恵佐
　ほとゝきすせいきくよしもかな
卯のはなを家のくるりに植置て　敦賀野瀬氏 定利
　黒焼にしてもをかはゃほとゝきす
百さうをとるかたをかのもり　郡山池田氏 正式
　あな輕忽とみする前しり
わかひとてあまりにねこき蚊屋の内　荷類屋 政信

それ蚊の聲にあけた寢間の戸
口たゝく砌の水鶏人ににて　梶山吉左衛門 保友
目出度事のかすはしられす
門〳〵に青山桝やほしぬらん　播州垣内氏 交云
親と子をあちらこちらへひき分て
ふりし扇子のほねやはいあふ　河内高井田治兵衛 長徳
十六もんはわたすふなちむ
うき旅は嘉定喰たにえいたさて　青地氏 可頼
ひたちおひさも尋常にこしらへて
田をこそつくれわかき五乙女　貞室
あからまぬ時も見事な若楓
座頭の凉み座配おかしき　同
賀州大橋氏可理と云人の發句に
天の時は地の利にしかぬ氷室哉
人のこゝろに和して凉風　同

秋之部

おもひのほかに酒はうれけり
親によくあたれる人の夢の告
ちいさきしかや矢にはつるらん　貞徳
三ヶ月はさなからほそき眉に似て
柳の木間出來る初秋　同
門口に植しや早稲の米ならん　同
月夜のむしの腹にこそなけ
蜩かねたふところへおちてきて　同
まくらの山のあきの大風　同
月かけに幾度かへる丸太舟
はしらをはこふ杯の夜普請　同
お休み所ないかやあすの紅葉狩　同
とはりいへは腹もふくれす
誰めしをたゝるとしらはしるぬへき
御茶入はつるつきとこそみえにけれ
めつるはきしやなさかつきの影　同
すかし窓まてかゝる蔦の葉　同
乘物て月にそこゆる宇津の山　同
花火のかすをはやく繪圖する
螢みし秋の野原の屋敷取　同

ひこ〳〵とうこくは長き花のさき
鶺鴒の尾のみゆる秋の野　同
名所の誹諧獨吟にしける内
老曽の森に逗留をせん
月夜にも通すまひそよ不破の關　同
伊吹おろしも身にしまぬ小袖　同
いつたかふとやしほかまの下
須磨の浦すまぬははれぬ五月雨に
あかしの月よ名をははちぬか　同
先師點
露ほともなひかぬ心かたいとや
岩にすゝきのはさまれてたつ　郡山都筑氏 云成
笠をもきねはあつやしゆつなや
月清き夜半にやひとをすへかゝり　攝州大坂住 重順
をとる所はとをりかねたる
むなさきにたてぬる針は身にしみて　中嶋内藏亟 貞晨
七夕つめやとりてたしなむ
愚判
初秋の碁會の衆ははれかまし　敦賀野瀬氏 定利
蚊のすいしあとみてなけく御料人
ふけともさらになかぬほうつき　苻類屋 政信

飼ぬる鳥をにかすあきの夜
月清き時は山家をおもひけり　濃州梅水氏 吉清
しよほ〳〵雨のふるありまやま
ゆら〳〵と露をくいなの篠原に　攝州大坂喜多村氏 宗清
雲水に書し文字の跡見せて
平砂の鴈の立あかるそら　越前福井住 竹雪
たゝまつ白に晨明の月
秋の夜に源氏の籏をなひかして　屋續
身にしめて見る舞や八はち
ほに出る芦屋のうらの舟あそひ　大坂梶山氏 保友
悲しかるらんつまのこゝろね
ふたつつれし一つの鹿の矢にあたり　平尾小兵衛 幸以
けふにきはまる秋の出かはり
名月に入日のかけもあさむかれ　郡山池田氏 正式
隣つからのさいめあらそひ
ゆかふたる木にゃこのみのなりつらん　勢州常念寺 昌把
小頸かたけて月そなかむる
讀哥に思案半のあきの空　同
夜はな〳〵ときそ深草の里

立出てみる少將の宿の月　青地氏 可頼
煙をたてゝつくる勝鯨波
取むすふ相撲の場てのむたはこ　同
世をおさめぬる苦勞さはさそ
西海の月に隙なき御曹子　惠佐
いさきよきたらひに秋の水入て
殘りし月におかむ日しよく　同
秋の夜にしも靈をたつぬる
薄の名見んとほかけに書をひろけ　季吟
あたりをはらひとをるねり物
しよほぬれつをさゝの露に絹かつき　同
露もおくせすすゝむ矢おもて
冷しきしゝはかへせとのゝしられ　同
老病や露たのみなくみえつらん
しほれて京にのほる朝かほ　貞室
秋とてや律儀をたつる風のをと
何をかしても返すたなはた　同
月さしうつる床のから紙
催馬樂の律のしらへにさよ更て　貞室

土鰍籠もちありくはかもの
鯰尾の刀を月によこたへて　同
いかはかり狹き小路の雨あかり
つふりの上にみゆる月ほし　同
天冠のかさしにさせる菊の花　同
天長く千ひと響るや砧の月
ふかししをんのはなのゆふ露　同
玉虫やなむる白粉の花の露
かねつけ蜻蛉あそふ秋の野　同
おもしろふ詠せし哥は身にしみて
なけるうつらはかはゆふかくさ　同
夜も長哥は腹にあちはふ
初かりの啼わたれるを汁にして　同
なひく霧間にみゆる木兎
九州の地よりふきくる秋の風　同
露はらめけるおとこ山もと
秋風のふけはしらふる琴の塔　同
蛩のやうに秋山たかくはいのほり
うるしのもみちまくるともみん　同

大酒に正躰なくも給ふひて
碁盤まくらに露まとろめり
髮そきの祝ひに月やふけぬらん　同

冬之部

籠もてる人にくり矢をくりかけて
ひつたくらふとするや飼とり
池水の月にうつろふたかのかけ　貞德
深手とやたふれて後にしらるらん
屋根より入し古家のかせ
寐むしろもぬれぬ時雨は木葉にて　同
今よひから四十八夜とさえぬらん
茶園をみれは霜おほひせり　同
頭なるをとろの髮かはつとして
せきそろともかつかみあひぬる　同
なにはのとものあたゝ夢そや
先師點
そよ〳〵と芦のかれ葉に風さえて　濃州山端氏　蘆哉
ゆくさき〳〵もふりものゝ國
ふるさとは下野なれと雪の中　播州姫路垣内氏　交云

異判
春はくれともひまはあかさる
はりつめし深谷の底のあつ氷　播州三田住　重香
例にたかひてふらぬはつ霜
此冬は腹のいたみもさふらはす　播州三木平井氏　正重
秋もくれぬと蚊こそいにけれ
高霜に菊はすつきと枯果て　但州生野土肥氏　雪之
雪に立ぬるめもとくり〳〵
利發さうな殿は鷹をし手に居て　惠佐
大雪ふりにとまる客僧
おためそとつねよもすからたき火して　播州三木住　茂下
のほるもつめた冬の丹波路
坂の名のおひ〳〵となく雪の口に　播州三木加古氏　勝盛
時ならぬ花見るやたんは路
おもしろしふれ〳〵糊（粉）雪冬の空　大坂梶山氏　保友
ふす猪も床をとひさりにけり
あらけなく降鉄砲の玉あられ　重利
鶏のまねやひた物いたすらん
え方へまいりとしをとる人　兒玉三郎兵衛　貞利
たれか扨いひならはせるまめ男

節分に寝た中〳〵の事　（晉猶氏）可頼
　寒い中日光山によちのほり
酒せめられてみたや雪ふり　季吟
　雪をはく箒ははなの嵐かな
氷の泥は月にむらくも　貞室
　山城は雪をみやこのくるり哉
河内の川やこほる冬の日　同
　入て聞その雪山の鳥の聲
とまり鷹野は草臥もせす　同
　芦火たく手あやまちをやけしぬらん
あかゝりそくひふすけはひする　同

玉海集付句　巻下

戀之部

　待宵のふけぬやうにや頼むらん
さめて曲なきよめいりのめし　貞徳
酔てこそはつさかつきもいたゝかめ　同
　かほのあかきははるゝ人なし
よめいりし九献をまいり過すなよ　同
　耻かしさうにのめるさかつき
はちけんをはなちて後の中直り　同
　奇特ふしきは雨乞そかし
美人とはかもしの色にある物を　同
繪には小町をうしろむかせよ　同
　あさましや神といふもの世になきか
坊主たらしをしてありく人　同
　わか弟子にならふといふもはつかしや
　すいにしたれはあふたうらなひ
四辻に出て今からまちぬへし　同

こんにやく汁をこしらへてまつ
砂のあるめしをくふたとおほせられ　同
秋はらめるかなふるめしつき
我を君まねくとまねをしの薄　同
碪にまさるすりこきのをと
淺茅生にうはなりうちかはしまりて　同
をのこかしのふ小野のしのはら　同
そろ〳〵と小哥ふしてやかゝるらん
かねの中にそしのひをりける　同
三井寺さしておちて行とき
物くるひ腰にはあふき目はなみた　同
寺若衆のなとてさもしき
とめはその曉までも御座らひて　同
旅にてはあたまも腎も張枕
扈從小ものかきらふ若道
あちこちへしけき坊主の文つかひ　同
小鳥もかくる鷹の巣のへん
人はかり頼むにむこき物はあらし
つかひかちうてきみをせゝれる　同

手のうちに付し油を洗ひかね
なてし御くしをいつかわすれん　同
またなをらぬか手くせちくせ
悋氣していやなは歯かた爪の跡　同
淀野にむさや蠅のとひかふ
香爐をもなけあふ女夫いさかひに　同
むかしさへ渚の院はさひたるそ
われしみふねにのこる古釘　同
かなつほは身なけし君かかたみにて　同
よるさくらせて茶入をそうる
傾城にしまとひてゆく薩摩かた
おやにはつけよこりた戀風　同
新枕かすますきはて聞あかし
隣にしるや留守の間の不儀　同
悋氣と告る北殿みなみとの　同
名所の誹諧せし内に
あかしの月よ名をははちぬか
入道か姫路にまよふ秋のくれ　同
霧間にしのふ法性寺へん　同

先師點

なさけもはしもたゝかけよとや
約束のよるはくめちと待くらし　和州郡山都筑氏　云成
あふ〳〵もわたすかけはし
こす堺のたかきいやしきしのふ夜に　同
おほんくるまを祭にそひく
尼になれと物や床しくおほすらん　濃州山端　塵哉
おほろ夜の月にも君の御出にて
うしみつまてのちきり在原　同
引まはす屏風に書る村もみち
御息所のすかた身にしむ　同
上人は露の間もなき物おもひ　同
汗か泪かのこふはなかみ
いとまにともらふ刀を抜もちて　同
心あしき主におとなの付そひて
やみぬるはたゝつよきいき靈　越後柏崎妙行寺　日柳
居まひ〳〵となくはかりなり
かねひらか別れにつまのあこかれて　播州三木住五百藏　寛政
具引
立やすらひて人をこそまて
辻占をきいて定めん縁の道　井岡彌兵衛母　葉春

さよ更るまてとかれぬは縺
はつよめのはつかしふりや下の帯　郡山池田氏　正式
契るこゝろのふかき井戸はた
おもふとはつめられしより知そめて　同
たかひにひひつひかれぬる袖
琴の音に物をいはせて忍ひあひ　同
そのあとゝふや乃至法界
悋氣して源氏をおとす頭の君　同
忍ひゐる寐屋の戸口にたゝすみて
たゝ一太刀とねらふまおとこ　春宵
なさけはふかし底はつめたし
お手つから茶碗の湯つけ下されて　兒玉三郎兵衛　貞利
あはたゝしきは君のありさま
ふり切てかへるやお茶のうすなさけ　越前福井秋山氏　方竹
あゆむすかたをみれはふり袖
踊には氣もうかれめを作ひて　播州姫路垣内氏　交云
何度か人をたらしたらせる
なひかぬはあまりお情なみたにて　梶山吉左衛門　保友
うれしと我になひく青柳

春風のたよりに文の返事して　勢州松坂常念寺　宗順

　山桝のかはゆいとしと書文に

昆布のしほらしき目もともつ人　攝州大坂住　當心

　かきくれつゝもふるは大あめ

涙にやひたすいとまの文ならん　攝州三田住　重香

　化生のわさの冷しき躰

白粉もはくる老女の露涙　敦賀中村氏　正次

　姥も祖父も腹をたてけり

たいて寝る火桶にたにもりんきして　播州姫路垣内氏　交云

　神木にさへうつはかなくき

砂のものを立てみんとやおもひ人　但州生野住　安永

　くも手に物をおもふしんきさ

油火のとろ〳〵とした顔をみて　越前福井伊藤氏　良卿

　五十ねんするこひも夢の間

邯鄲の枕繪をしも手すさみに　播州三木五百藏　寛政

　萩をみてもをこりこそすれ戀心

通をうしなふ久米の仙人　濃州山縣氏　塵哉

　身にしめて頼み置たる行平に

作る豐後の立居いとしさ　但州生野寺田氏　豐重

旅地酒酌ぬる舞の袖にほれて　但州生野長野氏　桑秀

　十四五からは道のせんさく

若衆よ月にはせめてとはしませ　江戸平野氏　古笛

　年よらはこそ此わかさかり

戀こゝろやむる異見は聞ましや　勢州富田廣瀬氏　兼吉

　惣領の子をよろこひのはる

今年より妻に直せるむしろしき　越前福井山本氏　重直

　みめかたちあしき捨すしたひ寄

子をなしをける中のあはれさ　三忠

　たけなかき髪やかもしをときほとき

後妻うちはみるもおそろし　越後柏崎　杣都

　おきんとすれとおきもやられす

わかれてもきぬのか残るねむしろに　荷類屋　政信

　恨み〳〵て文をこそやれ

遠國に我おとこめか居とゝまり　同

　餘所にのみ見た殿とかたる夜

若後家をたてゝは年を送りかね　青地氏　可頼

　紙ひとへしみつくほとの今朝の露

形見のあふき日にあてゝなく　同

月まつとひらけは風の入口に
來たやらにほふ露のふり袖　同
朝夕の波を枕に聞あきて
いとまをもらふ船頭のつま　同
にくかりしほと今はいとしき
よりそへは良ににせさる心にて　季吟
よたるさはねてもおきても身にそひて
其おもかけをこひかせそひく　同
かねもまたつけぬむすめいとのをして
おもひのやけとなをすともなし　同
さくよりつゝほるゝ勾當
きめはよにたくひ内侍のはたへにて　同
あなつられしとまはすわるちゑ
うたてきは老女はうのりんきにて　同
鈴木やつまをすてゝゆくらん
松江の水くさきこそ心なれ　同
命すてんは戀の道かも
辻口をすはゝ舌をもかみちきれ　惠佐
あそひくらせとうかぬ顔つき

たはれめにたふれて後は悔しかり　同
ひあせにましるなみた露けき
とはりもきかぬ念者にたきつかれ　隈光
是は少人の句なれは書つく
こほるゝはかりしほの目つかひ
藥風呂の内ても手しめ腰をしめ　同
入道の娘はこゝろたかくして
かなはぬ戀に幾代へまむし　正章子十一歳　元次
おもふ中は秋といふ字も忌やらん
哥にも萩はよふてやるまひ　貞室
いつ來てもねたやあはぬ朝かほ
ふのやきのみそかにこほす露泪　同
密〱はもしもやよそにもり乳母
わか書文に我つかひする　同
さしこなしたる刀わきさし
かふき太夫おとこと見しをたゝここにて　同
いかりぬる太刀の下にや佗ぬらん
沙汰なしにしてかへす密夫　同
聟入はかくすとすると隱されし

自然居士にや似する若僧　同
　しに入時はなみたとをしれ
つめられし跡さへ人のかたみにて　同
　つめりたゝくはなさけなき人
いやならはいやとて暇お出しあれ
すへき悋氣をせすはえ堪し　同
　引ほころはす秋の裝束
もゝとせのむはらからたち色めきて　同
　只はそのとらし暇の文月夜
かへせや賓のる我か刷ひ田　同
　風流な戸はかり帳をもかけ渡し
こされかしとやおもふ大君　同
　ひききしてよし〳〵しさをつくし琴
こちへなひかひそちのみや様　同
　何宮めくりしけくめさるゝ
姪亂にをこる執事はお笑止や　同
　笛竹もふかぬ間はなてさすり
ねゝしても貴妃をめすや玄宗　同
　をのつから湯風呂をせねはふたしな

病後の閨はよせしとやさす　同
　そひふしに汗かく斗をそはれて
さて〳〵すこきよひのむつ言　同
　詠ぬる月にはいかひ物おもひ
礎のつちをにきりてやふす　同
　文字かすおほくかこつ玉章
からす瓜のさねこんといふ比も過て　同

神祇

　滞作な所務も祈禱の故ならし
領内にます神のあらたさ　貞徳
　釜のなりやう不審なりけり
備中に有と聞ゆるきひつ宮　同
愚判　立ける使者は奉幣のため
つくりかへてけふ住よしの御遷宮　郡山池田氏　正式
　棹とる間なく舟にこみのる
山王の祭は暮をいそかれて　但州生野中嶋氏　安永
　日をまはしぬる此宮のうち
お神樂を神子の男か打はやし　攝州大坂住　政武

すへぬる鷹の鈴はから〱
八幡に繪馬草業も参らせて　青地氏　可頼
かたけしを鑓かとみれは梅の枝
書は釋迦ならて天神の像　泉州堺住　成安
渡唐の舟をかさり立けり
天神へかくる繪馬に念入て　惠住
なやあるをみて物うるの産前に
まつりのくるま立て後悔　同
まつりの場そにへ渡りける
汁にする鴨の神主いさかひて　武州江戸住　古管
ほこしうもなひ喧嘩口論
祇園會に馬鹿者ともかあつまりて　攝州大坂井岡氏　喜之
神佛さへ入札になる
おさあひのまもり袋を拵へて　京住　近政
深草のやしろに誰もまいるらし
しやくの隙なき神酒のかはらけ　季吟
永き夜も越前紙に打むかひ
足羽の宮の月の鰐口　春宵
お中のむしとともに音になく
かいほそをしなひ皆たきゝへ
かちより参るうふすなの宮　貞室
管絃はしむる御舟さすなり
備るや七種の神に菜の節　同

釋　教

緣に出れは池の凉しさ
優婆塞が頭巾も袈裟もぬき洗ひ　貞徳
わなさゝむ田面の鴫の法度して
寺領となれるみよしのゝ秋　同
やつた小袖を返しこそすれ
自然居士人商人に追付て　同
散錢や昔はありてつなくらん
ほとけをのせし舟そなかるゝ　同
極樂に大水出たと夢にみて　同
めしの間業はならぬ侘すき
道具ほしとおもふや膈の毒ならん　同
先樣の作理せよや禪僧　同
先師點　一門は扇のなりにあつまりて

宇治てやとひし頼政の跡　山端氏　塵哉
　あたりに魚はすきと夏の日
俗なから行ひすます三箇月　紀州住日方氏　貞長
　日吉の宮に普請ある比
わらんへのしやへるに大衆驚ぬ　越後柏崎妙行寺　日柳
　歯をくはへては物もいはれす
愚判
坐禪にや樹上の工夫いたすらん　作者不知
　八ヶ年すくるは露の間そや
さて／＼たうととける法華經　京齋藤氏　定良
　元興寺にや秋も法談
猿澤の水の月くむ攝待に　隠光
　暦見て吉日えらふともなし
雜行雜修ませぬねんふつ　同
　ちかひの上に何かあるへき
一筋に彌陀の名號唱へなん　勢州廣瀬氏　兼吉
　お慈悲にのせてたへ渡し舟
一念にかのきしねかふ彌陀の前　播州幸田氏　正舎
　こゝ高砂に申ねんふつ
我みても久しき後生ねかひにて　勢州松坂住米川　交友

　南無阿彌陀佛／＼
かけし額をおしかへしよむ誓願寺　春宵
　うかふ丹波の國の百姓
栗の木のくせいの舟に棹さして　郡山池田氏　正式
　山をわたせるこゝろはすさまし
座主流す僉儀は月のよな／＼に　同
　寺方のにきやかなるはいれ佛事
くとくの爲に風呂をこそたけ　同
　參る熊野の道は南方
順禮のうつふたらくや一番日　同
　二番鳥かようたふ聲／＼
順禮の通夜を申し紀三井寺　紀州廣瀬氏　時秀
　紀三井寺にし參り拜まん
順禮の札を一枚うちそめて　攝州大坂梶山氏　保友
　我寺へかへりたかるをにくかりて
山から衆徒かこかすつり鐘　青地氏　可頼
　あらけなく池の波風吹たてゝ
昆陽野をつるゝ山ふしの貝　同
　過去の因果をおもひやる秋

法の師にあひぬる露のふる狐　春宵
人の物をすり心こそわやくなれ
拾ひし數珠は主にやらはや　勢州松坂住米川 交友
黑木賣姿より能言葉つき
數珠も引つゝ袖もひきつゝ　越後柏崎住 杣都
出家とや契りをこむる中ならん　同
子をなしをける中のあはれさ
發心はあらましのみに年を經て　良信
終にはうくる憐の袖
陪堂といひて門〳〵打廻り　丹波福知山横山氏 吉英
朧月夜にしく物は薦
荒行は內侍のかみの御祈禱か　但州生野住 桑秀
あかはたかにそなれる身の果
名聞を捨しひしりの伊勢參り　但州生野中嶋氏 安永
雲のみねにものほる人あり
年毎の富士禪定は未の夏　紀州和哥山住 良辰
曉の明星はちらりちらと出
六角堂や建立の比　惠佐
あはれしうぬふきる物のかいくゝり

佛のために上るうちしき　同
來世は長き千とせとをしれ
佛前の卓に立たる鶴のあし　紀州廣瀨氏 時秀
かふろはあれと女人禁制
麓よりのほる高野の山道に　同
とふ人はいつも絕せぬ御影堂
高野の山にたつる日牌　貞室
一とせに六たひ來ますかすくなしや
祭れるわさはかなし聖靈　同
貧になりても長命はよし
方丈のきゝとな書は世にほめて　同
けに物數奇をする作り庭
福僧ときけるは夢窓國師にて　同
心ちよけにひつかふりたるとかり笠
めてたう嶺をかけ出山ふし　同
ちくしやうもありとねかふ後の世
かき流すうしのよたれのうたかふな　同
長〳〵と象の鼻をは振立て
普賢を拜む炬松の影　同

音樂の聲もあらしの吹やふり
魔の來迎の夢そ覺たる　同
一粒もたゝに出來るたのみか
身にしめて禮する舍利や斷末魔　同
心經のしるしをみつの玉垣に
草字や除き書る願文　同
毎日あかの水をこそくめ
僧都をやたうとくおほす神慮　同
是は諸國を一見の僧
六尺にあまる柱杖もかつちひて　同
あやしく脊をかた〳〵手に持て
達磨やかりにかくれまします　同

述懷

分限なと宿の亭主か自慢して
やれ馬子ともよ引出せといふ
雪隱へ老耄してやはまるらん　貞德
身にしめて臓腑のとや知ぬらん
としのよりたるはくらくかなり　同

草庵の中をもいてす雨聞て　同
一かたならぬほれやうは何
むまれつき鈍なる心又老て　同
寺に此ほと美女のこもれる
命をは不孝なからもたすかりて　同
母判
なき跡をとふ袖のふ便さ
まつしきか涙なからに身を賣て　越前福井山元氏　重直
かたきをうたす腹をたてらる
我親をころしゝ針を又このみ　伯州倉吉荒尾氏　直久
僞に交るなさけをよろこひて
後の親をしたふ奇特さ　播州三木池田氏　女松
いつの間に又一つよる年のくれ
うさきのしりのあなう世の中　貞室

哀傷 付無常

あすからはふたゝひ御月にかゝるまひ
よく付ていよ主の臨終　貞德
さはかしく風をふかする愛宕殿
おるゝともなく鳶のまふ空

死人にや生たる人もましるらん　同

異判

子のかはゆさは死ぬる跡まて

横笛のねんころなりし夢の告　春宵

ひよこ〳〵とをとる雀のせはしなき

はや病人の死脈たちまち　武州江戸平野氏　古笑

犬と猿との中てこそあれ

くりてまつ知死期はけふの酉の刻　郡山池田氏　正式

いとふへきはとかくに色の道ならし

ゆゝしき物そ葬禮の供　濃州山端氏　塵哉

年のくれ〳〵おしくこそあれ

なく成し人はいとしや若さかり　攝州大坂住　當心

藤門の渡瀬をしへうらめし　同

はなむけもうけて悦ひ給へかし

君か御墓にそゝく水鉢　惠佐

はら〳〵と落る木葉をかきさらへ

なみたにくれてひろふ白骨　越前福井氏(マヽ)　塞童

涙なからも念佛の聲

死したるにあふた心もすみた川　吉地氏　可頌

あはれに見ゆる池の水きは

身をなけしなみのうねめのみたれかみ　符頼屋　政信

松山鏡あはれなること

腰おりてみさゝき拜むさぬき業　貞室

天人の世界もさのみうらやます

めてたきとゝ見しは悲しき

娵入に似たる葬場の白小袖　同

ついそこに苔地の露を打拂ひ

墓なや月のくれの野送り　同

人くひ犬か月に尾をふる

くさむらにかゝむや秋の鳥部山　同

雜之部

宗祇法師旅行の時五位の庄さかやいふ所に宿り給ひけるにあるしのおさこ白袴はきたかに着てけいめいしけれは當座に

里の名のこんかきくけこころの庄　宗祇

さいふ發句したまへりしにあるしのおさこ

あるうへをきて布をまつ比　作者不知

さ口さく脇句を申せしさかや

名所はいかいのうち

天神もつくして子をやおほしめす　貞徳
北野あたりへいつのほりはし
西陣にうれるいりこのひからひて　同
安居院あたりに誰を待らん
ひとり〳〵北野まいりをうちまもり
出し次第に連哥うけとる　同

云すてにあさり句せし内

つれ立てさのみ渡らぬ燕の尾
はしかゝりをやはつる入道　同
岩のはさまにうかふ怨靈
わけもなく物いふやうな波の音
日本にあやしから人の池　同
關寺の見物さはく月の夜に
大津馬ともつるむかへるさ　同
和哥の道こそ殊勝なりけれ
もとのとく伏たる馬を引たてゝ　同
かへさはやとをいそき出つゝ　同
いかにとして草はむく〳〵はへぬらん
毛なしの岡はおかしけな名そ　同
すりきりとなるまでもてる馬の鞭
大事のあらはかけんかまくら　同
目薬を合せてをくや權五郎　同
先さしよりに一盃はのめ
藥ならていかに熱氣のさめぬへき　同
をそ着た分て汗は出かたし　同
かり人のかへるを見つけ犬ほえて
袋に殘るやきめしやある　同
かうはしき湯にてしかくる藥鍋　同
栗の木のもとに大きな犬ほえて
壁のはしらをほるやぬす人　同
石すへのそはにおとひた竹のへら　同
さえつれる鳥の樂所はしるかれや
書籍のみゆる窓の竹こし　同
錢ほしとおもふ禮者の給仕人
たのもしの子にはしめてそゝいる　同
あらとりも後はなつかん氣色にて　同
よめをとりぬる宿の賑ひ

小鼠をくはへた小猫ほめたてゝ　同
簾よりみめよきかほをさし出て
鼬はかりやすめる古宮　同
むく／＼と毛の有物か持あけて
ひみすや土の中に住らむ　同
人の中にも屑の多さよ
むかひあひ一日をかや引ぬらん　同
かうをとりつゝをし付にけり
薫物をたかんと灰や直すらん　同
晨明のこる何某の院
今はたゝ卒度もたゝぬ塩煙　同
まちかきはとしより衆の所にて
せいをいれけす町の焼亡　同
是や明石の入道のはて
ほしたるも奔走をする播磨蛸　同
なまて毛物の骨やかむらん
おそろしき虎狼をかひ置て　同
勾践ゆるすこゝろはかなき　同
尉とのゝ髭の長橋渡り來て
一せいを今うたふ高砂　同
中原とかく文は正月
音信を鰤かとみれは鱈にして　同
一にきりある夕立の雲
かたはちて太鼓うつほと神鳴て　同
ひやうしちかひときく紅葉狩
山河の舟を櫓ておすまねをして　同
鷹場へつれていつる右筆
空にては山川の名をおほえかね　同
哥枕こそたからなりけれ　同
かちてはゆかぬ蓬萊のしま
童部とも舟の中にやのせつらん　同
あしやもころふなゐのゆるころ　同
うしろにしあるかとすれは前になり
したへはさけぬとこの房箱　同
かろ／＼と兼たる所へひきよせて
しゆひんの代にへうたんやする　同
永日も手水をいそく侘すきに
なまひな壁のさひやいろへる

鹿茸をかく小刀のはゝなくて　同
　身の色も黒くみえたる小段原
あたらこまめや煎すこすらん　同
　かりそめに付たるくせかうせすして
よそへ茶磨をかしてくやしき　同
　縫はくや織帯はやる盆にして
　襷をせんにかくるをとり子
小鬢にやのゝ字なりなるしめ薬　同
　延ても神事せいてかなはぬ
おもき鍋いたゝく腰やいたからん　同
　此里は泣子のおほき神事にて
　うはやおうちかいけにゐになる
蚫のするや汁しやうもなき龔ならん　同
　はつもとゆひやしめてゆひぬる
光けんしかしらいたひと宣ひて　同
　君に忠あるむかし忍はん
誰か筆そ仁和の親王の哥の義理　同
　頼朝の世に出たまふふしきさよ
ふし木の穴をのそかぬはなし　同
谷ふかき山路のはしはあふなしや　同
　いとけなけれと智恵のかしこさ
頼朝の出んとせしを引とゝめ　同
むはらにはるやひた白の幕　同
　尋常に射る巻藁の弓
檜原には名ある侍引こもり　同
　幾度かさくりては又握るらん
よるの射やうを習ふ弓とり　同
　しなれぬ道そ武士のたゝかひ
くちおしや是非に及はす生捕れ　同
洲にをく鯉も夜の間にそなき　同
　松浦かふねの舞し行末
　ひれふりし時の目もとはいかならん
水よりあけて見事なる鯛　同
　數奇の程こそ水にみえけれ
哥よみはいつも硯にむかひ居て　同
繪にうつしたる人丸の影　同
　大君のお仕へ人にましはりて
後まて哥をよめる西行　同

佐藤か尼公なみたこほせり
西行の出家をせしは若盛
詞花金葉とつゝく撰集　同

先師點
勝はそんそとこはき野のすゑ
をくりくる狼の目や光るらん　攝州大坂佐藤氏　紫市
末代までも名字くちせぬ
楠はしねんといしに成けらし　攝州三田住　重香
かねほる道はよくも知らむ
口貫かふ飛脚つかひにやとはれて　紀州湯淺住　正心
汗に成つゝゆくつき飛脚
論言や國の端まて觸ぬらん　濃州山端氏　塵哉
みなよひにやる一家一門
さすらへの人を赦免の文をみて　同
すりしさゝらの竹もきれ〳〵
踏石を洗ふに隙やなかるらん　同
あけたる水はいつみなりけり
龍出る雲は河内の國さかい　同
ひたちへむきて手をこすりける
かいそんかかうへにはいやとまるらん　攝州三木住五百藏　寛政

おとこひとりに坊主三人
いはうきはう土左繪師に出仕して　津田太郎兵衛　屋勝
たてと横との河風そふく
ちやうとうつ浪ははた織音に似て　同
是や右近のはゝめける躰
煎し茶の泡や黄色に立ぬらん　小田市郎左衛門　鳳俊
むかしよりかう有そしつらん
猿の尻はいつれをみるもまつかいに　攝州大坂住　當心
いときには哀小袖を下されよ
母にまみゆる曾我の兄弟　但州生野中嶋氏　安永
殊勝にもありさもしくもあり
ほさつとて落たる米をひろひくひ　泉州堺住　釋廣
にか〳〵しくも嬉しかりけり
熊のゐるをのむ〳〵なをるこはい顔　攝州大坂住　行正
あふてよろこふ人のけなりさ
幾度も取まけにたる貝おほひ　和州郡山住　云成
いかはかり足かろ〳〵と見えぬらん
荷はとりあけて人もなきふね　同

長判
あつたら味噌を捨る無念さ

詠しぬる哥に一字を置かねて　泉州堺住 成安
いつよりかひつこみにける嵯峨の奥
清瀧川の石龜のくひ　同
忍ひし人にかゝりつなかる
わなはれる野には狐の絕やらて　泉州堺住 昌良
かゝりかましき松の枝ふり
もとは爰にありそしつらん鞠の場　泉州堺住 定宜
太郎といふや舟にのるらん
浦嶋は朝夕釣をすきこのみ　梶山吉左衛門 保友
小次郎かその子孫にて有やらん
熊谷名のる家はなつかし　同
信濃路やしはし休むた旅の道
ひかへて草を甲斐の黒駒　同
盗人は尾張の國をにけ出て
おそろしくしもほふる犬山　同
一命はすつると玉をかつかまし
甲のあらはうけん鉄炮　同
萑生宿に狂言もよふして
かりにもやるや此鬼の面　同

ゆるりとやすむ旅の道はた
しまりぬる草鞋の緒も結ひかへ　春宵
旅籠屋に何とも暑さたへかねて
洗足の湯に水そこひぬる　同
金銀のいさこをしける富士の嵩
あつまくたりにうたふ邯鄲　同
往來の人に踏れこそすれ
舟人は橋の下にし雨やとり　正重
笑ひ〳〵も泣かほになる
おさあひや餘こそくり過すらん　井岡彌兵衛母 榮春
父に手足のつめそかくせる
鼠とる猫はねらふもしつかにて　攝州大坂住 正隆
枝たはむ竹の下道付かへて
里の子ともかかくすくゝてう　作者不知
樣の髮こそ見たれ落けれ
夜軍によしとも方の打まけて　攝州三田住 重香
かろ口なこともいひ出す狂言に
扨〳〵德のひろきはいかい　河州友井氏 政良
親の身とて獨むすめの自慢して

岡邊の宿のさても奇麗や　重利
よそ目には狐つきとも云つへし
稲荷の山をこゆる鑓もち　同
降雪にしとゝぬれけり旅の空
佐野のわたりてあつるふち駒　同
ゆかみなりにも壽命長かれ
手つよきはお多賀杉子の荒けつり　郡山池田氏 正式
ぬりこめのひまこそ更になかりけれ
さしつめて射るしけとうの弓　同
わるこんしやうとみゆるはかりそ
繪の具にはあいろうを引水の色　同
水なふりして暑さわすれん
なまくりや梨をやいとの慰に　同
脇の下こそひやつきにけれ
章門の灸のしるしに黒つけて　同
石に音するよるのあまたれ
瀟湘のうらさひしくも碁をうちて　同
しほひのかたに出よ子ともら
大伴のみつの蛤いさふまん　同
馬からふ〱とのみいふはかり
さかな何〱料理これ〱　同
常ならぬ伊勢か筆跡世にほめて
名判きつかとあるさくの額　伊賀上野松木氏 末友
哀さむしや佗人の躰
目さむるや五條わたりのかり枕　同
かんに堪たる爪琴の曲
天人も又羽衣をひるかへせ　同
人をも身をもうらみうらむる
もろふたる刀鈍くてひけをとり　勢州富田南部氏 兼次
祖師かとみれは又そてもなし
これひとはおほん位につかせられ　同
のふる手足もまつ黒にのみ
辨慶か寝起のすかた繪に書て　勢州松坂住 宗順
かい鳥を庭にはなつらおほつかな
いつしかねこのつなそとけたる　勢州常念寺 昌把
卓散にもつこゝろつれなき
つかはすは金銀とても石かはら　竹内五郎右衛門 良信
折〱とにいふさゝへこと

もとはらにゆつる跡職おしまれて　同
　太郎次郎にならふ三郎
ゑひすもや愛宕ひら野に祝ふらん　同
　さし引はやき塩干しほ時
それ〳〵に玉は德義の備りて　勢州松坂住　交友
　道心は發らておこる曉に
腹のくたるをこらへ鐘の音　同
　にこるこゝろのほとそ由なき
數ならぬ我等も澤にさまよひて　津州山端氏　壓哉
　廬山の景氣おもひこそやれ
寐覺して聞も徒然な夜の雨　尾州熱田加藤氏　一甫
　和哥のみちしる人を尋る
紀の國の名所をみるも始にて　紀州廣瀨氏　時秀
　十七石のよねやつもりぬ
九州と關八州の知行とり　同
　朱にましはれは赤くごこそなれ
酒盛や上戸も下戸も醉ぬらん　同
　武士奉公をのそむ百姓
草かりしその鎌足の子孫かや　紀州和哥山住　良辰
　河にむかへは氣遣ひそます
鼓には終に合せぬうたひにて　熊野那智山住　道諄
　はり物なれや人の家もち
結構に屛風障子をこしらへて　同
　とにもかくにもしぬるはかりそ
なら坂や此手はおもき疵にして　同
　見ても〳〵影きよからぬ躰なれや
曇る鏡にむかひあふ袖　紀州那智山住　如海
　よろこふ中に泪こほるゝ
ことの外產所に燒火ふすふりて　同
　大きなる木の上へのほれる
濕氣ほとふしきの物はよもあらし　武州江戸住　古肯
　つふるゝほめいわくなかゝ合點にて
地震にかゝむ長持のかけ　同
　かけ出す駒の足なみはやくして
犬追物の袖のゆゝしさ　武州江戸住　吉言
　ふかき傳へを他へはもらすな
井戸よりの水をかけひの庭のうち　敦賀中村氏　正次
　心とゝまる入道の館

小鳥はよにたくひなき寶物　同
おそらくも膳部はよそに劣らめや
かはせたまへと見世の唐本　同
馬より下へ落るあやしさ
旅ころも日も八つ時に空見して　越前福井住　塞童
見えてはかくれ隠れてはみえ
あしはやに箙まきの蛍か飛まはり　越前福井伊藤氏　良卿
見るに達磨はおしきかけ物
正宗の脇指の刄はうちこほれ　同
はもしなからもあくる黒髪　越前福井住　竹雪
反古もてつくれる児のいかのほり
けふもよろこひあすもよろこひ　越前福井秋山氏　力竹
いとおしき娘と姨の座をして
毒らしき物をは思案してくはひ　越前福井山元氏　重直
おさあひに乳をもりの奉公
乞食の栖はとことさたまらこ　越中高岡江守氏　隆展
主のかたきをねらふやさしさ
卒爾には通られもせぬ關ならし　越後柏崎妙行寺　日柳
苦にあふ坂の山路はるゝ

是かれと心をうつす色このみ
とける繪の具はこふん緑青　同
あけまきのふる／＼はつと乱髪　越後柏崎住
風に障子もこすもやふるゝ　仙都
ひたちいはたのたるそいふせさ
飼置し象はいよ／＼ふとり出て　丹波氷上郡玉巻　重成
日あしはによつとさし出にけり
しもはたを織ぬる人のすそみえて　兒玉三郎兵衛　貞利
寺から里へ人つかふ躰
頬へはお児の親に預け置　丹州福智山住　吉英
のほりきほにはまた馴ぬ人
川舟は下すはかりを所作にして　但州生野中嶋氏　安永
唐わたりもそ心もとなき
うみつゆるしりのあたりの腫物に　同

哥仙誹諧の内

大分に持かねもりはうらやまし
幾年往来する轅つき　同
ゆつくりと暇を給はる家老衆
散うつへき事そうれしき　但州生野松本氏　吉居

此ころは富貴の家と成やらん
乾のすみかさかくさくなる　但州生野長野氏　桑秀
ひしと貝とそ入ましりけり
いはなかと武田の幕の紋付て　但州生野寺田氏　豊重
端居に蚊帳を釣て茶をのみけるとて
蚊屋の内にて茶をそゝあちはふ
と云前句を出しければ
作病はとかの尾なりととかむなよ　但州生野竹屋氏　勝利
猿楽はおもひの外にすりきりぬ
墨筆しけくつかふなら衆　播州姫路垣内氏　交云
しりぬかるゝも筆のあやつり
繪に書た文殊やたかく買ぬらん　同
賀茂川のなかれに馬を乗入て
栗田口にもすゝむ先陳(陣)　同
いよの山家の住居無念さ
木をこれはあまてもみゆるむなすたれ　播州姫路西山氏　幾重
是生めつたと鐘そつきける
狂亂はもとより人をはゝからて　播州賀古氏　勝盛
くつすはいかに此臺のもの
たんさくに哥をかく手はかけらかし　播州姫路幸田氏　正舍
けいせいに何もかも皆吹上て
金山よりのかへりすこ〳〵　同
とし〳〵の暑さをも身に忘れ果
無病になれは灸もいたさす　播州三木本長寺　眞隆
よろこひの中に流すや血の涙
うとふの謠うふやにてきく　播州三木五百藏　之政
やかさしあなたこなたへ水をいれ
うるしの桶のふたしめてをく　播州姫路正善寺　末云
下帶はこちから先へとき置て
こゝろやすきに風呂をふかする　非前八左衞門　政舍
鳩のないたる聲そ聞ゆる
ことの外胸の痛みやをこるらん　讃州上柳氏　穎心
命のほとはすんもあらしな
しやくのむしつよくも腹にこはりて　京平山氏　心月
ひし〳〵と木には釘うち幣をさし
急く普請のけふの上棟　京西村喜内　忠勝
いきも戻りもたゝはとをらぬ

鍔はたか世にたくみ出しつらん　油小路藤井氏 秀朝
　海上やこ〳〵敷もあれぬらん
珠とるへきとはかる修羅王　京齋藤氏 定良
　うたふてこそはさけを飲けれ
詩の會におもふたとちかより合て　京二條住 宗吉
　六尺やすね〳〵しけにみえぬらん
墨繪屛風の松そいくめる　同
　さらへぬるほりのふかさのいかはかり
さても手際な目貫笄　京大濱氏 元實
　後世よりも猶頼む君か代
討死とおもひしに又勝軍　東七條炎木氏 宗與
　人ほとこはき物はあらしな
うしほにの汁を好みてもてはやし　荷類屋 政信父
　勅撰の和哥を腹にしあちはひて
見たや諸國におほき名所　政信
　馬にのりつゝしたる討死
ほめらるゝ將棊はさゝて碁にはまけ　同
　虎のやうなる大せきそある
みたれ碁の中に手つよき竹のふし　同
　母のめされしきぬそいろよき
目にたちしほろかけ武者は平家方　同
　具足をぬきし袖をしそおもふ
かいしやくをするりと刀ぬき持て　惠佐
　脇指かいなひかんとねちまはし
弓の稽古に身ふりつくろふ　同
　槃特は愚癡にいやしう生れ付
めしたへ過てたゝるとやいふ　同
　誰いふとなくしるゝ密夫
飼置しあふむの鳥の聲立て　同
　綿ならぬ物は我等か身にそます
生肴よりすけるしほから　同
　扇おつとり舞出るなり
聲につく猿はよくこそ仕入たれ　同
　殿中に皷の音の高くして
いかつに物をいへる判官　同
　をこる火鉢に用心をせよ
猫のすく肴を串にさし立て　同
　嬉しくも湊に付し舟子とも

數のたからをいるゝ箱崎　同
　川音もゆふさりもとは高ふして
船賃きけは舟にのられす　青地氏 可頓
　近江路の廣さは二十四郡に
目につく物は只ひとつまつ　同
　ひとり法師のあはれふるまひ
橋桁にたてる味方ををとりこえ　同
　難なく湖をうちすきしけり
時能か籠る鷹巣の城せめて　同
　名は名ほとある侍そかし
勝にのるその梶原か軍船　同
　冬澤に枯たる芦は筒みしか
たれ水上になかす古足袋　同
　ほとこす慈悲のもれたるはうし
さし出す勸進ひしやく底ぬけて　同
　座頭のすゝみ座配おかしき
しるあひて酒友達はこうしめせ　同
　かたにかけたる袴はしたゝか
かりうともくるゝ山路はこえかたみ　東山大谷 實元
　他のおもはくとちかふわか中
あまゆれはさもにくからぬまゝ子にて　季吟
　日待にはとんとゝいひてあかされよ
夜食のおなかたいこほとはる　同
　ひつかりとせしうたのこはいろ
とゝろなる神かときけはうすひきて　同
　ふたりのおとこさためかねぬる
直衣姿やつるゝ影のわつらひに　同
　舟こきにくきよし原の中
よるなみもきやう／＼しゝと鳥鳴て　同
　繪にもやようそ似たる海つら
音にきく屛風のうらは是かとよ　同
　我領内につゝく谷川
いかたしよまてことゝはん手判ありや　同
　知行をはおもひの外に給りて
ひろひとりしやよき甲頸　貞室
　くさめ／＼と鼻をひる人
やいとをやけふのあすのとのはすらん　同
　いねくるしやな乘合のふね

しつかりと腐につけたるかね袋　同
ところのあなひしりて落人　同
人穴のことは双紙に記しけり
あやし恙のむしの古き代　同
いにしへの賢き人のまねをして
酔つふれても酒をほしかる　同
百姓の軒はもとより田家にて
煮る増水の（嵩）さひしき　同
ねちあひて飲しは夢か二日酔　同
綿かつく顔のうちこそゆかしけれ
はらみの地蔵いつ殿御せし　同
剃たてしおくしにあつく綿をきて
地蔵ほさにはほれけもそさす　同
千話ふみもかくや閻魔の筆つかひ　同
齋料といふ聲のいかつさ
いちのせによその牛馬はかはせまひ　同
うしろにしとゝおふてにけけり
深手とやたふれて後にしらるらん　同
とまりゆく鳥色なるもうす着て

森のあなたに雨ぞやあるる　同
ひかあきてなる西南僧い出つゝき　同
ふしきやなてる馬のわづらひ
逢坂や八坂て鯖をほとこして　同
加賀路につけはあかる鯖頭
釣たあし能登鯖の荷を打かたけ　同
茶筅とるやほゝんほんの夜明方
ふくろうつきにかゝる藪醫者　同
初雪に茶との客やめしつらん
北山にすむ東やまとの　同
まはらすにすくに渡れる諏訪の海
狐は通をえたるけたもの　同
拾ひぬる鎌は子にそへそたつへし　同
坐禅の床の瞑きさすな
なまかへをつけ渡したる方丈に
てんかくもとく出すや粟飯　同
せゝらるゝをもさのみかまはぬ
有か中にうつくし過た人こゝろ　同
日本記をいくたひかくりかへすらん

むらさき式部さえのふるさよ　同
　色猶ふかしむらさきの上
しほしめる鰯のあちはわすれめや　同
　蜜つほはなとすへもをかさる
此市にみえぬ油や酢や酒や　同
　ひつく蚯蚓はのゝ字なりなる
こほれぬる湯はにえ釜のくはんくたり　同
　戸たゝてよせぬ人の强面さ
見物のあるこそ能もしむへけれ　同
　自由にはならさるゆひののへかゝめ
はしめて笙を吹ならふ時　同
　日たけてのほる最上商人
急きとるやいな舟の棹秤さほ　同
　具足の櫃の蓋そそりぬる
高館や龜井か部やに口のさして　同
　手輿をかきてやすむ度〳〵
目かまふといふは有馬の湯あかりか　同
　しはき法師の寺そかたまる
豆腐たにくはてほしをく塵芥に　同
　かりうとの矢にもるゝさをしか
孝行をつくせし袖はたゝならて
　靑し文字より韵をこそふめ　同
そはめて袖にもてる摺糊木
　きんかりとはやすは宇治の祭にて　同
うなきのすしはのせぬ爼板　同

賀

　よめる屛風の哥そめてたき
優なるはけふの御賀の座敷にて　兒山三郎兵衞　隈光
　松竹かさる臺のかす〳〵
鶴若と龜若殿の元服に　惠佐
　我のある人そうらやまれぬる
達者なるなゝそし八そしいはゝれて　貞典
　二つの烏賊を賞翫そする
孫彦の生れて祝ふ五十日　知足
　草も木もあを〳〵とした三笠山
あめかしたかふ御代は萬歳　貞室

玉海集跋

夫玉海集余先大考貞徳以崑山集爲昔集以此集欲爲后集然撰輯之功未関而日薄西山氣息奄々獄嬰疾病既在牀蓐富易簀之時囑高弟貞室曰必繼吾事撰此集而可續其功矣嗚呼貞室者傑出于誹于諧既歴年所編輯之功閟焉彼海底之明珠有擲於崑山之玉石歟因以爲跋

明暦第二稔孟春穀旦

講習堂昌易謹書

すたれたるをゝこし絶たるをつぐは、治れるよのしるしなり。いにしへかの女をとのみこと、ひさかたのあまのみはしらとゝめぐりして、あなにゑやとのたまひかはせしを、我かたさまよりは神代の誹諧とやいふべき。日本武のみことのつくばの贈答も、すぎぬるときはひとのよの誹諧とおもはむ。佛のわたし給弘誓のふなうた、つみのをもにをおふせ侍る。牛頭馬頭のむまかたふしみ野の誹諧にして、外の道にはあらじ。しかるをいつの程よりか、よにもてあそぶこともおさ〳〵稀に侍しを、我師貞徳翁、をのづから道にたへてふたゝび世にをしひろむ。壯年のころより丹山のしげみにのぼりては、かたきいはほにくちすゝぎ、ほそ河の水上をたづねては、清きながれをまくらにして、風雅のさえにとめりしあまり、よはひの末に二集をあめり。崑山は既に築たてしかど、玉海はいまだほりひろげずして、なやめるつるのはしを奴にとらす。もとより五調ならぬ傭夫、よのひとのそしり有べけれど、師命のそむきがたきをいかゞはせむ。終にやむことをえずして、ことしよとせのはるの暮つかた、燒野ゝ菫の露をしのごひ、土筆をすゝぎ侍る。あるは人異にして句はひとしきたぐひ、あるはとく遲くもてこしなども、愚なるこゝろのをよぶばかりはかゞなへ侍しかど、耳のよそに目のちかゝらぬはすべなければ、誤にそへてゆるしたうびよ。みづからの句にいたりては、とし月しきしのぶくさのむしろのくさきをもはぢず、宵ごものたれこめてひとりごち侍しを、かくこちたく書つくること、わきてひとのめたつべけれど、はたとせばかりのあなたよりおほくの集にもちされ侍し本意なさ、いまはからざる

におほけなきえらびをつぎ侍るを、身のさいはいともおもひなし侍れば、まげて罪ゆるしたうびよ。なをいはまほしきことおほかれど、筆みじかければ大あくびしてやみぬ。

一嚢軒　貞室

明暦二年丙申八月吉日　敦賀屋久兵衛開板

作者次第不同并句數

（校訂者曰、本文の行は組方の都合により、横行を縦行と改めたれば注意ありたし。）

山城國

大淵和尚 玄弘　三
寂光寺 泰圓　十九
東山 智圓　一
知足　一
政光母　五

五條花開長頭麿 貞徳　發句五 付句百四十四
本就院 知春　二
泰譽上人 助信　二
沙門 静山　一
生敬母 久女　一
大佛何橋氏 女　一

大谷 寛元　付句一
宗仙寺 虎福　一
南山 榮善　一
沙門 是友　三
畦女　一
大澤常夢女　六　一

樋口氏 正信妻　一
蝠才　三
六條山中氏 道可　三
荻野氏 安静　十九
福井氏 宗重　一
喜多壽硯 直能　四
正章子 元次　發句八 付句二
兒玉三郎兵衛 貞利　發句五 付句三
津田治兵衛 友正　一
荷類屋 政信父　付句一
西田三郎左衛門 元知　十六
伊田長左衛門 可竹　四
藤本惠佐子 久松　三
望月又兵衛 正武　二
伊藤氏 信徳　四
樋口長左衛門 正信　二
河北八郎兵衛 一泉　一

晶月　一
臨淵　一
北村氏 季吟　發句五十四 付句二十
中川氏 喜雲　六
足立氏 正哲　六
直能子清七八歳 生薇　四
東寺住 定久　四
津田治郎兵衛 屋勝　付句二
葛野九郎兵衛 定之　三
荷類屋 政信　發句十五 付句十
東海氏茂左衛門 正頼　五
正如　一
大濱次郎兵衛 元實　付句一
伊藤八左衛門 祐孝　二
奥田治兵衛 政之　三
山本善兵衛 善入　十三
俊秀　一

長頭丸門 元易　一
馬淵 宗畔　二
高瀬氏 臨盛　發句二十六 付句一
奥田甫甫 清政　二
齋藤氏 宗安　一
口計　一
大河内氏 吉之　一
河地又兵衛 正重　三
田中半兵衛 正伯　八
青地市郎右衛門 可頼　發句十二 付句廿四
中嶋惠内座 貞晨　發句三 付句二
藤本氏 惠佐　發句七十五 付句二十一
大濱六兵衛 元春　六
佃太兵衛 倫良　一
宮川三郎右衛門 長之　十三
河北平左衛門 吉次　五
中村虎之助 長昌　一

兒山孫左衛門　光昌　二
一直　一
西村九郎兵衛　淨[illegible]　二
野々口[illegible]右衛門　[illegible]　二
清水四郎左衛門　[illegible]　十六
五條富尾氏　重隆　六
青木氏　常耻　二
高橋氏　元信　四
茨木氏　宗興　發句三付句七
山田氏　正盛　三
豐田氏　元重　五
鈴木氏　氏長　五
下村氏　方角　三
甚兵衛　重吉　二
齋藤吉左衛門　定良　發句二付句二
吉田氏　可成　一
三條小西氏　永貞　二
室町內田氏　平吉　六

貞貫　一
建六郎兵衛　[illegible]林　一
平山氏　[illegible]　發句一付句二
野口仁左衛門　[illegible]永　二
大村氏彦太郎　可[illegible]　二
戸嶋[illegible]右衛門　良俊　五
副田氏　光府　二
清水氏　政光　二
三秋　一
木間氏　友信　一
油小路　吉次　一
藤井吉左衛門　[illegible]　發句一付句十
河口氏市左衛門　[illegible]成　一
上山氏　政時　一
藤田九兵衛　正久　九
富小路儀俄氏　貞友　二
樋口平兵衛　道知　三
德田太郎兵衛　茂貞　二

兒山三郎兵衛　隆光　發句十付句六
浦辻長七　一正　二
野々口庄兵衛　正壽　一
烏丸三木氏　宗方　三
杉田小兵衛　[illegible]貫　四
五條辻氏　青春　二
進藤氏　世耻　二
上山氏　信光　二
松本氏　永定　十一
堀川木間氏　命清　一
平尾氏　幸以　發句十一付句四
大宮與市郎　能貫　二
上山氏　正光　二
中嶋四郎兵衛　宜還　一
河原町　宮重　二
小川氏　定安　一
堀川蘆田氏　道重　一
澤村氏　正義　一

清水氏　宗珠　三
野口甚兵衛　則重　一
清水平兵衛　[illegible]森　二
貞室內堀小四郎　[illegible]　一
內海[illegible]兵衛　[illegible]　一
堀川田中[illegible]　正[illegible]
橋本久兵衛　一好　二
西村喜內　忠勝　付句一
伏見坂本氏　正秀　三
宇治堀氏　宗治　一
喜也　一
正式子十二歲　正[illegible]　二
同　[illegible]筑氏　安成　二
郡山梶氏　重隆　一
正式內藤氏　玄利　一
生嶋有見　行惠　二
南都元[illegible]寺[illegible]左衛門坂氏　二
今井倉[illegible]氏　正盛　一

清水七郎兵衛　一慶　二
五條彌兵衛　近式　一
少人　夢一　一
二條堀川渡邊氏　宗吉　發句一付句二
眞軌氏　由治　一
五條　宗親　一
東六條　[illegible]貞　一
北村權三郎　季吟　一
伏見水本氏　清光　一
宇治堀氏　正治　一

大和國

郡山都筑氏　云成　發句一付句七
郡山　定幸　三
郡山今泉氏　吉保　四
梶氏內田　重道　一
龍田　草[illegible]　三
南都鴨戸五兵衛　之利　一
一言主　玄雄　一

淺野氏　常平　一
近貫　付句一
貞興　發句付句一
倉森[illegible]　正久　四
六條[illegible]右衛門　[illegible]次　一
七條[illegible]木氏　宗屯　二
五條吉田氏　正次　一
伏見久我氏　安永　一
伏見　重治　二
三條　貞[illegible]　發句[illegible]付句[illegible]八十餘
郡山池田氏　正武　發句十八付句十二
都筑氏　直成　四
郡山澤田氏　[illegible]重　五
郡山矢野氏　重貞　二
保好　一
郡山多賀氏　一備　二
南都[illegible]邊見氏　[illegible]信　一
吉野宇野氏　[illegible]治　二

河內國

植松住 忠相 一
高井田治兵衛 長德 付句一
松庵 慶也 一
貞成 八
硯市兵衛 一武 十
三宅氏 嘉雅 一
惠藤氏 正宜 一
河合金十郎 祐慶 一
勝安 一
淺井氏 正村 一

攝津國

山城大掾 貞因 三十九
大佛前 壽清 十三
井岡氏 喜之 發句廿六 付句一
秋葉八兵衛 利當 三
北村氏体齋 宗清 發句七 付句一
梶山氏 保友 發句十三 付句十二

御厨清水氏 春曾 發句廿 付句八
古市嵩井村 光業 一

和泉國

阿知子 定宣 發句五 付句一
畑山氏 友利 二
廣友 一
田原氏 勝明 一
幸重 一
岸和田 良辰 一
菊作左衛門 清之 二
成就寺 玉鞅 二
佐藤氏 榮甫 發句七 付句一
貞因弟 貞富 一
井岡氏母 榮春 發句八 付句二
井岡氏 行正 發句六 付句一
武野氏 俊佐 二
伊勢村氏 之次 十一
澁谷氏 安明 三

植松住 延之 一
久寶寺友井氏 政武 付句一
正法寺 成安 發句七 付句三
幸本氏 一守 七
水野氏 賴廣 發句六 付句一
友重 一
河合氏 宗勝 二
橋本氏 一
春政 二
久米田 忠重 二
呂良 付句一
河崎宗立 友直 八
井尻氏 古孝 三
井岡氏 常久 五
上村氏 重貞 二
武野氏 俊興 三
如貞 十六
安明子十三歲 長藏丸 二

木村太郎右衛門 重暉 發句廿二 付句二
永雪 四
久兵衛 滿永 六
片山氏 缺月 二
武井氏 守知 一
本吉 二
中村氏 友雪 一
當心 發句四 付句四
政武 發句二 付句一
川口五兵衛 正利 二
與兵衛 恒貞 二
正隆 發句七 付句三
井上氏 利昌 二
豐嶋喜兵衛 當黑 五
加兵衛 路春 一
谷輪氏 正因 二
一清 一
城主 不馬存 二

大橋重兵衛 一重 八
十平氏 信貞 三
彥三郎 常知 三
正五郎兵衛 末元 二
新太郎 貞正 三
井關氏 政友 一
木也 三
安福氏 秀之 三
篠十兵衛 治矩 十二歲 一
松尾氏 呂次 二
初雲 一
利兵衛 正重 發句三 付句一
太郎兵衛 忠昌 三
五十嵐氏 易利 三
久兵衛 重休 一
市郎右(衛)門 友久 一
七歲 鍋女 一
休甫 一

好道 五
早淵氏 定里 三
福島氏 得和 三
淸右衛門 萬春 三
爲宜 一
龍和 一
滿成 二
友以 五
行直 一
寺田氏 喬疾 一
稻田甚左衛門 信顯 三
小濱 副村 一
元與 二
岡崎源右衛門 一之 三
重次 一
八歲 長勝 一
盛行 一
宣潛 二

上牧　文素　五
高槻之住　正時　一
池田之住佐伯氏　正次　五
同佐伯氏正弘　妻　二
同岡嶋氏　重紀　三
茨木樋口氏　重明　一
同　無及　一
有馬之住　重層　二
腹見村善兵衛　頼重　發句二付句一
上野松木氏　一以　一
守武　一
同常念寺　昌把　付句三
同竹内氏　郎信　發句五付句四
知輕　一
村瀬氏　忠次　一
桑名之住　直慶　二
同　可隆　一
富田堀氏　忠勝　一

上牧　元寄　五
古曾部寺本氏　吉和　二
池田之住佐伯氏　妻　一
伊丹之住山村氏　盛定　五
同岡嶋氏　豐光　一
三田之住　重香　發句六付句四
同　正勝　一
山下　正次　一

伊賀國

上野松木氏　末友　發句三付句四
松坂常念寺　宗順　付句二
同竹内氏　三忠　發句十三付句一
松坂之住　重友　一
津之住高瀬氏　道貞　一
長嶋之住佐野氏　忠清　一
同伊藤氏　郎利　十九
同大橋氏　林義　二
富田南部氏　兼次　發句三付句二

高槻之住　昨木　一
阿久刀川田淵氏　辨賢　一
佐伯氏正次　女八歳　一
伊丹之住利兵衛　滿吉　一
伊丹之住岡嶋氏　豐常　一
三田之住松本氏　親次　一
有馬之住　三章　五
有馬郡安左衛門　三田之住　一
上野常行寺　一慶　一

伊勢國

松坂樹敎寺門樹　加友　十七
同林井氏　昌友　二
同米川氏　交友　付句四
五郎兵衛　成吉　三
桑名住味岡氏　俊治　六
同　方成　四
同水谷氏　長昌　二
同廣瀬氏　兼吉　付句二

同蓮光寺　寺松　一
渡邊氏　之也　十五
簑浦氏　藤友　一
池田氏　ノ身　五
山上氏　次政　一
熱田藤氏　一甫　發句五付句一
同柳十長　竹端　一
津嶋服部氏　安重　一
赤坂内藤氏　賢香　二
白須加梅本　吉清　付句一

相摸國

武藏國

同　伊奈氏　一
同高木氏　直義　一
同羽太氏　正明　一
同山田半之助　貞利　一
同平野氏　古笄　發句一付句五
佐々木氏　信清　二

同廣瀬氏　重纏　二
清水氏　獨卜　五
石田氏　正興　一
山岸氏　是安　一
犬山岡本氏　谷直　一
熱田之住　和俊　六
宮崎氏　友下　一
津嶋　大橋氏　一
赤坂吉田氏　正治　一

駿河國

小田原園枝氏　直旨　三
江戸昌雲軒　春清　十一
同　正賀　二
同渡邊氏　照繁　四
同富田氏三左衛門　基明　五
同安中氏　業友　二
同　玄砂　四
同大井氏　重成　一

尾張國

渡邊氏　有也　十七
兼勝　三
犬山山覺院　卜需　二
伊藤氏　一和　四
同小嶋氏　吉季　一
下里與一郎　俊貞　一

參河國

遠江國

久能山　德窓　七十五
淺見氏　尚鄉　一
江戸堀田氏　芦錐　二
同　吉言　發句二付句一
同齋藤氏　重久　五
同淺羽氏　貞昌　三
同長谷川氏　正重　一
同阿形氏　祖秀　廿
江戸　忠重　一

神田左兵衛　貞頼　三

近江國

同福田氏　光繼　七
同河井氏　吉勝　五
大津早崎氏　重安　三
同伊藤氏　三丸　二
膳所松平氏　三等　六
今津中井氏　長次　一
今津石崎氏　可隆　一
大田氏　吉久　四

出羽國

福井之住伊藤氏　良郷　發句四付句三
同秋山左兵衛　方竹　發句一付句二
同一山　文清　付句一
敦賀野澤氏　永吉　十二
敦賀之住彦右衛門　秀辰　二

加賀國

金澤之住篠田氏　明忠　四

神田村垣氏　弘武　三
大津久上氏　季政　三
同福田氏　以吉　一
草津住　重道　四
大津若林氏　吉信　二
同竹内氏　長則　二
山本氏　正次　一
曾根村大岡氏　信可　一

美濃國

竹ヶ鼻大田氏　可政　九
秋田野代常福院　俗爲　七
福井之住　吉昌　一
同山川氏　無樂　七
敦賀野澤氏　竹雫　發句一付句二
定利　發句四付句三
重識　一
大橋氏　可理　一
大正寺之住　重次　一

神田大覺院　秀長　五
大津高橋氏　正信　六
同中村氏　重連　一
大津石田氏　元永　二
同秋岡氏　満法　三
同早崎氏　正則　一
堅田竹内氏　正成　一
彦根之住岩脇氏　正秀　二
山端氏　空昔　發句八付句十八
同大田氏　可樂　二

越前國

福井之住　寒童　發句一付句二
同山元氏　重直　付句二
同德兵衛　吉昌　付句一
同中村氏　正次　發句二付句四
敦賀犬井氏　重次　十
金澤之住　四元　一
高田氏　正種　四

越中國

柏崎妙行寺　日仰　付句四
同内山氏　武英　一
新湊吉井氏　正繼　一
大須賀氏　一竜　一
同山田氏　利之　五
同平岡氏　直重　二
同乾氏　直政　三
同田寺宗佐　久頼　三
同山内氏　土心　二
同竹屋三郎兵衛　道味　二
同佐井氏　頼欣　二
同七郎兵衛　専意　一
同一井氏　重光　二
小林氏　重安　一
佐治氏　正重　二
黑井興村氏　退步　四
同梅垣氏　忠次　一

高岡住江平氏　隆昔　發句一付句一
柏崎野澤氏　壽盈　一
同　袖鄰　發句五付句四
村上之住塚本氏　吉貞　一

丹波國

同一井氏　元重　二
同一井氏　久重　二
同乾氏　政三　三
同關氏　萬陳　三
同横山氏　吉治　三
同辻氏　正次　一
同上月氏　重正　一
同乾氏　赤坂　一
同上月氏　重政　一
上杉　正茂　二
立原太田氏　吉貞　一
志賀梅垣氏　正次　二

丹後國

越後國

同蓮識坊　一顯　四
同市川氏　一九　一
糸魚川之住杉本氏　養鄰　一
福知山永領寺　休佐　一
同一井氏　重治　一
同乾氏　政通　十二
同與市郎　一勝　一
福知山乾氏　之政　五
同横山氏　吉英　發句六付句二
同竹屋　龍嘲　一
同納屋　良吉　二
同山内氏　見藤　四
同一井氏　久勝　一
池野氏　重久　九
佐治之住　一
氷上郡玉　重成　發句二付句一
小嶋氏爲三　定次　一

作者不知　一
生野中嶋氏 永　發句十二 付句七
同毛利氏 正長　一
同寺村氏 貞行　一
同松本氏 吉屋　付句一
多田傳八郎 正安　六
倉吉住荒木氏 直久　發句五 付句一
會爾村菅原氏 貞雄　二
姫路三澤氏 是[illegible]　九
同西山氏 幾重　發句廿 付句一
姫路三木 如重　十二
同若田氏 吉長　一
同内山氏 一千　五
同渡邊氏 正貞　二
同 井上氏　一
同吉田氏 利重　四
同村山氏 辻女十歳　二
餝磨住脇氏 清長　五

宮津藤右衛門 秀宣　一
同長野氏 森秀　發句八 付句二
同尾崎氏 貞則　一
同土肥氏 重之　付句一
同竹居 野利　付句一
鳥取住 信笑　一

播磨國

本長寺 日隆　發句 付句一
同武田氏 三吉　十二
同垣内氏 之富　六
同垣内氏 宗云　發句二十七 付句八
同幸田氏 正令　發句七 付句二
同稻津氏 重安　二
同那波氏 由吉　四
同村上氏 時雨　一
同加川氏 重助　二
同正善寺 未云　付句一
餝磨松浦氏 意順　八

但馬國

同寺田氏 豐重　發句五 付句二
同土肥氏 美也　二
同蓮藤氏 重光　一

因幡國

伯耆國

書寫山 誦典　五
姫路圓[illegible]寺 [illegible]次　五
同村山氏 風子　四
三木 可慶　一
同相野氏 安友　二
同長谷氏 白笑　二
同高井氏 元利　五
同平井氏 重利　二
同水野氏 正重　三
同澤田氏 求友　二
同三木 藤近　一
同古川氏 友定　一

同三木氏 可隆　二
同五百藏氏 之政　發句一 付句一
同賀古氏 秀長　一

備前國

小松原梅要子 時門　七
松村大島兵衛 幸靖　六
三木七太夫 忠之　一
岡山清水氏 吉久　二
岡本 吉辰　二

備後國

小川氏瀬兵衛 喜伯　一

紀伊國

高野山 泰雲　一
同覺了坊 圓恵　四
夕陽 靜眞　一
藤代石倉氏 一人　十二
和歌山日下氏 貞長　發句三十 付句一
和歌山 景乘　一

三木五百藏氏 茂下　發句五 付句一
三木五百藏 寬政　發句四 付句三
賀古氏利左衛門 [illegible]盛　付句二
石原氏 正成　一
安倉氏 章輔　四
松木寛兵衛 清讃　二
遠山氏 重房　二
岡山神崎氏 安之　一

備中國

任夕　二
岩國小西氏 幸茂　二
高野木食 運仙上人　一
熊野那智山良任坊 如游　發句三 付句三
熊野林氏 貞通　發句一
粉川 寺治　二
同 無分　三
野村氏 正心　發句二 付句一
廣瀬又五郎 時秀　發句三 付句六

三木五百藏氏 重政　發句二 付句一
三木池田氏 安長　付句一
同平井氏 正重　付句一
神林氏 貞大　一
岡山杉本氏 重[illegible]　三
吉岡七郎右衛門 了貞　一
岡山志賀氏 俊安　二
八木氏 積眞　一
吉岡氏 信元　十

周防國

岩國住人　一
高野山 悔馬　一
熊野那智山玄雅坊 道嘉　發句七 付句四
勝浦 正心　發句三 付句一
粉川大友氏友松 定義　二
根來 重俊　一
和歌山池野氏 清近　四
西尾氏 重勝　一

則友　一
阿波國
讃岐國
燕石　三
肥前國
薩摩國
同武林氏 守泉　二
同森村氏 吉行　三
同澤田氏 未秀　三
松下氏 重利　發句二 付句五
光行　一
有馬意安 壽白　七
玄毫　一
三郎兵衛 正成　二
影山七左衛門 文明　三
永利　一
藤田喜兵衛 俊通　一
下村利兵衛 康吉　七

岡崎氏 悳雪　一
撫養内田氏 正信　五
高松上柳 頼心　付句一
豐後國
長崎野澤氏 玄茂　十
鹿兒嶋 大山氏　廿二
同大坂氏 政重　三
同園田氏 重好　一
同壹岐氏 秀幸　一
松下重利内 資則　一
五餘部半左衛門 勝房　一
正成　一
鷹葉七右衛門 常信　一
常可　二
竹村八左衛門 正重　三
俊之　二
田中與吉郎 重章　一
中井左太夫 朝慶　二

良辰　發句一 付句二
撫養有田氏 正吉　三
土佐國
森本 道圓　一
同 如自　四
同 快温　二
同 兼次　一
同是枝氏 盛延　四
國不知
一充　一
横田氏 重次　一
岩井市左衛門 常久　一
曾我氏 知圓　一
俊則　三
田村甚九郎 重晴　三
宗旨　一
井尻清五郎 惠幸　二
辻氏 忠勝　二

田中氏 可雪　二
小田市左衛門 胤俊　發句一 付句一
佛師 正勝　二
小川氏 直興　一
中嶋氏 宗朋　一
廣寧　二
井前八左衛門 政舍　付句一
辻氏 忠直　三
三宅新太郎 嘉雅　一
政明　一
定家卿　一
宗長　一
作者不知　發句九 付句四

辻村 愚玉　一
相氏 利定　三
吠岡久五郎 正佐　三
俊治　一
樋口氏 尼　一
中井氏 忠幸　二
山林氏 重貞　一
藤本庄右衛門 正屋　一
雪竹　一
屋續　付句一
法印玄旨　二
櫻井甚佐　一
國不知　五十六人

小谷甚太郎 久惠　八
松室右兵衛 寸松　二
武田二郎三郎 定信　二
中川仁左衛門 重定　一
藤井吉兵衛 富重　二
林八兵衛 元辰　一
德田太郎左衛門 茂貞　一
伊東又兵衛 則常　二
正類　一
古德
宗祇公　二
御句　夢想三

發句數　貳千六百廿餘句
付句數　五百八十餘句
作者數　六百五十八人

山之井

四季・日々發句

季吟

山之井

春部

元日

改年　昔年　年徳　わかゑひす　毘沙門功德經　門神棚　かさ
卜體　書初　讀初　きそ初　弓始　年男　大ふく　鏡餅
にし肴　門松　ゆづり葉　しだ　はね　故鬼杖　たま　ふりく

あら玉の年立歸る心をつらねば。たて松はにほんによせて君をことぶき。かざるほながは國のとみくさになぞへて。豐年を祈る。九重の雲の上には。四方拜小朝拜など。政事繁けれど。地下にさたく沙汰し知べきわざにも侍らじなれば。只見えわたる四方山の。いつとなくうちかすみて。いひしらず長閑なる景氣。けさあたゝむるかんの氷も。かつ隙見する池の鏡餅をさへとりよせて。ちとせのかげをくまなき家の内の心祝儀ども。蓬萊の臺など置て。不死の藥の酒くむやうに。ゆるりくはんすとゞをして。おほぶくいはふていたらく。外にはしめかざり。内には年德わかゑびすをむかへ。庭には庭かまどたき。ふくわらをしきたへ。うないや。ひすましらの。ほうびきや何やといひ遊び。庄屋の一番子も。はま弓をいたへありき。だいじやうどのゝおごうは。はごいたもてはねまはり給ふありさま。物まふといふ禮者の顏も。御出のよしまふといらふ下部がつらも。よひの年の寒さいそがしさをわすれはてつゝ。わかやきあへる氣色など。詞のえん花やかに。ひとゝせの始。卷頭の心なれば。たけたかくすなほにあらまほし

ありたつたひさりたつたるとし哉

一番にみゝより年ぞ鳥のこゑ

かずのこはにしんないはふ年始かな

あづまよりけさくる春やかしまだち

氣晴ては風新春のあしたかな

しんしゆんは堯の代つぎし嘉例哉

けさやげに出る日つぼむ花の春

四十二のさし

守りたまへとしはやくし十二神

おほぶくなわかすや富貴じざい釜

立歸る年はさへほにはるひかな

四十からもんごりかへせ老の春

關東にて

けさむかふあづま鑑のもちいかな

貞人云此句は烏丸亞相公へ也と

命期に侍る年明て。元日立春成けるに。生なかへたりし心ばへを

節父歲母よべ親さ成とし哉　長頭丸

万物の出るはる日や如意寶珠　同

新宅を作りて。元日にわたましし侍けるに。あざらけき魚どもの有を見て

屋わたりに料理新春のぎよけい哉　同

正保二年の元日に

鶯も三皇の御代を初音哉　正章
薬子やしも中かみにふさうこく　同
さほ姫の誕生日かけふの春　同
さいまつのわかはへならし門の松　休甫
本立て道なる物や門の松　道節
春の日や光る源氏の三ヶ日　良保
二度たつや年の内外の神の春　一葉
京や九万八千年のかごの春　常倫
なにはしらすめでたきみつのはじめ哉　讀人不知
門松にはかま腰する禮者かな　屋信

雪などふる朝は。さほ姫のねりかづきとも。年徳の白木綿花ともいひたつ。松の内に降雨はおさがりといひならはせり。あめのしたのこぼれ幸などめでたくいひなす

おさかりはあまのさかほこの雫哉　了三
けさふるはおさまれる御宇春雨哉　長頭丸

嶋原といふ所に。だいうすの残黨蜂起せした關東より御おさへ下りける。明年の元日に

ありしだいうす雪きやせけふの春　同
ふりくもふりさけ見るや玉の塵　可頼
門松も大木となれけふの雨　政信

支干はそのかみ元日に用ひ侍れども。近年季の詞をくはへ侍。酉の年ののどけきに。鳳凰も世に出よとも。治れる時をつくるなどもいひなす。とらの日の風うそふく事などあるをも。千里の外もあまねき御徳をよそへ。竹の園生も万歳の聲うちそふるなど。祝してつらねなし侍し

鳳凰も出よのどけき鳥のとし
けふくるやかんこけむす鳥のとし
去年よりもまさるめでたきとし哉
寛永やあけ七さいの馬のとし

生年酉なるに。けふ又鳥のさしさりの元日成ければ

年さ日さみさりあはせやけさの春　正條
年はけふさりかぶさなや喜春楽　日如

都西正月は。世のつねにかはる事のみぞおほき。鼠を。よめがきみとよび。なまこをたはらごとなづけ。朝夕のねつおきつをもいねつむ。いねおさむなどいひ。猶ひらきまめ。いものかみなどやうにいひつけたることわざとくしるすもうるさければなん。思ひ出て何にしつらねば。其ときゝにくからず。あまりに賤しからぬをぞいひ侍るべきぞや

立春　若水　つゝみ井開く　四方のはる

是はもはら春たつ日なれば。谷うち出る鶯の笛も。ひいや日かげに聲おかしく。軒のつらゝもとくくと。琴瑟にまがふ音しるく。柳にやつたる梢はけさふく風にしなひ

をまし。すね木の梅もさすがにつことえがほして。よろづのびらかにゆたかなる心をしたつ。元日もひとしけれど。いまだはるたゝぬほどなどもあれば。その年によりて。少は心も替るべし

春たつといふばかりにやかざり繩

よもに春たちはだかれる日足哉

めぐまれてうろりさたつな花の春　正式

若水とは。大裏に五日前つかたより。主水のかみけふ奉る事とぞ。御生氣の方の井を就して。ふたをして。つゝみ井ひらくともいへり。いまだ春たゝぬとしの元日には。すべき事にあらず。立春の日の事なりとかや

若水は老ないづこへはねつるべ

立春に雨ふり侍ければ

雨はふるてくむ若水はわくて哉　常倫

子日

ふた葉の松　ひめこまつ　若松　女松　男松　いさゝ松
茶筅松

子日の遊びとて。古。人〳〵野邊に出て小松をひき。われ人ともにいはひ侍し事とぞ。松根に倚て以腰をすれば。千年のみどり手にみてりとも作り。君にひかれてよろづ代やへんなどもよめり。俳諧にも。男は女松に腰をすり。女は松ふぐりに心ひくなどいひなし侍る。哥には大かた松をむねとよみ侍れども。只名香のはつねの日。ふんぞりかへり寝のびかなゝど斗もし侍る

松ひくはあたまの黒き子日哉　正忠

むつき四日子日成ければ

正月の子のこもみつかひさ日かな　正如

子日七日にて侍けるに

松よりも芹のねのひやひき肴　休甫

若菜

なづな　佛の座　すゞな　すゞしろ　ゑぐ　うぐひすな
くゝたち　水入な　七くさ　こながき　たゝく　はやす

昔は手づからふくしもち。みや人も袋をさげて。からなづなつみしとなん。いま此京の町には。ひさめがかなぐりもてきたるを買て。唐土の鳥と。にほんの鳥と。わたらぬさきにとかや是をうちはやす。されば尻皷はらつゞみ。棒ちぎりきをも。其縁によせ侍る。美に調ずるをいふには。菜刀のはやすとも。うましとて口たゝくなどもいひ。野邊に出て七くさもとむるには。佛の坐は蓮臺野にてつみ。鈴菜は神樂岡の麓にもとむる心など。かつ又わかなの上下も賀をもて名づけ。上古の哥人も。君を賀し親を祝し侍なれば。其心ばへあるべきにや

源氏ならで上下にいはふわかな哉

その葉もけふは七種の和哥な哉

つみたゝき後はくひつくわかなかな

なづななばひくはゐいきら野草哉

わかな七句し侍しに

籠毋與美籠もちにんさつむ若菜哉　正章

七くさや寺にはたゝき御坊たち　友閑

ゑぐ菜つむあたりや去年の苺畠　正式

わかなにもふる菜やまじろ佛の坐　同

しもおさこの。すり木もてわかな
はやしければ

うはなりかわかなもたゝくてすりこ木　政信

ふり袖にすゞなもつむやさんばさう　元次

けふは白馬のせちゑにて侍る。天子のえいらんあるとなれば。雲井にゆくといひては。龍の駒かともうたがひ。麒麟などによせて。七草をもふまぬ心ばへをいひ侍る

あを馬の雲井にゆくや龍の駒　良保

三毬打

みそさんど　吉書あぐる　ひし花びら　ほこらす　禁裏
仙洞　賀茂

上古は。うちし毬打を。神泉苑にてやきあげ。法成就の池にこそと拍しつるよしなれど。今町がたのならはしは。三ケ日かざりし。やうちのゆづり葉もしだも。門にたてたる松竹も。一つに集て彼なりに作り。帯扇など結つけて風流をなし。十五日のあさ暁。大道にたてゝほこらかして。とんどやおほんとはやし。吉書をもあげ侍る。さればひのもとやたうどゝはやすとも。あげまきやとむどゝはやすなどいひつゞけ侍る。又さぎちやうを鷺にもそへてふるくいひなせり

ひのもとやたうごゝはやすさぎつちやう

むつき十四日の夜。月見ありきつゝ。季吟子がりたづれけるに。百人一首をよみゐて侍りければ

たかむらの竹をやたてゝさんぎちやう　正章

余所の事はしらず。京の風俗に。此後廿日だんごなどいふ事はあれど。元三よりのいはひ事どもは。けふをおさめと見え侍る。まいりきたれる千壽万歳も。千町万町の鳥おひゝ明日よりは門ばたをもふまず。にし肴の臺なるしらげのよねも。けさの粥に和するとて皆うちあげ。いせゑびもとりはなちなど。大形名残なくぞ成侍る

殘雪

とくる　雪間　雪げの水　こぞの雪　雪汁　雪なだれ　むらきゑ

帷子雪の村消を。めゆひのかのこまだらと見たて。餅雪の殘れるを。日の鼠のかぶりさしといひたて。山姫の化粧もところはげ。山姥の額綿もたぐられけんなどもいひなし。又軒の雪にめに見えね鬼瓦も化をあらはし。つくる雪佛は。涅槃をもまたではてにけりともいへり。猶しふる空にむかひては。霞の衣の中いれのわたとも見なし。はるさめにまじるはなかいらぎなどもいひなす

ゆきつくす江南の春の光り哉　長頭丸

俵子かわらやにさくる春の雪　正忠

春の氷は。日足にけやぶられ。風の手につきながさるゝ心ばへ又とくるとも。隙などもいへり

薄氷をふみぬく春の日あし哉

霞

やへがすみ　うす霞　朝がすみ　夕霞　霞の間　霞の衣　一かすみ
たつ　たなびく　かゝる　へだつ

杉にかゝりたるを。玄賓僧都の衣かとあやしみ。松にかゝれるを。天女の羽袖かとうたがひ。不動坂にたつを見ては。火炎の煙に見なしあみだが峯にたなびくを。誓の網といひなす。筆を染ては和哥の浦を心がけ。霞をくみては武蔵野を思ひ。又目のかすみはがすみといひては老たる人の愁をのべ。はげ山の頭巾はちまきなど見たてゝ。春の眺望をもいへり

むさし野にけさ一盃のかすみ哉
仁和寺の山の霞や眉つくり
九重の山やさなめのひさかすみ
四方山にかゝりがましき霞かな
さほ姫の十二一重か雲かすみ
乾坤や雲さかすみの衣ばこ　長頭丸
うはの空の霞やしや／＼の紗の衣　加友

はるたゝぬさしかすみふかくたち
わたり侍りければ

寒山も十徳やきる春がすみ　正式
十方八方はりまはしたるかすみ哉　正頼

鶯

金衣鳥　谷のふるす　はつね　きゐる　さへづる　花になく
竹に生る　笛　琴　哥　人く／＼　法華經　三光になく

笛といひては。落梅の曲ときゝなし。琴を。柳花苑などいひなせり。法花經となくといへば。經よむといひて。初音は序品。あまたになくは。千部などいへり。さりとてなべての經をいひなさんは。いかにぞや侍らん。又此鳥集中には無音をいたして。高天の寺には春毎にくるともいひ。梅若とのみ枕をかはして。櫻児には宿をもからぬ心をもいへり

おのづから鶯かごや園の竹
法華經ぞ鶯によき當て候
鶯の聲には法花經の法中哉　正式
うたぐちもありや鶯笛の聲　良保

春雨

こいぬはるさめ　夫はるさめ

うそさびしく音もせでふりくるを。さしあしかともうたがひ。わらぶきならぬやねもなしともいへり。永く／＼とふりつゞくまゝ櫻のはなも象とひとしくうなだれ。柳の眼も蛇の目ほどいからかすやうの心ばへをもいひなせり

ふりくるはさしあしなれや春の雨
春雨は花をうち出のこづちかな
春雨やよものかすみのしぼりしろ　可頼

雨あられ降あれたる日

春雨にいれつぶまじるあられ哉　休甫

梅

八重　ひとえ　花の兄　梅の花笠　窓の梅　紅梅　青淵の梅　鶯
宿梅　好文木　飛梅　綸旨梅　行幸梅　鐵梅　坐論梅　昆くだり
梅にち　黄梅　一重の梅　かほる　匂ふ　すわえ　櫻梅　北野　大庾嶺

かほりをめでゝは龍脳の梅花によせ。蘭射の窓の梅ともつゞけ。古木は沈のほた。朽木の伽羅にたとへ。霞をむすびてはふせごの煙にいひたて。雪を香爐の灰など見な

す。又薄墨の倫旨梅。枝やり梅や十文字などもいへり。花の兄といひては。太良月にひらく共。惣領の家をつぎ木かとも。世にやたちえのなど共えんを求む。彼菅原の神木なれば。から梅を渡唐の天神。紅梅をみきてんじんの御顔にもよそふべし。猶又在中將は。梅の花ざかりに高子の御事を忍び。蘇子瞻は。散こし花に李節推を思ふ。是等の古事も共より所ならんかし

ぬる鳥の沈のまくらか梅の花
梅が香や鳥のねごこの卓香炉
折袖の匂ひぶくろか梅の花
手にもつや見る目かく鼻梅の花
やり梅のはなつきさなす匂ひ哉
鑓梅は大名竹のおともかな
やり梅の花や一興さがり笠
紅梅の花ぞひらけば朱唐笠

北野にて

紅梅やうこんのばゞがはれ小袖
くれて見ようす墨色の綸旨梅
まみ梅もはなのしんにやたちつてさ

北野の万句巻頭に

信あれば誰も富梅のきざく哉　長頭丸
梅は星人もたんだ来る北野哉　正式
ちる梅やこずゑから又星くだり　同

わらはべの花折たりしな。もりの

しわざにおほせて。家童子のさいなみ侍りければ

なるとがはいちやや紅梅も老木哉　踏雪
匂ひ来るやさへばそんじやう園の梅　加友

梅の花ざかりに

かいで見よ何の香もなし梅の花　正章

柳

柳簇　あをやぎ　糸柳　玉柳　玉のをやなぎ　しだり柳　ふし柳　さし柳　川柳　川ぞひやなぎ　岩柳　箱柳　こぶ柳　めはり柳　柳髪　しなひ　みだるゝ　なびく　春風にけづる　堤　池　岸　鞠場

柳はさほ姫のながかもじ。うぐひすの琴の糸などもいひなし。雨のあらひ。風のけづるけしきをもながめ。川邊になびけるを。氷よりひくまゆかと疑ひ。もゆるといひては。火鼠の川柳などもいひかく。猶こぶ柳といふ名によりて。氣力なしと作れるをとがめ。觀音のちからがなともいへり

春ごとに若やぐやふ老ふし柳
きりくゐの柳はかぶのぼさち哉
柳がみふきがへしにやゆふあらし
軒口にあまる柳や高やうじ

大坂清水万句巻頭に

まし水に末繁昌の柳かな　長頭丸
なんなにて見ん柳がみ柳ごし　正章
しだるゝやもえぎすそごの糸柳　讀人不知
下髪か上ろう蜘のいさ柳　休甫

ほさちなら柳のこぶや五大力　一葉

春月　朧月　かすむ

霞の内にぎがめくを。簾こしの額つき。衣かづきの顏の内などゝ見なし。みがゝぬ玉。古鏡にもたとへ。内侍のかみの名をもよせ。しくものもなしとよめる詞を。敷物なきとゝりなしてもいへり

千金なのべたか春の月の弓　良保

似る物もないしは朧月夜哉　三友

春日　遲き日あし　永日

春の日は。めくる遲さをいひたてゝうしにやのりしとも。砂道やゆくなどもいひ。鷺あし。けほうかしらのかけほうしをもよせて。永きたとへにしなし侍るべし

まんまるに出れどながき春日哉　此句は山崎宗鑑法しのとかや

鵲鷺のあしより永し日のからす　正章

佛別　涅槃像　梅檀の煙　鶴の林

尺尊跋提河の邊にて。涅槃給ひし日なれば。あるとあらゆる寺〳〵に。涅槃の繪像を掛て。宗〳〵の行ひ侍。是みながすなみだやばだい川共。鼻たれて鳴やねはん象共いへり。すべて此經のていなどあるべし

けだ物も鼻たれてなくやねはん象

蕭盛もけふやほさけにいきわかれ　讀人不知

花　花の顏　花の雪　花の波　花の海　花のくも　花の錦　花笠　花筏　花梅　花筒　花かめ　花かたみ　花皿　花心　花の莚　花よめ　花うつぼ　花いくさ　あだはな　つぼむ　えむ　匂ふ　しほむ　ちる　東山　よしの　志賀

花とは櫻をいへど。たゞをしなべて千草萬木のうへにもわたり侍る。花のもとの一刻の宴は。千金にもかえがたく。ちる事のおしさには命をもかろんじ。夜るはよのめもあはず花を思ひ。まどろみては夢にも見。ねごとにもいひ。ひるは一日宗踏をもわすれて見ありき。暮るを悲しみ。明るを悦ぶ。雨露を親といひ。風嵐をあたかたきとせり。花を猶しほめる顏は。西施が胸をなやみしよりいとおしく。花のえみには。貴妃すら百の媚をうしなひ。孔子もたふれまどひ。尺尊も腰うちぬかれ給ふべしなどやうに。めでしたふ心をほるといへり

ちる花をたつかけてゆく嵐哉

此句は定家卿の作とたん

花の陰にて酒の小筒あきたりけれ

ば

大はらや酒のみたらぬ花のした

たまりやせぬたまりやいたさぬ花の露

さきちるもしらぬは春のはなげ哉

思ひうちにあればや花のあから顏

花ざかりそりよたがとへばよしの山

うろしならで皆花ぬりぞ吉野山

みよし野の花のさかりや四海波

禪でらの花に心やうき藏主
花ひさつたもとにすがる子共哉
吹あぐる花や春風たうりてん
人心ひようたんなれや花の涙
花のためや惡事千里の春の風
花な雨たゝきおさすや後の親
さかりにはちうがふちうよ花の雨
　永雨に花のちり侍ければ
子にかゝり親ぶりなせそ花の雨　長頭丸
ちる花のりんのめくりや風車　同
さかりには美人ぞろへか木々の花　正章
短冊は風鈴か軒の花のりん　一葉
執心はえきらぬ花のりんゑ哉　道保
よはき物や春の部にとる雪月花　加友
たをられぬ嶮の花は見あけ哉　充寛
花の都なべてにしきの小路かな　良保
花の雪ちる鐘の音や鷄毛〳〵　休甫
名殘おもふ花の匂ひのあげく哉　同

櫻

山櫻　家櫻　糸櫻　かば櫻　うば櫻　彼岸櫻　火櫻　姥櫻
小櫻　楊貴妃　くまがへ　しほがま　きりがやつ　たいさんぶくん
普賢象　いせ櫻　遲櫻　弌櫻　櫻がり　やへ　ひとへ　千重　匂ふ
火とぼす　ひらく　笑　ちる　吉野　金峰寺　祇園　清水　豐國
鞍馬

春は櫻にうからかされて。人の心はひようたんになり。檜の木玉ともなりて。野山をとびまはる心ばへ火櫻は待こがるゝとも。やく火とぼすともいひ。糸櫻はよれつもつれつはなれがたしとも。くりかへしあくめもなやなどもいひ。すみぞめの櫻には。平仲がそらなきし顔をよそへ。普賢象には末つむはなのさきをもいひなす。猶いせざくらは神祇をよせ。彼岸櫻には。尺教の緣をむすびなど。とく。をそく。ちり匂ふ折節にそへて其作意あるべし

二季にさく彼岸櫻のたれもがな
小櫻のはやめぐすりか春の雨
作てなれ七重のひざな八重櫻
聲なふて人やよびこむ家櫻
めん〳〵のやうきひなれや家櫻
　あつたのみや万句に
やうきひの玉のありかや花の露
はなにゝて盛ながゝれふげんざう
小櫻なかざはかしゆくあらし哉
青葉まで見るやなんざの初櫻
めなかけそ山のかたいの犬ざくら
なしなべて見るやうばそく姥櫻　正章
　悲母の墓所成ける櫻なうへかへ侍るさて
佛性はありやなしやの猶ざくら　同
白雲にのりの花かな普賢象　長頭丸
花の波も八重の塩竈の櫻哉　同

蝶鳥やあひ借屋せん家櫻　良保
花桶もみつわぐみけり姥櫻　立圃
きいくに〻まかりける比
きの川やうきてながる〻かば櫻　徳元
やうきひにましこのまへかいせ櫻　正伯
糸櫻ちらり椿も落花かな　正忠
黒方かかほるすみぞめのさくら花　同
おく山はまちや〱が花か遅櫻　一滴

椿花

伊勢椿　しら玉椿　つら〱椿　しぼいり　咲わけ　椿さち
つぎ木　よみつき

つばきは。やちよふもかはらぬ色をめで。玉椿といふを。玉によせて。琥珀珊瑚にもいひなす。椿餅とは。葉のわきに。しろくふくれ出たる物なり。木に餅のなりたるためしなどいひ侍りし。猶いせ椿とびいりなど。其名につきたる作意あめる

花の数や千くは万くはの玉椿
小椿のはなのたゝれはちりけ哉

梅櫻は。春の景物誹諧の命なれば。其数多なる花の名どもを。人もあまねく見なれ。聞及び侍れば。いかほどもいひ出たんに興有べし。それさへた櫻は。花さかぬ故の名なりといへど。麝香のいぬざくらなど。匂ひをさへめで侍れば又有物にこそ侍らめ。そもさだかに見ぬ程は。せぬがかちにぞ侍るべき。兒櫻といふも。小櫻といふべきを。其とおなじければ。かうやうにいひ来れり。是等はさのみきらふべきわざにもあらず。はいかい躰のひとつにても侍るべし。又梅暦といふ事。其かずおほく見え侍る。されどたび〱むめごよみなどいひ出ぬれば。詞つまりて聞にくしなど。かたぶきあへる人〱も侍し。都鳥詞は誰も知て。優なるぞよかめる。椿の花は其した〱かぞへがたく。青椎不思儀の名ども此比聞え侍。俳諧の道の賞さのとくこれは。何事にてもいふべかめれど。もし知ぬ人疑侍らば。作者の損にもなりぬべし。又珍敷名を集て。わざと百句などつらね出なば別の事なりかし。猶其花のあるじのついさうなどに坐敷一さんにいひたらんは又興有べきわざにや

海棠

ねぶれる

ねぶれる花といひ侍れば。人の目はさむる詠をいひはやし。胡蝶の友なる心をもいへり。又海道にもそへ。除金が巣つくれるふる事をもよせ侍る

かいだうのねぶるいびきか花の風
おもしろや花にかいだう下り月　長頭丸

梨花

ありのみの花　こがなしの花

花とは思ひ梨。眉をならぶる花も梨などやうに。其名をそへてもいひ。色白くさき侍れば。ちりしく庭や銀なし地とも見なせり

花も又ちりしく庭や銀梨地

水なしか花の波たつ夕あらし　頁保

辛夷

にぎりこぶし。順のこぶしなどもそへ。おきあがりこぶし。おしあひこぶしといひかけてもつらぬべし

はづれぬは順のこぶしの花見哉

春草　若草　よめがはぎ　たんぽゝ　あざみ　眉作　つばな

わか草は。まだはつはるのわかばへなればしゐてつめどもかすけなきさま。雪に萠黄のうはじらけしたる氣色などもいひなす。たんぽゝの花は。さのみもてはやすべき色香もあらねど。小鼓の音に其名をよせて。鶯の笛の段。こてふの舞の内などもいひならはす。よめがはぎは。かの中よからぬ俗語によりて。しうとめこのつみかなぐり。ひきむしるなどもいひ。又しるのこのつまになるとも

中よかれふきのしうとめ娵がはぎ

しるの子にあはする妻やよめがはぎ

たんぽゝのあへ物くふやしたつゞみ　長頭丸

たんぽゝの花こそ露のなき鼓　德元

足もさのこきなぞさらんよめが萩

悲母の追善に

生たつや親のかふこの眉つくり　正章

廻文の哥のたれかやさくらくさ　ノ身

そやならて根共にひくや三葉芹　吉之

鬼あざみはとつてかまふが事にいひたてゝおとろしくいひなし侍し

やなぎのかげにあざみのありけるを

根なかくすあざみや鬼にこぶやなぎ　休甫

つくづくしは。おほく筆にとりなしていひ侍。又はかまきる。ほゝくるともいへり。つくづくしつむにさへ。ほうしひくと名のたつとうたひ侍れば。法師のえんもあめるにや

いちの筆にのせん肴やつくづくし

野邊に逍遙して

くるゝなもいさしらぬ日のつくづくし　休甫

春秋の草木に。えもしられぬ名ども侍るを。わざと題などに用ひんは。よからぬわざにや侍らん。さはいへど又調菜のあいさつ。野遊びの折ふしなど。いともめづらかなるに堪ぬくちすさびなどはいかゞはせん

蕨　さはらび　かぎわらび　わらびて　たる　ほす

詩には紫塵と作れるを。俳發にはあくのはいにもいひなし侍る。又蕨手を折添て。かゞみ草の鏡臺にも。花のこだちのかうがいにもいひなし。猶かぎわらびの鎰にいひかけて。びくにのあつらへしふる物語。盗人にあづけぬ世のたとへをも取出侍し

志賀山に御手ばかりなる蕨哉

あつらへておるやびくにの鎰わらび

百足よりわらびておほしくらま山　長頭丸
さわらびやみやまの雪にふさころ手　正章
あづくろな花盗人にかぎわらび　加友

菫　つぼすみれ　つむ

花の紫なるに。すみれといへる名をとがめ。蛸壺瑠璃の壺などいひなして。壺すみれをも

春雨ややけ野なけしてすみれ草
いれこかや坪のうち成壺すみれ　長頭丸

山吹　やへやまぶき　やまぶきの衣　井手

やまぶきはつぼみを砂金袋さかりを金峰山ちりかゝるを金すなごなど。おほくこがねにいひなせり。山ぶきの衣といひては。みかどのかしこきたばかり姿を思ひ。かんのきみのありさまをもよす。又くちなしの色なれば。物いはぬ花ともよみ。實のなきなども哥に見え侍る

やまぶきのつぼみは砂金袋哉
山吹の色やよし野の金峰山　長頭丸
ふぢかづらの。山ぶきにまつはれたるを見侍りて
山吹やはへあふ露のたまかづら　正章
山ぶきやえだもほそながの花衣　正式

躑躅　岩つゝじ　しらつゝじ　雪花つゝじ　餅つゝじ　杜鵑花　つゝ　しがけた　賀茂の躑

春の日永なる比ほひ。人も小隙をえて。食籠小筒やうの物。にあひ〳〵にさけありくめる。ひんがし山のべに。ひらへいとにさきみちたるを。天も花に酔べき酒のつゝじとも。下口のめにつく餅つゝじなどもいひすて。賀茂の山邊に日をくらして。白き赤き紫の。色〳〵手折てかざせるを。小袖もだんのつゝじとも。又山をつゝむやだん袋などいひかけて。そこらの興をも催し。猶岩つゝじの色にそみ。蓮花つゝじの香にめづる心ばへに共名につけたる作ともあるべし

賀茂山をつゝむつゝじやだん袋
れなほりそかるゝはうごろもちつゝじ
さかりなや見ざるきかざる岩つゝじ
したゞれるつゝじの露や羊の乳　正章

藤　しらふぢ　藤浪　ふぢかつら　ふぢこふ　藤つる　さがり藤　つゞらふぢ　ふぢの門棚　松にかゝる　にほふ　一ふさ　田子のうら

ふぢの棚は。ふさだな。匂ひの棚などいひなし。松にさがれるを松笠のしめを共。姫小松の帽子やかつらかとも見なし。池のほとりにさくを波にまがへ。門口にまつはるゝを藤とも云。ふぢの丸などいひて。家の紋にもきこえなし侍る

是も又匂ひのたなぞふぢのはな
門前にいちなす物やふぢのたな
ふぢこふのすいがうやくか松のやに
藤こぶや花にいさひし風藤腫　正忠
ふぢつるや花見んための下地窓　良直

歸雁　わかるゝかり

花もじを見すてゝいぬるをうらみ。越路の雪女とやちぎりしとざれかけ。いなかなどにさぞらひては。古郷にかへるをうらやみ。友をしのぶ心を催され。返事はいかにとがむる心ばへをもいひ侍る。猶かすみがくれにゆくを。じゝめる文字と見なし。さほひめのけさうぶみなどもいひなせり

花よりもだんごやありて歸鴈　　長頭丸
千里ひさはれやならべてかへるかり
かりがれに德政のゆく春もがな
口ばしは磁石の針かかへる鴈　　立圃

雉子　きじ　あさるきゞす　子おもふ　つまこふ　やけ野　焼野

野山やく比は足よはの妻子をのけかねて。道のけんそをけん〳〵となきかなしみ。鷹にあふても獵師を見ても。泪のほろゝ隙もなく。萬おそれおほく哀なる物とぞいひならはし侍る。されば子を思ふきじは泪のほろゝとも。鷹にあふてけんをとるゝなどもいへり

子を思ふきじはなみだのほろゝ哉
子ゆへにややけ野の雉子のこがれ死　　定次

胡蝶　てふ〳〵　あげはのてふ　舞　夢　ねぶる

てふ〳〵は。菜の葉にとまり。花に宿りて。余念なげ成ひるねのけしき。羽衣のたもとをひるがへし。雪をめぐらしつゝ舞たはるゝ有さま。猶莊周が夢をよせて。こてふの夢の百年めなどもいへり

ちる花やこてふの夢の百ねんめ
つれゆくはふたりしづかゝてふの舞
まひのちわかなあげはの蝶も哉
かんたんの能かこてふの夢のまひ
はるの野はこてふのまひの芝居哉
あるが中にちいさき蝶や兒の舞
ねるてふの夢想やひらく花下　　休甫

蛙　あまがへる　かへるこ　ひきがへる　井手　田池　井のうち　苗代

ふれ〳〵となきて雨をこふといへば。天蟾といふといへど。むぎわらの屋に世を捨てすむ尼にもとりなし。露の玉をかづきの蜑にもいひかけ。猶なはしろに引こもり。井のうち紙にし。でんどをしらぬ心をもし侍る。又水にすむかはづの哥よむといふ事は。ふみにも見えしに。をのが口からへびにものまれて命をかろんじ。いくさなどをもすといふめれば。文武二道のかはづかなともきこえ侍し

うた軍文武二道のかはづかな
かへるこのうぶゆかぬるむ池の水

獨吟千句卷頭に

わかに師匠なくうぐひすこ蛙哉
名にしおはゞかへるのよむや廻文哥　　休甫
一たんの田も井のうちよなく蛙　　正式

三月三日

曲水宴　柳　桃の花　[illegible]　[illegible]　桃の酒　蓬餅
くさもち　鶏合　ひいなあそび

けふは曲水宴のまねびといひて。桃の花と柳のえだを。銚子提子などにつけつゝ。人にもこのさゝをもりうち祝ひにも用ゆ。是を俳諧には。桃の酒といひ侍へぬ。たゞ又もゝの花斗をも。あるは股。あるは百の數などによせて。けふの發句にしたるも侍る。よもぎのあもつく事は。からの文にもあると見ゆればをんぞろか是もけふの題なり。すべて節供などいふ。折は園の桃には王母をよせて三千年の齢をあやかり物とことぶき。門の柳には。えんめいが名をかりて。命を延といはひなして。其心ばへ有べきわざにや

花もまづ東方さくや園の桃
ちぎらすさいはへや三日のよもぎ餅　長頭丸
曲水のえんにふるゝは桃花かな　道保
うちまたのかうやくなれやもゝのやに　正忠

やよひ三日の日長頭丸へまかり侍しに。けふの作はとのたまひければ。此ほど身のいさなみのさはることしうらぶれに。さる事もえあんじあへず侍と申けるに。いたうけしきあしくて。節供などいへらん折に其道の人々。其作なからんはむげの事なりとせいせられ侍ければ

口にむざらふくむや三日の桃の作　正章

ひいな遊びといふ事。正月のあいだは。つちに三尺ほり埋むなどいひて。あまがつやうの物には手をだにふれず。けふの節供をまち出て。長者のをとひめも。ちいさやかなる屏風のうちに。おりひづだつ物。おつぼねなどとりまかなひ。ひいなのとのとひめぎみに。御のかづらをかけさせ。桃色のべゝにうちさうぞかせつゝ。あなたこなたとし侍。なやらふとていぬきがこぼちしをむつかり給ひけるは。元日とかやきこゆるを。此みやこのとわざはいつの世に。何ものゝいひはじめけんはしらず。又禁中に鶏のけうめいよきをえりて。かた〳〵よりたてまつらせ給ふを。おまへのしらすにて。けあはさせ給ふ事もけち侍る。かうやうの事どもは。いさゝか其日のあいしらひなくば。季なしといへるしらぬ俗難もや侍らん

三月盡　やよひのくれ　歸る春　暮春

春のくれには。數奇屋のいろりも。ねまのこたつもふたぎつゝ。てがひのねこのより所なげに。きてねう〳〵とうちなくさへ。をのづから春したひ顔にきこゆる心ばへ。盛なりつる花がつをしもかきけちて。庭のめぐりもこさびしき氣色。又ゆく春の霞の袖は。しがみつきてもかひ

なき恨み。函谷のせきとゞめても。鶏鳴にあけゆく春の名殘なさなど。あかずおしき心ばへをいひなすべし

暮てゆく春やかすみの關やぶり

暮春に

壺底なはらふや春のみなとじほ　正式

山之井　夏部

更衣　夏衣　ひとへの衣　しらかさね　あはせ　わたぬき

ころもがへは。宮中所〳〵の御裝束。御殿の御帳のかたびらまで。夏の御よそひにあらため侍事となれば。女御もけふは更衣かなとも。高位にもまじはるやなどもいへり。又花衣ぬぎかへて。はらわたもたつとも。春と夏の季かゆるなどもいひ。地虫も蟬の衣がへ。わたぬく鮒も衣がへともし侍し

位高き女御もけふは更衣哉

夏きてやいちやけんぎやう衣がへ

春と夏やとなりあはせに衣がへ

うへびとやめさせらりやうの衣がへ　常倫

衣桁にはかいさまならでかういかな　正章

はらわたもたつぞや花の衣がへ　正式

ぬいできるは春と夏とのまわた哉　良保

灌佛

卯月八日は。尺尊嵐毘園にて誕生したまへる時。天龍くだりて水をそゝき。佛にあぶせ奉りにしをまねぶ日なれば。諸寺をはじめ。おほうちにも是をおこなはれて。御導師五色の水をそゝぎ侍事などありしとなり。又けふ躑躅など。あま入道のつみけるわざは。彼花園のけしき

を思ふよしとかやいふを。うぶやの餅つゝじなどいひなせり

佛もやいはふうぶやのもちつゝじ

卯花　卯花月夜　卯花衣　川ぞひうつぎ　岩ねとうつぎ　卯花の雪　箱根うつぎ

卯花は波にも見たてゝ。兎のはしるかともいひ。魚も木にのぼれなどもいへり。つぼめるを三日月の影かといひ。ちりかゝるを月傾にやとも見なす。はこねうつぎの花は色〳〵にさくなれば。紅の雪もまじるかとうたがひなど。もはら月雪に見なせば。雪月花一度に見るともいへり

雪月花一度に見する卯木哉

うのはなはしらがぞ夏の月がしら

卯花の垣もよろいかふしなわめ

新樹　夏こだち　木のしたやみ　あをば　結葉　しげる

夏こだちは。太刀にそへて。はゞやくしけるなどいひ。眞珠にとりなして。見る目のくすりともいへり。すべて夏山のしげみは。日のめもおがまれず。ふる雨ももらず。わけなれし杣人も。道のとほうをうしなひ。けだ物かるせこどもゝ。聲ばかりして姿は見えぬやうにいひなし侍

夏山は目のくすり成しんじゆ哉

牡丹　廿日草　ふかみ草　名とりくさ　からぼたん　しぼたん

ぼたんは重衡の形にもたとへ。夢庵の名をもよせ。あかき繪のぐ。こはぜなどにもいひかけ。蝶からしゝのとびまはる心ばへ。猫ぜなかのうちねぶりゐる有さまなどしたつ。もろこしには花の王ともてはやし。牡丹は花の富貴なる物ともいへり

ぼたん花にねぶるこてふも夢庵哉　正式

はつかばかり位やたもつ花の王　正式

屏風の繪みほめ侍りけるに。發句せよと人のいへりければ

ぼたん見てねぶるや猫の無執心　重繼

杜若　澤　沼　八橋

かきつばたといふ名につきて。紫の色をもとがめ。折句の哥をかきつばた。めぐりにゆふや垣つばたなどもいへり。淺澤小野にもよみ侍れど。猗業平のうたをめでゝにや。三河の澤を俳諧にはいひあへり

あふぎにや折句の哥なかきつばた

くのかみになくや八橋の杜若　正式

水神のみづかきや花の杜若　正忠

紫のふくめんしたかかほよ花　良保

郭公　山ほとゝぎす　しでのたをさ　ふる聲　ふりたてゝなく　たちかへりなく　名乘　かたらふ忍び音

聲をまつには。しびりをきらして立花のかけに。かしらをかたぶけみゝをすまし。うつらうつ木のもとに日をくらし夜をあかすありさま。一夏のうちにきかぬ心を。無言の行をおこなふかとも。山籠して音信ざるかともいひな

し。一聲のめづらしさは。金輪王の出世にもくらべ。を
しの物いふにもなぞふ。又うづきにはねぶとになくとも。
いくさみだれに名のるなどもいひたて。雨の日はふりた
てゝなき。月夜はこはいろをかゝやかすともいひ。猶木
傘かけたとも。不如歸ともなくにつけ。地獄にすむと
も。鶯のかいごにまじるともいふにより。其そのえんあ
また侍る

ほとばかりさぎすはきかぬ初音哉
本尊ぞ心にかけたほとゝぎす
地獄みゝになちかへりなけ子規
こいよこいわれ中ぞらの郭公
なのれかし虹ある空のほとゝぎす
聞たしやけふのあめやま郭公
雨みゝに一こゑはいれほとゝぎす
されもりかついに名のらぬ時鳥
此なつは無言の行かほとゝぎす
一こゑはなしとやいはんほとゝぎす
うづきてねぶとに鳴や時鳥
沓のしろほしくはわめけ郭公
かけたさはまほりほぞんか子規
なくにさへわらはゞいかに郭公
五音よく鳴やはひふへほとゝぎす
いやめなる子どもうみなけ子規　宗鑑
いくばくか人の夢くふ郭公　長頭丸

きなかぬやしたきりすゞめ時鳥　正章

太神宮法樂

むらたちやほどさき杉のきゝ所　同
なちかへりなくやちゞのみ子時鳥　同
こゝにこまれよそはかくまれ子規　休甫
郭公聲やいりあひれいりばな　同
一聲はつゞみも物かほとゝぎす　幸和

五音相通とて。ほたとをすなといふ作。其始一つもしく
は二つなどは珍らかにも侍しかど。なべてかく世にもい
ひふるれば。うち聞耳にもたちつてとゝ或人いひそし侍
し。げにくさのみ好まんもよからぬ。いきしちに非の
いりつるもむねありしにや

葵　ふた葉のあふひ　もろはくさ　たち葵　こあふひ　つる葵

あふひは。源氏の卷の名によせ。車あらそひ。物のけの
沙汰をもいひ。花の日につきてまはるありさま。よくあ
しもとをまぼるといへる心ばへをもし侍し。又昔夢の告
ありて賀茂のみあれの日。人々あふひ桂のかづらをかけ
し事あるを。もろかづらなどもいへり賀茂の社司等。し
かるべき所々へだてまつりけるあふひをみすきちやうな
どにかけわたせるけしきをもつらねなす

物のけをいたむあふひのうへなし
足もさやまほりてゐくにたち葵　正式

祭　いなり　いまみや　祇園會

卯月上の卯の日は。いなりの御祭なれば八條九條のうちこどもも。よろいはらおひなどして。供奉し侍る。東寺の鎮守とかやいひて。南門をひらき。神輿をかきいれつゝ。御供備へたてまつる儀式などあなる

人の坐敷より。稲荷のお山。松などの氣色まで見え侍ければ

いなり山まつりも庭のみこし哉　重正

今宮の祭禮は。さつき九日なりしかども。神はきねがならはしにて。近き比より十五日にはなし侍る。御鉾指渡り。ねり物などもあへるゝ是はそのかみえやみおこりて。世中さはがしかりけるに。むらさきの野にやしろ定めて。藤原長能うたなど奉りつゝ。あらぶるみ心ましまさず成にけるとかや。されば末の世にも。かゝる大うたのきれぎも。つぶやき侍るべきわざにや

いまみやの御まつりの日

まいれるや皆藤氏子むらさき野　正勝

祇園會は。山鉾のけしき。太鼓かねのひゞきあふ。かんこほこの渡り拍子。山のあいより出たる月ほこの詠め。五尺ろくしやくのながかたなさし。竹杖つける警固のさま。つるさしのさしひき。雜式のしき次第など。すべて七日十四日の作法ども。あけていひがたし。たゞ山ほこの名ばかりいひて。あながちに祇園會とをき侍らでもくるしかるまじとなん

月ほこの出るは山のあはひかな

祇園ゑや二ふく一對京つしま

神事は我朝の道にてあれば。野の末山の奥の里にも。其時〻にをこなひ侍る。されば所ならひの法式あるへしいまと〳〵くいふにたらず。又しるすにいとまなし。たゞ都の内にて見なれ侍るかぎり。しるしばかりに書つけぬる物ならし

夏草花

芍藥　美人草　一八　射干　[illegible]　鉄線　下野　芥子花　百合

芍藥は。鉄を忌侍れば。花のあらしをよそへていとひ。鉄線花のはへかゝるをもあやうかる心ばへ。又閑やく餘やくなどもそへていへり。美人草は。とらふす野にもともにとちぎり。草花ならべて見ばやとも思ひ。虞氏がなみだか花の露。りふじんに手折ばしすななどやうにもいひなし見なす。やかんの花は。虎狼の類もめでつべしとも。しやがまゝにはびこれりともいひ侍べし

芍藥にいむは鉄氣かになの風

たをれるはりふじんなれや美人草

佛道修行の人の與行に

夏のあいだ得る一八の花もがな　正章

半月の影やさし物よろいぐさ　良直

この國も花は下野になす野哉　吉最

てつせんは。花火の花ともいひなし。風はやすりかなど

もいひ。見事さをきもにてつせんとそへてもし侍る

　てつせんは花火の花のたぐひかな　詠人不知

　見事さは誰もや肝にてつせん花

雁緋は。かりにもいひなし。繪師の名にもいひかけ。又達磨の眼皮などもいへり。かにひとして甲はさみのえんをもとる

　から繪もやうつすがんひの花の色

芥子花　けし袋　千重　ひとへ

けしは須彌をいれたるふるとをもよせ。千にわる世話をもいひ。又消す詞にもそへていへり。わらはべのつむりのみに髮生したるを。けし坊主といふも。此花のちりたる跡の似たればなり。是等をもつらねなすべきにや

　ある門主より。紺紫白の芥子の花三もと送らせ給ひけるに

　拝領やきみがみけしの花衣　正章

百合　さゆり　姫ゆり　鬼ゆり　はかたゆり　車ゆり

ゆりわかの名をもよせ。ゆりにあくるなどそへてもいひ。又車ゆりの花のめぐりをもてはやし。鬼百合のあかき顔をもいひたてぬ

　姫ゆりは美人草なや待女郎

若竹　たかんな　すゝの子　にかたけ　川たけ　しちく　はちく　またけ　しのびたけ　醍醐のむしたけ

わかたけは。竿だちにたつとも。せたけのぶるともいひ。たけの子はやぶから棒を出すかとも。竹馬の角にやともうたがひ。又やぶとのゝしちくのころ。大名竹の世つぎなどもいひかけ。猶をなご竹姥竹の名につきて。共ふしを求め侍るべし

　人間のたれでなよたけの子共哉

　すゞめごはたけの一寸ぼうし哉

　女子竹のなかに出くるやてゝなしこ

　おや竹の子どもにゆづる若よ哉

　親たけの子な思ふ比や五月闇

　わかたけや十七八くやぶちから

　竹の子やいはゞ竹馬の馬の角　正忠

橘　盧橘　とこよのはな　柑子の花　柚の花　かほる

たちばなに。むかしの袖のかほりをよむ事は。かのなにがしがとこよに至りて。香菓もとめこしおこり。曲夫が泪のふる事などよりとかや。すべてたち花は。かほりをめでゝたき物にもなぞへ。おもひきられぬと太刀にもそへ侍し。又みさへ花さへとのたまひをくりし諸兄公の性(姓)氏にもたより。花もみもうちぐしたると思ひあはせりし。あかしの上のかたちにもいひかけ侍るべし

　たち花は思ひきられぬ匂ひかな

　のむ御茶もよくたち花の昔哉

　門な出ず見るやかうじの花盛

　　ふるや政信興行に

　二またの橘はげにもろえ哉　正章

五月雨　つゆり　梅の雨　星の雨

さみだれは。おのへの寺も水に近き樓臺となり。みやこの宮室も。海中の龍宮城かとあやしまれ。庭の松も見る／＼沖の藻にまがひ。井のうちの蛙も大海をしり。しよろ／＼川も大井川をあざむき。銀浪も地にうつすやうに。雲の波も軒をひたすかと思ふ心ばへ。はれまもあらずふりつゞくていなどいひなす

五月雨に大海しるや井の蛙

さみだれや山鳥の尾のしたらてん

さみだれや鼓の瀧のおほながし

五月雨の空やゆふんのすみの山

さみだれの晴間や龍のけつまづき

帝釋やいくさみだれの雲の旗　長頭丸

五月五日　端午　しやうぶ刀　ちまき　くすだま　菖蒲湯　あやめ　けつりかけ甲　根合　永き根

あやめの節供は。あさかのぬまつく泥にまぶれて。永きねをひく心ばへ。西のこんちも東の小路も。さやめによもぎふきわたす軒のはなやかさ。ふきちりのほりたてならべしおほちのさま。ちまきねぢきる家々の嘉例。くすだまやあやめのかづらかけまはる人々のけはひ。しやうぶ刀や小長刀もて印地にまかる馬鹿者の氣色などすべし

ふきそゆる軒のくれにやあやめ草

石なうつ印地は五月菜にち哉　長頭丸

なりひらにまけるはちまきばしら哉　同

あさあやめすぐなるもつよもぎ哉　正章

節句さてきたるもたんごつむぎ哉　徳元

菖蒲酢か橋のしたなるたまり水　一葉

けふも又つのぐむあしのちまき哉　守榮

昔は一條大宮の北南に。左右の近衛の馬場ありて三日より六日まで。あらてつがひ。まてつがひとて馬にのる事侍しとぞ。今は賀茂いくらべ馬にかりありて朔日あしそろへ。五日にまとの競馬あなるを。將棊のこまの桂馬にそへて。あまたいひはやし侍し。そのかみのはけふは左近のまてつかひとかやきこゆ

かけならぶ繪馬もけふやあしぞろへ

賀茂にて馬たふれ。人もおちたりければ

人さもにしやうぎたをしのけいば哉

將棊ならで兩手にかくるけいば哉　泰圓

螢　とびほたる　ほたる火　螢合

撫子にみだるゝを。兵部卿の思ひによせ。車ゆりにとびかゝるを。至が色このみにいひなし。日吉の山にとぶを。猿の尻のあかさにくらべ。いなり山にちろめくを狐火かとあやしみ。もろこしの褒姒がたまかとも。我朝の玉藻のまへにひかりわたるともいひ侍る。又月夜にはるどころをうへ。闇にはしりをふりまはる心ばへ。水邊に火ともすを。篝かとも。川の瀬中のやいとにやともいひ。猶

星とも見なしてすばるほし夜ばひ星などもきこゆ

高野山谷のほたるもひじり哉

かゞりびもほたるもひかるげんじ哉

なでしこを見るや螢の兵部卿

水くさにひばなさかする螢かな

ほたる火は玉藻のまへの光り哉

文字見れば尻をかしらの螢かな

螢火は河の瀨中のやいさ哉

消て成やよるの螢火ひるのはい

加友もとにて。探題に螢をとりて。

淨家のあいしらひを

是も又牛金色ぞとぶほたる　正章

はくする人のもとにて

螢火はたゞこげばくの光り哉　同

目の前は尻やすぼめてとふ螢　同

螢火や木陰をたてに月の弓　守榮

あかしの浦にまかりける時

ほの〴〵とあかしをとほす螢かな　一葉

舟にて石山へまふで侍る時

えならぬや沈のほたるのにほの海　永良

蚊

蚊柱　かひ　かやり火　かや　かちやう　籔蚊

蚊柱といひては。墜栗花の濕にもくちやらずとも。凉風のふきたをすともいひ。又山里のかひの煙に。蚊のまつげをしぼり。ふるやの軒の蜘の糸に。蚊のすねまとへるけしき。棒ふり虫の變化てなれるとかやいへば。せゝらき橋の下などにたかるてい。籔蚊とて。森の陰。竹の林のいぶせくこくらき物のくまになきわめく心ばへをもすべし

夕風はかばしらはつるておの哉

晝はかほりよるはかならぬ風も哉

蚊の聲をかみなりにきく紙帳哉

蚊にもくはれくるしみのみの旅ね哉

かの聲は四丁四方のひゞき哉

加友もとにて探題に蚊をとりて

かざあなにとびこむや蚊のすれこくり　加連

蜘の巣にかゝりのきぬの蚊帳哉　高次

蚊は血すい火風くいつく五躰かな　同

鵜

鵜川　鵜舟　うなは　鵜かひぶね　かゞり火　大井川　いさは川

さつきやみの夜ぶりに出。月にはすもどりするけしき又鵜につかふ鳥のどんなるをわざ。鵜の目鷹の目のこざかしきたとへなどもとり結べし

いさり火や鵜かひかのちの地獄の火　長頭丸

水鷄

たゝく

と〳〵と戸をたゝくやうになく鳥なれば哥にもおほくたゝく水鷄とよみ侍る俳諧躰にはたゞむねたゝきはちたゝきなどやうにもいひなしをのが名にたゝきつえもつくいなとも

なのが名にたゝきつえもつくいな哉

鹿子

けだ物はおほくはさつきに子をうめばかのこもしかありとなん是をはいかいに京かのこ江戸かのこしろめゆひよつめゆひなど染物のえんいひたる作あまた侍る

夕〳〵むさし野ゆくや江戸かのこ

やみにまよふ猟師はしかの子故哉

かのこともつゝや布袋のふくろつの　休甫

夕顔　ひやうたん

五位以上の家にははひよらせぬといひならはしてたゝくすやの軒のはなにさかへ。五でうわたりのあばらやなどに。えみの眉ひらきかゝれるやうにのゝしたつ。又月かげ露などむすびて。夕がほを見るかゝ見とも。ひたいのあせとも見なす

夕がほやよろこふ露の玉かつら

たそがれにさく夕顔やのぞきはな

あさふりさ見し夕顔はそらめ哉　讀人不知

夏月　みじか夜の月　明やすき月

夕の影の涼しさをめで。いる事のはやきをおしみて。めくるは扇車哉とも鳴門や落す月の舟などもつらね。時ならぬ霜雪氷に見なして。野山海川のけしきをも

すゞしさのかたまりなれや夜半の月

月影はあふぎながしの川瀬かな

月の輪のめぐるは扇くるまかな

夏の夜になるとや落す月の舟　正式

夏いよの月はちよこ〳〵ばしり哉　一滴

氷室　ひむろ守　ひむろやま　ひのおもの

むかし額田のおほいきみ。闘雞といふ所に狩し給けるに。野中に氷室のあなるを見つけて。やがて帝へ其氷を奉れ給ひしより。國ゝ所ゝに氷室をかれて。熱月に用ひおはしましける。是ひむろの御調の權輿とかやいへり。いま在家のならはしに。みなづき朔日へぎもちゐを氷になぞへていはひに物し侍る。されば氷にとをかきもちい。けふは氷にもちいかななどもいへり。又正月のかまどのかけ鯛を今朝いはふ事もあめる

東門跡にて立花の有しに御所望の
當坐

氷室もる神や影向の花の枝　長頭丸

嘉定　かちやうぜに

みなづき十六日には。禁裏をはじめ。公家かたにも。嘉定食。物せさせ給へるとなり。しもよりしものならはしは。嘉定の錢とて十六文あるを。それにてすき〳〵のくだ物などとゝのへて。人にもすゝめみづからもくひぬ

みなづきの十六夜月蝕なりければ

月もこよひしよくし給ふや嘉定食　長頭丸

蟬　夏のせみ　うつせみ　せみの羽衣　せみこゑ　蟬琴

經よむ聲の蟬に似たれば。あまたになくや蟬ぶきやうともいひなし。樹上の吟の聲は。哥よめると見え侍れば。哥もしぐさりか木〻のせみなどもいへり。猶蟬哥の翁の名をもよせ。空蟬の尼衣にもたぞへ。又蟬の音を表して。磬を作れるとかやもいへり

あきてあまたに鳴や蟬ぶきやう
むしの中でぬけ出たりやせみの聲
から衣せみも出るや三輪の杉
うつせみも尼になりてやくはら衣　正式

石竹　いしのたけ

床夏

撫子　やまとなでしこ　からなでしこ　川原なでしこ

とこなつは。床にそへて。妹と我ぬるともよめれば俳諧にもぬりふちもせよ花畠などもし。又とこなつかしやともいひかけ侍。撫子は小兒にそへて。哥にもおほく見ゆればかふり〳〵やちやうち〳〵などやうのとわざをさせ。かみのかたきや石の竹。虎といるやか石の竹などもせり。すべて此花ともその色さまよく似かよひ。咲比もひとつなれば。かく引あはせてもしたつ。又せきちくを氣のせくにも。せきあふ心にもいひ侍る

さかさいの川原なでしこ南無地藏
さく比やくそくかたき石の竹
あがたなりける人につかはしける

そのゝちはとこなつかしや花の友　友閑
花の顏やさこなつ喝食兒若衆　長頭丸
まきちらすたれやみだれ碁石の竹　可頼

蓮　白蓮　紅蓮　荷葉　荷〻　浮葉　まき葉　糸　池　蓮池　しな

はちすは蜂にも鉢にもいひかけ。蓮花筆蓮花生などよせてもいへり。又九品の蓮臺をも中將姫の手織をも思ひよせ侍る。猶大液の芙蓉のになかりしかほばせをめで。花の君子といへる心ばへをもしたつ

風はかほるはちすや匂ふ兵部卿　一葉
蓮の葉やいき正身のあみだ笠　定次

夕立　ゆだち雲　いかづち　いなびかり

ゆふだちは。太刀にいひかけて。みだれやきばか空の雲。きり物なれやの昇り龍などもいひ。又なるかみの音に身のけもよだち共。ゆふだつ跡のすゞかせの氣色などもいひなし。みどりの空も俄に曇り。墨をすりたる雲のみも。かいさりげなきけしきをもしたて。馬のせをふりわかつとも。三日みしきりふるともいへり

夕だちのみだれやきばか空の雲
ある人此句は玄旨法印の作といへり
ゆふだちはたゞあま國のながれ哉
ゆふだちのめきゝは雲をしろし哉
せをわけてふる夕だちやむまの時
夕立はかきけすやうに雨蟬哉　長頭丸

納涼　あさすゞみ　夕すゞみ

みなづきのつちもさけ。身もとくる心ちして。ながるゝあせ水は。瀬中も淵となる比ほひ。石臺に水をたゝへ。石菖に露をそゝぎて。涼しさをまねくけしき。泉水におりひて。築山に陰をもとめて。風をまつ心ばへ。瓜かれいひの冷食して暑さをわすれ。さらしさいみの薄服に。炎天をしのぐありさまなどすべし

ふたつにもへがれぬ夏のあつさ哉
あせ水はあつさよりわく湯たま哉
瀧つぼはふゆかんなれや夕すゞみ　作甫

扇　かはほり　末廣　舞扇　修羅扇　繪　薄　箔　つかふ　扇相撲　扇きり　ひく　拍子　聲殿　御影堂

團　たらうちは　しゆろうちは　ならうちは

かうべにかざしては二月の雲にたとへ。手にならしては阿修羅がもたる月になぞへなど。すべてすゞしき心ばへ。又ほねかなめのえん。とめしかほり。かける繪やうのしなにつけつゝ。扇うちはの作意おほくは似侍し

風なおつてひそかにひらく扇哉
綸言のあせなあふぐはおほうちは
月影を手にもにぎるやしゆら扇
つかはるゝ扇や夏の一季なり
骨なりてかちまけは何扇きり
さけづちの音やあふぎの地がみなり　正式

祓　みなづきばらへ　夏はらへ　夕はらへ　なごしの祓　みそぎ川　茅の輪　あさの葉　御手洗

古は百官とく〳〵朱雀門に出て。ちとせものびんとぶきし。おもふ事もみなつきねなどいのり侍しとぞ。いまのよもつごもりの日。あやしのふせやまで。瓜やなすびを神にたむけて。こもちがもがさも。やせこのはすねも。わが身の肩の貧乏神をもはらひすて侍る。さればいはひ事をや夕はらへ。身のあつしさも夏ばらへなどいへり

一夏やけふみなづきのしつはらひ
せきさめてたまりにせばやみそぎ川　正章
何もなしわが頭陀袋なつはらへ　和尚澤庵

山之井　秋部

初秋　文月　けさの秋

きのふの空にかはる氣色もあらねど。吹風もひやりとけさは身にしられ。よだるかりし手足もたゆ。おほひきさるまぶたも晝寢を忘れ。草の朝露も。夕の虫の音も。漸さびしさのおさなだちときゝなされ。桐も柳も一ように。舟出する池の心ばへなどもつらぬ。文月といひては。うは書。筆だてなどの詞をも結び。又踏といふにそへてもいへり。立秋といふ題も。彼立春の心にて知ぬべし。おほくは通はしてもいひなせり

さびしさのおさなそだちやけさの秋
はなあきもたつさはしろやけさの風
風にみのいろは文月のしろし哉　正章

七月七日　ほしあひ　たなばた　牽牛　織女　紅葉の橋　かさゝぎのはし　あまの川　妻むかへふね　乞巧奠　願糸　梶の葉

今日はまづ節供にて。世に索餅を用ゆる事あり。暮れば七夕まつりとて。香爐に空だきし。笄のとに杜をたてゝ庭にたて。いつゝいろの糸を竿にかけて。ねがひの糸とて是をたむけ。七つの盥に水をいれて。大空の星のひかりをうつす事などあめるとなり。猶書生は書をさらし。宮女も。糸針など用ひ。あやしの賤のめ。たびしかはらも。さいでまはしのはづれをも。身ゝにつけつゝ手向しふる事あげていふべからず。されば七夕に七書さらさんとも。ときてたむけんたんなばたなどやうにもいへり。こよひ此ふたつの星の事を。ある文に。河東の美人天帝のむすめ。よく雲霧の衣をおるにたへたり。しかあれど常に獨ゐて。さらによろこべる色なし。帝是を憐み給ひて。河西の牽牛夫に嫁しめ給ふ。それより織女けはひけつらひ。髮けづりなど。身もざくりに身をなして。機おる事をもうち捨。父にまみえんとも思ひたらす。天帝又是をいかりて。せめてよびかへして。常はめおとのほしいまゝにあふ事をゆるし給はず。たま〳〵ふづき七日のこよひ。烏鵲來て。銀河によこたはりつゝ橋となり。織女をわたしてあひ見えしむなど侍る。としにひと夜のあふせなれば。ねものがたりは衆星の數にもあまり。依ゝの恨はあまの川波にもかぞへばたちまさりぬべくいひなすべし。さらでもたはしきたはぶれには。仲人なれや宵の月。ま男なれやよばひほしなどもいへり。又牽牛織女の名にそへて。うしづめのわれてあふとも。うききぬ〳〵のてをりなどもいひ侍る。けふみやこには。井の水をかへ。硯をあらひ。花をたてゝ星に手向。梶の葉に哥かく事など侍るを。梶の葉にかけせんとう哥。たてよ七夕の屛風草などやうに。それらの事をもつらねなすべし

たなばたのま男なれやよばひ星

七夕のなかうごなれや宵の月

かぢの葉にかけ七夕のせんとうか

七夕は七こんまいれひさよさけ　長頭丸

うしのつめのわれてもあふやおたなばた　正章

こよひは。みつぶにても雨だにふれば。あまの川水みぎはまさりて。星のあふせむなしとかや世俗いひならはせり。誠らしき證據は見侍らねど。雲うちおほひて。ほしあひの空見えざらんには。俳諧の思ひ出に。さいひたりともつみなかるべし

盂蘭盆　玉まつり　聖霊棚　みそはぎ　蓮の飯　あげとうろ　まひとうろ　きりことぼす　たくり火　、施餓鬼　かげおどり

なき玉のきますといふ事。一年に數多度あなるとなれど。とに七月はうらぼんにて。久かたの雲のうへにも御盆供を備へ給ひ。あまさがるひな人までもあたり〳〵の持佛の前に。わさ米枝豆根芋など所せきまでたてまつり。檜破子くきやう様の物調へて。身より〳〵のくゐんぞくはさらなり。きゝふれ見なれし。無縁法界にいたるまで。殘なくまつり侍る。されば水せがきして。火の車のたけさもうちけす心ばへ。をくり火の光りに。くらやみの地獄の迷ひなからんを思ひやり。麻からの杖つくらんよろほひ姿を悲しみ。燈籠木のごき餓鬼ばらをあはれみ。又蓮葉にぶりめく露をのゐらん入玉になぞへ。ほゑみそはぎの露けさを我袖の泪によそへて。ふるきを思ふ心などすべし

正月にうちしは夢か玉まつり　長頭丸

なきにいつあはびの貝の玉まつり　政公

躍はいつと時しわかねど。木曾躍小町おどりなどやうの類は。秋の季にて侍るとぞ。ふるくも小町跳い哥のさまをいひはやし。木曾躍には義仲の事など聞え侍し

哥いづれ小町おどりやいせおどり

うたのさまよはきは小町おどり哉

中にめぐるをんなやさもゐきそ躍

かしらつゞみうちておどるやぼんのくぼ

稲妻　よひのま　いねのとの　ひかり　てらす

いなづまは。妻によせて。ちらと見しよひの俤などいひ。雲の衣のもんにもいひなす

いなづまはひかる源氏か雲がくれ

草花　女郎花　薄　かるかや　萩　荻　蘭　桔梗

野邊の花軍といひては。千種中将のたゝかひをなぞへ。庭の花壇には秋好中宮のあらそひ給へる御心をあはれみ。錦といひては。玉虫姫の几帳にやとうたがひ。花莚といひては。うづらの床のうはしきなどいひなす。又草花といふ題に。たゞひとくさの名をもいへり。そも又あさゆふめなれたるこそなつかしく侍れ。がんきさうなど様の。うちきくみゝもさしつくときを。態作出んはいかにぞや。されど草花の十句五十句といへらん折は。雲ゐ

の庭のすまひぐさ。つぼのうちなる。仙翁花。けいとう。しをに。をぐるまなどのさきまじりてもいかでなからん

草でなしおぎはぎ薄菊桔梗　長頭丸
こまたとろや荻のしたてのすまい草　同

女郎花

なまめく　くねる　さが野　おとこ山

をみなへしは。美人草姫ゆりのなつかしさにもこえて。たはれたるかたにいひなして。露霜をむすびては。玉のかんざしうすげしやうなど見なし。武藏野にたてるを。たが盜こしといひかけ。賴風の古事をよせて。くねるは女氣かとも。とゝふらひ。大江山にしほるゝを。鬼やうばひしちりたば男やまめ哉ともいひ。人にかたるなとよめる遍昭のむかし。名を聞て階(偕)老をちぎると作れる。順のいにしへを思ひつゞけて。俗はよばひ。出家やをつるなどもいへり

みつの家なしとや野べになんなへし
ひさゝきなくれるは女氣か女郎花
女郎花ちりなばおとこやまめ哉
粟飯を手づからもるや女郎花　長頭丸
俗はよばひ出家やおつるをみなへし　正式
つらさがの野べにくれるや女郎花　德元

荻

荻はら　下おぎ　荻の聲　荻の上風　軒端のおき　いせのはまおき

荻は風にこたへて聲のあなれば。秋風の口まね。定宿などもいひ。ふるひ聲。そゝやき聲にもきゝなす。又かざけに荻やそゞろご松風の地うたひなどもいひ。風やおぎのふとそへても

秌風の定宿なれや荻のこゑ
あき風の口まねするや荻の聲
なかされて風にや荻のそゞろごと
荻の聲はてきよ千くさの花いくさ　正式

薄

糸すゝき　花すゝき　ますほの薄　しのずゝき　しのゝをずゝき
一むらずゝき　おばなが袖　たゞく　まねく　かたよる　波よる
穗はらむ

おばなが袖といひては。露の玉を拾ひいれ。らにのかほりをとめ。又永袖つぼ袖などもいひなし。糸薄は。はたをりむしのをだまきといひ。ずゞ玉のふさとも見なし。露のそめ風のみだくけしきなどつらぬ。鷹の羽薄には。わたる小鳥のきもをけし。はたずゝきのほには。落武者のほろをみだす心ばへ。波よるといひては。月のみふねを見わたし。はらむといひてはかよふいなづまをうたがひなど

山は色葉野にはすゝきのほへさ哉　正式
雨ふりける日大坂にて
渡邊やさふもすゝきのすきの道　正章

萩

糸はぎ　ふとあらの萩　野はぎ　まはぎ　小萩　萩はら　萩むら
むらはぎ　しら萩　萩の錦　萩の花妻　萩かえ　花すり衣
萩の下露　みやぎの　見ぐるし野

はぎの花といひては。もち月の詠めにくらべ。しよくの

にしきともつらねなす。又はぎだか。つるはぎなどもそへ。萩の戸萩どのなどもよせていひ。はだかに萩の花衣。つぎはぎたりやともいひかく。小鹿のつまといへば。しがらみて鹿のつまづくとも。くゞるは鹿のつま戸かなともつゞけ。身をする鹿やにしき草。小萩やこけるから錦など。もはらにしきにもいひなす

仙人もまよはんしろきはぎが花　　正
草かうに秋なき時や見ぐるし野　　式
みやぎ野やみなはぎはらの院の御所
花にふく風や障碍のま萩はら　　良保

桔梗　ききやう

桔梗笠といふあれば。花の顔かくせとも。人目忍ぶの草がくれなる心をもいひなし。かめにいけてしは龜甲といひ。首途をいはふあいさつに。歸京などもいへり。又ききやうざらをもつらねなす

野邊の錦きてやききやうの花衣　　不白

苅萱　かやかしたおれ

かるかやの關に名乘しふるとをもよせ。道心坊の心つよかりしむかしがたりを思ひ。又かるかやといふ名につきて。露の宿かるとも。かまきりむしの名たてなどもいひなし侍し

かるかややになふ道心ぼうのさき

蘭　らに　ふぢばかま　しらん　はくらん　かほる

ふぢばかまは。袴にいひなして。薄どのゝ陰なるを。さしぬきかといひ。女郎花に咲そふ。芸蘭を。ひのはかまかとうたがひ。まち。もゝだちの詞をも結。かほりをめづるには。をばたが補香嚢。かちやう草のかけかうなどもいひ。蘭奢待をもそへていひ侍る。又きつねらんぎくの草村にかくれし心ばへ。まふた丸が修行に出しふぢばかまをもいひなし侍る。

きりし跡もいへつけ花の蘭奢待　　正章
秋の野にたかぬ香きくしらん哉　　正式

朝顔　牽牛花

あさがほは顔にたよりて。露のたまれるを。えくぼといひなし。しぼめるをひたいのしわとも見なせり。ふしやきの名によりて。あざやかならぬはなのあたりとも。又齋院の名をもよせ。牽牛花といふにつきて。かの星のすくなき契をもおもひ。又日影をまたぬさかりに。露の玉のをのかゝれるほどをはかなみ。ほどなき此世のたとへにもす

あさがほにたまれる露はえくぼ哉
朝顔やるりなのべたる花の顔
しほるゝや日も朝良のつる〳〵て　　正式

露　朝露　けふ露　露のしら玉　たく　ふる　結ぶ

やくし草にをけるをるりの光りかとうたがひ。觀音草にむすべるを如意輪といひたて。月をやどしては。水とる

玉と見なし。やみにひかるを。うば玉などもいひなす。又なびきあふ花壇に。露のふり心をとがめ。色なき露のそめわくる千栽をあやしみ。猶すゑの露もとの雫に。せんぐりな世を思ひ。無常の風は時をきらはぬ露の身をはかなむ心ばへなどすべし

姝の野のにしきの露や丸づくし

かる草の露はおも荷に小づけ哉　　定次

戀の百韻に

秋津洲は色にすけさか鉾の露　　休甫

霧

あさ霧　夕霧　川霧　薄霧　うき霧　八重霧　霧たち人　霧のうみ
霧の印　たつ　こむる　へだつ　わたる　はるゝ　霽

霧はよろづへだつる物なれば。海邊は見えずして。波の音のみざゞらめくけしき。濱松はこずゑもかくれて。聲ばかりざゞんざとするありさまをつらね。霧の海としては。世界のものは人魚といひ。山のをしかもあしかといひなす心ばへ。猶霧の印といひては。木の葉てんぐを思ひやり。夕霧としては雲井の鴈のあま聲とも。北のかたよりわたるなども

立つゞく霧や一天四海浪

霧の海に世界のものは人魚哉

山〳〵は波のうねりか霧の海　　定次

鹿

たしか　さをしか　すかる　しかのたちど　女鹿　笛による
つまこふ　ひた　たろこ　萩原　あみぢ　山田　かすが　鹿野園

鹿笛といひては。狸のはらつゞみはやさせ。猿のまひをもまはせ。かいらうとなくこゑに。萩の花づまのちぎりをやさしみ。紅葉のにしき着て。古郷をおもふかとあはれみ。又山田のひたのひたとおふひゞき。鹿はなるこになれこにておどろかぬけしき。弓いる獵師は山も見ぬありさま。妻とふしかは命をもいとはぬ心ばへなどすべし。

ひたさおはゞいれの中なる鹿の聲

鹿の音も妻にかいらうの契り哉

やはたにて

なけや鹿なかずば皮を萩の坊　　宗祇

探題に鹿なさりて

おどろかぬ鹿はなるこになれこ哉　　正式

鴈

初鴈　殘鴈　天津かり　雲井の鴈　たのむの鴈　旅鴈　落鴈　野鴈
海鴈　白鴈　玉づさ　文　竿　帶　名乘　いくつら　つらなる
霧をほにあぐる　濱邊　平沙　とこよ　こしぢ

雲の衣につらなるを。つけ帶と見なし。月影にひかりわたるを。はくの帶といひ。海邊にゆくを。みなれ竿といひたて聲をほに上るを。舟ざほなどいひなす。かの蘇武がことつてより。鴈はたまづさをむすびてよみ侍れば。文月の空にとびかけるとも。うちぐもりにちらしかくともいひ。又まゆみのをかとぶを矢文にやとうたがひ。すゞりの海わたるをたが手ずさびぞとあやしむやうの心ばへ。かりがねのつらなれるを。書たる文字にも見なし。たれは。梵字はふ字などもいひなし。天門にかけし額かと見たて。平沙のらくがきにやともいひつゞけ侍る

文月にわたるや雁のはやつかひ
夕霧に雲ゐの雁やあまへ聲
夕霧に雲井の雁や北の方
なのづかひにく骨ある雁字哉
さぶかりや影すぐなもじゆがみ文字
月の舟なわたりにえたか天津雁
かりがねは秋風楽のことちかな　長頭丸
飛かける雁や草書にひさし文字　友閑
軒ちかくさぶかりがねははふ字哉　正式
橋なうてわたりはいかに天津雁　重佳
白雁な世上の人は見そら哉　居安

八朔　白露　たのみ

けふはたのみとて。むかしは米などくばりかはしけるとかや。いまの世もおやかたなどの。わがたのむ人のもとには禮義をなし。八朔錢とてさゝぐる事も侍る
ついたちをけふはくろの祝儀哉

月
有明　いざよひ　たちまち　ゐまち　ねまち　ふしまち　めち月
かたわれ月　弓張月　三日月　ゆふ月夜　月代　月の鏡　月の雪
月のみふね　月の都　月の桂　月人男　月のうさき　月のかいる　半月
月の輪　月の笠　こもち月　小夜まち　廿日いたか　廿三夜のまよなか
出る　いる　かくるゝ　よわたる　ひかり　色　かげ　てらす　さやか
さやけき　くまなき　くもる　まつ　むしはむ　月宮天　四王天　更級
おばすて田ごとの月　あかし　廣澤

三か月のたはめる影を。西方に往生腰とも。勢至腰などもいひなし。山頭のこゆひるぼしとも。空の海のつりばりとも見たて。宵のま斗まみゆる心を。ひる出てよるはいるまやう。あさひるいねてよひまどひなどもいへり。六日七日のかたわれの比は。月のふねといひて。水まさ雲に出るとも。烏鵲の橋わたしたゆくともいひたて。もち月の影にむかひては。天女のびんかゞみとも。山姫の姿見とも見なし。有明の光りをあぶらつきとそへ。よひの影をさかづきといひかけ。又まるびたい。まるはだかなどもいひなせり。月蝕は望にあめる事なれば。おほくは餅をしよくするによせ。又かつらの葉の虫くひかともいひなす。うすらかに曇りて笠などきたるは雨用意。かくれ笠などもいひ。雲水にすむ蛙かとも。霧の海なるくらげにやともいひ侍る。こもち月とは十四日をいへり。子をもてるにもいひかけ。家童子にもよせぬ。三五夜の月は。秋のもなかなれば。ひかりもつねにこえて。海川もこがねをのべ。野山もたいらに玉をしきたらんやうに見ゆる心ばへ。又更級の月にゆき。あかしのうらにあくがるゝけしきをもつらねて。新月。いも名月ともいふべし。九月十三夜は。栗名月とも。まめ名月ともいひ。又ふた夜の月。後のこよひなども申し侍る。名月のおさめなれば。夜をのこすいりかたをうらみ。つねにも似ず月の名残をしたふ心ばへなどすべし。おほやう月の句は。ちよをひとよと明るをおしみ。くるゝををそしとまちわび。雲をにくみて敵とし。雨ばらしをみかたといひ。影をめでゝは無價寶珠

ともてはやす心をむねといひ侍る

三日月やあさひるいれて宵まさひ

霧の海のそこなる月はくらげ哉

行ちがふ雲間の月やだゞはしり

雨雲や笠めす月のかくれみの

月のまへにさし出る雲やあまのじやこ

なりひらしゐづゝにうつる月の顔

夜目さなめ笠の内よし月の顔

老さなるはじめや月な見あげじは

月のかげなそきは雨やふらうもん

雲に月は隠れんぼうかかつらの葉

こちむきていりぬる月や尻しざる

いる山は弓はり月のまとばかな

十五夜に雨ふりければ

けふさいふ興なさますや月の雨

月はこよひめすなたからめ市めがさ

十四五や月の顔さへまるびたい

蚰の目あくであらうみ照す月よ哉　長頭丸

めなわづらひける比

明月もわれはめなやみのにしき哉　同

八月十三夜に雨ふりければ

ふるべきかあさてもさても月の雨　正章

いざよひの月曇る心な

いざよひの月は無明のさかけかな　同

八月十余日。只獨名所の月にあくがれありきて。須磨の浦に至りぬ。月の程はこゝかしこ見歩きて。暮つかたより磯べに出て一夜明し侍つるに。彼なにがしの筆の跡も思ひ出て。そゞろに泪ぐまれ侍るさても此よの清明。所から月も心してやすみ給ふらんさ

十五夜とおほし出たか須磨の月　同

中納言行平の住給ひし所は福祥寺の山のひんがしにいゞける尼なり。

月見の松さ名付て今も一村侍り

松にすむや月も三五夜中納言　同

あるてらにて後の名月に

月もこよひ十三佛のひかり哉　同

殘る蚊のまつげかぞへん燦の月　正秀

月の顔にかぶるや雲のあしかなへ　屋信

しゝがたにへ月見にまかりて

こよひ三五あす見ん月やしゝが谷　正式

九月十三日に月の十三句し侍しに

馬でゆかぬけふの月見やひざくり毛　同

いのちあらば又明年ぞけふの月　同

望月の影なゑによく似たる哉さ思

合せて
綺に似たるかほやへマムシ夜半の月　立圃
てるな見にいでぬやうぐろもち月夜　休甫
かきつむろこよひの哥や明月記　道節
十五夜はかたわれ月のつきめ哉　定次
發句ならかゝる長月やてんか一　踏雪
　くもれる月を見、
雲間ゆく月はおもくろ面白や　貞重
北國にて
月星や千蟹のみなさの波のもん　可理
　夢想連歌の満坐に
ひらき見よ月も世に出るむさう窓　良直
　釋迦堂にてふしまちの月を
月やこよひ十九出家の影ほうし　一滴
かたぶくにほうづえもがな月の顔　常倫

月の桂とは。月中に五百丈の木あり。其木のもとに人あり。性(姓)は呉。名は剛。是を月人男とも。桂男ともいひ侍とぞ。月の蟾とは。月を則玉蟾とも云て。かへるの有といへばなり。月の兎とは。白兎といふに付てなるべし。月の鼠といふ事。其出所よろしからねば。所により時にしたがひてはゞかる事などかなからん。事は佛書に

八所御靈祭　上御りやう　下御りやう

八月十八日は。御靈祭にて御ほこなどあまたわたり侍る。中にもかみ御靈には。さるだひこのおどろ〱しきかほして。はなだかなるがさきだち侍るを。京のわらはべの。わうのはなといひておそれ侍る

　たのみたてまつる御靈の氏子哉

牛女祭

下京に一町此まつりをつとめ侍る。牛女桃とて名をえたる桃もこゝより出侍る事とぞ

　神まつる身もさかふるや牛女桃　讀人不知

擣衣　碪　四季うつ　しころうち　あやまき碪

風のさそひてきぬたの音に。遠里の夜さむをも思ひやり。妻まつ閨にうち驚きて。むすびし夢のつちみじかなるをおしみ。からころとなる唐衣の音をそへ。しら聲にひゞく白絹をいひたて。猶うつといふによりて。初鴈の渡り拍子。碪の入びやうしなどいひて。山彦のこたへをもいひなし侍る

　たからかに衣うちでのこづち哉　正章
　山彦やきぬたの音にいれ拍子　同
　　碪を探題にとりて
　うちねぶるきぬたはおやのつゞみ哉　同

虫

むしをえらぶ　鈴虫　松むし　轡むし　きり〲す　玉むし
はたをり　こふろぎ　いとゞ　蟷螂　こがね虫　いなご　いね虫
みのむし　ぬかつき虫　虫ふく　むし籠　すだく　よはる　りん〱となく
ちんちろり　つゞりさせ　露草

虫を撰ぶとは。うへ人たち嵯峨野わたりに逍遥しつゝ。

虫を取て籠にいれて。大内にまいらせ侍し事とぞ。いまの世も賀茂侍など。こゝかしこよりもとめてたてまつり侍る。さればむしふくあらしの山のべのけしき。とぼしありくあんどうのかげに。をぐらの里もたど／＼しからぬありさま。又させもが露を命にてすだく心ばへ。くれゆく秋ををしみなきするのべのあはれさ。すゞむしは。錫によせて。聲はなまらぬとも。又鈴にして。小萩が筒まほりかともうたがひ。松むしは松にたよりて。せんざいにかはらぬねいろをめで。又人まつむしとそへてもいへり。猶駒つなぎの轡虫の音をきゝ。けんぎう花にはたをるむしを。めたなばたかとあやしみ。垣のしりへのぬかづき虫を。玉虫姫のあひ思はぬにやとあはれみ。壁のくづれをつゞりさせとなく。蟋蟀の音にわび。みのむしの。おや鬼をこひて。ちゝよとよぶをとぶらひ。おほぢのふぐりがばけかはりたる。いほじりのかたちをとがむる心などつらね侍るべし

かごみゝにかはれどいろやむしの聲

駒つなぎ葉にそひなくや轡虫

鈴虫は聲にまじらぬなまり哉　長頭丸

蜩もなくやゆふつけとりのこく　守榮

人のいたみに

虫の音をもらひなきする夕哉　正章

色鳥

山がら　四十から　ひがら　こがら　かし鳥　まめ鳥
ひえ鳥・ひわ　ひすい　るり　むく鳥　菊いたゞき　つぐみ
あつ鳥　小鳥渡る　庭籠　おとり　えさし　てんのあみ　鳥おひ　鳥おどし

秋の野山にわたりて。むく鳥の。えのみをあらそひ。かし鳥のどんぐりおとす心ばへ。ひえを拾ふひえ鳥をおどし。まめばたあらすまめ鳥をおひ佗るてい。又山がらは姫ぐるみをつけてまはし。めじろはじゆくしにをしずひすなどもつらね。猶ほえをはまざる。ひすい心を感じ。鳥さし見しらぬひがらをあはれみ。さかなにしてはつぐみ悦ぶとも。あつ鳥の火にくばるなどもいひなし侍る。

四十から鳥もまごはぬ山路哉

鶉

かたうづら　かけうづら　うづらのとこ　うづらかご　鶉合　鶉衣
ふか草　うづら草　うづらもち　うづらまき　ふける　まのゝいり江

うづらは尾のこみじかき鳥なれば。一聲はあまりおもなしとも。おはなくてしりこゑながしともいひ。ちゝくわいとなく聲を。父にも乳にもそへ。又よくにふける。夜もふけるなどもいひかけ。うづらぐさといひては。鷹人のふみたつる心ばへをいひ。うづらまきとしては。せこのたちつけなどによす

ひと聲はあまりおもなき鶉哉

おもなくてしりこゑはながき鶉哉

鴫

山しぎ　姥鴫　川原鴫　はねかき　鴫のはもり　しぎつきあみ

軒にとまるかはら鴫をとがめ。姥鴫のおもきたちゐるを哀み。又よきしぎ。もゝしぎなどそへても

やんごなき御もさにて。御鷹の鳥

さてさかなにたうびければ

もゝしきはおほみや人の肴哉

鵙

鵙の草くき　おとり　おとす

鵙はめをぬひておとりにかけて。おなじ鵙を取物にあめれば。目なしどちの聲につくとも。もずとくみておつるなどもいひなし侍し。

野になくも鵙やこかひの鳥の聲　是齋

もずさくんで落る二ひきはおさり哉　正式

紅葉

初紅葉　うすもみぢ　やしほの紅葉　下紅葉　村紅葉　はしもみぢ　はゝその紅葉　梅　櫻　柿　うるし　ぬるて　蔦楓　色葉　紅葉かさね　紅葉の賀　紅葉の土器　顔の粧　たく　そむる　かつちる　色ながらちる　山の錦　雲時雨　あらし　立田　高尾　通天橋

常盤山のかつあかきを。松を時雨のそめしにやとうたがひ。ふぢの森にては。紫うばふあけかとあやしみ。又山の邊の色づけるを。赤人の名によせ。柿のこずゑのほの〱あかきを。人丸のうたにいひなし。又梅がえのはもみづるは。をのが酢をさすべにかといひ。櫻の紅葉は又花をやるなどいへる心ばへをすべし。すべて万木の色あるを。其物につきて。にしきとも何ともいひなして。あながちに紅葉といはざれども落題にはなり侍らず

うるし色ににせてぬるでの紅葉哉

下口上口まじる座敷や村もみぢ

紅葉にて又花をやる櫻かな

源氏酒にゑひてや色は紅葉の賀

蔦をそめて松のいろさへ朱くれ哉

紅葉する山は一しきにしき哉　長頭丸

熟柿くさき上戸のかほや柿紅葉

ひえのやまにのぼり侍し時。ひらのだけに紅葉のちりけるを見侍て

山風や紅葉折たく火ふき竹　正忠

みやまより葉山の色や下すのちゑ　讀人不知

色葉といふもおなじ事にて侍る。見事やとかなにいはんとも。ちりぬるをわかのうらみなども。てならひのほんにいひなし侍

花にますさかなに申さんいろは哉

おくやまはけふこえて見るいろは哉

七葉のかへでは七ついろはかな

人のもさよりかながしらさいふ魚を饋しに

いろこさへいろはの色ぞかながしら　重綱

秋の比ひえの山の麓にて

見あげたる色葉やすせもひえの山　可頼

楓はいろといひ侍らでも秌の季にて侍る。手にとりなして。ちる露をつまはぢき。又いろづくをつまべになどもいへり。木へんに風のえんをもいひ。色をかへてなどいひそへもし侍る

われさちるは木へんに風の楓哉

九月九日

重陽　宴　茱萸袋　菊酒　菊水　菊酎　しら菊　から菊
玉のむら菊　こがね菊　今菊　黒〻　大白　掲貴妃　ぬれ鷺
菊台　菊がさね　菊の淵　菊畠　星見草　まり花　をとめ花　にほふ
うつろふ　殘る　千重十六重　山路　露　霜　菊谷　南山

けふは節日なれば。おほうちには菊花の宴をこなはれて。みこたち上達部ふみつくり詩歌をつらね給ひ。又南殿の御帳の左右に。茱萸袋をかけ。菊瓶をかざるゝ儀式など侍るとなん。町方の人まねにも。其方ばかりなぞらへて。すゞとくりの口などに。菊をつけて用ひ侍る。菊にめでたき功能あるは。慈童が山路の菊の露に齢をのべしふる事。費長房が教よりおこるとなればながいきにのむ菊の酒下口もちとせよなどいはふ心をいひ侍る。又ほしにも見なし。淵ともいひ。猶猩々のさきみだれ。ぬれさぎのむれたてるけしきをめで。にほひをもてはやす心ばへなど。

けふは菊を賞し侍る

仙人の世界か菊のつぼのうち
露はらひ見よしうきくの坪の内
ませ垣は菊の匂ひのふせこ哉
つむ袖のにほひの玉か菊の露
菊酒の下口さ上口は淵瀬哉

重陽の日

法の菊の露やつもりて福壽海　　長頭丸

菊の九句なし侍しに

酒をたゝへ色うつくしの菊池哉　　正章

哥もきく詩をきくの節供絶句哉　　正式
花の波にぬれさぎなれや菊の淵　　良保
えたなりかさいてさゝるゝ菊のさけ　　可理
から菊もさかりは秋津くにち哉　　屋信

けふ又道祖神とて。京わらはちいさきみこしをかきつれて。禁中仙洞其外宮達公家衆にまかりてよね鳥目などたまはる事なんあめる

九月盡

秋の暮　ゆく秋　かへる秋

あきのくれは。野はらの虫けらも聲しはがれ。やまの紅葉もたゞばかりと見え。庭の女良花に霜のしらがをいたゞき。籬にのこる翁草は。いとゞかしらもえもたげず。よろづおとろへたるていたらく。又ゆく秋の名殘をおしみ。かへるかたをもしたはまほしき心ばへなどすべし

やれにふけあすはしぐれん秋のくれ

山之井　冬部

初冬　神無月　小春　亥子

十月をかみな月といふ事説〻あれど。まことや世俗には。今朝よりよろづの神たち。出雲の國にいますとかやいへば。神まふでする氏子もまれに。ほこらのかたすみもうそさびしき氣色。又雨の宮の留守に降くる時雨をあやしみ。風の神無月にちりかふ木の葉をとがめ。色葉のちりぬるを假名月とそへ。霜柱をしらけたてしを鉋(罫)月などいひなし。猶紙な月髪な月など其えんによりてもいへり。小春は子にそへて。天のはらも十月めにうむとも。年の内にういだちすなどもいひ。又かへり花もかつ〳〵ひらき。初雪もやう〳〵とけて。名にあふのどけさなどもつらね侍る

あまのはらも十月めにうむ小春哉
霜月のあるにつけてやかみな月
十月もいなぬや是のやまの神　　徳元
けふよりやいろはちりぬるかんなづき　　正章
霜柱しらけたつるやかむな月　　同

此月の亥の日。餅をつくりてくひ侍れば。子をまふけ。病をいやすとかやいふ本文ありて。大内にもいはゝせたまひ。かちんを色〳〵にそめて。菊なぎなどこきまぜいてふをさしそへて。それ〳〵にもたまはせ給ひし。しもがしもにも。身〻の祈りに。ちいさきうすきねとゝのへて。わがおもふ事もつきねなどことぶきし侍る

しよくにせばしゝにやならん亥子餅
慎のあもはいんでいゝ子のみやげ哉　　休甫

落葉　朽葉　木の葉　落葉衣　木の葉時雨　このはさる　木の葉天狗　ちる　みだるゝ

落葉衣といひては。霜のはかまのしたがさね。苔衣のうはぎなどいひなし。木の葉猿といひては。木からおつるたとへをよせ。木の葉天狗といふには。蜘のいにかゝりしためしなどをも思ふ。猶山里の道もわけなく。谷川の流れもひつき。森も林もまばらなるけしき。又木がらしの女のと葉をよせ。落葉の宮の名をたて。風のちくさに見ゆるありさま。から紅に水くゞる景氣なども

冬ちらぬ紅葉や凪がゆるし色
猿も木からおつるたさへの木葉哉　　休甫
木の葉うく川瀬のうづや猿まにし　　良保
庭にさへさぞな落葉にひがし山
いこまやまあらしに木ゝもらくば哉　　友勝

時雨　めぐる　しぐれのあめ　初しぐれ　村時雨　時雨の亭　夕時雨　さよしぐれ　北雨時　北山時雨　よこしぐれ　ふりみ　ふらずみ　とほる

しぐれは空さだめなくはるゝと見れば。ぐれりと曇り。ふるとおもへば。さゝらげもあらぬ氣色。足ばやに通りゆ

くさまなどをいひて。月は出とするさよしぐれ。時雨のあめや下り坂などもつらね。めぐるといふにつきて。地獄めぐり。山めぐり。どゝめぐりなどのことばをもとめ。たがまとよりとよめりしによりて。雪中のばせをではなしとも。うそさむしたがまとにやなどもいへり

足ばやき雲や時雨のさきばしり

山うばが尿やしぐれの山めぐり

冬月　月の霜　さゆる

さえたる影の氷にまがひ霜に似たる氣色。顔のしはすの月を。冷じき物といへる老女のけさうにもなぞへ。臘月といひかけて。灯の光にもいひなし侍る

さもさてもよき臘月の光り哉

冬月の文かける人のまへにて

ひらき見よ月は束冬かうし窓　正式

霜　朝霜　八重しも　霜の花　霜柱　霜の劒　霜のたて　霜の袴　霜がれ　霜をれ　おく　ふる　むすぶ　さゆる　こほる　鐘

霜の花といひては。みのらぬあだ花にもよせ日影にもろき朝顔のながめにもくらべ。霜柱といひては。かさゝぎの橋ぐいかとも。音ひゞく鐘つき堂などもいひなす。霜夜はとに空さえて。月の光りもさなけだち。風もみのいりて。ねびえおどろく心ばへ。しづのめにきるゝひゞあかゞりも。霜の劒のしわざにおほせ。このてがしはも霜ばれをいたみ。松のふぐりも霜風をおこすなど

つかぬ鐘ひゞく程ふるしもゝゝ哉

おのづからかねつき堂や霜ばしら

かさゝぎの橋ぐゐなれや霜柱

鬼神をもかんぜしめんは霜夜哉　長頭丸

要法寺にて

哥や詩のよき材木ぞ霜ばしら　正章

清水にまふでゝ

大ひさして霜のつるぎや斷く壊　友正

霰　玉あられ　ふる　ちる　たばしる

あらは板びれさし根篠のうへなどに音してふれる心ばへ。かきみだれてふりしけるまゝに。庭のつちべも玉しくと見え。わらやの屋ねも玉殿となれるけしき。又あられのさけをもいひなし。あられ釜をもつらね侍る

盃やさすがいは木にあられ酒

やぶにふるや竹鉄炮の玉あられ

あられ釜なみて

たけじざいてんよりふるや霰釜

たぎりてや湯玉たばしる霰釜　徳元

霙　雪みぞれ

みぞれはおほく酒によせつゝ。篠の葉杉葉をさかばやしといひはやし。天水などを酒壺とも見なせり。又みぞるゝといふ詞にもそへ。溝れなどもいひかく

あづまにまかるさて

はま松やさゞんざさふるみぞれ哉

雪

初雪の見參　しら雪　あは雪　はたか雪　うす雪　雪の花
むつの花　かたびら雪　冬雪　はつか雪　まち雪　みゆき　雪の山
窓の雪　雪汁　雪女　雪佛　ふる　ちる　つもる　跡つくる　ふゞき
雪沓　富士　かひがね　香炉峯

初雪は木に餅のなり。岩に花のさきたらんやうに。めづらかにいひなし。竹につもる詠めによふしをなやし。松のこずゑのしら雪に心のはりもわたになるけしき。みねものへとに谷も埋りて。山寺の兒はおさとのつても跡たえしを歎き。やせ小僧はときに出べき道をまがひ。薪こりたる山がつも。おもにゝこごづけの雪をわぶる心ばへ。又やくすみも雪となり。からすも鷺とあらそはるゝさま。かんじきやそりにのるらんこしの旅人をおもひやり。ふすま雪をかぶり。かたびら雪をかづきありくおほぢのていをながめ。友をたづねし王子猷の其むかし。簾をかゝげたる白居易のふるを。庭のしろたへにかひのしらねを思ひ。おまへにつもれるを富士に作りし。住吉の姫のなさけ。源氏のみやのみやびなどをも思ひよせ。猶雪ころばかし雪うちに。手をふきあへぬ人の形勢。雪やこんことひはやし。空にむしわくとみはやすわらはべの分野どもをもつらねなす

からす鷺さあらそはゞ雪の朝哉
ふらいくふるつまいさし軒の雪
しら壁やそらにしられぬ雪の宿

わらにふる雪やこんかきしろ樗
まゆまでや一夜白髮山の雪
姫松のいたゞく雪やわかしらが
かきくれてふりくるそらや雪さ翠
しら鷺の雪にはかくれみのげ哉
葉もなくて餅雪かぶるくち木哉
雪をはくはゝきは花のあらし哉　大訓相尚
雪のうへの月や金色銀世界　長頭丸
かぶりてやれざゝがうへのふすま雪　正章
ひがし山のへに雪見にさまよひて
雪は地にしろかれもしく祇園哉　同
しろかれでつけるや雪の東山　正良
もしあらば雪女もやしろうるり　道節
うす雪にひきいださるゝ茶の湯哉　正忠
天のことは音も香もなし雪の花　加友
雪に身の鳥はただつや寒苦鳥　珍重

此ごろ雪とすべき何を。雪女雪佛などはみだりにいへるあやまり多きを。氷室守とかやいふふみ。其義こまやかに。其詞盡せり。しかあれど斷てすべからずといふにはあらず。自然其題にあはゞ。其事にいひたつべし。只尋常の降をも積るをも。女にし佛といひたらんは事の心たがへりとなり。すべて是にかぎらず。はないくさ花うつぼのごき。ききやうざらあられがまなどやうのたぐひも。それならぬをそれといはん事いさゝか吟味侍るべきにや

水仙花　玉簾　單葉　金盞　銀臺

霜がれの草の中に。いさぎよく咲出たるを。菊より末のをとうとゝもてはやし。雪の花に見まがひていかにすいせんとわきかぬる心をもつらね。又葛もて作るすいせんにもそへ。花瓶の口をすいせんくわなどもいへり

　した葉もや花瓶の口をすいせん花　可頼

氷　うす氷　あつ氷　胡氷　ひめかゞみ　氷の衣　つらゝ　たるひ　むすぶ　はる　とづる　ゐる　いて

氷はつるぎといひて。寒の水のきたひ。朝日になまる心をいひ。波の皺もね皮となり。瀧の糸もまむすびにむすぶけしきをつらね。池の魚の天井はり。水鳥の床板となるありさま。又蛇かごのつの。鬼がはらのきばにみなしてつらゝをも

　氷ゐるしやくはえつけの鏡かな
　餓鬼の目の哀しらるゝ氷かな
　籠にさへ水漏かさぬ氷かな
　かんばつかはれば水なし國こほり　巨頭丸
　文字にさへ水なてんずる氷かな　一滴

水鳥　をしのふすま　にほのうきす　あしかも　さぎ　くろかも　たかへ　あちのむら鳥　千どり　なく友よぶ　すいり　くかにま　どぶ　池　海　濱邊

水鳥はつらゝの枕にねぶり玉もの床に羽をしき。波の鼓に音をそへ。水まりに聲かくるけしき。又名にしあふ賀茂川の鴨。にほの海なる鳰片をなかめえんわうのふすまに妻をこひ。うはげの霜につるぎ羽をみがく心ばへなどすべし

　なにはがたみじかき鴨のあしべ哉
　あしがもは青葉の笛のねさり哉
　えんわうのふすま障子はなしふ哉
　つがひはなれ續飯やなしの古衾　休甫

千鳥は磯邊濱邊などにちりとんで友をよび。川風さむみ鳴かはすけしきなどを。ちどりがけともちとりあしともいひてつらねなし侍。又ちどりのかうろにそへてもふるくいへり

　あはちがたかよふや須磨の衛がけ
　なしあふはあびよろびやうしか友衛

　　千句追加に
　しばなくは千句ひやうしか友衛　正章
　足拍子ふむやえいさもさも衛　一葉
　あはれげにうき伽になれ友千鳥　定次

鷹　はしたか　ましろのたか　草とるたか　しらふ　空とるたか　若鷹　おほたか　鷹飼　鷹師　鷹犬　鈴　ゆかけ　鷹かり　ちからくさ　ぬくめ鳥　すゆる　そるゝ　こゐ　野守の鏡　交野

霜雪あられのひるよふく。野をわけ原にまどひて。田畠あらす鷹人のさま。ひねもすにかりくらして鴈とりじゝなるせこどもの氣色鷹犬の物なれて。穴ほりねほりかぎまはる心ばへ。又名にあふ鷹の鈴鴨にあはせしらふの鷹

の黒鴨とれるかり場のていなど。都而此道の習に付たる輿どもあるべし。猪鷹はうへてもほをつまぬ侍かたぎを感じ賢けれども鳥に笑るゝたとへに。身をかへりみる心ばへなどすべし

かりがねさはなせばなるや鷹の鳥　長頭丸

埋火

炉びらき　いろり　火桶　火鉢　あけこたつ　やぐら
おきこたつ　子　こゝく　白炭　小野　池田炭

うづみ火はゆるりと足をあぶるとも。みつがなわにゐてあたるなどもいひ。こたつの火のしをかけて。わが寒やみの身のちゞみ。顔のしはをのばすけしき。又口きりのていたらく。ひらくいろりの火花をめで。しろずみと雪のまがふをあやしみ炭とりを鳥に取なして。羽箒を羽がひといひ。火ばしをはしに用ひなす心ばへ猶孫もたぬ姥御前は。火桶を伽にだいていね。老の友なきおほぢごは。ぜうになりたるすみがしらをも憐む心などすべし

ぜうになるや雪よりしろし炭頭
だいてねても肌はゆるさぬ火桶哉
はゞはきは只すみさりのはがひかな
すみさりや丸びゞようたんの生につき　長頭丸
ふすぶるは百會の炎かすみむしろ　幸和

神樂

里かぐら　内侍所　庭火　採物哥　榊　幣　鈴　韓神
きふして　星　朝倉　へつい殿　酒殿　笛　とひやうし　和琴
みこ　ねぎ　きね

神樂はあまてるおほんかみ。天の磐戸に閑居ければ。六合とこやみとなりて。よるひるのわかちなかりける時。天鈿女の命。かづらたすきをかけ。竹葉飫禮の木葉を手草にし。ほこをもちなどして。彼磐戸の前にて歌舞をなしたまひければ。すなはちいはとひらきて。日の神世にあらはれ給ひ。人の顔どもしろく見えつれば。萬の神たち悦び給ひつゝ。みなあひともに阿波禮阿那於茂志呂とのたまひけるとかや。さればおもてしろきいちどのゝけしやうをいひなしきねがうすめの神かぐらまねぶありさまなどいひたて。又とこやみはれてあかほしうたふ心ばへ。朝くら〳〵の物の音に心いさめるけしきなどすべし

おもて白きかぐらをとめのけしやう哉

千句第十に

とこやみやあかりしやうじのかみ神樂　讀人不知

探題に神樂をとりて

きれには坐につくやうすめの神神樂　正章

御火燒

祇園　八所御靈　今宮　かまどの御火燒　ふいがうまつり
子祭　二また大こん

霜月のおほたけは。彼かぐらの庭火をまねぶとかやいへり。ふいがうまつりとは。八日のいなりのおほたけにて。かな物の諸職人取わきていはひつゝ。あかの飯など奉侍る。子祭は子の日。大黒のおほたけにうちそへて。惠美須をもまつり侍まつ其曉かたに。陰陽師のうりありくゑびす大黒の繪像をいはひこめて。まめの供物に。二ま

たの大根そへて備へ侍る。祇園はむまの日。かの御社には申すにをよばず。下京の氏子ども。ちいさきみこしを町〳〵にかきすへつゝ。大道にたき木をつみて。おほたけし。又時のくだ物ども。みきなど奉り侍る。いまみやは十五日。御靈は十八日。御まつりの日にあたればなり。すべて國〳〵所〻に。其うぶすなのおほたけは侍となり。さればたき火のひかりを。和光の御かげによせ。又ふいがうのふきつくるほどとびさかふる心ばへをもいひ。果報をねまつりなどそへてもいへり

ねまつりに

ふたまたや大黒のもつつち大根(おほね)　重正

年内立春

年の内にくるはるは。空はまだかすみもやらず。鶯の聲もやう〳〵ふくむまでなるけしき。又軒端の梅はつぼみもやらねど。梢の雪に餅花のはるはしらるゝ心ばへ。猶となりひとつのりこえてくるとも。年のうちへふみこむなどもいへり。

年の内へふみこむ春の日足哉

あだ花の春やまづたつ年の内　正式

歳暮

ゆくとし　ながるゝ年　年のはて　晩年　歳末　除夜
大つごもり　としこし　節分　をにやらひ　やくおとし

おほつごもりは一年のはてなれば。日くれ夜更るにつきて名殘をおしみ。わが數そはん年をわび。ながるゝ年はせくもせかれず。ゆくとしのやさきにはたてもたまらぬ心ばへ。などいひ。又をのがすゝばなも。屋うちのほこりもはきのごひ。鏡のあもゝ尻もちもつきてこんはるをよろこぶありさま。かやかちぐりをうり。たてまつ。ゆづり葉もてありき。せきぞろのやかましく。借錢こひのせはしなくゆきちがふおほぢの氣色。うへのきぬときあらひ。正月小袖やりくばり。かずのこあらめやうの物。鯛鱸(たいすゞき)などてうじをく。其ほど〳〵の家〻のまうけ。年わすれによびむかへ。としとりにゆきつるゝ人〻のていなども。其えんによりていひなすべし

尻もちもつきてよろこぶしはす哉

すゝはきは年くれ竹のはゝきかな

ゆく年のやさきにはつくたてもなし

こんはるはいつこも東ざなり哉

しはすおほし貧(ひん)の盗人(ぬすびと)こひづかひ　旦頭丸

顏のしはすちかよるや目さ花の春　正式

氣にかくるしはす油やごまのがう　休甫

米も年もくれてぞいぬる節季ゆ　良保

ゆくをしたふあしすりでらの師走哉　守榮

節分は都の町のならはしに。五条の天神にまふでゝ。をけらもちいをかひもてきつゝ。家内のかみなかしも是をいはふ。夜にいればむくりこくりのくるといひて。せど門窓の戸などかたくさして。外面にはいはしのかしらと。

ひらぎのえだを鬼の目つきとてさし出し。うちにはゐびす棚大こく柱のくま〴〵に。灯をひまなくたて沉香などかほらす。おはうちのなやらふは。晦日あなれど。地下にはこよひまめをいりて。福はうち鬼はそとへとうちはやし。又わがよはひをも彼まめをもてかぞへつゝ。いくつといふにひとつあまして。身をなづる事をし侍る。扨やくはらひといふ物のありくに。其まめをとらせつれば。五百八十年七まがりとゝぶきする事もあめる。さればひらぎの葉の。鬼のまなこもひらつきぬべきとがりをいひたて。いはしのかしらも信じから。邪氣をはらふべきありさま。年〳〵のまめざんようにつもるよはひを驚く心ばへなどし侍し。又舟を繪かきてふすまのしたに敷ていねて。其夜の夢のよければおさめ。あしければすつる事もありとしこしの夜は獨ねをせぬものなどいひて。すける田舍の下女ばらはつらのこを

若水をあすはくむべきたけら哉　　踏雪

一口は一さしこしのいはひ哉　　以悅

晦日に節分侍し年

除夜にだに鬼さりひしぐ哥も哉　　正章

よろづの道、修行にいたるといふ事なれど、俳諧はわきて造次にも思ひ、顚沛にもいひ出ずはあるべからずと、ある人のたまひければ、せめてひと日にひとつ〳〵だにつらねて、ひとゝせをもをくり侍らば、もしくはかたばかりも思ひうる事などかなからんと、おもひ給へたれど、もとより物しらねばいひつゞけん詞のたねもなく、何を何とすべきよるべもなし。まづさるあらまし斗に、四の時にしかはりゆく空の詠め、木くさの色の目に見ゆるさま、をのづからうつり來る今のこゝろばせをも、筆のついでにしるしとゞめて、のちの題目にし、次に此ころ世にきこゆる集をよび、花さきの翁・一嚢子二家の句帳の中より、其のりとしてあらまほしき句躰をかきぬき、みづからの手本とせり。あへてうとき人のためにするにはあらず。あなかしこ。

正保甲戌一陽天

年中日々之發句

季吟抓

正月大

元日 かきぞめや萬歳のてんをうちいはひ

長頭丸新宅を作りて。元日にわたまし有けるに。又の日禮にまかりて。そのよろこびをいひ侍し

としとくや千世もすめとの御神詫

三日 立春成けるに屠蘇たくみ侍て

酒がめもほうらいにあふやけさの春

祇園にまふでゝゐびすの社にて

歌學せば上達しめよ和哥ゐびす

あづさ弓いそべにゆくは破魔矢かな

六日 夜ふけて若菜はやす音の聞えければ。こよひよりあすかけて七句し侍し。

雨もふりにけるに

雨に野は相生すべき五ぎやう哉

よるたゝくをとやねみゝに水いり菜

からなづな是や唐土のとりざかな

いたいけにちゝと葉はあるこぜり哉

一對になるやすゞしろすゞなまり

ほとけの坐つむもや野原指のはら

是やつみてほけきやうをえし鶯菜

七日 白馬のせちを

雲のうへの白馬や七のほしあしげ

山ざとやいつも正月門の松

時やいまはるを躰にてゆふかすみ

十日 子の日なりけるに

やといひて小松の根をもひきめ哉

こしおれし子日の哥やいざり松

けふ又やんごとなき御あたりにまかり侍しに琴をかきならしてきくやいかにとのたまはせしかば

丑のまへにしらぶるとの゙ねのひ哉

十二日 ひらかぬは香壺のうちの梅花かな

雨のふりけるに

はつとらの威をかるや雨もふる狐

さく比をのばすや夜やり日やり梅

ある人小短尺あまたをこせてもさせし予が何ごともかきつけてよさいへりければ

十四日 太瓶やあけててんかの春がすみ

かうへてやかめの霞を九万歳

仙洞の御庭を。地下の人に見せさせ

たまひける時

北面の見さぶらひけんまどの梅

龍は吟じとらうそぶくな花の雲

やまぶきのきぬは黄金の肌着哉

地獄にても聲やたてゝやま郭公

ながき根は蛇のふしだけかあやめ草

題盆山之石

涼しさやこでまねきする玉がしは

雲にほえぬけ物か月の白兎

あまの戸やはれて霧りと栎の月

ふみしだく庭の紅葉やひゞのはかま

花筒はさながら菊のさゝえかな

根は冬もくちて朽せじこかね菊

雪よたゞ女とも見えずおとこやま

など十四句かきてつかはすとて

十といひてよくもやあられはしりがき

十五日

大道にさぎちやうほこらしたるあさ
の侍しを見て

さぎちやうの灰やとんどの橋ばしら

踏歌の節な

かづく綿は踏哥のせちにせりやう哉

けふはつゝつみしぞゝしやがよめがはけ

つめば是も手にぞみどりのみつ葉ぜり

十九日

厄神へまふでける日。わかさふらひ
たち岩清水にて手洗なごしけるをみ
て

とのばらはいはし水でや厄あらひ

田舎のさまり客人。廿日たんごと云
こゝたうべつけすさいへりければ

いままいりはじめははつかだんごかな

位ありや門ほんかゝりにりんじ梅

かざあなにうめ木してちらぬ花も哉

腰をふる門の柳やかぶきもの

岩柳ゆるゝや風のちからもち

師ははりの木にそふ弟子や糸柳

籠に鶯のなきければ

うぐひすのこゑやふせこに薫衣香

うくひすあはせを

あはするやうぐひすのよむ歌かるた

窶にこもれるなさふらひにまかりけ
る家に鶯の柳にき鳴けるを

うぐひすも柳営でやをくりきやう

雨ははらり花やほろりとこぼれ梅

こけるからや伽羅の焼から梅の花

二月小

朔日

名所の鶯といふ事を

うぐひすはてらの軒端やたかまくら

やきぬるはふつかやいとをする野哉

柳かみのはねもとゆひか三日の月

重繼といふ人身まかりける中陰に

花むけにさすぞ中有の旅の人

音樂にかよふやかりのかへりこゑ

文字ならばなのりは何とかへる鴈

わかれゆく澤邊のかりや水はなれ

朝鷹やをちてふか田にすくみ鷺

あさがりにひちりこぎせりまめうまし

十日

梅のちるやけふはつむまの鼻あらし

梅のちりかゝりたるを。こてふに似たりなど人のめでゐへりけるに二つがひばかりとびきたりければ

落梅のきよくに乘てやてふのまひ

紅梅と連理のえだか槙ばしら

椿に添て詩を送れりし人のもとへ

詩の作も切礎たくまし玉つばき

花か實かとへどしら玉つばいもち

十五日

たれもけふはせよしやうじそく涅槃像

くちなはのきじのひよことりたるを

子をとるは蛇けんとや鳴きじの聲

こをつるゝ雉はあいやのほろゝかな

是ぞこのつまりさかなよなます鮒

うたくちや人にこしべのあまがへる

ゑひなきかよべのかすみにあまがへる

人のもとより一重成櫻を送りけるに

千重にもますやひとえだのはつ櫻

池田正式私のいたはりにより。一夜泊に上京して。つとめて大和に歸らんといへるを名殘をしみける當坐

せきもどせかすみもやまと哥の友

櫻のほそきえだをやつこにならせたるに大條ともにもぎたりければ

雨露は花さくらこの雨夫かな

廿五日

むづおれやほくり往生姥ざくら

古たりし梅の木陰に。人と物語してくらしけるに。けふしも發句のなからましかばといへりければ

むすこけはてんじんひげか梅が枝

いけをくや花のいのちのつりをぶね

花は非情ひらくや無念むさう窓

櫻の木に馬をつなぎ置たるをみて

じやじや馬もつなぐや蜘の家ざくら

入てをらんよしぬす人と家ざくら

三月大

さく桃やにしき木と見んさんねんめ

物いみかもゝのはやしの鬼あざみ

三日　もゝのさけといふ事　三句

桃の酒いづみかはけふみかのはら

よゝとのむやよう〱樽の桃の酒

もゝのさけつぎしも三日へいじ哉

四日　海棠に巣をつくれるや除老蜘

人のもとにこがなしとあなしとつきわけて花の盛なるを見て

ふたまたや又ふたつともなしのはな

やまぶきのさかりやこゝも金花山

花にまふてふや鳳凰桐がやつ

八日　けふ此比は大宮人もいとま待出て。鷹狩犬櫻かりつゝ。心のなき所なげに見え。數ならぬ垣ねにも。草の扉のあけくれに。近くは東山のかぶらなをひきつれ。遠くはよしのゝ葛餅を礼りよりなど。世ゆすりて時めきあへり。さるともなひしもあらぬ身ながら春のゆくゑをしらぬやうならんもさすがにて。たゞ獨おもひたちぬ

一僕とぼく〱ありく花見哉

新黒谷に大木の櫻盛なる條に短冊數多付たり。みれば詩もありうたもあめる

そくせきや親句ろたにの花のうた

吉田の宮のこなたに。社家やらん人家を見て。花あればすなはち入ぬ。其花物よりとなり。えだつき猶めづらし

花たれしえだのかゝりやりくつけん

かしこの哥かける人〻にや。こゝの山陰にまくはらせて酒のむ。おさなきこゑにうたふもきこゆ。世はみな醉り我ひとりすめならんやとて。でつちめが腰につけたるへうたん。ひつかゝえてやう〱ほろえふほどに。ほろゝうつ雉の聲するもおかし

兼好となくや〻よしだのきじの聲

山はつゝじの紅に。蜀江の錦も何ならず。櫻は白妙にかほりて。香爐峰の雪をもあざむくべし。かゝる美景に見されて歸らん事も忘れ果たるに。こゝなる芝居より簾をかゝげて。哀

一樹の陰の詠もがなゝどいひ出す。是はさやうのみやびしる身にも侍らず。御免候へといらへて。よりもつかぬに。めもあやなる硯箱やうの物のふたに。くだ物いれ。青きひさりに。たき物のえならぬくゆらせてをこせたり。さらでたちかへらんもさすがなれば。折ふし火うち袋に。つけたけといれまじへたる朽木もあれど。そこなりける花の一しほ色香深きを。わざとかうつぐさまにて返しつ。扨

花ならで鼻にあてたき物もなし

知音もあらましかば。たはふれどにだにかきもやらまし。もしさもなきわたりならばいと便なからん。猶又人のほゐに違へたれば。たゞ口のうちにのみつぶやきつゝたちぬ。禪林寺に見かへりとかや申す本尊おはします。其まへのこなた弓手妻手に。糸ざくらや何やかやあるを。詠る人もわれのみならねば。やがてたち出るとて

見かへりて我こそ花をみだ如來

南禪寺のあなたにて。年よりたる法師の。せたらをへる薪のおもげなるうへに。花のそへ荷物したるも心有げなり

おもがらぬ心よはなをおいとしぼ

といひかけければ。見てのみ語りたまはんやとて。大なる枝おらせたるもうれしかりし。こち來るに靑蓮院御門跡おはします。其御所にあひしれる人有。度〳〵せうそこはえながら。かゝるついでにだにとて。あないせさせたれば。けさなん京へまかりつるといふ。其家のかたはらに小櫻とかやさきみだれたりそこなりけるすのこに尻かけて。あになんぢを思はざらんや室是遠而とうちうそふきゐたるほどに。三巾の祉の方より。ごだちひすましら。ちいさきわこの手をひきつゝ。かれ見させ給へ。雪にぞいとよく似侍とて。木のもとにより來てゆする

こざくらはゆふりぞ花がおちめのと

無心なる者のしわざやと見るに。いとゆふなる聲して。木の下風は寒からでといふ〳〵。こなたさまにや來

るものにあらん。未央ハ柳腰たなやかになまめかしく。かほばせは楊貴妃の櫻もけをさるべく見えたり。いかなる人のまぼり本尊にやさ　ふしおがみゐたるに。わかやかなる女ばう達かぶろはしたやうのもの十人ばかり。華げゝなゝごつみもたり。又よきほどのおさなもありて。まかぶらいたうくろみおちたれど物なれたるさいはてにや此やせ法師がぬかづきを見さがめて。あなかろ〱し里近くなりにけり。はや物にめせ若きみはいづらなどいふも。ほどちかければほど〱きこゆ。あいなのさかしらやさ人しれず心やまし

花もじのうつくしきもやおうへやう

智恩教院にて

みつまたの花やさんめんたいこくし

きやうざうのちかくに。普賢象にややう〱にさけり

はなのかほもわらひ佛か普賢象

長樂寺には此ころ御戸ひらきおがませ侍る。花の時分がら貴賤群集す

ひらくもや花の錦のちやうらくじ

祇園ハ御前丗拜して松原をみれば一重なる櫻ちもさに栄たり

花も風を病ぬ蔵民のふたも哉

山のたゞすまゐ。物のたより此渡り斗おかしきはなし。茅屋なゝめにつらなりて松葉をへたで。多少の樓臺煙霞のうちに見えたり。其双林寺にそのかみやさなき歌ハ人ゝ跡とめし所なり。八坂の塔はかのなにがしが行力をあらはして。今の世までかく高き名いこせし跡さかやゝましてちりかふ花のころほひ。いはんも中〱なり。さいつごろ雪ふかゝりし朝。ある御催しハ會にまかるさて。一蘿子さもなひつゝ近かるべき道を。輿に乗じてふみまがへたりしも。此わたりの木のもさなりけんなど徐にいまも覺ゆ

又ぞろや見よとふる木の花の雪

しれる大德にいきあひければ。彼祭にひきいれて物相わけられき。いまのおいさし坊がたさせたりし花を。をきみやげさて奉りければ。さゝげてもたまへり

ひねくるは花も微笑一枝かな

日もやう〳〵暮かゝりて。かの長樂のかねの聲にや。花の外にひゞききたり。清水までとおもへば靈山にものぼらで

花を手に此やま風やわしづかみ

と普きこえし獨ごちを。又吟じつゝ過ぬ。こやすの塔よりとゞろきの橋のこなたかなた。しだり柳は淺みどりこき花田染かけ。なみ木の花は楠纈蘭射の匂ひをはなつ夕ばへ。又見おろさるゝ花の都。舞臺よりのぞくかけ作りの下つかたも。なしなべて花の雲たなびけり。たゞゆくりなく久かたのあまつみそらに生れ來たらん心ちぞする

ほさちにや身のなる花の雲の上

玉のなさけてこきちらすはなのあらしの。音羽の瀧にひゞきあひたるもたゞならで

花の瀧もおとしかくるやせんすいじ
咲てちるはなやうき世の盛衰じ

花氈花むしろ。所をあらそひてしきたへたる老稚男女。夜にいればゆきあかれつゝいづちゆくらんともしらずかういふわれも月夜かげに家にかへりぬ

九日 見て余念ないなかなれや花の友

十日 やすらひ花の祭にゆくとて

むらさきのふぢやこずゑをさがり松

櫻のさきたりしを物こしに見侍て

ついひぢやつゝみと見こす花の波
うぐちさへゑくぼに見るを花のかほ

とよ國にまかりてかへさに

まひとめとよくにも花を見やる哉

櫻がりせしと夢に見侍て

やうきひの花見は夢かまぼろしか

清水へ花見にゆきて

うつりやすき花や美人のあだ心
雨にもや花見しかまのかちはだし

高野にしれる人。京にのぼりけるを音信侍しに。櫻をいけてをけり

さごろもゝきて見しや花の普賢像
ちる花のふゞきだふれかふし柳
風あらしばいとりかうか花の庭
ふく風や花のえだきるかまいたち
春の日やげほうかしらの影法師

いなかのまらうどを賀茂にいざなひ
てつゝじ見侍りける時
余所になきは圓興たんのつゝじ哉
へしをるや花にたはれおをそ櫻
平仲がすみぞめざくら花のかほ
櫻のえだを人のもとより。名木とて。
たゞに送れる返事に
うたちなし花やめいほくなかるらん
花のころ。參宮する人の。馬のはなむ
けに靈山へまかりて。國上人の伊勢
日參の縁起など聞侍りけるほど。雨
ふり出でければ。京に笠など取につ
かはしけり。其くるひまに人々俳發
せよといへり
あしだにても日々にきてみんいせ櫻
あくる日參宮の關をくりしてかへさ
に。やましなにて
高藤やだに葉いゝますがひめ小松
廿八日 庭にうへたるつゝじのさかへたるな
一もとやいさご長じて岩つゝじ
くすの木がなるとのみやはいはつゝじ
廿九日 女の心なく柳の條折たるをはぢしめ
て
戚夫人來てやをるらんかはやなぎ
晦日 いとおしきけふや御法の春のうへ

卯月小

ひつちがへきたりや春と夏ごろも
靈山にて。聞子規といふ題にて。詩
も哥もはいかいも侍けるに
ふりたてゝ鳴や茶筅のほとゝぎす
にとわらふ花は色さへほたんかな
一りんもやつとめにかゝるほたん哉
見る人でしがらみかきつはたまはり
音もたてよきゝみゝたつる郭公
なきしやべれわが執心の程とぎす
八日 雨すこし降けるに子規の鳴ければ
雨やうぶゆほぞんにかくるほとゝぎす
そらもいま淸和漸たる孟夏哉
近江の人京にきたりて。多賀まつり
にさてよびけるにゆきて
客と成もしやくし果報か多賀祭
ふさどきはふぢよしげみはしんじゆ嶋
關ならで人とむるはこねうつぎ哉
時しらぬ雪見やふじの山うつぎ

十四日　祖母の七回に頓寫百韵し侍る發句

かけたとや弘誓の船のほとゝぎす

日吉のまつり見し人歸來て。かの神輿にもあふひかつらをかけ侍しなどいひければ。そもまた賀茂よりやまいりけんなどいひて

みや人のかくるやきねにつるあふひ

十六日　みゐでらに鬼子母神おはしますに。さしどのけふちゞのいしゝを奉て。わらはべのまふつる事あり。道すから樗のやう／＼に氣色ばみけるを

樗さく大路まいるやせんだんご

不聞郭公といふ事を

音をみゝに夏斷さするか子規

ほとゝぎすこのむ此身ぞやせ法師

ふる聲や鈴鴨ならでほとゝぎす

東山にて子規おほくきゝたるといへるに

やまぶみはきてんもきくや郭公

不如歸とや地獄もすみか時鳥

橘やむかしの人のそでがうろ

こやむかしあかしのうへのかたち花

花を詩に作てかゝばかんし哉

竹の子はみなそしなれや東坡が繪

たかんなや勝母のさと子おやまさり

ふとき音やはしに虹梁郭公

句ふ聲懐にもとまれほとゝぎす

嵯峨にまかりけるに。人の庭の樗の木の木に。しやがの咲たるを見て

嵯峨のしやがさくせんだんの木陰哉

五月大

朔日　かきつばたにこりとえむや花あやめ

しもつけの花よをそきはいなかげい

いつかくも生たちぬるやきりんさう

雨けしきばかり降たりしに。僕のあやめふきたるを見て

雨にふくはふしやうぶしやうぶやつこ哉

五日　菖蒲　五句

さみだれやあやめのかほる雨中將

ゆりわかと長根くらべもしやうぶ哉

根合せはをんなくらべかあやめぐさ

ひきにしは軒のつまどの笄ぶ哉

菖蒲刀させるや子ども孫びさし

賀茂のくらべ馬を見にまかりける

に。いつにすぐれて花やか成ければ
六日 なしぢにてくらは金銀けい馬かな
七日 右近衛や六日のしやうぶまて番ひ
あすのうぢまつりは。ぎんがりとか
やいひてはやす事ありとなれば
夜宮よりきがめく宇治の螢哉
ほたる火をかゝげて見るや窓すだれ
螢火やひるはしめしてあぶらむし
さみだれはぢだんだふむや雨の足
わか竹のしげる時分やさゝみだれ
十二日 探題に螢をとりて
火矢なれや月弓いればとぶほたる
ほたるたかうとぶや雲ゐのかいともし
鬼ゆりやほたる火とほすとうだいき
いまみや御山にまふでゝ
十五日 山見えぬ坂本葉しげる社壇かな
またゝびを庭にうへたりけるにのら
猫の來てくひからしければ
あまたゝび來てねこそげにくらひけり
かすが野やわかむらさきの惣鹿子
うのまねかからすみつかふ筆のうみ
うせたりしいもうとを吊(弔)侍とて
したふかひなきの泪や五月雨

美濃なりける人にはじめてあひて。
發句などしかはし侍るに。國に下る
といふ事をきゝて。文つかはしける
奥に。かたはらいたかりし事どもふ
るさとのわらひぐさにやなどかきて
いらぬ口たゝくはのちのくいな哉
へうたんの陰の水鶏やはちたゝき
池のあやめを見て
酢にいれそ葉のうく池のあやめぐさ
露は月のするやよるの車ゆり
うし鬼も心ひくべし車ゆり
廿五日 きた野にまふでけるに。雨ふりける
が。ほどなく晴たりければ
梅の雨もはらすや自由自在天
桑ばらぞなくかみなりにかやの內
火とりむしは虫のなかでのやもめ哉
連哥する人の庭に。あぢさいのさけ
るを見て
連哥こそ懐紙四ひらの花の庭
三井寺にて
名乘けり大をんじやうじほとゝぎす
夕の空にほとゝぎすの鳴ければ
八聲なけ鳥のこくうのほとゝぎす

六月小

朔日　ひむろやまにありやこほりの地獄谷

はじめてつまむかへたる人のもとに
あゆをにて出し侍ければ

あなにえてうましをとめに鮎の魚

聲さらに鳴やまぬ蟬や花原磬

木のかみにゐるうつせみは纒母哉

酒の池となるやいづみのさゝにごり

あつさをもしらぬながれや火鼠の皮

七日　祇園會なれば

人はのれど長刀ほこはけがもなし

わたす御代や鳥驚かぬかんこほこ

ゆふつけしには鳥ほこやかみまつり

菊ほこはちごかざる花のしん木哉

月ほこのしん木の末や四王てん

こきりこをもみてもはやせ放下鉾

舟ほこもひくや祇園のゐいやゐい

八日　江州しなのはちすを

あの世なるもをよばじこゝのしなの蓮

君子たり薫じたりけりはすのはな

白蓮やひらくも雨露のをん法師

いふならくほとけくさしやはすのはな

かうほねやひにくをはれし花の色

十四日　のちの祇園會にも船鉾の侍れば

舟ほこをわたすは兩度鷁首哉

あせ水にふちと成たるせなか哉

十六日　夜ばなしにまかりて

嘉定食やゐぐひにしゝの十六夜

虎狼もやめでんやかんの花の色

石竹なうへたりけるに。花の色〳〵
にさき出たりければ

五色なるや天おぎのひし石の竹

われ死なば五りんにもせよ石の竹

石の竹やてふの羽袖でなでしこう

蜘のいやねしなでしこのまくらがや

がんひの咲たるに書てつけ侍し

たんざくは玉づさかけしがんひ哉

袖ふるはだてかたびらりしやらり哉

廿四日　いさけなくてうせたりけるいもうと
の日にて侍れば。鳥邊野の墓に參り
けるに。夕立のあさいさ道わろく侍
りし。かしこの松の枝にせみの鳴け
れば

蟬も來てなきしみづくやうなひまづ

ゆふだちやふりていいはほのかたきうち

廿七日　いそのかみふるゆふだちや御神躰

けふは予が物まなびし人の三回にあたる日なり。其世には近だのめして。さしもあながちにさひきゝ侍らざりしを。年月にそへてかしらかく事のみたびかさなれば。さりかへす物にもあらぬうらみをのべ侍し

なくやいかに予はもと忍び時鳥

あふきにかきつけ侍し

かはほりやたゞ水邊とゆふあらし

晦日　風かほるこや梅檀のみそぎ川

七月小

淵のほとりなる柳のちりけるを

さうしうや淵になけよの玉柳

一葉やいはどこのはのおきつぶね

にしきにやつゝむみそはぎまはぎはら

あれたる庭に女郎花の侍しを

をみなへしそちやむぐらの家どうし

朝がほやいろも瑠璃ぎみたまかづら

花園のをぐるまやゐんの御所車

七日　七夕　七句

天にありてひよくとちぎる二星哉

あまの川こぐや二星のやかたぶね

かはちめかあまの川邊のめたなばた

なかうどもあらじなもとのめたなばた

ぬかほしやたなばたのひくうしのかひ

手向ねどほしのひくもやことゐうじ

めぐりあふ二星のこひや七くるま

此夜加藤踏雪にて。はいかいしあかし侍けるに。暮かゝるよりかみなりいなびかりなどして。雨すこし降けるを題にて。當坐に又七句いひ侍し

つまごめに八重雲もたつやおたなばた

をりひめのはたをやたてゝ霧はたり

雨ふりたる心を

たなばたの千話や雨夜の物がたり

雨には星のあはぬさかや世俗いへば

ふりてほしあいさうもなやけふの雨

はたゝ神もさけじ二星の思ふ中

ひこほしやこよひおとこのなゝひかり

などはいかいのひま／＼に。いひつゞけ侍るほどに。烏のなきあへりければ

なみだもやばら／＼鳥に目たなばた

八日　池涼し波より秋やたつのくち

題にせばみなはらみ句よしのずゝき
露や玉たれしけまんのはたすゝき
おそろしきあらしに荻やふるひごゑ
名乘かくやかるかやをよむうたの席
はらからさひさしくむつびかはせし人。いなかにゆきて身まかり侍し。近き年法花經をたうさみつゝ。いまはのきはまでもをこたらで。わがなき後のわざすさも。あへて余經をよむべからすさ。遺言にさへいへりけり此二日の事なりけれど。國を隔てたればえしらざりしを。此ほどきゝつけて。いさあはれに思ひ侍し。いたみの物などかきて。かの古里につかはしぬ。けふは又玉まつるさて
むげの玉もまつれころもゝのうらぼんゑ
十五日　たそがれのほどに
ちうげんの日と出ぬ月やしやかみろく
十六日　人の聖靈まつりけるを見て
むけよけふは地獄のかまも怀の水
おどりを
百になる姥もぼんにはすゝめかな
朝がほは似ぬふのやきのみつちや哉
池の坊ゝ花に。きちかうの侍ければ
六角にいけなばかめのきかう哉
秋の野はにしきさんらんしらん哉
山頭や霧をかぶりのすきびたい
むくげの地藏に燈籠かゝれりけるを
廿四日　花どうろ見てやむくげの地藏がほ
うたひなら松むしの聲は太夫かな
根をほりてはむや木鼠きりぎ栗鼠
人の虫籠に風鈴の聞えければ
鈴むしのかごか風鈴をつりがうし
廿八日　蹄雪慈父の追善に千句興行侍しに卷頭は立春さ云題にて　正章
あら玉やよひの年きますちゝの春
予にも發句すべき由にて　第三花
ひと花やひもときそめし花巖經
第六鹿
行せねどろくはらみつる女鹿哉
此二ついひつかはし侍し。けふも其會侍て出坐せしに。えさらぬさはりありてまかでしが。いさ心もさなくていだにねられ侍らざりしかば。十の虫を題して。發句し侍き
せんざいの松むしはひげをふた葉哉
よこ笛にならふすゞ虫の夜聲哉

聲せぬははめたかわたのくつは虫
いぼじりやほくろになかぬ秌のむし
琴の音か吟のこゑすむ秋の蟬
ふちばかまきてやこてふのまふた丸
籠になくは草ふまぬきりんぎりす哉

みのむしを

此むしやをにのこだからかくれみの
はたをりのとまるや織女牽牛花
玉むしとたからくらべかこがねむし

廿九日 ある所の會に雜な雜題にて

きぬうつは初鴈のわたり拍子かな

八月小

八朔に豐年ないはひ侍て

やつかほはたけも八さくのたのみ哉

わが身の味く惡なる作なも明に物し給へと。久かたのあめにうたへる祝願のため。けふより日次の月な題して發句つかふまつり侍し

朔日 ついたちや道きりて出ぬよるの月
二日 二日めは月のかつらのふた葉哉
三日 軒もるやつりばないけと三かの月
四日 守れ猶よつつ世のなかよひの月
五日 入てのちにつき出せるやごやのかね
六日 たくや月に鹿もこよひは鹿野園
七日 月やこのよ天のはら出てひとしちや
八日 やつまとをいる曲弓かけふの月
九日 月宮もけふこゝのよのみやこかな
十日 節たらぬはつきもとよのあかり哉
十一日 てん上に月もやのほるつかさめし
十二日 月はかゞみこよは十二の手箱哉
十三日 よめこよひ十三きやうも窓の月
十四日 あすは三五けふや胎前こもち月

こよひは月な十五句し侍し

十五日 三五夜酒の新盃なれやよひの月

人の親子月見に出けるな見て

兒母子とのこ三五の月見かな
はうき千里塵もくもらすなけふの月
けふや月に地はかねしくとみろくの世

一滴子なごゝ。東の川邊にまかで

月にこよひ銀河と見えぬ川もなし
明月は玉とみがくやいし川原

しら川にて

しら川や月も充滿八千家

山ぞひなる所にて　廻文

たかき名の月に見にきつ野なきかた
高き名や表せは月もすみのやま
名は高子月はあきらけいこよひ哉
あらたなるは盤の名月のひかり哉
月こよひこまひき錢のすがた哉
おほきくてよきや月人男の口
籠鳥も雲ばしこふなけふの月

夜あけがたに

名を捨て月もややまに御隱遁

十六日　明月の世繼かこれもおほかゞ見

十七日　十五夜にあひもなさらぬ心を

おとゝいのをとゝか似たる月の顔

十八日　月はげに顔よし鬼も十八夜

十九日　てんにあふぎ地にふしまちの月見哉

二十日　亥まち子まちさてうし待かけふの月

廿一日　入定か月もくもれる空海(そらのうみ)

廿二日　二十二夜も月は三十二相かな

廿三日　雲るはらへ月すみよしの番の風

廿四日　かけあかしおもてしろくの夜半の月

廿五日　たんぜばや琴のをも月の二十五夜

廿六日　影もてれまめ名月のまいちばい

廿七日　月や雲袖ふれなれしおほあとへ

廿八日　月もけふは言語絕句の文字哉

廿九日　此月小なれば。けふの夜を卷軸なり。
二十九日さいふ事を。杳かぶりにな
きて。予が心ざしをのべ侍し

二念なくしたふや月にうたのみち

追加晦日の月

つご森にこがくれますかけふの月

九月大

朔日　夢にきくはうつら鶉のねみゝかな
鷹は文字おほふや霧のゐんふだき
文字ならば殘れるかりや追而がき
赤壁やゆめにも見じをかべの蔦
色葉をやまなんで時にならがしは
金魚こそひれもいろこき紅葉ぶな

鳥かぶとの花を見て

きてもまへ花に孔雀のとりかぶと
軍場かあらしに追つまくづ原

九日　重陽に菊の九句

菊酒は仙人ひきのいしさかな
おくとのやひらかぬつほみ菊のさけ
曲水のながれかけふのきくのみづ

酒にすく蛇躰やすまん菊の淵
星と見る花もなるらしきくめいし
百菊のぜんさいめづる滿坐哉
袖がきの菊とぞと見るさかり哉
秦伯のきくの至德はにほひかな
とけや菊も色はあかほし猩々偶

十日
けんさきの星か霜夜の菊の花
南方へかりもやつらをむく世界
月影にひかりわたるやはくの帶

十三日
曇りなきお月やふたよみよの姨
朋とする月やふたよをへん作り
のぼる月のくらゐやこよひじう三位
みちざるはこゝのつきめのこよひ哉

栗名月といふ事な

りつの聲は御名の物よけふの月
栗もとはけふ月の名にあふみかな
名ぐりおしといふべき月のこよひ哉
けふや名もあまつそらまめ空の月
まめがなにかけやこよひの月の哥

雲の出たりけるが。程なく晴にけれ
ば

足まめに雲もや月をさるきびす

月前霧

夕霧やけふまめ犬と月のまへ

月前鳥

名にしおはゞまめ鳥や月のみやこ鳥
かしきまめ名月は山におちごかな

ともに十三句

十四日
聖護院の森にて紅葉の見え侍ければ

紅葉せし森や七寶しやうごゐん
明鏡又うでぎにもあり軒の月

正五九月のけふは。祈禱とて經の侍るに寺へまふでゝ。管絃なども聽聞し侍て

糸竹にあひあふ鉦鼓九月哉

山寺にて

鹿の聲これもろく字のとなへかな
さみせんのさをしかやねもかいらうび
姨山はいづこも朱みのにしきかな
うとろ成木々の紅葉やから錦
まふてふも紅葉の陰やせいがい羽
柿のもとの木の葉や天狗木僧正
ねこじたもくふあつ物やねずみたけ
べにたけはたゞ紅梅の木のこかな

染たるきぬどものありしを見て

羽二重は人のそめたる紅葉かな

ありのみもあらぬ老木やおほげなし

木のみもや拾ひいるれば袖ぐるみ

ひえの大法會にまふでける時

神がきもじゆくし色なり八王子

いさゞさいふむしのなきけるに

夜さむにはいとゞしく／＼なくね哉

晦日 ゆく秋にすがるや名殘おしみなき

十月大

紅葉のちりかさなれるを見て

うすやうか紅葉がさねのかみな月

いつもゐていづももどるな貧乏神

たなばたの事どもをかける書を讀て

伯陽をこふるなみだかゆふしぐれ

名所初霜といふ事を

霜にけさいこまの山やひたいじろ

落葉や青地のにしきこけの庭

夕霧はをちばいづこにかくしづま

木葉もや庭にふるきのかは衣

いのこいはひける日

八日 いものこのもなきをいはふもちい哉

名所時雨

ふじのねは地獄めぐりをしぐれ哉

神やしろもるや中とみむらしぐれ

うぢ山やをちば衣をきせほうし

風にのみいりしや霜のはなのたぬ

遠めよしはたで見そよそいそちどり

水鳥は酒すいちようのさかな哉

けさや木々もつるぎの山とみねの霜

みゝかねも聲しん／＼としも夜哉

皃のかね霜にひゞきもたかへ哉

あふみのうみを見て

衿なりてをしうかへるや丸たぶね

音さゆる波やかもめのしりつゞみ

廿日 東そだちの人。京にてえびす講いはひ侍し琴ひくまらうどなどもありしにかのあるじかたにていひ侍し

すがゞきであそべやあづまゑびす講

初雪を題にて

見参は花めづらしやけさの雪

ある御方の餞別に

來春はこゝのへにさけかへりばな

ねころびてあたるは炉火の灰毛哉

夜をさむみ炉にかゞむ身や猫ぜなか

さむやみにくれつゝ思ふこたつかな

冬はなうてかなふまし爐のたかごたつ

雪はけさ庭の木にもち岩に花
木目あらき女松もけさや雪のはだ
ぼろ〳〵とふれるあられや白ぼんじ
さむさこそめづるあられの玉に疵

十一月小

朔日　あからかしはのいはひし侍て
ならざけはあからかしはのいはひかな
追善に
きえし跡の霜は来迎柱かな

二日　子まつり成ければ
寝まつりはねほれゑびすの名たて哉
冬の野の霜のはかまや四のはかま
宵に雪うすく降て。あかつきの空名残なく晴たり。つとめて霜ふかくなきたりければ
雪よりもしろうとすきや霜の花
雪ぞひかる天女もかくやひめこまつ
犬ぞわがくはぬせつしやう鷹の鳥

八日　ふいがうまつりに
ふいがうもまつるやかねをふくの神
冬さくや雪に白山の菊理姫
けだかしや枇杷のきさきの花のかほ
床にすゝいの圖をかけて。卓に花をいけおきたる人のもとにて
孔子老子釋迦もやめでゝすいせん花
新しき家の壁土いてたりしを
玉どいやぬれば氷もはりの壁
はる夜半の波はあやなしあつごほり
此世から氷ははりのかゞみかな
世にひいでおもしろきねやかぐらぶえ
かまかゝをへついどのにやかぐらみこ
雪花も日うら日なたや八重ひとへ
鴛鴦のかはらにふるやふすま雪
團雪のあふぎぞしゆろのはたれ雪
笠の雪やかうべにかざす梅の花
わくは雪の花見しらみか空の虫
花はしろく鼻はあからむ雪見哉
松えだはかうづけわたか庭の雪

廿四日　或所にて常倫といふすき人などゝ粥食て
はい粥もくふたどちせん大師かう

廿五日　けふは祖父宗龍が日なり。老後には醫をもやめて。茶と連哥とを友にて暮しければ。今も佛前に茶の花を立て
まごゝろに花をもたつる茶湯(たう)哉

やまや霜に泥繪と見こす色紙窓

廿七日 きのえねの霜は大こくばしら哉

へついの御火燒に

御火燒もむろのやしまのけぶり哉

晦日 おこじをも見せたてまつれ山の神

十二月大

をと子の朔日に

すゞりこそをとごのついたちゐの海

にごれる酒をのみ侍て

賢人ごかんもどんにはあられ酒

硯の水いてぬやうさて酒をいれて

いてゝ酒をいるゝすゞりや酒瓶石

長頭丸の發句ごもかきて。其小短冊千五百余。予をめしして十二月にわかたさせ給ひけるに。四日に四季をわけて。はての日雪の句ごものわきにかきてつかてはし侍し

かれ木にも花さきの宿や雪の作

いもうさの追善に

弟月のかげや佛土の舟御光

雪にそれるえだはしら木のまゆみ哉

はらふ風はまゝ子よりにくし竹の雪

ちりつもり山うばも雪のかしらかな

踏雪もさにて。歳暮の句さていひ侍し

年ぞゆくひれやとなりのはなの春

あかつきはちたゝきをきゝて

もろこゐや鳥のはたゝきはちたゝき

となりの庭に雪の薄く降たるを。つとめて其家のあるじ見に出にければ。かべこしにいひかけゝる

雪を見る人もや立て俳諧師

はくころはげにも寒じき雪の中

寒の水をあぶるゆどのゝ行者哉

寒ごりの行者辻中にたふれて侍れば

それにこりかくなこゞえてこけの行

老女もや懸想しはすの月のかほ

此月の初より。加藤踏雪つれ〴〵草をよみて。けふまじければ。心より外にはやくもみちにけりなごいふに。正忠さきこゆる人。善はいそげにて侍ればさ答られしを。げにさいふ〴〵

いそげばぞ全部のはかも雪の窓

すゝはきは門なかどみのはらへ哉

柳のえだに餅花しだりけるを

もち花をしだり柳や糸ざくら
　あるてらにて。此ころは佛名もたこなひ侍らずなどいへりしに
佛名もとなへうしなはん末世哉
　けふは中の十日なり。としもいま十日ばかりに成にけり
光陰はやさきよりけにとしのくれ

さいつころ花さきの翁彼題目をかきたりしを。いかで聞傳へ給へるにか讀せてきかんとて取にをこせ給へり。もとより心にもいれず反古の裏に捨かいたれば。我ならぬ人の讀分聞えんやうなし。幸いぶかしき事どもをも問聞待らんために。みづから持參して。十ひら斗讀侍しに。などはか〳〵しくも書寫さぬ。又日々の句は怠らずやなど聞え給へり。命の限もしらずながら。すける心にまかせて。あやしき事を思立侍しを。不慮にながらへて。いま廿日たらずになし侍。かくて年もくれゆかば。定て事成侍らん。しかあれどをろ物のわざにしあれば。あながちなるたくみもあらじ。等類などありなんも。見をききゝふれ侍る限は。隨分よぎり侍つれど。廣はいまだ見給へあはせず。たゞ上の句をやう〳〵つらねなしたるなれば。聞えさすべきことがらにもあらず。又此題目なんいとゞおこがましき物に侍れば。文筥とうでし事もなしなどいひしに。何かはさまでつゝむべきわざにもあらじすける人々の床しがらんには。見せもせよかしと宣ひしを。いとかたはらいたく思ひしかど。げに又誰にまれ其よしあしをも伺ひきかんとせんに。かばかりかきけがしてはとおもひかへして。あたらしき紙にうつし替しに。さはいへどとのはづれ〳〵添削をくはへて。あなうたて物めかしきすぢのまじらずしもあらず。其はじめいまだ題をふさげぬ所〳〵おほかりし。此たび彼數十人の句をかきいれつゝ。何ぞかどある草紙めかしぬ。又きのふにや事のついでに。ある人の披見にいれしに。たゞに名のなきは。いと物のさう〳〵敷心ちなんするを。をのれが淺き心にまかせにたれば。山の井とつけよといへり。猶事募りもてきつれど。人の詞ももだしがたくて。われにとたりぬと云てやみぬ。扨けふ一校合して是を書つく
　かきたてゝ書ぐはん成就もしはす哉

慶安元戊子暦
南呂吉日　重開板

誹諧初學抄

徳元

誹諧初學抄

誹諧式目の事承る。某はいまだ所持し侍らず。されば此式目世間に有とは云て、見たりといふ人もなく、又其作者誰ともさして記し置たる儀もなし。是はたゞなべての人時の邪興に、あるひは地藏のかしらにたてすりこ木、打越を嫌ふべし。式は花みしらみ春也、束しらみ時分也、などゝ利口に云傳て、畢竟式目無レ之物とみえたり。古來より用ひ來れるは、和漢の法度にひとし。凡誹諧句躰は連哥に俗語を加て、前句の詞をあらぬ品にとりなして付侍るさまなり。然ば誹諧には連歌の德の外に、五つまさりたるたのしみ侍るとかや。第一俗語を用る事、第二は自讃し侍てもおかしき事、第三取あへず興をもよほす事、第四初心のともがら學び安くして、和哥の浦なみに心をよせ侍る事、第五には連哥古事來歷分明ならずとも一句にさへ興をなし侍らば、何事をもひろく引よせて付侍るべき事是五のとく也。先新式に書出たる和漢法度の條〻、

一景物草木ともに連哥同前たるべし。

一春風・松風等二の物は折をかへては三つも可レ在レ之。

一同季は連哥のごく七句去べし。此外七句去の物は五句たるべし。

一連哥のごく五句可レ嫌物の事、同字・神祇・釋教・述懐・戀・旅也。

一五句の物三句きらへとは、木と木、草と草、山類・水邊・居所・夜分・衣類、鳥と鳥、虫とむし、獣とけだものゝ間也。

一三句の物二句きらへとは、そ引にそひき、木と草との間、扨は降物也。但雨に雪・霜の類也。雨に夕立・村雨・時雨等連哥には五句也。誹諧には三句嫌ふべし。

一二句の物、又打越を嫌ひ侍るたぐひは、連哥のごくたるべし。

一一座一句の物、鶯・郭公はかすらすにも二可レ在レ之。但同季には如何ゝ。勿論折を替べし。和と漢に二也。

一鬼女・虎・狼等、連哥には千句にも一とあり。和漢には百韻の時も可レ出。面八句の内も不レ苦。千句ならば二も可レ在レ之。折をかへて和と漢にあるべし。但かやう

のけやけき物は一座一句たるべし。

右和漢の篇の法也。

一當世わたくしとして同季を五句去に定。又同季・神祇・釋教・述懷・戀・旅等を三句去とさたするもあり。又田舍などには誹諧たりと云共、氣味よくなど云て連哥のごく法度するも有。これ又過たるは猶し及ばざるにしかじ。何もいはれず昔より定れる和漢の法に有度事也。其故は懷紙つらも見苦し。此二ヶ條は右の法度のごとく可レ然物なり。但其席によるべし。當座の云捨又は貴人・高人・兒・若衆などの御發句の折からは用捨あるべし。さやうの時法度つよく沙汰し侍れば何も先へ不レ行、かへりて興さめ侍れば、其時宜によりて其沙汰すべし。是はたゞ功者の連衆にて文臺をたて、執筆をそなへて、百韵ども興行在レ之時の事なるべし。

一新式にうらおもてとあるたぐひは七句去たるべし。

一おもて八句の内、名所・神祇・尺教・戀・無常出すべからず。連哥には十句めまで嫌レ之。

一下の句のにとめ・てとめは千句にも一とあり。誹諧にはいくつも可レ有レ之。

一俗語不レ苦とは申ながら、あまり道外過たる詞は如何。縦ば、此方へ御座れ、いやでけ、是非ともおぢやれ、御座らせられぬ、御月さま、御日待、虫ほえて、鷹をくゝり付、かやうのふつゝかなる詞は不レ可レ書。さすがに誹諧も和歌の一躰なれば、道にはづれたる儀は仕ふまつるべからず。

一戀の句に至りて道外過たるさた詞等有。よきほどを分別して其沙汰すべし。親子・簾中かたへ懷紙を出して、よみにくき、びろう千万なる詞は斟酌可レ在レ之物也。

一物にたとへば連哥は能、誹諧は狂言たるべし。いかに狂言たりといふとも、當世はやるかぶきの座の狂言などは本の道にあらず。此さかひをよく／＼工夫あるべき事肝要也。

一誹諧も一句の仕立やう肝要なり。上の五もじを下へなし、下の五文字を上へあげ、色／＼に句をねり侍らば、をのづから句がらもよく、後悔もあるべからず。たとへば、畠山兵衛佐と云名を、同文字にて山畠助兵衛と

號し侍らば、無下にをとり侍る也。又一がいに句作を尋常にと斗たしなみ侍らば、うつくし過て、はいかいめかずゆ。百韵の中へだうけたる句の、五句も十句もまじりたるはおも白き物なり。

大かた百年以來の名所、人の名、又當世出來たる詞等は不レ可レ用。但豐國・東山の大佛・三條の橋・淀の橋・六條の門跡、此等はあまねく天下に流布し侍れば不レ苦。他准レ之。

一宗祇公、角田川に書れたり。哥は十躰を廿八躰に分て讀なり。連哥は門道といへども十躰に在とかや。誹諧は一躰といへども二躰あり。

一には心のはいかい、二つには詞のはいかい也。心の誹諧をば一段ほめられたり。詞のはいかいをば次にせられたるとみえたり。心の誹諧と云は、詞なだらかにして心に興をふくめり。ことばのはいかいと申は、秀句にかゝり、利口を詮にいひ立る也。されはにや、秀句利口を以、仕立たる發句などは、袖の下にて上下の文字のかずをかぞふるほどの初心のともがらも、一句二句は仕ふまつる物也。其人を會合して出座に及び、所望する時、付句に至りては一句も成がたくて赤面至極せり。心に作をこめ、詞すなをに仕立侍る句は、稽古修行なくては及がたし。此口傳を以みるに、いにしへのほまれある人〻の誹諧は、皆心を以付侍り。發句も又しか也。されば昔も上手の誹諧に、

紅葉するたでやさながらから錦　仙吟

千種の野邊の花のあへまぜ　宗長

山の端に白皿ほどの月出て　宗祇

又於レ紹巴法眼連哥滿座にはしはみの菓子有ければ、

はむ鳥のはしはみならす茂り哉　玄旨

朽木のあなにこもる夏虫　紹巴

灯をたつる板戸のふしぬけて　昌叱

又誹諧に名をえし山崎の宗鑑、并伊勢の守武發句、

滿丸に出てもながき春日哉　宗鑑

風けづる柳や岸の額がみ　守武

五月雨に火の雨まじる螢哉　同

夏の夜は明れどあかぬまぶた哉　同

撫子や夏野の原の落し種　同

月にえをさしたらばよき團哉　宗鑑

名乘けりそも〳〵是は秋の月　守武

しぶ柹はをのが手染か村紅葉　宗鑑

聲なくば鷺こそ雪の一つくね　同

茶の水に我とふたする氷哉　守武

右此句躰をみて心得給ふべし。

一時にさしあたりて、分別の位と云事あり。たとへば、霧は四季共に立物也。霞は春斗立物也。有所にこれかれあつまり侍りて、はいかいせし時、口切と云句を秋にならんと云、又一方には冬になり侍らんといひあへる處へ、法眼昌琢來臨あり。則是を問に冬たるべしと分られたり。その故は、口切の茶をば炉を開てたてそめ侍れば、冬に治定すべきよし申されしかば、座中の人〳〵尤也と同心し侍り。他准レ之。

一連哥付・誹諧付とて二筋有。たとへば、めぐると云句に月日又は時雨・車など付るは連哥付也。誹諧には六十六部・八丁かね・ろくろ・つるべなど付べし。同法と申句に舟・馬・駒・車などは皆是連哥付也。共上めづらしがらす誹諧ならば、かみきぬ作る・障子をはる、又はふくろうなど付べし。併連哥に付來れる詞を無用と云にはあらず。本の事を面白おかしくとりなしたるは、猶以珍重たるべし。

一誹諧の口傳に初心・中心・後心と云心持在レ之。たとへば、馬と云句に將棊を付、棊を打と云に大豆をひしく、ぬす人と云に竹すのこ、ちぎると云句にもち、此等の付合はみな人每につけふるし、耳なれ侍り。初一念にうかぶ所は馬に將棊を付侍らんとおもひよるとも、是は珍しからず。猶も可レ在レ之と初の心を打捨て、市を立る躰か、又は勸音など〻付べし。扨いかにめづらしき事をとめぐらす共指合のみ侍らば、連歌付に至りて、木幡の里・賀茂祭など付べし。是も指合侍らば立かへりて、古作の付みちにても付べし。珍事をとあらためても無心所着の一躰は詮も無レ之事也。

一前句にもたれたる付句の事、用付にもなるべし。たとへば、

扇をたゝき舞をこそまへ
ゆかりおほく末ひろがりの座敷にて

するひろがりに扇はよく候。

ととりの山にかたなありけり
郭公とぎすとなくはたかをにて

是又とぎすに刀はよく候。昔よりのたとへどに申候。人のもちたる刀のさやに、身をさしこむやうに付度事になん侍る。

一躰付・とりなし付・心付とて三つの品あり。たい付と申は、前句の心をかへずして、その趣を能いひなすを言り。是作のなき付やう也。次にとりなし付と云は、前句の詞をあらぬ事に取なし付也。是は作を以付也。又心付と云は、或は漢古事、或は詩哥・物語やうの風情などにて付也。たとへば、

身のしほはたゞこぼれかゝれり
まゆくろくわらふえがほにゐくぼるで

右たい付也。

はらみぬるみの行末のいかならん
ふし立さなへ出来過てけり

右とりなし付也。

春日の里にゆかりこそもて
ぬぎきせむ若紫のすり小袖

此付は心付也。右付合ともよくも侍らね共、そのしな〴〵詞に記しがたきまゝ如レ此。

一一句に二句も三句も付て、いづれあやめと引わづらふ事あり。或は古事・經文を以付、あるひは源氏・伊勢物語などにて付、只又詞を取なして、あるべきさまに付侍るも在レ之時は、とかくさし出侍らぬなみ〳〵の句に落着すべし。後悔もあるまじ。点取などには猶以然べし。かやうの事は連哥もはいかいも同前たるべし。

一誹諧にすきものなりと、人にしられたらん程の人は、其時の發句を一二はつねにあぢはへてたしなむべし。人の御所望在レ之折節、久しくあむじ侍るも見苦し。又いかなる作者たりと云共、當坐には出來かぬる物也。しかりとはいへ共、其座に至りて前栽などの花紅葉に付、又は何にてもめづらしき事侍らば、兼てのはらみ

句よりも當意則妙の句を希べし。挨拶もまさるべからんや。何事に付ても心をかけよと云事也。

一連歌立の誹諧・はいかい立の誹諧と云事有。連歌立のはいかいは一句の仕立尋常にして指合たゞしく、てにはもよし。誹諧立のはいかいは指合以下おぼつかなくして、句作りふつゝか也。此みちをたしなまんとおもはゞ誹諧を足代になして、連哥にもとづき給ふべし。小學より大學に至る心なるべし。

一百韻とも指合をくり興行の時は、誹諧にも賦物をとる事在レ之。たとへば、連哥には松と云字を、山松・唐松・玉松・などゝとり侍るを、誹諧には雨松・鬼松・又は男松・女松などゝとるべし。五ケ以下に賦等何も可レ准レ之。千句の時一字露顯、二字返音、三字中略、四字上下略ともとるべし。是は連哥と同前なり。

一夢想の時賦物はとるべからず。則夢想之誹諧と五字書べし。下の句の夢想ならばおもて九句也。上の句の時は常のごとく八句也。連哥同前也。

一歌仙の誹諧とある時は、二折に三十六句也。但面に六句、うらに十二句、又二の折のおもても十二句、又うら六句也。此時は月花の定座かはるべし。これにも賦物はなし。歌仙のはいかいと書べし。

四季の詞并戀の詞

初春

正月元日 元三共年月日此三のはじめを以いふなるべし。

一四方拜 人王五十九代宇多御門仁和五年正月一日、天子寅ノ剋に、清涼殿東の御庭にて、天地四方を拜し給ふ時の事也。

一屠蘇白散 同元日也。五十二代嵯峨天皇弘仁年中に始て行也。典藥のかみより奉ル御藥也。

一藥子 元正に天子へ右の御藥を供え奉ル少女也。いまだ不レ嫁用也。

一朝賀 是も元正也。孝徳天皇大化二年に始て行也。去年の日出度事を奏聞申さるゝ事也。

一小朝拜 元日也。醍醐天皇延喜五年に始て行也。臣下とく／＼御門を年の始に拜し奉るべきため、出御を申うけて拜し奉ル事也。

一内侍所の御供　元正也。宇多御門寛平年中に始て行事也。

吉書　眞名には筆こゝろむるとあり。はがため　歯固と書也。ざうに　常にも祝言の時は在レ之事に侍れば、雜たるべしと云説あり、いはれず。元正に祝初て目出度ためしに侍れば、其嘉例に任て常にも祝言の時は是を用也。たとへば、扇は四季ともに持侍る物なれども、涼しきために夏を宗とし侍れば、夏に治定せり。他可レ准レ之。

若ゑびすむかふろ・年徳・え方・門神棚・鏡の餅・掛鯛・しだ・ゆづりは・かざりわら・かざり繩・蜆の盃・にし肴・大ぶく祝・ほだはら・若水桶・三物連哥第三かき共。

一元日節會　十七代仁徳天皇御宇六十二年に始也。

ぎつちやう・玉打付ふりく・はご板・はねつく・はま弓同矢・網引・年玉・ひめはじめ・藏ひらく。

一二宮大饗　正月二日也。五十三代淳和御門天長七年に始行レ之。

一朝覲行幸　同二日也。嵯峨天皇大同四年に始て行レ之也。

一臨時客　同二日也。藤原氏の長者興行して、大臣以下上雉(達)部を招て遊興する事也。

千壽万歳・乘初・賣初・買初・謠初・松ばやし・けさう文うろ・せち振舞・物ぬひ始・初寅くらま詣也

一裏白、懐紙　正月三日於北野連哥也

一卯杖　正月上卯日也。持統天皇より始。又文徳天皇仁壽二年にも在之。五尺三寸の杖也。其方の獣を作りて色〻の儀式在レ之事也。

一御國忌　正月四日也。村上天皇母后の御國忌也。十二月上ノ卯日にもあり。如レ此兩度在レ之事は初を本とする也。弓はじめ正月四日。

一白馬節會　正月七日也。仁明天皇御宇承和元年に始。馬は陽獣也。年の始に青馬を御覽ぜらるれば、年災をのぞくと言。本文青馬は春色也。

一菜摘川神事　同七日也。吉野勝手の宮の祭也。七種の事不レ及レ注レ之。

一御齋會　正月八日也。聖武天皇天平元年に始ル。於二大極殿一最勝王經を講ぜられて朝家を祈也。

一女叙位　同八日也。持統天皇御宇始は、女の位階を叙せらるゝ事也。

白梅・紅梅・飛梅・鑓梅・綸旨梅・藪梅・黄梅・鶯宿梅・座論・花の兄・梅そめ・梅ばち・鶯な・鶯笛・鶯衲

一縣召　叙目　正月十一日也。景行天皇御宇武田宿禰より始る外官也。諸國田舍の司也。

一常陸帶祭　正月十一日也。かしまの神事也

一踏謌節會　正月十四日也。但男たうか也。たうかは十六日也。天武天皇より始ル。連哥にはあられはしりとあり。京中の遊女の聲よきともがらに、うたはせらるゝ事あり。

一御薪　同十五日也。是も天武天皇より始也。百官とく〳〵薪を奉る也。衣類にあらず。

一さぎちやう　同十八日也。禁中の外は十五日也。

一賭弓　同十八日也。清寧天皇ヨリ始也。天上の賭とて臨時也。射手ノ司などゝよめり。かへりあるしなど云事あり。

一御忌　正月十九日より廿五日まで也。智恩院又黑谷百万遍などに行也。

一具足の餅祝　正月廿日也。

一七瀬御秡　同晦日也。後冷泉院御宇始ル也。雪汁・いてかへろ。

中春

一二月堂行　奈良の都にあり。二月一日より十四日までなり。水取とて若狹〻〻といひて祈れば、常は水も無レ之から井戸より必水わき出る也。その水にて墨をすり札ヲ押也。

一二日やいと　二月二日にする也。八月二日にもいたし侍也。如レ此兩度ある事は、はじめを本とする故に春也。さほ姫こぜ・川柳・はこ柳・ゆ柳・こぶ柳・しだり柳・遊行柳・柳樽・めはり柳・あをやなぎ・柳はへ・柳かほ・柳腰・柳に鞠のけ。

一春日祭　二月上ノ申ノ日なり。仁明天皇・淸和天皇兩度行し也。口傳有レ之。かやうの事は連哥にも出し侍れ共、誹諧にも根元をしらしめんがため也。

一率川祭　同上ノ酉ノ日也。養老年中始ル也。

一園并韓神祭　二月上ノ酉ノ日也。桓武天皇延暦年中に

始ル。

一大原野ノ祭　同上ノ卯日也。文（缺字）天皇仁壽元年に始ル。

一祈年ノ祭　二月四日也。天武天皇四年に始ル也。

一初午　二月上ノ午日也。稲荷へ詣也。

一薪の能　同七日より十二日迄也。

一遺教經　二月九日より十五日まで、北野ゑんまだうにて行也。

一時宗躍念佛　二月彼岸也。八月の彼岸にも在レ之。是又はじめを用也。

ひがん櫻・ふきのたう・麻まく・巣引雀・つばくら・くちなは・かいこ・春駒・初ふな・もろこ・もみ種ひたす・つぎ木・にら・もづく・かたのり・わかめ・青のり・あまのり・田にし・もみまく・れはん二月十五日也

一しやくたう　二月十六日座頭中行也。

かへるこ・さんばう・上羽ノ蝶・あぶ・歸鴈・いさゞ・雪なだれ北國に在レ之・さほ姫鷹春とる小たか也 こ山かへりとも云・なび（おか）鳥狩此外鱗尾・白尾鈴子さす・聞すへ鳥等。春の鷹の詞、連哥に出侍る分は略レ之。

末春

一御灯　三月三日也。一條院御宇始ル。

一曲水宴　同日也。村上天皇御宇應保ノ比始ル。

一菊を禁中にうへらるゝ事三月三日也。

桃の盃・草餅祝・ひゐなあそび・鶏合・堺のしほひ何も三月三日也。

よもぎ摘・しゆん菊・よめがはぎ・たんぽゝ・ちさ・つくぐし・同杉な・くゝたち・三葉ぜり・すまふ草・うつぼ草・ばうふう・こころぼろ・くはゐ・はすの根ぼろ・けしの花・佛の座・うご・ぜんまい・わらび・いたどり・鼠の耳・のみのふすま・鬼あざみまゆ作り共ひんからたい共・つばな・なたねの花付大根・からし。

一石清水臨時の祭　三月中ノ午日也。南祭共古。村上天皇御宇天暦五年に始ル也。

一須磨の御祓　三月上ノ巳日也。

一鎭花祭　花の咲比、疫神分散して人をなやます事あり。かれをしづめん爲也。

一千本念佛　櫻咲ヲ待て行也。

一壬生念佛　三月十四日より廿四日迄也。

一嵯峨大念佛　三月六日より十五日迄。

しほ竈櫻・虎の尾櫻・かば櫻・ひ櫻・犬櫻・ふげんざう・蔵櫻・こめ櫻・墨染ざくら・地主櫻・西行櫻・熊谷櫻・きりがやつ・櫻根矢

ノ根ニアリ・櫻草・櫻のり・櫻鯛・櫻・櫻いかだ・櫻いな・櫻はへ・小櫻おどし・櫻かされ・櫻色・櫻はのみや

花びら法ノ行の具ニ有又正月の餅のかざりにも有あた花・餅花・花たて・花入・花かご・花おけ・花筒・花笠・花ぬり・花がつみ・花のぼうし・花見車・花うつぼ・結び花・火花を散ス・花眞壺・花ぬす人・花のしん・花鳥・花聟(むこ)繼也・花姫(ひめ)同・香花・花かめ・花みしらみ・花かいらぎさめ

花つくし・天智天皇の哥書也榮花ノ花・日ほしの花・花がた・かいだう・りんごのはな・あんずの花・すもゝのはな・山もゝのはな・こぶしのはな・ぼけ・もくれんげ・もちつゝじよせつぎ・椿當世ハ六月土用ニ繼也俳昔ヨリ繼木は春ノ物也。たとへば酒をあたゝむる事。重陽(ちやうやう)菊の宴(えん)より昔はあたゝめ初といへども、當世は四季ともにかんをする也。可レ推レ之か。

大しら玉・伊勢椿・ちり椿・うす色椿・ぬき白椿・飛入椿・此外當世名を付たる椿其數をしらず。あまねく流布(るふ)せざるをば出すべからず。

てまりの花・小米のはな・すゞかけの花・柘南花(しやくなげ)・白藤・宇治の手初・茶を摘共・かぎ茶・新茶共・こあゆ・あひふ うづらとる おとり也・ひような雉子也・かしまたう同・すゞめ子・ひな鶴鶴ハ雛也・巣(す)山ニ入・山のしぶろ・わすれかい・麥うづら・からひばり・子ひばりつかふ何も嚴詞に云事也。

むなくろ苗代鳥共云・田をこれ返す。

一やすらひ花　三月十日也。今宮也。賀茂の里より行祭也。

一東寺御影供　三月廿一日也。

一東大寺授戒(じゆかい)　孝謙(かうけん)天皇御宇ニ始。

からすき牛・雀かくれ非生類ノ事也・いも種うふる。

初　夏

一綿(わた)ぬき　四月一日也。牡丹(ぼたん)・芍藥(しやくやく)・山うつ木・川卯木・ちやうしゆん・むばらしやうび・杜若哥には春也。いちはつ・口なしのはな・桐(きり)の花

若葉に花を結びては夏也・青葉ハ春也。ほうの木の花・むばらのはな・いろりふさぐ・ふろのすき。

一大神(おほみわ)祭　四月上ノ卯日也。三輪ノ社也。清和天皇貞觀の比より始ル也。

一稻荷(いなり)祭　同日也。元明天皇和同年中に始ル。

一山科(しな)の祭　四月上ノ巳日也。寛平十年に始ル。

一平野祭　同上ノ申日也。清和天皇貞觀年中ニ始。仁德天皇を祝奉ル也。

一松尾祭　同日也。同御宇に始。

一杜本(もりもと)ノ祭　同日也。河内ノ國ニあり。

一當麻祭　四月上ノ申日也。大和國也。
一當宗祭　同上ノ酉日也。宇多御門御宇に始。
一梅ノ宮祭　同日也、仁明天皇承和三年ニ始。是定など云て大臣の官領する社也。橘氏の氏神也。
一龍田祭　四月四日也。天武天皇より始。大和國也。水と風の難を祈ル神也。
一廣瀬祭　同日也。右兩所何モ同擬階祭四月七日也
一灌佛　四月八日也。夏ニ入日也。
一嵯峨の御身あらひ　同日也。
一伊勢神衣　四月十四日也。
一山王祭　四月中申日也。後冷泉院御宇長久四年より始。
一賀茂祭　四月中酉日也。神山祭也。欽明天皇御宇より始。
一賀茂のみあれ　何も同前也。
一多賀祭　四月上ノ丑日也。江州犬上郡也。
一關白賀茂詣　四月中ノ申日也。圓融院御宇天祿二年に始。
一中山祭　同日也。后冷泉院五年始。
一吉田祭　四月中子日也。一條院永延元年に始ル也。
こやへ鷹入ル。同毛なかふるたか。此外諸鳥共に毛なかふる、夏也。鸎首雞（ママ）ばんといへる鳥也
一蚊帳つり初、四月後ノ申日也。
一土塔會　津國天王寺に行也。
一駒牽　四月廿八日也。一條院御宇永曆元年ニ始。
一三枝祭　元正天皇養老年中に始。わせ麥刈・木綿蒔・あなさし・すゝの子・むはらこき・つゝ鳥　此鳥鳴て蚊を生ずると云り・なけらよし原へ渡り夜ル鳴鳥也。

中夏

一献ニ菖蒲　五月三日也。天平十九年に始ル。
一五日節會　推古天皇御宇ヨリ始ル。
一端午節　左近右近の馬場騎射・しやうぶく・菖蒲かたびら同刀・いんぢ付かみのぼり・ちまき・百草取・或句にはきそひかりと言。
一きそひ舟　もろこしには五月五日ニ、せうえうすると。
一賀茂のけいば　五月五日也。
一深草祭　同日也。
麥秋・麥わら・半夏ほり・又たび・べにの花・柘榴の花・栗の花・せんだんの花なふら共・ひめゆり・鬼百合はかたゆり

一紫野今宮祭　五月九日也。
　一條院御宇正曆五年に始。

さおとめ・さ月おとこ・ついり・いちご・すいかづら忍冬共金銀花共・山もゝ・あんず・ぐみ・あぢさへ・青梅・竹子・桑の實つなこ共云・白瓜・あさ瓜・木瓜・ひめ瓜・茄子・さゝげ・あかざ・たで・田ノ草とる・黑かもの子かるの子共云。

此外水鳥の子何も夏也。但鳰の巢・鶴の巢・雛也。

◦うつかひ夜分也・川かり・かいこのまゆ同夏引の糸。

一室明神祭　五月十三日也。播州ニ有。

一有無　同廿五日也。村上天皇御宇ニ始。

一最勝講　長保四年ニ始。

一着鈦政　元明天皇御宇和銅の比始ル。

のみ・はい・大豆うふる・粟ひへ蒔・ごま・きび何も此類同比まく也・小麥刈。

末夏

一醴酒　六月一日也。應神天皇御宇始。

こほり餅祝、同日也。氷室の例ニ任ス。

一延曆寺六月會　同四日也。桓武天皇御宇延曆年中に始也。ひえの山ニ行也。鞍馬竹切、六月廿日ノ祭也。

一月次祭　同十一日也。弘仁年中ニ始。

一祇園會　六月十四日、貞觀十一年比より始。下京の祭也。同七日に御こしを旅所へ出す也。其日山ほこなど渡ル也。

函谷ほこ・長刀ほこ・放家ほこ・雞ほこ・月ほこ・菊水ほこ・舟ほこ・此外笠ほこ、山〳〵の名も記しがたし。

一對馬祭　同十四日也。試樂八十五日ノ夜也。尾州國ニ在レ之。

一熱田祭　同十四日也。同尾州ニ在レ之。

一竹生嶋祭　れんけと云。江州也。

一安藝國いつく嶋祭。六月同日也。

一伊勢祭例　六月十六日也。翌十七日、此兩日は出家も御免にて詣也。

一嘉定食　同十六日十六錢ヲ好物を調、獨食にすると云り。

一志度寺ノ祭　六月十七日也。讃州ニ有。

一富士詣　六月中也。

汗かく・汗巾・匂袋・ほしいひ・切麥・麥粉・こくれちのさうや

く・ひる・鮎のすし・から瓜・さたう瓜・あこた瓜・しろほてん・はう瓜・こがね瓜・東寺瓜・木津瓜・夕がふ同ひさご・百日紅・びやうの柳・夏切の茶・南天花・麻引・夏そ・青そ・からむし・はすの花・かうほね・澤なき・おもだか・ひし・仙翁花・石竹・がんひ・うち野・ほうせん花・のうぜんかづら・てつせん花・風車花・くわんざう・しやが・きぼうし・しをん・鬼のしこ草共云・からす萩・まんじゆさけ・狐のおかせ・大根蒔・土用ぼし・霍亂・香需散・山桃もゐ・しそ摘・赤さんばう・うちわ・ねりひばり羽ぬけ鳥・すゞみ六月十九日座頭中ニ行事也・巣鷹つかふ。

一橋立祭　六月廿五日也。丹後國也。

一みたらし詣　同廿日より晦日迄也。同たんご。

一道饗ノ祭　六月晦日ナリ。水あぶる。

一住吉おはらひ　同日也。水かけあひ。

一大祓　同日也。天武天皇ヨリ始ル。

初秋

一せつたい　七月一日より心ざしの爲行也。
高さうろ・同前也。いきみたま・ふようの花・みそはぎ・むくげ。

一萩の戸　萩をうへられたる御庭なり。清涼殿北の二間の前とかや。

一乞巧奠　七夕に琴を手向義也。

一山伏峯入　七月七日當山醍醐の三寳院殿、又八月七日本山峯入しやうごんゐん殿。

一文珠會　七月八日也。仁明天皇御宇始ル。

一清水寺千日詣　七月九日夜ヨリ十日朝迄也。

一盂蘭盆　七月十四日也。天平五年に始ル。
はすの飯・同さし鯖・さうゐはゐ・寺ゝせがきのはた・聖靈まつゐ・たくりび・ほん帷子・蹕をかくゐ・こや出の鷹昔は聖靈の箸を火に燒て、其かげにてたかをとやより出スなり。はしやきたかと申せしを中略して、はしたかと申とかや。皆夏七月十五日也・じし日同十七日也・燒米・ほうづき。

一仁王會　寛平七年七月ニ始ル。

一相撲　七月廿六日也。同年同月ニ始。

一みさ山祭　七月廿七日也。信州諏訪也。
おとこ草・美人草・桔梗・鴫の鳴初。

中秋

一八朔風俗　建長の比より始ル。
あめの魚　八月一日より江州に取初也。
稻刈・わせわら・いなご・粟ひへ刈・もみなする・そばの花。
敦賀祭　八月十日也。馬市を立る。越前國也

いも名月　八月十五夜也。
一石清水放生會　八月十五日也。
一ひのたう又わらづかひ　同四月八日。
右二の祭は山崎より行也。放生會に對する祭也。云々
一宇佐宮祭　同十五日也。豐前國也。
一箱崎祭　同日也。筑前國也。はかたゟ行也。
一鵜の祭　同日也。能登國陽の郷の祭也。
一信濃國駒牽　八月十五日也。
一甲斐駒牽　同十七日也。
一こりやう祭　八月十八日也。上京ニ行也。
一武藏駒牽　八月廿五日也。
一上野駒牽　同日也。
初がん・しゝめき・しゝ笛・よこ引・鷹山切・鷹打・鳥打・若たか・尾越のかも・あかけ鷹・同わし・熊たか・何も小たか等秋なり。うづらあみ・うなぎやな同鮎・鮭・菜たまく・けし・からし・此等八月也。そうづ・かゞし等何も山田もるか、何モ小鳥渡ル秋也。ゐのみ・むくのみ・栗・くるみ・柿・梨のみ・かや・ざくろ・はしばみ・なつめ・しゐ・ぎんなん・せうし・ぶどう・ゐびつる・あけび・ひよ鳥上戸・むかご・かも瓜・からす瓜・種ふくべ・みやうがのこ・松茸・しい茸・平茸・はつ茸・いくち・しめぢ・なめすゝき・もたし・せうろ・ねず茸・芝茸・べに茸・篠茸・天狗茸　猶も可レ在レ之。

末秋

一秋の衣がへ　九月一日也。
一御灯　同三日也。
一不堪田奏　九月七日也。
一重陽宴　同九日也。菊の盃・菊の酒・大日の菊・すいやうひ・ぬれ鷺・紅菊・てりこう・こがねぬき・らんぎく・猩々菊・小車・野菊　并菊の異名。翁草・かたみ草・まさり草・やもめ草・霜見草・秋しべの花。此外猶も可レ在レ之。あまねく人の不知には菊と云字を添べし。
一金札宮祭　九月九日也。ごかうの宮共言。桓武天皇御宇より始ル。伏見の里にあり。
一醍醐祭　九月九日也。
一いく玉の祭　同日也。大坂ニ在レ之。
一伊勢奉幣　九月十一日也。
垂仁天皇御宇より始ル。
りんどう・りんたんとも云・諸木の紅葉・大豆名月九月十三夜也・橘柑・金柑・柚・たち花のみ・雲州橘・久年母・佛手柑・まめ引・あ

づき引・新酒作る・初鮭。

初冬

一神をくり　十月一日也。いろりひらく。
一亥の子の餅　同上ノ亥日也。永安四年ニ始ル。
大根引亥ノ子過て引と云り・かぶらな引・いもほる・山のいもほる・
薬ほる・そば刈・麥蒔・かん菊。
一大社神事　中ノ亥日也。但十月中ハ宗也。
一射場始　十月五日也。殘菊宴同日也。
一眞如堂十夜　十月五日ヨリ十五日迄也。
一興福寺法花會　十月六日也。奈良ニ有。
一維摩會　十月十日也。於ニ興福寺一行也。
元明天皇御宇和銅七年ニ始行也。
一金毘羅祭　十月十日也。讃岐國ニ有。
小兒に名ヲ付侍る祭也。
一法花御影講　十月十三日也。
一達磨忌　十月廿日也。五山ニ專行也。
かみこ作る・かみふすま・こたつ・炭とり・ほたふすぶる夜分也・口切ノ茶・鷹詞の類。山つかふも用物もみな冬也。高繩なさす・かもだか・さいたか隼也・山茶花・水仙花・びはの花・冬咲椿・初たら・氷魚くむ・石花・なまこ・このわた・はらゝご・つみ綿・木わた打・ぬりおけ・布子・霜ばしら・かたびら雪・火桶・たんぽ・納豆汁・こゞり・たつくり・ふくめ・篠つけ　此三色何も季をとる物也。みぞれ酒・あられ餅・雪餅・綿ぼうし・綿子・雪垣かこふ北國ニハ十月ノ比より家のめぐりをこもにてつゝむ也。
かへり花　小春ニハ何花も皆有。
神むかへ　十月晦日也。

中冬

一暦奏　十一月一日也。欽明天皇御宇ニ始也。
一朔旦冬至同日也。神龜二年ニ始ル。
一相嘗祭　十一月上ノ卯日也。
一五節　十一月中ノ丑ノ日也。
一鎭魂祭　十一月ノ寅日也。
一新嘗會　十一月中ノ卯日也。
一豐明節會　同中ノ辰日也。大嘗會御禊に在レ之事也。
禁中方の御事は委は記しがたき儀也。
一北祭　十一月中ノ酉日也。賀茂臨時ノ祭也。寛平ノ御時ヨリ始也。
一小忌衣　同をみの袖・山あひの袖。何も同前也。五節

の舞人の着する物也。賀茂祭又大嘗會の時用ル物也。

一里神樂　禁中の外は皆里神樂也。かぐらうたひ物の事、榊葉うたふ。明星・きりぐ＼す・からかみ・しつや・のうすけ・さゝ波うたふ、此等也。但催馬樂のうたひ物は雜也。

一ひゞ・あかゞり・雪やけ・雪つぶて・雪ぐつ・かんじき・そり・雪竿。

右何も北國ニ在之。雪さほの事、竹に一尺二尺のすをきざみ置て、年／＼の雪のふかさ・あさゝをためす。哥にも讀り。

一雪ころばし・すゝはな・雪打あい。

一子祭　十一月上ノ子日也。夜分也。

一吹子祭　十一月八日也。かぢや方ニ行也。

一冬至・冬夜・御ほたき・追鳥狩・雪すき・雪かき・雪おこし山のなる事有・ふゞきたほれ、此等北國に有事也。

一春日松下御祭　十一月廿一日也。

一大師かう　十一月廿四日也。

末冬

一乙子の朔日　世和(話カ)ニ云り。

一内侍所神樂　十二月十一日也。

一荷前使　同のさきの箱　十二月十二日也。年の終に先帝御陵へ幣帛を奉ル也。

一佛名　十二月十九日ヨリ三日の間也。

一索牛童子像　大寒日也。

一寒さらし・曉の鉢たゝき・せきぞろ・すゝはき・かゞみのもちつき・もち花作る冬也・年木きる・門松むかふる・節分・鬼はそと福は内と云事付・鬼やらひ・なやらふ・舟なゐがきてしきれまめ打・いりまめかぞふる・役はらひ是皆節分の夜也。

一追儺節會　節分の夜桃の弓蘆の矢にて邪鬼をいる事有。

一め刈の神事　大晦日夜なり。長門國也。

一齋宮繪馬　同大晦日也。伊勢國也。

一節折　同大晦日也。よおりの命婦など云女、天子の御たけを取事あり。神代ヨリ始ル。

戀之詞

女・よめ入・聟入・夫婦・めかけ・まおとこ・うはなり打・なかふど・懷姙・こひやみ・くどき文・あだぼれ・手をしむる・腰をしむる・目まぜかけ・目てしむる・そひね・二人ね・夜ばひ・ね物がたり・りんき・さられ・いさまの文・ひよくの中・れんりの契・ゆい

入・美人・おさなゝじみ・子もち・莚しき・あひぼれ・ふりよし・みめよし・長かもじ・出しびん・つぼねありき・て枕・脚布さく夜分也・あくる日の文・枕さうし・素女論・さゝやきかへす・夢合・沉の枕香・男ぎらひ・好色・二人いさかひ・女ぐるひ・あだの約束・しなせぶり・ころしぶり・ふりこゝろ・かほをけはふ・口べにさす・爪べに・落し文・辻立・門立・帶のよろこび・まち上臈・老女房・若女房・こしに手をかくる・貝桶渡す・口すふ・三つ盃の下重・つはりやみ・皆老同穴・後朝にね巻を返す・坊主おさし・落髪おしむ・一はな心・出あひ屋・つくま祭に鍋をいたゞく・若衆狂・もゝつゝ・けいせい・遊女・白拍子・佛ごぜ・祇王・池田の宿のゆや・しづかごぜ。

此外いかほども可レ在レ之、猶たづぬべし。但當世のけいせいなどのいひはやらかす詞有。ちは・まぶ・ぬめりもの・あふらたる・つめたひ・柳こやれ・けうしや、など言詞は、かりそめにも出すべからず。是はたゞ下が下のいたづらものゝ申侍て、やんごなき御かた〳〵はしろしめさぬ詞なり。如レ此のさかひを能〳〵腹におちはへてたしなむべし。

一后宮女の御名戀になり侍らんやと、予昌琢法眼に是をとへば、答てのたまはく、女と云一字さへ戀になり侍ればゝ、まして名譽の美人の女はいふに及ばず、戀たるべしと申されけるまゝ、少ゝ書記し侍り。但其位ゝ時代の事は次第不レ同。

一二條后　業平と密通の事世にかくれなかりしかば、爰(ほか)にあらまし侍る。

一齋宮　是は淸和天皇の時、文德天皇の御むすめ、これたかのいもふとなり。業平狩の使として伊勢へおはせし時、神のいかきをこえて業平に契り給ひしと也。さるにや高階氏は齋宮腹とて今に此氏は參宮不レ叶と云ゝ。高階峯緒子師尙實者業平の息ト云。

一藤壺の中宮　かゞやく日のみ子と申奉る時より、光源氏の御心かよひて冷泉院を生給ふとかや。後は薄雲の女院と申奉る也。

一六條御息所　物ねたみふかくまし〳〵て、あふひの上・夕がほのうへをも、物の氣となりてとりころし給へば、ためしなき事に申侍る也。

女三宮　源氏の君をゝきながら、柏木の右衞門督に密通ありて、薫大將を生給へり。

一朧月夜の内侍のかみ　花のえんの夕月夜、こうきでんのほそどのにて、おもはずも源氏の君に契り給ふて、

たがひの御心たえやらず。

一玉かづらのかんの君　源氏の君にも琴を枕のうたゝねし給ふとかや。螢の兵部卿・岩もる中將、あまたの人の心をうごかしし美人也。

一浮舟の君　薫大將の妻なり。宇治の里にいとふかく忍びて置給ひしを、匂兵部卿密通ありて、色々樣々の事共あり。小野にては手習の君共云り。

一木枯の女　左の右馬かみか時々かよへる女也。神無月の比ほひ、月おもしろかりし夜、うちよりまかで侍るに、あるうへ人きあひて此車にあひのり侍り。こよひ人待らん宿なんあやしく心くるしきとて、此女の家はたよきぬ道なりければ、門に車を立ておりぬ。うへ人いたくすゞろきて、門ちかきらうのすのこたつ物にしりかけて、と斗月を見る。ふところなりける笛を取出て吹ならし、かげもよしなやと、つゝしりうたふ。内よりわごんのよくなるを、りちにしらべ、今めきたり。扨上人のよめる。

　琴の音も月もえならぬ宿ながら

　つれなき人を引やとめなん

と吟ずれば、すの内より、女、

　木がらしに吹あはすめる笛の音を

　引とゞむべきことの葉ぞなき

となまめきかはす。いとあだ〳〵しき女なりけり。

一源内侍　さた過侍る女ながら、あだめきてけさうしたるなめり。哥よく讀て琴も上手めかし侍れば、いそぢになりける女に侍れど、光源氏も心まどひて契り給ひしとかや。

此外源氏一部又伊勢物語に書侍る女のかず、つくしがたし。よく〳〵かきもらしつ。將又かぐや姫・小野小町がたぐひ、これおほし。そのかみよりの后・女御・更衣の御名、戀に成侍らんをば吟味して、いかほども付合に出さるべし。

一飛鳥井の君　さ衣の大將、此女と契り初にし故は、うづまさにこもり給へるに、仁和寺の威儀師めのとゝ心を合て、ぬすみ行しに、大將殿二條邊にて見付給て、とがめ給へるに、君をば車におきてにげたるを御覽じて、

何方へ行人ぞ、名乘給へ。道とつけんとの給へば、二條堀川數やり燒邊へと有し也。そのまゝ契り給ひ、御懷姙有しと也。

一小督局　高倉院の宮女也。誰もしれる事成ければ記に及ばず。

一一宮御息所　たがひに心をつくし給し事、太平記に始終みえたり。

一勾當內侍　新田義貞の妾也。是も太平記ニくはし。

一妹喜　夏桀王の后也。酒にゑへる人をみて笑也。此ゑめるかほに桀王てうあひのあまり、酒のかすにて堤をつき、その中に酒をたゝへて、三千人あつめて、皷をあひづに一うてば一度にかうべをかたぶけて、この酒をのむ度に是を興となして、まつりごとをこたり給へば天下やぶれ侍りぬ。

一妲己　殷紂王の后也。炮烙死形(刑)とて罪あるものを炭の火をおこして、其上に銅の橋を渡シて罪人を渡らせ、落て燒死するを見て興とせり。紂王此妲己にまよひて代を失畢。

一襃姒　周ノ幽王ノ后也。烽火の笑とて煙をあぐる事をこのみて笑也。烽火は兵をめす時のあひづの烟也。ほうじをわらはせんため度々烽火を上らるゝ故に兵來らず。犬戎より幽王をせめ侍る時、軍兵來らずして終にほろぶる也。

一戚夫人　漢の高祖の后なり。てうあひし給ふて、此夫人の腹の二の太子へ、御位をゆづり給はんとおぼしめしたり。一の后呂大后大きにうれたくおぼしめして、張良をめされ、此事いかゞ侍らん、よきやうにはかりごとをめぐらすべしとのたまへば、張良申ていはく、商山といふ所に、東園公　綺里季　夏黃公　角里先生とて四人の隱者侍る也。高祖是をめせども參らず。もし此四皓を一の太子に付奉らば、かうそおぼしめしなをす事も侍らんと申。則呂后御才覺まし〱て、四皓をめして太子に付申さるゝ也。是によりて天下を呂后の太子へゆづり給ひしと也。

一王昭君　漢の元帝の宮女なり。毛延壽といへる畫士がかたちをいやしくかき侍れど、胡國の民につかはさる

ゝ也。御門ふびんにおぼしめして、旅行のなぐさみに絃管の役者をそへて送らせ給ふに、せうくんは馬上にてびわをたんぜし也。此古事はあまねく人のしろしめし侍れば、ことすくなにかくのごとし。

一虞美人　楚頂羽の后也。烏江と云所にて頂羽ともろともに高祖にうたれ侍る也。此后の墓より生出たる草を美人草と云り。

一李夫人　漢の武帝の后也。かたちうるはしくまし〱し故に、李延年哥作りてうたふ也。傾城傾國と云事、此夫人ヨリ始レリ。李夫人死し給てのち、武帝かなしみにたへ給て、反魂香を燒、夫人の魂をまねき給ふと也。

一班女　漢王の宮女也。怨歌行を作りて我身を扇にたとへたり。色うるはしくして君のてうあひにおぼしめし時は、君に扇の御手さらず、御衣裳に添かごとし。色おとろへ侍て、てうあひうすくなり侍れば、深閨に捨られて、秋風の至り侍ては、扇を箱の中に捨て用ざるがごとしと、身をうらみて獨り佗とかや。

一西施　越王勾踐の后也。越王・吳王に戰まけてかうさんし侍る時に、范蠡此西施を吳國へをくり侍り。吳王又是にまよひて、會稽山の軍の時終に越王にうたれ侍りぬ。越王降參しける口を、雪をふくみてすゝぎ、二度會稽のはぢを雪と言り。

一楊貴妃　唐の玄宗の后なり。此事は始終長根歌に侍れば、委記するに及ばず。

一昭陽人　是も玄宗の后也。楊貴妃にねたまれ侍て、終に玄宗と不嫁して、上陽宮にをしこめられて、うらみふかき宮女とかや。

一蘇若蘭　晉ノ竇滔が妻也。とうゑん邊戍へ行て久しく歸らざりしかば、恨みにたへかね、回文錦字の詩を作り、錦の紋に織て送りし女也。

一楊枝　白樂天が妻也。樂天年老て病ニをかされし時、此女を他へ送らんとおもへり。女別をおしみて、ちの泪をながしてなげき侍るとぞ。

一王朝雲　東坡が妻也。とうば海南へ謫せられし時、此女もしたがひて行、海南にて朝雲死したり。東坡かなしみて詩を作りいたましむ。

一黎倩　宋ノ胡澹菴が妾也。こたん庵、秦檜がまつりごとの要をいきどをり侍て、秦檜をきらんと言訴状を天子へ捧奉るによりて、海南へ十年遠流せらる。此女もぐして行侍り。めしかへさるゝ時湘潭にして酒をのむ。此女笑て、かほにゑくぼのあるをみて、梨花に露の有を興じて詩を作し女也。

もろこし若衆に戀慕の事

一董堅　漢ノ哀帝の宮仕へ人也。董堅いまだ若年の時、御門御てうあひ淺からず。よるのおとゞにめされて、よるは夜をもはらと契らせ給ふ。有時御門つとに起出んとし給ひしに、とうけん御衣の御袖を片敷て、いぎたなくふしたり。夢おどろかすべき事をいとひ給て、御劒にて此御袂をたち捨、御門はぬき足にて出御有けると也。ふかき御心ばへを董堅おとなしくなりて後、いともかしこくおもひこめて、哀帝崩御の御時、御くわんにむかい追腹を切、黄泉の御幸の供奉し奉ルとかや。

一李節推　東坡がふかく心をそめし若衆也。有時李節推風水洞と云亭に行て東坡を待侍る。溪橋の水上より梅花しきりに流來るを、東坡あやしくおもひ、跡をしたひ尋行侍る心を詩に作れり。

溪橋曉溜浮ニ梅萼一

知君繫レ馬岩花落

好色のおとこ

一業平　すでに女になしてみまほしき美男と云り。色このめる品〻盡しがたし。

一みなもとのいたる　あめが下のいろこのみなりと、伊勢物語に書付り。

一ひかる源氏　あだ〳〵しき事のみおほく侍れば、いづれをさして申侍らんや。

一柏木右衛門のかみ　御簾の袖口より女三宮をかいまみて、身をやつし戀死せし人也。

一匂兵部卿　かほる中將の生得に、身の匂へる事をうらやましくやおぼすらん。つねにたき物をのみたきしめてけさうし給へば、匂ふみやと申とかや。浮舟の君に心をうごかして宇治の里にかよひし人也。

一深草の四位の少將　小野小町に百夜かよひし人とかや。

一志賀寺の上人　年老て後、京極のみやす所にほれまよひて、御手ばかりをたまはりて、出家の心を破り侍るとかや。

一昔、津の國にさゝ田おとこと云あり。又和泉國にちぬ男となん云有けり。此二人、あしやの里にうない乙女と云女によばひわたりて、たがひに我ものせんとあらそふ。女の親のいはく、をの〳〵御心ざし、いづれをさして分がたし。あの生田川にうきたりける水鳥をい給へ。あたらんかたにあわせ侍らんと云。則是をいるに、一つの鳥に二人の矢、かしらと尾にあたれり。女せんかたなくて此川へ身をなげたり。二人の男もつゞひて身をなげぬ。此親共來り、三人の死がいを取上て、一所におさめぬ。もとめ塚是也。

一竹とりの物語に書ける好色(かうしよく)の男五人の名の事、一人はいしつくりの御子、一人はくらもちのみ子、一人は左大臣あべのみむらし(〔まと〕)、一人は大納言大伴のみゆき、今一人は中納言いそのかみまろたり。此人〻竹とりの翁が生し立しかぐや姫に、心をくだき身をやつして、明暮翁がもとへ文をかよはし身をかよひて、ひめを戀わび侍り。此よし傳へ侍るといへども、更にいらへをだにせでつれなし。翁のいはく、人の心を破るはつみふかき事也。まげてあい給てんやと云。姫、翁のおほせとをいなびはてんも、猶つみふかきわざとやおもひけん。此あまたの人にま見へん事はおそろしければ、姫がのぞみを叶へ給はん人にあはんと云。翁よろこびてひと〳〵に申傳へ侍る。

一石つくりの御子には、天ぢくしやか如來の持侍るといふ石のはちをたづねてたべと云。石つくり、此よし打聞てつく〴〵とおもひめぐらしけるが、昔の佛の石の鉢いかでかもとめえん事かたし。しばしたばからばやと思ひ、大和國十市の郡、山寺のびんづるの前にありけるはちをとりて錦の袋に入、ひめのもとにつかはし侍る。かぐや姫是をみて、佛の御はちはひかりかゞやくと云。是は光もなく、まことしからずとて返し侍れば、もとよりいつわれる事なりしかば、あらそひ侍るにも及ばで只ありぬ。

一くらもちの御子には、ほうらいの山に有と云玉の枝をもとめてたべと云。我屋に立かへり、御門へは鎮西へ趣(赴)也と御いとまを申、難波の里に忍びておはしまし、上手の物のたくみ等六人までめしよせ、金銀を以玉のえだといふべき物を作らせて、やをかの旅して歸り、是をかぐや姫のもとにやりける。みづからも行て東海の數千万里の風波をしのぎ、難行苦行してかの嶋に至り、此花をもとむるなどかたり給へば、姫の心にも誠に妙なる一枝なれば、是にはまけてん哉と思ひ給へる折ふし、玉のえだを作りしたくみどもの來りて、此ろくをこひけるにぞ、僞はあらはれぬめり。御子面目なくて、すべりはい出てにげにけるとぞ。

一左大臣安部のみむらし、此人に、もろこしに有と聞し火鼠のかは衣をたべと云。此おとゞは德にあまれる人にて、もろこしへ、ふさもとゝ云ものを渡して、おほくのこがねにかへてほどなく歸朝してけり。則かぐやひめにやりける。ひねづみのかは衣もと(マヽ)云物、をとには聞て見ることは今ぞはじめなる。誠にうるはしき物也。火にくべて燒(やけ)ぬ物なりと云。さらば火に燒てみよとて火中に入侍れば、めら〳〵とやけてうせぬ。是もむなしく成けり。

一大納言大伴のみゆき、是には龍(たつ)の頭にありと云五色の玉を取てたべと云。是は安からぬ事とはおもひながら、郎等あまたにいひ付てやりける。待に久しく歸らざれば、もだへかねてみづから難波の浦より舟出して、たつにあふまでと、爰かしこを漕渡りける。悪風しきりに吹て、すでに舟をくつがへさんとし侍れば、かんどりのいはく、たつをころさんとおぼしめすにより龍神のあだをなす也。「その心をやめたまはんとの龍神へ御詫言(マヽ)ゆはゞ、海上しづまる事もやと云ければ、さま〳〵の願たてゝ、命から〳〵にてかへりにけり。

一中納言いそのかみまろたか、此人には、つばくらめのもちたりと云こやすの貝を取てたべといふ。是を取侍らんと、たかき所につばめの巣の有けるに、はしをかけてのぼり、此すをさがしけるに、貝はなくてつばめのふるくそをにぎるのみならず、こをふみはづして落ければ、

しら目になりてたえ入ぬ。人〻あはてさはぎ、かほに水などそゝぎ、からうじていき出ぬ。腰の骨を打折侍れば物にのせて我屋にかへり、かくれ居て、此事はづかしければ、人にもあはずなりにけり。何も〳〵かぐや姫にはえあはで、人わらへなる事ども也。

一術婆迦（じゆつはぎや）　魚賣也。天竺の内裏には宮女の御局までも商人の行侍れば、此うを賣男、后をかいまみて、しづ心なくこひ佗てけり。此事帝きこしめし、情は上下によるべからず、后にちらとま見え給へとなん。しからば車のしぢに百夜かよひなば、其内にまみえ給はんと有しかば、九十九夜までかよひ、一夜をまたで死したりと也。此事大和物語には我朝の事に書たり。されば俊成の哥に、

　おもひきやしぢのはしがきかきつめて
　　百夜もおなじまろねせんとは

一こまのゝ少將　色このみのあた〳〵しき人也。世中の人はおもふをばおもひ、おもはぬをばおもはぬに、此人はおもはぬをも、思ふをも、けぢめみせぬ心なり。凡業平にひとし。

一小野賴風　女、此男をうらみて放生川へ身をなげければ、賴風もつゞひて身をなげぬめり。男塚女基（マヽ）とて男山の麓に有けると也。

この古事古今の哥のことば書に貫之がかけり。

一桂海律師（けいかいりつし）　此人は延暦寺の沙門也。三井寺の兒に梅若君と云侍るを戀こがれて、うき身をやつしし人なり。事のしなおほく侍れば書もらしつ。秋の夜の長物がたりといへるさうしをみ給ふべし。

右業平よりはじめて此人〻の名、前句にひかれては何も戀になり侍らん哉。

右此一冊、江戸に至りてつゞり侍る事は、むさしあぶみ、さすがにかけて賴み奉る君命によりて也。式目は終に侍らぬといへば、其趣ばかりを筆に記し侍るべきよしをのたまふ。愚意（ぐい）に應ぜぬ事なりしかば、余多（あまた）たび辭し申といへども、いなびがたくて書とゞむる事になりぬ。ゆめ〳〵外見有べき物にあらず。是はたゞ田舍にてのわたくしごになん侍る。

寛永十八暦　正月廿五日　　帆亭　德元

俳諧之註

誹諧百韻之抄

重頼

俳諧百韵之抄

葉は花の臺にのほれ佛の坐

この獨吟の發句はじめには　お佛の座をしめ給へなもあみだ　として脇の句を　春の野寺にたゝく大かね　と付侍りつれども、佛の坐と云草にて當季をもたせたれば、心よはくして聞えがたし。其うへ發句めかず。百韵首尾の以後、好士長頭丸へこのよしをたづね侍れば、かくのごく添削せられ侍るなり。惣じて發句は一座の卷頭、百韵の眼なれば、尤はれがましき物なり。さればいかにも人に談合すべきとにこそ。

此發句は當年二月廿日、予が母妙喜禪尼の二十五廻にて侍れば、追善のためにおもひ立てし侍るを、はいかい初學の友人、稽古の爲に巨細の註釋を加ふべきよし、しきりに懇望せられ侍る。度々いなび申といへども、のがれがたくして愚意を書付る事となりぬ。勿論註釋に及ぶべき事にしあらざれども、門口のゑのころのまだめもあかず、垂木鼻に巣だてる雀の、あくちも落ぬ人の爲なれば、あまねく人の見るべきにあらず。嘲哢の段までもいきたたじ。たとひそしる人あり共、はいかいの二もじに讓侍れば、さのみ罪にもあらじ。かへす〲も(受カ)交張たる事なれ共、欝を散じ情をます媒を、末學の輩にすゝむる道なれば、且は作善と思ひなずらへ侍るものなり。さて發句は廻向の心なり。葉はといふを母にかねたる事は、連哥に往々侍れ共、かやうの事は幾度もくるしからず。亡母幽靈佛果にいたりて、花の臺に坐せしめ給へとなり。佛の坐といふ草は、えぐの若菜などゝ哥にもよまれたるもの歟。花のなりの蓮に似たれば、誤て俗語にはけゞの花といふとなり。たづぬべし。

はるの野寺にかねたゝくこゑ

脇は發句の時節にそむかず、ひしとつきてしかも發句をことはるやうにいへ共、左はなりがたく侍れば、かくのごとくし侍るなり。其外脇の句には、樣々習ひある事とぞ。廻向の心をしたる發句の脇なれば、ことはりて廻向のかねを打ならしたる体なり。佛の坐には春の野にて、あい

しらふものなり。

雪まより盗人かんたう顯れて

第三よりはかけ離れて長高く、幽玄にすべきよし、連哥のならひとかや。されば是は狂言なれば強てそれにもかゝはらず。唯一句の仕立おかしやかなるを宗とす。錦の袋にぬかみそをつゝみ、花のえだに餅をさしはさめらんやうにせよとの、先賢のをしへにまかせ侍るなり。付心は京わらんべの諺に、ぬす人かんたうかねたゝき、かねはなうて手ひやうしといへるにすがれり。春の野には雪間を付たり。又寺にかんたうもさのみうときものならずや。俳諧第三の仕立やうは、かやうなるをよしとやせん。おもへば過言に似たれ共、尺八に頭をふらぬと、はいかいに自慢せざるとは損なりとかや。去ながら自慢に二ッの心あり。心得ざらん人の自讃は、神明もにくみ佛陀もすて給ふべし。又かんたうとは強盗と書をあやまりたるか。但かやうの事は人のいふにしたがふなり。是はいかいの作定なり。又云かんたうは唐韵かしらず。

月おぼろなるかのえ申のよ

あらはれてといふ詞が付所なり。此夜の盗人は必あらはるゝと申す。月は前句夜分なればなり。又庚申を待ぞおがむぞなどは、面にすべからず。

鷄の尾もなが〱とうたひつれ

庚申は鷄鳴をかぎりに待もの也。かけのたれおのながき夜すがらなどゝ歌にもよみ侍れば、秀句にもなるべきか。かく利口は申せ共大つき也。

關をくりにやしめるさかもり

孟嘗君が函谷の關をこえしより、鷄に關を付る事となり、又孟嘗君が傳、史記共ほか諸書に見えたる也。たれもしれる事也。うたひつれには酒盛のしめる体を付るなり。

凉かぜの手に〱綰る河柳

唐には人を送るとては、河邊まで行て柳の枝をわぐる事あり。三体詩に離-別河-邊綰二柳條一とあり。綰は柳の枝を折て、環にする義ぞ。柳はこと木のやうにあらで、糸がながきものなれば、此いとにて離別の人を結ビとめばやの心なり。又環に柳をすれば、環は還の字と音がちかきほどに、やがてかへれといふ義とぞ。凉風は酒のしめ

る河邊の景氣ばかり也。風の手に〳〵とは、人の手にも風の手にもとかねたるなり。

みづの出しほはしがらみもなし

俄に水出てしがらみもなき故に、おりふし河邊にある柳の枝などを折て、是にてなり共とさはぐ躰なり。出はなは花といふ字を書べきが、面のうちに同字せぬ法なり。され共此發句は後に直し侍れば、せん方なくて共まゝさしをくもの也。無念なる事にや。但出花と云字もあるべきか。又水の出花は雑也。何体にもよるべし。しがらみは水をふせぐもの也。八句目のいきやう連哥の作法に准じて、かる〳〵とするなり。

脹滿や針も薬もきかざらん

水腫の脹滿は滋生よりきざして、水ばれに腫るものとぞ。此煩は針も薬もきゝ難きものと、ある藪薬師の語侍りし也。出花をば煩の募もてきたる最中に取たるなり。

かなしながらもやいとすゑけり

遣句也。惣じて病に薬灸針などを付る事は比興なり。墓ゆきにうか〳〵とし侍ればなり。又愚作のつたなき故也。今更なをすべき様なし。後悔ゝゝ。

みどりごを抱そだてぬる親ごゝろ

子をもたらん人は、此句の心を知べし。大方に聞むは味ひなかるべし。あつがるをおし付て灸するは、不便なるものぞ。

三たびとなりを遷す分別

孟子のおふくろの三度隣をうつせし事蒙求にも見えたり。誰もしれる事なり。連哥の付合成べし。本意ならず。

かしましき薬鑵や鍛冶や両替や

當句は俳諧の中の俳諧也。度ゝ此姿を好むべからず。

はじめて京にのぼるひな人

聞えたり。初てといふ所が専也。這出の人の心成べし。此句に付て思ひ出たる事あり。奥丹波の人初て出京して、四條綾の小路を通りし時、木綿足袋をうてる槌の音のさはがしきを聞て、よなをしよなをし、と大聲にて呼はりけると人の語りて興ぜしなり。地の震と思へるにこそ。

異やうな御調物をばせたらをひ

初てと云所が付所也。異風なる御調をさゝぐる体なり。

とやうは目なれざるさまを云。

治れる代をあふぐ仙術

おさまりし代に仙人の出たる事いくらもあるか。東方朔・西王母などもその列(例カ)也。初には仰ぐ仙人とし侍りしか共、打こしに人と云字ある故、仙術となをしき。誠に術なきなをし處也。術の字何の所詮もなし。又後悔。

兵法を傳んといふ夢の告

黄石公といへる仙人、張良が夢中に云やう、汝天下を治て高祖につかゆべき器量あり。然らば今日より五日に當らん平明に、我とこゝに來れ(爰とは下邳の圯上の事也。)我に兵術あり。汝に傳んと約せし事謠にうたふ。張良が傳は史記に委歟。

鹿島の宮に通夜申す秋

此明神は兵法を守護し給ふと申す。兵法修行の人は此所に詣して、一七日の間法樂の兵法をつかふ。つかひおふせ侍れば、神主よりゆるされて札を納るとなり。樣ゝの儀式あるよしうけ給はる。夢の告には通夜と付たり。

月影は筑波の岑によつと出て

筑波山は鹿島の宮より東に當ると承る。高山なるとかや。常陸の名所也。又つくばとは、木のしげき山の惣名にも云り。景氣付なり。

尊の袖の露やきらめく

人皇十一代景行天皇の御子日本武尊の、にいはりのつくばをすぎていく夜かねぬと、上句斗をあそばされし事あり。是連歌の濫觴なりとぞ。こともおろかや俳諧は、伊奘諾・伊奘冊尊の天の浮橋のもとにして、神かたらひし給ひし時、うましおとめにあひぬと宣ひしより始れり。和國の人として學ばずばあるべからず。呵々大笑ゝゝ。

玉姫の花の姿におもひつき

前句の日本武を當、句には彦火ゝ出見尊に取なせり。御兄火闌命の釣針を失ひ給ひて、海中に尋入て、豐玉姫に思ひつき、嫁し玉ひし事日本記(紀)に委。長き故省略之。

胷の烟のかすむ戀やみ

爰にも又古事あるべき所なれども、左樣なれば句なみ重く侍る故に、思ひ付と云斗に付たり。おしはつしのいきやうなり。又思ひのひを火によせて、哥にもよみ侍れば、胸の烟を取出侍る。

情たつたばこにやよひ暮ぬらし

胸の煙にはたばこに醉たると付たり。やよひに彌生をかくし侍る。不レ好事也。

日も遲馬にのれる道づれ

早馬と云に對して、遲馬とも云べきか。乘かけ馬の道行の情をかはすさま也。

草枕あまり夜ふかう起なれて

前句の日の遲きは、彌生の比の日脚の廻りの遲き事なり。それを爰にては夜深く出たる旅なれば、朝日の遲き心に取なせり。草枕の寢ぐるしきさま也。扨此句は夜ふかくとすれば連哥なるを、少し云かへて俳諧に用る事あしきものなり。され共かばかりの一句は、百句の中になどかなからざらん。千句連哥にもその儘の俳諧且交へ侍ると見えたれば、枉て准ず。

世を侘數寄の袖の炭斗

草枕には世を佗たる袖を愛しらひ、起なれては炭ををき馴たるに取なす。

初雪はおもしろ過てやら寒や

初雪には茶湯者ノ心を付るとぞ。彼花の枝に餅を挿る句躰なるべし。

哥機嫌よりさかきげんがな

さもしき哥人にや。秀哥はやせさむく、からびたる心より出るものとこそ。

うつくしきごぜと座頭のころびねに

前の詠哥を小哥に取なすもの也。先今夜は、小歌だてをやめて、さゝごとをこそしたけれと願ふ心成べし。七上戸と申すは、公家　番屋　鍛冶屋　船頭　座頭　傾城　非のもとほり也。下戸は稀なるものと申傳へたり。

すね〳〵しくやさゝめごとする

遣句なり。又盲目ばかりかすねるものなれば用付也。是はくるしからず。

つめりあふ跡いかばかりいたむらん

千話狂ひ扮じたるさま也。され共ねゝする刻は、打とけたる躰なり。

あれはまゝはゝこれは繼父

繼子つめりと云は、すぐれてだうよく成物とぞ。

　氏種性きけば流石に王命婦

源氏末摘花ノ巻に、常陸ノ宮の姫君が媒せしものなり。されども此句は戀にならず。又物語にも俗性を書出侍るなり。

王孫の命婦と云心とぞ。

　破れくるまのをともけだかし

人の名の出たる跡はしにくきもの也。遣句也。人名多きは過去帳はいかいとて嫌ふ也。され共一句二句はくるしかるまじきか。それも名によるべし。

　風あつる月の夜ごろの揚灯籠

あけどうろには必車のあるもの也。風にあたりてやぶれたると付たり。け高きはあけ燈籠の高心に取なし侍る。扨爰には月をせずして叶はざる所なれば、六ヶ敷もの也。車には付合多けれ共、此獨吟には連哥の付合は是非に及ばず。俳諧におゐては人のしふるさぬ事を、随分せんとのみ嗜み侍れば、よからぬ付合なれ共し侍る物也。

　ほには地藏を拜みよる袖

盆の比東山よりのかへさに、祇園の目やみの地藏に、揚燈籠必あるより思ひよりたり。こは地藏にもあるか不レ知。又地藏には盆に灯籠を奉心也。

　六波羅やはら〱かゝる露分て

六波羅に地藏堂あるか。地藏にはさいのかはら、罪人・壬生などは付ふるし侍る。

　八坂のさかに過るむらさめ

六波羅やはら〱といふに對して、八坂の坂とし侍る。六波羅・八さかはつゞきたるところなり。

　弦さしやさしも侍らんほとゝぎす

八坂の邊に弦さしあり。村雨に郭公連哥付也。重詞は三句迄もくるしからず。

　鐵炮はりもめづる卯の華

六ヶ敷所なればさかふて付侍る也。爰に放埒なる付合は侍れ共、斟酌申す。

　垣するや隣ざかひの町つゞき

堺の町に鐵炮張のあるよしうけたまはる。卯の花には垣にて付べし。

　火もとはそれとしるき燒跡

隠れたる所なし。又しろきとは掲焉と書か。物のきつかとしたる心也。それと隠なき心也。知と云字には二句嫌ふ。

　鳴神のおちしあたりは地もさけて

火神鳴に取なす也。雷の落たる跡は、地のさけ侍るものとぞ。

　よはしや思ふ中の染物

地のさくるを、よはき染ものに取なすなり。

　天の原ふみとゞろかし鳴神も
　おもふ中をばさくるものかは　古今

　衣たに中にあるよはうとかゝりき
　あはぬ夜をさへへたでつるかな

ともよみたれば、木に竹を繼たるやうな一句の難もあるべからず。又本哥のとりやうは、前句にかすかなるには、打あらはして付、打あらはれたるにはかすめて付る事とぞ。此句も聊その心を似す。

　かはうすなおかほのもみぢ我泪

染物には顔のもみぢ、よはしには我泪也。涙よはき心又君の御皃ひはつに幼稚なる心なり。おはいかいとて初心めきたるに依て、お文字を好まずといへども句躰による事なり。惣別何と嫌ふ事も、仕やうにてくるしからず。

　新手枕やひきゝ烁のよ

枕のひくさに君の御顔に血のさがりたる心也。又新枕にてはづかしがり給ふ心もあるか。枕祇斜紅の心もをのづからあり。

　もとゞりも恨もとけし月の影

枕のひきくて髪のほどけたるとなり。もとゆひとは連哥にするなり。はいかいの月の句は、むつかしき斗にて、益なきものなり。

　まけしすまひにかてる勢

前は戀の恨なるを、爰にては相撲の遺恨にとりなす也。相撲を名目にはすまひと云歟。

　むすくと鮓をたべぬる花のもと

前句勢ひと云が付處也。相撲取は大なる鮓などを丸かぶりすると云り。其外様ゝの付合侍る物なれ共、古きを除きあたらしきを用んと斗なれば、一入むづかしき。あたら

花をむさと云散し侍。

永きひげにやみゆる還俗

長き髭を永き日とうけて、季を兼侍るなり。よはき事なり。付心は法師が花の陰などにて、むすむすと鮓を喰はふしんなると思へば、髭の長〻とはへてある也。扨は此法師は還俗をしつらめと也。又我身を落たる法師に成ても聞えたり。

あたゝかな比も頭巾を引かぶり

暖氣の時分も頭巾をかぶり居る故、髪をはやしてあるやらん。又いまだそりてあるやらんしれざるが、髭の長きにて、扨は坊主おちぞとしる心なり。

こぞよりなつく木兎の鳥

みゝづくにはちいさき頭巾をきせて興じ、或は小鳥をばたらしよする也。暖な比には去年よりなつくと云詞にて付べし。爰には不斷達磨を仕度所なれ共、打越の心もむづかしければ、みゝづくを付たり。殘念〻〻。

鵙の目は縫しながらに春立て

逆て付たり。みゝづくはよくなれて頭巾をかぶりて居れ共、鵙はいまだなつかぬ故、目を縫たるまゝにて春も來れると也。鵙も木兎もしもくなどにとめて飼類なり。

おとなしくなる殿の若君

若殿のおとなしくならせられて、小鳥すきをもめされぬ躰也。春立てと云にうときと云人もあるべけれ共、是は春立てよりおとなしくなるとかけたるてにをはなり。

媚よきをいかにしてかはむかゆべき

親の心又は乳母、出頭人などの心成べし。

かたわならずはそひはてねかし

前句の心は美女を迎て參らせ度と云を、此句にての心は、美女をむかへんは成がたき事にてあるほどに、片輪にさへなくば、子持くさく共、添果よといさめたる義なり。

なげうちをするも戀慕のあまりぞや

千話のあまりのなげ打也。されば頭にさへならずば、少〻のいたさを堪忍してをあれよと也。

りんきいふをば何いとふらん

なげ打をりんきいさかひに取なすもの也。淺らず思ふ心ふくれて、りんきはするものにてゆげな。されば何いと

ふらんとの一句の心也。源氏品定にもあまり打ゆるべ、見はなちたるもと云。つながぬ舟のうきたるためしも、げにあやなしなどゝ書る也。

　腹をたて誓文をたて名を立て

聞えたり。戀也。餘りたての字多て、軍場のやうなるか。無益の句作也。

　度〻ものゝうするうたがひ

　請人はたゞしからざる宮づかへ

　ながるゝ質やきねが裝束

宮仕とは貴賤によらず、主につかふるを申也。それを神につかふるに取なす也。貧乏なる禰宜にて、質をもえうけぬと也。

　米もたぬ穐のつきうすむなしくて

きねな杵にしてつきうすと付たり。米もたぬは貧者のさま也。又爰も月をせでかなはざる所なれば、隱し題にせしなり。

　かりてかしぐは哀れ粟飯

粟を刈は秋也。米をもたぬ故を、粟を刈て飯に調る也。

　露ときえむ覺悟は臈の煩に

粟飯の付合には、山王の神供・邯鄲の夢・佐野の源左衛門などとふり侍り。前にも申すごとく連哥の付合は是非なし。俳諧の付合の分は、新きをとのみ心得侍れば、かやうにし侍る也。但古きもしらず。臈を煩ふものは、粟飯など斗を喰也。此病も大方たすかりがたきものとぞ。前句重詞あるゆへ、夢にも對して云るなり。

　四方な紙の中の黑髮

前句難義也。總じて獨吟するはわたくしありて、いきにくき所にては、必前句を引直しなどする比興なり。縱へば雁と斗してよき所に、がんくびなどして付句にきせるたばこをするやうの事なり。尤淺間敷仕合なり。既に一句を吐出すと、人の句ぞと思ふべし。此獨吟は三の折より後は、長之といふ人を執筆に頼みてせしなり。是證據なり。扨付心は臈を角の字の心に取成て、四方な紙と云り。頓て死なんと覺悟し侍る故、形見の爲に黑髮を殘す躰也。心ある人は六ヶ敷を思ひしりて、宥免すべし。

　こげばくのうつし心もうかれづま

薄紙は四方にて、しかもこけ色に黑き物也。箔をうつすと云詞あり。うつし心は秀句也。現心と云義か。うかれ出んと思ひて形見を殘し置心なり。前句のは無常の形見、爰は戀なり。此前句猶難句かと覺侍る。

佛師の袖の泪あひなき

佛師箔とていかにもこけ箔をつかふものなり。佛師の妻のうかれ出べきを歎く也。あひなきと云にはさま〴〵心あれ共、爰にてはあぢきなき心なり。無愛と書が戀なり。

繪所の緣はいつしかさだまりて

きりちがへて付たり。佛師繪所と云つけたるが、繪所の緣重詞なり。

杉さうじまで出來る造作

緣つゞきに杉障子あるもの也。必繪を書所なり。定りてと云には造しめたる心にて付たり。此句は取なし也。俳諧は取成付を宗とすべし。連哥のいきは本意ならざる也。此百句は新きやうにと斗心得侍る故、取成の付合をあまりえせず。又いかに取なしを宗とするとても、木に竹を繼たる一句はこのまず。其上每句に取成て、四手〴〵とすれば一寸法師の緣の下をくゞるやうにて、句姿すくみ侍るもの也。うすくこくまじへて付べし。用付さへ一躰なり。增てよき諸の躰を捨て、一みちを好まんは、手つゝの仕わざにや。

引こもる橫川の山は風あらみ

杉は橫川によめり。風あらき所なるべし。されば引こもらんの用意にも障子を作る也。一つの物を分て付侍る躰也。

ひゞこそきれめ少將のかほ

高光の少將の世を遁れて、橫川に住侍る時、帝より御訪ひありて贈答の哥侍る。風のあらさにひゞぞきるらふとの心なり。

かづきせで軒端の荻も立ぬらし

空蟬の卷にやらん、藏人の少將と云人、軒端荻が夫に定りたるとあり。軒端荻もと云もの字にて付たる也。かづきをせずして立たれば、ひびのきれんと也。高光をば藏人に取なし侍る。

目もとの薄庭に亂るゝ

前にも申き。かやうの人の名の次は、必仕にくきもの也。軒端荻・庭の薄と愛しらひて付侍る也。一句の心は君が、こぬ夜は、御目もとの薄を庭に見て、思ひをみだすとなり。塩の目をばすゝきにたとへて云り。

　とはせられぬつらさは月のよを重

穂更ては薄の亂るゝもの也。爰は有そうなる前句なれ共、付のがし侍る。とはせられずして獨寐の夜半をかさねたる心をかすめて付たり。

　吐息となるや我胸の霧

是も心付なり。

　山〱の花待かねてのぼり坂

のぼり坂には必吐息をつくもの也。胸の霧は花待かねたるにて有べし。

　かゞふてのればこしも春雨

輿と腰とをかねたり。のぼり坂の乘物にはかゞむものなり。又かゞめてのれば腰もはるもの也。花待に春雨なり。

　なきがらはすくばりかへりさえかへり

すくばりかへりたる死骸、輿にのせて葬る躰也。膝などをかゞめて棺に入るもの也。冴還は春雨の愛しらひ也。此句守武が流成べし。

　わつと泣ぬるこゝろのかなしさ

わつとゝ云事一句の専也。冷はてゝ扨はなきぞと歎く心なり。

杜子美が驚定初拭レ涙とつくれるこゝろもあるか。

　おもはずもくらがりに見し鬼の面

くらがりに鬼の面を見て、わつと泣やうなる童心なるべし。又鬼の面をきたるものが、わつと云ておどす故に泣躰もあり。わつとゝ云詞が付所也。

　あまり嫉妬のふかき女房

いそさきとかや云草双紙に、本妻が目かけを妬みて、申樂に鬼の面をかり、同く鬼形に出立て、ほのくらき燈火の影よりによつと出たれば、女おどろきこかれたるをうはなりせし也。そのいかれる心誠の鬼と成て、面が顔に取付てはなれず、其まゝ山に入て鬼となりしを、一子に出家のありつるが行て教化してければ、面はぬけがらと

なりぬ。淺間しと思ひてともに佛道に入りと云々。

くはれぬる小指のふしも云たてゝ

帚木の卷に左の右馬頭が通へる妻、妬む心ふかゝりしかば、いかにもして是をなをさんと思ひたくみて、行て云しらひければ、女もえおさめぬすぢにて腹立て、馬頭が小指を引寄てくひ切けり、馬頭いよ／＼腹立て、此手をかゞめてかへりける時、

手を折て逢みし事をかぞふれば

是ひとつやは君がうきふし

女返し

うきふしを心ひとつにかぞへきて

こや君が手をはなるべきをり

とよみてわかれけり。連式に云源氏は大部の物なれば、二句まではすべしと。此百韵には巳三所有。俳諧なればくるしかるまじき歟。但誹諧には鼠のさうしなどこそはへ有べけれ。源氏はよしな。

かたみの鑷子しのぶさかむけ

くはれぬるにけぬき常の事也。指にさかむけは苦しかるまじきにや。さかむけをけぬきにてぬけば、痛ふはあれどもすきとしてよきもの也。歯にてくいきりたる分にては、物にさはりてあしゝ。されば鑷子をしのぶ心おかし／＼。

尾籠にもなるや檳榔の櫛の筥

前句難義也。櫛にはさかむけのあるもの也。鑷子は櫛筥にて愛しらひ侍る。

あふぎ斗は何に餞別

はなむけには櫛・扇をするものとぞ。櫛はとどこほる所をとき、あふぎは逢と云義也。櫛はそこねたれば、扇斗を餞にするなり。されども微なりと云心なり。

小哥をもうたふて通れ能太夫

扇の手斗には興すくなき程に小哥をもうたへと也。餞別には通れと云字に愛しらふなり。

御成のはては跳成べし

能に御成も小哥に跳もことふり侍れども、此百韵書は何かとさはる事ありて、よる／＼し侍るに、早三夜に及びぬ。千句すら三日には滿ものなるに、手間をとりたる也。

いかにもして今宵みたさんと思へば、俤相にせし故、沉思せず。仍て古き付。

　蠟燭も月も日かれる唐門に

跳には付合十も廿もあるものなれ共、皆ふるき故除て、付心は景氣斗なり。

　越後のかみの榮ぬる床

らつそくには會津など付ふるし侍る。越後蠟燭たれもしる名物なり。

　思ふさま人には物をかしは崎

聞えたり。

　さきへはゆかぬ商の道

先へ行ぬとは、物の墓ゆかずもとをりかぬる事なり。商口を取いで侍る。無念〻〻。扨是は重ねてにをはと云か。をしはつしなればかるくする斗也。

　大黒と惠比須は時宜をしくらして

此二神は商を守給ふ也。大黒殿よ先さきへ行給へ、いや夷殿より先へなどゝ、互に時宜をして、終に口の暮たる心也。又大黒は天神夷は地神、殊に時代も隔つべければ、ひとつに行あふ事あるべからざれ共、福神どうしにて誰も云つゞくるものなれば也。かやうの墓なき事をも取合て中事狂句の一躰也。此句作宗鑑が余風なり。

　布袋はいづちおはしますらん

繪などにも布袋と大黒と相撲をとれば、夷殿の行事する事を書り。皆狂言也。是もふるき付合也。

　むづかれる子共を餘りすかし侘

あまりと云字が眼也。又〳〵古き付合也。

　ふしみの雪を分る落あし

伏見常盤の舞に、さむやなふ母御前、つめたやなふ御臺とまふにすがれり。

　馬のくちもち木幡の里にとめかねて

落足を落馬に取なす也。拾遺人丸　山城の木幡の里に馬はあれどかちにてぞ行君を思へば　とよめる余情もあるべし。馬の口のこはきと云秀句也。秀句は和歌の命といへ共、あまり戒力過て、句毎にこのまんはあしかるべし。祇公隅田川のせうそこにも、秀句をきらへりとかや。それも毎句に好める人に向て敎へられたる心成べし。一向

に秀句をきらふにはあるべからず。一句斗をかざらん爲の秀句は、空しき人の束帶したるに同じ。かばかりの事誰かはわきまへざらんや。是は兩公初心なるに依て記す。此次にいはまほしき事多かれど、親類中に急なるばうざの侍る由告來るまゝさしおく。重てこそ申さめ。

　下部のぬける太刀は醉狂

つれ〴〵草に、宇治より具覺坊をむかへに來たる下部のさゝに醉て、木幡の里にて南良法師の兵士に行あひて、狼藉せし事にもとづけり。具覺坊がおしとゞめしか共、きかざりしこゝろあるか。

　音樂は花やもみぢと散みだれ

此古事、昔何にてやらん見けると覺ゆ。されど年ひさにて忘脚し侍る。何れの門主やらん、紅葉の賀の御遊に、下人の喧嘩をして、殿上の管絃の興のさめたる事あり。かさねて可レ勘。

　ぼさちのかずもめぐる年月

音樂に菩薩は折ふしのとりより也。予が果報也。先に申ごとく亡母の廿五廻なれば、聖衆の數に入給ふべきあげ句何のうたがひかあらん。なもあみだ〳〵。

　親をとふはつか鼠がはいかいに
　　ちうとなくをば猫なとがめそ

寛永十九壬午仲春下旬　　腐俳子

歌仙そろへ

元隣

哥仙誹諧といふ事は、そのかみ或人三十六歌仙の名を句毎に立入二折とし、又雪月花など分て發句につらねられしより事ひろごりて、其後は其名を立いれずしても卅六句を連て、哥仙の數の誹諧と云べきを省て哥仙はいかいといへり。それ誹諧は歌の一体なれば、祈禱にも慶賀にも多く催して、神をすゝしめ人を悦ばしむる第一也けれど、時に取て友すくなくして座のみてぬ事有て、事調らぬ様にも物し侍れば、句數すくなくしても速にみて侍るのよろこばしきをあまなひて、今は名匠もおほく此三十六句をもてはやし給へり。其法數は

面六句

裏十二句　十一句めを花の定座とす。八句めを月秋の出所とす。

面十二句

裏六句　五句めを花の定座とす。百句誹諧に名殘の裏に日をせぬに準て月をせず。月有てもくるしからず。

又哥仙の名ならでも、草木・鳥獸・名所・謠等の名、當世の諺をも句に立入連る事侍り。其法は古今和歌集ノ物の名の部に習を善とすといへり。

元隣誌之

寛文六年正月三日

飯野八幡宮奉納

つまで神の供御といひのゝ若菜哉　季吟
くまぬ霞の三季そなふ庭
蝶は舞鳥は樂にや奏すらん
春の景氣にしく物ぞなき
居所はひゆれど愛におほれ月
猿やら岩のうへにつくばふ
釣人は人の様にもあらばこそ
しら鬚どのと誰おかむまひ
鳥井には苺(こけ)むさ〲と霜置て
松もふりたる野の宮の跡
虫の音も哀れ幽にちんちろり
ちろりと露にうつる行燈(アンドウ)
稲妻を化相とさはぐ番所
ちきりき棒を月遅きくれ
肌ぬぎもいさよひはてゝ袖寒し
おくびやう風や吹て來ぬらん

笛ゆへに花散たりとねめられて
　えからでもどるのべの初草
降しきる春のあめ牛おひ〳〵に
　馬もすべりて道あしげなり
猿人よ尻餅つくな杖をつけ
　門出の酒に酔たさうなぞ
さらばやといふもあやなく舌なへて
　あまへて袖にすがるうかれめ
いとしさをくらへば子よりうまごより
　一跡やらんかためする中
まけながら猶も博奕をうつけ果
　あしき友有すえや盜人
月くらき夜半にやふたり立田越
　紅葉みくらす哥よ返しよ
菊にむすぶ露の玉章給りて
　千年とちぎる我命さま
願くは生れ逢度北刹に
　黄なる色ほどすいた色なし

花といへどほんのみ事は金にて
　つくる刀の御代も長き日

奥州岩城八幡奉納
哥仙之誹諧　　宗因

さゝ竹をふる宮人や煤拂
　たゝみのおもて白き御神樂
霜八度置夜の太鼓音さえて
　時は何刻月は半天
秋かぜの吹をもしらず長咄
　あくびまじりのうつかりの聲
急雨や茶うすの上にめぐるらん
　雲こそかゝれ天王寺山
伶人の舞は菩薩の俤に
　江にしづみたるあとの吊（弔）
古のしづのをだ巻粽して
　あたごそ愛宕参あふ中
ちやうどうつ横手に袖や引ぬらん

あれ見給へやわかれ路の月
おさなひを露古郷に捨はふり
　軍亂や身にしみにけん
さぞや無鎌倉の世の花盛
　一二本有梅が枝の谷
山里の垣から棒や霞らん
　ふしぎなかたにみゆる乗物
いかさまに仙の鶴には紛なし
　院のまします御前の池
大原や小原の閑居哀にて
　鍋のしは〳〵ふすほれる顔
持なしの盆報氣成大黒に
　俵の底もあきかぜぞふく
白川の關屋の鼠月更て
　旅ねは露も置枕鏈
盗人を招く袖かよ花薄
　あれたる宿に一人女房
木綿をる機手に物や思らん
　夕暮もとは戀の山跡路
からけ上渡るさほ川なみだ川
　子はいかにとて狂ひ出らん
山にはしりのら猫に成花の春
　鳥も囀り蝶〳〵の舞

奥州岩城平飯野八幡宮奉納

哥仙之俳諧　松江氏　維舟

思ふべき神代や門の松のしん
　樂はなやかにのきの鶯
袞を晴の霞の衣客の着て
　菫摘にとこしの野遊び
月夜影茅花交りの草むしろ
　肱をまけても我旅まくら
懸金のちん唐木戸へ妹向て
　つゝまず語る佗言まめごと
伽羅の名の共も床敷帛
　若衆の縁もむすぶ玉章

月涼し風呂へと誘引水心
　茶の湯よ花よ物わすれ草
山里は世のうきよりも隱居住
　悔しく過しむかし雜談
せめて子の若きに道を學ばせん
　なづくる馬を貝鞍置て
花の使今參りをも御前に
　甫まつりを謹上再拜
何心那智の瀧見る春の空
　荒行なりと力一ぱい
下戸とても付指せずばさかくらみ
　二八ばかりの前髮いとし
金鍔の忘かたれ(み)もおもひ草
　まねけ尾花がもとの心中
かはらめや月の桂の男ぶり
　はしらもつよし里のから臼
煤拂頓て師走の末つかた
　おとなわらんべ嬉し春待
ふる雪の身の白小袖給はりて
　えにしも肌もふれていつくし
書文のかみも照らん筆遣ひ
　哥も女の才耻かしき
下心有が生野の留守見舞
　ぬすまれはせし金山の番
咲花も猶八重〱の城かまへ
　萬億町を返す湊田

飯野八幡宮奉納
寛文五仲秋日　　松山玖也拜

他の人も賴み有明の御影哉
　けふはいけるをはなつ流鏑馬(ヤブサメ)
池水に雁俣ひろけ聲立て
　飛こえ溝や小田のかた〱
俄雨過て事問ふ里の者
　暮る宿かせ諸國一見
咲花に野邊の鶯座をしめて

連哥百ゐん名殘ある春
御夢想の面影きえぬ富士の雪
　妻を思ひのけぶり不斷に
敷たへの枕香爐は夕〱
　ぬれ〱髪のあかぬ風呂すき
涙にていせ迄誰ヵ送文
　今は何てふ貝の一籠
都衆うら珍ら敷浦あそび
　小袖の裾をふくや汐かぜ
出て見る月のあかしのおかしくて
　筆とすゞりのしめる朝霧
板床のいたくも露に古び果
　引捨ぐるまやるかたやなき
旅人の御足を賴む此いざり
　されたる松の陰の擔桒
霧降かしまいりの笠屋どり
　ふく神かぜや冬の事ぶれ
十月の空より急白身番
　熊手に物をおもふ町人
水道にながれもあへぬ蘆芥
　紅葉山よりおちてため池
泥龜もよろづと仰ぐ御代の月
　秋幾めぐりのぼる龍の尾
此寺の鐘の起りをきく暮に
　ふるひつくらし墨の衣手
黑米ももらふて歸る鉢の内
　とし月を經て住る關東
床しさや見し大坂の花の友
　上戸(たカ)よちより霞酌ばや

鳥　　元隣

名と聲は知ものぞしらん「百千鳥
　「雀の字添「雲雀(ヒバリ)「連雀(レンジャク)
春のゝを詠めもあかぬ「繪に書て
　座敷ひろめの「日は定むらし
月影は「うそぐもる共雨は降な

秋は「と夜迄(カ)かせく在郷(ザイガウ)
御年賀に濟(ツ)す借「かねの身に入て
他國の僕(ボク)と子をばなし「つる
うかり「鳧(ケリ)となげくも餘(アマ)る亂世に
あれはそれ「かも知ぬはた雲
「かさゝぎの橋に霜みつ夜更がた
月のかつらの紅「葉や散
「四季共に花見仙境うらやまし
とけしるも嘸むら「さきの雪
のんどりと風もと「きしる春の野に
「火燒も能にまなこつけぬる
雲の上の御番「つとむる夜に入て
いもやす「からすしのぶまおとこ
を(そ)とましきよ所目は鵜「のめ鷹「のめに
やぶれころもや鳶「の身震(フル)ひ
讒(ザン)臣は我非「から時をうしなひて
なべて待か「もめいわうのあき
「つちくれもうがつとない夜の雨に
はへそろふらし作「るなばたけ
いもの子の味は「ひよくもみの入て
月に「こまいとする友もなし
語り「あふむつとも夜かしみぬらし
もはや鳴かとうらむ庭「鳥
餘力(ヨリョク)ぞと思ひ「つくみのもの學び
出てつかへ「ましとやふづくる
捨しをも頭「からげん住わびて
「佛法僧の前もはづかし
「うつら〳〵思ふや君を花を月を
あかぬ名殘は「をしき晩春
古巣へやもどる「鶯軒をさり
塀のおほいを「わしるのら猫

虫　　元隣

「蝦(かへる)ならでますくな哥の友もなし
しばしは穴をでそよ「くちなは
花「ありと女子(ヲナゴ)乗物おりたちて

物しづやか「に九こん酌めり
八重「くものはるゝ夜は月を見る間久し
　身にし「みまなぶ書籍かず〳〵
露程もはしなる方におも「むかで
　そしりはうけし「氏にそだちに
「うつせみの世と追腹を切おほせ
　しるしの木をもうふるる「はい所
若き目もなみだ「にかすむ春さきに
　東風ゝ「のみかやまぬ戀かぜ
下紐もうちと「けられよ雪の肌
　いはゞかたる「はちぎりてもなや
一枚の起請をなどかひ「るむべき
　あま入道もすゞ「む死にざま
月に「たつ紫雲は見るもあなとふと
　「しらみあひたる秋のみづぎは
「ほうふりも今は波間の露霜に
　「もゝほうづきや千ゞにくだくる
物しらぬ身は我「からの物おもひ
　はかなや袖のなみだし「ほ〳〵
草の「いほしりで見舞て悵いひて
　友にも「あふは法のさまたけ
念數「くり無始の輪廻も晴る日に
　西へさそへ「やもりし御木像
神の綱もきるゝ「てふ戀路いかゞせん
　君がにくみ「はありとわぶべき
虫の名の「まつとはなくと月にまいろ
　所望をしてものまん菊「水
うたひまひ「ことかきならす紅葉見に
　山をかゝへてなくや「ひぐらし
祇園會や「かけろふ室に汗をいれ
　味めづらかなまく「はこのもし
月花のなか「めは二月中旬に
　「うんかのごとし野遊びの袖

歡　　　　元隣

しりごみもせよ行春の日まの駒「

花見車はひくも遲午「
朝霞はなさる「のべのだくぼくに
いつ消はて「んかたかけの雪
あるゝ空に月の鼠「の名にしおひて
秋の田畠もつう「ごろもち
草の露かはく「まもなき朝の間に
ねぶ「たながらもなつの旅立
さいあいの名殘は「蚊帳(カヤ)のちゝに過
たもとをひたす涙いく「ばく
「狐馬にのせたやうなる御情に
客を「そとむる稻荷海道
降「さうに雨雲おほふ茶屋の軒
「りんとすだれをまきし晩景
月待や「こま犬のでつくばひて
秋かぜ凉し「神木のもと
すみきれるたゞすの川原にこり「とらん
「をつとせいでもほさんぬれぎぬ
うつり香の「麝香も男くさからで
まいる比丘尼の御前のしやう「〲
水からか味「あしからぬひしほみそ
作り「すまさん例の甘ざけ
たづ「ねこん祭まろうと下まちて
露の「ふすまもあらぬ朝をき
「かもしかや月弓の影にさはぐらし
とつとおく「山あらしふくあき
色おしき紅葉や「きうに散てまし
「猶豫(ユウヨ)もあらず冬になりてき
宿はけふ猪「の子の祝ひにぎめきて
二郎のみか「は太郎までよる
百の哥の風も學「むしなおほみ
夜もあかして「んくるゝ夏(ゲ)のはて
かんきんの「ひようしも毎自作是念(マイジサゼネン)に
後世の爲とてつむ花もし「か
「おほかみのやうな心も雪とけて
「いぬるつまをもとむる春の夜

戀　　　　　　元隣

逢初るよさやなんだの初時雨
　お里がへりの月ぞ寒けき
乗物の内の袖の香風与もれて
　他生の縁としたふ同船
又かたる期はま(こ)み枕別れおし
　遊女に底をはらふきんちやく
印籠の腎薬も皆へりぬらし
　しのびありきにめさへとほ〳〵
しるぶんもふかき情に酔つぶれ
　なるきぬ〳〵のかねもえきかず
とはぬ夜はねるも中〻氣楽にて
　月もはづかしそふ〳〵の中
玉章はわりなふ雁に書つけん
　待かねてさぞ消ん露の身
おもふとは皆迄いはぬ先にしれ
　あたではつめがはなれさうかよ
花見せんと君がささふに琴をやめ
　かすみの衣ゑもんたしなむ
よめるへき浮世の春を下待て
　心死なさぬ八十年のうば
鈴鹿川すきのわさには鉦を忘れ
　鬼をあざむくめもなみだぐむ
ゆび切にちかふ地ごくのかま懸て
　わらべごゝろののかぬ若衆
だきしむる千話のいとまに乳をさぐり
　くらがりに蚊屋たゝむ別路
殘月も名殘おしうてたつ旅に
　あたゝめざけにすゝむ付さし
なじむからへだつる事も露もなし
　けはひ道具をかりて質物
逢ときも男泣するせつはくに
　ふる雪のごとけぬこゝろ根
下紐の花の紐にはあやからで
　春雨になぜなみだまけざる
思ひきる分別時も遅き日に

一期後家てはおかぬ一門

日本國盡誹諧（次第不亂幷異國）　同

おもひやる月にはせばし日本國
まくらてうたふから歌の律
長き夜も汲あかしてんちくえふに

五畿内五ヶ國

つき山しろふ雪ふらばふれ
氣晴しやまと抑開く學問所
まつとしきかはちなむ友こい
ウ
約束は黄なるいつみの底かけて
壽繪さへならふ中そせつなる

東海道十五ヶ國

御佛のおもはくいかにはづかしや
いせいもまうにのゝしれる僧
高座をもたゝく法事のしまひ口
やりし行燈をはり直してや
月をまつ夜遊のみかは虫ふかん
野をとをとをみふみちらす露
時付はうき旅するか霧をはらひ
甲斐〳〵しくもわたす文ばこ
云いづる仲人口に花をさかせ
かすむ身のさが見ゆるしてそふ
むさしやとおもふ病はいつのはる
次第によはるなりあはれらし
上戸しもつふさるゝ程しるられて

上總は此中に兼たり

ひだちのいるもしらぬあだ言

東山道八ヶ國

たまにあふ身の程忘るけいせいに
みのなき文をやるもつゝまし
おもひふりひたすらすれと半天に
わき妻持にし名のみ立ぬる
元來かうつけしむすこいかにせん

下野は此中に兼たり

他人にみちのおく意さづくる
しはうては心の月も益ぞなき

北陸道七ヶ國

「わかざるはうき秋の池水

ウ　ねこ「しつゝ植にしはすの昔枯て

越前越中越後此句に兼たり

「いかゝひすいの寒さいとへる

花の雪「のとかにたまるかんざしに

宮女かくるゝ春の山「さと

山陰道八ヶ國

朧月しのぶかた「にはえてなれや

かたきをうた「んことはいさめる

三　そば切の粉をた「しませせるこねかけん

またこよ客の「いなばうからん

問丸となるは「うき世のすぎはいに

「いつもやかまし浦ゝのなみ

さすらふか道のとを(せ)「いは身に入て

うきかき「をきを月もしれかし

山陽道八ヶ國

「はりまはすすかきもすます秋暮て

と「みまか(さか)さりとなれば玉殿

楊貴「妃もをさまる世からむかひとり

備中備後ご吉備の一句に兼たり

「あきあかぬ中やめん／＼の妻

思は「すはうち任せしなやせ世帯

よる夜「なかともいはず留す也

南海道六ヶ國

ウ　月も耻よ異見「きいても博奕打て

盗人はあく(あ)「はちもすさまじ

あ「はたゞし又あふ坂の句をつぎて

なみだもほさ「ぬきみの送行(サウアン)

毎夜「さの花をやりしをおもひ出

春夢(ム)にむすふあと「さきの事

西海道九ヶ國

名　は「ちくことのねやもさびしは長き日に

筑前は此句に兼たり

目をあをふ「せん友はあかさる

石菖を是非「しう心か分やらん

「日にむかふたる庭ぞ手びろき
「大隅といふは天地のいぬるかも
風波に舟の行「さつまがた
串のはを引「いき斗絶入て
香の圖「しまひするや禮拜

是より異國

我も「かうらいかうを待しん／＼に　高麗
「おらんたぬきはいねよ古鳥　ヲラダ
ひとり見る「すむ月かげはうそさむし　ルスン
をしむか「うちに秋はくれゆ　カウチ
ウ色ふかいもみち「やくつる庭の面に　チヤグツ
「りうきうむしろしく苔席　リウキウ
名にしあふ「南蠻酒の遠來に　ナンバン
心いた「つたむこいりぞする　ダツタン
のぞきしもえ「ぞ忘られぬ花の皃　エゾ
かきほの松を「まつ前うしろ　マツマヘ

（校訂者曰、大正十年十月十八日、麥人氏の好意にて竹冷文庫寫本を借覽筆寫せるものに據る。）

惣本寺
誹諧

中庸姿（つねのすがた）

高政

誹諧惣本寺

日にあやし麥藁一把飛螢
　次郎ま次郎吉夏草の陰
白い雨軒のかど屋に玉なして
　風に音ある犬の小便
とらはれて石淋なむる古狐
　七日塩斷しるしと思はん
隙入て大臣何かと暮の月
　膝骨いたくきざはしの露

ウ

秋霧に神はすべらせ給ひけり
　とろゝや摺らん天の逆鉾
下化衆生皆精進日の事なれば
　東北院に内證をいふ
大かたは葬も時合の鐘の聲
　寝にゆく烏すぐに擧屋へ
持病の纏まちん粉にして飲すれど
　木賊も鮫もなみだなりけり
あかゞりや眞菅の笠に竹の杖
　十年切て故郷の月
天津鳫遍山遠く中のぼり
　後室の子分此たひも露
御遺言花に相違のなきやうに
　さて又出羽は熨斗添て春

二

鹿の角落て最上の箒をうつ
　仕組の野邊に位あらそふ
十百韻たばこの煙立さらで
　青暖簾の表紙かゝれる
身はあたに金泥うすく成にけり
　兎の足を歩ぶ通ひ路
大巳貴八十の神風吹とぢよ
　重波よする池のかは針
龜の甲うみ血抑れて流るめり
　浮木について蠅たかるらん
鳶口もさてはかうよともちをぬり
　肌着ひとへの見よしのゝ奥
月今宵すゝ吹風の鼻聲に

思案かはりて槇の葉の色

二ウ

お年といひ袖に過たる露時雨
見そめて七度かはく腎水
かるもかくふす猪の床の中二階
ほこりまぶれに天狗あれけり
虚空よりことはりにやる雨むかひ
おそなはりたる四つのかり物
胎内にきのふ宿札うつたるか
斯(カヽ)る貴人のさゝら三介
忝も普(譜)代の後胤水仕(ミヅシ)の朝臣
所帯はいまがはじめ成けり
八雲たつ出雲に親の恩をしる
麓のちりひちよりなりて釋尊
方便の月に花ふむ鳥箒
氣ゝに應じて一燒の梅

三

久堅の天神囲ひ初賣に
枕言葉の殘るさらはや
せはしない戀しらすめか呼に來る
よしや一太刀焔魔うらみん
張貫の文函(ブンコ)の蓋へ亂れ入
しみといふ虫玉と見るまで
穴のあく蓬萊宮に着にけり
さぐり足して三千里去ん
くといてはなるてふ桃の今年より
さかづきなげてあそびとる也
半日の客の二藏か春の夢
育(カヒ)立の月つゐにゆく道
朝の露もとのしかたはわるけれど
又色かへてあつかひの山

三ウ

疱(イモ)の神南に去鳥の聲
緣遠うなるわかの浦波
かきつもる藻屑(モクヅ)のみして耻悲し
命ながければ砂にほさるゝ
上(ウハ)塗(ヌリ)の竈(ヘツイ)の山の小夜嵐
松はもとより蕨練るなり
中の君雪の詠の御時に

三幅對の夢の夕ぐれ
つきつけにあふは別れと知ながら
さすが凡夫の鐵玉の露
地獄の月目連たづね給ひしに
ほとけ教て借錢の秋
花紅葉娘あまたに生れ行
おもひのうは着八丈が嶋
名
中むかし銀座のかはす浪枕
鴬のつゝぎの刀ゆるされ
をく霜の拂ひも果ぬ無禮講
ある時くれの響くそば切
何風の吹て佛の臺所
たすきがけにて貧女きませる
利錢かる夜の衣を返してぞ
鼠の内裏かよひぢの末
御車の油筒までねぶりたり
鳥羽白川の棚さがしする
秋風や東寺四塚鍔目貫
廿日あまりの月をふるへて
今の世のすさまじきもの小分別
内儀かへつてつれあひをかむ
名ウ
丙午晝の契も絶ぬべし
左へ繰を子共めが見る
布袋是ぞ辯のはじめとかや
おもへば伊勢と紙屑買と
かたそぎのちぎのおもりはかはれ共
ゆきあひの間に人やぬくらん
こきまぜて花にいけすきするすみや
珍重ゝゝ珍重の春

鮨鮒やつるは五輪の下紅葉　高政
小篠の雫塩水の露　如風
蔵土嶺にくだけて月もなし　同
役にかゝりて猿叫ぶ也　政
握り食稽のかれ葉に包添　同

霰丸して軒にたばしる　風
學寮に耳そばだてし折節は　同
自剃に殘る跡の一すぢ　政
出ていなば親に不足といひやせん　風
負れてのきし八重の汐風　政
臺座後光空しき戀のうつせ貝　風
抄子の網にもるゝなみだは　政
思へばの溫飩豆腐の下こがれ　風
何とぞ氣相かるうして月　政
重ね着の鶉の床をはなれかね　風
小盜に入ル野邊の夕露　政
もと是に一季おりたる花筵　風
奥樣風をふかす高東風　政
名
蝶足の夢かうつゝか但又　同
戻子の戸棚のさよの中山　風
賣物と札付てをく甲斐がねは　政
信玄公よりあはうばらひに　風
座頭の坊所ゝにさはがしく　政
風に圖竹の音そよぐ也　風
をのがねぐらもとむる迦陵頻伽鳥　政
極彩色のゆふだちの雲　風
御勘定坪割山の峯よりも　政
松杉檜の木出さるゝ月　風
其比はあさなひ姿と三輪の神　政
八百萬代の舞子して露　風
契りをかん袖さへ伯父の裏借屋　同
四五匁ほど今宵つられて　政
色外の枕にあまる後むかし　風
さりとはこれは是は過分や　政
鹿嶋立けふは日和の花の山　同
捴而學句珍重の春　風

隱口のはつかなりけり藥喰　高政
杉箸寒き二本の里　春澄
今朝見れば霰栗石玉敷て　同

過にし風や下踏にはさかる　政
行水に立ぬ日はなし千重の波　同
ほこり仕事や荒磯の露　澄
砂ころび蚕の子共が袖の月　同
みいらにかけて衣擣聲　政
ふつて見るおもひの夕瘦こけたり　同
痛や澁とはつはりなるべし　澄
名は戀によごれたる世の胸前垂　政
楊家の深窓にくゝめられしか　澄
團扇持蠅拂ふてぞゐたりける　政
けふはなごしのおほへいな神　澄
城下に行あひの間の夏と秋　政
露と手かけとどちらから置　澄
ないてくるある夜嫉妬の蚤　政
繼子つめりに月ぞやつるゝ　澄
舜の尻いざ立よりて見てゆかん　政
神農つたへし痔の療治あり　澄
花の露木葉衣にへばりつき　政
藤のさき織余所いきもなし　澄
二
束昆布ノ塩をふんだか浦の春　同
幾重の霞いさといはふて　政
都をば出家かた氣の立しかと　澄
犍陟駒を定りでやる　政
指紙をいそぎ飜譯ありければ　澄
むかしの機根四五寸四方　政
世の中は豆腐一丁ねぐさりて　澄
土鰌のいのち夢か現か　政
猫の喉業平かよひ給ひけり　澄
戀しき人は爰にぜり〱　政
物思へば矢摺でおろすぞく也　澄
敷たえの革鋪團涙かはかぬ　政
腰ぬけの姨捨山に照月を　澄
知行盗人秋の初風　政
ウ
借屋賃済さぬ恨葛かづら　澄
留主に二三度あたの大野に　政
はやり醫者あしたの原に呼かけて　澄

かみなり爰によはるはつ霜　政
夜を寒み水風呂飛出て鴛ぞ鳴　澄
氷柱の枕内の女子と　政
鼻たれめいつしかけさの聲がはり　澄
わかれの咳氣うとましの世や　政
釋迦如來溫飩一桶とりよせて　澄
賭に柱の穴くゞる月　政
虫喰の哥を讀たる證據には　澄
小鮒いけては山の井の露　政
水棒の長等に花のかげ見せて　澄
本やら末やら春のけしきを　政
先に立て二子の雉の歩みゆく　澄
身に添ふ病入野に有べし　政
草に霜利に利をかけて置時は　澄
年切かへて庭の白菊　政
天津鴈鉄の札こがねの札　澄
にぎりを入て王宮の月　政
其高さこぶ食籠の玉塔に　澄
ぐり〳〵の手の灰よせて後　政
夕にはいぬごとなつて野にさはぐ　澄
熱もこもれり風もこもれり　政
化雲のえしれぬ小哥跡消て　澄
きは墨つくる富士は物かは　政
信濃なる乙御前山もありといへば　澄
そゝのかされてかつぐ麻衣　政
つれて行荒男の海士が袖の露　澄
沖津白浪口請にたつ　政
人魚殿此脉にては千年も　澄
蓬萊方丈ゐいあんか來て　政
先ほどの頭巾のありか尋行　澄
雨氣にしめる山本の雲　政
吹風の陪爐にかけて飛螢　澄
赤手拭の宇治の橋守　政
ちはやぶる親仁かたには住吉を　澄
世間に耻て戀忘れ草　政
出ていなばさられたやうに云やせん　澄

いまのにくさも醉がさめたら　政
下ふしの花見に乞食夢に風　澄
身にさす漆八重霞月　政
つかまゆる抄子の雀轉りて　澄
遊行の隅や住よかるらん　政
名
古持籠とひくる人の言種は　澄
此せがれども不便に御ざる　政
うば玉の黒髪切てなげ付て　澄
夜のちぎりのわけがまだるい　政
葛城やわたしも果ぬ揚錢に　澄
勅にしたがひ立出されけり　政
味噌部屋を地より三尺築あげて　澄
鼠のさとに日傭恨る　政
平相國いまだ御ためをいはれし時　澄
祇園精舍に菩提もとづく　政
しべ箒浮世の塵を拂ひ捨　澄
死人ほどけて野邊の村露　政
ウ
朝寢晝寢時〻起て友鶉　同
借りにだにやは君はこざらん　澄
さしあひてたとひしばしはわかるゝ共　政
つるにはおなじ蜂の臺に　澄
さるによつて蜘は誓ひの網を張り　政
迷へば闇に小行燈をつる　澄
ちりて花こねたる土となる物を　政
珍重〻〻大釜の春　筆

春惠

四條紀瀬やさきかへて鰻賣
えふごに夏をながす白波
腰切の麻の狭衣露ちりて
千種は色に成人したり
今爰に敵をうつて下り月
鎖頭巾に烼風ぞふく
玉章やかけてきつらん男立
春日の里に小宿もとめて
なじみの中燮に付て去ぬべき

蚤がかよふとかねてしるしも
手さぐりの枕を越る床の山
　どうして杖は有明の月
天津鳫いで物見せてくれんとて
　ある夕ぐれに天狗つれ行
おどろくやおろせがもらふ花にかね
　今出さかつた草の若萠
つくま川春行水の性つよし
　鶏飯をあふぐ君が代

二

あかゞりもきれはなれたる關の戸に
　夕ゐる雲のへだつ前だれ
郭公こも僧中間出けるか
　人あやまつて軒の橘
そのむかし井手の大臣無分別
　かはらけとりし物日なりけり
皮切のあつき泪のきぬ〴〵に
　跡に殘して戀のかたまり
いたはしやさすが名を得し吉野葛
　その身は土にふかくほらるゝ
月今宵漢とも見えず万右衛門
　小棚の時雨あらそひて露
彩色のふるの神杉うらがれて
　薄鉢淋しくいはひそめてき
大さはぎ客立澤のさゞれ石
　單羽織の袖に浪こす
二三人花のしがらみ幕はなし
　珍重ゝゝゝゝの春

正長

色もなし松はもとより板天神
　おとがひの髭村雨の露
仰向ばくすねに月や曇るらん
　風にもまるゝ軒の竹べら
ふくら雀脇にはさみて九寸五分
　蛤化して廣袖を着る
手本紙見かゝれ出て加賀女房

入道の戀聟あがりより
ひや食にひかれてつらき後髮
わらぢはく間の夢の俤
竹の杖つきもならはせ給はねば
荷宰領殿茫然として
矢立の露誠や楚國のかたはらに
二ッの石に一念の月
助言ゆへ涙の袂も更にけり
つめられし尻あらしこがらし
不慮の思ひあちらむく間に歸花
博奕の手口やしれぬ浮雲
俄分限所を去て郭公
文盲にして山路くらしつ
岩が根の枕よすがに雍て斗
苔の衣や汗臭ふなる
心なき身にも亂るゝ手水の粉
鼠はあれて夕暮の秋
折ふしはまな箸とつて月の雲
露を置そふぬれ紙のうへ
鬢撫て茅原の末をわけ行は
かげま中間と千鳥つけけり
家かふてもらふ泪の濱ひさし
江戸からの狀八重の汐風
しるべせよ跡なき雲の世の噂
一先宿を遠山の花
せなかに春前に孟子を懷抱へ
賃で綾織鶯の聲
川西にあとの季までは雪消て
珍重ゝゝゝゝゝ

政定

きのふ見し花の枝折や魚の骨
杖をとゞめて是春の山
能太夫あふのく空や霞むらん
淨瑠璃初段朝日いざよふ
人皇より十五夜の月影うすく

文字さだまつて雁の一列
外科筥あけて薬の村紅葉
　忠度かいな何と御ざるぞ
枕引過るは夢の中なれや
　無常のつかひ温飩をいそぐ
共かた地菩薩もこゝに女客
　鹿子の打かけ赤色赤光
調伏の祭はじまるねり物に
　羊羹とつてなつきをくだく
折遂に思ひ切つゝ世をうらみ
　猶山ふかくちか道をゆく
いろは付名所の月を懐に
　いくたび招く會の小薄
名
片鶉かけまとなつて待をらん
　脇つめ羽織裾野戀しき
ふみ延す足柄山のそなたにぞ
　棺桶われて雲の埋める
松ふりて寺地斗や殘るらん
　志賀の都のかくし女房
一期とて髪はやさする丸太舟
　眞薦の灰よ沼にまとひき
五月雨に笊籠の底の水越て
　山郭公木戸番がなく
きつい奴旗本風に行月の
　宗傳からちや大菱の露
見せの先尾花すらりとぬいて見る
　その子が乳母はどこゐたぞ秋
繪草紙の四手切かけて物狂ひ
　やすい園や闇に殘せし
佛の髭の剃屑花のちり
　珍重〳〵菊の下萠
是〳〵礫大佛の鐘花は盛　定之
　もとすゑ萠る五倍子の木の山
雲霞うがひを流す水落て

なまぐさかりし跡の白波
片かげの船飛脚はしれば月も又
　うすに宿とる一夜さの露
玉篠や本多を招(マネ)く秋の聲
　赤熊(シャグマ)かかして草の葉の色
唐櫛(タウクシ)に野邊の薄(ウス)霜わけゆけば
　なき母戀し菜道もつはら
又光る雲井はるかに落し文
　押入あけてうき名かくする
みちのくにありといふなる留主に來て
　日數へぬれば萬小づかひ
忽廻向中間(チウゲン)ひとり是をなん
　あとへさがりて舟こそる月
雨方へ荻を相手に松の聲
　いはうきはうに袖の下露
名
忍ぶれどつるに廣がるかな遣ひ
　あくる日もとす上代の戀
されば湯女(ユナ)驪山(リサン)の雲につゝまるゝ

　右はル つ虎の皮しく
丈六の佛ゆふつけ鳥のから衣
　さては現かあふさかの關
岩かどに膝(ヒザ)すりむひて町送(ヲクリ)
　かたられてきて聞る小男鹿
床入に嘲しはて逃る秋の夜は
　隣の枕背(セビ)あげて月
よい業いたくな鳴そきりぐす
　なげ銀の露水筆の間
共内來(コ)ふ草履なをせばはつ時雨
　つゐに濟さぬ嵐こがらし
料理鍋(なべ)三つの鳥のなくなべに
　酒(サケ)しほの波枚倉の橋
近江なる山田のおろち花に來て
　末の人間珍重の春
三位小坊(コバウ)櫻は暴花(カセ)に顯れけり　　一方

左の袖をひろげてぞ春
湯熨斗釜霞たゆたふ風過て
板の間洗ふ水のしら波
月に影しなえの砕く瀧津川
朽木の柳撫付てちる
頼朝や浴衣ひとへの秋の暮
昔の鶴を勝立の露
夢なる昔仕合直すかたほなみ
是ほどまでに泉郎のかゝへ子
戀しりのお僧と申つれといひ
くぜつ積つて三方論議
内かたへはすはのちぎり変名立
唐木綿に涙をそむる
さゆる月青葉いたう小夜更て
場銭を繫ぐ雲の幾筋
花をふんで粘箱高くよぢのぼり
綠もわかき嶺のわり松
名 行平もまた智恵付の春なれば
髪剃揚る十二のつぼね
腰張は四季を寫して古枕
菜花の夢路欠落の跡
閻魔王いかにとがめん拂帳
鉄の羽の鳶口の者
ひた甲頭巾に風をおつふせぎ
方便をかへて一汗さする
よはうても文逢事のかたければ
浮木にすがるお龜こちよれ
大井川小石をひろふ袖の月
嵐の山や合羽ふく秋
飛乘のすがら尻なる男鹿鳴
仁田の孫四郎かはふと
洞穴の下藏ふかく入にけり
昏燭かすかに法の行ひ
花の色玉子の世界見すかして
珍重〱〱〱の春

尾州小花澤　清風

何三夕火箸とふたり冬籠り
　鼠おさへて影寒き月
赤貝の塩吹嵐烈しきに
　袂こえなん生姜酢の淡
ひんとして鼻の穴ゆく松の末
　毛ぬきにかゝる天の羽衣
懐やなつとも盡ぬ鬢鏡
　おもへばかたみむつくりとして
かく斗よいかた氣より立別レ
　いなばの山にのほる高足
彼岸を縄網に引瑠璃の壺
　生死の海の鳥おどし也
眞葛原倩猫を案ずるに
　三美線さはぐ烌風の色
酒になりすましたる月さればこそ
　天の河原を越て假橋
花ははや白い学ごけに移つたり

名
　中將姫になるゝさほ姫
賣初や是ぞ輪廻の蝶つほね
　おもひは流轉三がいの藏
小手一挺わたらぬ鶴もあらばこそ
　鬼醉退治の霞たばしる
奇特酒を十府の菅薦七八杯
　さて地黄丸君を寝させて
銅人形かちよりぞゆく浮世町
　ほどけばさん屋の野べの紙屑
請取て段左衛門が革葛籠
　つじわう丸の守り曼陀羅
左につく胎藏界の竹の杖
　金輪際より野送りの月
きかぬ氣のぬけば露ちる九寸五分
　礎石に廻る揚謡の盆
我戀は箔の幟子常の帶
　扨谷川の洗ひ物屋に
峰の花樋口の次郎鶯をかく

珍重〻〻珍重の春

春立けふの一首や貫之　越前南岡　鷗一
七曲の玉ぶり〳〵にして　高政
唐獅子の四足に雪や殘すらん　同
小柄にうつる朧夜の月　一
黒檀の雲かさなつて是非をわかぬ　同
喝と吐出す山はるかなり　政
息杖や誠の道を示すらん　同
兄弟朋友鶯やらふもの　一
會席に藪醫者斗見えざりけり　同
家にも晴にも衣がへうき　政
心地よい夢にありしを郭公　同
さて十八年待よひの雨　一
請人やあかぬわかれに大涙　同
たしかにかは(疊)す言ぐさの色　政
臨終まで曇らぬ月の夕嵐　同
眠るがごとく水晶の露　一
冬至より八旬に餘る花咲て　同
隱して座する腰の青柳　政
名
門の春くつはがしほる袖の雨　同
かたみに殘す三味の糸ゆふ　一
庚申待忘るゝひまも有なんと　同
目口耳までふさぐ通路　政
天津風雲の立まひごみほこり　同
日傭仕廻て洗足の波　一
暮の月またせておいて返事かく　同
是に彌勒の思ひ草有　政
霧不斷の格子のぞけば立姿　同
髮は兵庫に淡路嶋山　一
つゝら笠塩なれ衣下女ひとり　同
茶屋の書出し藻屑もてくる　政
ウ
冷汁の中にまじれるつれぞとて　同
かりに顯れたりし片口　一
朽木の柚けすがごくに失にけり　同

一筭なぐる谷の梯　政
ほれてくるやうの秘密の窓の花　同
珍重ゝゝゝゝの春　筆
哀とおもへ三疋の猿山櫻
高政
高根の煙たばこくふ春　信徳
村雲半氣逆の風あれて　如泉
時ゝ鳥の自慢囀る　仙庵
すね押に鑓をたふす庭の月　定之
火吹竹ちる篠の葉の露　執筆
箱根山銅壺に虫やたぎるらん　徳
雑巾いたく波のよる見ゆ　政
蘆小舟破れ袴を引捨て　庵
鴛のつるぎの朱鞘はげたり　泉
こびて住生田のおくの連子窓　政
道さまたげの拾ひ學文　之
いにしへの野郎通鑑を押ひらき　泉
妾丁凡がくゝり楠露　徳
暮をまつ牛の集錢は床なれや　之
石皿出る山の端の月　泉
花の塵柴のかけ井をさらへしに　徳
あるひはわかき蕨縄うつ　政
時は春伯夷叔齊出及もなて　庵
名
方七十里猫を追ゆる　泉
海犬は遠州灘に汐をふき　政
消石の橋を雲に巻こむ　之
いづかたに旗駕籠かへて火の車　泉
文ことづてんと無の一字かく　徳
我戀は思邪上下略　之
ねちみやくしたる君にぞ行ける　庵
きかしやませかほど佗言中のに　徳
雲に穢れてきのふけふ月　政
鈍色の毛衣きたる天津鴈　庵
遊行の下葉萩さきしより　泉
今相が心づくしの夕哉　政

ちとお出やれと公家のよび聲　之

門（カド）の外板輿あげて行過る　泉

納（ナ）豆（トウ）茶袋春ぞ來ぬらん　德

かみ樣の詠の花の珍重は　之

遊ぶに似たりぼんぼりの蝶　庵

誹諧破邪顕正

誹諧破邪顯正

予田舍より上りて新在家わたりに小宿を取。暫逗留仕けるに。友どち二人三人かり來りて。樣〻の咄をするに。先連誹の物語とり〴〵也。連哥はむかしにかはらぬといへども。この比の人の好る風俗。大かた誹諧に似たり。めん〳〵たしなむべき事也と云。又一人の云。何事も時代にかはると云ながら。今程世にもてはやす誹諧は。宗因流とて興骨けなる事のみ云ちらして。新俗下劣の言葉を好み。道戯を第一として。人をおかしがらするのみ也。就中取分。かゝる異風の誹諧有とて。一冊の草紙を取出せり。外題を見れば。惣本寺誹諧中庸姿と書て。作者を見れば。惣本寺と有て百韵。是高政が獨吟と見へたり。次に高政發句にて哥仙誹諧あり。脇。信德第三如泉仙庵定之五吟其次春澄春惠正長政定定之一方清風鷗一如風彼是惣本寺高政を相手にして編立たる物也。ねられぬ夜半の耳慰に。作者〳〵の風俗を。友によませて聞けるに。いかさま此作者ども。初心のやからにはあらず。わるしやれにしやれたるかる石のごとし。是近年元日每の三物に。惣本寺引付とて板行し。彩しく放埒を云散す。荒誹諧の寄合なれば。重て見るべき物に非ずとさし置けり。其時一人の云。我等初心の者なれば。古風新誹のよしあしわきまへがたし。但。當風がよきやらん。宗因〳〵とて。京大坂江戸に渡り。今旣に日本國に流布し。大形此風にかたぶきぬ。それ故古風をあふぐ誹諧士。當風に吹せめられて。片角に日ばかりうごくやうに見え侍る。さればこの比何者か仕たりけん。當世のすたり物。隱元の墨礩。貞德流の誹諧。鎌倉鬧右衞門とかけり。當時宗因流をまなぶ弟子。數多ある中に。殊更すぐれて相見えしは。江戸は不知大坂にて。阿蘭陀西鶴。京には。惣本寺半傳連社高政。兩大將として。似船。常矩。などゝて其外。一騎當風の手たり共。諸國へ廻文をまはし。同類をすゝめ。わけもなき誹諧に。百句の內七八十點長一二三十もかけて。初心のほめそやし鳴渡れりとかたる。此咄をきくに。けうとく胸おどろき。そら烝敷口をとぢて閙居たり。又一人の云けるは。其誹風のよしあしはともあれ。何とさし當

て惣本寺といへる寺號の額をば。何方より御赦免なされけるぞや。連哥誹諧の受領には。殊の外新しき事也と云。一人の云。御公儀よりゆるされたるはしらねど。去年の夏。大坂宗因を。高政宅へ請じ。一會有しに。「末茂れ守武流の惣本寺。と云發句宗因が仕て。挨拶仕たりとて。其よりいよ〳〵同類雲霞のごとくあつまれり。信德。友靜。如泉。など云者は。隨分貞德流の正道を好みて。一方の誹諧大將とも成べき器量なりしが。かれらも皆惣本寺の末寺となりて高政和尙に相したがふと語る。其時かの田舍者。以の外に氣色を損じ。扨々左樣の事我初てきけり。惣別宗因と云ゑせ入道。第一紅毛(ヲランダ)流の張本也。予。連歌の折節は一座をもならべ。あひしれる者なれば。用捨をおもひ人そしれども口をとぢて居けるが。連哥を捨。誹諧になるさへうは氣ものとおもへるに。剰誹諧の邪流をすゝめ。數多の初心をまよはし。無法無慙な云散す。言語道斷の曲事かな。一言のあやまり多生ヲ引といへり。宗因梅翁入道たしかにきけ。延寶二年の比。蚊柱の獨吟して板行し。初心をまよはすゆへ。非言しぶうちわにてうたれ。返答一言もなからず。其百韵を見るに。誠に句毎の不埒。用付同意。新俗異風。たゞ無方放しのめた前也。初心のやから其あしき風俗をしらず。只口がるに詞つゞきのおかしければ。是ほどの手本はあらじと口まねをする也。よくまねおほせてさへあしきに。眞似そこなふ故いよ〳〵邪道になれり。人の誹諧のよしあしをもたゞすほどの者なり。殊に連歌士なれば。定て物しりならんとおもひて。何事のあやまりをいひても初心それを手本とす。たとへば。火事を見ておもしろしとて。宗因が小屋をやきて。もし隣家へ付さうならば。よきほどにしてもみけさんとかねて拵へ燒けるに。折ふし木のは天狗共見物して。魔風を合力する故。けさんとあせれども力なく。いづくまでもやけ行がごとし。宗因今はくやしからんと思へば。やけつらこりもはてず。烏呼(をこ)の高政が。惣本寺と云額に發句仕て下されよといへば。まかせておけろとかる口にうけあひ。「守武流の惣本寺と云發句は何事ぞや。年にこそよれ。八十におよびて。若輩といひひようきんといひ。言句にのべがたき外道也と立腹す。

●一人の云・惣本寺と云事・高政を人のさみして道戯事とおもへば・近年三物に場はれて板行し・又かやうに。誹諧中庸姿など云夥しき撕(マヽ)判を出させ。諸國へ賣ひろむる事・いかにとがむる者なければとて。あまり上をしらぬ傍若無人の無法ものなり・かやうの事はかり初ながら大事也・御公儀より御せんさく有まじき物に非ず・空おそろしき事ならずやと云・いかにも尤也・中あぐる者なければ子細をしろしめさぬはことはり也・外道の根元をとくときこしめしなば成程御製(制)禁有べし。それをいかにと云に・是誹諧のきりしたんと云物也・まことのばてれんのごとく・國の害をばなさぬとおぼしめされんずれども・佛法の外道。神道の外道。更にかはる事なし。かれらは此國神道の外道也・必日本をほろぼすべしと云。其時一人の云・左様にこと〳〵しくの給ふはまことにや・とくとその子細をきかんと云・かの夷中者。さらば初心の黨やすく合點の行道理をもつてかたらんきゝ給へ・かくいへばとて・宗因・西鶴・高政・等をそねみてわたくしにいひおとすには非ず。神道の根元をなひがしろに口ばしりて・日本國皆邪誹になれり・もし御公儀おそろしくおもはゞ愚言をいひとまるべし・其子細末〳〵分明也・されば誹諧の發り・先立好士のいひひろめし書物どもとり〳〵なれ共・道理をば更に辨へずして放埒を云散す也。夫天竺の靈文を唐土の諸賦と仕・唐土の詩賦をもつて我朝の哥とす・されば三國をやはらげたるを以。大に和ぐとかきて大和うたとよめり・と白樂天の論にあり・此文言人間の作に非ず・住吉大明神の神託也・うかと心得ぬれば何事もたはごとになれり・和哥灌頂・神道灌頂・と云事あり・是にあづからざれば神祕のまことを人のしる事にあらず・かくいふ我もしらず・然共太神宮岩戸にとぢ籠り給ひしを・八百万神なげき給ひ・神樂を奏して舞給ふ・其時面白やとの給ひて・和光の御かげ顯れ・日月出現仕給ひ・常闇の國二度照し給ふ故・今の世までも日本はひらけたり・其神樂と云は和歌也・されば神躰とて定れる躰なし・和哥を以神躰とす・此和歌二つに分て連歌とす・是則二柱の神躰・外宮・内宮・天地・陰陽・日月・君臣。父母・の妙躰なり・さるに依て・上の句も下の句も・一句〳〵のひとりたちせね

ば。連哥と云物に非ず。天は天。地は地君は君。臣は臣別〻の各式をあらはす。此わかちなき時は天地くらやみ也。然るに宗因。連哥勅宣の新式かつて辨へず。其證據は。宗因が獨吟の卷〻を以て見るべし。殊更當風邪誹の輩。連哥も誹諧も道理根元を露斗もしらず。皆無心所着の狂哥也。連歌は詞花艶葉にして下愚の輩たやすくまなびがたきにより。それ〳〵生つきの世俗のことば取もなをさず。道理をいひなぐさむ。是を誹諧とする。詞はかはれども。和哥も連句も誹諧も毛頭かはる事なし。道理かはら(ざ)れば妙理も又同じ。中にもはいかいは。大にやはらぎたる。そのうへのやはらぎなれば。是を和光同塵の神躰と云也。爰を以しるべし。天下泰平におさまり給へる事は。たゞ和哥の明德也。然るを當風邪誹のごとく。悪言をおかさば。和哥も連哥も破滅すべし。人間たる者是をなげかざらん乎。當風邪誹と云は。皆式古人先立師匠を用ひず。口にまかせて放埒をいひちらす。殊更宗因が口まねをする。高政黨の同類。わざと天地をさかさまに云なし。直なる物を無理にまがらかし。一句の妙躰をたてず。日月を下部の仕物に仕。太神宮を紙屑買にたとへ。天滿神を傾城になし。天の逆鉾を揩小木に仕。帝王に犬の馬痢をなめさせ。高政が百句獨吟の内にさへ。數多の悪言をおかす。まして其外の弟子。師匠まさりのあふれもの。是を手本にさへする事。是神道の大外道ならずや。其故則。邪道誹諧惣本寺牛天連社高政大和尙と名乘といへり。此邪誹日本武家百姓まで往わたらば。劍不入して人種をほろぼし。知謀不用して國土をみださん。かやうの目に見えぬ外道。皆魘民也。佛神の威德をうばふて。鬼類合力して亂世となれるためし。いにしへ今にかはる事なし。此諫言千に一つも耳に落たらば。いまだ天命のつきぬ先に。惣本寺を打破り。誹檀林を燒捨。天道に降參せよ。京都の邪誹おさまらば。諸國の徒黨をのづから正道に歸服すべし。それにも我慢をやめず。邪道におごらば。我一人にても御公儀へ申上。天下の御さたに出さんといへり

其時一人の老人長嘯しをつく〳〵きゝて。誠に此道の妙德。今更きくにはあらねど。道理清潔のたきにうたれて。

老耳を洗ひ侍る。さりながら其方は。夷中に住所久しければ。ちと詞あらめにて。耳にたち侍る。我やはらぎをもつて。初心の人〻邪誹にまよはぬ道理をあらましかたらん。かれらが當風とて異樣に云なす心根をたづぬるに。此中庸姿の作者共も。中〻初心のやからには非ず。何も一ふし有て前句へ心をめぐらし。二重三重に意味をあまし。聞所多し。然共とを新敷云なさんとする故。あまり上手過て一句の埒あかず。前句へのみ理屈を仕かけて。一句の出來やうを成次第に仕立るをよしとする故に。異やうの狂言になれり。かれらが作意を以。正直に前句をうけ。一句の道理を立るならば。おそらくのはいかいならん。然に當座の口たはと。四條河原の道外猿若も。同じ物也と道をかろく心得て。しゝをどりのごとく。互にうきうかされて。めつた的を射る也。又中心の者おもへるは。いかさま古風はめづらしからず。書物に有付合皆先立の付古したれば。付ても口まね也。何とぞ古人のいまだしらず。いひのこしたる物あらん。とふかくほりたづねて。若異風のなま物に取付。随分新しからんと。五もじより發句に作る時。かならず實方古風にきこゆる故。無理に五もじを。七もじ八もじにいひのべ。月の出といふを。にしるとして。留りをてにをは止りになど仕立る時。一句のありさま異形異類にして。新事前代未聞也。扨も仕たり。おもしろし。付合の格も。此いきを似せよや人〻とて。師匠不入の我流をいひちらすほどに。そのまゝおらんだ流になる事也。正道のとは濱の眞砂のかずなれば。などかいひつくし何か古き事のあらん。古き五もじをたとへば月夜よしと有を。月やよし。月もよし。月はよし月よしや。などいひかへても各別の心かはれり。異樣の新しき句よりも。實方の佛古めかしき發句はまさりてしほらしくきこゆる物也。花は春毎にひらき。月は夜ごとにくまなく。郭公の聲。夕べの鹿。すべて万木千草。幾年〳〵ふるといへども更にかはる事なし。花もちりては又咲。月入ては又出る。各別の花もさかず。異風な月も出ず。鶯のこゑ。雪の色。古今同じ物也。此付合皆古しとてきらはんや。世間に有ふる誹諧の材木も皆古人のこぼち屋也。それを拾ひあつめて新しくとりつく

ろふを作意と云也。先立好士の。詞は古くして心を新しくといへる名言。隨分わすれまじき事也。先立のきらひ捨し。今様新俗不淨下輩のはやりことば。乞食穢多の道具を第一とさがし出して。新しきとてうれしがる事人倫のまじはりに非ず。今時宗因をいひならふ初心のやから。それは貞徳流にて古くさし。それは立圃風にてすえりたり。などいひけすたぐひ多し。此兩人は誹諧の祖師也。別の事をばをしへず。聖人哥人の口まねをして古風の正道を守るのみ也。其神道相傳の風俗を拂捨。きのふけふ世渡り一遍にして。たいこはいかいを云ちらす。師匠しらずのあふれもの。凡俗下劣のかすはへをねぶりて。其口まねにしづみはつるは。ともに畜生のたはぶれならずや。花中の鶯舌の香ばしき事をしり給ふべし。正風の道は其弟子師にまさる者すくなし。邪道は弟子かならず師匠にまさる物也。其故に大坂西鶴は。西翁より放埒秡（抜）群に勝れ。信德は高政よりあるゝ事夥し。よき道には至りがたく。あしき道には落やすし。されば當時の邪風に吹こかされて。古誹のたてあがらざるなり。

古風をいまだすてず。歯を喰しばりて堪忍すれども門弟より云くさす故。こらへかねて邪道へ片あしさし入る宗匠もあり。いやとよいらぬ賢人だてをして古風を守らんより。時代にしたがひ人のすくやうにして。間をあはせたるがよき分別也と。人よせをしていひ度まゝをいはせ。其身もともに邪道へ落る宗匠あり。又古風も今時の人このまず。又當風の口まねをするもつら耻し。何とぞかはりたる仕やうのあらんと。我流の新法をたくむ宗匠も有べし。いづれをよしとやせん。またあしとやいはん。たゞ世を渡るためなれば。かりの命つがんとて。あしきはい言とりもちて。此市に出るあさましさよといへり

扨中庸姿とは古風當風の中風といふ事か。但文字同じければ。四書の中庸にや心得がたしと云。されば惣本寺と自身名乗るからして。放埒ものなれば。定而儒道の中庸と云事ならん。中庸の道には孔子もかなひがたしとの給ふ。それにて知べし。惣本寺が驕を是にたとへんは勿躰なけれども。承平將門は。自身平親王と付給へる故。天罰にて其身をほろぼされたり。此人は桓武天皇の御孫に

て凡人に非ず。かやうのたゞ人ならぬ上にだに道にたがへば天命をうしなふ。いはんや末代の人畜としてかゝる惡言をおかして。其身無事ならんや。あまりの惡人なれば冥罰いまだあらはれず。命ながらへして。かれが生耻をさらさんが見給へと云。一人の云さやうにの給へども高政も平人に非ず。其故は。さる院參の御方より高政は誹諧の名人ときこしめし及れたり。百韵つかふまつりて御目にかけよと院宣をかうぶり戀の百韵を奉りければ。叡感以甚しく。御次もあらば法眼になし下されんとの宣旨也とて舊冬弟子共にふれながし。扨當年元日三物の發句。冥加にかなふ事ありてと詞書して

篶に五位愚意もうぐひす四方にけさ　惣本寺 高政

日なれぬ燕尾あら玉の年　弟子 正長

かやうに仕て板行し。院宣より先にはや法眼に成たるとかたる。かの田舍ものつく〴〵きゝて何とも言葉なくあきれ果て居たり。其時一人の老人。挨拶仕けるは。誹諧も和哥の一躰なれば。御なぐさみに御覽あるまじき物にはあらず。さりながらかれは方便者なれば。世間せんしやう一遍に。御いみ名をけがし奉り。虚言をふれまはる事あさましき次第也。高政にかぎらず。京大坂江戸國々に數多の邪誹我一〻放埓を板行し。小芝居をかまへ。猿若宗匠いとあさまし。哥道は和國第一の花車風流のもつて遊びなれば。師匠にならはずして。道をしるべき道理なし共證據に惣本寺が獨吟百句の杵木に。飛彈匠が墨繩を引て。末代目口かはきの棟梁の指圖にまかせんと云レ爾

目にあやし麥藁一把とぶ螢　惣本寺

此發句を評判するに趣向は祇園の社にかゝれる。平の忠盛の繪馬よりおもひ付たると見えたり。其事平家物語に委し。然共

目にあやし。麥わらのひかり。とぶ螢　と仕たらば。かの火とぼしの古事にもあひ。又一句もきこへ侍るべきを。麥わらをとばせねばうれしうないとおもひ。むりに。麥わらを。とばせたり。是當風邪誹の作意なり。それゆへ。一句何共埒あかず。おらんだの鳴もの也。なるほど無事なる人躰を。むりに片輪にする事。不便也。か

れらが好む風俗。千ゝ万ゝ。皆此格をもつて句作るもの也。いかにほたるのこゝなりとぶとも。一わの麥わらたばねながら。とぶやうに見えん事。前代未聞なり。餓鬼は。水を火と見るたぐひならん。初心のおもへるは。扨も麥わらをよくとばせたり。おもしろし。發句はこのやうに。むりをいふが作なりと心得て。さらばわれも。とばぬ。石瓦やうの物成とも。とばせたくおもひ。むりにとばする時。みなとびそこなひになれり。初心の人。かやうのいきをもつてけいこせば。万劫ふるとも。道に出る事あるべからず。是誹諧の外道也。かり初にもまねする事なかれ

　二郎ま次郎吉夏草の陰

此二郎ま次郎吉は螢に付たるか。麥わらに付たるか。一句は田夫の野わろにきこゆれば。麥わらにあひをなす事有べからず。たゞわらべのほたるこい。むし／＼といふほどに。童部を付んとおもふか。それは古風也とおもひて。二郎松を付たり。作意のはたらき。いひかゆるがあしきにはあらねど。前句にうとく。道理にあはざれば。大きなるそん也。螢にわらんべと付れば。世界に渡ることを。二郎ま兄弟ばかりに。螢をとらせたるは。しわき作意ならずや。又第一邪俗也。其上麥わらに。夏草大にわろし。名草に無名の草付ざる式法。かつてしらざるにや。又。一句の首尾無常也。面八句の内に無常のことばはせぬ事ぞ。扨ゝ二郎ま兄弟。草の陰にて。さぞうらめしくおもふらんこそ不便なれ。

　白い雨軒のかど屋に玉なして

白い雨とは夕立の事か。白雨(はくう)をしろい雨とよむ事は。たれよりの傳受ぞや。かやうのわたくし詞を作りて。人をまよはす事。邪誹ならずや。又かと屋の軒とこそいふべきを。軒のかど屋と句作る事。作意也とおもふべけれ共。物による事也。愚意のわたくしは。一つもあたらぬ物ぞ。清水の瀧を。たきの清水などいはゞ。作意にも成べし。祇園林を。林ぎおんとはいはれまじ。かれらが心には。瀧の清水古風也。林ぎおんこそおもしろけれと。おもへるなるん。かやうのゑせものを。連哥にては。芋のやまとて。大きにきらふ。誹諧にてはくりはまといふ也。扨第三は。

付ぬが本意とおもへるか。皆式付合のえんなし。わきは子のごとく。第三はむこのごくといふ。好士のをしへしるべからず

風に音ある犬の小便

けだものゝうへにては馬痢といふぞ犬のかけばりとこそいへ。それ〳〵の名目をしらねば是非なし。外道は。人倫の上を。ばりといひ。畜生のうへを。小便と云。是くりはま也。扨。一句はいかなる事ぞや。大海の波などこそ。風に音のまさるべけれ。犬のかけばり大波のやうにきこへたか。むさと仕たる事也。玉なしてに犬のふぐりはあしらひたり。たゞ下愚放埒をこのめり

とらはれて石淋なむる古狐

付心とらはれてといふより。越王勾踐の御事ならんこの古事たれもしれり。然れば。越の帝王を。古狐にして。前句の犬のばりをなめさせたり。かゝる帝王に。犬の石淋をねぶらせて。さぞ自慢におもふべし。やがてまつて見よ。朱公悪鬼と化〆。はくれんが生首をぬかれんものぞ。扨又小便と石淋と別の物とおもふか

七日塩断しるしと思はん

是は又。前句の古狐を。いなり殿にして。むりに石淋をなめさせたり　瀧の水。かへりてすまは。いなり坂。七日のぼりし。しるしとおもはん。此うたにて。句作れり。一句。先神祇也。又何のしるし有て。それとおもはんとは云けるぞや。一句。きこへず。石淋術なさに。七日塩断して。いなり殿を。いのれども。なをらぬゆへ。いなり狐をとらへて。無理に石淋をねぶらせたり。何といなり殿に。石淋をなめさせたは。手柄にてはなきか。それなればこそ。惣本寺様なれ。と同類の所化ども。有がたくおもふべし。かゝる無慙の心入。いかなる事とも。心得がたし。此惣本寺が宗門は。何れの悪法をか傳へし。重而せんさくすべし

隙入て大臣何かと暮の月

この付心は。とほるの大臣の事か。七日塩やく事たち給ふ故。隙入てといへるか。おとゞのみづからうしほをはこびやき給ふ身に非ず。何の隙入あればとて。七日塩をやかする事を斷絶し給ふ事あらんや。大臣も人足も。同じ

ものに仕なしたり。とかく其身に取あはぬ事を。むり付にする事。かれらが第一の作意とおもへり。平懐躰也

　膝骨いたくきざはしの露

付心は。前句の大臣年よられて。玉階をのぼりかね。ひざがしらを打やぶりて。血なんどのたりたるやうに。仕なしたり。それゆへ隙入て。日のくれまでふしこけて居られたか。己が一句のうへこそ。うちくだけてかた輪ものなれ扨又あれたるやしろなどならば。階に露もをくべきか。玉階は御殿の内也。草をはやさでは。季を持白露はをく事なし。古き軒ばのしのぶにもなど。よませ給ふは。たゞ御述懐の心也。まとには。玉階に。ちりをだにすへず。禁裏を野原にいひ下す。放埒千万也。一句を仕立るといふ事は。大事の物ぞや

　秋霧に神はすべらせ給ひけり

付心を推するに。前句の玉階を。社のきざはしに取て。そのうへに霧の立おほふ故。其やしろの神。用所に出給ふとて。くらさはくらし。階よりすべりて。ひざぼねをいためられたと付たり。扨ゝ存外をはく事かな。神躰を片輪になし。三公を下人に仕。よき事をわざとあしく云下シてうれしがるかや。神は神通自在にて。すべり給ふ事なし氣遣して腹下すな

　とろゝや摺らん天の逆鉾

やらんとさへうたがへば。何事のばちたりをいひても苦しからずとおぼえたか。とてもの事にとろゝすりけりとはせざるぞや。天のさかほこをすり小木にして。右寶童子にとろゝをすらせ。それにてすなはち前句の神。すべられたか。かやうの悪言をはきても忽舌をぬかれぬは。扨ゝ日月地におち給ふかや。天の逆鉾と斗さへ。むざと凡俗の口に云出す事に非ず。初心の誹諧士よく心得給へ。これ神道殘無のきりしたんならずや佛法神道をないがしろにいひ下す事。己一人のうへならず。はいかい惣本寺中庸すがたなどゝ。日本にはゞかる大口を板行して。諸國へうりひろめ。初心を邪道へ引入る事。前代未聞の曲事ならずや。是にて當風邪誹の宗因流をおしはかり給へ

　下化衆生皆精進日の事なれば

一句とまらず。又埒もあかず。天の逆ほこの。付合にかや

うは尺教哀傷の言葉。寄つく物にあらず。此付心は。天の逆鉾にて。とろゝ汁の精進食をして。大祖のしあげなどなされたるやうに。おかしく付なしたり。天の逆鉾神道の根元なれば。尺教のとはなし。伊勢は殊更佛道をいむぞ。物しらず。たわけつくすな

　東北院に内證をいふ

何の内證をいへるぞ今日は旦那衆。皆精進日にてけほどに。魚類の料理は無用で御座ると内證をいはせたか。しかれば東北院を東山なんどの旅籠屋寺に仕なしたり。東北院さやうの寺にあらず。皇居の名。后宮の院の御所也

　大かたは葬も時合の鐘のこゑ

東北院をいよ〳〵無緣寺に仕なしたり。付心はともあれ。一句はすぐにきこへたり。是は仕そこなひにや

　寢に行烏すぐに擧屋へ

夕ぐれの葬禮場より。ねに行烏はさも有べし。すぐに擧屋へは。何として行けるぞや。去人の云。是は大坂。六百兩のつふしが事をいふなるべし。新町けいせい買の狂言に。山本與次兵衛といへるもの。けふ親じやもの相はて。隊人の有しが。あまりたえかねて親父が葬禮場より。すぐに來れりとて。忌衣をきながら。擧屋へとびけると㚑ん。されば與次兵衛を。からすにして。葬禮場より。擧屋へとばせたりとかたる。扨も物をしり給ふ人におへばあかりをはじる事よさりながらすいのやり手を。五人ほど付ずば人のきゝしる付合にあらずといへり

　持病の癥まちん粉にしてのますれど

五もじ。癥の持病といふべきを。持病の癥といへる事。さぞ自慢ならん。一句とまらず。付心を判ずるに。まちんは。前句のからすの毒か。但藥か。とかく前句へ。粉藥をのますれど。すぐに擧屋へ行けるとや。放埒の一句更にきこへず

　木賊も鮫も泪也けり

前句のまちんをとくさやさめをもつておろせども。かたくて自由に粉にならぬ故泪也と云事か。まちんとくさにてみがく物に非ず。石うすを付よかし

　あかゞりや眞菅の笠に竹の杖

旅の一躰とはきこゆれども。付心。又一句のうへも埒あかず。あかゞりに笠をきせ。杖をつかせたり。もし人倫のうへにきかば。信濃路や。その原山なんど越行たび人の。前句のとくさに足をすりむかれて。あかゞりに成たりと云事かそれにてもさめに付ず。隨分ほねを折てきけどもきこへず

十年切て古郷の月

一句月を十年きりで奉公人につかひけるか。月もかさをばめす事あれども。脚にあかゞりのきるゝ事更にきかず。外道の作なれば。月を奉公人に仕立たるこそおもしろけれとおもふべし。もし又。ちんをいはゞ。あかがりすねの奉公人。十年の切すみて。古郷へかへりたる。月かけの旅すがた也と。いふべけれども。無理の仕立なれば。さやうにはきこへず

天津鷹遍山遠く中のほり

是は所化をかりがねにして。中のほりさせたるにや。かりがねの遍山すると云事。神代にも聞及ばず。前句十年に巾のほりといふほどに。淨土宗の。關東所化かときけば。遍山といへり。淨土の名目も。禪のうへも。同じ事におほえたるか。淨土のうへには。他山といふぞ。半傳連社號を付ほどの能化にて。所化をあつかひ草臥たか

後室の子分此度も露

前句と丸して。一句にしてもきこへず。下心。所化の惡名をいはんため也。此度も露は。いかなる露ぞや。かやうの露。秋の季に。なるとおもふかや。露は四季ともにあれども。秋の草ばのしら露は。殊にすぐれてあはれなるゆへ。露と斗にて。秋になる事ぞや。それゆへに露の置所大事也もとをうしなへばかならず。誹諧たふれになる物ぞかし

御遺言花に相違のなきやうに

前句のうわさをせんに云立て。花をばむりにおしこめたり。誹諧とても。月花の句。かやうに仕なす物には非ず。皆式道をしらねば。是非なけれども。當風邪誹のもの。花の句などは不祥におもへり。何とこの花の一句。義理きこへ侍るにや。前句の後室が。花を子分にせんといへるゆい言か。一句もとまらず。無心所着。大きに相違也

扨又出羽は熨斗添て春

一句いかなる事ぞや。前句ゆい言とあれば。推量するに。奥州の秀衡殿より。出羽一國を臺につみて。九郎判官樣へ進上せられたか。扨もめづらし。さりながら此使者の春は。ふら〳〵して。時のやうにたゝず。ともての事にしつかりとしたる。和泉の三郎。春衡を使者にせよかし

鹿の角落て最上が塞をうつ

出羽に最上はきこへたり。さいを打とはいかにぞや。去人の云。最上源藏とやらん云。さい打の名人有となん。扨は源藏。仕合あしくて。出羽一國をさいに打こみ。きれいにのしをそへてほつきたると。いふ事ならんもとより正躰なき事なれども。一句かやうにはとまらぬぞ

仕組の野べに位あらそふ

此一句例のうわさ付ながら下心いろ〳〵の古事あり。先。仕組と云は。四條河原。今の道外方の。最上藤八が事也。野べといへるは。鹿角落る。春日野か。いや。物もふでの折から。さいふりといふもの。道のべに出るゆへ。野べと云也。扨道外の藤八と。山うりのさいふりと。勝負させて。和田酒盛の上るりをかたらせて。位をあらそはせたり。下の句わづか十四文字の内に。かやうの古事來歷をいひのぶる事。初心の外道ども。かつて及所に非ず。かならずおもひきり給へ。其上當世の嶋原とば。四條芝居のきのふけふ。誹諧にいひ出し。紙面にのする物に非ず

十百韻たばこの煙立さらで

一句は。一日千句の。はいかいなどの心ならん。たばこもあしらひ尤也。又付心。仕組位あらそふ。いづれも。十百韻の一座の躰。さも有べし。然ども。仕組の野べと前句にあり。一日千句。野べにては何とて仕たるぞやと。人の難いふべしとおもひ。けぶり立さらでと。いひ野べたり誠にこまかなる作意也。しかれどもあまりこまか過て。十百韻の連衆を火葬に仕けり。あだし野の露きゆる時なく。鳥部山のけぶり立さらでのみと。いへる兼好がとばをやとひて。そのまゝ。葦原に仕たり

青暖簾の表紙かゝれる

前句の千句へかけたる表紙か。大きなる用付也。又のん

れんの表紙。前代未聞也。たばこといふに青のんれんとして。はしけいせいの事にしけれども。十百韻に付ぬゆへ。その青のんれんを。むりに表紙にかけたり。かけにくき表紙なれども。外道の術なれば。かゝるためしも有けるにや

　身はあたに金泥うすく成にけり

一句の埒はかつてあかず。付やうをすいするに身はあだにとうかれめの事にいひて。青暖簾をあしらひ。金泥うすくと云て。お經にして。表紙をかけたりときこゆ。身躰のうすくなる事をも。下心にふくめ。いづれものがさじと。似せかねをつかへども。付合の仕合あしくて。打こしと兩方へひつぱりふたのひようしちがひ、不便の事にぞ

　兎のあしをはこぶかよひぢ

金泥うすくと云に。うさぎのあしをはこばせて。けいせいくるひさせたか。一句は。人倫を。畜生に仕たりとさへきけば。なんなし

　大己貴八十の神風吹とぢよ

一句。吹とぢ物なし。但。おあなむちを。外の神風。吹とぢよと。云事か。なをきこへず

　「天津かぜ雲のかよひぢ吹とぢよ
　　乙女の姿しばしとゞめん

かやうに本哥はよくとはられたり。但又。此付合も。

　大あなむち八十の神風吹とぢよ
　　兎の足をはこぶかよひぢ

何と。きこへざるか。うさぎのかよひぢを。吹とぢよといふこと也と。ちんすべし。それは二句取して狂哥也。狂哥にしても。一首埒あかず。誹連と。狂哥と。同じ物と思へば。是非なし。さやうのわかちさへしらずして。惣本寺の和尙になるは。ちとおごりならん。かれらは。此はいかい。百句。したとおもふべけれども。五十句にもならぬぞ。大かた二三句ほど合て一句になれり

　重波よする池のかは針

大あなむちを大蛇などのやうにして。重波をつけ。吹とぢよに。針と付たか。さやうにつけても。道理の立事か。一句の埒とて。かつてあかず。かやうの付やう咄しにあ

り
君をのみ戀こがれつゝ手つさびに門田に出てね芹をぞつむ。　此返哥さて
われしらみふなあふりさき足もしり　といへる咄し。かれらが誹諧に毛頭たがはず君といふにわれのみといふにしらみ。かやうにいひても。一首の義理。かつてきこへざるがごとし。そのうへ。大已貴の取合なし。「大あなむちすくなみ神の山作り。山の神也。水神にあらず

　　龜の甲うみ血押れて流るめり

人倫のうへ。尻のねぶとの事也ときけば。一句聞へたり。それにては。重波にも。池のかはにもつかず。とやせん。かくやあらましと。生類の龜の甲に。はれ物を出來させたり。かやうの句作りを。どろかめの料理といへり

　　浮木について蠅たかるらん

一句取所なき用付也評判にかゝらず

　　鳶口も扨はかうよともちをぬり

前句ゆへ。扨はかうよとおもへるか。いよ〳〵用也

　　肌着一重の御芳野のおく

付心はうとけれども。一句は見事立たり

　　月今宵篠吹風の鼻聲に

風。草木にふれて。無盡の音有べければ。鼻ごゑにもきこゆべし。付心もしほらし。然れども。五もじの置やうに。邪風いまだふくめり

　　思案かはりて槇の葉の色

草木心なしとはいへど。思案かはり。槇も秋の色に出けるかや。松を太夫。になされしやうに何ぞ官をゆるされよかし。「思案かはれり。そのはの色。などいひてこそ。やさしかるべけれ。いかほど句作りにてかはれといひても。かはらぬ木石なれば。是非なかるべし。いや人のはなごゝろにつけたる。しあん也と。いへば。尙きこへず。「まゝくはふとや虫のなくらんと。宗因が仕たるを。手本にすると見えたり。されどもまゝくはふの句には。ぬけ道あり。槇のはの一句には。首ぬけ更に有べからず

　　お年といひ袖に過たる露時雨

思案にお年。槇のはの色に。露時雨。かくはきこゆれど(マヽ)とも。道理はかつてきこへず。是も鮒あふり鐙。あしも

しりの一句也

見初て七度かはく腎水

戀の放埒とて。かやうにはせぬ事ぞ但。下心の。七度かはくといへるを。推量するに。前句のお年寄を。白鬚の明神にして。龍女。なんどを見初させて。湖水を七度かはかせたるにや。いよ〳〵放埒也

かるもかく伏猪の床の中二階

かるもかくふするゐの床までは。きこへたり。中二階は。めづらし。伏猪の床の中二階。七度かはく事。古事有や。畜生道の世界に。いかやうの作事侍るやらん。無案内なればえきかず

ほこりまぶれに天狗あれけり

伏猪に天狗は。あたごの太郎坊ならん。太郎坊の術をもつて。ふするゐの床に。中二階は。立らるゝ事も有べし。ほこりまぶれには。何とて成給へるぞや。中二階の。すゝはき仕給へるか。はなの高政に問たし

虚空よりことはりにやる雨むかひ

こくうよりは。何の子細有て。ことはりけるぞや。前句の天狗。中二階のつゝくり普請などせらるゝか。ことはりに不レ及

おそなはりたる四つのかり物

四つの假物は。四躰假和合の事にや。前句。虚空より。雨むかひへ。ことはりにやる時。何かおそなはりて。おどろくぞや。獄卒の方へ。五躰を。家質になど入けるかや。但。虚空より。火車のむかひに來て。雨むかひへはかまはぬぞ。類火の氣遣するなと。ことはりけるか。皆式人倫の云ことばに非ず。かれらは天魔のけんぞく也と。前かどにいへる事。この一兩句の仕やうにて。いよ〳〵あらはれ侍る

胎内にきのふ宿札打たるか

うつたかうたぬか。其方自身かけもどりて。母の胎内をうかゞへかしかやうの事をいへるも。人倫の心にあらず。木のは天狗のつかひものになれるにや。判に不レ及

かゝる貴人のさゝら三助

海士のうたひに。かゝる貴人のいやしきあまの胎内に宿り給ふも一世ならずとうたへり。それに疫病のまじない

の。さゝら三助殿宿札をうたれたか。一句も前句かゝりなれば落着せず

　忝も普代の後胤水仕の朝臣

かやうにそゞろ言のむりをいはずとも。はじめは貴人にて有しかど。今は世に落ぶれて。水仕のさゝら三助になられたと。きこゆるやうの仕やうも有べし。第一むりの趣向なれば。よくいひおほせてから。道理きこへず

　所帶は今がはじめ也けり

水仕奉公の宿は入の心にや。也けりとまり。一句の心なくてはとめぬ物ぞ

　八雲たつ出雲に親の恩をしる

稲田姫なんどの心にや。八雲立出雲は。三十一字のはじめとこそあれ。所帶のはじめと云はより所なし。但。女と仕給はんとて出雲の國に宮作り仕給ふとあれば。それを所帶とうけたる心か。凡人のかせ世帶などいへると。同じ物にいひなす事。勿躰なし。親の恩をしるとは。いかなる事ぞ。かやうにはとまらず

　麓のちりひぢよりなりて釋尊

ちりつもりて。山となるとはきけども。釋迦になるとはめづらし。又付合も。麓のちりひぢよりなりて。天雲かゝるとこそあれ。八雲立には。雲まぎれ也。又親の恩をしるもの釋尊斗とおほへたかあさまし

　方便の月に花ふむ鳥箒

方便の月と。心も道理も。辨へず。めつたに云出たり。月は。眞如本覺にとる。方便とは道理相違也。前句の釋尊に。方便は同意也。花ふむ鳥まではきこへしが。箒になりてもふむやらん。いかなる月の方便なりとも。鳥箒の花ふむと。魔のわざ也おそるべし

　氣々に應じて一燒の梅

氣々に應身。此句へも。釋尊が出世なければ。埒あかず。一たきの梅。鳥箒のあひしらひなれば。香の心か梅も薪にするなれば。香は。かう。梅は梅の花。それ／＼の能德各別也。梅花香と云銘も有といへども。かやうのよこへ行を。外道と云ぞや

　久かたの天神固ひ初賣に

一句いかなる放埒ぞや。たゞ遊女の初賣と斗り仕立たり

とも。付べきに。何とて天滿神を。淺間數寄女。にはいひ下しけるぞや王城の守護神といひ。まして和歌の一神也。はいかいの五もじをもいひ出る者はあがめてもあきたらざる御事なるを。いか成邪見の外道ぞや。まことに此者は嶋原狂ひの太皷はいかいと人のいへるはとはりかな。あら人神をさへかどはかし傾城にしてうりけるぞや。去片田舍者天神の御影をかゝせ。惣本寺樣に讃をして下されよと賴みければ。高政邪誹の一句を御影の頭上に書付て。已が名を。二尺斗も上て。惣本寺高政とかきて。大きなる朱印二つ三つ押て。表具屋に張付けるを。心ある人是を見て。かなしみの泪をながしけり。和光同塵の大悲には。衆生のなぶり物にならせ給ひても結緣なさるべけれどし。天道斷見の惡外道に。追分繪の鬚やつこよりあさまになぶられさせ給ひ。さぞや。御內證に。千入の御淚をながさせ給ふらんと。身の毛よだつてあさましくおほへ侍るなり。菅家の正統をつがせ給へる御方にさへ。七日潔齋なされ筆を染させ給ふぞや。此者はたゞ。嶋原の八千代小藤を繪にかゝせ。太皷の惣本寺に讃させよなどいふ。不淨者の風俗になぞらへ。何ともおもはぬ物しらず。それをばしらぬ田舍者。有がたくおもふらんこそあさましけれ。されば都はせばからず。又來ん春の三物にも。惣本寺引付とてかれが門下にしたがふ所化數多有べし。果年の名乘を見るに。夫はそれ屋のそれ也と、京中にしらぬ人なし。かゝる太皷誹諧にくはゝり有がたくおもへる事。心あらん人〳〵に。その人性を見すかされんは。いとはづかし。又いはれざるをしへなれども。久方の天とはつゞかぬぞや

　枕ことばの殘るさらばや

前句久かたのと云枕とばのとはりかや念の入たる云わけ也

　せはしなひ忘（戀ッ）しらすめが呼に來る

みな例の嶋原ことばめづらしからず又かやうにとまらぬぞ

　よしや一太刀焔魔うらみん

扨も傍若無人かなたとへ氣が違ふてかくおもふとも性わる共がへろ〳〵太刀金剛夜叉の鉄棒にかなふべきかひら

に堪忍すべし但作者はまとのえんまには非ず親じゐがえんまがほしてせたくほどに一太刀とこそいへとちんずべし猶以五逆罪也無間の業ぞや

張貫の文函の蓋へ亂入

付心も一句も本性の者のやうには更におもはれずいかさまめづらしきたわけの古事なるべし

しみと云虫玉と見るまで

何としてしみが玉には見えけるにやきこへずほたるなどならば玉ともいはるべきか

物おもへば澤のほたるも我身より
あこがれ出る魂かとぞ見る

穴のあく蓬萊宮に着にけり

前句の憚を方士にして蓬萊に穴をあけさせ玉妃をたづねさせたと云下心か。扨はその方。其比舟虱などにて。よくしりたるか。まとに唐人のねごと也。蓬萊の玉妃に。何穴かあきけるぞ。事のやうをしばらくうかゞへ

さぐり足して三千里さる

前句の。穴所あぶなく。さぐり足をしたるか。三千里。逃たる事も。しづかにかたれ

くどひてはなるてふ桃のとしより

うたの上句也一句にあらず

三千とせになるてふ桃のことしより
花咲春にあひにけるかな

三千里といふに此うたあはぬ事也。桃を人倫のやうに仕立ぬれば道理かつてきこへず

さかづきなげて遊びとる也

前句を三月三日のやうにおもひて。曲水の宴の心をまはしたときこゆ。前句桃の木寄は春なれども。其方が前句は。春には非ず。ことしより實になるといふ一句夏也。曲水のこゝろ大きに相違なり。又此當句。春にする事。其方一人なるべし

半日の客の二藏か春の夢

是は太皷はいかいに。鍛冶屋の。二さまといふ。けいせいかい。あやまつて。はし局に入。半日の客たりといへども。榮花は。春の夢と也て。古郷にかへり。七世のかんだうを。うけたるにや。王質といへる。仙人の古事をくづせ

り。見渡せば。蓬萊宮より。仙家の。うはさ。五句つまれり。列仙傳をきくがごとし。いまだ。左を見れば。かい立の月あり。是も。仙家の小坊主かよ

育(かい)立の月終に行道

是はいかなる一句ぞ。月を。前句の二藏と云。育立のでつちにして。春の夜の夢の間につかひころしけるかや。月は誹諧の神躰也。かやうにいひ下してもくるしからぬとおもふかや。山桝大夫が凡夫の。つし王丸を。あしくつかひしだに。終には。竹のこきりにてひかれたり。いかに天道物をいはねばとて。あまりの惡言也。育立の帝王終に行道とは。えせまひぞ。物おほせらるゝほどに。ちとこはひ心のあらん。大君だに。四方拜とて。天道を拜し給ふといへり

おほ空に祈るちぎりの年もへぬ

月日もうけよ行末の空

是太上天皇の御製なるぞや

朝の露もとの仕方はわるけれど

いまだ月の二藏がにくきやらん。いろ〳〵のこまとをはちく。もはや三句目也。堪忍せよかし

又色かへてあつかひの山

前句の二藏が事をば堪忍したれども。又色かへて。山の神のあれけるにや笑止也

芋(いも)の神前に去鳥のこゑ

いもの神腐がねになりてとばれたかきこへず

緣遠うなる若のうら波

波のうへに緣遠うなるといふとはなし。たわけつくすな

かきつもる藻屑のみして耻悲し

この一句は。緣遠うなるうらみに。文章などのかさなりたる心にや。付心さも有べけれども。文のことばには成がたし。かきつもるもしほなどゝつゞかずしては。文字にきこへず。しるべからず

命長ければ砂にほさるゝ

耻かなしに。命ながければと付。藻くづに砂にほさるゝと付たる。用付を好むからは。とかくいはれね共。一句は何と仕たるものぞ。命ながければ。砂にほさるゝことは棄

老圃などの事にや• 又かばねをさらさるゝ事か• かやうの砂は• かならず• 其身に云かふるものぞ

　上ぬりのへついの山の小夜あらし

へついの山• あつかひの山• 鱠の山• さかやきの山• かやうの山• かれらが第一好む道なれども• 自然に一つなどは• めづらしくもあれど• かれらが口まねして• 初心のもの• めつたに。何山• か山• 外道の海山• 耳かしましく。侍る山

　松はもとより蕨ねる也

かやうのぬき句は、自然一句も誹諧なればゆるすべし

　中の君雪の詠の御時に

宇治山のさわらびをねりけるにや• まとなき事ながら• 一句のせん• よく立たりさも有べし

　三幅対の夢の夕ぐれ

一句の道理• 何とも埒あかず• 又前句戀也• 夢の夕ぐれは• うき世の夢にて述懐也• 戀になるべからず

　つきつけにあふは別れと知ながら

狂哥の上の句と云物也• 前句と一句にして。せめて埒をあけよ• 又ながらとめ• ならひ有

　さすが凡夫の鑓玉の露

きざはしの露• 此度も露• 鑓玉の露• かれらが第一好物の露• 習所もこしらへず事を持露をいざしら露• 此同類ともまねする寶佛の露すり小木の露ふんどしの露• ねぶとの露• もはやいひやめかし

　地獄の月目連尋給ひしに

地獄の月といふ月なし。神通第一の目連にても• なき道理の物をば• たづぬる事なし。しやうたい失人を• 鉾にてさし上げるといへるを• 鑓玉に付るにや• ことばの名目ちがへり• 古事付は大事のもの也• すこしのてにはにても• はたへあはぬ物ぞ

　佛をしへて借錢の秋

扨も佛に無質を申かくる曲ものかな• 佛は衆生に福田をこそをしゆれ• 借錢の秋にあへとをしへたか• とかく入間やうさへいへば• よしとおもへり

　花もみず娘あまたに生れ行

此句にかぎらぬ事ながら。何事をいひけるぞや• か様に

一句をいひても誹諧じやとおもふかや。一句をとりはなちて。花紅葉は。其座也。せねばならず。娘あまたをば。借錢のかたへ。生れ行を。佛の敎への方へと。前句斗すまし。一句のうへの算用かつてあはず。花も紅葉も。前句の借錢の方へうばはれ。いよ〳〵一句ぬけがらになれり。あさまし

　　おもひのうは着八丈が嶋

八丈が嶋は花もみぢの名所か。うたをおぼえず。また娘あまたに生れて。置所なきにより。嶋へやりけるか。叉八丈が嶋には。よき娘どものありて。きぬを織などいへる。物がたりばしきゝたるか。きこへぬ嶋もの也

　　中むかし銀座のかはす浪枕

八丈が嶋に銀座はいかなる付合ぞ。新しといへば。去入の云銀座の與四良。流罪の事也といへり。扨も新俗。放埒をはく事かな

　　駕の劍のかたなゆるされ

一句の作りやう。さても無調法也。是も與四良流罪の時。刀など御ゆるし有けるにや。いまだ其外の事も有べし。

隨分御ことはり中上よ

　　おく霜の拂ひもはてぬ無禮講

一句道理きこへず。をく霜の。無禮講を。拂ひもはてぬといふ事か。きこへず。霜のといはねば。前句のつるぎにうつらぬゆへ。おく霜をとは。えせぬと見えたり。せばき心入あさまし。前句へは。大つきにても一句さへ立れば。誹諧なるぞ。しつかりとおもへ

　　有時暮の響くそば切

くれのひゞくとはそば切を。ひゞかせたか。かれらが風俗に。ぬき句と云事をこのめる。その一躰ならん。前句。おく霜のと有ほどに。くれをひゞかせたらば。鐘になるべしとおもへり。又無禮講の性わるども。そば切をうたせて喰ける響。兩方へかけたり。か樣にきゝ分とらするは。作者の身にしては。過分の事也。然ども。本文の道理。大きに相違也。霜に鐘のひゞくと云古事は。曉の事ぞ。霜に夕の鐘のひゞく事。更になし

　　高砂の尾上の鐘の音す也

　　　曉かけて霜やおくらん

高砂のうたひさへしらぬかや
　何(なに)風の吹て佛の臺所
佛の臺所といふ事。未聞いかなる方便の風にても。名目に背たる臺所に。吹出さぬものぞ。是半傳連社が魔風也木像などの臺所へおどり出られたる様に付たり
　たすきがけにて貧女きませる
此一句は正身の佛在世に仕なせり。釋迦佛のまかなひは。ひんばしやら王須達長者などより。法施なし奉らるゝ故。貧女をやとひ給ふ事なし半傳連社がやうなる。外道のせばき臺所にあらず
　利錢かる夜るの衣をかへしてぞ
いかさま外道も仕そこなへば正道にかへる。此一句よく付たり但とまり。の文字。ぬるを。あませるにや。十六てにはといふは。かやうの句作りにはあらず
　鼠の内裏かよひぢの末
前にもいふごとく。畜生道の世界無案内也。批判に不ㇾ及
　お車の油筒までねぶりたり
前句と一句にすればさも有べし
　烏羽白川の棚さがしする
打こしの鼠。前句築地をうがちて。當句迄かよひぬるにや
　秋風や東寺四塚鍔目貫
是は前句。白川の關ともなきに秋風や。烏羽と云に、東寺四塚。棚さがしに。鍔目貫。かくさん用はあはせけれども。一句はいかなる道理ぞや。是にも咄し有。さるもの。連哥は。いかやうにする物にか侍と尋ける。返事に。心ふかく。一句の道理を立て。きしやにして。前句へ付るよしとをしへければ。さらばとて。案じすまして
　首たけに。上手の談義。茶。香。きね
と付けるとかや
　廿日あまりの月をふるへて
又例の物しらず。月を前句のあらつはにして。色〳〵のけがれをもつて手くろ仕たるか。批判におよばねども。下の句のて留り習有。しるべからず
　今の世の冷じき者小分別
冷じき物。廿日あまりの月といへば。前句の月の事か。

月光天子。小分別冷じくもたれて。何ぞをふるへて。人をぬかれたか。前句は鍔を月に仕て。なぶり物に仕。當句は又。前句の月に無實をいひかくる何事ぞや冷じき物。廿日あまりの月といへるは。感情の方也此作者が取なし樣雲泥のかはり也。此者月にいかなる遺恨の有やらん。前かとよりの月。大かたなひがしろにいひなせり。是自性外道の所存ならずや

　　內儀かへつてつれあひをかむ

この一句は何とおもふて立たるぞや。末代の女の教戒にも成べし

　　丙午晝のちぎりも絕ぬべし

例の邪誹なれば。一句異樣の物也

　　いは橋のよるのちぎりも絕ぬべし
　　明る侘しき葛城の神

よるのちぎりとよみしを。ひるのちぎりと云かへたが。自慢なるべし。本哥よるのちぎりといへるは。神の誓約の事ぞ。それを此作者は晝のちぎりといひて。放埒の交合に仕なせり。誹諧なればとて。戀の句をかやうにはせぬ事ぞ。又かならず。丙午のをんな。夫をかむものにあらず。諸白髮に成迄。そひ行人多し

　　左へ繰を子どもめが見る

八卦のうわさ。成ほど前句のことはり也。子共めが見るなどいへる前句の下心推量仕給へ。誠にぶたの太鼓はいかい也

　　布袋是ぞ鬱のはじめとかや

殊更一句不埒ちの也布袋何につかへたるぞや。かれが下心大かかたすいしけれども。判に不レ及

　　おもへば伊勢と紙屑買と

伊勢の神と。紙屑かいのかゝと。一躰分身也と云事か。一句の仕立三輪のうたひ付なれば。いやといはれず例の物しらず。大同前の外道なれば。此句にかぎらね共。前句の布袋と有に。紙屑かいより。外には付物なきかやなるほどけがれたる物に。太神宮をたとふ。かやうの邪誹を板行仕。世間へひろめんとおもふ所存。いかまかはりたるおそろしきたくみ有べしさりとは守武流の惣本寺その長官のかやうにをしへたか神罰はのがれぬ物ぞ

異國より悪魔の風の吹来るを
　　それ吹もどせいせの神風
かたそぎの千木のおもりはかはれども
前句にいまだ云たらずしてかたそぎの宮を。紙屑問屋にいひ下せり。やがて業の秤にかゝらん時おもひしるべし
　　行あひの間に人やぬくらん
行あひの間もかたそぎの事也。行あひの間とうたにきこへさせ給ふは神道の祕事にて。凡人のしる事にあらず。住吉明神の神詠也。人やぬくらんとはいか成事ぞ。神の人間をぬき給ふ事はなきぞさりながら此作者ごときの悪言邪見のやからをば。生ながら首をぬき給ふぞ用心せよ
　　こきまぜて花にいけすきするすみや
佐々木梶原が宇治川の先陳（陣）あらそひか一句きこへ侍。付心景氣おかし。句ひの花なればたしなみけるにや。されども一句の仕立やう邪路也
　　珍重〳〵ゝゝの
此あげ句はづみ一遍と作意をのべしか。珍重〳〵は祝義のことばなれども一句片輪なれば。不祝義也。又来と云字をむすばずして。一句春に成べき作例なし。作者は白慢なるべけれ共初心口まねを仕たがるにて。草臥侍る。扨又めでたきとばとて。前句へもかまはず。珍重〳〵斗にても埒あかずあげ句は一座百韵の首尾なれば別て大事の物也。又猿取鉢と云事あれ共。それは前句より仕かけ有て各別の物也。されば師匠は針のごとしといへり。はや共方が口まねして此中俳諧の作者共めつたに珍重〳〵にてあげ句をとめたり。是惣本寺が邪誹。かくのごとし。此次〳〵所化共の句は能化にしたがふ放埒なれば批判に不レ及惣じて批判珍重能

右宗因流邪誹之悪言帝釋ノ鉄札ニ記リ若當風ノ外道共降參セシ思ヘ六根罪障ノ懺悔シテ追付返答書ヲ致天道衆善奉行所ヘ可レ奉捧者也

延寶己未十一月吉日

誹諧 破邪顯正（はじやけんせい） 返答

惟中

誹諧破邪顯正　返答

一日明窓の下に閑居し。曲几のちりをはらひ。つく〴〵とつら杖つきて。世上誹諧の盛なる事など。おもひつゞけし折ふし。予が心友なにがしの秀才。一巻の書を袖にして來り。この比洛陽の板行にして。世に廣くもてあそぶもの也とかたる。とりてみれば俳諧破邪顯正と題して。帋數三十枚にたらぬもの也。何なるらんとよみつゞければ。京の俳士高政といふものゝ獨吟百句に。一〻批言してその前序に。梅翁老師をあくまで誹謗したる書也。先さしあたりに。文盲なる文章。あて字のみの一巻。みるにはたらず。もとその意趣は。高政が惣本寺と名付たる家號は。何方より御赦免ありけるぞや。連哥・誹諧の受領には。殊外新しき受領也。御公儀よりゆるされたるはしらねども。去年梅翁を高政が宅へ請待し。一會興行せし時に。

すゑしけれもりたけ流義惣本寺　といふ。發句梅翁が仕て挨拶したりとて。高政に隨ふ同類雲霞のごとく集れり。それよりなにがしたれがしと名のる。貞德流の正道を好て。一方の俳諧大將ともなるべき器量成しが。惣本寺が末寺と成て。高政に隨ふ。惣別梅翁といふゑせ入道。第一紅毛流の張本也。もりたけ流義惣本寺といふ發句は。何事ぞや。年にこそよれ。八十に及で瓢金といひ。言句にのべがたしなど書て。色〴〵惡口し。初心を迷はすのもと也など。かしこげに文盲の筆をふるひぬ。もとよりも。彼高政等がたぐひ。論ずるにたらず。亦高政が百韵は。うつもうたるゝも理り也。古哲の詞に。迷ひの前の是非は是非ともに非也といへるごとく。よしともあしとも筆とるにいとまなし。今爰にいふは宗因邪俳と所〴〵に書て。彼惣本寺といふ發句をうちたる。めくらつぶてをひろひて。かの砂裏の金をゆりてみせぬ。誠に短才ものに向つて。かくいふも。身ながらをとなげなきやうなれども。すゑ〴〵國〴〵まで。この書のはびこり。いかさま此發句は。批判したるもさぞあるらん。又宗因邪俳といふも理り也などゝ。天下にひとりもおもへらん事。且はこの道の坊に聊成なん事も。空恐しければ。その一

理をのべてきかするぞ。よく〳〵この一矢十三束三ぶせ。むないたにはつしとうけとめて。息のかよはんうちに。此俳流の幕下に降參して。汝らがさびくさりたるうちものを。さやにごつとりと納めて。梅翁先生の俳門に來らん事を待もの也。聖人の詞に過則無レ憚レ改と宣ふは。さぞ覺つらむ。夫高政が惣本寺といへる額かけたるは。いかさま嗚呼の者也。みづから名のりて。俳諧の惣本寺と成もせんと。廣き都の内もはゞからぬ大膽の氣象。ものになるべき下地也。孫子邈が詞に。膽欲レ大といへり。朱子も志不レ大則卑陋也とのべ。また淮南子にも。作レ志欲レ大と書り。何事も大氣になければ。事の大なる道は成がたきもの也。近比たのもしきこゝろざし也。去年のいつにか有けん。かの高政が宅へ。梅翁老師に。京 那波江雲。予相隨ひて。一日參會し。百韻の席を終り。高政が文才のほども。俳諧の位もよく知たる也。偖去ゝ年の夏。高政 梅翁先生に。發句所望しけるに

　すゑしげれもりたけ流義惣本寺。と作しつかはされたる。先は仁者のはだへ也。當躰の我慢偏執の心ならば。惣本寺といふ發句をしてゐたへたらば。彼是その名をうらむ事のうたてければ。しゐて望たりともすまじき事也。されどもひろくすくひあまねくほどこすの仁心。背にあふれおもてにみち。さらに邪義我慢の念なければ。たゞすなほなる心の發するに任て。惣本寺の號を立て。發句にし。猶すゑしげれと下知して祝し。あはれ此道の。さかんならん事をおほしめす心ざし。さりとては殊勝の事也。さてみかづら名付し號に。名人の文作り詩作り。哥つらねし事。勝てかぞふべからず。先さしあたりては。奥州松嶋。圓福寺の法心坊。壯歲を過るまで。文字をしらず。ふと商人の舟にのりて。臨安に入。たゞちに徑山に上り。佛鑑禪師にまみゆ佛鑑。圓相の中に於て。丁字を書して是を示す。法心席下に止て研究す。性堅硬にして禪座す。尻たゞれ骨くづれどもたゆまざる事九年。丁相を持す。万物の中に於て。一の丁の字を現ず。としをへて平穏を得たり。歸朝して。奥州の松嶋に居り。臨終の前。七日徒に謂て曰。それの日滅を取べし。齊非で禪床に座す。僧遺言の偈を請。法心坊もとものをかゝず。た

と唱曰來時明々去時明々是箇何物不言。この人文盲にして。字をしらず書する事をしらぬものなれども。一旦志を發し入唐して。佛鑑にまみえ。終に法心坊と名のり。松嶋の圓福寺を開基す。それを時の名人

遠上徑山弄風光　歸來坐圓福道場

覺了法心無一物　本是眞壁平四郎

と落書し。それより人皆圓福寺とよぶ。今の梅翁の惣本寺を誹謗せば。此名人の廿八字も徒なるべし。いづれを是とし。いづれを非とせんや。返々この一句すへ茂れと下知して。あはれ俳諧の惣本寺とも成て。其名をよばれん事を祝したる本意。不仁の人偏邪のものゝ夢にもしらぬ事也。是を正俳といはんや邪俳とせんや。たゞ誹諧も連哥も。すなほなる所を正道として。我慢のはたほこをならべ。偏見の劍をよこたへん事。かりそめにもあるまじき事也。今の代もむかしの代も。その身功もなくして。文臺脇をねらひ。才もなくして上座ばりを好み。齡もなくして句の前後をあらそふもの多し。かゝるものを邪連哥とも。邪誹諧とも名づくべし。誠にこの比の若輩。いさゝかも學文をはげまさず。哥學をしらず。唯口さきのかる口ばかりを好み。無法放埒をいひちらす事。是なんぢがとがむる所も一理あり。忝も梅翁老師は。壯年の比より。昌琢老人に隨ひ。多年連哥の道に。功なり名遂て。人にもゆるされ。攝家清花のすゑにもつらなり。達人名匠の座にもなをり。ことし七十六歳の餘算をへて。かたのごとく事のたりたる道人也。その人の折から。世のもてなやみぐさの俳諧をせられ。人の興ずる事誠に理なるかな。いづこをさして議すべき師にあらず。第一心ざまなだらかにして。うつくしき名匠。いにしへはしらず。今の代にはかたをならぶる人もあるまじき也。是ほど俳諧盛なれども。何集と名付て。一集の建立もなく何の書とて。一卷のものをも開板せず。多くの誹諧の發句も。みづから書とめても置せられず。只時にあたり興によりて。つぶやき給ふ事殊勝の事也。かの林和靖が孤山にかくれて。卅年の間。詩を作し文を書給ひしかも。一字を記しとゞめさせ給はぬ。大賢の氣象あり。さてまた高政が作の内。日月を下部のつかへものにし。太神宮を揩肩かひにたと

へ。天滿神を傾城になし。帝王に犬のばりをなめさせなどしたる事。誠につゝしむべき事也。され共梅翁師の句に終に不聞。いつの比か予が句の内に

　釋迦はやりもち供につれつゝと。つかうまつりければ此句あまりにや。一代教主の如來。心すべき事也と脇書し給ひぬ。又いつの比にか。よぶこどりの句に。此鳥祕鳥也。とかうに不及と判じ給ふ。大事のものは大事に。もたいなきものはもたいなくし給ふ。この一言にて余はなずらへて知べし。すゑ〴〵文盲不智の輩。梅翁のながれ也とのゝしり。手爾葉もしらぬあふれもの。朗詠集歌仙等もおぼえぬばかもの。文字かなづかひもわきまへぬ氣がさもの。色〳〵の句をいひちらすとて。梅翁の源の清きをそしらん事。大きなる僻事也。さらば釋尊一佛の末弟。今の世までながれ來り。律をたもたず。法をしらぬ破戒無慙の惡僧ありとてかの大聖釋迦如來をなみせんや。また孔子大聖の門人。子夏が學。田子方にながれ。終に莊子に落。さればとてかの文宣王をそしらん事。むさとしたる事也。佛法も正法の的々は。摩訶迦葉に付囑し給ひ。それよりいまに到り。傳燈明らかなるは。佛心宗の法也。また儒門も。一貫の傳受は。曾子にわたり。それより子思孟子につたはり。今に到りて道統のいとすぢたゝず。今の代梅翁流とて。あまねくなりわたれども。老師にしたしみて。一句のしたて一句のはだへ。席ごとに添削し給ふを。骨髓に知たる正道の俳諧師はまれ也。もと此正道は。學文して。詩哥のかぶとに。文章のよろひを着し。佛語の劍を帶し。語錄の弓に。活法の得物矢取添たるなにがしと名のらむものこそ。この道の正統を傳ふともいふべし。われ多年。たてにすかしよこにみても。梅翁の句に間然する事なし。たま〳〵の句も殊勝にして是非に不及事也。ことし元日にも。

　としたけて也けり〳〵春に又

又世上誹諧風躰のかはれるを見給ひて

　そよやそよ昨日の風躰一夜の春

これらの發句。かりにつぶやき給ふも。皆本を正しく。あるは哥のはしを思ひ。語のはしをよせて。一句を建立したる作也。老師は常のざれごとのやうなれども皆一句俳

諧にして。しかも根ざしをふくみ。枝葉をそへたる作。人皆しりたる事也。此比も松門亭のなにがしにて百韻の後。追加の發句所望しければ。そのまゝ言下に

お閑に御座れ夕陽いまだのこんの雪

と作せられぬ。一躰しほらしく。どこやらにものをふくみたる頓句也。かの長嘯子の吾妻に行給ふ道の記のうちに。五月三日。京なる女こどものけふはいふらん思ふらん。あやめかりふく宿のうちにてさぞといへば。前なる人のおほせらるゝ事こそ哥のやうに聞ゆれ書付てみんとて見ければ

妻子どものけふはいふらんおもふらん。あやめかりふくやどのうちにて。となん是長嘯子の本躰の哥に成たる也。その梅翁師も俳諧に至りては言句に皆俳諧也。さて俳諧の俳諧たる所は。予が先年編集せし。俳諧蒙求といふ二卷に顯し寓言を本意とする事。和漢の來歷あまた引て。はじめて世上の眠をさまさせたる也。又その後梅翁蚊はしら百韻に。しぶ團といふ批言。なにものゝ文盲がしたりけん。余一覽して返答二卷に猶〻俳諧の正道をしらせたる也。さるにこのたびの破邪顯正に。しぶ團の返答。一言もあがらずと書り。汝みたかみぬか。いへ〳〵。予多年再返答をまてども是しか一言もあがらず。もしみぬかほして。鼻はさまば攝州大坂。深江屋が梓にちりばめ。早三年四年にも成ぬ。速に披見して。思ふ旨もあらば書てんもの也。その比京都季吟子もとより。いまだ返答書を。書もはてぬうちに。備州岡山。胤及がもとへ。季吟子書通して。かのしぶ團我つくりたるにあらず。もし返答をもせば。季吟作也などゝ。書む事おほけなき事也と書し一通。今に予が所持しける也。是ほど流布の書を。みぬと書るは。汝が不才の顯たる所也。俳諧の俳諧たる所かの蒙求。かのしぶ團の返答に。あくまで見しらせたれば。今更に贅せず。何時も梅翁師の句に難問不審あらば。速に書て俳諧の正道をうかゞふべし。又予があめる近來風躰の俳諧に。當時俳諧の差別。色〳〵の稽古故實ども書て板行に及ぶ。そのまゝ披見して。詳に勘辨し梅翁風に隨ひ我非をおほえ。前を悔ん事本心の明らかなる田地也。ゆめ〳〵門派の俳諧にて。先生の正道をかりに

も誹謗すべからず。孟子に不レ揣ニ其本一而齊ニ其末一方寸之木可レ使レ高ニ岑樓一ともみえたり。思ふべし。又俳諧にも無盡の躰あれども。連哥のうそぐさりたるは。古來の制也。この比の一作。鬼拙躰百句。風鳶禪師語路句と名付て板行す。是俳の骨法也。又皮肉の百韻。この書の後につけて。世の批判をかんがふるもの也。詩に賈嶋は瘦たり。孟浩然は。寒しといひ。佛法にも多問の阿難神通の目連とのべ儒にも德行には顏淵閔子騫。文學には子游子夏と顯し。和哥にも。四道十躰といふ事あり。又時あり所あり。中庸に時中すと。子思はあそばし。經にも爾時世間と說給ふ。梅翁流は今の人の氣象にかなふ。これこの時をしらず。柱に膠して瑟をしらぶるは。さらに聲音和せず天下のわらひもの也。されどもこの比の開板にも。又一座の上にも。むさと字あまりを好み。脇のとまりを手爾葉にし。第三を哉どめにし。ぬどめにし。やけりなどゝとむる放埒あり。是俳諧の亂逆也。それ天下のみだるゝもとひは。臣として君をうやまはず我まゝにして。禮を背き法を守らず。弟として兄をないがしろにし。すべて禮法をすつるより。國あやうく天下みだれに及ぶ事也。もろ〳〵の藝能。皆先輩の定置たるを守り。師傳に背かず敎を立てこそ。其道〳〵みだれにおよばず。然るに此比の俳諧は。師傳を背き。手爾葉をかまはず。いひたきやうにいひちらし。道の恐れといふ事ひとつもなし。この後はみじかき句を發句にし。ながき句を脇になし。春三句五句のわかちもなく。水邊山類の去嫌ひもかまはず。終に俳諧の亂といふものになるべし。いにしへ神の代に。あなにへやうましをとめと吟じ給ひ。かのそさのをの尊八雲たつ。出雲八重がきとよみ給ひてより。五七五七ゝの字妙句に。そなはれる事也つゝしむべし。返〳〵すゑ〴〵不才放埒の句によりて。梅翁師をかりにもさみせん事ゆめ〳〵あるべからざるもの也。ああいづれの人か今梅翁師の正統をつぎてん。爰にいたりて筆をなげうち。すゞりにふたをおほひぬかし

獨吟　　　　　　　　　　　　岳西氏一時軒

短冊の旗(ハタ)管城の固(カタメ)前の花
　戈(ホコ)を揮(フル)つてとゞめけり春
海老のかぶり釣にかゝれる霞もなし
　この江山をへ(えか)しるまいなあ
によつと出る一日の月影白し
　希施(キセリ)妻くはへて霧をふく也
あしたの風穗をのせたるのりかけに
　をし出す鴈の舟はるかにも
ウ
ねぶとの山雨によそほふけしきあり
　生薑(シヤウガ)のいはほ峨〳〵とそびへて
鱠の酢三日かけて以前より
　評判の張翰(カン)爰じやは〳〵
お宿にか陶淵明で御座りまする
　中かねたれど雲無心あり
手本ひとつふたつみつとふむらがらす
　杉村市右勝手さびしき
長暖簾(ノウレン)亂(ラン)山(サン)青くたれこめて
　さればまた來るけちぎりの雲
燈明佛おもひをかゝげて待くれに
　三方にかはらけ盃に蘋(ヒン)婆(バ)菓(クワ)
極樂寺の花に扈(コ)從(ジウ)はあらはれて
　うぐひすの執心月ほのか也
二
くる〳〵と七卷まとふゆふがすみ
　螺(ラ)鈿(テン)の軸(ヂク)の青貝の海
うしろには硯(ケン)屏(ビヤウ)の山高くそびえ
　杉げたの馬かよひ路ありけり
窓寒き孤竹(コチク)は雪にうちなびき
　でんがくくらはず終に餓(ウヘ)死(シ)す
庚申七日に滿ずるあかつきに
　許(キヨ)渾(コン)が夢や鶏(トリ)つゞくらん
そのそこの隱者の味(アヂハヒ)甘(アマ)うして
　よしのゝ奥の眞(マ)つち肥(コヘ)たり
なにと又やせこけられし釋迦が嵩(タケ)
　娑婆八千度雪隱にゆく
湯殿の月ながるゝ水のかへりこず

川のほとりに松茸るまして
二ウ
酒の紅葉中椀みだれて苔むしろ
石上に詩をだいそれた事
なにものやらん座禪の床をぎしつかせ
約束の拂子あたりをはらつて
若衆のいき路ふとんばりして急がるゝ
送り三重ぬれの一ふし
頰杖でかたみの扇うたれつゝ
名のらぬゆくへ蠅にせゝられ
ほろ〳〵と犬の幽靈なき出て
やきめしけぶる鳥部野の秋
朝茶の月立さらでみるならひならば
世間ばなしは露にもしめらず
今度花二番つゞきにいりがある
さくらの熊谷つゝじの平山
三
春の駒かけよせ〳〵見わたせば
夫を戀るひばりの笛あり
きら〳〵しゆふりの錦織立て

ふくろに入たるかづらきの峯
こち〳〵と山ぶしのうつ火うちいし
天狗の朝寢のびせられけり
あそこさまへ雲の衣をふんぬぎて
延喜の帝慈悲の雨ふらす
田うへ哥つらゆきも是を悦びの
くゐなのたゝくてれつくてん〳〵
月涼しくゐがね門を明てより
鬼のしはぶきみつよつ五
なまぐさき風の心のいかならん
もとより女人潔戒の山
三ウ
若僧のみけんの光はなたれて
靑蓮華の眸ほそいがいのち
によつと舌十樂の中にのべられたり
一味の藥万歳をよばふ
蓬萊の山下龜菴岩すいる
使の徐福委細に口狀
秦の代や今朝よりも長事を

かゞみざらんや巻臺の上
月のゆふべ雪にむかつてほち〳〵と
　老去て鼠なに思ふらむ
天堂に生をうけぬる鳶もあり
　光明赫やくたる日よりじや〳〵
はじまつたかぶき𦬇の花おどり
　色〳〵の錢をなし給ふ春
名
ゆふ霞七間まなか參たの
　額ゑぼしの樂助なるかな
猿のあほう様〳〵藝をつくしけり
　のしとかまへて鶴松になく
十めんで權柄をとる五老峯
　ゆるぎ出たる白雲の車
燒亡は光を放つてとび去ぬ
　をの〳〵禮す伽羅香世界
御手の糸發願の撥うちならし
　うやまつてうくる傾國の事
たぶ〳〵と漢皇色を重んじて
　とりざかなの臣下三たびいさむる
杉箸のしのぎをけづる軍勢に
　聖靈にむかふ修羅道の月
ウ
秋山坊同宿露荻めしつれて
　宮古にのぼる一片の霧
何とあらふ日利に見する朝ぼらけ
　うつて參つたあとのしらなみ
霜に淬をしの釼をしやにかまへ
　偏見我慢の氷はりけり
おぼえたか紅蓮地獄に花はなし
　凡心さませ胡蝶の眠

延寶庚申二月日

書林　愚常
　　　開板

誹諧頼政

破邪顕正一熊坂

両書共合本書

罕行
色ハ法圓依りて尤きいのい者かくに我らか
とハ都よりひく湯陽乃南詠のこゝろ
すく一庭仕くびきさ古土より貞徳より
乃右詠ととせりてやせいおもひは 追り わや
きうらむあり（かうら九をもうつくいあとゆ
く方ハ三条やおのふ後と今出川くさい
り町もかんてもろしいれ畠かしわ木
くい維舟の町りもまかわらく 罕行 辞れ
やまくかくぼうひしひしれ詠の にあ
あしれをとこひとそのなうれ 仲ゆとめ

ばけくまくしれたところがつれ風情あり　付哀

町人れ来りて下　江戸の旅人ハ何すと

作ひそ先ハ都方といひ候ハれ若すくん。

高町まあかく維舟と申古へ道の誹諧が

ころあくれつるやなへ　不にハ住くねとしたふ

まうひつまてなまし町内とかあかうへ

維舟とも宗沃しハさ白波のうちわひは

つきあふ年ハのらあうしさめ魚うた

誹乃ぱなふとり子とはまへき　いやさ

無うふかうきと魚りいねとし梅がもれかく

むかしハ歯といとさえんを向ていゆるしなまゐ
の町も申ませし作法を知さえなましき見
えらる入道のふるくさい跡ハいらぬ分
句作くわふく所そ　付まてし天しかし
事を汁物まて板へ入たつ拍子よきいふを能
の弟子しらぬくふるき道かとえん
いふならハいふなかれしそれわしたかゝ
こいらん一一一一一早川
ゆへもを八知らもと　また出緒まよ見てる
ハ発句板もしつ肴板まくゆついさん立発
句帳つんらんともやまてしまれ　撫しゆ

花に見へこそ門弟の家ハ　三二句 名に橋つひ

うし材木　わりく他にも仲立一稿ハゞ

維舟のひまつあまりよ儘候他つもし郭やむ

三一 なみつく旅人ハ重に現せよ　名くも似す

蔦ていをとりよせよ〆倦く今夜もと

うさうかれ見へくゞ筆さて下つとう文字ハまりが

誹しい吟声ハ鼻のおろかくして花也と

まうわゑしきうかなしにやるにしけふ郭ふ

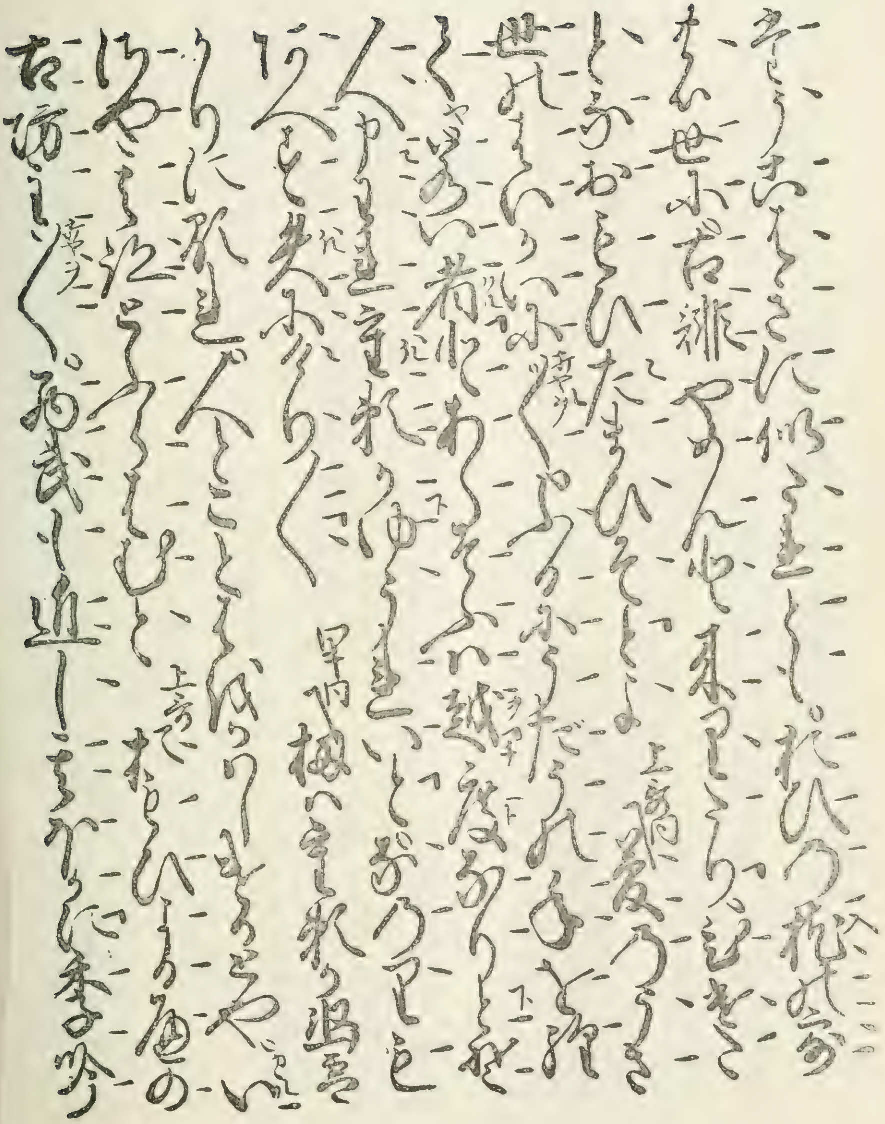
つねふう坊も季吟よまさう維舟すらく

三一句 いうふかあいわくつもふ随家中ハ曲うが坊

まて破邪顕正しハ無分の新式なれハ了梅翁
るる改をおけらせて事八付併しめされて
紛ク評判ハ悔しむるもいはれなく（ミテ）見ニ
て悪きハ破邪顕正しく作（ます）べく於か
まくの拙吟の紙にしるしハ右衛門維舟が
武季ハとなまりの作者坊主と先達として
俳ひとおしらぬ物ふくゆへて越鄙遠ハ
俳口として笑しき事ましく始終ぬくりん
ゆへ（評判にはくあるまき新式ふくゆへさ
はなる席文ハ同倉として俳徳如泉が風交

静寫まくらのことはわれにまかせ給ひの
しかるにいまふくみそ　言さんは此集中
とみくさいにて付くおもしろきことしれ流
にくやすき機わかちじじしらひ此底本
只着し俳句わかちし人今は打まさ、
只俳のまことしらざる故ゆくつとうてまさ、
わまりに文辞山風なしハ季吟翁あ
のみなりしかるに門弟しが今万
俳諧のみちを事覚えとわすさまいせんか
とりの道机なきしとらいし色よいおもひ

しくハ破邪欤つらんかうにつゞき杖もり
まつゐ書なれハしくハ今ふらわひつ
破邪欤しくやハ写勘脇庸つやつれと着
ハ畫のゐとしにしく人なれとし今と
門々草村しゐつく点料点とわ是
ふまし巳とおも庸しやハ分てよくは
わ連さひとのふい縦とその破邪欤乃匹
慕しらふあとのほとふ布やらん歩ハ
いくた昼付とそれ迄居し今うつらさ
ふくひや亭かをうにかせしけれふつゝ食人



鵺名をとらんとしく枝ゆゑ其いさとこそが
やさし紙いれくさいしわだらけ下
手功そとおし古風徴章してこうが世
いうかしさも眠りなへわくら自由に
ひしやげの者ハ諸商用の小袖あつく也
わすてと捨てもろふこそのゑとの
そもそうしと書くなりの訳とぞやア
にこしと
悔しいかつをも向んかおもらさ

ワキカル
川もの商家やだりけく将ほやすの勝てまえ
不思役やふれ古き賞れ財かく今やう

かへ隋とも急ぎ門むさし也とやたりれハにけり
さ國やかう拙坂の俳者その宗匠く
ましまたり 三字 翁引やなにハ西世の俳也
くとかく道成しかし多茶ねきえんの花さきゐ
くれやわくれなれし道なれ俳く西
もいやすき格泥へ 甲まれ 升ひやもく数めせ
五十六十のを人まふかや形にふ似をもや
西俳諧さしこえひたし 三字 因や今世
の中小 早 もり也とやうすかわひり
おひさりふの名ぞ 三字 宗平等ゐ抱なる

よおもひ入るこれとき世のにをしと
新らへ彼邪孔のくざまれて平ともする
なれ恥存にまちひとひれぞわさ傍
にしさへ今ハ何とうきひつきまハ直なか
彼邪孔れは生涯と他アり道ぞへ今机
にハ良りうきおいけて古家のあり私か
もをるかり拵をさしそのは古風の
臭着をうけしていうおさみ家と粉名
いとゆかれいけ原町言弁のは此の為ふで
これ彼邪孔の浅合やりて行き付けしもれ又

是やさ流さしく落よりやまと詞にたけなるを
付とめらるゝ撰するの條は追行の句を
ミうほうえんくやえとおしたの風さら更
厳声をもくこゝろまゝ情をよそに見へてぞ
うき世の多少こゝろをうつしとおもきこゝろ為作
おさして落くゆく李杜の格ふるのかく
序の思東のひまとあく維舟に行まく
人他のもるもとしころもやさるる段
中りあらかるゆへなるしとく實相院にして
将序をかいて臣をまくつて宮厳の中のなりました香

あさくハ苗子ともこそへのくろしや無色しら見えかん

しつよくへるびもと谷のそうりきうれて來

蛍くいの五人着て相流れ南小ゆ庵り

打れそゝ茶白のうちあさうるれまざまたざく

てくおひてーにきやくてんれひとすべ色さて

吟ちうけ味方より同流の丞氏李外梅盛卿

まんやがくさうんくされはよたるとゝと寂かがかくく

おもるれ大将右からのあるハ今ゆーよらぬら

付くのかう設あまーしとさ大右おふわしらふ含き

敵ろすみりえなしでぞ蘭家の勝か御ま流れ女

去く日古風の作りてゑせと名高き人々あるを云
百條句體にとて續枝席一ヶめしためたるをしも
ありしもあらんの翻とかく字をもとくやと
白かあまり咲かつくつ付くけり續きくるゝさ坊主
いまゝしからるるそ披きらむとこそ諸著と下知していかく
日あるつくるゝ言もとも古事付く知る下
よまさ付句とあおもう下るゝれにまさに古事を
済せよ祢かうむ味方りゝう今せうはませたり
ひよ古跡とをふまへしだてまゝの下知まるで
其さもれ丸古今集まてし一句とのうきしたり段

あまだはらひしく細道し味方の面々はせられいらず
ら兵もなしまゐらせてわかえすと
ちつゝてる杖を途くすてざこにわへから
上 さろほふつ乱出下道とてくとわつゞく
シテ上 斜ぞ秋のあの法の門第の者も近よまれい
シテ 今は何をかぬとくさして一筋にまくつ
下シテ 武道まくとれゑひて噂実相院の庭の面
扇なる恭れおれ坊ほられはさをされ巾脱
檜座を組くやいと撫でしいさびぐる
く冠者とく シテ むと道ふつい鼻いとしこよ

旨

あまれをさり身知らぬ袖云う川を悔しき
詞もひきまへ読人よふりて見えらしつむしく
ひがし死生貴の風り人今風とわけ不與
の宿の風ささく世しくらすら見て
なく世ふから

此一冊ハ大坂天満梅翁の章句ともいく清
書のため写し南洲におくる是もかゆゑ
心下右誹諧老夫〆い此言曲と并ひ徹し邪
見ハほのかにとらかく進み梅翁の門下に
前足とにつく南洲と宿ますへし就去吹
もろうしおのくハ焼甚とも是こんとにはつ年
志うし

于時延寶八庚申月上旬

梅翁門弟

某

中庸姿
破邪顯正

ふたつ盃（さかづき）

二つ盃

いづれの御時にか今様誹諧しあまた侍ひ給ふ中にいとやんごとなききはにあらぬがすぐれて時めき給ふ有けり古風より我はと思ひあがり給へる御かた〳〵目ざましに物におとしめそねみ給ひて、破邪顯正かず〳〵射出す矢じりに星をいるもありあづちを越して世の笑ひとなれるもあなると見えたり予願ひ有てある神がきにつやしきどろみ侍りけるに夢のうちに一人の翁來りて世のはかなき事もおかしき事もうらなく語り侍りけるついでに誹諧の古風今様公事と成て双方訟をとけけれ共あつかひと成て事治り候ひぬと一〻長物語せるに神風松に聲して夢覺めぬ不思儀ニおもひて筆に任すものなり其訴状ニ曰

乍恐言上　訴訟人 舟橋山 法橋寺　相手 惣本寺 高政

一高政當時御法度之新地を建立し惣本寺と號し狹ニ欲心ニ邪誹をすゝめ連衆をまどはし候御事

一和哥は佛神之躰なり此和哥二ッに分レて連哥と成ル連哥は詞花艶葉にして下愚之輩依レ難レ學二世俗之詞一を取もなをさず道に入レ候ゆゑ憂婆塞憂婆夷とも誹諧とも申候是本凡夫の誓願和光同塵の神躰にて御座候處惣本寺半傳連社高政天地をさかさまに云ヒなし直なる物を無理にまがらし一宗の妙躰を不レ立日月を下部の仕ものにし太神宮を脇屑買にたとへ天滿宮を傾城ニなし天の逆鉾を摺小木にし帝王ニ犬の馬痢をなめさせ候ても道のさはりならずと獨吟の百因縁にときひろめ候此大外道於二條目一は佛神の道すたるゝの間災如レ按に可レ有ニ御座一候御事

一新式等の戒品并付合ふるくさしと云て不レ用・てにをは等我まゝを振舞きのふけふの隣もしらざる事共云ひ散候事祖師高僧をないがしろにし已レ一宗の祖といはれんと欲するの條大邪心の證據にて御座候御事

一高政名人と聞召戀の獨吟を被レ爲ニ召上一法眼にもなし可レ被レ下候由の院宣をかうぶり候抔偽をかまへ法眼にも被レ成らさきに任ぜられたる處の三ッ物の發句を出し人ニ信仰させんと仕候事欲心ふかき證據にて御坐候

御事

一高政獨吟の百因縁を作り題號に惣本寺中庸姿と置候事中庸實相の理と申にて可ㇾ有ニ御座ー候孔子もこれをよくせず納僧も悟入しがたき處聖賢大善知識にも越へ悟道の人と身をふき候事大外道邪誹の證據にて御座候御事

右之通被ㇾ爲ㇾ分ニ聞召ー正法に歸し候樣に被ニ仰付ー被ㇾ下候はゞ儒釋神の三ッ物元日徑に長ク傳り諸山諸寺井筒や庄兵衛まで難ㇾ有可ㇾ奉ㇾ存候

月日　　舟誹山　流隨寺

拜上

謹返答書

一御法度之御地をかまへ惣本寺と號し候との御事私ニ惣本寺と申樣なる我慢は更にさしはさまず候愚僧は誹諧三昧の持庵にて前句付の佛所をも。いださず候宗因の發句を聞て世間〆申ならはすにて候世間〆惣本寺と申程ニ流隨寺も世に被ㇾ鳴候へかしと奉ㇾ存候それ故偏執にてかやうの難題申懸らるゝにて御座候御事

一誹諧も和哥の一躰ニして佛神の躰たる處狼藉を云ヒ散し天地をさかさまに云ヒなすとの事。申樣ニよる事に候たとへば水にうつる雲を淵に天共申事ニ候へ直なる物を無理ニまがらすとの事何べん共なく直なる庭木の枝も一曲つくれば面白き同前ニて候へ日月を下部の仕物にし大神宮を紙屑買にたとへ候との御事小乘誹のせばき眼〆もつたいなく存候事尤ニ候佛神の御慈悲は下部紙屑買の事はさてをき衆生濟度の方便ニは苦と毒との中に御身を沈め給ふためし多シ不ㇾ云して此御慈悲を顯し知らしめ申事則佛神の御心にて御座候へ又一宗の妙躰を不ㇾ立との事不ㇾ立にては無御座候得ども密教の句躰小乘誹の耳へおちざる事尤ニ候へ天滿宮を傾城にしなし候との御事天滿宮本地觀音なり卽現婦女身の御誓願何と被ニ心得ー候にや觀音の御事は不ㇾ申ニ及ー普賢も江口の君と成て世に出顯し給ひし御事に候御慈悲を顯し申處ニ小乘誹の眼まさしく奉ㇾ存候へ又大逆鉾を摺小木にしなし候との御事地藏頭に摺小木鮹の入道に千手觀音。もつたいなき事におもはるゝは尤ニ候へども本來無一物の大乘見に何ノさはり候はんや〆又帝王

に犬の馬鞘をなめさせ候との御事此句作り今様の發明にて候何の古事にてもあれ其古事をかすらせあひしらひて犬にもせよ猿にもせよ今案之物にて一句仕立候時は難なく候御事

一新式の戒品并付合古しと云て不レ用。てにをは我まゝを振舞候との御事新敷キ付合無レ之ニ事候はゞ古キをも用可レ申候得共 新敷事濱のまさごに候へばいにしへ付候様ニ又申候はんも新敷付候が曲事とは難ニ心得一候ヘ又かい品の事第三千ノ威儀表八万ノ戒品盡クをこなはれ候を悪敷と見やぶるにては無レ之候。とかく一宗〻の立派にて御座候吟味つよくて一座無言の行する人あり連哥律の家あり一念即誹を本意として出家發心のうつくしき詞を本とせず捨家棄欲のてにをは留をも標せず文字の五戒にもかゝはらず七文字八文字十文字にしたつる宗あり妙の一句を大事と解て法華八百音の卷をたもてば在家の破戒も寂光淨土の會ニつらなると被レ教流もあり。 とかく如說に執行いたされ古風繁昌。 易行宗の我〻も本意たるべく候小乘の身として爲說妙誹唯有

一乗句をそしられ候事法華ニは得白癩病と說觀經ニは唯除五逆誹謗誹諧と說給ひ候へば必墮無間之業笑止に奉レ存候ヘ又きのふけふの新敷キ事是もさはる事なき大乘にて候併新敷キ事斗りを本とするには非ず。玫えとてもくるしからぬと申にて候大乗極誹の面白キ付やう一念歸命の上に念〻作悪皆是三摩地六道四條邊の万句に向ても遊戲三昧せんと有ルを不レ知ルにて御座候御事

一院参へ被レ爲ニ 召一候儀は口上に可レ申候御事

一題號に中庸姿と置候事自得し行ひえて誹諧に其姿を顯し見するといはゞ今言上被レ致候通りにても可レ有ニ御座一候へ共愚僧こゝろは朱子の曰ク憂ニ誹諧ノ失ニ其傳一而ノ作也と依ニ此ノ言ニ致ニ題號一ト候釋尊も嘗受ニ諸法闍提之身一勿レ聞ニ一乘誹一と說給ひ候に貞德崇聞立圖縁覺の二乘のみにて難行ゆへ京も田舍も誹諧中絶に及候て閑頓一乘句を失候を憂てつらね出し候故如レ此名付ケ候御事

右之通被レ爲レ分ニ 聞召一古風興俗之徒黨御しづめ候下候はば茶代五文の散錢を以て方〻万句の廻向もつとまり難レ有可レ奉レ存候

月 日　高政菴

拜　上

兩寺謹々被レ致ニ伺公一御評人よみをはり被レ申候へば御眼がひかりを出させ給ひて宣

先は流隨寺愚の至極なり佛にも正像末の三時をわけきに隨て解レ誹とも云又儒にも隨レ時ニ作レ句ヲともあり又非ニ隨レテ時ニ施ヒ妙宗匠也云乎とも云差一別前平一等一誹惡誹なり又和哥の道にても皆時代〳〵の風にて万葉集以下の廿一代集各共さま異なり至ニテ今ノ世ニ万葉の風に歸せよといはんや一夜に一折か乃至五十戒もすまぬやう成ル難行を以て下根時機の誹を破せんとする事言語道斷の曲事愚痴闇鈍の至極なり因果經に闇鈍者畜生中より來とあれば前生にては鶯笛や百千鳥の身を受た。やつであらふ以レ愚ヲ訟をとぐる事畢竟上をかろしむるにあり已川原町の中嶋へながさすばなるまひ

又高政大乘につのりて獨吟百因緣の文句放逸無慙なり本願だのみの惡誹と呵責し遊戯三昧のあまり蒙レ笑ヲと云は已レが事ぞ〽新地惣本寺と申事他所より名付ケ云と習はすにて以ニ我慢一自身名付申にて無レ之段尤也併・開板物ニ惣本寺と置候事書物屋のわざとちんずべく候へども不レ改レ之ヲ事所レ爲ニ邪念一ノなり誹宗は我慢のものなり自分に惣本寺となのるたぐひとて外の流までまきぞへにあひて滅宗のもと也

〽又太神宮天滿宮の御事を何の遠慮なく云ひちらして今いろ〳〵ちんずるの返答上を。かすむるにあり言語道斷之曲事也〽又式律大形破戒の事尤頓一中頓一句易一中ノ易一誹さればしほ物干魚をくひ內ヽ西シ東シのたいこを持と聞及等の破戒はくるしかるまじ併ヲ修善消惡諸誹之通戒表八句に次郎ま二郎吉夏草のかげ。などの無常等のたぐひ不レ知ニ其數ヲ一是又言語道斷なり〽又とまらぬ。てにをはにて。とめ五文字を十文字にもする事折ニ一つ二つは興ありてよし過猶レ不レ及大にわろし何となれば不レ留。てにをはにて。とめたるは片足ののゝごとく座句の長〳〵敷キは。かりま高にてぶなり成ル男のごとく上の句の長きは福祿壽の頭のごとくにて皆片輪ものなり東寺の門にあつまり居たる。かたわ者一たんは興あるに似たれども終にうるさく覺えぬ古風の

ごとく停止といはんも又大辟心なり。いとおもしろくも又あはれなる聞ニ十內や重德がことやうの。こはつきにてふつがふなる事折〳〵云ト出タる興ありておかし然ルに高政が一類のみ片輪ばかりを。てがらの樣ニおもひて云ならぶる事曲事のかぎり也〽又新敷付合。はまの砂ニゆ故古キを不レ用との事道具井事にも詞にもかぎりあり何程さがし出すとも追付つきぬべし道具はいつまでも梅に鶯等の事情はかぎりなき物なれば新敷ク一句の取ッ合ヒ風躰今樣ニせざらんは可レ然處に高政獨吟に最上藤八が仕組抔云等の類ひ共數を不レ知高政一類點を合せし衾共を見ればよき句にも古キ付合也と。ひごんし何共え不レ聞句ニ點せし故いかなる古事ニかと問へば嶋原に今かやうの名有リし。ないてにかく申者ゆとき此句は此中富小路錦上ル町に夫婦いさかいゆひし事也などいへり上京の誹諧は下京ニえ不レ聞まして田舎には猶不レ知田舎の新敷事京には。かつて不レ聞言語道斷放逸無慙のやつ也古風の戒品を以てきやつ。しばれ〳〵〽はあ親敷ク仕ル坊主共で御座りまする。おいましめを御免なされて兩人共ニ愚僧共へおあづけ被レ下ましたらば曖を仕りまして古風を畏敬する處の辟をやぶらせ又高政入道井同宿のうき藏主とび小僧共があばれ口をもやめさせ我レおれに成りたる誹諧の一圖に治りまする樣に仕りませふ程にあはれ我〻へ被レ下ましたらば難有存るで御座りませふ

〽共儀ならば先ッ兩人共ニあづくる程に左樣ニ心得ませ

〽ありがたふ存じまする〽はあ〳〵いかにも〳〵手形〽申請て歸りたる事なれば我〻のおもはく兩方へ云ッて見るであらふが兩人ながら出家の樣ニはなふて鎰屋の源左衞門米屋善兵衞などゝ云ッたぐひがあたまをこそげた樣な偏な氣立じや處で何とあらふも知らぬ事じや使にお行るお衆流-隨-寺方へおじやつたらば例のねばひ口でくど〳〵いはれて先へ行まひし高政方へお行たらば常の樣に。かるひ口で耳取ッて鼻かむ樣な無理いはれるであらふ程に。とくと合點のゆく樣申ておむしやらふには

目にあやし麥藁一把とぶ螢　高政獨吟

此句流隨寺の破邪顯正に詰いへらく一把の麥わらとぶ樣に見えんや。とばぬ物をとばせねばうれしふなひと思ふて。むりにとばせて一句埒あかすと云誠に小乘見のせばき。ひごんなり路邊殘雪爲レ魔動とさへ夜日には見たがひつれば麥わらの只さへきら／＼光り。あるうへに消たり光りたりする螢の火のうつりなば動やうにも飛やうにも見ゆべき事也それを祇園の火とほしに寄せたる事秀逸也然るに

日にあやし麥わらの光りとぶ螢　としたらばよかるべきとの事是又否也とぶ螢の內に光リはある也當世は纔十七文字十四文字のうちに云ってもいはでもの詞はおしき事とて聞へさへすれば不レ云事尤なり又一把と云所句の一手なり古風の衆も此當風にせらるゝ樣ニとおむしや

二郎ま二郎吉夏草のかげ

二郎ま二郎吉と出す樣のせばき仕樣今やうの內にても高政が一類斗也只子共或はわらんべとあれば大郎まも三郎も皆こもりて大にひろし併前句によつて此二人ニかぎりて出す間敷にもあらねどかやうの前句に二人かぎりて出す事高政誹諧未熟のゆへなり又此句虫などに結て草のかげとせば無常にも成まじけれ共二郎松二郎吉にむすびて草のかげ大に無常也高政かやうの事共にて以來宗匠はなるまひと。おむしやれ腹たてられても大事おじやらぬぞ

白い雨軒のかどやに玉さして

破邪に白雨を白い雨と遣ひと詰られたり是も一概に申がたし前句の緣に依て白ひ雨とくだひて遣ふ事尤誹なり前句へ夕立斗の緣ならば白雨と遣ふべし是も二郎ま二郎吉がいわけなき言葉の三出たると見えたればくるしかるまじ併一句かつて不レ付第三はむこのごとくとあればむすめ取返して後の樣にきこゆへ又かどやの軒とこそいふべきを軒のかどやと句作ルとのひごん是も今樣の一躰也前句の樣子によつて林祇園とも遣ふ未來記のいましめなれ共鶯の谷共遣ふ是誹諧なり併此第三は軒のかどやとうち返して可レ遣前句よりのうつりなし此句にてはかどやの軒と遣ひたるがよし高政未熟

の故也かやうの事ども双方工夫せらるゝ様に

風に音ある犬の小便

けだものゝ上にては尿と云ッぞと詰られたり一概の云分也子共の言葉に犬が小便する共なべて云事なれば前句によりて小便とも遣ふべし併此句の様に小便と可レ遣うつりなくば馬痢と遣ふべし此儀兩方共に合點ゆかぬ故いろ〳〵いはるゝ事ぞへ又犬のかけばりに音は立間敷との。ひごん前句に依てかやうにしたつるが今やう也木に竹をつぐといましめて。のがれなき事はならず是も理をなして。のがれたるもの也風つよき時瀧の水にはたしかに音あり此理をなす時は人の耳にきこえぬにて社あれ音のある理也桃のだいに梅をつぐに難なし又句ごに。このめるは。ひが事也とかく前句のうつりによるべし古風小乘なひろく又易也といふはこれらのたぐひぞと。をしや

とらはれて石淋なむる古狐

越王をふる狐にして石淋なめさするとの。ひごん返答書に其理きこえたり古風の衆生等これらの仕やうをならはるべしへ小便に石淋被レ付ケ事高政言語道断の曲事也同じ穴より出る物二つならべて嘴に述とも付ケ事かしらず此石淋典藥の勾踐に被レ懸ケとも いひなをしは成ルまひ

七日塩斷しるしとおもはん

此句のひごんは。あたれり尤も瀧の水の寄を被レ取ケへば狐を是非ともいなり殿にせねばならず石淋なむる狐をいなり殿にする事放逸也越王の句仕やうしられたりとほめてやる處にかやうの事にては物が。いはれぬへ又何のしるしありてしるしとおもはんと被レ詰たり前句ニ石淋愈などゝあらばしるしとおもはんとは。わろし愈となき故くるしからず一句にしるしの物なしと云フひごんは前を借るに依ての事ぞ此道理を不レ知して古風に。いましめられたる宗匠もありしと聞えたり七日塩斷しるしで御ざるといふ一續の詞何の難はべらんへ又一句神祇なりと被レ詰たり當風の發明にて表八句ニ神祇釋教戀無常皆仕やうありてする事也たとへば齋非時とすれば釋教なる故端つけの椀ならぶ邪して齋非時

としらせ。よめいりとすれば。戀なる故奥へあたらし乘物抔云てよめいりと聞せる事なり今のしるしとおもはんも同意也哥はこゝろを以て詞によらず誹諧はこゝろによらずして以レ詞ヲ神祇釋教を定む。かやうの事共古風の面〻返〳〵も合點せらるゝ樣に

　ひま入て大臣何かと暮の月

此句の批言も又付やうも紋のあらぬ事共也前句の塩一つをぬひて付ヶたりしほやくとあらば大臣が付べししほ斷に大臣大キに初心也七日も斷もしるしとおもはんも不レ付一句の首尾をわすれ。道具一つぬきて賦物とるやうに付ヶば何の面白キ事か侍らんかく言へば言ひ曲てのがれんと。しらるべけれ共塩だちに付キ物ノこそ多かるべきを大臣をねぢゆがめて被レ付ル事胸中ふびんと。おむしや

　膝骨いたくきざはしの露

ひごんに玉階をのぼりかね膝がしらを打やぶり血たりて障が入たる樣に仕立ルと被レ詰たり悪敷了見也今ニ膝をうちやぶらする樣に。するなれば放逸なれども本より痛む膝也露を血と被レ見ルニ依て見そこなへり露は只暮の月のあひしらひ也膝の痛ム人はきざはし上ルに隙が入ルと付ヶた。まで也へ又玉階に季を持ッ露は禁裏を野原にしたると被レ詰たり露とさへいへば何に。むすびても季に成也御膳の露ノ瓔珞の露是も野原かと。とや

　秋霧に神はすべらせ給ひけり

右も云ヒし通ッ桃に梅を付やう成ル仕立今樣の一手なれば神通の神とても前句ニ依て神はすべらせ給ふと云程の事せ間敷事にはあらね共膝骨痛を神の御膝にせねばならず高政誹諧初心の故か樣成ル御惱はどかる事を不レ知破邪顯のひごん尤でおじやる

　とろゝや摺らん天の逆鉾

天の逆鉾とばかりさへ凡俗の口にはいださゞる處とろゝみすらせたい。かやうの悪言を吐ても。たちまち舌をぬかぬは日月地ニ落給ふか。と愁嘆の詰り我等も尤の事と思ふ處に高政同宿共地藏がしらに蓼摺小木といへるにならべて罪を先人にゆづるよし聞及ヒぬ扨ァ目やすの返答にも筆するならし初心の人はいひ。かすめらるべ

し地藏頭に蓼摺小木は似たる物なれば表をきらふ地藏を。立るゝにあり各別の事也共罪ゆづりがたし先は御一座の坊衆を始此逆鉾或はみだの三藏草履もてこい等のたぐひかたく御無用高政方にても。きつと。にらんで。おむしや

下化衆生皆精進日の事なれば

一句とまらずとのひごん對決の刻御評人目出度被レ仰付し事なれば是ゟ末も云に不レ及へ扨天の逆鉾神道の根元なれば尺教の言葉なし伊勢は殊更佛道をいむぞ物しらずたわけつくすなと。なじられたり是は神の本地は皆佛菩薩なり下化衆生の御慈悲にて和光同塵し給へると云佛者の詞を以て付たる物なれば何の難もあらぬ句なり。たわけつくすなといへる雜言たわけつくすな

東北院に內證をいふ

此ひごん尤きこえたり精進で御ざると云內證を東北院へ云べき樣なし東山などの旅籠や寺とても寺ゟ魚肉は出さねば內證云べき樣なし若一向宗へ云などゝあらばきこゆべし付物こそ多けれうたひの外はしられぬに依かやうの手筒ふびん也

大かたは葬も時合の鐘のこゑ

東北院を無緣寺にしなしたりとなじられたり。ふぎん抔にも被レ出間敷事にあらねば內證をもいふべし無緣寺にしなしたり共云がたし

寢に行烏すぐに學屋へ

山本與次兵衞とやらん云たぐひの新敷人のしらぬ事共古風ゟしからるゝはさて置キ御評人此とがにてしばれくゝれと被レ仰し事なれば我ゝが批判に不レ及

持病の戀まちん粉にしてのますれど

五もじ戀の持病と云べきと。なじられたりかやうの詞は上したにてもくるしからず又。（人倫にちくせうにせし故）一句更に不レ聞と被レ詰たれ共當代はかやうの仕やう一手也右云し通桃に梅をつく類也是ゟ以下此仕立の句に批言のいひわけは申しませぬぞへ此句の難は與次兵衞に毒をかへ共不レ死して學屋へ行と聞ゆ若烏の性のなをる藥抔あらば。それを用れども學屋へ行とはよかるべし

木賊も鮫も泪也けり

白山に粉にならぬ故泪也と云ッ事にやと被レ詰たり是尤の了簡也高政心は鮮カ泪を被レ出たりと見えたれども。かやうの仕立にては鮫にて粉にする人の泪なれば。ひごんの通にきこゆ但シむすこめに。まちん粉してのますれど悪性やまひでおやじが泪か

あかゞりや眞菅の笠に竹の杖

詰に信濃路やその原山なんど越・行・たび人のとくさに足をすり破りあかゞりに成ルと云ッ事かそれにても鮫に不レ付といへり尤のひごん也是も塩断に大臣被レ付たると同前にて口あたりの能物斗ぬかれたり依而手筒如レ件

十年切て古郷の月

詰に月を十年切て奉公人につかひけるかといへり古風の耳故也月は笠のあひしらひ也いかにも。あかゞりずねの年切笠杖にもゆかし古郷の月と見て難なし

天津鳫遍山遠く中のほり

所化をかりがねにする等の事持病の句にて申せし通りはや云に不レ及以下は。なぞらへて。しれといはるべしへ十年の中土ゟ浄土にかざればば化山と可レ云を禪の詞にて遍山と云ッと笑たり尤也併高政は新敷處の。事知りなれば去年今年は浄土にても遍山と云ッか知らず

後室の子分此度も露

前句と丸じて一句にしても。きこへずと被レ詰たり尤古風にかたまりてはえきかるまじ密教躰とて今様種々の仕様の一手也へ又下心所化の悪名を云と被レ詰たり尤後室といひ又子分といへば左きこゆ誹諧の事なれば。かつへ。きつたる後室に十年ほされて。はづみきつたる若盛りなど。おもひやりて。どつと笑ふ間敷にもあらずへ此露秋に成らぬとの。ひごん尤も云しごとく花とさへいへば何たる花にても春に成と同前にて。いか様にも露とさへすれば今は秋に用る事尤也古風の。りくつたて。やぶられても可なるべし連哥にも古代にいましめたる事後にやぶれたるあり昔シかまはざりし事後代に理を明して制せるもあり

御遺言花に相違のなきやうに

尤ひごんの通り花をば如レ此無理にをしこむる事いや也
花の何とて大事がるせんなし

扨又出羽は熨斗添て春

被レ詰て奥州の秀衡殿より出羽一國を臺につみて判官樣へ進上せられたかと云わろき聞樣也是は秀衡死して後の事也秀衡末期に子共に示して判官公を主といたせ人の知略を聞入なと遺言し相違のなき樣にとて誓紙をかゝせしに秀衡死すると挾ニ逆心ニ己レ／＼が知行さへ他人の物となせりと語り傳ふ他人の物となせるを熨斗そへてと遣ふた物也何にても人に長ク被レ取た物を熨斗そへてと云は世俗の詞也難なき句也又此留りの春はふら／＼するとなじられたり當風一句仕立の一手にて何として春何として露と遣ふなんすべき樣もなく。もきどふにて面白し以下是にひすべし

鹿の角落て最上か塞をうつ

一句とまらずと云フひごんも源藏とやらん云昨今の事も御評人被レ仰聞し上へ批判不レ及

仕組の野べに位あらそふ

此句仕組として最上藤七とやらんを被レ付たに付て咄がおじやる連座の御坊たち。きかしられ昨日一人の友がわせていはるゝにはおれも誹諧をすひた程に。したけれ共去年ゟ隱居をして一兩年の事をしらぬによつて高政流の誹諧がならぬといはれておじやる此咄も使の衆高政かたで。おむしや

十百韻たばこの煙立さらで

被レ詰て煙立さはぐの乘好が詞を借りて野べをあひしらはれたれば十百韻の連衆を火葬にし墓原にしたりと云此ひごんも。さつぱりと高政いひのがるゝ事なるまじ返すも誹諧は下手也前句に野邊と慥出ぬれば十百韻の誹諧等可レ付事に非ず一句よせて被レ見よ是非共野邊にての誹諧也とかく一日千句などは野邊にてする事かしらず

青暖簾の表紙かゝれる

用付ヶとしからるゝ事當代は用付をいかにもする事也三句にさへ不レ渡ば何の子細かはべらん用付うはさ付に無量の面白キ句出來する事也それとても前句を借ル樣

にはせず以下一〻句毎に不ㇾ及ㇾ云ㇷ此句。のんれんかゝれると聞ゆればくるしからねど表帋かゝれると聞ゆる故十百韻にもたれてわろし。かゝると冇をのけゆへば今様無上の句也何となれば前句は十百韻が一句の躰なれば此句又表紙を一句の躰にしてたばこの煙を青のんれんにてあひしらひたり此心行を双方とくと合點めされふ

身はあたに金泥うすく成にけり

一句埒不ㇾ明と云ッひごんも兩方へひつぱると云詰りも無理じや一句にて云ッ時ャ金泥と出せしは。うすくといはん爲の序也

兎のあしをはこぶかよひぢ

人倫をちくしやうに仕たりと云ひごん•あたらず兎は•よそへもの也此句高政に過たる心行のよき付ヶなり前句身はあだにが躰なれば此句又通ヒ路が躰にして兎をよそへ物にして金泥をあひしらはれたり是が最上の付様なり前の表紙の句もかやうに仕たしとおもふての。くどき也

大已貴八十の神風吹とおよ

詰に吹とお物なしといへり•ぬき句とて今様の一手あり是も去のぬきと聞ゆれど。よき句にはあらず

重波よする池のかは針

一句の埒かつて不ㇾ明とは無理のひごん也波よするは池の序也併ひごんの通ッ池は前句の何から出たる事やらん沙汰のかぎりの誹諧なり推量するにおあなむちを。おろちの事かとおもひて池を被ㇾ出し成べし耳學問斗のかなしさ•波のうつり斗の池ならば山神似よらぬ付やう也

龜の甲うみち押れて流るめり

被ㇾ詰曰ク人倫の腫物にては重波も池のかはも付ずと思ひて龜の甲にはれ物を出來させたりと。尤當風には龜の甲に腫物も出來さする事也生ものなれば出來間敷事にあらずのがれあり

浮木について蝿たかるらん

ひごんに取所なき用付と云表紙の句の下にて申せし通

鳶口も扱はかうよともちをぬり
いよ／＼用也と云前に同じ
　肌着一重の御芳野のおく
ひごんに付心うとしと云尤
　月今宵篠吹風の鼻筆に
詰て五もじの置様に邪風未ふくめるといへり詞。もぎどふなりとや岩と岩をすり合する様成も折／＼はおかし柔和忍辱の詞ならねば佛にならぬと思ひ被レ入たる小乗見浦山しからず
　思案かはりて槙の葉の色
ひごんに草木心なしとは。いへど思案かはり槙も秋の色に出けるかや人の鼻筆を聞てかはる思案なれば槙に耳なし猶ふらちと云無理の聞様也我しあんもかはる槙の葉の色もかはる也連哥にも此躰多シ
　お年といひ袖に過たる露時雨
詰りに。かつてきこへずと云尤たれも。えきかず云て見ば此老法師等が年に成て袖に過た泪だ。じや程に。おむつがらんすなど。云事か前句へ心かつてかよはず

　見初て七度かはく腎水
詰に戀の放埒とて。かやうにはせぬ事と云世界にある程の事を云ッぶ誹諧なれば腎水かはく戀何の子細か侍らんへ又白鬚の明神に龍女なんどを見そめさせ淵水を七度かはかせたるにやと云一句は腎水七度かはくにして下心にお年の白鬚を。かすりたる物にてこそあれ。やくたいもなき。ひごんなり。此句をなんぜば無功なる付やう也腎水も七度迄かはく程思ふまゝにそふ妻に。袖にも過餘る程の泪あるべきや。かなはぬ戀。別レの戀。うらみの戀等の心に。ゆきたし
　かるもかく伏猪の床の中二階
ひごんに伏猪の床の中二階七度かはく事古事有やと云云尤の詰り也猪が中二階。木に竹を。つがれて。のがれなし若又床のいひ懸りと。いはゞ。いひかけの仕様を。しられぬ故也早といはんとて吉野川といひ。長き夜と。いはんとて山鳥の尾と。いひかけし類の仕様誹諧にもなき事には。あらねど。それは事ちがひあり又此句も前句へつける事にや。ふびんの事也前の持病大

津腐の兩句の仕立にてはのがるゝ也工夫有べし

　ほこりまぶれに天狗あれけり

ひごんに太郎坊の術を。もつて伏猪の床に中二階は立らるゝ事も有べし。ほこりまぶれには何とて成ﾘ給へるぞやと云中二階にほこりのあひしらひはよかるべけれども前句の躰を請て次の句の躰の立ﾃ様を高政不ﾚ知故此難のがれがたし工夫せらるべし

　虚空なことはりにやる雨むかひ

ひごんに前句の天狗中二かいのつゞくり普請などせらるゝかといへりいかにも其心行と見えたりわろき前句の請様なり

　おそなはりたる四ッのかり物

ひごんに獄卒の方へ五躰を家質になど入て雨むかひへ。ことはりけるかと云いかにも其心に付ｹたる物也今様の誹諧に虚と云一手侍れども。かやうの。のがれなき事はいはず

　胎内にきのふ宿札打たるか

ひごんに。うつたか。うたぬか高政自身にかけもどりて母の胎内をうかゞへかしと云尤の非言也例の木に竹をつがれたりある人の句に〇めがみを神重箱二重むまたりと云ｯ句せられたり是はめがみをがみ一切皆産出し。たまへる事なれば重箱も其内にありと。のがれたる物也かやうの句の桃に梅をつぐ仕様をきゝ。はつり高政木に竹も付事かとおもはれたり。どつと笑や

　かゝる貴人のさゝら三助

請りて一句も前句がゝりなれば落着せずと。いはれたれども。それは古風の眼也此句疫病の禮に被ﾚ取たる事取様もよく。のがれもありて大かたよき句なり

　忝も普代の後胤水仕の朝臣

ひごんに。かやうに。そゞろ言の。むりいはずとも。はじめは貴人成ｯしかど落ぶれて水仕の三助に成たるよしの。きこゆる仕やうも。あるべしといはれたり。時代の風とおもはしませ

　・所帶は今がはじめ也けり

ひごんに。なりけり留りは一句の心なくては不ﾚ留物也と云尤なれども普代の侍何の後胤何と云ｯもの成け

りと云ッ詞。双帋共に多ければ双帋の詞が出せりと。ひいきに聞てやれば難なしおゆるしや

八雲たつ出雲に親の恩をしる

ひごんに八雲たつ出雲は三十一字のはじめとこそあれ所帶のはじめとはなしと云是はさん〴〵の詰ッぞや此句はいかにもよき行やう也　所帶はじめと一句しかと。うちつけ哉親の恩を知ると付て八雲立出雲は。はじめと云ッ詞を又一曲あひしらふたまで也　此あひしらひが今様也古風より今様は面白シと云ッはかやうの事也

麓のちりひぢよりなりて釋尊

ひごんに。ちりつもりて山となるとは。きけども釋迦に成とはめづらしと云古風の耳〆左様にきかるゝは尤也是は山のぬき句と云物也　ちりひぢが成てと云ッに山あり其山に釋尊おはしますときかせたる物也〳〵又親の恩をしるもの釋尊斗と覺へたり。あさましと云釋尊に父母恩重經あり孔子に老經あり或は二十四孝等前句のうつりに依て•いづれにても。くるしかるまじ

方便の月に花ふむ鳥箒

ひごんに月は眞如本覺に取ル方便とは道理相違也と云々方便の月と遣ふのがれもあるべし昔年久敷月出ざりし時に扇子をあげて月は如此のものと。しらせり。しらしむる様の手だて則方便也是方便の月なり又釋には方便卽眞實とあれば方便の月ともつかはれまじきに非ず〳〵又釋尊に方便同意と。なじられたり　是はいか成御事ぞや哥人の名出れば其人の哥を取りぬ事是も同意にや釋尊と出たらば方便一つニかぎるまじき聞釋教の事皆同意たるべし大笑〳〵又花ふむ鳥まではきこへたれども箒に成てもふむやらんと被レ詰たり　花ふみし鳥の羽箒ときかるべし　今やうの誹諧は世上を標して。うつくしく物いふもあり心あまりて詞のたらぬもあり舌頭にてきこえがたきもあり

氣々に應じて一様の権

詰りに氣々に應身此句へも釋尊出世なければ埒あかずと云一句の埒は明くべけれども氣々に應じては方便のうはさなれば釋迦を不レ離二句に渡りていや也

久かたの天神圍ひ初賣に

此句の狼籍目安の返答を見れば高政にも一理あり尤面白シと思ふ處に御判人畢竟言語道斷の曲事と御落着の上愚判に不レ及へ破邪に高政天神の御影になましらぬ讃かきたる笑ひ有り不レ知は。しらざとせよといふ事高政例の耳學問には未レ聞や

枕ことばの殘るさらばや

破邪に前句の久かたのと云ことばのことはりかや念の入たるいひわけ也といへる通り。尤腹筋の事也 付句にてはなし前句の評判といふもの也拙者はじめてちらと此句を見侍りし時高政首書をして置れたるを筆者誤て句の樣に書たりと思ふたれば付句でおじやった程にの

せはしなひ戀しらずめが呼に來る

批言に皆例の嶋原ことば。めづらしからずと云流隨寺も。きのふけふの嶋原詞を知られたが。くさひ

よしや一太刀婚麗うらみん

尤ひごんの通り傍若無人也併惣本寺にすはりては佛菩薩の首をはねてもくるしからぬかしらず

張貫の文函の蓋へ亂レ入ル

批言に付心も一句も本性の者の樣には更に思はれずと云尤たれもえ不レ聞 推量するに山伏など。ぶんこの蓋やうの物に札を入レかゝへ。ありきて 焔魔法王五道ノ冥官などゝいふ事か 若左樣ならば此兩句の間に今一言亂レいらずば聞えまひ

しみといふ虫玉と見るまで

哥ニ物いへば澤の螢も我身よりあこがれ出る魂かとぞ見るといふ哥の心にて螢などならば玉ともいはるべきかと被レ詰たり流隨寺了簡ちがひ也たましひの玉に非ず文函の蓋のあひしらひにて毬打の玉なるべしとかく愚僧の僻耳か左なければ何共不レ付扱しみは人魂にさへ見まがはれまじと詰らるゝ處毬打の玉には彌見まがひ難しのがれなき故一句不レ立いな物じや

穴のあく蓬萊宮に着にけり

をれは高政がそゝりことじやと思へば流隨寺は唐人のねごとゝいはるゝ

さぐり足して三千里さる

うはさ付と云物もかやうに多ク其うはさにてくらす物

にあらず

　くどひてはなるてふ桃のことしより

ひごんに桃を人倫のやうに仕立ぬれば道理。かつて聞えずと云尤の詰也又愚難じていはん三千の二字ぬひて付たり塩一つをぬきて大臣を被レ付し類前の鮫と同事也里去は凧の引かぬ様に土蔵へ入て置所へみちとせの桃。さんせん里去。似た事にてもなし是にても誹諧といふ物か。しらず。

　盃なけて遊びとる也

ひごんに前句を三月三日の様に思ひて曲水の宴の心をまはしたと聞ゆ桃の木哥は春なれども其方が前句は春に非ずことしたる實に成ッといふ一句夏也と云云此批言哥の心は三千年に成ッてふと讀たる物なれ共三千年の五もじをのけたる故桃の成てふと聞えて夏也とのいひ分と。きこえたり　あまり入ほが成ル　ひごんなりくどひては成ッてふと有レは桃が成實する也然に春の桃なれば曲水の宴尤よし又此當句春にする事其方一人なるべしと被レ詰たり一句まつたく曲水の事をいひたる物なれば春也いろ〳〵無益な註をつけてわるふ言た物ではなひ

　半日の春の二藏か春の夢

批言に見渡せば蓬萊宮より仙案のうはさ左句つくれりと云高岱自身にさへ。如レ此の初心の。ものに点を願しものもあるとなれば目あき千人目くら千人

　育立の月総に行ッ道

批言に月を前句の二藏と云ッ。かい立のでつちにしてつかひころさせたりと云の〻字を。ににして育立に月杯あらば行く物のならべ物にも成べけれ共。かい立の月落居して是非共二藏なり故返答書にも落着して詰て利口げに。はれたれども　御評人かやうの事御同心ならねば愚意の按を不レ及レ加二

　朝の露もとの仕方はわるけれど

ひごんに未月の二藏がにくきにや色〻ここまでをはぢく。もはや三句目也堪忍せよかしと云など〻被レ褶た心を以て見れば木ほ。にくかりしかど今は月が死んだに依てかはひと云ッ事そふな堪忍せよといふまでもおじやらぬぞ

又色かへてあつかひの山

あつかいの山と云ゥ様な。のがれなき事をいはるゝによつて流隨寺わらつて曰ク二藏が事は堪忍したれども又色かへて女房の山の神があれけるとや笑止也と云此御内儀の山の神殴にこそ堪忍めされよといひたひ

疱(イモ)の神南に去鳥のこゑ

詰リに。いもの神鴈がねに成て。とばれたるか。きこえずと云 一句はきこゆべけれ 共あつかひの。あひしらひは何やらん疱瘡やみをあつかふと取なしたか腹筋

緣遠うなる若のうら浪

波の上に緣遠うなるといふ事なしたわけつくすなと云云是は無理の詰リなり 緣遠う成は若のいひかけ也前句は鴈が躰(タイ)此句はわかの浦が一句の躰(タイ)にて大形よき句也疱(イモ)に緣遠きと。あひしらひ 去ルに遠ッ成ルと。かすらせたり前句の躰が鶴ならば上ゝの句成べし

かきつもる藻(モ)屑(クズ)の身して耻悲し

詰リに付心はさも有べけれ共　文のことばには成がたし。かきつもるもしほなどゝ。つゞかずしては文字にきこへずと云 かきつもるとして文章たしかに聞ゆ

命長ければ砂にほさるゝ

詰リに一句は何としたるものぞ 命ながければ砂に。ほさるゝ事は棄(キ)老(ラウ)國などの事にや又かばねをさらさるゝ事にやと云 又拙僧判じて見ば。命長ければ欲(ヨク)ふかふ成に依て見いらを取に行き取そこなひて砂にほさるゝといふ事か一句たれもえ不レ聞

上ぬりのへついの山の小夜あらし

詰リに。へついの山あつかひの山鱠(ナマス)の山。さかやきの山。かやうの山かれらが第一好むと云 へついの山。鱠の山。さかやきの山是レ三ッは。のがれあり。あつかひの山は。かつて。のがれなし自然一つなどは。めづらしくもあるべしと流隨寺おとなしくいはれたれども。あつかひの山と斗は一代に一つもせ間敷事也山のあつかひと云を。ひくり返したる物と。ちんずべけれども林祇園鶯の谷など云様にひくり返しても。きこゆるはくるしからず。きこえざるは前句何様のうつりにてもむくりかへさず。さゝめごの山。噯(ツカヒ)の山高政きこゆるか

松はもとより蔟ねる也

此句を。かやうのぬき句は自然一句も誹諧なれば。ゆるすべしといへり 流隨寺を小乘の至極と。おむしやるな大樣な所が御ざるぞ

中の君雪の詠の御時に

破邪に一句のせんよく立たり。さも有べしとほめられた高政うれしひか

三幅對の夢のタぐれ

詰に一句の道理何とも埒あかずと云 尤也三ぷくついを夢にみたと聞ゝばきこゆる樣なれ共それにては夕暮聞えず。とかく三ぷくついを懸る。あだな浮世の夕暮と云。事か腹筋〳〵又前句戀也 夢の夕暮は。うき世の夢にて述懷也 戀に不ν成と云 使の衆先へ行ては。おむしやるな愛はかけ沙汰じや程にいふ此やうな足もとな事さへ知らぬといひ仙家の五句續もしらぬといひさんぜん里去に。みちとせの桃を付る等の數〳〵といひ付やうと。いへば 男女あとつがひたる樣な付肌のあはぬ事のみといひ。かゝりたる事は侍らはず

つきつけにあふはわかれと知りながら

詰リに。ながらどめ習ありと御評人御了簡の上前後皆不ν及愚判

さすが凡夫の鐺玉の露

詰て露の事いろ〳〵いひならべられし内に季を持露をいざしら露といへり判。前にあり〳〵又。もはや。いひやめかしと云かやうの事繁は愛なし 一座に一つ二つは興ありてよければいひやむ事は念なふて露

地獄の月日連尋給ひしに

詰て地獄の月と。いふ月なしと云 尤也一晝一夜あれば月もあるべしとのがるべけれ共 それは壽命の長さ。つもりをいひきかせる方便也倂鬼の目などをつかひ樣にて地獄の月と。いはるべし 此句作りにては左きこえまじ 此難。のがれがたし〳〵又しやうたい夫人を鉾にてさしあげるといへるを鐺玉に付るにやことばの名目ちがへりと云 此難ものがれ難し

佛をしへて借錢の秋

被ν難て佛は衆生に福田を。こそをしゆれ 借錢の秋に

あへとをしへたかと云若貧は●ほだいのたねといへる一句か。それにては前句にこゝろかよはず

花もみぢ娘あまたに生れ行

被詰て此句にかぎらぬ事ながら何事をいひけるぞやかやうに一句をいひても誹諧じやと思ふかや一句を取放て花紅葉は共座也せねばならず●娘あまたをば借錢のかたへ。生行を佛の敎の方へと。前句斗すまし一句の上の算用かつてあはず花も紅葉も前句の借錢の方へうばはれ。いよ〳〵一句ぬけがらになれりあさましと云是は無理な註を入たるひごんかと思ふ愚判には此句は世話に娘の子は強盜八人といへるを以て付た物そふ也花紅葉の樣なうつくしき娘があまた產れ行キ借錢が出來たと付て佛に花。秋に紅葉と。あひしらひた物なり。あさましなどしかるべき句ニあらず

おもひのうは着八丈が嶋

詰て〽八丈が嶋は花。もみぢの名所か〽又娘あまたもてる人は嶋へやると云事有ルや〽又八丈が嶋にはよき娘有てきぬ織と云ッ物がたり聞たるや。きこえぬ嶋もの也と云此三つの難尤一つものがれがたし八丈が嶋は前句の何方出たる事やらん流人のみならであさましかりける誹諧なり

中むかし銀座のかはす浪枕

詰て去ル人の云ヶ銀座の與四郎流罪の事也といへり扨も新俗放逸をはく事かなと云尤也中むかしの五もじ高政樣なればこそ。よくも斷て御きかせ。なさるれ。とてもの事に年號月日をおかしられひで

鷹の劍のかたなゆるされ

ひごんに一句の作りやうさても無調法也是も與四郎流罪の時刀など御ゆるし有けるにや。いまだ其外の事もあるべしと云いか成故にてか流人に刀ゆるしたまひけん知らぬ事なれば。いぶかし　又流罪の時の事にてはなく平生町人には刀御法度なれ共銀座には御免と云事か

おく霜の拂ひもはてぬ無禮講

詰リに一句道理きこえず。をく霜の無禮講を拂もはてぬといふ事か。きこえずと云尤。序とも。いひかけ

共。いはれず亂氣なる者の物いふに似たりへ又霜のと。いはねば前句のつるきにうつらぬ故おく霜をとはゞえせぬと見へたり。せばき心入あさましと云微細の事也

有時暮の響くそば切

詰ッに前句霜のと。ある程に暮をひゞかせたらば尤鐘に成べし。本文の道理大に相違也霜に鐘のひゞくと云古事は曉の事ぞ霜に夕の鐘ひゞく事更になしと云尤の了簡也愚判

曉かけて響くそば切。としたらばをく霜へ心のかよひもよく。となへも。すなをに無禮講までのうつり。よかるべし又無禮講に。そば切被レ付し事いか成故か侍りけん。たづね。きかまほし推量するに高政。そばきりずきにて。そば切をくはるゝ時は膝の出るも頭巾の落ッもしられぬ故自分の事を被レ付たか左様ならば饂飩ずきの者ノは無禮講にうどんを付け。索麪ずきの者ノは無禮講に索麪をつくべし

何風の吹て佛の臺所

詰に佛ノ臺所といふ事未レ聞と云云これは寺の臺所とこい。のがれさへすれば。なき名目も出すべき様也理もありきこへもせばくるしからず。ひろくてよし。なき名目ぞ何ぞかぞと。いましむれば。かたくてせばし。のがれある事は何様にもすべし淸隨寺も時の風にしたがはるべし

たすきがけにて貧女きまさる

ひごんに釋迦佛のまかなひは。ひんばしやら王須達長者などが法施なし奉るゝ故貧女をやとひ給ふ事なしと云云尤詰の通ッなれ共これは世にうつして。いひたる物なり世にうつすを。むりと。いはるべけれども理を以テいはゞ本一字不說の法なれ共已レ〳〵が境界によつて千差万別に聞わけり今又我〻が境界にうつして。いふて見まじきに非ず此理よりッ是にかぎらず當代此躰の仕立多シ古風もとかく付やうのひろく成事には同心仕や又のがれをかゝへて。ことやう成は興ありておかし

利錢かる夜るの衣をかへしてぞ

十六てにはといふは。かやうの句作りにはゞあらずと

云云御評人御了簡の上不レ及レ判

　鼠の内裏かよひぢの末

詰て畜生道の世界無案内也批判に不レ及と云云有佛の臺所の句にて申せし通ッ畜生の境界はしらね共かやうにも仕立ル事なり併内裏を畜生になすびたる事いや也

　お車の油筒までねぶりたり

ひごんに前句と一句にすれば。さも有べしと云云誠に〳〵ねぶりたるは全ク鼠を被レ借たり。こはそも何事ぞや是にても人の誹諧の批判をするかよ

　鳥羽白川の棚さがしする

尤モ批言の通ッ鼠の棚さがし三ぶく一つい大笑。

　秋風や東寺四塚鍔目貫

詰て前句白川の關共なきに秋風や。鳥羽と云に東寺四塚。棚さがしに鍔目貫。かくさん川は合せけれども一句はいか成ル道理ぞやと云一句は秋風ふく東寺四塚の鍔目貫ときけば聞るゝ上さのみしかるべきに非ず

　廿日あまりの月をふるへて

詰りに又例の物しらず月を前句の。あらつばに。したりと云云 是は月の二藏とはちがひて象眼ほり物にも月星をする事なれば此批言は無理じや。

　今の世の冷じき者小分別

三句に渡りて。いやなれ共前句鍔を。ふるべての心をすてずになれば大形よき句也鍔ふるべの。にせ物しに。せちふんべつを付て師走廿日餘りの月冷じくと云ッ古き詞にて。あひしらひたり 流隨寺長〳〵敷悪口これも無理じや

　内儀かへつてつれあひをかむ

批言にこの一句は何と思ふて立たるぞや末代の女の教戒にも成べしと云 尤也。とかく茶臼とやらんむしかへしとやらん。いふ事か

　丙午晝のちぎりも絶ぬべし

批言によるのちぎりとよみしをひるのちぎりといひたが自慢成べし本哥よるのちぎりといへるは神の誓約の事ぞ。それを此作者は晝のちぎりといひて放埒の交合に仕なせりと云 越王に犬のばりをなめさせたといふ返答書の通ッ何たる言何たる古事にてもあれ共おもか

け斗を。とりて今爰の物にて一句仕立る時は何の難かあらん共上此句は晝のちぎりとしても左程狼藉とは不レ被レ覺愚判には午といふ方晝とうつりた斗にて前句のうつりに非ずして晝といひかへられたる事ねがはしからねど付心は能キ句也尤諸白髪に成まで。そふ人もあるべけれ共丙午の女は男くらひじやと。いふこと世なべていへる事なればあまりよき付ヶ物にて此句をせんとて前句を作りたる様に聞ゆ

左へ繰を子共めが見る

笑て。いへらく子共めが見るなどいへる前句の下タ心推量し給へと云云或人の判にせんべいにてもとらせ子共を遊に出したらば晝のちぎりのたえまじくや

布袋是に爵のはじめとかや

尤やくたいなし下心ありと見えたれ共詰の通一句らち明ず

おもへば伊勢と紙屑買と

此義目安返答書御評人御了簡の上とかふいひがたし

かたそぎの千木のおもりはかはれども

詰の通かたそぎの宮を紙屑問屋にせし事同ジ放逸也但シちぎに。かたそぎといふ事あらば。のがるべし

行あひの間に人やぬくらん

批言の通行あひのまもかたそぎの事なれば否也へ詰て人やぬくらんとはいか成事ぞ神の人間を。ぬき給ふ事はなきぞと云云尤前句とうつりては左様にきこえてわろし此一句にては人多ク行かふ間にぬひて取るときかせ。行あひを。かすり迄にせば。のがるべしかやうの前句にかやうに付クれば神のぬき給ふに成ていやなりたとへば

住吉の市の權衡の錘替へて　と有様の句に

行あひの間に人やぬくらん

と付ては同じ事の様にてものがるゝぞ高政とくと合点せよ

こきまぜて花にいけまきするすみや

被レ詰て一句の仕立やう邪路也と云云尤まだ句作り可レ有レ之句也併道具はよき物故に佐ゝ木梶原が宇治川の先陣あらそひ一句は聞え付ヶ心景氣おかしとほめられ

たり高政につゝと笑や

珍重〳〵珍重〳〵の

被レ詰て珍重は祝義の詞なれ共一句片輪なれば不祝義也と云々尤也たとへ紋躰のなき事をいふ事あり共一座退屈の刻などは一笑にねむりをさませばゆるす事も有べし首尾をつくろひ可レ為ニ祝義一處。やくたいもなきあげ句の躰何事ぞや習ひ社知らず共たしかにすべき事とおもはぬはいかに愚痴なる木性ぞや〽又被レ詰て春といふ字をむすばずして一句春に可レ成作例なしと云々是又尤也批言の通にいひて笑へる人有りしに依て新刊して春といふ字を後に入レたるとなん猶あさまし〽仍口上如レ此右之段々委細に申きかされ兩方の。ひが思ひをひるがへして誹諧一圖に治る樣に同心被レ致よと。ぬけのなひ樣におむしや〽かしこまりまして御ざる最參りませふ〽御大義〽使の衆歸らるゝがいかふ遲ふ御座る尤世にためしなひ長口上なれば遲も斷で御ざる連座の御坊達皆まちどをに御ざらふ程に此間に。わつさりと咄を一つして聞せませふ拙僧所の釜杓子と鍋杓子と此中火花をちらし惡口いひあひて御ざる釜杓子がいふ事は。あの鍋杓子めが朝夕人に用らるゝと思ふて。そりくねりたひ程そりくねり。ゆがみたひ程ゆがんだ事ぬかすと。いふたれば鍋杓子が聞て大に腹を立たれ共尤はりあひて諠譁する力ではなきに依て內所にてくど〳〵いひて供杓子共に語ルは是レこれ聞給へ釜杓子めこそ。ゆがみたひ程ゆがんだ。やつなれと云て。さん〴〵中が惡敷ク成し故小座敷から定規が此樣子を聞て扨も笑止な事じや弦鍋杓子や貝杓子が彼が能か是が能かと思ふて一圖に不レ治ひよんな事じやとおもふて曖に入て眞中に眞直に立　此樣にめされよと。いふたれば兩方の。そりくねりた肌にはよ。あはぬに依て定規を又兩方からさん〴〵にいふて御ざる。おかしひ咄しで御ざらぬか

〽やあ咄の間に御使が。かへられた。して〳〵何と〽兩方へたしかに申聞せて御ざれば。いかにも御了簡御尤に存ジまする。同心仕らふと御ざる故則只今同道いたひて御ざりまする〽扨〳〵一段の事哉〽いゐ高政菴御出

被レ成た。口もかろければ足もかろひ。流隨寺は遲ひな
へいゐ流隨寺よふこそ御出。先早速御同心忝ふ社御ざ
れ御判人へすみ状も上ゲませふず。さらば二つ盃目出
たひ〳〵連座のめん〳〵一盃お過シ被レ成よ肴にうたふ
てあげませふ。さすかいなには惡句をはらひ治る手に
は秀句をいだき千秋樂は　連衆をなで万歳樂には懷帋
を延相生の松風執筆の聲ぞたのしむ〳〵

夢中二ツ盃 終

誹道之混雜神靈悲之乎哀愁之虚妄乎不
計備此一卷矣依金不狹意而無所手
臆病爲戰慄何僭姓名僞新在家之居所
哉金勝入道某居住萬里小路矣雖業於詩
非專學於雙方不齊者可以面談決之也且
爲誹道之興行者乎矣

延寶八庚申二月中旬

いたみや
吉右衛門
開板

誹諧さるとりもち 下通

誹諧猿黐

岳西氏　一時軒

短冊の旗管(ハタクワン)城の固(カタメ)前は花

此發句詳ニ曰ク、表の作意は和漢朗詠三月盡の詩に

留レ春不レ用ニ關城固一ノ花落隨レ風鳥入ル雲ニ

此詩を土代にして管城公といふ筆に直して短尺を旗に見立、花の大手にさし擧て關をかため、春をとほさじ鳥をいなさじとおしみ、花を守護したると云作意なるべし。尤本文の詩の注釋也。さも有べし。

難ニ曰、一句和國の誹諧に非ず。只平仄の合ざる七八言の章句也。又漢唐の俳諧にもあらず。先五もじに七つかなを置事、皆式習をしらざる放埒也。亂吟躰と云事あれば、八もじ九もじ十もじまでも句作りによりてとがめなし。七もじに限りて五もじにをかざる大事有。更にしるべからず。五もじに七もじををく事は、是を胴作り首(クビ)きれと云て第一凶事也。然共此比のあふれ發句には元日の句に別て有レ之、たとへば首(クビ)のなき人を見るがごとし。歳旦或挨拶のことぶきなどには、別てつゝしむべき事也。是大事の秘傳なれども後人初心をすくはんために記す。又五もじを七もじに仕下五もじに仕立る。かやうの發句をば倒轉語(ゴ)といふてさかさま事也。うはかぶきにして鼻息にも倒るべし。せめて此發句を前には花とすれば一句立つ。是を取つき立と云也。但漢ノはいかいは各別也。神國の風俗の似せきれ共云べきか。かゝる異風の發句、日本上代よりいづれノ時に有て誰よりの傳來ぞや。其方梅翁迹(アトメ)と名のらるれども其風流にもあらず。

お閑に御座れ夕陽いまだのこんの雪　梅翁

此句五もじに八もじあれども、さのみ耳にたゝずやすらか也。管城の句と此句とくらべて見よ。漢和のごとく也。たゞもじあまり斗のだてことばを似せそこなひ、いづれも大きにふみかふらるゝ事也。梅翁は五もじに七もじせぬ事をきかれたかやらして、八もじにせられたり。是をぬけ道と云ならんか。

又裏の下心を推(スイ)するに、いかさま當時諸國はいかい亂逆

を蜂起ス。西戎南蠻紅毛流の張本共、神國の風俗を亡し、魔國になさんと凶徒をなづけ、異國襲來をまねく謀叛の關城ならんといとあやしく侍る。

戈を揮つて留けり春

留レ春ヲ不レ用ニ開城ノ固ヲ

此詩の一句を發句にして、又脇に春をとゞむるの、とゞめぬのと付る事皆式同意也。戈を揮ては筆の事にや。尙管城公に同じ。又春のとゞまらぬ事は自然の道理、關城の固を用ひずと古人よくことはりたるものを、留けりとは何と心得たる愚昧の無理ぞや。宗因、高政に、あはれ誹諧の惣本寺とも成て、其名をよばれん事を祝したる本意、不仁偏邪の者の夢にも知事にあらずと、返答にかきたり。此文言世間の笑種也。いかほど高政が高位にのぼるとても、天地あらんかぎり千度生れかはりても、惣本寺と云官位になるべき道理有乎。なられぬ物になれかしといへる無理と、不レ留光陰をとゞめけりと云無理と、荷はゞおふこ中や絶なん。よくそろふたる師弟ならず乎。又脇は韵字留としりて二重韵に仕たり。返答に脇をてにはに留メ、第三を哉留にする放埒也とかけり。尤ながらとめやうにて脇もてにはに留るぞ。かやうニ念を入過て、埋字まで仕たるは又放埒也。しらざるをばじらざるとすべし。かやうの無心躰の誹(ママ)に批判をする事、却て文盲なる事なれども、當時名にふれたる梅翁迹なれば、笑止をかへり見ざるも無下なれば、あらまし批判を記し侍る。

海老のかぶり鉤にかゝれる霞もなし

蝦のかぶり和漢の書になし。鉤をいやといへるにや。發句夥しき字あまりに、第三又二字あまり何事ぞや。連哥新式二句去也。かやうの法式をやぶらば誹諧をばせぬがましならん。一句何といひたる付ごゝろやらん。かやうの句作りのもなし留り総に不レ聞、名人といはれし梅翁の高弟として、かやうの不穿鑿たのもしからず。其方破邪の返答に梅翁の正道を傳へん者は、詩哥の甲に文章の鎧を着し、佛語の劒を帯し、語錄の弓に活法の得物矢を指添たる何がしと名のらん人こそ、此正統を繼とも云べけれとかゝれたり。誠ニ筆勢おもしろし。さりながら其方は、はいかい蒙求の革笠に、近來風躰のかる衫を着、鬼挫語

鉄の礫に骨法の鐵棒を揮つて、梅翁禪魔の一の臣下に、高慢坊の中藏主と名乘出られしありさま、天晴南蠻の大將やと見えし。是和國の風俗にあらず。日本は神代より和歌をもつて國を治メ、安穩無事の世界ム、土も木も我大君の國なれば、いづくか鬼の栖なるべき。神國宗廟の出立は左に非ず、詠哥の冠に文章の袴を着し、佛語の肌よせに仁愛の束帯し、日本記の神錄を鞘に納メ、柔和の弓を携て万民を撫る。是日本聖廟天神流の正統也。

此江山をえしるまひなあ

子陵釣臺
萬事無心也一釣竿　三公ニモ不レ換此江山

この詩の心にや。釣はあれども海老のかぶり仕たる古事にあらず。唯えしるまひなあと備前のあんた詞をのべしは、えび殿にむかつて自慢の鬚くらべしたるにや。

によつと出る一目の月影白し

一目の月とはいづれの書に有事ぞ。但前句此江山と有故に、圍碁の一句に仕立たるにや。めづらし。星を石にし池を盤に仕たる作例はあれども、一目の月未レ聞カ。又江はかうの假名、碁の劫はこうのかなあはざる無法也。かやうのすてのし留り、二句きらふぞや。

希施妻くゝへて霧を吹也

霧を吹とは煙の事か。但下心仙人にして霧を吹せたるにや。夫にては仙人のきせるくはへし事不聞。又希施妻の文字道理に不レ合、作り文字ならん。吹煙管と書よし。

且の風秋をのせたる乘掛に

馬の事か。例の邪談作り也。唐紅に水くゞるとは神代もきかずと、古哥にはよくことはられたり。連俳の付句には、かやうのゑせ作意を大に制する事ぞ。又吹に風二句嫌。朗詠集にも逐レ吹潛開ク是不レ知か。汝猿利根なれば、きせるは咽より吹非レ風にと云べし。四躰の地水火風あり。是内の口より吹。又莊子にも風は天地の噯氣也と云て、天のあくびと云たぞ。

押出す雁の船はるかにも

雁舟押出すとはいはず。與義抄の雁艫も押出すやうに見えたる事也。わざと異風をぬむ紅毛かな。押出す船の雁ほのかにも　といふべきを手つゝの作意ならずや。又出

の字同字有。而八句の内同字もきらはざるにや。

　　ねぶとの山雨によそほふけしきあり

雁舟ニねぶとの山いかなる古事付ぞや。但南蠻流にはねぶとの山名所にするにや。雨によそほふけしきとは、うみ血のながるゝ事ならんか。

　　生姜のいはほ峨々とそびえて

下の句のて留り大事のならひ、祕事有レ是、皆式無法也。先ッ生姜の巖又めづらし。いかさまにもかはりたる名言を承る。ひろき世界なれば。加様の妖物有まじきと云も又せばし。是似船がはりぬきノいはほといふニはをとれり。

　　鱠の酢三日かけて以前より

三日かけて以前よりは、富士の蒔狩の莽ことはならん。しからば鱠は佐殿のけんとん辨當ヵ、三日四日以前ノなますは狩場の犬も喰侍るまじ。扨もすえり物をすかるゝ事よ。又ありよりかよふの留り二句去也。

　　評判の張翰姿じやは〳〵

晋の張季鷹ヵ題する詩に　蓴鱸聊ヵ以テ寄スニ吾思一ヲとあり。もし此膾の事をよそへて、張翰姿じやは〳〵とよばゝりけるか、但此張翰と云けだもの、無類の嶋物にて小芝居をかまへて見セ物にして、鼠戸にてよばゝりけるにや。更にきこへず。左様の事晋書に見えず。是はたゞ似船が火吹竹に、評判ノ屈原からくりの月と云を似せたる一句見ぐるし。

　　お宿にか陶淵明で御座りまする

いかに誹言なればとて、かゝるあほうげたる句作り腹筋也。定て自身は利口いふとおもふべし。扨又陶隲に不レ限賢人詩人數多有ケルニ、淵明計リ近付ニヤ。

　　中〳〵たれども雲無心あり

淵明が歸去來賦雲無心ッ出レ岫ヲ鳥倦レ飛知レ歸一ヲといふ三字を付タリ。心は何と雲が無心な申かねたか。又雲に無心を頼みけるか。道理更ニ不レ聞、是誠に雲無心所着也。古文眞寶をこばさるれ共、唯序學文と見えたり。

　　手本一つ二つ三つとぶむらがらす

先一句二つ三つといひて、村烏とはいかなる事ぞ申かねたれ共手本一つ。雲無心にからす。但又鳥倦レ飛ニ知レ歸一ヲ。此鳥か。しかれば膾より張翰。淵明。雲無心。鳥倦レ

飛。晋ノ代をうけて淵明が事五句見しらされけり。古文一通の講尺承事ニ侍る。又もじあまり五六句もつゞきたり。是より次〳〵皆あまりければ、非言さし置侍るべし。又三もじちかし。

杉村市右勝手淋しき

先むらがらすに杉村同字也。清書の時見付たるにや。むらがらすとかなにかきたり。是義人也。いや群鳥とも書。村の字に非ずとちんずべし。それにても一句嫌ふ。又同じ字訓也。又手本に勝手同字也。但かやうノ同字指合は上手の懐搭ニモ有事なれば、強テとがむるに不レ及。前句むら鳥と有故、杉村市と作りたる物ならん。市といふに鳥よし。鳥に市うしろ付也。用かゝり連哥にも自然ニアり。うしろ付は指式内心ノ上に有事ゾヤ。

長暖簾亂山青くたれこめて

亂山の杉青く見えたるを、長のうれんに見立しにや。例の紅毛仕立也。亂山青しなど有にこそ、杉村しかるべけれ。杉村に青くと付る事、誠に青き一句也。

されば又來るけちきりの雲

一句纔の放埒とてせぬ事ぞ。親子兄弟の前にても吟じなぐさむ風俗ならずや。それを不レ用は畜生のより合也。又雲ノ置字めづらし。是似船が御隠居ノ雲ノ似せ物也。亂山と云に付ざる故、無理に雲をくゝり付たり。見ぐるし。夕べには雲となり雨とならんと、巫山ノ神女が夢中ニ告たりし事アレ共、亂山にあらざれば更に不ニ取合一。又此神女はけちきり賣女にてもなし。亂山ノ青暖簾によき古事ノ付物有。をしゆべし。

杜牧ガ詩曰

落魄タル江山載テレ酒ノ行　楚腰纖細掌中輕シ
十年一覺ス楊州夢　贏得タリ青樓薄倖ノ名

是杜牧ガ傾城狂ヒノ述懐ノ詩也。遊女ノ柳腰ノなよやかにして扇づかひの風流にまよひて、酒宴婬亂を好みし若ざかりは、一夜の夢とさめはてゝ、形見にのこる物とては、舉屋の青暖簾ノ内にて空戯をつくせし大倖ノ名ばかり也と作リタル詩也。是秘密ノ古事なれども、あまり汝古文眞寶好なれば教ルゾ。以來ノたはひ物にすべし。

灯明佛おもひをかゝけて待くれに

けちきりの雲と云に、灯明佛はいかなる佛說やらんとつぶやきければ、去人の云、大坂伏見江口神崎など、船のよりうる共遊女を灯明ともしといふ。それならんといへり。しかれば灯明佛を賣女(バイタ)にして、けちきりをさせけるならん。是高政が、久かたの天神固初賣(カツヒ)に　といへる句と一對ノ道具也。高政が句をば諒につゝしむべき事也。おそるべしなどゝさへづりて、宗因的(テキ)傳正統之迹とてかやうの放埓賞翫する事、是誹諧のきりしたんならずや。灯明佛と云は何じやとおもふぞ。法華經には釋迦彌陀之二尊、又は日月灯明佛トモイヒ、日本にては則天照太神宮ニテおはします。それを大坂江口のけちきり賣女に云下シたる天罰、いかでのがるべき。高政が、おもへば伊勢と紙屑買と　ゝせし句にいやまさりたる惡言なり。世間之人いはれざる息筋ばりで制(せい)する事、やめん／＼之作意なればとがむる事我慢也とおもふ者有べし。夫は結構ナル人畜也。神佛三寶を何とも思はぬ大惡邪見の自性より、言語に吐出す處也。又是を見習て又人畜とも共眞似をする、夫を制せざるべき乎。若一人なり共尤恐るべしとおもはゞ、大きなる世界の建立ならずや。忝も我朝は神國にして、天照させ給ふ太神の天眼(テンゲン)、日月の光灯(トウ)以テ黑白を見分、生命をたすかる。人倫として起ふし行住座念、曉の夢にも神祇王法をおろそかにおもはん乎。然ルを放逸無法のたはぶれ、法を以テ刑罰せば誅(チウ)にも容(イレ)し罰(バツ)しても餘あり。莊周がいへるごとく、顯明の中の不善は人得て誅し、幽明の中の不善は鬼(キ)得て誅すといへり。雷火鬼神のために天命をうしなはん事、何のうたがひかあらん。かくいはゞ又物くるはしき雜言なりとさへづらん。是梅翁・惟中にも、又似船・高政にも意趣遺根(恨)偏執の思入、天道も御存毛頭更になし。是その人をのゝしるに非ず、其邪誹を惡む也。此理を勘辨し知人あらば、なんぞ道をつゝしまざらん。

　三方にかはらけ盃に頻婆(バ)菓(クワ)

頻婆菓天丘の菓子、灯明佛への備(供)物にや。いまだ下心うかれめの事ならん。不レ及レ判。

　極樂寺の花に屈從(コシヤウ)はあらはれて

尺敎打こしゆ。ひんば菓、尺敎にあらず。又發句に花あり。一折に正花二つ無法也。

鶯の執心月ほのか也

和州高天寺の古事に、兒の執心鶯になりたると云事あり。然共鶯の執心と云事、前代未聞也。利口をつくさるゝ事よ。是はうぐひすの執心の扈從になりたるやうに仕たり。更にきこへず。

くる〳〵と七巻まとふ夕霞

霞の七巻まとふ事、紅毛の青物にあり乎。鶯の執心故、霞の大蛇となりたるか。道成寺の下心ならん。まとひ所なくしてわざと無法を好む事も、眞實の道理ひらけぬ故也。淺まし。詩ニも彩霞横ニ翠微ヲ、みどりのうす物也といへり。

螺鈿の軸の青貝の海

螺鈿も青貝の事也。人間の人と云ごとし。扨前句かすみの七巻を青物に取なし付ケか。青貝の海いかなる海にや。霞ノ海と云事カ。海と云にかすみよし。霞に海はうしろ付也。但青貝を海に見たるか。例のけちきりの雲なればとかくせんさくにおよばねども、海の青貝とはいはるべきを、倒語作り也といはんもいかゞ。是二條家・冷泉家の哥の返シにもかつて不レ合。海はたゞ埋字也。大事祕密の倒語ノ詩アリ。汝ニをしけれ共をしゆべし。唐の詩聖杜少陵ガ詩ニ

香稻啄餘鸚鵡粒
碧梧棲老鳳凰枝

是倒語ノ詩の名句也。義理深遠ニノ句對幽玄ニノ共言ヘ微婉ノ一聯也。此詩ノ心汝知るや否。

鸚鵡啄餘ス香稻粒
鳳凰棲老ス碧梧枝

ケ様に爲れば直なれ共、是にては義理淺き故、倒語ニ仕たる詩聖の活句也。是高慢坊などが知る所にあらず。若しりても眞似もなるべからず。此詩の義理解べけれ共、愚人に向て筆つひやしなればさしをき侍る。

うしろには硯屛の山高クそびえ

青貝ノ海と云無理には硯屛の山よく對すべし。たかくそびえといへるが邪道なるぞや。四五寸にかぎりたる硯屛を、小人嶋にてもさは云べからず。又山類ノそびえ二つはなし。

杉けたの馬かよひぢ有けり

杉の馬下駄といふべきを、かやうにするみなとさかに、くりはまを第一とこのめり。

定家卿の詞に、谷の鶯と云を鶯の谷といふべしと書たまふ。未來記、聖德太子の正法のすたれん事をかなしみたまふも同じ御心也。是汝等ごときの末代の外道をおぼししりて、いましめ給ふ道なるぞや。殊に誹諧はやぶれにちかき戲言なれば、成ほどつよく法度をまもらでは、皆禁虐に落るといふ事をしらざる故也。それはよくしりたれ共、わざとかやうにするをしらぬかと又いはん。それなればいよ〳〵たくみたる大外道也。あふむ小町の謠のことばをよそへたるならん。

窓寒き孤竹は雪に打なびき

是も數寄屋まはりの躰にや。紫竹寒竹も有べきを、孤竹と出せる事心得がたし。口は前句の圍をかまへて、付句の客を申入んふるまひなるべし。

田樂くらはず終に餓死す

さればこそ伯夷叔齊を申入られたり。しかれども此人孤竹にては死せず。孔子も首陽の下に餓たりとの給ふ。皆式あはず。又でんがくに非ず。薇也。いや伯夷には非ずといはゞ、何れのたは言ぞや。

庚申七日滿する曉に

是は七日食事を斷ば飢死すと云事か。又でんがく、庚申にかぎりて食ふ物にや。古事不レ知。扨又一年に七庚申とはきけど、七日滿する庚申扨もめづらし。

酉陽雜俎曰、

凡ッ庚申ノ日三尸言フ人ノ過ヲ七タビ守レバ庚申ヲ三尸滅スと云り。七度を七日とはきちがへけるにや。

許渾が夢や鷄つゝくらん

三躰許渾が詩に

年長ケ毎ニ勞ノ推ス申子ヲ
夜寒ノ初テ共ニ守ル庚申ヲ

是にて付たるにや。夢をにはとりの啄と云事めづらし。いろ〳〵の名言を承る事よ。

そのそこの隱者の味ひ甘うして

そのそこのといふは、王山人が隱居の事か。前句あはせて同意也。甘レ隱ヲとこそいへ。者の字あまりたり。王山

人がからだの味ひあまふして、鳥の啄きてくらひけるにや。めづらし。

芳野の奥の眞土肥たり

此一句はなんも曲もさぶらはず。大やうに上手らしきあしらひ也。但みよしのゝ山蚓の隱居仕たるやうにきこゆ。下心おかしければ、これはいかいの皮ともいふべきにや。

何と又瘦こけられし釋迦が獄

此一句は芳野のおくの眞土さへ肥たるに、何とて釋迦はやせこけられたぞ。あさましやと云事よな。釋尊を傍輩よりもあさまにいへる句作り勿躰なし。たとへば、

あはれいかにやせこけ給ふ釋迦の獄

などゝせば、出山の下心にていはるべし。其方返荅に、梅翁を碁んとて予、釋迦はやり持供につれつゝ　とつかふまつりければ、此句あまりにや。一代教主心すべき事也と、脇書せられけり。是にて梅翁の正道を押はかれとかゝぬか。尻口にて物をいはるゝ狂氣、山吏に判ずるにたらず。

娑婆八千度雪隱へ行

かゝる傍若無人の大外道にいかほど耻をかゝするとも、犬を評するなれども他見のため也。よくきけ。尺尊娑婆八千度の御出世は、一切衆生を佛果に至しめん御方便、大慈大悲の誓願、報じても報じがたき大恩教主なるを、あごたのあきたるまゝに痢病をやましめ奉り、八千度まで尿壺へ落し奉る逆罪、提婆が五逆にもすぐれ、大惡無道のきりしたん半天連耶蘇の所爲ならずや。高政に超過したる外道誑誥のたはぶれとはいはすまじ。夜叉羅刹にみとのりて、おとがひを八ざきに仕給ん事うたがひなし。いかなる狂氣山なりとも、邪心をしづめてたしかにきけ、此破邪返荅は、梅翁入道が邪誹ならぬと云いひ分の一まきにあらずや。しかれば日本流布の一大事の返荅を進出て書しながら、自分自性の惡逆を返答の土代にすへて、世間の批判のうかがふよし轉りける。是ぞ見のがしにゆるさば、再答一言もあがらずとて、いよ〳〵惡詠をはき出し、初心のたぶらかし、梅翁の迹の正道成とて日本國汝が邪風に打なびけ、終に神國をほろぼさん事うたがひあらじ。前車の覆るを見て後車のいましめとすとい

へり。高政既に邪をうたれほへ〳〵、梅翁が一分の云分をだに仕兼たる分際として、はや其後にかゝる邪心の惡俳を板行する事、耻を耻ともおもはざる人面獸心ならずや。此意趣師匠の梅翁入道に徹し、かゝる諫言眞實骨髓に勘弁し、高慢の鉾戈をへし折、備前擂鉢を打砕べし。若又梅翁入道、かゝる邪談おもしろし是我風俗也。いかほど物がくるはしく邪俳也とのゝしるとも、更に不レ可レ用といはゞ、追付又返答可レ承。重ては大事の返答たるべし。千度百度とも制せずば有べからず。身命を佛神に擲テ、骸骨は土に朽る共、一念の荒人魂と世に現レ、火焰ノ鐵丸と成て、神佛儒敵の梅翁流の紅毛誹の惡黨ども、粉微塵粉灰ニ打研、無間地獄へ追落さん事、更ニ不レ可ニ跟ヲ順一。又隱ノ字二句前にアリ。同ジカクル、心ナレバ、おもてを嫌ふゾ。

湯殿の月流る水のかへりこず

娑婆八千度雪隱へ行、是又月を湯殿の下水にうつして雪隱へながし込たり。扨ゝ無法の罰當り哉。月を雪隱へ八千度やりたる作、嘸自慢成べし。湯殿よりながるゝ水のかへりこず　としても八千度雪隱へ行べきに、いかなる惡俳ぞや。何とて日月神佛に意趣遺恨を含けるぞや。天下に住ながらうらみ有とていかゞせん。黑闇國へ渡れかし。是高政が育立の月といひて惡みたる同腹中の外道也。高政が日月を下部の仕者に仕たるは勿躰なしといはざるか。其舌も引入ずしてすぐに惡言をはく。是盜人の成敗場にて巾着を切がごとし。又月をむすばねば、しやば八千度に付ぬとおもふか。月は刧初より盡未來際までてらし給へば、八千度にかぎるべきか。日夜をかぞへて見よ。無量無邊成事ぞ。△さきだゝぬ悔の八千度かなしきはながるゝ水のかへりこぬ也。是月なくても八千度は有ぞかし。いやとよ。十三句目也。月せねばならずといはん。それこそ月のむすびやう有べし。△かへりこぬ湯殿の水を月もしれ。かくいはゞ水ばかりを雪隱へやりて、月は天にほがらか也。是にて正道邪俳ノ黑白を勘辨すべし。

河の邊に松茸るまして

孔子河ノ上ニ在テ曰ク逝者ハ如レキカ斯ノ不レ舍ニ晝夜一ヲ此語の心か。流水のかへりこずと云にはよき趣向也。然ど

も邪俳のあさましさは、鳳鳥をあひるにするがごとし。何とて孔子を松茸には仕たるぞや。湯殿と有故ならん。松茸はお湯殿のほとりにおく事をも忌事ぞや。釋尊既に松茸の調菜ニ醉玉ヒテ、七日の說法怠り玉へり。其時世尊松茸に十惡十疾ノ次第ヲ佛說仕給へり。かゝる惡性の茸ニ孔子を仕たる遺恨更に心得難し。殊更汝は大學ノ端くれをもよみ、古文眞寶の序類をもニはして、初學の者ををしへて、其助成を得て生命をつなぐ者ならずや。是林の鳥の樹をからす愚畜也。文宣王は大道の聖人也。十惡毒魔の松茸に仕たる天罰いかでのがるべき。然ば汝は太神宮を賣女に下し、釋尊を屎壺へ落し、日光天子を雲隱へながし、文宣王を十惡ノ魔茸にする。是神道・佛道・天道・儒道、四聖の大敵也。高政には拔群まさりたる放逸無慙の大外道ならずや。汝返答に、宗因流を邪俳といふ言語道斷の曲事也。汝等がさびくさりたる打物をこつとりと鞘に納て、梅翁先生の俳門に來れとはよくも囀りたり。破邪にはかやうの邪誹自身をかへり見て、天道へ降參せよとこそいへ、汝等が樣に大惡外道の門下へたぶらかし入たがる私の大欲心、是謀叛の管域ならずや。又下句のてとめとまらぬぞ、習有。在前は、いのかな也、居の字ニ非ず。松茸の居ると云事、何れの書物に有乎。梅翁にとふべし。

酒の紅葉中椀みだれて苔むしろ

酒のもみぢと云物なし。かやうの倒語作りも自然には興にならん。何毎をぐりはまにする事、却て恥さらし也。餓鬼は万事を倒に邪見する。其故懸倒と云。しかれば汝等が風をば餓鬼俳諧といふぞや。

石上に詩をだいそれた事

まことに前句の中椀亂て、ひとりこけまはるは大それた事よ。

林間ニ煖レ酒ヲ燒ニ紅葉ヲ一石上ニ題レ詩ノ掃ニ綠苔ヲ一

是を付んとて前句をうまく／＼とこしらへけれ共、皆式同意也。これを世間の俗語にはまりといふぞ。一句ぬけものなり。

何者やらん座禪の床をぎしつかせ

座禪宛字也。書寫展轉とて何れの書物にも有事也。强てと

がむるにはあらず。され共汝は自筆なるに誤はいかに、坐禪とかけり。タヤスツミストよむぞ。坐禪の床をぎしつかせたは、盗人なんどの入たるにや。扨又詩席と坐禪とは、各別の境あり。英實存は禪より詩に入、陳后山は詩より禪に入といへども、誠の道人は結跏趺坐ノ鼻端を守り、半目して一切を放下し、唯今の一念空く過る事を惜み、遠く日月ををしまず。一生旅立の心地にして無常を觀じ、如露亦如電無念無相無我閑淡ナリ。然ニ一句ノ仕立散亂騷動ノ為レ躰、更に非レス本意ニ。其上石上の坐禪に詩文をまじゆる事更になし。風月の才有とて謝靈運を遠師白蓮のまじはりをゆるさゞりしにて知べし。かやうの所まで至る誹諧にはあらねど、他見のため記レ之。又例の七もじを五もじに置たり。

　約束の拂子あたりをはらつて

約束の拂子は誰とのやく束ぞや。坐禪修行の時拂子の入物に非ず。禪家に取あつかふ物なれば、何にあてゝもあふ物とおもへるか。かやうの無差別にて汝が語録骨法取をかせ、たゞ大悟發明の大和尚、堂上ノ釋迦の御座に座して、床下の衆僧を示を秉拂と云て拂子を取し也。徑山寺天童山孤山寺甘露寺虎丘寺にて、大悟大徹の禪師勘辨ノ印可し免す時こそ、拂子あたりを拂ふべけれ。生盲無眼子之いまだ坐禪などするしら凡僧の用る物にあらず。又下の句のて留いくらもする事無法也。とめやうをしりても千句に一句の物ぞ。

　若衆のいき路ふとんはりしていそがるゝ

又五もじの字あまり、右にいふごとく、句毎に文字あまりあれば、同じ事斗を非言せんも退屈なれども、文字餘は連歌新式に二句嫌事勿論也。梅翁にとふべし。誹諧なればせめて打こしをばきらふべき事を、わざと上の句毎に、めつたに文字あまりをする事、皆式無法也。是をやぶらば汝が云ごとく、四季のむすびも破りたるがましならん。扨ふとんはりしていそがるゝ、馬上の事ならん。尤句によりて、馬といはでもそれときこへて、難なきやうにせば勿論の事なり。句毎をかやうにばかり好むも、かたくなにして、本性をとりうしなふぞや。又馬上の蠅拂をも拂子と云か。似た物からすと云ごとく也。もろこしにては蠹

といふぞや。日本にては鬼がしらとて、毛にても羽にてもする物ぞ。

黒蠹風吹レ羽ノ　紫遊ノ電リ轉レ輪ヲ　詩にも作れり。それ〱の名目も不レ知、めつた的を射るにてはなきか。

迯り三重ぬれの一ふし

さればこそ前句のいそがるゝととめたは、これを出さん道ゆゑ也。一句皆式きのふけふのかはらものなれば、不レ及レ判。梅翁流の正道には、あだな事をせらるゝ事よ。貞徳には万句云捨にも用捨する言也。

頬杖でかた見の扇うたれつゝ

前句の三重の拍子か。拍子打とこそいへ。扇打とは例の入聞やう、自慢なるべし。同意用付ぬけからぬけつゝ取そろへたる一句、不レ及レ判。

名のらぬ行衛蠅にせゝられ

一句何と付たる事ぞ。無心所着狂氣の風躰更にとまらず。

ほろ〱と犬の幽靈鳴出て

犬の幽靈扨もめづらし。外道國には有事にこそ侍らん。邛李華古戰場ノ文ニ、天陰ル則ハ往々鬼哭ス。かくはいへども、犬の幽靈書物に見えず。是はたゞ山鳥のほろ〱と鳴こゑきけば父やこひしき母やこひしき、此行基の御うたをきゝはづりて、犬をほろ〱なかせたり。犬はひよう〱とこそなけ。ほろ〱と鳴犬いかにやといはゞ、さればこそ幽靈の犬なる故に、ほろ〱と鳴けるはと云べし。是道風の朗詠也。秘藏せられよ。

やき食けぶる鳥部野の秋

犬の幽靈といふ獸ひだるさに、火葬の煙にて焼食をして喰ひけるとや。南蠻流とて三昧の料理いとめづらし。随分に用られよ。扨又鳥部野のいぬ、やき食を喰ふ犬にあらず。狼也。鳥部山あらそふ狼の聲きけば兼てうき身の置所なし。是にて合點か。

朝茶の月立さらて見るならひならば

ゑびす國には、三昧の火にて焼食をして、朝茶ノ子に用るにや。あさまし。皆式人倫のまじはりにあらず。扨又朝茶のむ時分は、日出卯。食時辰その間の事也。此時分は日輪の影にけをされて、つれなかるべきに、異國のならひとて、おかしき月を賞翫せらるゝ事よ。嶋ものゝなら

ひならば、是非にをよばねども、誹諧はこちの國のもの也。かやうに。ばとまりはさせぬぞ。

〽世間咄しは露にもしめらず

此一句、唯今までのうちにあらはれて、こちの國の物のやうに、通主(ツウス)なくてもきこへ侍る。しめりたる咄などゝはつねにいへる世話なれば、さもあるべし。一點ゆるすべし。

今度花二番つゞきに入がある

花に一番二番といへるは、花の會の一瓶二瓶と云事にや。入が有とはいかなる事ぞといへば、扨もうとききゝやう、是は道頓堀のかはり狂言也といへり。中〱の事、扨は同じ見渡しに文屋が淨るり、芝居と矢倉を二つ舉られたり。對の新俗、狂氣の放埒也。

櫻の熊谷つゝじの平山

是又かはり狂言の仕組、お芝居へ前句のことはり申けるか。あはれ前句をば今度花二番つゞきに入みだれとして、櫻の熊谷つゝじの平山と此句計を倒語にして、外の句作のさかさま事をやめたらば、わつさりとしたる器量のつはものなるべきに、邪道のあさましさは、外の句作りに引おとされて、あたら侍をむた〱ところしけるこそ不便なれ。扨又渡部や大江の木戸のあだ花に、一二の谷の引きがけし須磨の若木のさくらは、海したしくもへだてねば、かよふうら風に大事の習有物を。

春の駒かけよせ〱見渡せば

是又前句のかうしやく、成ほど同意也。二番つゞきの先懸馬ならず乎。それは敵の馬、是は味方の馬、そろへかけよせ〱見渡せば、又ばどまりも馬成べし。

夫を戀ふる雲雀の笛ゝあり

駒かけよすると有に想夫戀(サウフレン)の付たるは、さだめて平家物語仲國が事ならん。その程の詞八月十五夜月のさやかなるに、仲國駒にのりて、嵯峨法輪寺轟(トヽロキ)の橋のほとりに行、松の有ける方に片折戸仕たる所より、琴の爪音いとけだかくきこへしを、峯の嵐か松風か、それかあらぬかとあやしみけるに、小督の局の想夫戀の祕曲なりときゝかとめ(とがめカ)、駒をはやめて庵の下にをり立て、腰より笛ぬき出し、調子をあはせけりと有とか。此事を付たるにや。しかれども春にあらざれば、雲雀笛取あはず。又想

夫戀は琴のしらべ也。仲國が笛の樂にあらず。諒にそれかあらぬか、戯琴か、獵師のふける雲雀笛か、一句不埒のゐぞ笛か。

　きら〳〵し夕日の錦織立て

是はさだめて符秦竇滔が妻蘇若蘭、羇旅の竇滔を戀て、錦字廻文の詩を作し事か。しかれども雲雀笛に不取合。いや雲雀に付んとて、夕日のにしきと仕たりといはん。しからばなどて雲と云字を入ざるぞや。一句雲のぬけがら也。雲をむすびたくおもへ共、雲雀にかまふといはん。鷂に雲、すこしも不嫌。また東坡が詩織雲錦章とあり。又朗詠には織錦機上には已辨相思之字とあり。古事付はかやうの所一大事のはだへなるぞや。

　袋に入たるかづらきの峰

もしかやうの無理輿骨の前句あらば、

　夕日影雲の錦のきらめきて　かやうに前後に付たらばいはるべし。此袋はたゞへちまのかはのだん袋にもならぬぞ。

　こち〳〵と山伏の打火打石

此一句、同字病なれども道理きこへたり。さらばこんがう杖をかたげさせん。

　天狗の朝寢のびせられけり

いかさまをしまかせての一句ながら、高慢坊の大旦那なるべければ、柱杖を一棒。

　あそこさまへ雲の衣をふんぬぎて

五もじ虛空なる事かな。天狗のぬけがらめづらし。其方むかし善界坊のこのはでつちにても有けるにや。

　延喜のみかど慈悲の雨ふらす

寒夜に御衣を脫給ふとこそいへ。雲の事更になし。一句邪誹也。延喜聖帝をかみなりにしたり。或諸天善神となり、國土をうるほしなどゝいへば、ぬけ道も有べし。

　田うへうた貫之も是をよろこびの

此一句はおもかけ梅翁に似たり。先はいかいの古今也。連哥にの留りと云事、千句に一句もなき事ながら、誹諧なればうたひとばへゆづりけり。さながら手作にあらず。田子の棒をまいらせん。一句ばされたりといへども、實理にかなへり。是誹諧と云物ならん。

水鶏のたゝくてれつくてん〱

貫之も是をよろこびの名殘の神樂、てれつくか。但水鶏の太皷たゝく事、終に不レ聞。さだめて波の皷なるべし。たゝき物なくしていはれず。

金葉　夜もすがらはかなくたゝく水鶏かな
　　　させりさもなき柴のかり屋を

拾遺　また宵にうち來てたゝく水鶏かな
　　　たか門さして入ぬなるらん

源氏にも、小夜更て眞木の扉をたゝくは、尾上風か水鶏の告るころ〱かと有て、てれつくてん〱とたゝくくゐな、おらんだもの也。

月涼し鐵門を明てより

城の太鼓の心にや。てれつくてん〱とはたゝくまじけれ共、番所のやり句せられけり。尤道理〱。

鬼のしはぶき三つ四つ五つ

是かる口の風雅、百句に一句の作意、尤皮肉とも云べし。梅翁も定て稱美せらるべし。尤日本の侍なれば、もろこし點をゆるし侍る。あはれはいかいは、かやうに虐にして不レ爲レ虐やうに有度物と、甘心〱。

なまぐさき風の心のいかならん

風邪のあしらひながら、黑塚にこもれる女かといとめやしく侍る。是も强力の檜杖を一本、一句鬼の迯句にはよくあしらはれたり。惟中も生れつき器用のはだへ、此一兩句にて我を折侍る。

もとより女人潔戒(ケツカイ)の山

此一句、日本の天台山の小ひえにつゞく。平點をゆるすべし。こゝもとの句並、此方には同心なれ共、自分にはいかゞおもはれ侍るやらん。

若僧の眉間のひかりはなたれて

地藏𦬇の化現にや。おほつかなし。

青蓮華のまなじりほそひが命

是同じ相好、前句のかうしやく、佛を嘲りたる外道のほめことば勿躰なし。眉間に眸(マナジリ)、同事也。

によつと舌十樂の内にのべられたり

又同じ相好、支躰三句つゞき也。是を尺教の放埒とて第一の邪俳ぞや。三句ながら佛躰を邪婬暴虐(ボウナキ)に云なす事、

外道の所爲也。淺まし。

一味の薬万歳をよばふ

是又薬草琥珀也。尺教五句つゞくる事、式法破却のあふれとぞや。

蓬萊の山下亀庵君まいる

高慢寺の手作の醫者、包紙の上書仕けるか。

使の徐福委細に口状

先一味の薬より徐福が口上書まで、念比に三句のべられしは羅有一官の白病、さかんに取つめて悶絶しけるか。いたはし。福といふ下女に仕たるにや。放埒也。史記秦ノ始皇ノ本記ニ曰ク齊人徐市等上書ノ言ク海中ニ有ニ三神山一名テ曰ニ蓬萊方丈瀛州ト仙人居レ之請フ得下齊戒與ニ童男女ト求レ之ヲ於レ是遣ニ徐市ノ發ニ童男女數千人ノ入レ海ニ求メ仙人上ヲ

又、日東僧絶海和尚渡唐時大明太祖高帝詩ヲ望玉フ時ニ奉レ詩ヲ

熊野峯前徐福墓　滿山薬草雨餘肥タリ
唯今海上波濤穩　万里好風須ニ早歸一

大明太祖高帝之韻和

熊野峯高血食ノ祀　松根琥珀也應レ肥
當年徐福求ニ仙薬ヲ一　直到レテ如レ今更ニ不レ歸ラ

此兩首にてたしかにしれたり。日本三神山トハ蓬萊ハ熱田、方丈は熊野、瀛州ハ富士山也。徐福ガ來リシハ熊野方丈也。蓬萊にあらず。宗因達高慢坊、せめて是ほどの事なりとも吟味せずして、他を文盲と下すかや。防レ諫文レ非蓬心ッ、言語にのべがたし。又口状宛字也。口上よし。

秦の代や今朝よりも長事を

いまだ是までも白病の紅毛醫者へ長事をのべしか。委細に口状と云に、今朝よりも長事をと付て、誹諧の皮肉晴たとおもふかよ。又秦の代は二世太子にてほろびたり。それを長事とはさん〳〵の事ぞや。漢家四百年なれば、漢の代や今朝よりも長事を　といはゞあふべし。

かゝ見ざらんや卷臺の上

古文阿房宮賦　秦人不レ暇ニ自ラ哀ニ而後ノ人哀レ之ヲ後ノ人哀レテ之而不レンバ鑑レ之亦使チ後ノ人ヲ而復哀ニ後ノ人ノ一也。此文ノ心をいへるか。義理の取やう大ニ相違也。秦ノ代のみじか事と

前句になければ、此かゞみざらんやはあはぬ事ぞや。もつとも其はたへまでに至る誹にはあらざれども、なまじゐの古事好み、秦の代と云に付〻あぐみて、皆式のかうしやくの無理をさへづれり。古事付はかやうにむづかしき物也とおもひてとりおかれよ。又卷臺、あて字也。見臺也。書捨共いふぞや。

　月のゆふべ雪にむかつてほち〳〵と

いまだ秦の代のかうしやくほちつかれけり。せめて月雪と斗にして、ほちつきをやめたらば、學びの下心にもなるべきに、見臺へ膠付のほちつき、かならず初心の手ゎざ也。尤其方はいまだきのふけふの俳士也。是ほどにも寄持に侍る。わるこひにもこひられたる故、どこやら子細すぎておかしく侍る。然ども今〻以後さがりはするとも、あがりはせじ。訛は手に入たりと狂氣するほど高慢せらるゝからは、いよ〳〵邪道へ落入べし。さりとてひたすら捨給ふ事も無用、更に拾〻ものあるべからず。

　老 去 て 鼠 何 お も ふ ら ん

鼠に月よし。月に鼠うしろ付也。

　天堂に生をうけぬる鳶もあり

いふまでもなし。一切衆生悉有佛性なれば、天道へも淨土へも生ずべし。

　光明赫やくたゞる日よりじや〳〵

ひよりじや〳〵とは、汝とびになりてさへづりけるにや。たゞ付句を頼む矢念やり句ならん。

　はじまつにたかぶき芥の花をどり

隨分自慢におもふてせらるべし。梅翁句にかぶき芥の付句、度ゝ有。師匠の物を盜むはゆるしも有べけれども、師弟して芝居をせりあはるゝも見苦し。此かぶき芥といへるたは言の古事は、けいせい殿〳〵と、嶋原狂言の似せ祭文より出たり。

　色〳〵の錢をなし給ふ春

此海士くづしの一句も耳のすう成程きゝ侍る。おかしからず。

　夕〳〵霞七間まなか參つたの

是楊弓のぬき句也。いかさま一時軒も一ひねりひねらるゝ邪俳の、句のうへにて惡口中とも腹立ばし仕給ふな。

かやうのはたらき、付心の取あひを見れば、批判いとはづかしく侍る。かならずゆるし給へ。是上手の句作り也。初心のはなれたる風俗、尤おもしろし。前に貫之も是をよろこびのといへるの留り有。はいかいとても一ッはいかゞと云人有べけれども、此のとまりは各別の留り也。の留りと云物にはあらず。そのため二筋の長箭をしるし侍る。

鷄ふほしの業介なるかな

お公家をあほうに仕たる物也。又平句の哉留りは何事ぞや。慮外ものよ。

猿のあほうさま〴〵藝をつくしけり

猿のあほうとは、世間に太鼓猿楽といふ者の事にや。猿利根。猿智恵。などゝこそいへ。名目をかいさまにつくされたり。唐ノ中宗ノ時有ニ一僧ニ隠ニ修南嶽ニ時ニ失フ袈裟ヲ猿盗ニ之ヲ被ニ其身ニ坐ニ禪ス岩上ニ群猿效レ之ニ業ヲ僧亦恥レ之ヲ慣レ之ヲ勤メ作ク坐ニ禪ヲ而終ニ得タリ辟支佛之果ヲとあり。是猿利根ノ證據也。又あほう猿ノ古事あり。華嚴經廿四曰ク譬ハ如シテ有ニ山人ニ獣ト共居ス猿猴ノ行ク處ニ獵師以レ黐ヲ塗ニ其草ノ上ニ黠猿ハ遠離ス癡猿ハ不ニ知以ニ手ヲ小シ觸弄ス即黏シ其手ヲ以レ手解レ之ヲ復黏ニ其手ヲ以レ足ヲ以ニ口ヲ悉ク皆被レ黏纏臥レ地ニ獵師以レ杖ヲ貫ニ擔ヒ將去ニ比丘ニ亦爾也と說キ玉フ。今亦此一時軒も如レ此。彼耶蘇正の句鷄の興味の遠離せずして返答に不レ謂、自分の高慢を虚言し、皮肉の百韵の手をさして、黏ニ其手ヲ、悪言の口をねやし、うごきのとられざるあほう猿は、たゞ惟中坊が事ぞや。其故此再答を名テ猿鷄といふ也。黠猿のとく彼耶蘇を遠離せば、彼酉陽雜俎の青光太子に代たる坐禪の三猿とこそいはるべきに、猿のあほうさま〴〵無藝つくされて、鷄にかゝれる事の不便さよ。梅翁禪主も卽非の弟子なれば、猿鷄を遠離して盜ニ袈裟ヲ猿にならつて、坐禪工夫の誹諧せられよかし。

のしとかまへて鶴松に鳴

鶴聞ク天ニと云て青澤に求食、群棲する時は更になかず。天に心地よく舞遊ぶ時ならでは啼ぬ本文ぞや。

十面で權柄をとる五老峯

權柄をとる重言也。權をとるよし。手作の謂ながら、此五老峯の重面は何ととくべきにや。當時の御老中などの

事に仕たると見えたり。五老峯爲レ筆ト洋溟池（ヨウメイチ）を作レ硯ト青天一張紙寫サン二我腹中ノ詩一ト有。

ゆるぎ出たる白雲の車

獸面をつくりて白雲の車に乘じたる妖、いかなる青物に有や。千里をかける飛車なんど云事にや。更にきこへず。

燒亡は光を放つてとびさりぬ

一句いかなる付心ぞや。白雲の車に燒亡の古事未聞。前句黑雲ともあらば、火車に乘じたる罪人かともいはるべし。是はたゞ猛火車輪のごとくとんで、神社佛閣一時に回錄するなどいふ魔風の事か。ヶ樣の凶事、外道は好む事なれども、尤つゝしむべき禁句也。是につきて物語あり。當年さる宗匠、正月初會の一順に、廻向場や夕べの嵐數万の聲　と云前句に、白骨と成て粟田山に朽ぬ　と云句を書付られしと也。又、俵一つを持ぞかねぬる　と云前句に、なま首を五つも六つも取込て　と付られしとなり。新玉の祝義は神國のならひ、上一人より下民間までも物いまゐする事なるに、是はいかなる大膽の放埒ぞやといへば、此句は高政流の新賴政に、當流の庄五郎春澄と名乘て、古流のつふじて我也と下知せられしかはり、又太良殿の述懷也ときく。かゝるあばれ句をばせらるれども、いまだ火事などの身にかぶるやうの事は、氣味あしきやらん。あれぬはやさしき事也と評判仕けるに、今惟中大火事を出されしは、みやこの新又太良にまさりたる大たんの又太郞也。のらふ事も、いはふも口からといへり。それゆへ古今集にも、鶴龜によそよへて君を祝ひとかゝれたり。前表とて凶事はよくあたる物ぞや。又ひかりを放つと云事二つはなし。又大膽の氣象。物に成べき下地といはゞ、此春澄事也。さすが器用の若もの也。中庸姿の高政と兩吟を見るに、たとへば別當實盛に。てづかの太良を合せたるがごとし。かゝる器量の若もの、朝敵とならん事あさましく侍る。又高政百韵に此百韻をくらぶれば、忠度に六彌太を合せたるがごとし。高政放埒の句はしれたる事ながら、風俗はさすがのみやこはいかい也。されども俳諧の朝敵なる故、うたれたる事不運と云べし。作意の一器量、かゝる諫士もたくさんにはなし。人のうへは見しれ共我身をしる者なし。かく云我からして、はいかい

成ほど赤下手なれば、此人〳〵にまさらんと思ふ望なし。
唯不レ鑑レ之、亦使ニ後ノ人ヲ一而復タ哀レ後ノ人ヲ一。

をの〳〵禮す伽羅香世界

伽羅の焼亡たきと云事にや。その焼亡をきやら香世界と名付て禮拜する事、更に心得がたし。若其世界には、周の褒似女來といふあるじ有て、傾國の法を聽聞し、焼亡を禮拜しけるにや。これ人間の極樂學屋と云を似せたり。

御手の糸發願の撥打ならし

臨終の時彌陀の御手にかけて、極樂往生をねがふ事かと思へば、各別のまいす也。狐狸のばけたる一句、猫の皮のしなだれこゑ、ばち當りの句也。是似餡が、かふろなん正覺とつて三線佛　と云を似せたり。

うやまつてうくる傾國の事

さればこそ魔道へ引導仕たり。いかなる外法成とも、よくきけ。生死一大事の御手の糸を猫づなにけがし、自然居士の父母孝養の諷誦文をたはけの起請文にする事、大罪の戯言なるぞよ。態佛語の妙躰を婬亂不浄に云くづすは斷見の喇り、誹謗正法の大罪ならずや。此百句の戀の句を見るに、灯明佛をはしけいせいにし、地藏を若僧になし、只今までの戀の句共、二みな尺教の放埒也。佛𦬇を人形よりもあさまになぶりくさらかす事、いかなる邪心ぞや。戀と尺教とあへまぜにする事、是似餡、火吹亭が七千餘卷下紐をとく　是等を手本にして云習けるこそあさましけれ。汝師匠の梅翁に見せてとへ。且に生じ夕べに死す。無常迅速の世の中に、惡を善になす事こそはならずとも、善は善、惡は惡と成ともおこなはで、わざと善道を異趣に云やぶる事、戯言といへども念より出る神明是をゆるさず。おそるべし〳〵。

たふ〳〵と漢皇色を重じて

五もじ、たはこと也。酒のうはさなるべけれども、たれかゆるすべき。又李夫人傾國にあらず。付心いかん。

とり肴の臣下三度いさむる

めづらしき臣下のなま肴かな。酒典童子が女の股を筒切に仕たるよりも名物也。いかなる鬼國のあら秋ぞや。扨又前句酒なるに、さかなとしておもしろかるかよ。

杉箸のしのぎを削る軍勢に

酒に取肴又杉箸つゞけて三献にされたり、さだめて汝は大上戸ならん。

聖靈にむかふ修羅道の月

先しのぎをけづる軍に、修羅道とは皆式同意也。うたひにも修羅のちまたはさはがしやと、うたふをしらざるにや。是にかぎらず三句四句づゝ、同意ををかすからは是非なけれども、汝は大坂にて宗因迹とて、所せきさまして、外の宗匠をあざけりふみつけて、鼻をたかばるよし風聞す。定て添削の仕様、放埒をつくすべし。修羅道は冥途也。月なし。高政が地獄の月と一對也。汝生ある者ならばよくきけ。聖靈と云は、六親の魂魄(コンパク)をいはずや。なんぢ親共も此内に有べし。せめて跡とふわざこそなさずとも、たま〳〵焰魔のゆるしを得て、古郷へかへる珍客を修羅にむかはせせめぬる事、いかなる六親に遺恨有けるぞや。自然の五逆罪、天帝是をゆるすべきか。人面獸心の紅毛ならずや。

くらきよりくらき道にぞ入にけり

はるかにてらせ山のはの月

是にて冥途に月のなき事合點か。

秋山坊同宿露荻め しつれて

此ゐせ入道共は、修羅の加勢につかはしけるか。又は鉢の山へ諷經(フキン)にやりけるか。かゝる我流の作り坊主、何の役に立べき。されどもまことに當年の新米坊主ならば、秋の季をもたせたり。

宮古へのぼす一片の霧

都へのぼす霧、汝が下知にては念もない事、龍宮神の力、廣瀨・立田の神風か。人間の手わざにはかなはず。

晴曇る影を都にさき立て

時雨と告る山のはの月

かやうのうた甘うべし。

何とあらふ目利に見する朝ぼらけ

異風の作の物、目利におよばず。

打て參つたあとのしら波

參つたのと前に有。かやうのことば二つはなし。

霜に滓(ニゴリ)をしの劍を車(シャ)にかまへ

をしの劍羽、一毛かろし。車にかまへん事道理なし。兵法劍術に、引車拂霞右悦左悦水月亂虎高亂なと云太刀はあれ共、一毛を車といふ道理なし。

偏見我慢の氷はりけり

がまんの氷、高慢坊が例の手作也。水邊躰用をしらず。波沙としたる一句、筆舌にのべがたし。

おぼえたる紅蓮地獄に花はなし

おぼえたるとは前句へかゝつてさへづるか。いかさまにも鷺の劍から偏見我慢おぼえたる無用のなま兵法、大疵をもとめたり。狂氣山が無倫の譫言也。扨又紅蓮地獄には花あり。なしとはいかに。此折の月をば修羅道にてながめ、又にほひの花をば、ぢごくにてせんさくする是汝が前表ぞよ。汝が邪見の如ク紅蓮ぢごくに花なければ、うかむ世は更になし。不便ノ事也。汝經說は不レ可レ用。京へのぼりて、誓願寺の寺家の繪地獄を見よ。血沝の中より蓮華生出たり。文字にもくれなゐのはちすとかゝぬかよ。扨又當句の花、正花にならぬぞ。三途川ノうばにとへ。はすの花也。白氏文集、願ハ以テ今生世俗ノ文字之業狂言綺語之誤ヲ飜シ爲ニ當來世々讚佛乘ノ因轉法輪之緣トといはれたり。

凡心さませ胡蝶の眠

蝶に本心有乎。人は天性を全くうけて仁義禮智の德、をのづからそなへたり。禽獸虫のたぐひは、氣はあれども性なし。但是は莊周におぼえたかとて一棒をあびせたか。先以慮外也。誠に汝は禪坊主の落墮ときく。一句示さん。

いか成か是誹諧、破邪顯正答曰、愚昧の猿鷂。

右百韵批判

非言合九十三句

內

大惡無道七句

餓鬼作リ拾句

無理放埒拾二句

無法留七句

尺敎放埒九句

文字餘リ四拾九句

批點合七句

內長二

宛字指合ノ分ハ不レ記

破邪顯正流布以後色々の雜言を作りて板行す。よりまさ・源氏供養・あつかひ草・行司板・二つ盃・破邪返答評判などいふ物板行す。一つも道理にあたるべき物にあらず。然ども世人の道戲なぐさみ程にして、さして誹道の害にさへならずばとがむるにたらず。あるひは破邪を小乘見のまなこ也といひ、又は偏見我慢也ともなじり、千差万別の評判ありといへども、よくしる人ならでは是をしるべからず。あるひはいもの山のくりはまも、はいかいなればよしといひ、又はあつかひの山・ねぶとの山も山類に用ひ、やり玉の露・摺小木の露も秋の季になるといひ、是ゆるしでなく、先達の作例もなき事をも、今やうの發明也と我まゝをいひさだむる。是非なき事也。誹諧無盡躰なれば、連哥の式法にのせざる道具あまた也。それを愚意にて私にさだめん事、おほけなき事也。其會席の一座の上前句〳〵のやうすにより、一句の仕立によりて、一座の宗匠衆議判にして是と非をわかつ事也。おしまかせて當風の誹はかやうにするよしとさだめん人、日本には更におぼへず。もしあらば天下無双の無理宗匠なるべし。同じ誹諧なれば、古風・當風とて二つ有物にあらず。たとへ新俗なりとも、實理にかなへば古風也。聖人の古事にても暴誹におかさば當風也。いにしへの連哥の名匠たりし人も、めづらしくかはりたるてにはとまりなどは、一代に一二度ならでは仕給はず。是仕やうをよくしりて、せざる道をしれるが故也。誹諧も又しか也。しかるを當流とて、きのふけふのでつちあがりの仕習の人も、はや宗祇・貞德まさりの出葉を好む。是たゞ一休のうをゝ食(ショク)し、三藏の女を持給ふまねをするに同じ。あしとといへば、いやこれはいかい也と云。師にあひて一言をもきかず。自立の宗匠點者達、古哲にまさりて繁昌、今此時也。二ツ盃に正風躰を小乘見也とうつけをつくす。佛法には小乘・大乘の見あり。世法は五倫・五常をしかとまもらねばならぬ故、皆小乘ばかりにて大乘なし。若あらば大惡無道のあふれ者也。誹諧は世法の正中なり。なるほど小乘戒律をもつて道とす。世法を行ひすまして、孔子のごとくなる大道に

出たる人あらば、誹諧の大乘といふべし。無法なあはれをせぬ程に小乘見といへるがおかし。又古風の者に當流のよき所を此やうにせよといふ。それはいふまでもなし。當流のよき所はもとよりみなこちの物也。又當流のかるロ。とび躰ぬけ作大はづみ六方くづし新俗今様漢言骨稽下芬放埒謎荒唐の風情は、古風の宗匠口おもたくて作意はたらかず。かつてえせぬとおもふ者あらん。一兩年稽古の者さへ、一足とびするものを、万法を勘辨したる宗匠としてなるまじき道理有乎。たとへば三學成就の僧正を墮落せよと云ごとし。なるほど還俗せん事、唯今もなる事なれども、あしきといふ事をしりて落ざるを、かやうの花やかなる無禮講をしらぬは、下手な古坊主かなといへるがごとし。又古風にゆるさぬ事をも、ぬけ道さへあれば當誹には第一にする。是よしといはゞ他人の金銀をとりても、逃さへすればすむ。余人の女房をぬすみても、ぬけ道さへしればくるしからずといふがごとし。是何も氣味のよい自由自在の事なれ共、古來の御法度背がたきが故にえせぬ事也。愚昧の了管更にあたらし。

予此度去ル子細有て破邪顯正を書。是一旦の狂言綺語、偏邪我慢の戯言、未レ爲ニ耳目の翫一爲ニ敎誡之範一を。此志シ神ならではしり給はじ。其故他人に一言一句の談合せず。然に俳よりまさに、洛下古談の老ぼれども、我慢ノ談合也と余人へとつてかゝるは、筋なき邪推のひが事也。予が文盲愚魯にして、淺才不作の筆づさみをもつて、名匠達人の名をけがさん乎。天神も御正覽、更ニ談合にあらず。今又再答も右に同じ。にくしとおもはゞ、吾一人を飽まで惡口すべし。いか程乞食穢多愚昧大倖とのゝしるとも、すこしもあたを報んとおもふ邪義なし。涅而不レ緇して笑ふともいとはじ、譽るともよろこばじ。然ども天下の邪談は吾敵也。日本大小の神祇天道佛陀は忝も吾味方也。梅翁・惟中も正風ならば吾師也。貞德・西武も邪談ならば吾敵也。是愚意の私を以制るに非ズ、諸國暴惡俳に誇りて自滅すべきかなしみ、祖師先哲の言句に出すといへども、上一人より下万民の心根より發りて、天の氣動搖する謂也。於レ此吉田の神道を傳へて、二條家の正統的レ流、貞德花咲翁の明鑑を以押レ之。何ソ有レ憚乎。

愚判

中嶋松月菴

一源子隨流

夫世之不祥蔽賢者當之信哉此言也今邪誹之輩訕貞德翁之俳歌者不祥也正誹其源興於詩以能戯謔不爲虐而思無邪爲根依古今集師和歌仙以爲枝既尋隆緒之范々俳歌起三代之衰指合發古人之所未發是百世不易之正法而其功用大也譬如日月明照不覺於人其恩光之廣花咲翁之誹歌道者日月也無得而踰焉人欲蔽其光其何傷於日月乎蓋毛詩者勸善懲惡爲矯邪世之文器古今集者和光同塵治神國之風雅也然今世祖述貞德師者却背之爲戯謔暴虐之邪誹使人放心而亂心情且訕其高弟吁邪誕夭言競起而浮乎異端邪蘇其流費虹惑於學者之心志塗殺於世人之耳目譏世毒人尤惡紫之奪朱惡利口之覆邦家者此再答也舐排邪誹擯斥妄説欲使人歸於正風體之至道何戻歌道正理乖神佛聖法互指瘢疵而含怒怨起鬪諍事誹謗而思有邪哉彼破邪顯正爲一時不作之而爲己事誤而好事爲答語吐無倫之譖言荒唐之大言忘我非而責人非是如犬逐塊而不追人又似獨痴猿之草黐黏手足疥蹉伏地而就擒故號此返答謂猿取黐後來觸於京洛正誹之草黐莫就擒剝而皮謹可遠離其他利走名奔邪誹之愚猿口耳棒心貢吻頑狐亦然不肯筆之爲俳諧之亂臣賊子覆轍之誡此以忘孤陋以贅卷尾欲報親炙薫染之師恩万乙於筆端也罪我者其唯此論乎知我者其唯此返答乎繫以小詩

戯虐背毛詩。正誹涅不緇。世圓鑿方柄。物齟齬高卑。難顯下和璞。異情柳跖飴。邪俳棒心學。賣笑似東施

延寶八暦庚申三月吉旦

隨有軒木端坊跋之

俳諧綾巻（はいかいあやまき）

破邪顯正并返答兩書評判

哥連歌は才かしこき人のもてあそびにてたやすく下愚の及べき業にあらず。こゝに誹諧連歌の戯あり。詞は俗にちかしといへども是更に和哥の別躰にあらず。當時世上にはやりて此道のあまねき事都はさらにもいはず遠き田舎のあらゑびすも心の角をまろめ詞のゆがみをためなをすたよりとせり。されども面〳〵思ひ〳〵に流儀をたてゝ一意にする事なし。別して此ころ宗因流とてばされたる句躰見る人聞人これを興じその末〴〵國〴〵にひろまり我一とおどけごといひて古來の法にもかゝはらず出るまゝのかる口是又初心の及べき作意ならず。然るにかの一流を邪誹なりとて誹諧破邪顯正といふ書をつくり既に開板し世上に賣ひろむる作者は誰とも見えず。又その書に返答して是も又板行に及ぶ作者は岳西氏一時軒としるせり。互にそしりそしられて遺根やむ事なし。その外はいかい熊坂又誹諧よりまさなどゝ題してそしり合たる書共あり。是等は童部の水かけ合のやうにて二目と見る物にあらず。彼破邪顯正同ク返答のふたつの書は邪正の差別たがひの云分ン、いづれをいづれとしる事愚意の了簡には及がたし。道の達者に此わかちをたづね聞たらんには邪を捨て正道にもとづくたよりともならんとたれかれ人の句に付墨をもするほどの人に逢てこの邪正いづれを是としいづれを非と思はん評判して聞させられよとたづね侍りしに是も又口〳〵心〳〵にちがふその中にある宗匠のいひ給ひしは今世上に其名高ふしておそらく肩をならぶる人もなき宗因の一流遍ねくひろごりて古風の誹士は片角に目斗うごかせて居るか偏執の心をやすめかねて書たる書也。大かた此書の作者もほのかに聞しが河原町の三條あたりに居住していつも朱鞘の脇指をさしてこゝかしこさまよふを見しりたる人也。その人筆とりして大概を書所〳〵は八句に及ぶ老人達ひとりふたり筆を加へられしとぞ。其人〴〵のはいかいと宗因の誹諧とをならべたてゝ見よ。上手下手のわかち慥にしれん。是を聞わけたるは上手は正下手は邪俳と心得よ。又返答の書にいへるごとく高政が百韵に批言したればとて宗因もかやうの事となおもひそとの給ひし尤なる仰られやうなれ共その上

手下手のわかちを愚耳いかで聞しらん。かの高政が百韵もたゞに見ればおもしろくていかさま上手さうなとおもへど此破邪顯正の批言を見ては又散〲の下手さう也。此ぶんにても差別聞えがたくてまたある人にたづね侍りしかばその人の曰かやうの批言いらざる事なり。彼書に神道の道理を引哥連歌の事を引て色〱の事を書り。宗因それほどの事を知られまじきや。しかれども誹諧はたゞ當座のたはぶれ折にふれての云捨なれば哥連歌の格はしりながら態とかうしらるゝ一流也。さらば掟を守るといふ作者の句共をきけ。皆ふるめかしくて一ツもおもしろからず。又邪誹の外道のとてさみすれども當風ノ作意みな新らしくて興あり。いはれぬ邪正の穿鑿せんより唯おもしろきやうにせよ。誹諧は時の慰なればと云給ひし。是も尤なれ共おもしろしとてむさと傾城ぐるひし興ありとて大酒呑んもまことならず。是も心得がたし。こゝに又ある老人の云給ひしは淺ましく誹諧連歌の末世に成たるかないにしへ貞德立圃など申し名匠は第一道を大事にかけ御傘はなひ草等の式目をたて又句躰も席ぶりも殊勝にてまことに一ッの道ともいふべかりしに今の宗因はさるものにて彼兩匠のつたへをうけたる宗匠達師傳を守り式目を正しうせんとすれば氣づまりなりとて門弟すくなし。門弟すくなければ身命をたすけんよすがなし。せんかたなく人の機嫌をとりまはりて席ぶりもじだらくに成席ぶりじだらくなれば句躰もいな物に成て大事の道をたゞ慰ものゝ小哥三味線も同じやうに仕(シ)なせる事三神の御とがめもおそろしからずや。さればこそ此破邪顯正に古風を捨ず歯を喰しばりて堪忍すれども門弟より云くづすゆへこらへかねて邪道へ片足さし入る宗匠もありと書り。是は誰が事をおもひよりて書たるやらん。作者の心はしらねど世上を見渡してその評判をせば先づ季吟といふ人はじめは貞室に指南をうけ後に長頭丸の口傳をうけつたへられし也。然らばたとひ余は何ほどあばるゝ共先師の一派をたてゝ敎らるべき物を淺ましく世につれて門弟に云くづされ邪道へかた足さし入れ子共二人は先立て引おとされかの大(太)皷誹諧に成たり。哥書をもよく明らめて源氏の首書もしたる程の人何事ぞや。門弟の可全は

これを見かぎりて會にも度ごとには出られぬよしさこそはあるべけれ。又立圃師の門弟に定清と云人是も師の流をそむき信徳顧也などいふおどけものにまじりともにおどけらるゝとかや聞及し也。松翁は古風の中にも別して實躰なれば連歌の堀杤たかやうなりとてそしりたれ共無余議道理を以ておしへられたれば此門流の作者當時の風を見かぎりてやめたるはあれ共師説を狩き流を替ておどけ事などいふはなし。さるを定清一人流をかへてさらば一向のかる口にてもなくふしやうなる口つき是も門弟共に云くづされて邪道へ片足さし入し人數なるべし。扨又いらぬ賢人だてをして古風を守らんより時代にしたがひ人のすくやうにして聞をあはせたるがよき分別也とひとよせしていひ度まゝをいはせ其身もともに邪道に落る宗匠もありと書り。是は似船をいふべきにや。此人もとは安靜の傳へをうけて古風を守るべき人の時代にしたがひ人のすくやうにとてよからぬ句にも長点をし百韵の内は八九十点長三四十点もかけあまつさへ朱点紫点など色〳〵の点をするよし。安靜はさやうの事はしられざりしが似船はたれにならひてする事ぞや。又月の内に六日づゝの法樂の會をして人よせし云度まゝをいへども吟味もせずやくにもたゝぬ句帳をいくらも集メ又年〳〵に歳旦の發句共あまた引付に入る。皆門弟の句かとおもへばさもなきものゝ句をも是非〳〵と乞請てかき入る事板行料を取らんため初心の句もほめそやして取集る也。皆是賣僧のわざならずや。さる心入の作者なれば自身の句は猶異躰也。又古風も今時の人このまず當風のまねかするもつら恥かし。何とぞかはりたる仕やうのあらんと我流の新法をたくむ宗匠もあるべしと書り。是は維舟にやおもひよせけん。此人の一作古風にもあらず當風にも似ず一くねりくねりたる作意我一流をたてたる物なれ共人用ひず。命ながければ恥おほしとはまことに故人の名言かな。此人毛吹草を作りて頓てしなれたらば一かどの名人ともいふべきに長生キして世に捨られさらば引こむでも居ずして此ころの誹諧熊坂とやらんもつくられたるよし老ひほれられしにや。梅盛こそまへ〳〵はかる口いひなりしほどに當時なをおどけられんとおもへば結句しづまりて

大かたは會をもやめ句をとへ共語らず年ごとの三ッ物などにて遍く見ればいかにも贅躰にして少もそゝけたる事なし。是こそ老後のたしなみ尤の事なれ。此外古風の作者の流をかへて異風に成し類いくたりもあり。江戸大坂にも嘸あるらん。皆是當風の外道共に障化しられて本心をくらまかさるゝゆへさま〲に流をかへおもひ〲に掟をかへて一意におさまらざるのみならず。我慢偏執をおこす事誹諧連歌の末に成たるゆへなるべし。御佛の道も正法のいにしへ華嚴の曉より涅槃のゆふべに至る迄四十九年の說法も末世迷惑の衆生を引導給はん御方便一佛のみなもと末〲の枝川にながれおもひ〲の流儀をたつる同じ雲井の月をながめばふもとの道はいづかたゟ行ともくるしかるまきじにそれさへ宗論して鼻をそがれしためしあり。是末法の今に成たるゆへなり。此破邪顯正もまた返答してあらそふもよしなき礫打合誹道の末に成て我がちに流〲をたつるゆへなりと云給し。是を聞侍りしに扨は當風といふは皆邪誹ならんと思へど是もかの流をかへたる人〲をそしりたる斗にて破邪顯正の難詠はその勝劣しれず猶此事の聞度さに又ある所にまかりてたづね侍りしに折しもその夜は雨そほふりてしめやかなりしかば更過る迄かたらん陜ゆるやかにしてよなど云て彼兩書をとうでゝ批言と返答を引合せ評判ありしが有增聞覺えし所〲反古のしはのばして書付侍りし也。是をさる所の何氏のたれといふ人見せよと仰せられしほどに今もたせまいらせ侍る。かまへて他見あるべからず。もとより予初心無才のものなれば文章のつゞけやうもしらず文字のあやまりもあるべし。それを見ゆるして此人〲の評判に猶又批判して聞させられよ。初心の我ら正道におもむくたよりともし侍らんものか。

破邪顯正○高政が惣本寺といへる寺號はいづかたより御赦免なされたるはしらね共連誹の受領には殊更新しき事也。御公儀よりゆるされたかはしらね共去年の夏大坂宗因を高政が宅へ請じ一會ありしに

末しげれ守武流の惣本寺

といふ句を宗因が仕て挨拶したりとてそれよりいよ〳〵同類雲霞のごとくあつまれり。守武流の惣本寺といふ發句は何事ぞや。年にこそよれ。八十に及び點斧といひ言句にのべがたき外道也と書り○返答宗因此發句しられし事先は仁者のはだへなり。當躰の我慢偏執の心ならば惣本寺といふ發句をしてあたへたらば彼是その名殘らぬ事のうたてければしゐて望たりともすまじき事なり。我慢偏執の念なければ心の發するに仕て猶すゑしげれと下知して祝しあはれ此道のさかんならん事を覺しめす心ざし殊勝の事也とあり△評判尤宗因末しげれと祝して發句しられたるは仁者のはだへといへども理り也。され共こゝを評判していはゞ仁者と不仁者も入る事にてはなし。誰を宗因にしても高政が面談にて惣本寺といふ額に發句して下されといはゞいなむとはいはれまじ。それよりもまづ高政が此寺號を自身に何の辨えもなけれ共此寺號を三ッ物にも書しるして國〳〵へひろめりちぎなる田舍人にいかさま上手ならんとおもはせ初心のこゝろをくらまして点料をまねかんとの計略尤外道共いふべし。かやうの虚言者にいかにいへばとてその名を發句にして挨拶しられし宗因いかさまおとなげなきやうなれば難じたるも理り也。されどもそれ程のわきまへなき宗因にてもあらねど高政にむかひて共方惣本寺とはな名のりそともいはれまじ。唯時の興に云捨られしをはや惣本寺の倫旨にしていよ〳〵なりわたる成べしと思へばまた返答の書に惣本寺といふ發句をしてあたへたらば彼是その名をうらなる事のうたてければとあり。當座の云捨ならばその遠慮は有まじき事なれ共此返答の書やうを見れば云捨にてもなし。高政が無才なるはよくしりながらその名をゆるして今より後その名をなのれとゆるされしやうに聞ゆる也。宗因何人なればそのゆるしは出さるゝぞや心得がたし。又返答の書にみづから名付し號に名人の詩作の哥つらね

られし事勝てかぞふべからずとて松嶋の法心坊の事を引たり。かの法心坊は文盲なれ共一旦志を發して入唐し佛鑑禪師に見え終に法心坊と名のり又時の名人坐ニス圓福道場ニといへり。今の高政文盲なれ共大膽ものなればとて惣本寺といふ發句はしられしや。此たとへは似た事の似ぬ事也。禪宗に修多羅の教は月にさす指とて悟道の後は經論も文學もいらず又一字をしらぬとても道を悟るべし。誹諧はそれにかはりて文盲にて誹道をさとる事かたし。さとりて後も學文いらずといふ事なし。さればこそ返答の書にも學文して詩哥の甲に文章の鎧を着し佛語の劍を帶し語録の弓に活法の得物矢取添たるなにがしと名のらんものこそこの道の正流を傳ふともいふべしとあり。しかるに此高政中庸姿の百韵に一々批言しられて一つも皆陳せず又此返答の書にも宗因計よきさまに云て高政が百韵はうつもうたるゝもことはり也。よし共あし共筆とるにいとまなしとあり。是にて高政が下手はしれたり。是程無才の者ヲ大膽なればとて法心坊にはたとへがたし。又法心坊は尻たゞれ骨くづるれ共たゆまず修行せし功大なればその名と相違する事なし。何の功も才もなき高政に惣本寺の號は相應せず。是を彼圓福道場にたとへんは各別の事也。破邪顯正に承平將門の自身平親王と付給ひてその身をほろぼされしたとへよくかなひたる也。德ある人のみづから付名はいかやうにいふとも難あるべからず。それさへ德をかくすには似ず。まして何の辨へもなく此道の肝心とする手爾於葉をさへしか〳〵しらぬものゝ文臺脇になをるさへあるを惣本寺などいふ作り事におとなげなくも發句しられし宗因を瓢金といふもことはり也とぞ。○破邪惣本寺といふ事高政を人のさみして道戯事と忠へば近年三ッ物に場なれて板行し又かやうに誹諧中庸姿など云夥しきかんばんを出させ諸國に賣ひろむる事いかにとむがるものなければとて上をしらぬ傍若無人の無法者也とあり。○返答高政が惣本寺と額かけたるはいかさま嗚呼の者也。みづから名のりて誹諧の惣本寺と成もせんと廣き都の内もはゞからぬ大膽の氣象。ものになるべき下地也とて孫子邈が詞淮南子等を引て書り。△評此返答は高政が無才はしれたる事なれ共大膽者なれば後はもの

にも成べきかと行末を兼ていへる也。そのうへ百韵の批言はうつもうたるゝもことはり也とあれば此返答の作者さきとして高政が寺號は不相應とはおもひながら宗因かの發句しられしまへもあればさすがに無益の寺號を名のるともいはれずして是程にそやしていへる成べし。さればこそ高政を少しもほめたるやうに聞ゆるは此一所斗にて其外は皆云くだしたる斗也。かやうに右からも左からも云くだして口にもかゝらにもかゝらぬ高政を何と見たてゝ宗因は惣本寺號をゆるされしぞや。但し彼膽欲レ大ナランコヲと云る詞又　作レ志ヲ欲レ大ナランコヲなどあるをおもひよせて大膽者を見たてゝかくはしられしにや。大膽といふにも虛實のふたつ有べし。故人の膽はおほひならん事をとの詞は實の大膽也。人をだまし虛言をいへとやは敎し。小人の大膽は皆虛也。遠くは熊坂の張奨といひし大膽者人見の松の露と消ても名は末代に殘し近くは又石川五衛門釜が淵の泡と成ても名は天下にかくれなし。是等は盜人惣本寺共いふべきもの也。此大膽も古人の心にかなふべきや。今の高政を彼盜賊共にたとふるにはあらねど

第一何の辨へもなくして惣本寺と名のり(缺字)に益にもたゝねばざれことを憚りもなく中庸姿と題し又法眼になし下されんとの宣旨ありと僞りを云て穢に五位愚意も鶯と云發句をしたる事重ゝ虛言の大膽なれば人その科をゆるさずして今破邪顯正にてうちころさるゝ程うたるれ共一言の云わけも得せず。こゝに岳西氏の何がしはいつぞや宗因那波江雲など同道にて高政が宅へ行一日參會せられし近付のなじみに罷出て云わけをもしてやらるべき筈なれ共其科紛れなければせんかたなく宗因斗を漸に云わけしられたり。され共かの無法者に賴まれて惣本寺の發句しられし事一味同類の科ゆるしがたし。此一儀落居する迄は先づ宗因を岳西氏に預け置べし。○破邪當風邪誹と云は古人先達師匠を用ひず口にまかせてわざと天地をさかさまに云なし直なる物をむりにまがらし一句の妙躰をたてず日月を下部の仕物にし太神宮を紙屑買にたとへ天滿神を傾城になし天のさかほこを揩古木にし帝王に犬の馬痢をなめさせ高政が百句獨吟の內さへ數多惡言をおかす。ましで其外の弟子。師匠まさりのあふれもの是を手本に

さへづる事是神道の大外道ならずやトアリ。〇返答此事は誠につゝしむべき事也され共権翁師の句に終に聞かず。

釋迦はやりもち供につれつゝ

トつかうまつりければ此句あやまりにや一代教主の如來心すべき事也と脇書し給ひぬ。又よぶこ鳥の句に此鳥祕鳥也とかうに不レ及と判じ給ふ。大事のものは大事にもたいなきものはもたいなくし給ふ。此一言にて余はなぞらへてしるべしトアリ。△評此返答にて高政をはじめ當風といふ作者皆邪俳とはしれたり。破邪顯正の宗論今は惣本寺屓(マケ)に極りたれば先年の例にまかせて高政上人は鼻をそぎ末寺の連衆には古風山隨流寺(ズイリウジ)のゑんをはらせんと云。扨宗因は左樣のうつけはつくされぬとの云わけ尤かなさしもの連哥師誹諧なればとて放埒にしらるべき筈もなし。一時軒もそれに指南をうけて大事のものは大事にもたいなき物はもたいなくしらるべし。され共ひとつ不審あり云て見ん。此度皮肉の百韵といひて返答書の末にしるし世の批判をかんがふるもの也と書れしは正直の憤(イキドヲリ)をよく人に聞せんためなるべし。その中に

されば又來るけちきりの雲

トテ云句ニ

燈明佛おもひをかゝげて待くれに

此句は燈明佛を傾城にしられし作意勿躰なくは思はれずや。又

などて又やせこけられし釋迦が嶋

娑 婆 八 千 度 雪 隱 に ゆ く

是も勿躰なからずや。但前句に嶋とあるゆへ何とぞのがれやうあるか。され共付句はやせこけられし釋迦といふ斗に付て嶋にはつかず。若和州の大山が腹くだしたる事有か。又教主の如來痢病(リビヤウ)散〳〵の躰にて八千度雪隱に往來し給ひしにや

あそこさまへ雲の衣をふんぬぎて

延 喜 の 帝 慈 悲 の 雨 ふ ら す

馬おひ船子やうのものこそすねにて物をふみまはるべけれ。帝王御足をさし出して御衣をふみぬがせ給ふべきか。かたじけなくも一天の君しかも堯舜にもおとらせ給はぬ聖王なるを恐れもなく下劣のわざによせ奉る事もたいな

からぎや。此外も心ゆかぬ句共あれ共一々にはいはず。先さしあたりて此三句始の詞と相違せり。彼邪誹の類なり。若此句をしられし時眠りて寐言にいはれしにや。又はものがついていはせけるにや。天晴正道の憤と名のりかけてしたる皮肉の百韵本性にてしられしならば何とぞその隱れやうなき事はあるまじ。」但し釋迦はやり持の句は一句不首尾也。此三句は一句にその難なしどいはんかさにてもあるまじ。連誹は前句付句の理をひとつに合せて一首の哥と成ものなれば付合の不首尾難ならずといふ事なし。又一句も燈明佛おもひをかけてまつやせこけらし釋迦帝雨ふらす皆平懐の詞也。かやうの事紅毛流の正道にはくるしからぬにや。後學のためなれば此返答聞度し。但し誹諧は莊子が寓言を本意とするとて先年しぶうちわの返答に不埒成句共をむりに莊子を引て寓言〳〵と書しが此三句も又寓言とや返答しられん。もし又かやうの不埒の句も寓言にて誹諧の本意とならば高政が百韵はいかにも莊子にかなひて項上の誹諧なるべし。又釋迦はやり持の句も寓言ならばもたひなき事もあるまじ。よい事ありとあれも寓言これも寓言と云ていひ度まゝをいはるゝなるべし。又誹諧蒙求とやらんに八雲御抄に九つの品をわかてり。その内狂言といふ一名あり。此狂言にて誹諧の大意を心得べき也と書れたり。寓言も寓言によるべし。狂言も狂言によるべし。初心是を心得そこなはゞかの邪道へ引落さるべし。尤誹諧は狂言也。され共たとへていはゞ大藏鷺が狂言もあり。ふんとく与五良が狂言もあり。いづれも上手の名を得たり。その内に本間の狂言はならひの行儀をそむかずたちゐもしほらしくて同じ事を幾度見ても見ざめせず。哥舞妃あやつりの狂言はならひの法もなく云度まゝ仕度まゝにすれば一度はおもしろきやうなれ共二度とは見られぬもの也。宗因流の誹諧は上ゝの哥舞妃狂言としるべし。第一道戯方上手にて出るまゝのかり足次に一句の仕組もとするそろはぬ事を作り本間のてにはにかゝはらず式目もたてねば習ふべき事もなく教べき事もなくおのづから無法放埒に成ておどり拍子の誹諧宗因太夫本にてその外の役者共あらゆるたはけをつくして人をおかしがらせん笑せんと斗たくむなる

べし。中にも一時軒といふ役者はきじやうつよくて誹諧蒙求を作りてはいかいには躰付用付もかまはぬものじや式目もない物じやと無法放埒の手本を出す。是は貞德老翁の。はいかいは式目ぞなきとの狂言を心得そこなふたると見えたり。又しぶうちわといへばこちへまかせと返答し破邪顯正やるまいぞと相手になる。され共誹諧は下手さう也。宗因流はかる口なることそよけれ。かの皮肉の百韵を見れば句躰おも／＼しくて千ヶ菊が道戯を聞やう也。風鳶禪師語路句とやらんいまだ見ね共同作なれば嚔あるらんと思ひやられて淺まし。先づ題號から和書のやうにはなし。句も定て唐人の江戸らうさいを聞やうにや有らん。是躰の誹諧を極々の正道と思ひて是非の背法なりなどゝ云うつけ世上ひろければ有も理り也。かやうの人下斗見て上を見ねば鳥がふんをしかくるものぞ。さすがに田舍人とて異形風俗斗耳馴て一途に心得まことの正道をしられぬゆへなり。たとへば京の人の詞はすなをにしてきやしやなり。あづまの人は聲ゆがみてかた言まじりに何をいふやらん聞えず。それもおのれどち聞なるればよしと思ひて京の人の詞はなまぬるきとて笑ふがごとし。又笑はれて生れつきすなをなることばをむりにゆがめていひならふ人もあれば兎角蓼むしもすき／＼是非もなき事也

○返答書ニ する／＼文盲不智の輩梅翁のながれとのゝしり。色／＼の句をいひちらすとて梅翁の評の淸きをそしらん事大きたる僻事なり。さらば釋尊一佛の末弟今の世までながれ來り律をたもたず法をしらぬ破戒無慙の惡僧ありとてかの大聖釋迦如來をさみせんや。また孔子大聖の門人子夏が學ク田ツ子シ方にながれ終に莊子に落つ。さればとてかの文宣王をそしらん事むざとしたる事也トアリ

△評尤何の道にても佛聖人のごとくに善をすゝめ惡をいましめてすなをにおしゆる師あらんに末弟いましめをやぶるとて何しにその師をそしらん。然れ共宗因を佛にも聖人にもたとへず紅毛流の張本也といふそのいはれなきにあらず。抑實躰正道の先達は躰用同意倫廻の差別は連歌の法にならひ去嫌は和漢聯句の式目をかり又誹諧なればとて新俗下劣の言葉をいはずすなをにして道を教られ

し故はるか田舍迄もその流れを汲ほどの人放埒なるはなかりしぞかし。頃と成て貞室にしたがひし友靜梅盛の弟子に信德安靜の弟子に似船是昔正道の師說をやぶり放埒をいふ。されぱとて元祖長頭丸をさみせんやうもなし。是こそかの釋尊孔子をそしるまじきたとへにはかなふべけれ。宗因はその以前よりばされたる作者なりしか共今のやうに鳴わたりてもしられず。人誹諧の事をとへば連歌をこそ專一とすれ。はいかいはしらずたゞ當座の云捨なれば出るまゝにと云はれしとぞ。しかるをいつの比よか不斗世にもてひろめて見る人聞人口もあはせず大わらひして興じあへり。古法にそむく事あれ共連歌師の誹諧なれば此やうなるがよきやらんと世の人の思ふもことはり也。され共自身はたゞたはこと一ぺんとおもひてさして大事にかけねば法もなく式目もかまはず前句に事ふたつみつあれば付物も取ならべて付るゆへ一句落着せず。新俗下劣の言葉を取もなをさず何作り實躰の名匠達の云まじくせまじき事とて掃(ヘキ)あつめて蘆塚に捨おかれし事共をひろひ出せば初心新しきとおもひて眞似するほどに我しらずそやしたてられていつその程より宗因流と成て爰かしこのあふれもの共出來(キ)是程迄誹諧のみだれに及べり。是紅毛(オランダ)流の張本ならずや。破邪顯正に宗因が小家を燒て隣家へ付さうならばよき程にして遣さんとこしらへけるに折ふし木葉天狗共が魔風を合力するゆへに消さんとあせれどもちからなくいつ迄もやけゆくがごとしといふたとへいやとはれぬ事也。元來はてんがうなれば格式を破りてした事が我しらずに一流と成たれば末々はひた破りにやぶり今ははや宗因もどかしとて師匠をやぶるがもと宗因がやぶりはじめしゆへなり。かくのごとくの無法放埒一流と成たれば今わたくしに古式をやぶるともいはれず守武流と云ていにしへの人に科をゆづらるゝ也。守武宗鑑の時分にたとへば万葉集のいにしへなり。哥のそのかみなればとて古今集以後の風躰を捨て万葉の躰を好む哥人やはある。又宗因自身はてんがうなりとおもへる證據は此返答の書に是ほど誹諧盛ンなれ共何某と名付て一集の建立もなく何の書とて一卷の物をも開板せず。多くの誹諧の發句もみづから書留ても置せられず。かの林和靖(リンクワセイ)

か孤山にかくれて卅年の間詩作し文をかき給ひしかども一字も記しとゞめ給はぬ大賢の氣象ありと書り。その林和清の心はしらず。宗因みづから書とめてもおかれぬはてんがうはいかいなるゆへ教べき道もなく習ふべき理もなければ何の書とて作らんやうもなし。又かやうのあだ言を何集とてあつめんもさすがにうそはづかしゝ。さればこそ我句も書とめられぬ也。共此道を蔑(ナイガシロ)にもてあつかふゆへとしるべし。もし又此書キとめられぬが林和清に似てよしとならば哥人の家の集その外代々(ヨヨ)の集は皆あだこととやいはん。少しにても宗因誹諧に教べき事あらば一つの書をも編(アミ)て末代の初心のためにもせられよかし。又誹諧蒙求といふ書は一時軒作なれ共用付も大事ないてにをはもかまはぬ物じやとよこしまなる眼のつきたるまゝに放埒を教ゆる外道の書なり。用付をもゆるし指合をも見のがしにするはやり句のいきにて毎句そのやうにするものにてはなし。一座に二三句は宗匠の機轉にてゆるす事なれば書などにしるして廣く教べき事共覺えず。初心かの蒙求を見たらばかならず邪道に引落さるべし。道を麁末にして誹諧なれば何も大事ないかもゆるすといふ事也。ある人のいふ宗因連歌を根本として誹諧を麁末にしらるゝならば誹諧の卷を見する時点をも麁末にしらるべき事なれ共いかにも念を入て批判を書付らるゝはといふそれも理り也。いあは連歌を本にして誹諧を末にしられたれ共今は誹諧本になりたり。連哥師の誰とやらんが宗因に逢ふて誹諧にかたきてんがういはるゝとて異見しられしにさればこそ予もさはおもへども誹諧をすれば世わたりのいとやすきにと申されしとぞ此一言にて點に念を入らるゝは理りとしるべし。誠にあだことなりとて點の仕やう麁末ならば點料をいだしてうかゞふものもあるまじ。それさへいにしへの仕やうとはちがひてしたりしたり〳〵是は〳〵などゝ道戯ごとをかくる也。つく〴〵思案して見られよ、よのつねの老人のたはとまじりの雑談するさへ貞ながめられて心の内おしはからるゝぞかし。まして誹諧は敷嶋の道の一つなるをあさはかに云なし文臺をたて執筆をかまへて宗匠の先達のとて席上になをされながら人に大わらひさせんと斗の道戯ことこそ恥かし

くはおもはれぬにや年に似合はぬ瓢金と云しは理り也

○[illegible]ニ多年たてにすかしよこに見ても梅翁の句に間然する事なし。たま／＼の句も殊勝にして是非に不レ及事也とて

としたけて也けり／＼春にまた

そよやそよ昨日の風躰一夜の春

お閑に御座れ夕陽いまだのこんの雪

是等の句をしるせり。△評尤此句共はさして道戯事もなく下劣の言葉もなし。さすがの宗因なれば十句を十句ながら百句を百句ながらあしくしらるゝにてあるまじ。(評)又當風の作者の句に不思儀に正道の作者あり。その事は末にいはん。今此三句は大かた正道のやうなる物也。されども宗因手あやまちして今大火事に成たるといふにいはれあり。先此三句の内に一夜の春といふつゞき心得がたし。いにしへ九日といふ春は来にけりと云哥雑に極りたるなり。是も又寓言にて哥とは違ふた物じやといはれん。尤是はさまでの事にてもなしこれにかぎらずうつけの山たはけの海をつくさるゝゆへそれを手本にして世上のあふれ者どもがふぬけの春たはけの秋などいふゑしれぬ調つゞきの火もとなり。次ギにおしづかに御座れト云句上ノ句にて文字三つあまし又下にてのこんの雪ト一字あまされたり。此躰の句是に限らず宗因作にいくらもあり。哥連歌には一字をあますも仕やうある事よくしりながら誹諧なればとて無法にあまさるゝ事心得がたし。此火はいかい檀林に焼うつりてさかんにもゆれ共消さん共せず剰いふ事かいはぬ事かちはやぶる神代には文字の數も定まらずとあるは皆誹諧歌也といふ。さらば見よ。古今集をはじめ代々の集に誹諧哥の部有の内に文字の數定まらぬはいかい哥やあるといへばまたかしこより當春歳旦の句に旋頭句とはしがきして五もじを十文字にしたる句あり。しかも都にて老人の宗匠の作也。何してぞや(缺字)にふれられたる成べし。夫懐紙の表に誹諧の連歌とかく事誹諧とは一句の躰の名目かの古今後拾遺等の誹諧哥になぞらへ又二句三句にても云つらぬるを以て連哥といふ。是まことの連歌を手本にするゆへなり。然るを今迄連歌にて聞も及ばぬ旋頭混本の躰誹諧連哥にて何しにあ

るべき事ぞや。哥よみ連歌する人の聞ては嘸おかしからんとそばより恥かし。かやうの無法宗因もとしはじめられしゆへなり。是も又寓言とやいはれん。しからば懷帋のおもてにも誹諧の連哥とかゝず共一向寓言の連歌と書れよかし。扨ゝ此破邪顯正に宗因が小家より火を出してといふたとへよくもいひたる物かな此亂火に廢忘(ハイマウ)したる作者共の句躰を見ればあるひはかしらに烏帽子着てはぎは高くかゝげ或は身に袴着て髮は大わらはになり女房脇指を帶し法師鉢卷して重荷をになひたるやうに正躰もなき句のすがたなり。何として此火は出されたるやらんといへば蚊をいなせんとて大鋸屑(オガクズ)ふすべられしに庭の凉風さそひて火の飛たるにやといふ。いや〳〵さにてはあるまじ摺古木(スリコ)にて唐がらし味噌すりでんがくあぶられし火を置忘れてなるべしとて笑ふ。扨當風の作者共の句に不思議に正道あり先宗因句に

　行客(カウカク)の跡をうづむやこたつの火

此火はよく埋まれたれば怪我(ケガ)にもあるまじ。又檀林誹諧の句に

　雪おれに昔を思ふかさのほね

京春澄が句に

　雪を荷ひ賣ル聲斗黑木哉

予もの覺えなきに當風の句帳共心にそみて見ざればおぼえたるもなし。此三句何の集にあるもしらず。又なきもおぼえず。人の物がたりに聞しにや覺えず自然と耳に殘りて常にいにしへ今猶行末迄も捨てがたき句の風躰とぞおぼゆる。假古人の金言名句を引たり共偏執止ずば手本ともせまし。右の三句は當風の作者共の句なれば偏執もあるまじ。此躰の句を定木(ヂヤウギ)にあてゝゆがみをなをさば正道なるべし。破邪顯正に中庸姿の作者共も中〳〵初心のやからにあらず。これが作意にて正直に前句をうけ一句の道理をたつるならばおそらく誹諧ならんと書り。殊に春澄などはいまだ若輩なれ共めいよの達者もの也。あはれ放埒を止てすなをにせよかしと思へど定めて今引たる三句の躰今ははやふるし。それは以前の事也など云ん。さてもやけとまらぬ事かな。

○破邪隨分あたらしがらんと五もじより發句に作るとき

かならず實方ヵ古風に聞ゆるゆへ無理に五もじを七もじ八もじに云のべとまりをてにはとまりにしたつる時一句のありさま異形にして新キ事前代未聞なり。扨もしたりおもしろし付合の格も此いきを以てせよとて師匠入らずの我流を云ちらすほどにそのまゝおらんだ流になる事也トアリ ○返答 このごろの板行にも又一座の上にもむざと字あまりを好み腦のとまりをてにはにし第三をかなとめにしなりけりなどゝとむる放埒あり。是誹諧の亂逆也とアリ △評 兩書共に此事はいましめたり。尤かやうの放埒誹諧の保元平治共云べし。さればこそこゝに岳西氏の何がし梅翁の味方に參り短冊の旗をあげ管城をかため一方をふせがんとすれ共逆臣大勢にておしよせ手爾葉の木戸をやぶらんとす。みかたも今はたまりかねて百韻の郎等共大將の詞書に心をひとしうせず。うちわやぶれのしたるにや。かの皮肉の百韻一表ニ七八句は文字あまりにてしかも三句四句ヅヽつゞきたれば句の備(ソナヘ)しどろに成て見ゆるぞ。はやく寓言の加勢を頼まれよかし。抑字あまりの句の事一句にて五もじ六もじあます斗が難にてはなし。一字をあますも大事のもの也。古哥に。いきもつきあへずものをこそおもへ。紅葉吹おろす山おろしの風などゝあるは各別の事にて多くはなき事ぞ。よくよく工風あるべし。惣じていやしげなるものゝ居たるあたりに調度のおほき硯に筆のおほき誹諧に字あまりのおほきは見ぐるしきもの也といへばそばなる人それに對(ツイ)して云その物につきてそのものをついやしそこなふもの數をしらず身にしらみあり家に鼠あり誹諧に宗因ありと。○破邪 今時宗因をいひ習ふ初心の輩それは貞德流にてふるくさし。それは立圃流にてすえたりなどいひけるたぐひ多し。此兩人は誹諧の祖師也。別の事をば敎へず。聖人哥人の口まねをして古風の正道を守るのみ也と書り。○返答 中庸に時ニ中スと子思はあそばし經には爾時世間(ニジセケン)と說給ふ梅翁流は今の人の氣象(キシヤウ)にかなふ。是此時をしらずトアリ。△評 纔の內に人の氣象いか斗ちがふべき。貞德老翁立圃先生の時分も放埒を敎へたらば誹諧はてにをはもかまはずして仕よきもの也。式目もなくて心安しとてすゝむ人多かるべし。され共いましめを立るこそ道の道なれ。

御佛の道もたもつ者はすくなくやぶりものは多し。則破邪顯正に正風は其弟子師にまさるものすくなく邪道はかならず弟子師にまさると先立て書たり。時の人のすけばとて道をやぶるは邪道ならずや。すくとて上戸に酒をゆるせば本心をうしなふ。故に飲酒戒とていましめ給ふ。婬欲は人の好む所也。されども邪婬戒とてゆるし給はず。是程かたくいましめ給ふにさへ末世に至りて破戒の人おほし。おほけれども繪像木像の前にて大酒せず婬をもおかさず。是五々百歳の末の世なれどもそのかみを恐ろしく思ふゆへなり。いにしへの名匠誹道にも五つのいましめを立てかきしるされたる物あり。廣く板行には及ばず正道の作者は書うつして所持するものに懇望して拜見しられよ。かくのごとく御佛の道にも比してかたく制しおしへ給へば誠に教誡之端ともなるべき道理餘議なくてそのしめしにあひたる弟子死後の今もやぶ子ものはすくなし。宗因は一流の宗匠にして、あからさまにも法をやぶられたればいまだ存命の内にはや弟子共師に恐ろし氣もなく無法放埒を吐ちらす。是そのみなもとの正しからざるゆへなり。扨破戒といふは先づ一句の首尾たしかならず付句も發句も本意をたてぬ事醉亂れて本心をうしなふに似たり。飲酒の科也。又三句の輪廻をはなれぬは執着ふかきに似たり。是邪婬の科なり。此外殺生偸盜妄語も皆その理りあれども一々にはいはず。かくのごとく破戒の一流をたてたる宗匠なれば外道共邪誹ともいふべしとぞ。

右此評判を聞侍りしにぞ邪誹のことはり委くしれ侍る。扨正道に趣んとするに今ははや貞德老翁立圃老師もおはしまさず。いづれを名匠とおもひ師と賴て仕ならふべきにやと問侍りしに　答て曰今正道の師はと尋ぬれば我こそ正道の作者なれ。是こそまことの誹諧なれと面々に思はぬもなくて皆正道也。眞實の正道のことはりしらずながら有增立て見ん。夫誹諧と連歌は俗に近き言葉を以てつらぬるものなれば其躰哥にも連歌にもおとりたるものなり。されどもたとへていはゞ惡女を惡女なりとて

髪もけづらず。歯をもくろめずばいよ〳〵見ぐるしかるべし。誹諧も誹諧なりとおもひくだせばかの無法放埒邪誹になるもの也。言葉こそ俗なれ。一句のすがたは随分やさしうしほらしうとたしなみ古人の式目を省かず手爾於葉を正しう仕て哥にも連歌にも負じおとらじと心得たるをまことの正道とは云べし。是句の正道なり。又連歌いき誹諧いきの差別は誰もしりたる事なれとは云に及はず。扨外道と云は先無法放埒の作者随一の外道なり。それに批言してそしる人又外道也。返答して嗔る人是も外道也。今評判する我も又外道也。かくのごとくの外道共が互にそしりついかりつして初心の人に氣うつりさせいづれか正道やらんとまよはす事皆外道のわざ也。よき人は只みづからの才藝を勵むのみにて人をそしらず。是は心の正道なり。まへに云句の正道も今云心の正道と都合したる作者まことの名人なるべし。さる人あらんを尋て師とせよと談り給ひしなり。かやうの名人はいづくに有ぞや聞まほしうこそ侍れ。

時に延寶八つのとし彌生はじめの十日

誹諧破邪顯正并返答評判の聞書終ル

ある人此一冊を見て扨〳〵わけもなきたはことぞもとすゑそろはぬ文をふるはれたりと云て笑ふ余笑テ云ク紅毛流之寓言也。

誹諧破邪顯正并返答兩書之評判聞書之一冊ゝゝ披見仕候。扨も打たり〳〵當風邪誹に批言をうち共に又返答をうつ。今又評判して誹難をうつ。三つを互に打たれば是誹諧の綾卷とや申さん。品あしくこは〳〵しきも此槌にうたれてやはらぐべきとこそ。

延寶八庚申四月上旬　書林寸松開板

通說

俳諧文學の源流を尋ねるならば、遠く宗鑑、守武まで溯らねばならない。宗鑑の「犬筑波」の成つたのは足利時代の永正十一年、守武の「獨吟千句」の成つたのは、やゝ後れて天文九年であるから、本集に題する所の「貞門」といふ貞德の「新增犬筑波」の出た寬永二十年、即ち德川家光の頃より約一世紀以前の事に屬する。更に、芭蕉の「冬の日」の作られた貞享元年から、宗鑑の「犬筑波」を顧ると正に百七十年以前の事となる。百七十年と云へば、芭蕉が歿してから明治の初年に到るまでと、ほゞ同じ程の隔りである。先に「芭蕉時代」の本集五卷を讀んだ後に、此集を見らるゝ人は、同一なる「俳諧」といふ名稱のもとに斯くまでも內容の違つたものゝ先行した事實に、如何にも文字通りの隔世の感を覺ゆるであらう。抑も「俳諧」といふ語の正義は滑稽といふ事であるが、創始時代の俳諧は全くをかしみといふ事だけを目的としたのである。而して、此のをかしみ一點張りの俳諧なるものが、遂にさびしみを命とする芭蕉の風となるまで、其間に物の進展する不思議にして且つ自然なる脈絡を尋ねる爲にも、宗鑑守武の俳諧を一瞥しなければならないと思ふ。

宗鑑時代の俳諧のをかしみといふのは、要するに機智（ウイツト）である。機智といふ事を心理學者は次のやうに說明する。それは初めに相關せざるが如く見えた二つの觀念が突如として融合をなす時に生ずる輕き驚きに打たれる事の快感である、と。

　　ゆめのうちにもいたくこそあれ

花にぬるこてふはあめにたたかれて　　宗鑑

「夢の中にも痛くこそあれ」といふ言葉だけ見た時には、思ひもかけなかつた所の「花に寐る胡蝶は雨に敲かれて」といふ言葉と相對せられた刹那に、双方から飛付くやうに融合して、一つの觀念群となる、人をして案を打つてをかしがらせる。其が機智なのである。是は當時の所謂、連歌だが、其一句と一句とが掛け離れてゐて、付け寄る事が難しさうに見えれば見えるもの程、其を成就する事の機智の興味は深い譯なので、遂には一句で難題を云ひかけて、一句で之を解く、ものはづけに類するやうな趣のものも多い。

むねんながらもうれしかりけり

去りかぬる老女を人にぬすまれて　　宗鑑

今は俗諺化されてゐる次の句も當時の連歌なので、「犬筑波」の中にある。

きりたくもありきりたくもなし

ぬす人をとらへて見ればわが子なり　　宗鑑

宗鑑の連歌には卑猥な言葉も多い、それはをかしさを目的とする心がしぜんとさうなるのであらうが、要は機智であるから、一句でさうした事を想はせておいて、却て其を打外す所に巧みさを見せてゐる。

ひとのなさけやあなにあるらん

玉づさをこよひねづみにひかれけり　　宗鑑

毛のあるなきはさぐりてぞしる

弟子もたぬ坊主はかみをじぞりして　　宗鑑

宗鑑の發句には、掛言葉が多い。掛言葉とは所謂「語の機智(ワオルトワイツ)」であつて、機智心理の最も幼稚低級なるものに屬するが、之も二つの觀念が語感の類似を以て突如として融合する所にをかしさを生ずるのである。

風さむし破れ障子の神無月　　宗鑑

神無月、卽ち紙無月だから「破れ障子」といふ譯。

山の端に月はいでぐりむく夜かな　　宗鑑

「月はいで」を「いでぐり」(煠栗)に掛けてある。是等は洒落といふべく、駄洒落に屬する。

守武の俳諧も、宗鑑の其と大差はない。但し、宗鑑の連歌としては三句以上のものがないけれども、守武は初めて俳諧の百韻を試みてゐる。之は俳諧史上に於て重要視せられることで、此集に收めてある「獨吟千句」が其である。

はいかゝりてはうたをよみけり
ふぢの花さけるは定家かつらにて
西行さくらうつろへる頃
さもあらばあらなん春の十五日

一句一句の言葉は宗鑑よりも美しく見えるけれども、付け方はやはり機智的なる連想のすべりに乘つて運ばせるのである。

けふもとはれずこゝろもう〳〵
ことのはをいひちがゆるはうしにして
柳はみどり花はくろなる

「けふも訪はれず」から「言の葉を云ひ違ゆる」と受け「もう〳〵」から「牛」と受けたのだが、「ことのはをいひちがゆるは牛にして」とは一句として何の意か、約束を違へるものは人間でないといふ意か、それにしても通じ難い。更に「ことのはをいひちがゆる」を受けて、「花はくろなる」とわざと云ひ違へて、くろを牛に利かせた處、之も駄洒落である。此「獨吟千句」の跋に守武は「さて俳諧とて、みだりに笑はせんと斗はいかん、花實をそなへ風流にして、しかも一句たゞしく、さておかしくあらんやうに、世々の好士のをしへなり」と書いてゐるが、其言葉と其作品との間には大分に距離がある。但し所謂、花實をそなへ風流にして一句たゞしくといふ事を爰に俳諧の理想として提唱して、夫から後の芭蕉の俳風も芽ぐむ因縁となつたとすれば、此語は貴しといふべきである。芭蕉等がモットーとしたる正風といふ語も、守武は爰に「されども正風、誰人の耳にも入まじきに、いさゝかもきこえて、はからざる幸ならんかな」と云つてゐる。

月見てやときわのさとへかへるらん
よしとも殿に似たる秋かぜ
やみ〳〵とうたれにけるを砧にて　守武

是は「月」の縁をとつて常磐の里に「秋風」が吹くと付けた。其の「常磐」といふ連想から、「義朝殿」と云ひなすつたものゝ、「義朝殿に似たる秋風」とは一句として之も無理である。で、芭蕉は、山中なる常磐の塚を過ぎた折の記に、「伊勢の守武がいひける、義朝殿に似たる秋風とはいづれの所か似たりけん」と皮肉なる一拶を與へて、「我も又、義朝の心に似たり秋の風」と作つてゐる。守武が「義朝殿に似たる」と云つたのは單に機智的である、芭蕉のは、義朝の肉親相害ひ遂に自らを亡ぼすまでの淋しい心を秋風の趣に見出したのである。小僧が竪てたのも一指、和尚が竪て

たのも一指、其形は同じでも心は全く違ふ、其様に、宗鑑守武時代の俳句も十七字、芭蕉の俳句も十七字、その同じ形式を用ひて、いや同じ言葉を用ひてさへ、其内容に雲泥の差がある事に注意すべきである。さて、守武の發句は

花よりも鼻にありけるにほひかな

の如き駄洒落のものもあるが、

元朝や神代の事もおもはるゝ

かうした心を打出したものもある。此句は俳句の發顯を說く上では特筆されていゝ。

落花枝にかへるとみれば胡蝶かな

或人が之を英譯してゐた。趣味としては幼稚だが、之も俳句が自然を見るやうに進むまでの先づたど〳〵しい第一歩であらう。

宗鑑守武の俳諧は要するに、をかしさにとゞめをさすものだが、夫だけ俚耳に入るに早く、誰しも指を染め易いので、庶民階級の間に一時はかなりの流行をした。それも此兩將の歿後、だん〳〵と衰へかけて來た頃に其火勢を盛りかへすばかりか、巨多の薪を投じたものは貞德である。貞德は俳諧の法式とも云ふべき「御傘」を著述して先づ此道に形式的の軌範を作つた。「御傘」は此集に收むべくして、ページの都合から遺憾ながら割愛せざるを得なくなつたが、其序に「俳諧は面白き事ある時興に乘じて云ひ出し人をもよろこばしめ我も樂しむ道なれば治れる世のうへとは之をいふべきなり然るを山崎の宗鑑犬筑波を撰しより連歌を賤み俳諧をいやしき道と思へり宗鑑の心さにあらず」と云つてゐる。こゝに謂ふ連歌とは和歌の道で稱する所の連歌であり、俳諧とは俳諧の連歌、即ち今日のいはゆる連句である。貞德は初め和歌の連歌を研究したが、後年俳諧の方に心を專らにした。俳諧は決して和歌の下風に立つもの

ではないと信ずる事から、彼は此道の開拓に力をそゝいだのである。しかも、彼の才氣煥發して行想の縱橫自在なる、餘りに口がすべりすぎる位ですらある。「あぶらかす」（新增犬筑波）は宗鑑の「犬筑波」にある前句を置いて、別に附句を試みたもの、既に宗鑑の一句ですら其機智に驚いてゐた所へ、貞德は數句立てつゞけに付け、其がそれ〴〵にうまいのだから、當時の俳人達の舌を卷かしたに違ひない。

無念ながらも嬉しかりけり
古歌に似てまけに成ぬる歌合
年よると御陣の跡に殘されて
みどり子が我にだかれつそさうして
物くるゝ大名は我が下人すぢ
金の上へころばされずばひろはめや

宗鑑は「去りかぬる老女（オイメ）を人にぬすまれて」と付けてゐた所である。

切りたくもあり切りたくもなし

に貞德は二十句も付けてゐる。（本卷七七頁）その中にて

かひ所かくには爪もたかからにて
雨風をふせぐ軒先うつたうし
さま〴〵に心のくるふ戀の道
碁の四丁かくる所はむつかしや

宗鑑では如何にも付け方が苦しく見える所、又は後の句を云はんが爲に殊更前句を仕立てたやうに見える所も、貞德はらく／＼と云ひぬけてゐる。

　みづのそこにも武士はありけり

つゝばりにかゝりてあがるかぶと貝　　宗鑑

とあるのは如何にも苦しい付け方だが、

うきしづみくゞりて渡す宇治川に　　貞德

しやちほこはいかなる魚もをぢぬらん　　同

大名が内のものもつ大くじら　　同

其他、此方がずつと自由である。宗鑑と貞德とを比べると、後者が遙かに才人で、一段の上手だとは云へるが、其をかしみを旨とする點は宗鑑の踏を襲うたものといつていゝ。貞德は其「淀川」(新增犬筑波)に於て、やはり宗鑑の「犬筑波」の句を取つて、之に三句目を自分でつけながら、宗鑑の附句を解釋し、又同意、用付、無誹言などいふ評語で批評をしてゐる。

　酔ぬる時のじゆくしくさゝよ

のまざれば澁柿色の上戸衆

「之は同意なり、酒に酔ひうはさ付くべからず」といふのである。

　屏風ごしなる戀はとゞかず

聞やいかにつがひ／＼のうらみごと

「屏風につかひと付る事用付也、今は嫌ふべし」といふのである。

思ふままには云はれざりけり

山人の薪に花を折添へて

兩句とも「無レ誹言」にして「上々の連歌」、即ち和歌の式であつて、俳諧ではないと云ふのである。此句に貞徳は

忠度なれやかすむ幽靈

と三句目をつけて、「忠度の能の出立の体なり」と自註してゐる。宗鑑の句を、同意用付無誹言と判じたに就て「少しもそしる事は侍らず時代のかはる故也」と貞徳はことはつてゐる。貞徳風の百韻は「紅梅千句」を見て知られる。

尻窄(スボ)てたてる若菜の高養齒(カウヤウシ)　　正章

澁柿くふた跡やむさかる　　長頭丸

月影に出す水梨の奇麗さよ　　友仙

更るもしらぬ秋の納涼　　可頼

おもふどちしく毛氈の色ごのみ　　政信

唐人はみななむる腎藥　　長頭丸

長頭丸とは貞徳であり、正章とは高弟貞室である。「月影」の句などは其として美しさがあり、「更くるもしらぬ」の付け方も好いが、「毛氈の色好み」に「腎藥」を付けるなど、やはりをかしみをうれしがつてゐる宗鑑流である。

さて、貞徳及び其門流の發句は、季吟の撰なる「山の井」にも、貞室の撰する「玉海集」にも、西武の撰する「鷹筑波」にも澤山見えてゐる。

熟柿くさき上戸のかほや柿紅葉　　貞德

霧の海そこなる月はくらげかな　　同

ゆきつくす江南の春の光かな　　同

早蕨や深谷の雪にふところ手　　貞室

雪を見る人もや立て俳諧師　　季吟

舟歌もかぢの葉にかけ天の川　　西武

「熟柿くさき」の句は宗鑑の「醉ぬる時の熟柿くささよ、のまざれば澁柿色の上戸衆」の連句と比較して、連句と發句との關係の鍵を見出す爲に出した。「ゆきつくす」は「行き盡す」として見れば蕉風の句のやうだが、之は「雪盡す」の義で雪解の句、それに「行盡す」が洒落れたのである。要するに貞門の發句といふものは、掛言葉が重なる工みであり、然らざるものも、一種の洒落であつて、凡て機智に依て作り、をかしみを味ふものである點は、其連句よりも一層、宗鑑守武の行き方の外に出てゐない觀がある。しかも、其樣な俳諧の流行した事は、「近來世上にはやりて。京もゐなかも上﨟も下﨟も春の花のあした秋のゆふべの月あひにも誹諧をえせざれば古疊のへりまくれして座敷の塵をひねるばかりにぞなれりける」といふ「玉海集」の序にても知られるし、其集末の作者別を見ても、近畿はもとより北は出羽越後に及び南は薩摩や土佐に及びて三十餘國、作者數六百五十八人、發句數貳千六百廿餘句と註せられてゐる、如何に其盛んであつたかゞ察せられる。「誹諧初學抄」を書いた德元、「俳諧之註」を書いた重賴、此二人も貞德門の逸足であつて、斯樣な入門書（季吟の「山之井」も然り）が要求せられるといふ事が當時の俳諧の盛大であつた事を裏書きしてゐる。「初學抄」に俳諧は歌道の連歌の外に五つの勝りたるたのしみがあるとして、「第一、俗談を用る

事、第二は自讃し侍りてもをかしき事、第三、取あへず興を催す事、第四、初心の輩學び易くして和歌の浦なみに心を寄せ侍る事、第五には集歌古事來歴分明ならずとも一句さへ興をなし侍らば、何事をもひろく引よせて付侍るべき事、是五の德也」と云ふてゐる。「俳諧之註」には「尺八に頭をふらぬと俳諧に自慢せざるとは損なりとかや」と云ふてゐる。當時の作者の氣持は是等の言葉にてもうかゞはれよう。「歌仙そろへ」の著者、元隣は貞德門の季吟の其弟子である。芭蕉も亦、の季吟の門であるが――。

斯く、貞德に依て中興せられた俳諧道は、其門下に俊雄なるものゝ多かつた爲に、彼の歿後と雖も暫くは其隆昌をつゞけてゐたが、蓋し英雄並び立たぬ爲か、重頼と立圃とは相爭ひ、貞室と重頼とも斷絶するなどといふ事から、門統にひゞのはいつて來た所へ宗因の談林風なるものが、一方からすばらしい勢を以て新しく興つて來たので、貞門の中から談林に欵を通ずるもの、若くは改宗するものが續々と出るやうになつた。當時の言葉で、貞門の俳諧は古風と呼ばれ談林は當風又は新誹と呼ばれた、現代の言葉で、舊派といひ新派といふに該當する。「我等初心の者なれば古風新誹のよしあしわきまへがたし、但し當風がよきやらん宗因々々とて京大阪江戸にわたり今既に日本國に流布し大形此風にかたつきぬ、それ故古風をあふぐ誹諧士當風に吹きせめられて片角に目ばかりうごくやうに見へ侍る、されば此比何者か仕たりけん、當世のすたれ物、隱元の墨蹟、貞德流の誹諧、鎌倉團右衛門とかけり」。あれ程までに盛んだつた貞門の誹諧が兎も角（實際は其程でもなかつたが）當世のすたれ物の中に數へられるやうになつたとは今昔の感に堪へない、それは貞德が歿してから三十年とはならぬ時である。

宗因の俳風即ち談林派に就ては次卷「談林俳諧集」中に詳說しようが、貞門の俳諧が其內容としては宗鑑守武時代の復興にすぎずして、時代的の新生命といふものが極めて乏しいと云ふ其事が、此一門の繁榮も當然長くない筈だと

いふことを語つてゐたのである。洒落といふものは、同じものを二度聞かせられると甚だしくつまらぬ感じがするのと同じで、貞門の機智を專らとする俳諧は初めのうちこそ面白く讀まれようが、しぜんに同巣同窩に落ちて相似た事を繰返すやうになると忽ち人に厭かれざるを得ない。此處に乘じて押寄せたものが談林の新俳である。その談林風なるものは、やはり機智を弄ぶものではあるが其弄び方が奔放自由であり、貞門で謂ふ所の法式、差合去嫌などいふことにも一向頓着せずして、思ふ様勝手に跳ねまはれ、而して舊い行き方の窩を飛出せといふ主義なのである。延寶六年——貞德歿して後二十四年、貞室歿して六年、芭蕉は江戸にあつて放浪してゐた時——宗因門なる高政の「中庸姿」なる百韻が京都に於て發行せられた。近頃、談林風の傍若無人なる跳躍ぶりに嘲憤の心を抑へかねてゐた貞德一派の中から、隨流が「破邪顯正」なる一書を公にして、手いたく「中庸姿」を攻撃した。其が動機となつて、惟中は「破邪顯正返答」を書き、それからは兩門から共々に口達者なる闘士が出て、「誹諧頼政」「ふたつ盃」「猿黐」「綾巻」など丶、批判に事よせて惡口の云ひあひとなり、中には謡曲の文句にもじり、公事の訴狀にもじるなどの戯れもあり、賑かなといははんか穿ろさう／＼しい事になつたのである。貞門から見れば、談林は邪道であり己れが正風であるから、「破邪顯正」と云はざるを得ない。「今様世にもてはやす誹諧は宗因流とて興骨げなる事のみ云ちらして新俗下劣の言葉を好み道化を第一として人をおかしがらすのみ」「わるしやれにしやれたり、かる石のごとし」「夥しく放埒を云ひ散す」「惣別宗因といふゑせ入道、第一紅毛（オランダ）流の張本也」「是俳諧のきりしたんと云物也」「かれらは此國神道の外道也」と「破邪顯正」の著者は力んでゐる。斯く舊風になづまぬものを一概に異端者扱ひにする見方が兎角、愛國主義と結びついてゐる事は昔も今も同じ事であつて、「此邪誹日本武家百姓まで往わたらば則不入して人種を亡ぼし知謀不用して國土をみださん」とまで彼は云ふのである。さて、さまでに罵られる高政の百韻の中の句と隨流の評とを拔けば、

目にあやし麦藁一把飛螢

次郎ま次郎吉夏草の陰

に「目にあやし麦わらのひかり飛螢、と仕たらばかの火とぼしの古事にも逢ひ一句もきこえ侍るべきを麦藁を飛ばせねばうれしうないと思ひ無理に麦藁を飛ばせたり、是當風邪誹の作意なり」といふ批言。

秋霧に神はすべらせ給ひけり

とろろやすらん天の逆鉾

に「天の逆鉾をすり小木にして右賓童子にとろろをすらせ、それにて卽ち前句の神すべられたか、かやうの惡言を吐きても忽舌をぬかれぬは扨々日月地におち給ふや、天の逆鉾と斗さへむざと凡俗の口に云出す事に非ず、これ神道撥無のきりしたんならずや」といふ筆鋒なのである。是に對する惟中の返答は「よく／＼この一矢十三束三ぶせ胸板にはつしとうけとめて、息の通はんうちに此俳流の幕下に降參して、汝らがさびくさりたるうちものを鞘にごつとりと納めて、梅翁先生の俳門に來らん事を待つ者也」といふ風に喧嘩を買つて出てはゐるが、「誠に此頃の若輩、いさゝかも學文をはげまさず、歌學をしらず、唯口さきのかる口ばかりを好み、無法放埒をいひちらす事、是汝がとがむる所も一理あり」と談林の末流の徒には他門の批難の當つてゐることをも認めて、たゞ梅翁卽ち宗因を辯護してゐる。「誹諧賴政」ではシテの言葉として「昔より此所に點者とて餘多ありしが今流に打まけ點料の卷ともを高政にまくりとられあまつさへ友靜如風などは季吟湖春が旦那殿とも仰ぎぬる門弟なりしが今當誹にかたぶく事扇をぬき自害せん程の偏執なれどもさながら色に出さずして此破邪顯のたんがうにのり板行したる書なればとて今はよりあひの破邪顯とも申ゆ」と揶揄してゐる。古風の宗匠たちに新誹に吹きまくられる不見識なものゝ多いことは破邪顯正の作者も認めて

「歯をくひしばりて堪忍すれども門弟より云くさす故こらへかねて邪道へ片あしさし入る宗匠もあり、いやとよいらぬ賢人だてをして古風を守らんより時代に從ひ人のすくやうにして間を合せたるが好き分別なりと人よせをしていひたきまゝをいはせ其身もともに邪道に落る宗匠あり」と云つてゐる位である。金勝の「ふたつ盃」では高政の言に藉りて「又、天の逆鉾を摺小木になし候との御事……勿體なき事におもはるゝは尤に候へども本來無一物の大乗見に何のさはり候はんや」と隨流を辯駁したので、隨流は又、「猿黐」に於て、「二つ盃に正風体を小乗見也とうつけをつくす、佛法には小乗大乗の見あり、世法は五倫五常をしかと守らねばならぬ故皆小乗ばかりにて大乗なし、若あらば大悪無道のあふれ者也、俳諧は世法の正中なり、なるほど小乗戒律をもつて道とす」と應酬してゐる。而して古風の俳士は自由自在が出來ないのではない、掟を重んじて敢てしないのだと辯じてゐる。

斯うした論戰はお互の揚足とりにまでなつて盡きる所がない。「是等は童部の水かけ合のやうにて二度と見る物にあらず」と「綾巻」の著者は云うてゐる。而して「さらば掟を守るといふ句共を聞け、皆ふるめかしくて一つも面白からず、又誹諧の外道のとてさみすれども當風の作意みな新しくて興あり」と談林風を代辯せしめ、又「その物につきて其物をつひやしそこなふもの數をしらず、身にしらみあり、家に鼠あり、誹者に宗因あり」と貞門側の言葉をも出して、結局「扨外道と云は先づ無法放埓の作者隨一の外道なり、それに批言してそしる人又外道也、返答して嘲る人是も亦外道也、今評判する我も亦外道也……よき人は只みづからの才藝をはげむのみにて人をそしらず、是は心の正道なり、まへに云ふ句の正道も今云ふ心の正道と都合したる作者まことの名人なるべし」と結んでゐる、此言葉に私は賛成したい。私をして云はしむれば、此の貞門談林の爭は双方とも俳壇意識がありすぎる。舊い傳統に遵ふたものを凡て邪道視する説の偏狹固陋なる事は云ふまでもないが、其傳統を傳るものは内部からの生命の要求でなければ

ならない、徒らに新奇の爲に新奇を求める外部的の興味を動機としたものではつまらない。談林の總率宗因自身の作はさうでもないが、其末派はずゐぶん左樣の傾向が認められる。要するに、貞門もをかしみなれば談林もをかしみ、お前のは馬鹿笑にすぎぬ、お前のはをかしさが足らぬといふ爭なのだから、双方ともくだらぬ事だと一喝し去つてもよろしい。貞門は舊きを守つて流れざる古沼の如く腐敗し、談林は暗中に模索してきたない泑の中に陷つてゐる。双方が泥仕合を初めるのも當然であらう。呵々。（荻原井泉水）

日本俳書大系　第六卷　終

大正十五年十一月五日印刷
大正十五年十一月十日發行

非賣品

日本俳書大系（6）



著作者　神田豐穗

發行者　東京市日本橋區數寄屋町一番地　神田豐穗

印刷者　東京市牛込區早稻田鶴卷町四〇三　谷口熊之助

印刷所　春秋社印刷所

發行所　東京市日本橋區數寄屋町・春秋社内
日本俳書大系刊行會
振替東京二六八七二・電話大手二二一四　二二二四





